
迷い子は夜明けの歌を歌う

旭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷い子は夜明けの歌を歌う

【Nコード】

N5702B

【作者名】

旭

【あらすじ】

あらゆる学問が学べるという大陸屈指の総合学園アウレスーラ。そこで退屈な時間を過ごす少女は、自分と似た目をした三人の少年少女と出会う。彼女を起こした彼らとの初めての旅はそれぞれに何をもたらすのか？西風の吹く森で、彼らの物語が今始まる。ただいまシリーズ第三部連載中。

1：それぞれの現在

夢を見ていた。

懐かしい、幸せだった頃の夢だ。

眠りの中で帰る故郷と呼べる場所は変わらず美しく、アーシヤ、と自分を呼ぶ声は優しくかった。

眠りの中でだけ彼に会うことが出来る。

自分に名をくれた優しい存在。

名を呼ばれる度に、暖かいような切ないような気持ちになる。

過去を辿る夢は今も鮮明で、頭を撫でてくれる優しい手の感触に夢の中なのにいつも涙が出そうになる。

今の自分を取り巻く退屈な日常の中で、眠りにつき夢を見る事と本を読む事だけがささやかな楽しみだ。

世界を見なさい、と言われて遠くまで来たのにそれはまだ叶わなかった。

「……アーシリア」

だからそれが叶う日、つまりこの学園を出て行くその日までこの退屈な時間と付き合うために、彼女は今日も眠って夢の訪れを待つ。

「アーシリア！ アーシリア・グラウル！ 起きなさい！」

自分の授業を眠って受ける事に腹を立てている教師がいても気にはならない。

どうせいつも根負けして諦めるのは教師の方なのだ。

今の彼女に聞こえるのは、夢の中から自分の名を間違えずに呼ぶ声と、風の精霊が彼女のために歌う子守唄だけだった。

「なんでよ!」

昼休みの教室ののどかな空気を破るように高い声が響き渡った。のんびりと談笑していた何人かの生徒が何事かと声のした方へ目を向ける。

しかし声を発した本人を確認すると皆一様に、またかという顔をしてそつと顔を背けた。

声を上げているのは、背まで届く艶やかな赤みの強い茶色の髪を揺らし、琥珀の色の目を怒ったように吊り上げた少女だ。

そんな表情をしていなければ美少女の部類に分けられるような華やかな顔は憤りを表すかのように朱に染まっていた。

「なんでだめなのよ! 友達でしょ? 一緒に行つてよ!」

「そんなこと言つたつて……絶対無理だよ、シャル」

シャルと呼ばれた少女と向かい合うもう一人の少女は小さな声で必死で答える。

その様はいかにも気弱そうで、彼女の剣幕に今にも逃げ出したいと言う顔だった。

「ね、お願い! 一緒に行つてくれるだけでもいいのよ!」

シャルことシャルフィーナ・ラド・ブランドディア嬢は目の前の友人を説得しようと必死だった。

ここで彼女を説得できなければ後がないのだ。

「そんな事言つたつて、あたし達まだ三年なんだよ? なのに《森

《なんて絶対無理だよ。あたしなんかまだ使える魔法は五級ばつかりだし……」

「大丈夫よ! 武術学部からちょっと使えるの連れて行けば何とかなるつて! 当てはあるのよ。そいつらが盾になつてるうちに私がババーンとやっちゃうから! メイは補助系魔法とか得意じゃない、そういうのしてくれればいいから!」

シャルはなおも言い募った。自分に絶対の自信がなければ出てこないようなセリフを平然と言つてのける。

しかしメイと呼ばれた少女は怯えながらも首を縦には振らなかった。

シャルの剣幕も恐ろしいが、《森》と呼ばれる場所へ行くのはもっと恐ろしいのだ。

「無理だよ！ もうお願いだから他の人を当たって……。単なる人数合わせなら私じゃなくてもいいじゃない？」

「そ、それは……」

真理だった。

これにはさすがのシャルもぐつと黙ってしまふ他ない。

友人を人数合わせ扱いたつもりはないが、誰でもいいから友人達から一人来てくれればいいと思っていたのは確かなのだ。しかも彼女はシャルが声をかけた友人達の中の最後の一人だ。そう思われなくても仕方ない。

「に、人数合わせだなんてそんなつもりないわよ！ ただ、一緒に班になって欲しいと思って……」

「シャルがどんなつもりでも、私にはあの森は無理なレベルだつてわかってるはずよ。先生達も自分に合ったレベルの班を作つてそれに見合つた課題を選べつて言つてたし。無理な課題を選んで失敗してペナルティを受けるのは嫌なの……」

確かに教師はそう言っていた。シャルもそれはもちろん覚えている。

けれど彼女には、ハイわかりましたといって諦める訳に行かない事情がある。その事情のために、この三日間次から次へと友人を押し倒しては無理な課題と一緒にチャレンジしてくれる人を探し続けているのだ。

「とにかく、私はもうニーナと何人かで始まりの迷宮の一層か二層にしようつて話してるの。悪いけど、一緒に行けないわ」

始まりの迷宮はこの学園の地下に広がる初心者向けの迷宮だ。

学園が作っているだけあって、バランスの取れた課題が随所に散らばっているという。シャルと同じ学年の生徒のほとんどがここへ向かうはずだった。

「……わかったわ。ごめんね、無理言つて」

「うっん、わたしこそごめんね。シャルも無理しないでね」

そういつてメイは教室の外に去っていった。

次の授業の教室に移動したのだから。

いつの間にか教室には誰もいなかった。次の授業は選択科目でこの教室は使われない。シャルもそろそろ移動をしなければいけない時間だった。

彼女は辺りをくろりと見回し、それからのろろと教科書をまとめ歩き出したものの、足取りは重い。

これでシャルが当たった友人は全滅だ。

もはや友人というほどでもないクラスメイト達を当たらねばならないが、友人達でも無理だった事に良い返事が期待できるとは思えない。

メイは自信がないといつていたが、彼女だって他の友人達だって、同じ学年では成績優秀な子ばかりだったのだ。

《森》の課題に挑戦するには、最低でも武術学部から二人、魔法学部から二人の四人以上の班を組む事が条件にされている。

武術学部の方は何とかなる。同じく引けない事情を抱えた幼馴染が居るからだ。お互いに仲間を見つける事で合意している。

だが、シャルは見つけられなかった。

三人あるいは最悪彼女と幼馴染の二人の班しか組めないならば学校側からはどうあつても課題を変更しろと言われるだろう。

班の登録は明日の夕刻が期限だ。

ポツ、と小さな音がして窓の外に目を向けると何時の間にか空が曇り雨が降り始めていた。

灰色の空は自分の未来を暗示しているように見え、シャルはまた一つ似あわないたため息を吐いた。

けれどふと遠くに視線を向ければ雲の切れ間が見える。切れ間の向こうはほのかに明るく、どうやら通り雨のようだ。それを見た彼女の心もまた少しだけ明るくなった。

そうだ、まだ希望が消えた訳ではない。まだ、期限はある。

「よし！」

自分に言い聞かせるように気合を入れると、少女は赤いローブを翻し、次の教室に向かって軽やかに走り出した。

「頼む」

真剣な声が学園の男子寮の静かな室内に響く。

午後の光が差し込む明るい部屋で、二人の少年が向かい合っていた。

一人はこれ以上ないほど頭を下げ、もう一人は椅子に座ったまま手に持った紙切れををじっと見つめていた。

窓から入る西日が頭を下げた少年の短い髪を明るく照らす。軽く癖が付いた金の髪は夕暮れの光でもはっとするほど鮮やかな色だった。

もう一人、紙に眼を走らせる少年は日が当たってもなお夜のよう
に黒い髪をしていた。藍色がかった黒の瞳が手にした紙の上を滑る。
やがて紙の内容を読み終えたらしい彼はすっと顔を上げて目の前で
まだ頭を下げ続けている友人を見やった。

「西のジェムール伯爵の娘か。確かもういい歳ではなかったか？」

「……ブスの面食いで行き遅れだつて評判さ。けど金と領地はたっぷりある上に一人娘なんだそうだ」

なるほど、と黒髪の少年は小さく呟くとその手紙を折りたたみ脇の机の上に差し出した。

まだ頭を上げない少年の方はもうため息しか出てこない。

「義務を果たすか、あるいは……か。苦労するな、ジェイ」

「なあ、頼むよディーン。お前が協力してくれりゃきっと何とかなると思うんだ」

もはや残された選択肢は多くない。

そして時間も少ないのだ。

「協力するのはかまわない」

ディーンと呼ばれた少年の答えに金色の頭がぱつと跳ね上がった。期待に輝く薄い青の瞳と人好きのする鮮やかな笑顔が明るい容貌を更に輝かせる。

ディーンはその様子に軽く苦笑を浮かべた。

ここ数日ジェイが何か言おうとしては何度も躊躇するのをディーンは感じていた。

恐らくはこの話題のことなのだろうと、ジェイの方から言い出すまではあえて追求せずに居たがどうやら断られる事をよほど心配していたらしい。

どのみち、彼が何か言い出すまでは、とディーンは自分の課題の登録はしないで置いてあったのだ。

「ホントか!？」

「ああ、あの森なら課題以外でも実入りもいいだろうしな。だが、私達だけでは駄目だろう?」

「うん……どうしたって、魔法学部生の協力がいるよな。けど、一人はあてがあるんだよ。あいつも俺と同じ状況なんだ」

「ああ。まあ、彼女なら大丈夫だろうな」

二人は赤茶色の髪の勝気な少女を脳裏に描く。

基礎学部を共に過ごした彼女の魔法の能力の高さは疑うべくもない。同学年では一番だと言う話も武術学部まで届いている。

「だが、もう一人はどうする？」

「お互い一人ずつ捕まえてくるっていう話になってんだけど……心配なんだよな、あいつ友達少なそうだし」

確かに、という言葉でディーンは口には出さなかった。

彼女と幼馴染である友人に遠慮したのだが、友人の方は特に遠慮など考えては居なかったらしい。

「あいつあの性格だからなあ。性格の良い友達は多少いるみたいなんだけど、とにかく大人しいのが多いんだよな。気の強い奴はぶつかるからさ、あいつと一緒に居てずっと我慢できる奴ってあんまないよな」

見た感じが性格ブスだからな、などと本人が聞いたら烈火のごとく怒るに違いない言葉で彼女を表現するジェイはその一緒にいて我慢できるという希少な該当者の一人だった。

単に祖母同士が友人で乳幼児の頃からの付き合いだから諦めているとも言える。

「だが、それなら難航していそうだな」

「多分な。取り巻き連中もさすがにあの課題は嫌がるだろうし。まあ、今日これから寮の食堂で会うことになってるからその時わかるだろ。付き合ってくれよ」

「……仕方ないな」

二人は頷いて立ち上がった。

ジェイは忌々しそうに手紙を摘んでズボンのポケットにおざなりに入れると、既に歩き出しているディーンの後を追ってドアを目指した。

ドアの向こうに続く寮の廊下は人気もなく静まり返っている。

バタン、と背後で閉めた扉の音が、ジェイにはまるで自分達の未

来を閉ざす音のように聞こえた。

行かなければ、と焦燥がその胸を満たす。

本当に未来を閉ざされない為に。自由を手に入れるために。

行って、この才能を示すのだ。

2：ささやかなる希望

ここはアウレスーラ総合学園と呼ばれている。

様々な分野の初等から高等の教育を施す機関として、その歴史、実力、そして門戸の広さでもレアラード大陸随一、といわれる有名な学園だ。

レアラードという名のこの中央大陸で戦乱の時代の終結が宣言されてから百余年、国々の間では学問や文化の振興が盛んに唱えられた。

アウレスーラ学園は、そんな時代に各国、各大陸が競って作った学校の中でも一際歴史が古く有名だった。

中でも特に、いち早く奨学金制度や夜間部門など様々な制度を設け、王侯貴族や一般庶民、貧しい階級の人々まで分け隔てなく意志と実力さえあれば誰もが学べることで名が知れている。

この学園に入り卒業していった生徒の中から高名な剣士や魔導師、冒険者や発明家が多くでている事も有名で、その知名度と生徒の受け入れ数の多さ、様々な分野を教える人材の充実ぶりからこの大陸のみならず他の大陸や島々から遠路遙々入学してくる者も多かった。

レアラード大陸のほぼ中央を北東から南西に向かって斜めに横たわるセドラ山脈の、その東側のふもとに立つ学園の内部はもはや一つの都市と言うほかないような広さだ。

多くの学生と、その学生の住む寮や下宿、幼い内から子供を通わせる為に遠方からくる家族向けの借家、学園に関わる者達の住まいや彼らの生活を支える商店の数々がいつの間にか寄り集まり、いままや巨大な学園都市を形成している。

そしてそれは学ぶ事が奨励されるこの時代には広がりを見せる一方だ。

設立当初はこの土地を有するハルバード王国の国立であったが、現在はほぼ独立し独自の体制で運営されている。

国に依存しないが故の自由な校風は多くの生徒に愛されていた。

学園都市の内部は基礎学部、上級学部の大きく二つに建物を始めとして全てが分けられている。

子供達は個人の事情で差はあるが六、七歳くらいで基礎学部に入學し、六年の課程を経て十二、三歳くらいで卒業する。

そこでは読み書きや計算などの基礎的な勉強と、剣などを始めた体術や、魔法や薬学などの様々な分野のほんの初級の部分を遍りなく学ぶ。

基礎を終えた子供達の多くは上級学部に進み、自分が基礎学部で学んだ多くの科目の中から自分に合うもの、職業にしたいものを選んで武術学部、魔法学部、医学部、技巧学部の四つの中から学部を選び、更に専門の科に進むのが普通のコースだった。

ただ、基礎学部から入學する子供はほとんどがこの近隣の子供たちなので、基礎学部は上級学部と比べると三分の一ほどの規模だ。

多くの子供たちは親元で基礎過程の学校に通い、外部から上級学部を受験する。

基礎学部だけを卒業しその後親の勧めで徒弟として様々な職につき子供や、直接剣士や魔術師の弟子になるものなどもあるが、その数はあまり多くない。

学問奨励が浸透してきてから、人々は確実に少しずつ豊かになっているから子供を長く学ばせてやる事が出来るようになってきているからだ。

上級学部に進んだ子供は、これも個人差はあるが、十八歳前後で六年の専門課程を修了する。

その後は卒業して就職、冒険者として出発、さらに上の学問を修める為に研究科へ進學、などその道は様々だった。

さて、その学園都市の北西部、上級学部寮の食堂に三人の男女が集まっていた。

学園寮は当然男子寮と女子寮に分かれ、双方の寮に食堂やカフェテリアなどがいくつも入っている。何しろ巨大な学園なので入寮者数も半端ではない。

それ以外にも向かい合って立つ二つの寮の真ん中に、共同食堂が作られている。

様々な授業や課題で協力することがある生徒同士、交流や打ち合わせに使用できるよう設置された大きな食堂だった。

特に新学年が始まって二月ほどたったこの時期は、野外実習やグループ課題の打ち合わせをしている生徒達があちこちに見られた。

にこりもしない顔を付き合わせた三人も今まさにその野外実習について話し合いをしているところなのだ。

だがその話し合いは早くも暗礁に乗り上げようとしていた。

「だから、見つからないって言ったのよ」

「……やっぱりか」

「……」

重い沈黙が場を支配する。

「やっぱりって何よ！ 私だって必死で当たったんだからね！？」

でも森は無理だ嫌だって言われちゃって、もうどうしたらいいのよ！」

「そうは言ってもさあ、俺はほら、ちゃんと見つけてきたんだぜ？ 予想はしてたけどどうすんだよ？ もう一人はお前の担当だろ」

デインは一人静かに食後のコーヒーを飲みながら、沈黙に耐えかねて癩癩を起こしかける少女と、それを宥めつつ煽る友人と言う構図を懐かしい思いで眺めていた。

このやりとりは基礎学部に住た頃に良く見ていたが、それぞれ上級に進み学部が別れてからは久しぶりだ。

ディーンとシャルは個人的な繋がりが薄いためほとんど顔を合わせない。

今年三年に進級したからもう丸二年はまともにしゃべっていないのだ。

もつとも、物静かなディーンと気が強く口が立つシャルは端から性格が合わず、もともと会話自体が少なかったのだが。

基礎学部で同じクラスだった事と、友人であるジェイがシャルと幼馴染であることがなければ一切付き合いのないタイプに間違いない。

一方でジェイは幼馴染の気安さでよくシャルにこの食堂に呼び出されては様々な愚痴を聞かされていたらしい。

その経緯を語るジェイの愚痴を聞いていた（ほとんど聞き流していたが）ディーンはその事も良く知っていた。

知っているからこそ、この二人の間に口を挟むのは愚かな行為だと言う事も良くわかっている。

（このこのコーヒーはやはり今ひとつだな）

ディーンのお気入りは技巧学部の一階の喫茶店の日替わりブレンドとハーブティーだ。

技巧学部には様々な学科があり、学年が上がると授業はかなり実践的なものになってくる。

例えば、その建物の入り口脇に設置された小さな喫茶店で技巧学部の飲食に関わる学科の実習生が働いていることは有名だ。

彼らはさすがに専門的に学んでいるだけあって、お茶やコーヒーなどの飲料から様々なパンや焼き菓子のような軽食まで教師達の監督の下で全て手作りしており、その技術の高さには定評がある。

武術学部と技巧学部は校舎が隣り合っている事もあり、授業の合間に時々そこで休憩するのがディーンのささやかな楽しみだった。

(まあ、飲めないほどではないが)

そう、飲めないほどではない。食後の口直しという役目は十分に果たしている。

「だから、お前友達少なくせに見栄はりすぎなんだよ!」

「なんですつて!? あんたこそディーンが居なかつたら誰も付き合ってくれないじゃないの!」

この見苦しい言い争いがすぐ隣で繰り広げられていなければ、さぞ安らいだ気持ちになったに違いない。

ディーンの間からはくつろいだ時間への満足に対するものとは違う、深いため息がこぼれた。

「いい加減にしろ」

静かだが、威圧感のある一言で言い争っていた二人が一瞬止まる。「どちらにしても明日には時間切れだ。もうほとんどの学生が今回の野外実習の班分けも課題も決定しているはずだ」

どうするんだ、という冷静な問いに固まった二人は答えられなかった。

上級学部の三年になると野外実習という課題が全ての生徒達に与えられる。

それぞれ学部によって異なる課題が数多く用意され、生徒達は単独で、あるいは共に行動する班を作って、年に数回それらに挑戦する。

課題は学部によって様々で、例えば技巧学部や医学部の生徒なら実際に学校外の現場に技術研修に行くのがメインとなる。

対して、武術学部や魔法学部の生徒は合同で班を作り、学校指定の迷宮や山や森などに探索や薬草などの収集、害獣の駆除などの実戦に赴く事が多い。

無論研修と違って危険を伴うこともあるため、班の編成や課題の選び方には慎重さが必要とされ、それも得点として審査される項目の一つとなっていた。

難しい課題に挑戦する事は称賛されるがそれが難しいを通り越して無謀となれば話は別だ。

緊急時には専用の避難用魔具によって学校側が生徒を回収してくれるが、それは同時に課題の失敗を意味している。

ハイリスクハイリターンを狙って出かけ、大怪我をした拳句にペナルティを食らって留年、という生徒が出ることも珍しくはない。

そして、ここに集まった三人はそのハイリスクハイリターンに挑もうという毎年一学年に一組は現れるチーム・無謀の面々なのだった。

しかも三年に進級して初めての野外実習で、この学年で挑める最高ランクの課題にいきなり挑もうという相当の無謀ぶりだ。

だが今その無謀は出発前に失敗に終わろうとしている。

課題に付き合ってくれるメンバーが揃わないと言う不測の事態によつてだ。

「まだ班を組んでいない生徒は個人課題に当たる生徒ばかりだろう。そついった生徒が協力してくれる率はかなり低いと思うが」

ディーンの言うとおりだ。

野外実習の準備と出発のために規定された期間はもう間近に迫り、ほとんどの生徒が既に班を組んでしまっている。

個人課題を行う生徒は魔法学部では魔法薬学科や魔法技巧科といった実戦にはあまり向かない科を専攻している事が多い。

「森は諦めるしかないのかな……」

《森》の課題でなければ、この三人で挑める課題は他にも幾つかある。難易度も評価も森よりは低くはなるが成功率はかなり高い。

ハイリスクハイリターンを望まなければ、三人は十分優秀なのだ。

「絶対嫌よ！ この学年でS評価を狙えるのなんてあそこしかないのよ！？ ぜつつたい森じゃなきゃ！」

「……俺だってS評価はどうしても欲しいぜ？ けどそうは言って

も三人じゃ端から選択すら許してもらえないだろ。今からもう一人見つけるってもなあ……そもそも、まだ班とか課題を登録してない生徒ってお前のどこにいんの？」

「確かに、班を作らない人間は早々に課題を選んでいることが多いようだからな」

実際武術学部でも単独の生徒のほとんどは学校外の道場での短期修業などを選び、もう出かけている生徒もいるくらいだ。

この学校はそれが生徒の為になることならばかなり鷹揚なのだ。

「それなんだけどね……学生課に行つて頼み込んで登録に来ていない生徒の名前を調べて、それぞれ訪ねてみたんだけど」

そう言つてシャルは学生の名前がずらりと並んだ紙を取り出して見せた。名前の上には所々に線が引かれている。

「これがまだ登録に来ていない同学年魔法学部の生徒。で、線が引いてるのは登録はまだけどもう班を作つてたり、話してみたけど断られた人よ」

「残るは数人か。この中で戦力として当てになりそうなのに心当たりは？」

「ほとんどが薬学や魔技科で当てにはできなさそうだったわ。けど、一人だけ……」

シャルは紙の上のほうに書かれた一つの名前を指差した。

「この子だけ、在籍は魔技科だけど精霊魔法が得意らしいっていう話を聞いたわ」

「魔技科で精霊魔法？　ほんとかよ？」

「本当かどうかは知らないけど噂ではね。何でも彼女は入学した時期とか色々変わってるらしいっていう話なのよ」

「ふうん、なんて読むんだ？　ア……ルシリア？　変なスペルだし、聞かない名だなあ」

「魔技科の子はアーシリア・グラウルだって言つてたわ。魔技科自体、あんまり噂にはならないしね」

魔技科というのは略称で、正式名称を魔法技巧科という魔法学部の一学科だ。

魔術を込めた様々な道具の研究、開発を主に学び、ここを卒業したものは大体が魔技師と呼ばれる職業に就く。

魔力はある程度あるが、魔道士として立つには足りない者などが進む事の多い道だ。

魔道士はそれだけで食べていこうと思えばかなりの適正のいる職業だ。

魔力自体は多かれ少なかれ大抵の人間が持っているが、それで身を立てられる人間はさほど多くない。

生来持つて生まれた潜在魔力の量やそれをさらに高める努力、繊細に扱う為のセンス、感情のコントロールなど、必要とされる資質が沢山ある。

それに対して魔技師は、簡単に言えば魔法と様々な物質や道具を組み合わせて、簡単に魔法や色々な技術を使える《魔具》を作り出すのを仕事としている。

作る物にもよるが、道具を作る際に必要とされる魔力は多くないのでせいぜい人並み程度の魔力があれば十分仕事ができる。

仕事としては地味だし、純粋な魔道士辺りからは見下される事も多いが、一般にも広く使い作りやすい魔具を発明すれば富を築いたり名を上げたりすることも可能な職業だ。

ただ、手先の器用さや材料となる物の特性などの知識、たとえ弱くても魔力を正確に操る技術などが必要となる。

だがそれは訓練である程度補えるものでもあるので、魔道士になることを挫折した者には比較的人気の職業だった。

しかしそれもあくまで、魔法科を卒業できるほど魔法の適正がな

い場合の人気の職業であつて、精霊魔法が得意だと言つのにわざわざ魔技科に入るなど普通はあまり考えられない。

実際、魔法学部を選ぶ生徒のほとんどは、自分の才能が開花するのを信じて魔道士を目指す為の魔法科やそれに準じた科目を選択するのだ。

だから魔技科は最初から居る者よりも、途中で転科する者の方が多いくらいだ。

「どんな生徒なのか確かめたのか？」

「まだよ。けど、聞いた話では、それが……」

いつもはつきりと物を言うシャルにしては齒切れの悪い口調だった。

口ごもられると不安が増してしまう気がして、ジエイは軽く眉をひそめた。

「なんだよ、はっきり言えよ」

「ええ、その……眠り姫、って呼ばれてるって」

「……」

沈黙が痛い。

「……それって、授業中とか寝てばつかいるとか、そういうの？」

しばらく黙つた後、ジエイは恐る恐る確認を取つた。

シャルは苦い面持ちでコクリと頷いた。

ディーンはその名称を頭の中で反芻し、一つの記憶に辿りついた。

「……聞いた事がある気がする。確か、外部からの派手な飛び級で編入してきてすわ天才かと騒がれたのに、授業のほとんどを眠つて過ごしている人間がどこかの学部に住ると昨年くらいに教授達の話題にのぼっていたはずだ」

物静かなディーンは同年代の友人は多くないが、その礼儀正しい態度から年上に受けが良く意外に情報通だった。

「それで眠り姫？ それほんとに大丈夫なのかよ」

ジェイは眉をひそめたまま、心配そうに呟いた。

確かにその噂だけ聞けば到底難易度の高い課題に誘えそうな人物とは思えない。

「けど同じクラスをとってるって言う魔技科の子の話では、定期試験とか進級試験ではちゃんと合格点をとってるし、課題なんかもちんと提出してるし、編入試験の実技で見事な精霊魔法を使ったつてもホントらしいって。だからその子が魔技科を選んだときは上の方で揉めたみたいだって言ってたわ」

「魔法科に断られたとかじゃなくてか？ それで自分から魔技科だなんて、相当の変わり者なんじゃねーの？」

「かもしれない。だが噂だけでも、役に立ちそうなのが彼女一人ならば仕方ない。変わり者だとしても、他に候補がいるのか？」

ジェイは額に手を当てて考え込んだ。

しかしいくら考えても他のあては出てこない。そもそも当たれそうな所はシャルが当たりつくした後なのだ。

「いねえよな。期限ぎりぎりまで探してこれだもんな……」

「そうよ、もうこの際相手の実力はどうでもいいの！ 最悪、私達に着いて来てくれるってだけでいいわ！」

「だな。じゃあ、明日早速会いに行ってみるか。その魔技科の変わり者が、真の変わり者である事を祈ってよ」

むしろ少しくらい変わっていた方が協力が期待できるかもしれない。

そんな三人の不安と期待を抱きながら夜は静かに更けていった。

3：裏庭の眠り姫

次の日の昼休み、三人は魔法学部の西棟の校舎の廊下を並んで歩いていた。

この魔法学部の西棟は魔技科や魔法薬学のための実験室や作業室が並んでいるだけなのでとても静かだ。

「やっぱ魔法学部は俺達のこと結構違うなあ」

「そりゃあね、体育会系とは違うわよ。あんたんとこなんて広場とか体育館とか筋トレルームとか暑苦しいのばかりなんでしょ」

ここへ来る道すがら捉まえた魔技科の生徒の話では、目当ての人物はこの時間はこの辺の空き教室か、ここを抜けたところにある裏庭で昼寝している事が多いらしい。

ほとんどの授業を寝ていると言う話なのに、昼休みまで寝るのかと三人はますます不安を覚える。

歩きながら一つ一つの教室を覗いたがそれらしい姿は見えなかった。

やがて廊下は突き当たり、裏庭へと続く非常用のドアを残すのみとなった。扉には鍵はかかかっていないようだった。

「後はここだけね」

そう言ってシャルはそつとドアノブを回した。

普段使われることの少ないドアはギギイ、と軋んだ音を立て重たげに外側へと開く。

外に出たシャルの後にジェイ、ディーンと続き三人は昼の日差しが眩しい裏庭へと降り立った。

裏庭はその名前とは裏腹に明るい日差しに溢れる場所だった。非常口に近い都合上、いざと言う時非難できるように校舎に近い場所は木が刈られ、ちょっとした広場が作られ芝生が植えられている。

人が来ないため前庭や中庭のようにベンチなどが置いてあることはないがそれ故に静かで、確かに昼寝をするにはちょうど良さそうな場所と言えそうだ。

三人は人影を探してきよろきよろと辺りを見回した。

「あ、あれじゃない？」

シャルが指差したのは校舎から少しはなれた場所、大きな木の下に日陰が芝生の上に落ちていている辺りだ。芝生の上に横たわる人影が見えた。

「そのようだな」

「行ってみようぜ！」

歩き出し、近くまで行くとそれが随分と小柄な人物である事に彼らは気がついた。

白い色のマントが上着のようなものを上半身にかけて無防備に仰向けで眠っているその姿は、小柄というよりはむしろ子供そのものに見えた。

どうみても十歳より少し上くらい、基礎学部に通うような年齢に見える。目を浴びて柔らかい光を返すオレンジがかつた茶色の髪は随分短く、彼女なのか彼なのかもはっきりしない。

上着から覗く細い手足は少女だと言えそう見えるし、少年だ、と言っても信じてしまいそうだ。

ただ、服装だけが短い丈の赤茶のチュニックワンピースに黒のスパッツ、とかるうじて少女のように見えた。

だがその服装もこの学部には少々簡素な気がする。

魔法学部の他の大半の生徒のようにローブや制服姿ではないのだ。ローブや制服は義務ではないがある種の権威の象徴のような効果はあるので着ていない生徒を探す方が難しいというのに。

脱いだ上着を体にかけて寝ているその様はまるで死体のようで、三人が側に行っても起きる気配もない。かるうじて上下する胸が彼

女が生きている事を伝えていた。

三人はお互いの顔と少女を交互に見やってしばし沈黙していたが、やがてシャルが意を決したように口を開いた。

「あの、アーシリア・グラウルさん？」

「……」

スウ、という静かな寝息だけが呼びかけに答える。

「ねえ！ 起きてくださらない？ アーシリアさん！！」

「……」

少女はピクリとも動かない。

「ちよつと！ 聞こえないの！？ 話があるのよ！！」

シャルの声は大きい。

キンキンと耳に響くその声で怒鳴られて目を覚まさなかった人物を初めて見た、とジエイは思った。

「何見てるのよ！ あんた達も起こしなさいよ！」

黙って見ていた二人に八つ当たりのように怒鳴ると、シャルは更に何度も彼女の名を呼んだ。しかし彼女は起きそうもない。

「すげー、こんなに怒鳴っても全然起きないぜ」

「さすがにほとんどの授業を寝ていると言っただけはあるな」

「ちよつと！ 変なとこに感心してないでよ！」

しかしシャルの声でも起きないものをどうやって起こしたらいいものか二人にはわからない。さつきからシャルは彼女をぐらぐら揺すってもいるのだ。

それでも起きない様子はまるで眠りの魔法でもかかっているかのようだ。

さすがに不自然に感じたのだろう、シャルも少女を揺する手を止めてどうしたものかと考え込んだ。

「……気絶して倒れてるとかじゃないわよね？」

「わざわざ上着かけて倒れる人もあんまいないと思っけど」

眠る少女を見ながらディーンはしばらく考え、ふとある事に気が

ついた。少女に顔を近づけてよく観察したディーンはシャルに声をかけた。

「シャル」

「何よ」

「昨日のリスト、まだ持っているか？」

あるわよ、とシャルは答えてローブのポケットからリストを取り出した。

「何よ、まさか人違いなんじゃとか言うの？」

「いや、そうじゃない」

ディーンはじつとリストに目を落とす。

「ふむ。やはりこの綴りは……」

「なんだ、なんかあんのか？」

「昨日見た時も気になったのだが、彼女の名前の綴りは随分と古い様式で書かれている。恐らく古代語を現代語の発音に直したような形ではないかと思う」

「それって名前の読み方が違っつてこと？ でも、だから起きないなんて狸寝入りじゃないのよ」

「まあ落ち着けよ」

憤慨するシャルはジェイに任せ、ディーンは横たわる少女の隣に膝き呼びかけた。

ディーンは武術学部では異色の文学派少年だ。

学部を跨いで講義を受けられる学園の制度を積極的に利用し、魔法薬学や考古学など様々な学科を選択している。

一昨年くらいから古代語の文献を解読するのにはまっつていと言っていたのを思い出し、文学の欠片も持ち合わせないジェイは密かに鳥肌を立てた。

「アル……アーシエレア。いや、違うな。アルシエレイア？ アルシエレイア・グラウル？」

その言葉がもたらした変化は劇的だった。

ピク、と瞼が震えると少女はう、と小さな声を上げた。

「アルシエレイア」

その変化に確信を得たディーンがもう一度呼びかけると、ついにゆるゆると瞼が持ち上がり、なんとあれほど怒鳴っても目を覚まさなかつた少女はあっさりと目を覚ました。

「起きた……」

「すげー」

開いた瞳は深い緑色だった。

森の色の瞳を寝ぼけたように瞬かせ、少女は横たわったまま自分を覗き込む三人を順番に見上げて小さな声を出した。

「呼んだ……誰？」

それを問いと捉えたディーンは片手を上げてそれに答えた。

「私だ。私は武術学部剣術科の三年、ディラック・アルロードと言う。君に話があるので起きてはもらえないだろうか」

「……ん」

少女は一つ頷くと、もそもそその場に上半身を起こした。

三人もそれに合わせて少女の前に並んで座る。

短く切つた少女の髪は後ろ側に寝癖がついていた。彼女はそれをのんびりした手つきで直しながら三人を順番に見やる。

顔立ちは可愛いといえなくもないが、随分と痩せている少女だ。

痩せた顔に緑の目だけが随分大きく見えてどことなくアンバランスな感じの風貌をしている。

シャルはその細い体に不安を覚え、もう少し太ればいいのに、と関係ないことを考えた。

「で……誰？」

主語はないがどうやら他の二人に問いかけたらしい。

シャルは自分の呼びかけに起きなかつた事に内心少し腹を立てていたが、最初の印象を悪くしてはいけなないと必死で笑顔を浮かべて問いに答えた。ジエイもそれに続く。

「私は魔法学部魔法学科の三年、シャルフィーナ・ラド・ブランディアよ。よろしくね」

「俺は武術学部拳闘科のジャスティン・ジャン・イージェイ。ジェイとかJJって呼ばれてる」

二人の自己紹介が終わると少女は一つ頷き口を開いた。

「ん……アルシエレイア・グラウル。魔法学部魔技科、三年。呼びにくかったらアーシャで良い。それ以外は寝てると聞こえないよ」
そう言うと少女は耳に手をやり、何か小さなものを取り出した。

三人はそれを覗き込み、シャルとジェイはなるほど、と呆れ顔をした。ディーンは先ほどそれに気がついていたので、やはりと頷く。
「耳栓……どうりでいくら呼んでも聞こえないはずね。しかも魔法にかけてあるじゃない」

小さな耳栓には更に小さな複雑な模様が幾重にも描き込まれていた。恐らくこの模様が外部からの音を遮蔽する魔法を維持しているのだろう。

なるほど、魔技科の生徒らしい道具と言えなくもない。

「寝ている時は名前とあと幾つか以外の音を完全に消して眠りを維持するようにしてあるから」

どうやらやはり眠りの魔法までかかっていたらしい。

「幾つかったのは？」

「んーと、授業の鐘とか」

授業の終わりまでなんとしても眠るつもりなのかとその度胸にある意味頭が下がる。

しかも全く悪びれていないところがある意味大物だ。

三人は呆れ果てながらもどうにか少女を起こせた事に安堵した。

「それで……何？」

アーシャは話の先を促すかのようにディーンの方を見て問いかけた。

ディーンはそれを受けてシャルに目配せをする。シャルから話す

べきだ、というのだろう。

シャルは頷くと真剣な眼差しで目の前の小柄な少女を見つめた。彼女が使えるかどうかは置いておいて、まずは打診してみることにする。

「とりあえず、用件を先に言わせて貰うと、貴女もう野外実習の班や課題を決めている？」

「課題……野外実習？」

アーシャは少し考えるような様子を見せた。まだ寝ぼけているのかと三人はまた少しばかり不安になる。

「そういえばそんなのあったっけ。まだ決めてないよ。もしかして登録の×切って今日？ ×切になったら適当に選ばうと思ってたんだけど」

忘れてた、という声に安堵していいのか不安を感じていいのか、シャルは真剣に悩む。

しかしえり好みをしている暇はもはや自分達にはないのだ。これはチャンスだと前向きに自分に言い聞かせてシャルは話を続けた。

「あの、それで……もし貴女がまだ課題も何も決めていないのなら、私達と一緒に《森》へ行ってはもらえないかしら？」

シン、と静寂が深まった気がした。

断られるだろうか、断らないで欲しい、でも断られる気がする。そんな思いを胸に三人は、特にシャルとジェイは少女の答えを待つ。

「いいよ」

少女の答えはあまりにもあっさりしたものだった。

4：彼女の返答

「……」

シャルは思わず自分の耳を疑った。ここ数日反対の言葉ばかり聞きすぎたせいで、ついに耳が自分の都合のいいように聞き違えたのかと一瞬疑う。

それほど、アーシャの声はあっさりしたものだだったのだ。

これはまずもう一度確かめなくてはならない。

「あの、《森》へ、行ってもらえる？」

「だから、いいよ」

どうやらシャルの聞き間違いではなかったらしい。

だがしかしそれにしても答えがあっさりしすぎている。

もしかしたら編入生だから《森》を知らないのではないか？ そ

うだ、そうに違いない！ とシャルは結論を出した。

「貴女……ちゃんと《森》を知っているの？」

自分の考えを確かめるべく、シャルは恐る恐るアーシャに問いかける。

その問いにアーシャはコクリと頷くとこめかみに右の人差し指を当ててすらすらと答えた。

「うん。《森》って、風の森の課題のことですよ。

風の森 学園から山脈沿いの街道を北東に徒歩で二日程の所に位置する学園所有の原生林である。

山脈に沿う形に分布する広大な森は主に広葉樹で構成され、様々な有用植物や希少動物の存在が確認されている。

山脈の形からその森にだけ吹き降ろす風の影響を受け独自の生態系が築かれており、風の性質を持つ生物や植物が多い。

密猟対策などの為周囲には結界が張られており学園の野外実習や

薬草などの採集に使われている。

土地の性質上炎の広域魔法の使用が固く禁じられている。

森に入れば野宿するしかなく、危険な動物も多いため野外実習の場としての人気は低い。

課題は森の結界に設けられた入り口から進入し、山脈に突き当たる最深部にある石碑の文字を記録するものが一般的である。最深部まで到達するには山歩きに慣れた人間でおよそ四、五日かかると言われている。

三年次でも選択できるが難易度は極めて高く、人数制限がかけられている。挑戦するには十分な装備が必要である。

現代魔法史アウレスーラ学園の章、二百五十七ページ参照」

当たっている。

この上なく正しい知識を披露され、三人は言葉もない。

「……すげー、教科書覚えてんの？」

ジェイの問いかけにアーシャはこくりと頷いた。

「けど、それだけちゃんとしててそれでも一緒に行ってくれるの？ 危険もあるってわかってる？」

シャルのその問いにアーシャは首を傾げた。

「一緒に行ってくれるか聞きに来たんじゃないの？ 嫌だつて言えばそれでいいの？」

「それは……」

確かに、一緒に行ってもらえるならば有難い事この上ない。

しかし、目の前の人物があまりにも小柄で、態度もあっさりしすぎていてから逆に不安になってつい何度も確かめたくなくなってしまっただの。

「退屈してたからちようどいいよ。どうせ野外実習は近場の森で野宿して薬草採集とかにするつもりだったし。自分の身は自分で守れるし、野宿も山歩きも慣れてるから気にしなくていいよ。風の森は面白そうだから一度行って見たかったんだ」

それが本当なら願ってもない事だった。
ジェイとシャルはひとまずその言葉を信じる事にして、よつやく
ほつと胸を撫で下ろした。ともかくこれで課題に挑戦できる。

「幾つか質問したいのだが」

しかし不意ににディーンが口を挟んだ。

「何？」

「君は何歳だ？」

ディーンの問題は唐突ではあったが他の二人も気になっていた事
だった。

野外実習の課題には基本的に年齢制限はなく、実習を受けられる
学年ならば良しとされている。

しかし彼女はあまりにも小柄で、もしかしたら学校側は難色を示
す可能性も考えられた。

「んーと、じゆう……十二かな。もうすぐ十三になるはずだよ」

十二歳、と呟くとディーンは黙ってしまった。

他の二人も驚いた顔で少女を見つめる。自分達より二、三歳も年
下だったのだ。確かに、そういわれれば少女はそのくらいの年齢に
見えた。それは本来ならば基礎学部の六年くらいの年齢と言う事だ。
飛び級したにしても随分と早すぎる。

「上級学部に編入したのか？」

「うん。十……もう十一歳だったかな？ そのくらいの時にここに
来て、試験受けて上級の一年から入った」

「よく許されたわね……」

いくら実力があれば編入飛び級に寛大だとは言え、実際それほど
対象者は多くはない。

一つの科目だけ飛びぬけて優秀でも、たとえば他の科目の単位や、
体力が著しく不足しているなどの場合飛び級が許されない場合もあ
るからだ。

そのまま学院に残って専攻を極める研究員になる事を決めている場合などは許されるが、学生が外に職を求めつもりである場合は様々な面で水準を満たすか審査され、正当な理由もなく たとえば弟子入りなどの 飛び級や卒業は許されないことになっていた。水準に満たない生徒を安易に卒業させて学院の出身者の評判を落とさないためだ。

「なんか基礎学部の問題から始めて、いっぱい色々試験受けさせられたよ」

「魔法実技も？」

基礎学部の卒業試験にも基礎的なものだけだが魔法や武術の実技の試験がある。

その才能の有無によっては該当する学部への進級を諦める事を勧められたりもする。

「うん、受けたよ」

「それなら君は少なからず魔法を使えると言う事だが、どのくらい使える？」

それは三人とも知りたくない重要な事柄だ。

自分の身は自分で守ると言ったが、それでも相手の実力がわからなければいざと言う時支障が出る。

「うーん……検定とか受けてないから良くわかんないけど、ここ的一年生並みくらいは使えるのかな？ 編入の時魔法科を勧められたから」

勧められたにも関わらず魔法科にいるという事は彼女はその勧誘を蹴ったということだ。

生徒に人気が高く人数の多い魔法科は途中編入はかなり難しい。そこへの入学を勧められたならかなりの実力があると思っただけではない。

だがそれを蹴って魔法科へ入る生徒には果たしてどのような理由があるのか三人はますます疑問に思う。

「ねえ、じゃあなんで魔法科じゃなくて魔法科にしたの？ 普通魔

法科でしょ？」

「そうなの？　なんで？」

シャルの問いに逆に問いで返した少女は心底不思議そうな顔を浮かべていた。

「何でつて、やっぱり魔法科の方が強くなれるし、人気があるし」
才能があるなら魔法科の方が出世の見込みも高い。

そう付け加えたシャルの答えにアーシャは、へえと気のない返事を返した。

「別に出世とか興味ないし……不便なく使えればそれでいいよ。それに魔法科だから魔法勉強できないって訳じゃないもん」

それは確かに一理ある。

魔法科にも沢山の魔法関連の授業は含まれているし、生徒は望めば科や学部を跨いで授業を選択することも許されている。

結局、彼女の实力は定かではないが、気負った所や卑屈さが欠片もないところを見ると本当にそれなりには使えるのだろうとディーンは判断した。

話す言葉は簡潔だが、話は通じるし頭も良いようだ。

自分の能力もきちんと把握した上で、この話を受けているように見える。

これなら、戦力になるかどうかは置いておいても少なくとも足手まといにはならないだろう。

上級学部の一年生くらいの實力だと仮定すると、魔法協会が行っている魔法能力の検定試験で言うところの八から七級くらいになる。十二段階に規定されている位の、中の下と言うところだが全く役に立たないほどではない。

魔法に関しては三学年トップのシャルが居ることだしなんとかなるだろう。

ちなみに魔法検定は光、闇、火、水、風、地の各種六属性、さらに、詠唱魔法、精霊魔法、紋陣魔法、神聖魔法、媒介魔法など、魔

法種別ごとに受験できる。

個人の魔力は家系や生まれ育った環境などの要因で得意とする属性や種別が分かれることが多い為、特技を活かせるようになっていくのだ。

上級三学年の生徒は五から六級を持っていることが多い。

シャルも得意と思えるものは定期的に検定を受けている。

そんなシャルからすれば、才能があるのにそれを学ぶ事もせず、検定も受けていない目の前の少女は随分と珍しく、また勿体無く感じられるのも事実だった。

5：引けない理由

シャルがそんな事を考えていると、アーシャが不意に片手を上げて三人の注目を集めた。

「私からも質問」

「何？」

「《森》を選んだ理由は？ いや、選ばなきゃいけなかった理由は何？」

シャルとジエイは思い出したくないことを思い出してうつとつめく。

ディーンは質問を言い直した少女の観察眼に少し感心した。ぼんやりしているように見えるがそうでもないらしい、と認識を改める。誘われたことに流されるだけでなく、その裏にある訳アリの匂いをちゃんと感じ取っている。単なる無謀な学生の冒険心とは受け取らなかったのだ。

自分の理由はたいしたものでないディーンは苦虫を噛み潰したような顔をしている友人二人に視線を向ける。

「特に、えーと、そのの、シャラフィーンさんは気になる」

「シャルフィーナよ！間違ってくるならシャルって呼んで頂戴！」

「まあまあ。けど、何で特にシャル？」

ジエイはいつもの通りシャルを宥めながら少女に問い返した。

んー、と言いながら少女はシャルの少し上の方へ視線を流す。もちろんそこには空があるだけだ。

「火の精霊に好かれる性質でしょ。風の森みたいに、自由に得意な魔法が使えない場所を何でわざわざ選ぶのかと思って」

シャルは思わず声を失った。自分の魔法についてなど一言も少女の前で話していないはずだ。

「……なんでわかるの」

「……」

アーシャは口を開きかけた、がパクリとそれをすぐにまた閉じてしまった。

そして首を傾げて答えた。

「なんとなく？ あ、いや、髪の色かな。うん」

「……」

怪しい。

明らかに不自然だ。

確かに赤みが強い茶色の髪は火の精霊に愛されている証と言えなくもない。

だが今の間は何か不自然極まりなかった。

けれどアーシャはそれ以上口を開かず、問いかけるような視線をシャルとジェイに向ける。

実際、現在三学年トップのシャルは火属性三級、詠唱魔法四級、精霊魔法条件付四級などの資格を持っている。どれも三年生の平均を大きく超えているレベルだ。

資格が示すとおり、炎の魔法は大得意、だがそれ以外の魔法は全く使えないということはないが余り得意ではない。

風の森はその風の気の強さにより山火事などの危険を防ぐ為、炎の魔法の使用はかなり制限されている。

許される範囲を越えた魔法を使用すれば問答無用で失格は免れないうという。

得意な魔法が使えない魔道士など不利でしかない場所だ。

しかも森の中ではあくまでも、魔道を志すものとしての自制を求められるのだ。

結果によって始めから自動的に無効になっているのなら不便だがさほどの苦勞はない。

使えるのに使つてはいけない。

それは魔法を使い慣れた者にとっては何よりも我慢と苦痛を強いられる事になるはずだ。アーシャの疑問はもつともなものと言えた。

シャルとジェイはお互い顔を見合わせると、ため息を一つ吐く。
ジェイはおもむろに自分の服のポケットを探り、小さな封筒をア
ーシャに差し出した。

「これが答えだよ。見てもいいぜ」

差し出された封筒を受け取るとアーシャはそつと中を覗いた。

中に入っていた手紙を開き、文字を目で追う。手紙は、ジェイに宛てて彼の実家から届いたものだった。

「嬢の他にも良いお話がいくつも来ています。どれもお前には勿体無いくらいのお話ばかりです。ついては次の夏期休暇には必ず帰ってきなさい」

一通り目を通した後アーシャは顔を上げた。

「これが？」

「……ああ、まあその、なんだ。俺んちっていわゆるそれなりの家でさ」

ジェイは言いにくそうに語尾を濁す。

「貴族って奴？」

「ん、まあそうだな。格としてはそこそこかな？ つつても俺は貴族は貴族でも末っ子の五人目、四男坊でさ。家を継ぐ見込みもない、女の方が役に立つのになって言われるような子供な訳だ。

そういう子供は適当に少しばかりの領地か財産を貰って独立するか、仕官して役人にでもなるか、縁がありゃ政略結婚の道具になるのが一般的なのさ。もちろんそうなれば相手は選ぶ権利もないと来てる。

まあ中には前向きに逆玉狙って社交界を必死で泳ぎまわるのも結構居るらしいけど、俺はそういうのはちよつと、な」

「私の事情もまあ似たようなものね。私のところは貴族って言うても下も下、爵位を金で買ったただの成金だけど。成金ならではの上への憧れいっぱい父は三人の姉達を貴族に嫁がせて、手駒が減ったところで私を思い出したって訳よ」

「嫌いななの？」

アーシャの率直な言葉にシャルはにこにここと笑う。

「そうね、好きか嫌いかで言えば大嫌いに入るでしょうね。でも私ももつ子供ではないもの。あの趣味の悪い家を燃やしてやりたいと言っただけには思っただけ。せいぜいいざれ没落すればいいと願うくらいよ？」

その言葉と笑顔に怯えるジェイと見て見ぬふりをするディーンを横目にアーシャは一人、

（人間って怒っても笑えるんだなあ）

などと呑気に感心をした。

「それでも、私達はどうか王都にある貴族御用達学校じゃなくてこの学園へ来ただけまだましだったわ」

「まあな。好きな事何でも勉強出来るしな。いけ好かない貴族のボンボン達の馬鹿面を四六時中見なくてもすむし、ここを卒業すりゃ実力次第では役人なんかよりちょっとはましなもんになれる可能性だってある」

「じゃあここへ通うのを許してくれたならそのまま独立してもいいってことじゃないの？ それ以上はだめってこと？」

「そうね、だめって言うより最初は期待しない子供だったから好きにさせてたけど、惜しくなったというところね」

首を傾げるアーシャに、ディーンが静かに説明してくれる。

「シャルの成績は魔法学科の学年一位だ。炎属性だけなら上の学年でも彼女に勝てない人間は多いだろうと噂されている。ジェイは去年の武術学部の武闘大会拳闘の部で下級生ながら大健闘の五位だった。つまりこの二人は割と有名だ」

自分もそれなりに名が知れている事は口には出さず説明しながらディーンはアーシャを観察していた。

アーシャはへえ、と感心しながら二人を交互に眺めている。

他の学部や学年の事でも人気の科の優秀な生徒や大会の成績上位者などはかなり顔が知れているものだが、少女は全く知らなかったらしい。

それは先ほど彼女を起こした時にまず名前を聞かれた事から予想はしていたのだが。

「この学園はこの大陸では有名な学校だ。貴族の中には庶民と共に通うのを嫌って敬遠する者もいるが、ここから優秀な生徒が沢山出ていることは皆知っている。国からのスカウトも来るくらいだ。注目度は高い」

なるほど、と頷くアーシャを見ながらディーンは更に続けた。

「この学園で上がった二人の名は王都にも自然と伝わる。加えて、二人ともそれなりに目立つ容姿をしている」

「それなりって何よ！ まあ、顔で判断されるのは不愉快だけど、私が可愛いのは疑いようの無い事実だしね」

「上級学部に進学した辺りから、長期休暇で帰るたびに実家で開かれる集まりに無理矢理参加させられるようになっていやな予感を感じていたんだ」

アーシャはようやく納得がいったというように大きく頷いた。

「つまり、家から放置されて、自由にのびのびがんばったら、実力があつて顔もいらしいと言う評判が立つちゃって、お見合い話してきたのかあ」

「そういうことよ。まったく、冗談じゃないわよ。何を今更！ しかもこの優秀な魔道士の卵である私に、王都のお嬢様学校に転校して花嫁修業しろっていうのよ！？」

「そ、親は今まで目にも止めていなかった子供が、実は役に立ちそうな事に気づいたらしくてさ。有難くもふさわしい相手を見つけてやったから学校途中でもとにかく婚約だけでもするように、俺の場合合は出来れば王都の士官学校へ転校したらどうだ、と何度も手紙を

よこしたわけ」

「断れないの？」

「断ったさ、何度も何度も。そしたらこれさ。今まで育ててやったんだから義務を果たして恩くらい返せ、それが嫌なら道を半ばで諦めるのは惜しいと思わせるだけの並々ならぬ才能でも見せてみる、とよ。家の誉れになるほどなら有難くも好きな道を許してくださいさるって訳さ」

お優しいことで、と呟きながらジェイは手に持った手紙を忌々しそつに摘まんでひらひらと振った。

まるで汚いものでも触るかの様子にディーンも苦笑を浮かべる。

「まあ、そういつつもその手紙にはそんな事は無理だろう、という含みがたつぷり漂っているな」

「なあにが無理よ！ 転校も婚約も冗談じゃないわよ！ なんとかしても夏休みの前のこの実習でS評価を取って、あのクソ親父の前に叩きつけてやるんだから！」

「そういうこと。だから、風の森なのさ。三年生がいける野外実習じゃ、成功してS評価を確実にもらえるのはあそこだけだ。無謀でも何でも、俺達の人生がかかっているんだ。なんとしても、夏期休暇前にその並々ならぬ才能って奴を見せ付けてやる」

とてもお嬢様とは思えない悪態を吐いているシャルをアーシャは興味深そつに眺めてふむ、と一つ頷いた。

「この学費は家から出てるんじゃないの？ 大丈夫なの？」

「その点はまあ、心配しなくてもなかったけどな。でも実家からの仕送りは極力使わないで貯めてるし、いざとなったら奨学金にも挑戦するつもりさ。」

まあ、俺がどうあってもこの学園に居座るってわかれば、俺の実家は中退の汚名を嫌がって学費くらいは出すだろうし」

「ほんと、外聞だけが大事なんて終わってるわよね、お互いに。ちなみに私のところはね、親に放って置かれた私を実質育ててくれた

祖母が遺産をいくらか残してくれたの。実家の援助がなくても卒業まではやっていけるし、その後は自分の力で生きていくわ」シャルは清々しいほどきっぱりと言いつつ切った。

(なんか、この人達面白い)

アーシヤはそんな風に思った。

この学園には貴族も金持ちも多くいるが、アーシヤが見てきた彼らは皆一様に《貴族》や《金持ち》だった。

先祖や親の築いた階段の上に乗っかり、大きな顔をして周りの生徒を見下している者も沢山いる。

今でこそ寝てばかりいるが、学園に入学した当初アーシヤはちゃんと周りの人間と交流もしてみたり、授業もまじめに受けてみたりしていた。

けれど結局興味を引かれる人間は少なく、授業も退屈極まりない。それなら与えられた教科書をさっさと読んでしまつて、後は図書館の本なんかを漁って独学した方が面白いと結論を出したのだ。

そうして寝ることと一人で本を読む事で日々を過ごし、三年目に入った今年、アーシヤに構う者は無駄に根気がある教授数人くらいだった。

だから彼らはアーシヤにとっては久しぶりに見た、面白そうな人達ということになる。

貴族や金持ちに生まれたのに、それらしくする気は全くないらしい彼らはとても面白かった。

皆家族が居るのに、本当なら居場所があるのはずなのにどこか迷子のような顔をして。

自分達の力だけを頼りに決められた以外の人生を切り開くつもりなのだ。

(悪くないかもね)

ここへ来てからずっと退屈していた。

退屈で寝るしか無かったところへ不意に風が吹き込んできた気分だ。

それに、もう一つ嬉しい事があった。

ちら、と長めの黒髪を後ろで一つに縛った背の高い少年に視線を向ける。

(……名前、呼んでもらえたの久しぶりだったな)

ふ、とアーシャは小さく笑った。

そのかすかな笑顔を見たのは注意深く彼女を見ていたディーンだけだったけれど。

「いいね、すごく面白そう」

そう言っただけでアーシャは片手を差し出した。

「じゃあ、成功させようか」

こうしてこの日、一学年に一つは現れるという、チーム・無謀がついに今年も結成されたのであった。

6：招かれざる客

そして更に次の日。

昨日あのと結局昼休みを過ぎても話しこみ、次の授業をサボった面々はそのまま無事に班と課題の登録を済ませて解散した。

だが本日は再び魔法学部校舎へ集合している。
魔法学部のタウロー教授に呼び出されたのだ。

タウロー教授は魔法学部三年生の学年主任で、野外実習総合責任者でもある。そうなると呼び出された理由は当然一つしかない。

「……本気なのかね？」

「はい！」

シャルの元気のいい返事に、はあ、とため息を吐きながら白髪の教授は人の良さそうな顔を困ったように軽くしかめて、今年の三年のチーム・無謀のメンバーを順番に見つめた。

「イージェイ君とアルロード君は、まあメンバーとしては無理はないだろう。二人とも昨年度の武闘大会の剣術部門、拳闘部門それぞれ上位入賞者だ」

教授の言葉にアーシャは少し驚き、隣の背の高い少年をちらりと見る。

だが無表情な少年は教授の言葉に何の感銘も受けなかったようだ。

「だが、グラウル君は……いかにせん年が若いし、能力も未知数だ」
確かに、他の三人より三歳も年下なのはどうにもできない。

加えて、普段から寝てばかりいて検定も受けていないのであればその能力の把握も難しい。

実は弱いかもしれない生徒を危険な課題に送り出すわけには行かないのだ。

「それに、ブランディア君。恐らく、君はこの課題には向いていな

いよ？」

シャルは教授のセリフに血相を変えた。

「どうしてですか教授！ 私なら心配いりません！」

だが教授はゆるゆると首を振った。

「時々、君のように一つの才能に特に秀でた子供が現れる。

確かに君は優秀だが、何事も相性と言うものがある。どう考えても

風の森は君には不利だ。君は、火に愛されすぎている」

「それでも、他の魔法が全く使えないわけではありませんわ！ き

つとやり遂げて見せます！」

シャルの決意は固い。何しろ自分の将来が懸かっているのだ。

「しかしねえ……」

本音を言えば教授も、学生の向上心は応援してやりたい。

彼女の事情も多少とはいえ知らない訳でもない。

けれどそれでも彼女を風の森へ送り出すことはそう簡単に肯定で

きるものではなかった。

「万一の事があつたらどうするのだね？ 命の危険にでもさらされ、

魔力を暴走させでもしたらただの課題の失敗というだけでは済まな

いのだよ」

一歩間違えてシャルが炎を暴走させたりすることがあれば、風に

煽られた炎は瞬く間に森を飲み込むだろう。

そうなれば中にいる生徒達の命も、貴重な動植物も、全てが失わ

れてしまう。

「それは……」

「教授、そのために俺達が居るんですよ？ 必ず守って見せるし、

暴走させたりしませんよ。シャルを宥められるのなんて、この学校

で俺くらいだし」

ジェイはシャルの言葉をさえぎるとそう言って笑って見せた。

シャルは一瞬驚いたようにジェイを見て、そして笑って頷く。

「ジェイに守られるなんて癪にさわりますけど、その為のパーティ

ですもの、我慢しますわ」

よく喧嘩をしているところを目撃される事から、仲が悪いと思われがちの二人だが実際はその逆だ。

二人はお互い親に構われなかった子供同士、それぞれの祖母に連れられて小さな頃から良く一緒に遊んでいた。

幼馴染故の気安さで言いたいことを言い合っているだけで、実際はただのじゃれ合いのようなものだ。だからこうして二人が一度結託すると、それを覆すのは容易ではない。

基礎学部の頃から二人がタッグを組んで周りを巻き込みやらかしてきた様々な悪戯や功績は今でも教授達の間の語り草になっている。教授はため息をまた一つ吐くと、狙いを変えるべく視線をアーシヤへと移した。

「君はどうなのだね？ グラウル君。風の森の課題は危険なのだよ？」

細い姿はいかにも頼りなく、とても長い山歩きに耐えられるようには見えなかった。

「別に大丈夫。深い森で育ったから慣れてるし」

「しかし、君は魔技科だろう？ 魔技科では実戦的な科目は多くない。まして君は……」

ほとんど寝ていると聞く、と言いたかったのだろう。

教授は曖昧に語尾を濁し、困った顔をする。

「身を守ったりする力があるとしても、君は検定も受けていないし判断のしようがないのだよ」

「森は人の領域では無い所。そこで生きていけるかを、人の作った仕組みで判断しようなんて無意味だよ」

アーシヤの答えに、教授は目を見開いた。確かに、彼女の言う事には一理ある。

教授相手でも全く気を使っていない飾り気の無い言葉遣いだが、それ故に彼女の言葉はまっすぐだった。

「なら、君は生きていけると？」

こくり、とアーシャは頷いた。

「私は森を忘れてないもの。森は私に牙を剥かない」

そう言っただけ少女は薄く笑みを浮かべた。森の色の瞳が際立って見える。

その瞳には迷いも恐れもない。

ただ教授はその中にほんの少し、望郷に近いものを見たような気がした。

ふう、と本日何回目かのため息を吐くと、教授は目の前の申請書類を手を取った。昨日目の前の四人が学生課に提出したものだ。

机の上からペンを取ると、サラサラとそれにサインをし、シヤルに差し出す。

「仕方ない。許可しよう。だが、危険を十分に考慮して慎重に課題に当たるように。日程ももう少し多めに組みなさい。森と言っても山に近い深い森だ。山歩きは厳しいからね」

「はい！」

重なった声はどこまでも元気だった。

夕方、四人は学生寮の共同食堂に集まって食事をしていく。

皆で決めた出発日は三日後だ。

それまでに様々な準備をしなくてはならないので、そのための相談に集まったのだ。

だが、アーシャは目の前の料理に手をつけず、きよろきよろと周囲に視線を走らせていた。

「さつきからきよろきよろしてるけど、食堂が珍しいの？」

「うん、初めて来たよ。私寮に入ってるから」

そういうとアーシャはフォークで魚をつん、と突付く。

「これ、なんて魚？」

彼女の目の前にあるのは「本日のおすすめ魚セットA」というメ

ニューだ。

何かあるのか良くわからなかったので適当に魚料理を、と頼んだらこれが出てきた。

ふっくらとした紡錘形の大きな魚は切れ込みを入れて香草と共にこんがり焼かれ、何か柑橘系の香りのソースが上にかけている。

アーシャには見慣れない形の魚だった。

「マーレだ。海で取れる。淡白な白身が酸味のあるソースと相性が良い」

ディーンの答えに、海、とアーシャは呟くと不思議そうに魚を眺めた。

「ここは海から遠いが、大陸の西の端にあるフィリネス王国と友好関係にある」

「そうよ、そしてそこにも学園があつて、学園同士は転送用の大規模な魔方陣で繋がっているの」

「それを使ったお互いの特産物の交換が月に何回か行われてるんだ。で、その海の国の特産物は寮内のこの共通食堂と、学部のある中央棟の大食堂でだけ出されるんだぜ。行った事ないか？」

「一度だけ行つてみたけど皆殺気だつて怖かったから帰つてきた」
「ははは、まあそこはなあ。学園内で人が一番集まる場所だもん。でもフィリネスの魚は混んでも食いに行く価値はあるぜ。食つてみるよ」

さすがに長くこの学園で学ぶ三人はこういったことには詳しい。

アーシャはへえ、と心から感心した声をあげ、ジェイに促されるまま魚を切り分けると恐る恐る口に運んだ。

「む」

どうやら海の魚はお気に召したらしい。

アーシャはそれつきり無言で魚を切り分けるとパクパクと勢い良く食べ始めた。

他の三人はその姿をなんとなく微笑ましい気持ちで眺める。自分達よりも年下の人間と行動を共にするのが珍しいのだ。

学園では一学年の人数の多さも手伝って、学年を超えての交流はあまり活発ではない。同じ学年でも知らない人間が山ほどいるのだ。(悪くないわね、こういうのも)

シャルは隣の少女を時々ちらりと見ながら、和んだ気分で考えた。

愛想も掴み所もほとんどない、会ったばかりの変わった少女だが不思議と三人の中に悪い印象は無かった。

ビクビクと人を遠巻きにする連中や、おどおどと媚を売る人間よりもずっといい。

特に同じ学年の大抵の少女は、シャルを見ると怯えるか愛想笑いを浮かべ、ジェイやディーンを見ると頬を染め、媚びた笑顔で甘い声を出す。

その反応のどれ一つとして返さなかった少女は、(ただ単にまだ幼いのかもしれないが)それだけでも好感が持てる気がした。

シャルの血縁は人数は多いのだが妹はおらず、ほとんど会った事もない姉と弟がいるだけだ。

ジェイは末っ子で、ディーンは兄弟はいないという。

(妹が居たらこんな感じかしら?)

珍しく、らしくもない優しく穏やかな気持ちをシャルは覚えていた。た。

「あら？ シャルフィーナさんではありませんの？」

だがその穏やかな気持ちは、背後からの声を聞いた瞬間にぶち壊されてしまった。

見たくもない顔を視界に入れまいとシャルは振り向かない事に決めた。せつかくの穏やかな夕食が台無しだ。

しかし声の主はシャルが振り向かない事に腹を立てたのか、三歩近寄りそしてシャルと向かい合わせている人影を目に留めた。

「まあっ、ジャスティン様にディラック様！」

どこから声を出しているのか不思議な高音の声に惹かれて料理から顔を上げたアーシャが見たものは、派手な金髪をこれでもかといくらいい仰々しい巻き毛に仕立て上げた女子学生だった。

「……」

すごい頭だ。とにかくまず髪の毛の量が不自然に多い。

高い位置で後ろにまとめた髪はいく房かに分けられてカールを施され、いわゆる縦巻きロールというものを作り出している。

それでもなお背中まで届く髪は巻きを取ったらどのくらいの長さなのかとアーシャは観察しながら真剣に考えた。

少女が頭の中で髪の毛の長さや量を計算し始めていた頃、シャルと縦巻きロール嬢の間には冷えた空気が流れていた。

「聞きましたわ、ジャスティン様、ディラック様！ 風の森にいらっしやるんですって！？ 彼女の口車に乗るなんて危険極まりないですわ！」

そう言っただけで縦巻きロール嬢はしなを作って男二人に訴えかける。いつもの事に二人は黙って苦笑するしかない。下手な返事をするその後でシャルからしつこく怒られるのだ。

女同士の戦いでは男は何時だって無力な生き物だ。

「うるさいわよ、コーネリア。食事中なの、甲高い声が耳障りだからあっち行ってくれない？」

コーネリア、と呼ばれた少女は縦巻きをゆらん、と揺らして勝ち誇ったようにシャルに向き直った。

「あーら、怖い。課題に必要な人数が足りないからってイライラなさってるんじゃない？」

どうやら彼女はシャルが必死でメンバーを集めようとして上手く行っていない事をかぎつけてわざわざ来たらしい。

暇な事だ、とシャルは内心鼻で笑う。

コーネリアとシャルとはクラスは違うが同じ学部で同じ科だ。

だがコーネリアは基礎学部から共に同じ事を学んでいるのいうのに成績ではいつもシャルに一步及ばない。

彼女はそれが悔しくてならないらしく、一方的にシャルをライバル視してことあるごとに突っかかってくる。

シャルに言わせれば、自分の努力や才能の無さを他人のせいにするなんて頭が悪いんじゃないの、ということになるのだが。

「貴方が無理をして落第なさるのは全然構いませんけど、ジャステイン様達を巻き込まないで頂きたいわ！ お二人は貴方と違って優秀なのですから！」

そう言い放つとコーネリアは取っておきの憂い顔を浮かべ、二人が心配でならない、とアピールする事を忘れない。

家柄も見た目も成績も良い少年二人は学年問わず女生徒から密かな人気がある。

だが賢明な二人はいつも男子寮と自分の学部でほとんどの時間を過ごし、女子の割合の高い学部には滅多に近寄らない。

加えて、共通食堂などを利用する時は必ずと言っていいほどシャルが一緒だ。勿論二人とも意図的にシャルを防波堤代わりにしているのだが。

怒らせたら火を吐く、などと噂され密かに「火吹き猫」と恐れられている学年トップの彼女を押しつける者は未だ出てきていない。上の学年の人間にさえ、尊敬に値しないなら容赦ないシャルの存在は極めて優秀な防波堤だった。

そんな中でコーネリアは今の所唯一の勇敢なる挑戦者だ。

「ふん、じゃあ貴方とも違うようね。万年二位のコーネリアさん？」
シャルは鼻で笑うと気にもしてない様子でオレンジジュースを飲み干した。

「くっ……！ せ、せいぜいそうやって驕っていればよろしいですわ！ 次に勝つのは私です！ メンバーも見つけられない人望のな

い貴女になんて負けません事よ!？」

「お生憎様。もうメンバーは見つけてあるわ。どうやら情報に疎いのはその髪型だけじゃないらしいわね」

「なんですって!？」

コーネリアは思わず声を張上げたが、はたと止まって訝しげに四人に目を移した。ようやく彼らの人数がいつもより多いことに気がついたらしい。

シャルの向こう側の席から自分の方をじっと見つめている小さな人影に初めて視線を向ける。

「……まさかと思えますけど、その子供が四人目だともおっしやいますの?」

「そうよ。彼女は飛び級してるからこう見えてもちゃんと私達と同じ学年よ?」

固まっているアーシャをじっと見返し、コーネリアは記憶を探った。この四人と組むと言う方にはもう一人は魔法学部のはずだが彼女の記憶では魔法科にこんな少女はいない。

全てを覚えているわけではないが、飛び級しているほどの人間なら少しくらいは記憶にあるはずだ。

「貴女、魔法学部よね? 何科でいらっしやるの?」

「……魔法科」

ぼんやりとしながらも条件反射のようにアーシャはごく小さく答えた。

だがその声はコーネリアにしっかりと届いたらしい。

ぷっ、と噴出すとコーネリアはくすくすと上品に笑い出した。

「魔法科! 思い出しましたわ! 魔法科で飛び級したって言えばここ数年では一人だけのはず。貴女、いくらメンバーが見つからないからってよりもよって魔法科の眠り姫なんかを仲間にしましたのね?」

「……それが何か?」

シャルはアーシャが答えるのを咄嗟に止められなかった事を内心で苦々しく思っていたが努めて冷静に返事をした。

「何かもなにも！ お得意の火の魔法が使えない貴女が、魔技科の人間と何の役に立ってますの？ ああ、巻き込まれるお二人が可哀想だわ！」

礼儀正しい（と自分では思っている）コーネリアは魔技科の役立たず、とは言わなかったが言外にそれを滲ませながらさも楽しそうに笑った。

どうやら三人が思っていた以上にアーシャの授業態度は有名だったらしい。

「お二人とも、風の森の課題は私も挑戦する予定ですよ。よろしければ私の班に入りませんか？」

「何それ！？ あんたも行く気なの！？」

「あら、私が挑戦しちや悪い理由でもありませんか？ まあ、私は貴女ほど無謀ではありませんので、友人達に呼びかけて六人ほどで挑戦するつもりですけど。友人達も快く賛同してくれましたわよ？」

ほほほ、と愉快そうにコーネリアは笑い、沈黙を守る男二人に更に声をかけた。

「いや、もう班登録終わってるし……」

「同じく」

賢明な二人はそれに答えるような事はしなかったが。

「残念ですわ……どうか仲間足に足を引っ張られても、決して無理をなさらないでくださいね？」

シャルはギリ、と奥歯を食いしばった。

どうせ金や地位で取り巻きを釣ったに違いないのだ。だがそんな事を追求してももう仕方ない。

このいけ好かない女の顔を旅先でも見る事になるのは間違いないさそうだ。

だがこのまま言われっぱなしでいる訳には断じていかない。

何と返してやるうかとシャルが頭の中で豊富な嫌味のストックを漁り始めた時、隣から声が上がった。

「ねえ、聞いてもいい？」

「あら、よろしくてよ？ 何ですか？」

コーネリアはてつきり華やかな自分の登場に萎縮しているのだと思っていた少女が喋りかけてきたことに少し驚いたが、鷹揚に微笑み返した。

優しい微笑が年長者の余裕を感じさせる。

アーシャの無邪気な声が女の戦いをシン、と見守っていた食堂に響いた。

「それ、カツラ？」

ピシ、と空気の凍った音を聞いた、とその時周囲にいた人間は後にそう証言した。

7：楽しいお買い物

翌日の朝、ジェイは上機嫌のシャルを連れて街へ出ていた。実習の旅の必需品の買出しの為に、今日は全員が授業を休みにしたのだ。

野外実習の準備は申請すれば授業を休む事が認められている。

本来は休養日に行ってもいいのだが、何しろ休みの日の街は混むのでゆっくり買い物どころではない。時間のかかる実習の準備は平日に行うのが利巧なやり方だ。

ジェイはデインと一緒に寮を出る予定だったが彼は研ぎに出した剣を受け取ってくると言って先に出かけてしまった。

結局ジェイは一人で寮を出て、その途中でシャルと出会ってこうして二人で歩いている。

今朝のシャルは不気味なほど機嫌がいい。ジェイは上機嫌の幼馴染を横目で見ながら小さくため息を吐いた。

理由は恐らくただ一つ、昨日の騒ぎだ。

昨日あの食堂での会話の後、アーシャが放った最終兵器ともいえる言葉に我を忘れたコーネリアの暴走は凄まじかった。

シャルほどではないが実はコーネリアも切れると見境がない恐ろしい少女なのだ。

氷の飛礫が飛び交う食堂から、笑い転げて息も絶え絶えなシャルと、三分の一残っていた魚料理に未練を訴えるアーシャを連れ出すのは本当に大変だった。

四人はどうかこっそり抜け出せたが暴走した本人はその後駆けつけた教授達に捕縛され、今日は朝から食堂の修理をさせられていると聞いた。

自業自得とは言えジェイは少しだけ哀れを感じてしまう。

対して、そんな哀れは微塵も感じていないらしい彼の幼馴染はつ

いに鼻歌まで歌いだすほどご機嫌だ。

四人で旅をする事はなんとかなりそうだ、と考えていたジエイだったが、コーネリアのチームが同じ目的地だとするときっとただではすまないに違いない。

それを考えるとジエイは朝から少し憂鬱だった。

「あ、いたわよ。おはよう！」

シャルの明るい声に呼ばれて前方を見れば、確かに待ち合わせの上級学部の正門を出てすぐのところにある噴水の傍に見知った人影が二つあるのが目に入る。

走りよるとアーシャは噴水前のベンチに座りもぐもぐと何かを食べていた。

デインは立ったままそれを面白そうにじっと眺めていた。

「ほはひょう」

「おう、おはよ。何食ってんだ？」

アーシャは口いっぱい串焼きのようなものを頬張ってもぐもぐしている。

「ごくん、と口の中の欠片を飲み込むとデインを指差した。

「なんか足がいっぱいある変な奴。デインが奢ってくれた」

「ギロの半干しを焼いたものだ。昨日は魚を残させてしまったからな」

「ああ、あれか、とジエイは頷いた。

「ギロとはやはりフィリネス特産の海の生き物だ。

足がいっぱい生えた少し不気味な姿の貝の一種で見かけは美味そうとは言いがたい。だが実際食べてみると味はなかなか良く、干物なら日持ちするからこの街まで普通に届く。

辺りを見回すとすぐ側にギロの串焼きの屋台が立っていた。

「いい匂いだな、俺も食おうかなあ」

「お前は朝食を取ったろう。アルシェレイアは何も食べていないと言っていたからだ」

「あら、何も食べてないの？ ちょっと待ち合わせが早かったかしら」

シャルが心配そうに聞くとアーシャはふるふると首を振った。

「朝は寝てる」

「……」

朝もなのか、と誰もが思ったに違いない。

三人が黙っている間にアーシャは残りの串焼きを食べ終わり、串を捨てる為にパタパタと屋台の方へ走っていった。

「一体あの子一日何時間寝てるのかしら……」

「さすがに野外で寝てばつか、つてことはないよなあ？」

「……」

不安を抱える一行の下にてこてこと戻ってきたアーシャは、奇妙な顔をした三人を不思議そうに眺めたがそれに関しては何も言わず、ディーンにお礼を告げた。

「ディーン、ありがと。美味しかった」

「いや、いい。朝はちゃんと食べるようにしろ」

「んー」

睡眠と食欲の天秤を頭の中で傾けているらしいアーシャは難しい顔をする。

「まあいいわ、とりあえず歩きましょう。時間が勿体無いもの」

「そうだな。まずは道具屋だっけ？ 一番街に何件かあったよな？」

アーシャの中の結論が出るのを待たずに四人は街を歩き出した。

朝市もピークを過ぎ、生徒達も教室へと入ったこの時間の街は比較的静かだ。

並んで歩きながら何か話をしているアーシャとシャルを眺めながら、ジェイはディーンに声をかけた。

「なあ、なんかお前あの子に優しくくない？ 気に入ったのか？」

ディーンはどちらかと言えば　むしろ言わなくてもいいが人嫌いだ。

基本的に男にも女にも分け隔てなく冷ややかで、甘い顔は絶対しない。

その常から考えれば、少女に食べ物を奢っている友人というのはジエイにはちよつと信じがたい光景だった。

「……昔、母が犬を飼っていた」

「あ？」

それが今の話とどう繋がるのかジエイには判らない。

「とても小さい犬で、私はその犬が苦手だった」

「なんで？ お前犬なんか平気だろ、確か」

「大きい分には構わないが小さいのは困る。足元に居られてうっかり踏んだり足がぶつかつたりしたらすぐに死にそうだろう」

「ああ、まあそれはわかる気がするけど……で？」

「小さいから、不安になる」
なるほど。

どうやら彼にとって、痩せっぽちの少女が気になる存在であるのは間違いないらしい。

その気になり方と返された答えはジエイの投げた質問とかなりずれている気もしたが。

(……仲間として上手くいつてるなら、まあいいよな)
友人と違つて同年代との人付き合いの上手いジエイは、心の中でそつと妥協した。

「そういえば私昨日計算してみた」

不意にアーシャが顔を上げてシャルに話しかけた。

「あら、何を？」

「昨日のあの派手な頭の人の髪の毛の長さ」

ぶはっ、とシャルとジエイは思わず噴出す。

ジエイが隣を見るとなんとティーンまでも口元をそつと覆つて笑いを堪えている。

「……ど、どのくらいだったの？」

もう既に半分笑いながらシャルが聞くとアーシャは至極まじめな顔でその問いに答えた。

「目測で巻きの直径を予想したから正確とは言いがたいけど、約一メートルと十三センチってとこかな。毛の生える位置によって更に多少の誤差ありと推測。」

ただ、どうやってあの巻きを作ってるのか全然わかんないんだけど、シャル知ってる？」

けらけらと笑いながらシャルは少女の疑問に答えてやる。

「あの変な頭、ホント謎よね。多分熱したコテで巻いてるんだと思うわよ。技巧学部にそういう髪美容部門があって、そこでなら習えるはずよ」

へえ、とアーシャは感嘆の声を上げた。

コテならアーシャも知っている。

魔技科でも木の細工などで、素材を柔らかくカーブさせる時にそういう道具を使うことがある。

そんな手間をかけてあの頭に行っているのか、とアーシャは感心した。

しかし同時に、邪魔じゃないのだろうか、それともそれを補って余りある利点がああ髪型にあるのだろうか、と次々疑問がわきあがる（美しいとかお洒落だとかは端から除外されているらしい）。

そういえば前に読んだ本に、結った髪の毛に細い針金を隠す別の大陸の技術が紹介されていたのをアーシャは思い出した。

アレはかなり彼女の頭に合っていると思えた。

彼女なら針金どころかワイヤーやロープだって隠せそうだな。

うん、それだ。間違いない。

「ねえ、あの人って諜報技術科？」

「……昨日の話と今の話のどこからそういう結論になったのか聞いてもいいかしら？」

一分後、ジエイの小脇に抱えられ引きずられているシャルはもは

や笑い死にしそうになっていた。

それから数分かけて、四人はようやく様々な店が立ち並ぶ一番街の入り口に辿り着いた。

シャルの笑いの発作もようやく治まり普通に歩いているが、時々思い出しては笑い出しそうになっているのが少し不気味だ。

「で、どこの道具屋にする？ どこでもいいのか？」

ジェイが三人に聞くと、口を開いたのはディーンだった。

「こここの裏通りに良い店があるという情報を得ている。そこへ行く」

「裏通りって危険じゃないの？」

アーシャの問いにディーンは首を横に振って答えた。

「アウレスーラに本当に危険な店は存在しない。大丈夫だ」

ディーンはそう言うトスタスタと通りの脇に伸びる細い路地へと入っていった。

三人もその後には並んで続く。

建物二棟分の長さの短い路地を抜ければそこはすぐ裏通りだ。とはいっても表通りにごく近い裏通りだから雰囲気も特に悪いと言う事はない。

そもそもこの学園にはあちこちの校舎に生徒が通う都合上、いかがわしい繁華街や胡散臭い路地などは存在しないのだ。

大人向けの繁華街はないことはないが、全て都市を囲む外壁の外に作られて子供達の目に止まる事はなく、その存在も一定の年齢を越えた生徒達以外には知らされることはない。

そういった治安維持には極めて厳しく、都市を囲む門の内には身元確認及び取引許可のない業者も、学園の人間の紹介や事前申請のない一般人すらも一切入場できない事になっている。広く受け入れ

てもらえるのはあくまで学ぶべき子供達だけだ。

街の人が多数参加する自警団は毎日街や各店を回って治安維持を図っている。裏通りを夜子供が歩いてても安全、というのが学園都市の掲げる治安目標だった。

実際には夜子供が歩くと怒られるのは間違いないが。

「ここだ」

ディーンは手元のメモを見ながら一軒の店の前で立ち止まった。見かけはどこにでもありそうな雰囲気のお店だ。薄汚れた窓ガラスの向こうには雑多な道具が飾ってあるのが見える。

「ほんとにここ？」

表通りにはもつと綺麗な店が沢山あるのに、とシャルはぶつぶつ言いながらドアを開けるディーンに続いた。

カラン、とドアベルが軽い音を立てる。中に入ると意外と店は広い。

店内は確かに道具屋だった。壁や床にはびっしりと様々な道具が並べられている。

良く知った物も見たことのない物も沢山ある。

「おう、らっしやい」

四人が店内を見回していると、奥から太い声がかかった。

店の奥への入り口から顔を出したのはヒゲ面の厳つい中年男だった。どうやら彼がこの店の店主らしい。

ヒゲ、とアーシャが小さく呟くのが隣に居たジェイの耳に届く。

「んん？ 見ない顔だな。随分小さいのも居るし……お前ら何年だ？」

「三年よ」

シャルがそう答えると、店主は面白そうに四人を眺めた。

「へえ、三年でこの店を知ってるとは珍しい。野外実習の買い物か？」

「ああ、店の事を聞いてきた。ここなら品物もしっかりしていて、

面倒なく一式揃えられて助言も貰えるとな

「ははあ、そりゃなかなかの情報通だな。三年で俺の店に来る奴は滅多にいないぞ。で、お前らどこへ行くんだ？」

「風の森に行くのよ」

「ぶふっ！」

シャルの答えを聞いた途端店主は派手に噴出した。キャツとシャルが小さな声を上げて飛びのく。

「ぶははは！ お前らか、今年のチーム・無謀は！」

「失礼ね！ チーム・有望の間違いよ！」

店主はシャルが張上げた声にも面白そうに笑うと判った判ったと言いながら奥へと歩いていった。

奥はどうやら棚が並んでいるらしい。ごそごそと何かを漁る音がする。

「風の森なら日程的にはこの辺だろ、ほら」

そう言っただ店主が出してきたのはかなり大きなものとそれの三分の二ほどの大きさのバックパックだった。

もう既にワンセットになっているらしいバックパックを四人が囲んで珍しそうに眺める。

「でかい方が 野外実習基本セット中 長距離、男子用、小さい方が同じく女子用だ」

そのまんますぎる。

全くひねりがないネーミングだ。

「中身は？」

「まあ、一般的な旅と野宿用品だな。寝袋に薄い毛布、防水布、雨避けのマント…これはセットに入ってるがサイズ合わせていけよ。それから携帯保存食、簡易調理器具、後は、救急道具とか、ロープとかのあると便利な道具色々ってとこだ。中身はまだ少しあいてるから、ここに着替えとかを追加できる」

テントはこつちだ、と言うと店主は丸められたテントを幾つか出して見せた。

「四人パーティならまあ四人用でもいいんだが、女の子がいるしなあ。二人用を男共が分担して持つのが紳士つてもんだろ」

「うーん、まあそりやしょうがねえよな、デーン？」

「ああ、それが妥当だろう」

シャルは試しに手を伸ばして小さい方のザックを持ってみた。

「うー！」

しかし持ち上げたもののその重さに思わず硬直する。

「ちよ、ちよつと！ 重いわよこれ！？」

「ははは、そりや嬢ちゃんが魔法学部だからだろ。魔法学部の生徒は大体そう言うんだ。魔術書より重いもんなんか持ったことねえつてな！」

どれ、とジエイが大きい方のザックに手を伸ばし、それをヒョイと持ち上げた。

「二……三十はないか。まあ服とか追加するとそんなもんかな。軽い方だな」

「おう、小さい方はいっぱいにして二十キロくらいだろうな」

二十、とシャルが絶望的に呟く。

デーンは振り向いて壁に並んだザックを見ているアーシャを呼んだ。

「嬢ちゃんは……また随分小せえなあ。嬢ちゃんに合いそうなのはどう見ても近距離用なんだが」

アーシャはシャルが床に放り出したザックに歩み寄ると軽く持ち上げてみる。

重いが持てないほどではない。

けれどこの重さを背中に背負ってずっと歩くのは不快だと感じられてアーシャは軽く眉を寄せた。

「持てねえほどじゃないみたいだが、これもって一日歩けるか？」

店主の言葉にアーシャはうーん、と首をひねる。

「私、自分の道具があるからいらぬ。食料もこんなになくていい」
「自分の道具があるならそりゃあ無理して買うこたねえが、食料はこれでも最低限だぞ？　これで約十日分てとこだから、途中の行程が徒歩なら森の近くの村で補給していかなきゃなんねえしな」
「でも六月の森だよ。食べる物には困らない。私はナイフだけあれば大丈夫」

いやいやいやいや、と他の三人は胸の内ですつ込んだ。

アーシャのサバイバル精神を垣間見てまた一つ認識を改める。どうやら野宿は慣れてると言っていたのは本当らしい。

だが行った事のない場所には違くないのだ。慎重になつて悪いことはない。

「アルシエレイア、未知の場所には十分な備えをしていくべきだ。重いなら後で私とジェイで分担するから用意はしておけ」

デイーンが真剣な声音でそう告げると、アーシャは少し考えた後、うん、と頷いた。

しばらくの相談の末、結局四人は男子用セット二つと女子用セット一つ、二人用テント二つなどとそれぞれの雨避けのマントをサイズを合わせて買い込んだ。

アーシャだけは自分の分の保存食のセットと、それとは別にアーシャの背にぴったり納まる小さなオレンジ色のデイパックを買った。そんな小さいのじゃ何も入らねえだろ、という店主の声に少女は、これは可愛いから自分用、と答えていた。

その後デイーンはセット割引とまとめ買い割引を静かに、しかし強硬に主張し、とうとう三割負けさせた事を追記しておく。

荷物を各自の部屋に配達してもらつ手配を済ませて、四人は店を出た。

アーシャだけは買い立ての小ぶりのバッグに保存食料をぎゅうぎゅうに詰めて背中に背負っている。

魔法薬なんかは入つてねえから用意しとけよ、という店主の助言

を受けて同じ並びにある魔法薬屋を覗く。

店主の老婆と相談して、『これさえあれば安心セットA』とやらを二セット買い込んだ。

この裏通りの店のネーミングセンスに四人は少し危機感を覚えたが、負けてくれた老婆の手前皆礼儀正しく突っ込みは我慢した。

「後は個人の荷物の範囲になるか。何か必要な物は？」

「そーだなあ、俺は念の為教会寄って帰るよ。離れてるからここで解散でいいか？」

「あ、ジエイ、私魔法衣店とかによって帰るから、付き合ってよ」

そういうとシャルはジエイの返事を聞かずにさっさと行きたい方向に歩き出す。

「あつ、おい待てよ！ ったく、じゃあ後でな！」

いつものことらしく、ジエイはため息を着くと前を歩く少女の背中を追いかけていった。

それをじつと見送ったアーシャは疑問に感じた事を隣の少年にぶつける。

「……教会って？」

「ん？ ああ、ジエイは光魔法が使えるからな。この大陸出身だし家系的にも光が強い」

へえ、とアーシエは感心するような声を上げた。

「だが、ジエイ自身は拳闘科だし、あまり熱心な教徒じゃない。術の行使には符や聖水の補助が要るレベルだ。それを貰いに行ったのだから」

なるほど、とアーシャは頷く。

この世界には六柱の神が存在するといわれている。

創世神話に基づく伝承だが、六柱の神とそれに属する六種の精霊は現代でも人々の信仰の対象だ。

六柱の神は皆人々に愛されているが、大陸によって主となる信仰の対象は異なっている。

この世界に神の数だけ存在する各大陸では、気候風土や多い精霊の違いなどからそれぞれ異なった神を愛しているのだ。

勿論、大陸間の交流はあるので現在では激しい対立があったりする訳ではなく、どの大陸でも大きな都市となれば必ず全ての神の神殿が建てられている。

しかし一つの大陸で主流の信仰が決まっているのは事実で、そしてその主流の信仰はそれぞれの大陸では聖教とされているのだ。学園があるこのレアラード大陸での信仰の対象は光の神だ。だからこの大陸では教会といえば光の神を祭る教会を示す。

「そっか、確かにジエイは綺麗な金髪だもんね」

「ああ」

神や精霊の加護はその髪や目に出る事がある。

このレアラード大陸では金色がかかった髪の色は多い。

その中でも特に、輝くような金の髪は光の加護を受けている証として尊ばれていた。

「教会はここに来てから行った事ないな」

「……行ってみるか？」

デイーンの提案にアーシャは首を振って答えた。

「うっん、興味ないからいい」

簡潔に断るとアーシャは周りを見回した。

「幾つか魔具を作りたいから材料見て帰るよ」

「判った。ではまた後で。今日は寮に来るのか？」

アーシャはちよつと考えてからまた首を振った。

「あの人に会ったら怖いからやめておく」

「……賢明だな。彼女達の班は明日出発だと聞いた。気が向いたら明日来るといい」

「うん、またね」

そう言っただけでアーシャは軽く手を振ると裏通りの奥の方へと歩いていった。

デイーンはその後姿をなんとなく眼で追う。

光教会に行くか、という質問に対する彼女の答えに安堵している自分が居る。

(何故あんな質問をしたのか……)

デイーンは来た道を引き返しながらぼんやりとその訳を考えていた。

8：それぞれの夜

パタン、と軽い音が小さな部屋に響いた。
次いでパタパタパタ、と歩く足音。

「よいしょっと」

どさ、と買って来た品物を入れた大きな袋を中央に置かれたテーブルに置き、アーシャはふう、とため息を吐いた。

背中と腰のバッグも外してテーブルに置くとぐるぐると肩を回す。

「あー、重かった」

独り言を言いながら軽く体をほぐした後、買い物の中から赤い実を取り出して噛り付く。

手の平ほどの大きさのリズの実には酸味が爽やかで、最近のアーシャのお気に入りの果物だ。

シャリシャリといい音を立てながらアーシャは片手で荷物の仕分けをした。

すぐ使う道具、材料、こっそり買った旅のおやつなどを分けていく。

旅用の荷物を袋に戻して床に置くと、今度は棚から作業に必要な道具をいくつも取り出す。

時間が無いから早く作業にかからなければいけない。明後日には出発なのだ。

前に調査してストックしてある特別なインク、刺繍針と絹糸、魔法陣を刺繍したお手製の敷き布、術を維持する要とする石 道具を用意し終わったアーシャはまずは今日買ったディパックを手に取った。

丈夫な帆布と皮とを組み合わせて作られた小ぶりの品だ。

その内布を引き出しじっくり検分する。

使い物になりそうだとアーシャは判断し、天井につるした照明の

丸い玉に手をかざして明るさを強くした。

この学園都市で広く普及している光球は魔力をほんの少し流すと光を灯し、微調整も可能だ。魔技科の研究室が開発したこの次世代の明かりは、今や生産が追いつかないほどで研究室は大いに潤っているらしい。

手元が明るくなったところでまたカバンを手に取り、針と、インクに浸して染めた糸とで内布に刺繍を施していく。

チクチクと規則正しく器用に縫い進みながら、昨日急に出来た仲間のことを考えた。

シャルとジェイの言い争いを見ていると、なんとなく暖かい気持ちになるのは何でだろう。

ぼんやりとアーシャはそんな事を考えた。

昔、育ての親が良く少女の頭を撫でながら言った言葉が胸によみがえる。

『アーシャは、こんな爺が育てたせいかな、どうも淡泊だのう』

『淡泊？』

『うむ、ちよつと子供らしい心の動きに欠ける、と言う事かの。勿論、それも個性じゃから悪くは無いんじゃないや？』

そう言いつつも彼は少し心配そうだった。

あの人が何を心配したのかはなんとなく判っていた。

くるくると表情の良く変わるあの二人のようなのが、恐らく正しい子供の姿なのだろう。

デインだけは彼女に少し似ている気がして、アーシャはなんとなく安堵を抱く。

そして胸の中で小さく呟いた。

けど、仕方ない。

だって、私には何も無いから。

何も持っていないから、何かを表現する事は上手く出来ない。

私に出来るのはせいぜいこの空っぽの器に入る物を詰め込むことだけ。

あの人が詰めてくれた暖かい物は、別れと共にどこかに落としてきてしまった。

勿体無い事をした、とそれだけが悔やまれる。

それとも、あれは落とすような物じゃないんだろうか？

まだ私のどこかに隠れていたりするだろうか？

そうならいい、と思う。

思うけれど。

一文字刺繍を終えたところで針を止め、傍らのペンを手に取った。細い銀のペン軸には水晶から削りだしたペン先がつけてある。

ペン先をインクに浸し、刺繍を終えた場所と対になるように表側に慎重に文字を書く。

美しい意匠の文字は遥か昔に使われていた古い古いもの。

ツ、と一文字書き終わると文字は淡い光を発してやがて消えていく。

だが見えなくなっただけで、ちゃんとそこにあるとアーシャにはわかつている。

そしてまた彼女は針を取る。

見える文字を綴り、見えない文字を綴る。

作業を繰り返しながら、仲間達について考える。

シャルの中には炎が灯っている。

だから彼女はあんなにも激しく、そして暖かい。

ジェイの中には光が見える。

だから彼はまっすぐで、あんなに明るい。

ディーンは闇を隠している。
けれどそれは悪い物じゃない。

シン、と静かで少しひんやりした手触りで、深く安らがせてくれる。

(いいなあ)

自分には何もないと考えた少女は、代わりに様々な知識を詰め込んでみたりもした。

けれど知識は固く乾いていて、少女の中で何ものにも変わらない。せいぜいこうして貧弱な己の為の道具を作り出す事ができるくらいだ。

何かになれたらいいのに、と少女は強く願う。

『アーシャ、
なりたいたと願ってはいけないよ。例え何があつても、お前は
なのだから』

それでも。

それでも、じいちゃん。

このまま、何ものでもないものでいるよりは心が満たされるかもしれないのに。

人を見て、暖かくて苦しい、と感じたのは初めてだった。

シユル、と小さな音がしてシャルの襟元の紐が解ける。

パサ、と軽い音と共に赤いローブを脱いでベッドに置いた。

魔法学部はこのローブが制服のようなもので、その下は自由とな

っているがシャルはいつも中も制服だった。

学園指定の女子の制服は、胸元から腰にかけての前面に白い切り替えが入った黒のワンピース。

ダブルになっていいる飾りボタンは金、ネクタイは学年ごとに色が違ったりボンタイだ。

どれも可愛いデザインで、制服を嫌う女生徒は少ない。

最近はこちらにカラフルなスパッツやオーバーニーソックスを合わせるのが女子の流行だが、シャルは膝丈の黒いソックスが好みだった。

着慣れたローブを脱ぐと急に寒く感じる。

このローブや制服ともしばしの別れだ。

軽く皺を叩いてハンガーに干し、赤いローブをクローゼットにしまう。

それから今日の買い物袋を一つ開けた。

中に入っているのはごく一般的な黒のローブだ。

簡単な防御の呪がかけてあるだけのもの、彼女の趣味じゃないけど仕方がない。

赤いローブはシャルの祖母が作ってくれた物だった。

基礎学部の五年生の彼女の誕生日に、火の魔法が強くなってきたシャルの為に、と祖母が誂えてくれたのだ。

火の魔力を高め、制御し、身を守る呪がかけてあって、万一自分の火が暴走したり、返されたりしても身を守れる。

シャルとは正反対に祖母は水や風の魔法が得意な人だったから、作ってくれたのは火の魔法と細工が得意な祖母の友人だった。

けれど大きめに作って丈上げてあったローブを、毎年背が伸びるシャルに合わせて丁寧に丈を下ろしてくれたのは祖母だ。

今年はシャルは自分で丈を下ろした。

だから縫い目は不ぞろいで、少し曲がっている。

『……貴女の好きな歌を歌って聞かせて頂戴な』

ずっと祖母と二人だった。

クローゼットの奥から細長い箱を探し出す。

祖母の残した物の一つで、シャルには合わなかったもの。

箱の中身は一メートルほどの長さの一振りの杖だった。優美な細い白木の柄に絡むように、銀で水流が細工してある。

水流は杖の上の方から流れ落ちるような意匠で、その源には泉のように丸い台座が形どられている。台座の上にはその泉から姿を現したかのような形で、青い青い楕円形の石が嵌っていた。

これは彼女の祖母が一番良く使っていた杖だ。

シャルの、火を思わせる赤い石が嵌った簡素な学生用杖とは比べ物にならない力を秘めている。

そして、自分とは正反対の性質を持つ杖だとわかっている。けれど今の自分には必要な物だ。

『自由に生きなさい。貴女の思うように』

見送った時も、二人だった。

杖をローブの脇に置くと、シャルはもう一つの買い物袋を開けた。

中からは様々なアミュレットが出てくる。

シャルは、今彼女が服の下に身に着けている腕輪やネックレスを一つ一つ外して小物入れにしまった。

こうした護符の類は普段からつけていると疲れる物が多いのだが、成長期にはそれが付加になって潜在的な魔力を、ほんの少しずつだが高上げる効果がある。

シャルは魔力を高める努力の一つとしてそれらを幾つも身に付けていた。

だが、今着けている物は森へは持っていけない。これらは火の力を高める効果がついているからだ。

森では火の力は鎮めなければならない。

代わりに用意したものは火を強く抑制するもの、土や光の魔力を上げる物、水や風に加護を願う物、などなどだ。

シャルは街の魔法道具屋で思いつく限りの物を買ってきてみた。安くは無かったけれど仕方ない。

アクセサリーの形をしていない物は、買ったばかりの黒いローブの裏側に縫い付けた。

加護を願いながら一つ一つ縫い付ける。

祖母が、そうしてくれていたように。

『……歌をありがとう。またね、シャルフィーナ』

義務として連絡した後再会した家族はまるで他人のように見えた。

(絶対に自由に生きてみせる)

それが、彼女の遺言だから。

他人なんかには口出しさせる気はないのだ。

祖母との約束だ。

譲れない明日のために、彼女は黙々と針を動かし続けた。

「よし、と」

きゅ、と袋の口を閉めるとジエイはそれをベッドの脇に置いた。

中身は今日教会で買って来た聖水や紙に書かれた護符などだ。明日荷物が届いたらこれを中に詰めればいい。着替えなどの必要な物も既に用意してある。

(明日の授業どうすっかなあ……)

準備だと言えば休めるが、別に行うことがある訳でもない。

朝飯の時にデイーンに相談するか、と考えてベッドに寝転がると、ガサ、と音がした。

体を起こすと置いてあった手紙が出てきた。今朝届いた物を放り投げたままにしてあった奴だ。

差出人は兄の内の一人だった。

はあ、とジエイはため息を吐いてから、ビリ、と乱暴に封を開けた。

中身に目を走らせると、お決まりの文句と近況が書いてある。後のほうの内容はいつもと同じ、他の家族からの物とも同じだった。

恐らくは両親がお前からも言い聞かせてくれと、兄弟全員に言っているのだろう。

(なんでほつといてくれないんだろうなあ)

そもそもジエイをずっと放って置いたのは家族の方なのだ。

ジエイには年の離れた三人の兄と一人の姉が存在している。

家としての格式を保つ為、細心の注意を払って育てられた優秀な上の二人の兄。

家族の余裕として生まれ伸び伸びと育てられ、別の分野で名を上げた三番目の兄。

末に待望の女の子として生まれ可愛がられた姉。

そこで終わる予定だった完璧な家族計画に、最後に追加されたジエイは生まれた時からどうしてか異分子だった。

四人も育てて疲れた、と言う両親には構われず、上の兄弟とは年が離れすぎている。

甘やかされたわがままな姉には苛められるばかりで気が合わなかった。

ジエイを育ててくれたのは、優しい乳母と祖父母だ。

祖父の友人の影響で拳法を始めた時も、この学園を選んだ時も、六歳の子供が発芽する時も、いつも彼らが側にいてくれた。

彼ら以外は見送りにも来なかった。

恨む気持ちはない。

必要な物は、祖父母や乳母が沢山くれたから。

彼らは今でも自分の帰る場所であってくれている。

ただ、放っておいて欲しいだけだ。

放っておいてくれたなら、この力を、守る為だけに使えるのに。

自分よりももっと必死でがんばっている彼女を守る為にだけ、がんばる事が出来るのに。

(……ほんと、うつとおしい)

ジエイの心を言い表すならその一言に尽きる。

けれど、何もかもを放り出し壊してしまうにはジエイは優しくなかった。

そんな優しさを切り捨てて、唯一つのために何もかも放り出せるほどまだ強くない。

できるのは、中途半端な自分が一番どうしようもないとため息を吐く事くらいだ。

(強くなりたいなあ……)

その為の道はまだまだ暗く長いようだった。

ペラ、と紙をめくる音が静かな部屋に落ちる。
暗くなった部屋を照らす灯りの下、静かに本を読む時間がデー
ンは好きだ。

しばらくはゆっくり本を読む事もできまい、とデーンは今日明
日は読みかけのものを片付けるつもりだった。
けれど、本の内容は余り頭に入ってこない。
ページを捲る手もいつもより遅い。

『教会には行つた事ないな』

『……行つてみるか？』

(……何故あんな事を言つたのだろう)

昼間考えたのと同じ疑問がまた頭に浮かぶ。
教会は嫌いだった。

特にこの大陸の聖教会は。

できれば一生近づきまいと決めている場所だ。

なのに、何故？

『うっん、興味ないからいい』

本当に興味のなさそうなああの声に何故あんなにも安堵したのか。

(もし、彼女が行く、と答えていたら？)

自分は教会に行つたのだろうか。

あの忌々しい場所に？

だが幾ら考えても答えは見えない。

パタン、と音を立ててデーンは本を閉じた。これ以上頭に入り
そうにないからだ。

諦めて窓の外を見ると、空には細い月が出ていた。

(……あれすらも隠れれば良いのに)

ディーンはそんな事を考えながらカーテンを閉めて灯りを消す。
それでも、部屋の中は真の闇にはならない。

(森の夜はどんなだろう)

そんな事に思いを馳せながらディーンはベッドに潜った。

眠りに落ちる前の一瞬に、少女の瞳の色が、あの森の緑が瞼の裏
ををよぎる。

今夜は、まだ見ぬ森の夜を夢に見るような気がした。

9：旅立ちの朝

二日後の朝。

待ち合わせ場所の乗り合い馬車停留所の前で、ディーンとジェイは少々焦っていた。

待ち合わせの時間を過ぎても少女二人が現れないのだ。辺りを見回しても、二人の他に誰もいない。

もうすぐ乗合馬車がやってくる時刻が近づいている。迎えに行きたいが行き違いになるのも怖いという残り時間だ。

そもそも二人とも、シャルはともかくアーシャの住む場所は知りもしないのだ。失敗した、とディーンは深く反省していた。

馬車が先に来たら待つてくれるよう御者と交渉するべきかとディーンが考えていると、あ、とジェイが声を上げるのが聞こえた。

そちらを見ると遠くからヨロヨロと近づいてくる黒いローブの人影がある。

「ジェイ」

「おっ」

心得たとばかりに返事をするジェイは荷物を置いて人影の方へ走り出す。

ヨロヨロ歩いてきたのは間違いなくシャルだ。恐らく荷物が重くてここまで来るのもやっとだったのだろう。

（先が思いやられる）

ディーンは爽やかな朝の空気に似つかわしくない深い深いため息を吐いた。

「おはよ」

不意に真後ろからかけられた声に体が一瞬緊張する。

だが、すぐにその緊張を解いた。この状況で声をかけて来るのは一人しか居ないのだ。

「……おはよう」

答えて振り返り、一昨日ぶりの少女の姿を視界に確かめる。

アーシャは昨日は結局寮には来なかったのだ。

ちゃんと食事を摂ったろうかと少し心配していた。

「ごめんね、寝坊した」

「いや、間に合ったならいい」

そう言っただけでアーシャを良く見ると、ディーンはなんとなく違和感を感じた。

少女はいつもと同じ余り長くない丈の白いフード付きマントを纏い、首元に着けた青い石の嵌った銀色のメダルで止めている。これはいい。

動きやすさを重視してなのか、腰までの深いスリットの入ったオレンジ色のチュニックワンピースと丈夫そうな茶色の七分丈のパンツ。

これもいいだろう。

ふくらはぎまでを安定して覆う長さの丈夫そうな皮のブーツに、腰に回したベルトにも小さなポケットが沢山着いたヒップバッグ。

いつも通りだ。

問題は、その背中中のバッグだった。

白いマントを下から持ち上げているそれは、間違いなく先日彼女が買っていた見かけもサイズも可愛いオレンジ色のデイバックだった。

「アルシエレイア」

「ん？ 何？」

「一昨日の買い物時に、各自備えは万全にするという事で合意したと考えていたのだが」

「うん、そうだね」

「君のバッグはどう考えても……」

「あー！ もうっ、疲れたあー！」

ディーンの質問は疲れきったシャルの叫び声でとぎれた。

「お、アーシャも来たな！ 間に合ってよかったぜ」

「うん、おはよー」

シャルの荷物を担いで歩いてきたジエイがおはよう、と声をかける。

「もーやだ！ 重いつたらないわよー！」

「お前なあ、寮からここまで十分だろ？ そのくらい持てなくてこの先どうすんだよ」

「しょうがないでしょ！？ 私はこんな重いもの持って歩いた事ないのよ！ 向こうではあんたが持つてくれればいいのよ！」

私はか弱いんだから！ と声を荒げるシャルは今日も朝から全開だ。

幾らなんでも二つは無理だ、とどうにかこうにか文句を言うジエイは完全に押されている。

それを黙殺したシャルはつん、と顔を背けた時にそれに気づいた。

「あー！ 何よアーシャ、そのバッグ！」

「これ？」

シャルに指差されたアーシャは首を傾げながら背中中のバッグを下ろした。

「そうよ！ それって一昨日買ってた小さいバッグじゃない。そんなんじゃ旅の荷物なんて全然入ってないじゃないのよ！ ずるいわよ！」

ディーンは自分もそれを指摘しようとしていた事を思い出したが、彼の言いたいことのあらかたはシャルが告げた後だった。

だが、シャルの文句にアーシャはふるふると首を振る。

「入ってるよ。寝袋も着替えも食料も全部ちゃんと入れてあるから大丈夫。」

「いや、どう考えても入る大きさじゃないだろ、それ……」

ジェイの指摘に、うーん、と首をひねったアーシヤはその場にしゃがみこんでバッグの口をあけた。

開いた口からは保存食の入った袋が見える。

アーシヤはごそごそとその中をしばらく漁ると一枚の敷き布を取り出しそれをパツと地面に広げた。

そしてそこにカバンの中身を並べだす。

どうやら、論より証拠という事らしい。

「これが保存食でしょ、後これが寝袋、下に敷くマット、薄い毛布、着替え、タオル、救急セットと薬、おやつと果物、あと赤熱石と光球と……」

「す、ストップ！」

「いやいやいやいや！」

「ちよつと待て」

「へ？ 何？」

皆からの突っ込みにアーシヤは手を止める。

「どうなってるんよそのカバン！」

「おかしいだろそれ！」

「何故そんな小さなカバンにそんなに物が入っている」

どう見てもおかしい。

明らかにそのカバンはそんなに物が入るサイズではないのだ。

目の前に並べられた荷物の中で言えば保存食とおやつを入れたらいっぱいという程度の大きさだ。

「だって、このカバンいっぱい入るように改造してあるもん」

これに時間かかって徹夜しちゃって、とアーシヤはふう、とため息を吐いた。

「んーと、中の空間を広げて、それを更に圧縮してあるような感じかなあ」

いっぱい入るでしょ、と言いながらアーシヤは三人の目の前で、

出した荷物を次々しまつていく。

小さなカバンにありえない量の荷物が次々入っていく様子は、驚きを通り越して少し不気味だ。

最後の敷き布をパン、と払って畳むとそれもきゅ、と詰め込む。パチ、とフタをする音で三人はようやく我に帰った。

「そ、そんな道具初めて聞いたわよ!？」

「俺も。そんな便利なもんがあるなんて……」

「自分で作ったのか？」

三人の質問にアーシャはこく、と頷く。

「古代には似たような道具はあつたらしいよ。これは私のアレンジしたオリジナルだけだ」

カバンの内側に施した刺繍で空間の拡張とその限度、圧縮率などを規定し、外側に見えないように施したペイントで広がった中身に耐えられるように耐久性を上昇させ中身との均衡を保つ術を施す。

さらに要所に取り付けた魔石に魔力を注ぎ、それらの術を発動、維持しているのだ、とアーシャは説明する。

全ての理解は難しかったが、どうやらアーシャが作った魔具の一種である事には間違いはないらしい、と三人は理解した。

だが理解したらしたで、不満が生まれてくる。

「……そんな便利なものがあるなら私にも教えてくれればよかったのに」

重い荷物にヨロヨロしながらここまで辿り着いたシャルは、筋違いだと理解しつつもつい恨めしい声を上げてしまう。

アーシャもそれは予想していたのだろう、ごめんね、とすまなそうに謝った。

「出発の日がもうちょっと遅かったら良かったんだけど、カバンの改造時間かかるんだ……失敗することもあるし」

アーシャを出発日三日前に誘った三人はもちろんそれに文句を言えるはずもない。

「あ、けど、代わりにこれ作ってきたから」

そう言っただけで、そのヒップバッグを漁ってアーシャが取り出したのは、幾つかの小さなバッジのようなものだった。

親指と人差し指で輪を作ったほどの大きさの緑とオレンジの二種類メダルで、それぞれ同色の小さな石がはめ込まれている。

メダルにはびっしりと文字のような模様のような物が書かれていた。

アーシャは緑とオレンジの一对のバッジを手にとるとシャルの荷物に近づき、オレンジ色のものをバックパックの底に、緑色のものを上のふたの部分に取り付けた。

さらに、ちょうど上下からバックパックをはさむ形に取り付けたそれに手を当て、

「開放と加護を」

と小さく呟いた。

するとその手の下から緑とオレンジの光が一瞬漏れる。

「うん。ね、シャル、持ってみて」

立ち上がってシャルを振り向くとアーシャは手にした荷物を差し出した。

「う、うん」

自分の荷物の重さを思い出したシャルは嫌そうな顔で両手を差し出す。

けれどそれを受け取った次の瞬間、その顔は驚きに染まった。

「わっ、何これ！？ 軽ーい！」

先ほどまであんなに彼女を苦しめた荷物は、まるでその重さが嘘だったかのように軽くなっていた。

「ちよつと二人とも、これ持ってみてよ！」

興奮したシャルに促されるままにジェイとディーンも交互に手を伸ばした。

「嘘だろ！？」

「……軽い、な」

特に先ほどシャルの代わりに荷物を運んだジェイの驚きは大きかった。

彼が持った時は確実に二十キロ近くはあったのだ。それが今ではどう考えても一、二キロくらいの重さにしか感じられない。

「アーシャ、一体何したの!？」

「うーんと……大地の加護を少なくして、風の加護をつけてあるの」「護符のようなものか? しかしそれだけで?」

「デインは緑とオレンジのバッジを丹念に観察してみる。」

「これは古代文字か? 死者を送る時の聖句に少し似ている気がするが……」

その言葉にアーシャは軽く目を見開いた。

「すごいね、デイン。ちよつと当たってる」

「デインは古代語の解読とか趣味なんだぜ」

「少し齧った程度だ。なんと書いてある?」

「んーと、簡単に訳すと、オレンジの方の表は、『母なる大地の女神よ、この存在をその深き御手より一時解き放ちたまえ』かな。死者を送る時に棺桶に彫られる、開放と加護を願う聖句と似てる単語を結構使ってるかもね。」

ちなみにその裏は逆。大地のささやかな加護を願う言葉が書いてあるよ」

アーシャの言葉にバッジを裏返してみると、なるほど裏にも幾つかの文字が彫りこまれている。

「緑の方はオレンジの方の裏のとはぼ一緒、風を加護を願う言葉が彫ってある。」

バランスが難しいんだよ、説明は続く。

「つまり、鳥が飛べるのは風に属しているからで、物や人が重いのは大地に属しているから。だから一時その大地の加護から解き放たれ、風に加護を願う事で、軽くしてもらおう。でも飛んでっちゃう程だと困るから、少しだけ大地に加護を願う言葉と、対にしておく」

だから、この魔具は単独ではなくセットで使うように、とアーシヤは皆に注意した。

「重さとしては二十分の一くらいになってると思うよ」

「へえ……すごい！　すごいわよアーシヤー！」

シャルは上機嫌で軽くなった自分の荷物を背負ってぐるりと回って辺りを歩き回る。

これなら幾ら歩いても重さは気にならない。

カバンといいこのバツジといい、眠り姫などと呼ばれている彼女は本当はちゃんと魔技科の生徒らしい事もしていたらしい。

「ほんつとに、貴女を仲間にして良かったわ！」

戦力にならなくてもいい、と思っていたのに現金な話だが感謝の気持ちは本当だ。

アーシヤも少し嬉しそうな顔を見せた。

「デーンとジェイもいる？　二人の分もあるよ」

そう言っただけを二対差し出されたが二人はしばし迷う。

二人には自分の荷物はさほど苦ではない重さだし、これをつけるとの鍛錬にもならない気がしたからだ。

「今はいい。馬車に乗るだけだから。だが、森に行ったら機敏な動きを求められることもあるだろうから、その時借して欲しい」

「俺もそうするよ。ありがとな！」

うん、と頷くとアーシヤはバツジをしまった。

ちょうどその時、通りの向こうからガラガラと馬車の走る音が聞こえた。

時計台を見上げると時間は八時四十分になろうとしている。

「……定期便の癖に十分の遅刻だな」

「まあ、二人も遅刻してきたしちょうどいいんじゃないの？」

「そうよ、固いこと言わない！　はい、アーシヤ、これ！」

そういつてパタパタと走ってきたシャルはアーシヤに何か紙包みを手渡した。

ほんのり暖かい包みを受け取って開くと、中からは薄く焼いたパンに野菜やハムなどの具を挟んだものが出てきた。
すぐ側で行われていた朝市の屋台のものらしい。

アーシャが不思議そうにシャルを見上げると彼女はにっこり笑って背中を指差した。

「これのお礼よ！ 徹夜して寝坊なら、どうせまた朝ごはん食べないでしょ？」

「……ありがとう」

暖かいパンとシャルの顔を交互に見ながらアーシャは呟いた。

こちらこそ、と笑うシャルの笑顔が眩しい。

「ほら、二人とも、乗るぞ」

ジェイからかけられた声に二人は馬車の方に歩き出した。

結局今朝の馬車に乗るのはこの四人だけらしい。

遠方に出かける学生以外の本格的な野外実習は来週からがほとんどだからだ。

幌と簡易座席の着いた荷台に四人を乗せると馬車はゆっくりと動き出した。

アーシャはガタゴトと揺られながら手元のパンに齧りついた。

暖かいパンはとても美味しかった。

(……こういうの、いいかもね)

今まで自分が楽をする為の道具ばかり作ってきたのに、それだけに感謝されてしまった。

誰かの、仲間の役に立ったという事実はなんだかすごく暖かかった。

その暖かさが、随分久しぶりに感じた 嬉しい という気持ちだと言つ事にアーシャが気がついたのは、馬車の振動の中で眠りに落ちる寸前のことだった。

10：灯火の歌

風の森 とそこに一番近いシーレ村までは徒歩で約二日かかる、と教科書には載っていた。

実際はそこまでの乗り合い馬車が三日に一回出っていて、それに乗ればシーレ村までは一日で済む。

学園都市は業者が仕入れなどで使う荷馬車以外の通行は余り多くない。

だが、野外実習が多く行われる時期だけは各方面に向けての乗合馬車が特別に用意され、定期的に運行されるのだ。

今ではほぼ全ての学生がそれぞれの目的地へ行くために乗り合い馬車を利用している。

たまに例外として、『彼女と同じ馬車なんて冗談じゃないですわ！』などというごく個人的な理由でわざわざ馬車を自前で用意して出かける人間が出てくることもあるが。

とりあえず今のところ何事もなく、一行を乗せた馬車はガタゴトと細い街道を北東へと進んでいた。

昼下がりの気持ちのいい風が馬車の中を吹き抜ける。

途中の村で休憩を取ってお腹がいっぱいになったアーシャはいつもの事ながらうつととしていた。

ふと、細い音が聞こえて意識が浮上する。

音はどうやら歌のようだ。なんとなく気を引かれてアーシャはゆるゆると目を覚ました。

聞こえていたのはシャルが口ずさむ歌だった。

ぺら、と本をめくりながら彼女はほんの小さな声で歌っている。

どうやらその隣で寝ているジェイやアーシャを気遣ってのことらし

い。

歌っているのは炎の精霊讃歌のようだった。

(……綺麗な声)

シャルの意外な才能にアーシャは感心する。

よく通る声を持つているとは思っていたが、歌の才能もあるらしい。

アーシャがぼんやりと彼女の方を見つめていると、視線に気づいたのかシャルが顔を上げた。

「あら、起きたの？もしかして起こしちゃった？」

うつん、とアーシャは身を起こし、首を振ってそれに答えた。

「綺麗な歌が聞こえたから、目が覚めただけ。シャル、歌上手いんだね」

「あはは、ありがとう。意外だった？」

「ちよつとだけ」

正直ねえ、とシャルは笑い、読んでいた本を閉じて傍らに置いた。「魔術書？」

「そうよ。初級から中級のおさらい。いつも火の魔法ばかり使ってたから念のためと思って。こつ見えても土や光はそれなりに使えるのよ」

そんなに忘れてなかったわ、と満足そうに言ってシャルは本をザツクにしまった。

彼女が意外にも努力家らしい事にアーシャは少し驚いていた。どちらかと言うとシャルは天才肌の人間かと思っていたのだ。

そんな事を考えていると、アーシャはふと気になっていたことがあったのを思い出した。

「シャル、今日はいつものローブじゃないんだね。杖も」

「ええ、いつものは火の力が強すぎるから置いてきたの。杖も同じ。このローブはただの市販品でたいしたもんじゃないけどね。杖は祖母の形見よ」

黒いローブってつままないわよね、と笑いながらシャルは脇に立

てかけてあった杖を手にとって愛しそうに撫でた。

水を象った杖はきらきらと光を反射して本当に水が零れているかのようだ。

「すごく、綺麗で強い杖だね」

「ありがとう。祖母の一番のお気に入りだったの。私には多分上手くは扱えないと思うんだけど……それでも少しくらいは助けになるかと思って。そういえばアーシャは杖持っていないの？」

「持っていないよ。実習で一度作った事はあるけど。そのうちちゃんとしたのを自分で作ろうと思ってるんだけど、まだどういうのにしようか決めてないから」

杖は魔力の収束や制御、増幅に大きな助けとなる為ほとんどの魔術師が持つものだが、魔法を使う時に必ずしも必要になる訳ではない。

魔法を使うのは魔具を作る時だけ、というのがほとんどの魔術師は杖を持たなかったり、それに代わる道具を使う事も多い。

だからアーシャがまだ杖を持っていないという事も不思議ではなかった。

「そっか、魔術師は自分で杖を作ることが多いって言うもんね。そういうのも楽しい悩みね」

「うん。シャルのおばあちゃんみたいなの、綺麗な杖にしようかな」
それがいいわ、とシャルは嬉しそうに笑った。

「ね、そういうえば、アーシャはそのバッグとか、私にくれたバッジとかそういうのを発表したりしないの？　すごく人気出るわよ、きつとー」

「んー……めんどくさいからいいよ、別に」

興味ない、という様子でアーシャは首を振る。

「でも売れればすごいお金になるじゃない。私も欲しいわよ？　ものすごく便利なもの」

「便利なように作ったんだけどさ、でもこれってちょっと危険だなんて思うし」

「危険？」

「うん、中に沢山の物を入れられるって事は、輸入とか輸出とかしたら国に届け出なきゃいけないような物をこっそり手荷物で運んでもわかんないでしょ？ 貴重な品物とか、武器とかさ」

そう言われてシャルは初めてその危険性に気がついた。

確かにこの技術はそういった使い方もできてしまう。

大量に武器などを運ぶ事も簡単なら、隠しておくことも簡単だ。

禁制の品などの流通も考えられないほど楽になるに違いない。

アーシャの懸念はもつともと言え、同時に彼女が自分の作る物についてちゃんと真剣に考えていることにシャルは少し驚いた。

自分が作る物が世に出る事よりも、それが世界に与える影響のほうを重視している。

出世には興味ない、と言っていた彼女はどうかやらシャルが思っていたよりもっと深く考えていたらしい。

「それに特許の手続きってうんざりするほどいっぱいあるし、書類もこーんなに分厚いんだよ」

(……単に面倒くさがりって言うだけじゃ、ないわよね、きつと) さも嫌そうに両手で厚みを表現する少女を見ながら、シャルは自分にそう言い聞かせた。

「ね、ところでき、さっき歌ってた歌、もう一回聞かせて欲しいんだけど……だめかな？」

「あら、いいわよ。アーシャはもう起きたし、ディーンはさっきから御者台で馬を見てるしね」

ジェイが起きるかどうかは気にしないらしい。

シャルは、んん、と軽く喉の調子を確認めると大きくはないが透き通った声で歌い始めた。

『 暖かき炎の兄上 』

我ら幼子の前にその御手を揺らしたまえ

その御手は暖かな灯火

その御手は暖炉の守り手

その御手は旅を癒す焚火

春の運び手 夏の踊り子 秋の灯火 冬の守り手

貴方の手はいつも我ら幼子の傍に

永久に我ら幼子の傍に 』

柔らかな余韻を残してシャルの歌は終わった。

目を閉じて聞いていたアーシャはパチパチと賞賛の拍手を送る。

「シャル、すごく上手だね」

「ありがとう。でも私なんかはまだまだよ。私の歌で精霊は動かないもの」

そういつてシャルは照れたように笑った。

「私の祖母は水の精霊歌の歌い手として、若い頃はすごく有名だったらしいの。年をとっても綺麗な声で、私にも良く聞かせてくれたわ」

「シャルもそんなのを目指してるの？」

「そうよ、私も精霊歌の歌い手になりたいの！ まあ、私は火属性

の方が向いているから、おばあちゃんとはまた違う方向になるけどね」

呪歌、というのは高度な詠唱魔法の一種だ。

歌に魔力と想いをこめ、精霊に、神にそれを捧げる。

その歌が真実、力あるものであれば普通の詠唱魔法などよりも遙かに大きな現象を動かすことができる。

本当に力を持つ歌い手は奇跡をも起こすと言われるほどだ。

「おばあちゃんはね、若い頃しょっちゅう旅をしていて、日照りの町に良く呼ばれたって言うていたわ。心を込めて精霊歌を歌って、それが届くと雨が降ったって。私は……そうね、春の遅い国を巡ったりするのもいいと思うのよね」

火の精霊歌は冬が厳しい土地で遅い春を請う時や、冷夏や長雨で作物が育たない時に人々の祈りと共に歌われる。

シャルに似合っているとアーシャも思う。

「だから、学校を出たらまずは世界を旅して、色んな歌を集めながら世界を回って、集めた歌を歌おうと思ってるの」

「歌を集めるの？」

そう、とシャルは頷いて遠くを見る目をした。

心はまだ見ぬ世界へと旅をしているかのような瞳だ。

「そうよ。呪歌や精霊歌でなくても、素敵な歌は沢山あるしね。そういうのを皆歌いたいわ」

「……いいね。その時は私にも聞かせてほしいな」

「もちろん!」

華やかな、美しい笑顔にアーシャは一瞬見とれる。

炎に愛された者はそこにいるだけで見る者の心を鼓舞するような不思議な存在感があつて、少し眩しい。

アーシャの耳に火の歌が聞こえる。

火の精霊が、シャルの心に湧いた夢と希望を称える勇壮な賛歌を歌っている。

例えそれが彼女の耳に届かなくても、精霊達は楽しげに歌う。

また歌い始めた少女の歌と、精霊の歌が絡まり風に運ばれていく。

アーシャはその二つの旋律に静かに耳を傾けていた。

11：森の入り口

馬車は予定通り夕方にシーレの村へと到着した。

御者に礼を告げて、四人はこわばった体をほぐしながら村の宿へと向う。

幸い部屋は無事に空いていたので二部屋頼み、荷物を置いてから一同は一階の食堂へ集合した。

席について間もなく出てきた夕食を食べながら四人は明日からの事を相談する。

「地図はさっき向かいの雑貨屋で買って来た。ほんの簡単なものだが」

そういうとディーンは小さめの地図を開いた。

携帯しやすいように小さく描かれた地図は本当に簡単なもので、村の位置とおおよその森とその向こうの山、あとは森を山から南東へ向って斜めに横切る細い川が描いてある。

目指す最深部は森の境界の入り口から見ると真西に当たる位置に描かれていた。

「へえ、目的地の最深部って入り口からほぼ真西なんだな。

コンパスさえあれば迷わなそうだなあ」

「そうね、まっすぐ行けそうね。それに先にあのいけ好かない女のチームが先に出発してるんでしょ？ まっすぐ行かなかつたら追いつけないわ」

そういうとシャルはカウンターにいた恰幅のいい店の女将に声をかけた。

「ねえ、女将さん！ 昨日ここに金髪の変な頭の女の一行が来なかった？」

女将はすぐにわかつたらしく、面白そうに笑い声を上げた。

「あははは、来た来た！ あんた達の友達かい？なんかやけに派手な馬車でやってきてびっくりしたもんさ。一晩泊って今朝出発した

けど、やれ部屋が狭いの汚いの飯がまずいの荷物が重いのと、そりやもうにぎやかだったよ」

「あんなの友達じゃないわよ！ これっぽっちも！」

おや、そうかい、と女将はまた豪快に笑う。

部屋が汚いだの飯がまずいだのと散々に言われたのに全く気にしている様子もない。

どうやら村人は我侭な学生が通り過ぎていくのには慣れている様子だった。

「ご飯、美味しいのに」

もくもくと食事を取っていたアーシャがぼそりと呟いた。

アーシャは地元の山菜をメインとしたこの店の料理をいたく気に入ったらしくさつきから話に加わる様子もなく食事をしていたが、それ故にコーネリアの失礼な言葉は見過ごせなかつたらしい。

「あはは、ありがとうね！ なんだって素材がいいからねえ。うちの材料は許可を貰って風の森で採集や狩りをしている村人から仕入れてんだよ。名物だから沢山食べてっておくれ！」

にこにこ笑いながらドン、とテーブルに追加の皿が置かれる。「サービスだよ、あんたちっちゃんいからね。もつと沢山食べないかね！」

そう言って置いていったのは、茹でた山菜とコクのある木の実を炒って砕いて和えたものだ。

同じ木の実をペースト状にすりつぶした物がソースとしてかかっている。

アーシャはさっそく自分の皿に取り分けて味見してみた。

ソースの素朴な甘さと山菜のほのかな苦味、木の実の食感が絶妙だった。

シンプルゆえに素材の味が良く出ている。

少女はこれも気に入ったようで、パクパクと口に運んではシャリシャリいい音を立てた。

アーシャは痩せているので小食なのかとディーンは思っていたが、意外に良く食べる事に驚かされた。

食生活が不規則なのが細い体の原因で、それ以外は健康なようだ。小さな口に野菜を頬張っている姿はなんとなく草食の小動物を連想させる。

ちゃんと量を食べれるなら、もう少し保存食を買い足していくか、とディーンはその姿を見ながら考えていた。

「で、結局やつぱりまっすぐ西へ行くんでしょっ？」

シャルが話を戻して地図を示した。

「まあ、そうだな……それが一番良いようだが」

「南西に行くのがいいと思うよ」

「え？」

不意にアーシャが口を開いた。

「まっすぐ西へ行くんじゃなくて、少し南西に向って、川に当たってから川沿いに西を目指す方がいいと思う」

「ええ？ でも、西にまっすぐ行った方が近いぜ？ 何でわざわざ遠回りすんだよ」

「そうよ。それに遠回りしたらコーネリアに追いつけないわよ！」
しかしアーシャはそれに首を振る。

「水場の確保が大事だから。私は水を集める魔法くらいは使えるけど、森ではいつも水場の少し近くで寝泊りするよ。何かあって水に困るかもしれないし、大きな水場が側にあれば 火 を使う時心配が減るもん」

火、とアーシャは強調して告げる。ディーンもそれに頷いた。

「確かに、一理あるな」

「でも！ そしたらあの女に先をこされちゃうわ！」
シャル、とジェイが彼女をたしなめる。

「コーネリアに追いついてどうすんだよ？ それが目的じゃないだろ？俺達は、課題をクリアしさえすればいいんだ。むしろ進みに差

が出た方が邪魔にならなくていいと思うぜ？」

う、とシャルは言葉に詰まった。

確かに彼女らと競争をしにここへ来たわけではないのだ。

この課題は勝ち負けがあるわけではない。

ただ、なんとなくコーネリアに先を越される事に釈然としないものを感じるだけだ。

「でも……」

「お嬢ちゃん。その子達の言う通りだよ」

話を聞いていたらしい女将がシャルに話しかけてきた。

「この森は川以外では水の確保が難しいんだよ。湧き水が無いこた無いが、どこも湿地のように地面に染み込みまってるから、綺麗な飲み水にするには手間もかかるしねえ。魔法が使えても万一つて事もあるから過信しない方がいいよ。」

風が強いせいかね、水場の近く以外は結構乾燥しているしね。それに森には道が無くて馬も入れないから沢山の水を運ぶ事も難しいのさ」

村の人の貴重な助言に四人は真剣に耳を傾けた。

「それに川沿いの方が、開けていない森の中よりも多少は歩きやすいはずだよ。方角も見失いにくいしね」

「川へはどのくらいで着きますか？」

ディーンの質問に女将は少し考えて答えた。

「まっすぐ西に進むと川に当たるまで二、三日かかるはずだよ。」

南西に下れば朝早くに出て夕方には川に着く。

そうしたらあとは川沿いに北西へと進んで三日ということかね。

川が細く二股に分かれているところに来たら、進路を西に変えるといい。そこからならあんた達の目的地までは一日程度だよ」

それなら四人が予定した日程にさほど変更があるわけではない。

目印まで教えてもらえて、これ以上望む事はないくらいだ。

「な、シャル？」

「……わかったわ。その通りにします。女将さん、どうもありがとう」
「なあに、いいんだよ。あたし達村のもんはあんたら学生が来るのを毎年楽しみにしてんのさ。辺鄙な村だからね。無事に帰ってきて、またここに泊って森での冒険を聞かせておくれ」
「はい！」

次の日、明け方ごろ起きた四人は女将が好意で出してくれた朝食を済ませると宿の前に集合していた。

多少眠そうな顔のメンバーが混じっているが、すぐに出発できそうだ。今日は天気も良くなりそうだった。

「あんた達、ほら、お弁当持っていきな！」

女将がそう言っただけでそれぞれに包みを渡してくれた。

まだほんのり暖かい。

「わあ、いいんですか？　ありがとうございます！」

「うちの料理を美味しいって言ってくれた子達にはサービスする事にしてるのさ！　これ食べてがんばっておいで！」

「はい、行ってきます！」

手を振る女将に見送られて四人は村の西の出口へと歩き出した。

そこに、森の結界への門があるのだ。

森は大きかった。

馬車で村に近づいてきた時もずっと遠くからそれと判る森の大きさに驚いていたが、近くで見ると森と言うより完全に山の入り口だ。小さな門の所には生徒が来ると言う連絡を受けていた門の管理人らしい村人が来ていて、ディーンが差し出した許可証を確かめるといってらっしゃい、と言って門を開けてくれた。

門を潜り抜けて最初に感じたのは風だった。ぶわ、と突然正面からやってきた風が四人の髪や服で遊び吹き抜けていく。

村の中では風はさほど強くなかった。

どうやらこの森を守る結界は、同時に側にある村を強すぎる風から守る役目も担っているらしい。

門を抜けてすぐのところには少しばかり広がる草地をサクサクと歩

く。
初夏の風は緑の匂いがして何とも清々しい。

「キヤアツ！」

気持ちのいい西風を楽しんで歩いていると突然シャルの悲鳴が響いた。

三人が慌ててそちらを見るとどうやら彼女は何かに躓いて転んだらしく、膝を抱えて座り込んでいる。

「いったあ……何？」

「大丈夫かよ、シャル。怪我は？」

「平気よ。けど、何かに引っかかって、って何よこれえっ!？」

怒声を上げたシャルの足元を見ると、そこには草を束ねて結んだ小さな輪が出来ている。

古典的な小さな罫だ。

草が勝手にこうなる訳は無いので当然誰かが故意に作っていった事になる。

しかしここを生活の場に行っている村人がそんな事をする理由は無く、となれば当然これを作った人物は非常に限られてくる。

「……あの女、やってくれるじゃないの！」

シャルは今にも火を吹きそうな勢いで立ち上がった。

「シャ、シャル、落ち着け、な？」

「落ち着いてるわよっ！ 行くわよ皆！ 負けてたまるもんですか！」

そう言ってシャルは誰よりも勢い良く歩き出した。

「キヤアッ！」

しかし十歩ほど進んだ所でまた罨に引っかかって転ぶ。

「おい、俺が先に歩くから！」

律儀なジエイはめげずに先を行こうとするシャルを追いかけて走っていった。

シャルの勢いに呆気に取られて見送ってしまった残る二人は思わず顔を見合わせる。

「……行こう」

先を思いやっているディーンのため息は深い。

「ちよつと待って」

アーシャはディーンを呼び止めるとその場にしゃがみこみ、ペチペチと手の平で地面を叩いて小さく一言告げた。

『在るべき姿へ』

ざわ、と草原が揺れた。

草が、風が吹き抜けたかのようにざあっとうねり、揺らめく。

普通なら、本当にただ風が吹き抜けたのだと思うだろう。

その草原のうねりが、少女の手元の地面から西へと動いていったのでなければ。

「うん」

そう言っただけでアーシャは立ち上がり、とことことディーンの隣までやってくる。

「草が可哀そうだから」

行く、と言われてディーンも我に帰って慌てて歩き出した。

足元を見れば、さっきシャルが引っかかったはずの草の結び目はもうどこにも見えなかった。

(これは……意外に戦力外どころじゃないかもしれないな)

ディーンは前に行く小さな背中と徐々に近くなる森を見ながらそんな事を思う。

前方の二人から、もう悲鳴は上がらなかつた。

12：人ならざるものの領域

森、というものをジェイが本当に歩いたのはこれが初めてだった。公園の林や学校の近くの野山なら良く散歩したことはある。

この森もあんなもんだろうとなんとなく思っていたのだ。

甘かった、とそれを痛感する。

道がない、ということがこんなにも歩き辛くて疲れるものだと思ってもみなかった。

地面は盛り上がった木の根や下草で覆われ、それを避けながら歩かないといけない。前を見渡しても重なりあつた木々が見えるだけで、太陽すらも隠れて方角も定かでない。

公園の林は道らしい道が無くてもやっぱり整備されていたし、学校の裏山もある程度の道がついていたのだ。

見渡せば遠くに必ず学園の大きな校舎が見えた。

森に入ってからずっと彼らを先導しているのはアーシャだった。

彼女はまるで別人のように生き活きと迷いなく森の中を歩いていく。

その少し後をディーナが、早くも足取りが鈍っているシャルが、そしてそのシャルの面倒を見ながらジェイが続いている。

木の根の上をひよいひよいと器用に跳ぶように歩くアーシャは時々立ち止まっては後ろを確認して、三人に歩きやすい道を選んでくれているようだった。

それでも道は険しい。

絶え間なく西から吹き付ける風も足が進まない原因だった。

進むのが困難なほど強くは無いが軽い抵抗を覚えるくらいの強さの風が体を打ち、ずっと続くと疲れも溜まる。

木々の間を通り抜けているはずなのに、どういう訳か風は余り勢いを弱めず、たまに弱くなる事はあるが切れ間は少なかつた。

ジェイはシャルが心配だった。

まだ歩き始めて三時間ほどだが、既にシャルの息はすっかり上がってしまっている。休憩を挟んでもそれは顕著だった。

魔法学部の間人はどうしたって体力がない者が多いが、シャルも例外ではない。

いくら荷物を軽くしてもらっても本人が重いのは（失礼な話だが）どうしようもない。

それでも彼女は持ち前の負けず嫌い精神を發揮して弱音一つ言わず黙々と歩いている。

（これが四日、いや、五日間。行きだけでもそれだけ続くのか。持つかなあ？）

いざと言う時は彼女を背負ってやろうと、出かける前は気軽に考えていた。

何時間も背負っても大丈夫なくらいの力をつけてであると自負していたのだ。

しかし、この足場の悪い森の中となると話は別になってくる。前に行く長身のデインが少しうらやましく感じた。

ジェイは同じ年の男子の平均くらいの身長はクリアしてるが、さほど背が高い方ではない。

出身大陸などによる人種の差異は身長や体格にも現れるので、学園の子供達の身長にもかなりの幅がある。レアラード大陸出身者としてのジェイはごくごく平均的な15歳男子の身長だ。

対してシャルは女子の中では高身長の種類に入る。はあ、とジェイはため息を吐いた。

もう少し背が高ければもう少しこの森も歩きやすいかもしれない。彼女を長く背負っても平気だったかもしれない。

そんなどうしようもないことを考えてしまう自分に、またため息が出る。

(ガキじゃないんだから……何くだらない無い物ねだりしてるんだか)

いずれ学園を出たら、外の世界に出ようとジェイは考えている。祖母のように世界を巡りたい、というシャルと一緒に行くのも苦労も多そうだがきつと楽しいと思う。

だが世界には未だ未開の土地が多くある。

この森なんて、地図があつて、道がある程度わかっているだけでももう人の用意した庭のようなものだ。

(今からこんなじゃ、全然話になんねえよな)

ぐつと齒を食いしぼるとジェイはまた一步踏み出した。

目の前に、シャルの残した小さな足跡が見える。

森に比べれば、自分の、人間の小ささを物語るような足跡だ。

ジェイは小さく笑つて、その隣に自分の足跡をそつと印した。

アーシャは木の根を踏み越えようとしていた足をピタリと止めた。何か変な感じがしたのだ。

たった今まで気持ちの良い森の中を機嫌よく歩いていた。

その森の空気が変わったような気がする。

清々しい森の空気に突然得体の知れない何かが混じつたような、

そんな感じがした。

そのままそこに立ち止まって耳を澄ませた。

さつきまで様々な音がしていた。

木々の葉ずれの音、鳥の声、虫の声、どこか遠くで何かの獣が鳴き交わす声。

だが今は。木々の葉ずれの音はする。

近いものと、遠いものと、そして

「どうした？」

立ち止まったアーシャに後ろからディーンが声をかけてくる。
しかしアーシャはそれに答える事ができなかった。
「伏せて　　!!!」

ドオツ、という音が体を打った、とアーシャは思った。
だがそれは音ではなかった。

振り向きかけた小さな体を打ったのは圧倒的な風だった。

「なっ!?!」

「ひゃあっ!」

ディーンは体制を崩しかけて咄嗟に傍の木に手を伸ばした。
次の瞬間小さな悲鳴と共にその脇を何かが通り過ぎていく。

その白い影が、風に飛ばされた小さな体だと認識するよりも早く、
ディーンは思わず片手を伸ばしていた。

掴んだ、と思った途端にその勢いに引きずられそうになり、木の
幹を掴む手にさらに必死で力を込める。

右手で掴んだ小さな体は風に強く引つ張られ、それを支える腕に
も、みし、と鈍い痛みが走った。

それでも、今この手を離せば軽い体はあっという間に風に攫われ
森の木に叩きつけられてしまうだろう。

ディーンは一瞬の逡巡の後、木の幹を掴んだ左腕はそのままに、
自分の体の向きを風に逆らわず横にひねった。

その動きで、風に煽られたアーシャの体は自然とディーンが掴ん
だ木と彼の陰へと飛ばされるように隠れる。それによって風の抵抗
が薄れた事で、ディーンはどうか彼女をもっと近くをを引き寄せ
てやる事が出来た。

服の背中を掴んでいた腕を細い体に回して抱えるようにして安定
させ、支えながら風から隠してやる。

アーシャも回された腕に必死で掴まり飛ばされないようにと踏ん張
る。

目を開けるのもやっとの風の中、どうにかうつすらと目を開けて

後ろを確認すると、彼らの少し後方にシャルに覆いかぶさるように地面に伏せて風に耐えるジェイの姿が見えた。それに安堵してディーンは目を閉じた。

風が吹いていたのは長い時間ではなかった。

けれど緊張を強いられた体には随分と長く感じられ、一分程してようやく空気の流れが変わった時には、背中はずっとりと冷たい汗で濡れていた。

「……収まったか？」

「うん、多分……」

アーシャも相当びっくりしたらしい。

呆然とした様子で森の奥を見つめている。

「ジェイ！ 大丈夫か？」

おう、という声が聞こえがさがさと後方の二人が起き上がる。

泥や葉っぱを払いながらジェイとシャルは慌てて近寄ってきた。

「な、なんなの今の！ 風、よね？」

「……だよな？」

四人は恐る恐る森の奥を覗くが、その向こうには変わらない森の景色があるだけだ。

森は風が吹く前と変わらない静けさを取り戻しつつある。

アーシャは、鳥の声が戻ってきた事に気がついた。

「……風が吹く前に、何かいたみたい」

「えっ!？」

「何かつて何!？」

「わかんないけど、何か、多分この森の生き物だと、思う。」

「だが、襲ってはこなかったぞ？ 確かにあの風はすごかったが、獣の姿は見えなかった」

ディーンの言葉にアーシャは少し考え込む。

だが、風が吹く前、森の音に耳を澄ませた時確かに何か羽音のよな音が一瞬聞こえたのだ。

「私にも、良くわからないけど……多分、偵察と、ちょっとした威嚇かなあ。森に入ってきた異物を見に来たんじゃないかと思うんだけど」

「い、異物？」

「まあ、確かに森にとって見れば我々は間違いなく異物ではあるな」
「でも、何がいうって言うの？ 学園の実習に使われるような場所に、そこまで危険な生き物はいないはずよ？」

「それはわかんないけど、でもそういう気がする、としか言えないよ」

アーシヤは困ったように肩をすくめた。

少女が感じたものを説明するのは難しい。

だがあの突風の前、確かに何か大きな気配を一瞬感じたのだ。

「……ちょっといいか？ 実は私も気になっていることがある」
不意にディーンが片手を上げて話をさえぎった。

「なんだよ、ディーン。気になることって？」

「この森の話だ。この森は教科書では貴重な有用植物や動物が多いから、結界を張って密猟などから保護しているということになっている」

「それがどうかした？」

「だが、それならもう少し規模の大きな採集場や、ここを利用した植物の育成などが行われていてもおかしくはない。道もついてない、全くの原生林のまま放っておく理由がわからないと気になっていた。

学園は私有地として保護している山林には多少の林道や管理小屋などを設け、監視や植物などの採集、栽培がやりやすいようにしているのが大半なはずだ」

「うーん、それだけ大事にしてるってのもあるんじゃないの？」

「それにしても、今のところこの森の植生はそれほど珍しいとも思えない。奥に行ってみなければ結論を出すのは早いけど、結界が必要なもつと貴重な森なら他にも沢山あるはずなんだ。」

それには確かに、と三人も頷いた。

南西に川があるといったような情報はわかっているのに、獣道らしい道すらも特に用意されていない。あるのは村の近くだけだった。と言うことは、採集や狩りを行う村人も森の奥深くまでは入らないのだ。

「私は最初はここに生徒に知らせていない遺跡でもあるのだろうかと考えていた。遺跡の盗掘を防ぐ為なら、結界にも理由ができる」遺跡、とアーシャが繰り返して呟いた。

「けど、それにしても結界が広すぎるよ。もし遺跡が奥にあったとしても、その入り口を隠せばいいだけだもん」

「そうだ。だから、おかしいんだ」

「……」

沈黙が流れる。

先ほどまでは美しく見えた森も、なんとなく不気味なものに思えてくる。

「でも、三年生から実習にいける場所よ？ そんなに危険な場所に行かせたりしないわよ！」

「そこまで危険じゃなくて、遺跡でもない。けどただの森でもない……」

この森には何かいる。それは確かだと思う。

そして、それは生徒達でもどうにか切り抜けられるものである必要がある。

アーシャは考え、その知識の中でかろうじて引つかかるものをつだけ見つけた。

「知恵ある、獣……とか？」

その言葉にディーンとシャルは思わず息を呑んだ。

「そんなの……まさか。お伽話でしょう？」

恐る恐る否定したシャルにディーンとアーシャは首を振った。

「創世記はお伽話じゃない。一つの歴史だ」

「中央大陸では最近目撃の話は聞かないから知らないかもだけど、他の大陸では時々あるらしいよ」

ジェイはその話が飲み込めず、不思議そうな顔をして三人に質問を投げた。

「なあ、創世記ってあれだろ？ 六人の神様が一つの世界を作って、やっぱり二つにかち割ったってやつだろ？ それと今のと、何の関係があるんだ？」

「……恐ろしく大雑把な覚え方だな」

「あんた、歴史とか古代史の授業はいつつも寝てたもんね」

「俺は過去を振り返らない男だ！」

威張って言うことじゃないわよ！ とシャルに殴られた頭をさすジェイにアーシャは簡単に説明してやった。

「つまり、創世記は要約すると、六人の神様が大きな大きな世界を作って、そこに長命な種と短命な種を作ったって話だよな。」

けれど、短命な方が長命な方を妬んで争いを起こしたから、神様は世界を二つに割っちゃった。

結果、短命の生き物は、長命種の世界にはいけなくなり、世界が二つになった影響で、大陸は六つに割れ、かつて豊かに栄えた沢山の国が割れた大地や海、そして世界に溢れた森に飲まれて消え、人口は激減した。これがおおよそ千年前だって言われてる」

ジェイは頷いた。さすがにこの話は知っている。

「この世界に残された短命種は、人間や、意志の薄い植物、動物達けど、その中に長命種の亜種に近いような知恵と力のある生き物もわずかだけいた、と言われてるんだよ。彼らは自分の意思でこちらに残ったとも。」

たとえば、風の大陸で王族と契約し、その移動に使われているっていう飛竜や、北の大陸にいるっていう人を乗せて飛べるほどの大鷲とか、そういう類なんだけど。

人に知られていなくても、知恵ある獣……つまり幻獣の目撃報告

は世界のあちこちで今も沢山あって、開拓が進まない原因の一つになってるんだって」

その説明に頷くと、ディーンは先を引き取って続けた。

「たった千年前、世界が割れた時、人の歴史は一度滅びたという。そこからまた人口が増えるまで数百年、増えたら場所が狭くなり、しかし未開の地の危険に怯えてわずかに残った平地を争って更に数百年。ようやく、不毛な争いに決着がついたのがわずか百年と少し前。」

やっと、人類は少しずつ新しく地図を描き始めている所だ。一番開拓が盛んなこの中央大陸だって人の領域はやっと半分程度だ。ただこの世界には何があってもおかしくはない」

うん、とアーシャも同意する。

「だからこそ、学園の建設や学ぶことの奨励なんだってね？ 何かの本で読んだよ。森や海に飲まれたかつての人の領域を取り戻す為、そこに踏み込めるような逞しく、賢い人間を育てるんだってさ」
「学園の理念か。ふむ……ということは、人ならざる者の領域に踏み込める人間を養う為に、そういった場所に生徒を放り込む、くらしい事はしてのける可能性もある。そう思わないか？」

ひやり、と爽やかな風が森を吹き抜ける。

辺りの空気の温度が急に下がったような気がした。

「と言うことは、この森を覆う結界は外からの侵入者を防ぐ為じゃなくて、中にいる何かを隠す為、出てこないようにする為に張られている可能性もあるってことだよな？」

アーシャが告げた言葉が、更に場の温度を下げる。

子供達は慌てて荷物を背負いなおすと急いでその場を離れる為足早に歩き始めた。

13：始まりと魔法

『世界がまだ生まれだてだった頃、そこには六柱の神々がいたと言う。』

世界はまだその形すらも曖昧で、そこには何の命も生まれていなかった。

光の神、闇の神、火の神、水の神、風の神、地の神は相談しそこに形ある世界と多くの命を生み出すことにした。

光と闇の神が手を取り合ってくると回ると昼と夜と世界の理が生まれ、地の神が足を踏み鳴らすとそこに大地が生まれた。

水の神が腕を振ると雨が降り、川や湖、海が大地を取り囲む。

火の神が大地に手を差し入れるとその奥に炎が宿り、地面は暖まり命を持った。

最後に風の神が息を吹きかけるとその吐息は緩やかに世界を巡り、命を運ぶ風へと変わった。

次に神々は世界に命を生み出すことにした。

まずはこの世界の理を維持する役目を持った精霊を。

次に世界に絶えず新しい力を吹き込む役目の強く賢い獣達を。

最後に、世界の全てを緩やかに循環させる役目の短く儂い命の生き物達を。

世界は穏やかに満たされた。

しかし世界に生みだされた命のうち、儂く弱い者達はやがて自らの弱さを憂い嘆き、不満を抱くようになった。

精霊や幻獣ら、長命で強い者達はそれを哀れに思い、自分達の持

つ様々な知識や力、技術を分け与えそれを力として使うよう導いた。それにより二つの命が作った文明は一時、幸せな時代を過ごした。けれど一旦収まったかに見えた火種は消えはしなかった。短命故に多くを求める彼らの欲望はとどまることを知らなかったからだ。

長命な者達はそれを悲しみ、そして対立が深まったある時ついに神々に訴えかけた。

『我等が父母たる神々よ、我等の願いをお聞き下さい。私達は短い命の末の子らを愛しているのです。このままでは我等はいつか取り返しのつかぬ争いを起こしましょう』

短命ゆえの彼らの輝きは、長命な者達には何よりも眩しく見える。その彼らと争うことを誰もが望まなかった。

神々はその嘆きをうけ七日七晩話し合い、ついに結論を出した。

『世界を二つに分ける事にしよう』

世界を分け、そこに住む者達を分け、新たな理を施しましょう、と。

神々は今一度力を出し合い世界へとその腕を伸ばした。

そして世界は二つに分かれた。

神々は新しい世界に名を与え、そこに新たな理を与え、それぞれに祝福を与えた。

一つは「エル・アウレ」

古き言葉で《幼き者》という意味を持つ、その名の通り儂く幼い命が生きる世界。

もう一つは「エル・ロレイン」

《見守る者》という意味を持つ、世界の流れを見守るかのごとく、長命で強く、賢い命が生きる世界。

こうして、二つの命は争いを回避し、彼らが再び会うこともなくなつた。

しかし一つの完成されたものを二つに分けた傷跡は大きく、二つの世界でそれぞれ多くの命が失われた。

世界を分けたときの衝撃で一つだった大陸は大きく砕けた。

エル・アウレに残された多くの国々が海や地割れの中に消え、精霊の導きを失つて境目を見失つた森に飲まれて行つた。

言葉を失つた獣達は森や山や海の奥深くへ姿を隠し、人間と呼ばれる多少の知恵を持つ者達は残された僅かな文明に縋つていくつもの国を築き、ささやかな平地を争つて長い長い戦乱の時代を迎えたという

「で、おしまい。

今では、精霊だけがその世界の壁を通り抜けて行き来し、二つの世界の理を静かに守り、こちらの世界に力を貸してくれるらだつて。

これが、私が語り聞かせてもらった創世記だよ」

語り終わるとアーシャはこく、と食後のお茶を飲んで喉を潤した。

木の枝に吊るされた光球が夜闇を切り取り、輪になって座る彼らを照らし出している。

あの後歩く速度を上げた一行は、昼の休憩もそこそこに歩き続け、日が傾き始めた頃には予定通り川のせせらぎを耳にすることが出来た。

日が落ちる前に川の音が聞こえるくらいの距離の巨木の陰に TENT を張り、保存食で作った簡単なおかゆのようなもので夕食を済ま

せた。

相変わらず風が吹いているが、ここなら木が風を大分さえぎってくれる。

周囲はシャルが、このくらいはやるとがんばって作った土の境界に守られていた。

夕食を済ませてしまつと森の中では何もすることもなく、日が落ちてまだそんなに時間も経っていない、と言う事で四人はのんびりと食後のお茶を飲んでいたので。

そして今は、昼間の話をもう一度、とジェイに請われてアーシャは自分が聞いた創世記を詳しく話してやったところだった。

「一番古いと言われているものに似ているな。」

聞き入っていたデイーンが感想を述べる。

「デイーンは詳しいんだ？」

「創世記には興味があつて昔調べた事がある」

「こいつさ、古文書の解読が趣味なんだつてさ。上級に上がってから去年くらいまで、色んな古文書と辞書開いてずっと解読しながら読んでたんだぜ。そりやもう鳥肌が立つくらい！」

いかにも嫌そうな顔でジェイが語る。

「あんな覚え方してるあんたより百倍ましよ」

「あはは、じゃあ何か面白い創世記あつた？」

「いや、まあ大筋は変わらないな。具体的に人間が嫉妬したのだとか、神々がこの世を去つたから世界はその形を保てなくなり二つになったのだとか、神々が二派に分かれて争つたから世界は二つになったとか、色々だ」

そっか、とアーシャは頷く。

創世記は時代や翻訳者の解釈によって内容が少しずつ異なっている。

近年は研究も随分進んでいるが、先史時代の遺跡から壁画などが

発見されると一つくらいは新しい解釈が出てくるものだ。

「アーシャの聞いたのは、途中で終わってるのね？ 戦乱の時代の終わりが語られていないわ」

「戦乱の終わりまで語られているのはごく現代のだと思うよ。それに、本当の意味での創世記は世界が割れた所まで。あとはおまけみたいなものなんだって」

「だが、最後の終わりが面白い。まるで人間の文明の外から語っているような終わりだな」

「物語ってそういうものなんじゃない？ 多分」

喋りながらアーシャは森の中で拾ってきたらしい蔦で何かを編んでいた。

器用に葉っぱを少し残して結び合わされた、細い腕輪のようなものを作っているらしかった。

ジェイはその器用な様を興味深そうに見学しながら、ずっと気になつていた問いを三人に投げかけた。

「なあ、それで昼間の話なんだけどさ、んーと、知恵ある獣とか言つてたっけ？」

「うん、もしかしたらって可能性だけだけどね」

「それさ、何でそれだったら俺達がクリアできないこともないってことになるんだ？ そんな創世記に出てくるような幻獣ってすっげえ強いんじゃないの？」

ジェイのもつともな疑問にアーシャは頷いた。

「多分、ものすごく強いと思うよ。四人じゃ全然勝てないんじゃないかな？」

「相手がもし本当に幻獣ならまず間違いなく全員死ぬだろうな」

「さらつと怖い事言つたの！」

ジェイの抗議を無視してディーンは静かに食後のお茶を飲む。

「うーん、でもこっちの残ったのは、いわば亜種だって言われてるから。向こうの世界の幻獣ほど強くないと思うよ。それに本当に相

手が知恵ある獣ならもしかすると言葉が通じたり、通じなくてもこちらが敵意を見せなければ許してもらえるはずなんだよ」

「つまり……敵かそうじゃないか見られるって事か？」

「うん、だからこっちがちゃんと相手の正体を見極めて、どう出るかかって言うのが大事な実習だつてことかなと思う。」

いきなり襲い掛かったりしなければ多分そんなに怖くないと思う」

「なるほどなあ、そういうことかあ」

「ジエイ、あんた何か見つけてもいきなり殴りかかったりするんじゃないわよ？」

シャルの言葉に何度も頷くジエイを見ながら、アーシャは脇に置いてあつたナイフを手に取つた。

編んでいた鳶の輪の余分な部分をちよん、と切り取る。

「アーシャ、さつきから何作つてるの？」

シャルの声にアーシャは出来上がった鳶の輪を腕に嵌めて見せた。やはり腕輪として使らしい。

「お守りだよ。森を静かに抜けられるように」

そう言つて腕輪を外し、出来上がったそれを両手でそつと包むと、一言唱える。

『此は森のもの』

ぼう、と小さな緑の光が手の間から漏れたかと思うと一瞬で消えた。

はい、とアーシャはそれをシャルに渡した。

「これが森の生き物の気配を纏わせてくれるから。でも何か危険な生き物に出会つたら、距離をとつて声は立てないでね」

シャルはまじまじとそれを見つめた。

「これも、アーシャの作る魔具？ さつきの言葉は古代言語みたいだつただけ……」

「ん、魔具っていうほどのもんでもなくて、ただのおまじない。森を通るよっていう宣言みたいなものだよ。まあ魔法に分類するなら、森の精霊魔法を掛けた魔具かな。精霊には古代語の方が伝わりやすいから、そっちを使うと効果が高いの」

古代語はその名の通り世界が割れる前に使われていたと言われる言語だ。

音や文字そのものが力を持っているが、発音も綴りも非常に難しい為混乱の時代にほとんどが消え去り、今やすっかり死語になってしまった。

現在では精霊魔法を使う時の最初の精霊への呼びかけにのみ使われたり、魔法陣や魔具に力ある文字として刻むくらいだ。それらも大抵は定型文が作られていて使いやすくされている。

喋ったりできるほどの知識を持つのはもはや考古学などの専門の研究者のみだ。

シャルはアーシャが喋ったことに驚きはしたが、彼女の知識は随分と豊富なようだからそういうこともあるのか、と素直に感心した。「森の精霊って、地の精霊の下位に属するんだっただかしら？ 授業でちょっとだけやった気がするわ」

学校の授業では主となる六大精霊のことについて学ぶだけで終わってしまうことが多い。

けれど実際は精霊は世界の無数のものに宿っているとされている。森の精霊もその一つだと授業では名前だけ出てきていた気がした。

「さっきのは、アーシャの故郷に伝わる魔法？」

アーシャは軽く首をひねった。

「まあ、そんな感じかなあ」

曖昧な言葉が少し気になったが、魔法へ興味が勝る。

「そういえば学校の授業では詠唱魔法も精霊魔法も、六大属性ばかりしか教えないわよね」

「多分威力が強いからだと思うよ。現象として理解しやすいし、どこでも使えるもん」

話しながらアーシャは側に用意してあった蔦からまた一本とると、同じ作業を始めた。どうやら同じ物を人数分作るつもりのようなのだ。

「森や山の精霊に呼びかける魔法は、その精霊の支配地域を出てしまつと効力がなくなっちゃうから。上位ならそういう限定は少なくなるしね」

少女達が話す内容に興味が湧いたらしいジェイが、控えめに二人に話しかける。

「……なあ、詠唱魔法と、精霊魔法ってどう違うわけ？」

「あんたねえ、基礎学部でもちゃんと習ったでしょ!？」

「興味なかったから忘れた」

無言でシャルの鉄拳が飛んだ。

ゴン! といい音が辺りに響く。

ジェイは体を鍛えてある為、どこも丈夫だがそれでもシャルの拳骨は痛いらしく頭を押さえてその場に蹲った。

アーシャはそれを面白く眺めながらどう言ったらジェイに判りやすいか少し考えて口を開いた。

「うーん、すごく簡単に説明すると、自分で現象を起こすか、精霊に起こしてもらつたか、って言う違いかな？」

極めて大雑把だが、ジェイにはその方が判りやすい。

頭をさすりながらジェイは真面目に話を聞いた。

「詠唱魔法は、言葉によつて起こす現象のイメージを明確にして、自分の魔力を導いてそのイメージ通りに発現させる。」

精霊魔法は、精霊に呼びかけて側に来てもらつて、現象を起こしてもらつ。その場合は本人の魔力は呼び出す時に少し使っただけで、

投げた願いやイメージを勝手に精霊が行ってくれる。大体そういう感じかな」

「それだと精霊魔法の方が楽そうに聞こえるけど、なんで詠唱魔法の方が学校では推奨されるんだ？」

「んー、多分素質と失敗が関係してるんだと思うよ。」

そう答える間にもう一本鳶の腕輪が出来たらしく、アーシャはまた鳶を一本拾う。

「そもそも精霊魔法は強い現象が起こせるけど、何よりも精霊に好かれる素質が必要だから誰でも簡単に使えるって訳じゃないしね。

シャルみたいに、好かれる人だったとしても火の精霊って言う限定が強い場合はそれ以外の精霊魔法は使えない」

「そうよ。だから私は精霊魔法は条件付四級なんだもの。行使できるのは火の精霊魔法に限定されるっていう条件なわけ」

「ふむ、んじゃ、失敗ってのは？」

「失敗って言うのは、失敗した時のリスクが精霊魔法の方が高いから。たとえばパニックに陥って、魔法を使える精神状態じゃなかったとしても、詠唱魔法ならせいぜい不発で終わるんだよ。でも、精霊魔法は最悪、魔法が暴走することがあるんだ」

暴走、と聞いてジエイは一瞬心配そうな顔をした。

「精霊との絆が強い人ほど危ない。」

本人の心の動揺を精霊が感じてしまつて、精霊がその人を守ろうと過剰反応したりするんだよ。そうなると、もう本人にもなかなか止められない。」

つまり、とディーンの静かな声が会話に加わった。

「本人の努力によって威力が変わる危険度と見返りが低い魔法と、本人の生まれ持った才能に限定される危険度と見返りの高い魔法と、いうわけだな」

「うん。その二つを比べたら、どっちを未熟な学生に優先して教えるかなんて決まってくるでしょ？」

そっか、とジェイは何度も頷いて納得した。

「じゃあさ、紋陣魔法とか、媒介魔法ってのはなんになるんだ？」

「それは、学者がそういう風に分類しただけで、原理的には一緒だよ」

そっついとアーシャは側にあつた棒を手に取り、地面に力リ力リと丸い輪と幾つかの古代文字を描き、小さく一言呟いた。

『在れ』

その言葉に反応して描かれた輪の上に丸い光が灯る。光はちらちらと何度か明滅を繰り返すとやがてふっと掻き消えた。

「……今のは？」

「簡単な魔法陣。これは、陣と文字で光の精霊に呼びかけてほんの一時光を灯してもらったの。つまりは、一種の精霊魔法だよ」

「なるほど。こういう形なら本人に素質が無くても何とかなるわけか」

うん、とアーシャは頷いた。ジェイやディーンの顔を見て理解しているかを確かめながら話を続ける。

「ただ、大きな力を行使しようとするともっともつと複雑な準備が必要になるけどね。媒介魔法も、石とか聖水とか、符とか、色んなものを媒介に自分の力を短い間だけうんと高めたり、普通なら呼びかけに答えない精霊の気を引いたりする方法の一つだよ。」

ちなみに詠唱魔法に分類されてる呪歌は言葉を使うからそっつちに入ってるけど、本来は精霊を動かすから精霊魔法に近いんじゃないかな？」

「分類など、所詮は学者が決めた曖昧なものということか」

「なるほどなあ。アーシャの説明は授業より全然わかりやすいな！」「ほんとね。この馬鹿にもわかるななんて！」

基礎学部時代ジェイの魔法学の追試のために散々協力してやった

のに、ちつとも芳しい成果が上がらなかつた記憶のあるシャルはにこやかにジェイの頬を引つ張った。

「けど、アーシャはそういうのどこで学んだの？ 授業、真面目に受けてないんでしょ？」

「こういうことは皆じいちゃんが教えてくれたんだよ」

「おじいさん？」

「うん、血は繋がってない育ての親。私、森でじいちゃんに拾われたから」

アーシャはこともなげに言うと三本目の輪を編み終わり、最後の一本に取り掛かった。

「どうやらこれは自分の分らしく、少し小さめの輪を作っていく。」

「じいちゃんが、私に色々な事教えてくれたんだ。」

言葉、生きる為の知恵、森の事。私みたいに小さくて弱い生き物は知識を詰めろって。知恵を使って生き延びろってさ」

「魔法もおじいさんが？」

「うん。お前は精霊に好かれる質があるから、精霊に助けてもらえって。お前みたいな小さいのは、助けてもらうことをためらっちゃイカンよってのが口癖だったよ。」

『助けを求めるのは恥ずかしいことじゃないんだから、意地を張るな。』

素直に助けを求めれば周りの精霊は喜んで答えてくれるから、お願いしなさい』ってさ。

魔法って言うより、助けの求め方を教えてもらったみたいなものだね。だから精霊魔法の方が使いやすいんだ」

そう言っつてアーシャは少し懐かしそうな顔をした。

「それで魔法科を選ばなかつたの？」

「うん。知識はもういいやと思って。知ってること勉強してもつまんないもん。」

アーシャは余った蔦を集めて小さな穴を掘り地面に埋めた。

こうしておけばこれらはいずれは土に還る。

「でも特定の精霊にすごく好かれてるって言う訳じゃないから、その時、その土地の精霊で呼びかけに答えてくれたのに助けてもらうことにしてるんだ」

精霊に好かれやすい性質だけれど、特別に一つの精霊に愛されている、と言うことが無ければ幾つかの種類の精霊に呼びかけることが出来る。

ただその代わりあまり大きな力は使えない、と言うのが定説だ。

けれどその土地で力を持っている精霊に手を貸してもらえというのは大きな強みでもあるだろう。

「そっかあ、それでここでは森の精霊なのね」

「うん、じいちゃんは『いわばご当地魔法じゃな!』って言ってた」
「……」

そのネーミングセンスはちょっとどうなのか、と三人は大きな疑問を感じる。

だが育ての親との思い出を楽しげに語る少女に突っ込む事は誰にも出来なかった。

「さ、出来た。これは二人の分ね」

そういつてアーシャは術をかけた蔦の輪をジェイとティーンに一つずつ渡した。

「森が出るまでは効力があるから、はずさないでね」

その言葉を団欒の終わりの合図に、それぞれのテントに入る事にした。

森の夜は静かに更けていく。

13：始まりと魔法（後書き）

魔法の話を書こうかどうしようか迷ったのですが書いてみました。割とどうでもいいのに長くなってしまったので反省。

いつか直すかもしれませんが。

14：森に落ちる影

朝、爽やかな風とすぐ傍を流れる川のせせらぎを聞きながら四人は歩き出した。

朝の森の空気は初夏だと言つのに冷たいほどで、眠たかった頭を十分に起こしてくれる。

川沿いの道は昨日よりは歩きやすく、また仲間に多少の遅れをとつても川に沿つてひたすら歩けばいいという安心感から皆の足取りは軽かった。

アーシヤは歩き出して早々に、偵察も兼ねて先に行くねと言って川原の岩をひよいひよいと登つて姿を消してしまった。

昼にはちょうどいい場所で待つてる、と言つていたので心配するのをやめた三人は歩くことに集中する。

彼女は森に慣れているようだったし、むしろ心配されるべきは彼女の方なのだろう。

キラキラと光を反射する川を左手に見ながら三人は黙々と歩く。今日も、いい天気だった。

アーシヤは随分と進んだ先の川原で水の中を覗き込んでいた。

川の幅はそんなに広くは無いが水量は豊かだ。

覗き込んだ水の中をひらひらと魚影が通り過ぎる。

(後で獲ろうかな……)

魚はアーシヤの好物だ。特に川の魚が食べなれている事もあって好きだった。

だがそれは後回しにして、先に周囲の探索をしようとした。

アーシャがざっと見た限りではこの森は鳥の数と種類が多い。

風がこれだけ強いのだ、滑空したり気流に乗って高く飛ぶ種類の鳥たちは住みやすいだろう。

地を走る生き物たちは数はそれなりにいるようだが余り多くの種類は見かけない。

風を避けて生活しているから見かけないのかもしれない。

植物も風媒花や、風に種を飛ばすものを良く見かけた。

珍しい物もいくつかあったが、結界を張る理由としてはどれも今ひとつ弱い。

(でもそうになると……)

余り当たってほしくない想像が当たってしまうな、と考えながらアーシャは先へと進む。

(でも、そっちはまだいいんだよね……)

今いる辺りは水辺だから水の気が風の気を少し分散させている。もう一つの心配事を思い浮かべながらアーシャは川原を離れ森へと分け入った。

少し離れた所に狭い草地を見つけて荷物を置く。

ぺた、と手足を広げてうつ伏せに草地に倒れこむと、アーシャは森に話しかけた。

(聞かせて)

そう心の中で頼むと、答えが返ってきた。

『

森の返事は曖昧なイメージとして少女の中を通り過ぎていく。

森というのは個にして全ても言うべき存在だ。

小さな花が寄り集まって出来た花房に似ている。

植物は横の繋がりがとても深い生き物だ。

だから、木々一本一本に話しかけることも出来るし、その繋がりが

を通して森と呼べる領域の全てを覚えてもらおう事も出来る。

それぞれの木や草花に宿る小さな精霊も、それらを統括する森そのものと言えるもつと大きな精霊も、個としての明確な意思よりも全体の合意で森の理を維持しているようだった。

全体で一つの大きな生き物のような森と繋がると、自分もまるで仲間に入れてもらえたような気がしてひどく安心できる。

寝転がったアーシャに向かって色々な音が聞こえてくる。

森の木々の交わす声や鳥の囀り、動物が歩く音、騒がしい草花のおしゃべり……。

森を構成する沢山のものの声がアーシャの耳ではない所に届く。だがどうやらここからでは川の向こうの事までは見えないようだった。

水が森を分断してしまっている。

それなら仕方ない、とそちらの方は諦めて、森を歩く無数の生き物達の小さな足音に混じっているはずの仲間の居場所を探る。

(あ、いた)

ここからはまだ遠い所を三人が歩いている。その速度から昼までにはこの辺りに着くだろう、と予想できた。

ふと、アーシャの意識の端に別の気配が引つかかった。

もつと北西の方に誰がいる。

(一、二、三……四、五……六人、かな?)

あの人のチームかな、と金髪の変な頭の少女を思い浮かべたが、名前が思い出せなかった。

彼らはまっすぐ西を目指すルートを選択したらしい。

だがそれにしても、こちらより一日早く出たはずなのに随分遅い。意識を集中すると、六人いる内の何人かがものすごく足が遅いとに気づく。

どうやら歩くのが苦手な人が混じっている為なかなか進まないらしかった。

(うーん、困ったな……このままじゃそのうちぶつかりそう)

シャルとあの変な人は仲が悪いのだ、とジェイが言っていたのをアーシャは思い出した。

お互いの速度を良く観察して考えてみると、ちょうど川を渡るか渡らないかという辺りでぶつかる可能性がある。

(これはやっぱり伝えないとまずいよね)

先に入った人達がいる事なんてアーシャは忘れ去っていたが、シャル達当人はそうとは限らない。

ばったり会ってやりあう事になったらとてもまずいだろう。

歩いている仲間に意識を戻すと、森が小さな警戒の声を投げつけてきた。

二番目を歩く人物のイメージが、薄っすらと赤く色付けされて伝わってくる。

森は彼女を警戒している。

彼女が自分たちに危険をもたらすのではないか、とアーシャに疑問を投げかけているのだ。

(大丈夫)

もしもの時は自分が止めるから安心するように、と伝えると森の警戒の声が弱くなった。

うん、とひとつ頷くとアーシャは森との同調を細くしてごろり、とその場に仰向けに転がった。

自分の近くに危険な生き物はいない事はついでに確かめておいたので、無防備に転がって森の空気を楽しむ。

淡い木漏れ日が気持ちいい。

(ちょっとだけならいいかな……)

腰からはずして投げてあったヒップバッグを枕にして、そばにあった木をぺちぺち叩いて話しかけた。

『皆が近づいて来たら起こして』

そう頼むと瞼を閉じる。
すぐにゆるゆると眠りが訪れる。
ここは騒がしいけれど、耳栓は必要ない。
この森は少し故郷の森に似ている。
良い夢が見れそうな気分だった。

シャルが体調を崩したのは森に入って三日目の夜だった。

コポ、と鍋が小さな音を立てた。
覗きこむと白い表面にいくつか小さな泡が浮かび上がっては消えてゆくのが見える。

(もう少しか)

ディーンは手にした木のスプーンで鍋をひと混ぜし、用意してあった香草を加えて火を弱めた。

鍋を暖めているのは赤熱石という丸い石だ。

照明に使う光球の別の種類で、魔力を込めることで熱を発する力を持っている。

地面に小さめの穴を掘って石を入れ、その上にごく背の低いかまどをしつらえる形で使う。

森には薪は沢山あるが、風があるため火が煽られては困るのでこれを使っている。

少々嵩張るが危なくないし、後始末が楽なところも利点の一つだ。

二日目の行程も問題なく進んだ一行は、また川から少し離れた場所で一泊し、三日目の朝を迎えた。

西に進むにつれて少しずつ強くなる風は気になったが歩くのに困るほどでもない。

全員がもう森を歩くのにも慣れ、その日も一日何事もなく歩き続けた。

しかし、三日目の野営場所を決めて足を止めた途端、シャルが頭が痛い、と行って動けなくなったのだ。

どうやら彼女はそれまでずっと具合が悪いのを我慢していたらしかった。

急いでテントを張り、シャルを寝かせた後、ジェイはずっとその側に付いている。

アーシャはここが良い、と野営の場所を指示したあと、シャルの代わりに結界を張るついでに周囲の確認をしてくると言っていないなくなってしまった。

そういう訳でディーンはと言えば、テントをもう一つ張った後こうして保存食を使った夕食作りをしていると言う訳なのだ。

携帯保存食はそのままでも食べられるとは言え、固く乾いていて美味い物ではない。

作っているのは保存食の固い雑穀のパンを水でふやかして煮なおし、野草や干し肉を入れて味付けしただけの簡素なおかゆのようなものだが、それでも疲れきった体には暖かいものが必要だ。

糖分も体に良い、と干した果物などもシャルに勧めてみたが、彼女はほとんど食べなかった。

(こっちは食べてもらわなければ困るな……)

そうでなければ明日からの進みに支障が出る。

体調が悪くても少しくらいは食べなくては更に悪化するだけだ。

栄養が取れるようチーズでも削って入れるか、とバッグの中を探る。

その時、ガサツと音がして近くの繁みが突然揺れた。

ディーンは思わず腰を少し浮かし剣に手をかける。だが、繁みの向こうから聞こえてきたのは聞きなれた声だった。

「ただいま」

少女の声と姿を確認してディーンは体の力を抜いた。

「ごめんね、遅くなって」

そう言つて繁みから姿を現したアーシャの手は泥だらけで、腰には何かの木の实や葉っぱを沢山引っ掛けて吊るしている。

帰還を知らせる声にジェイもテントから出てきた。

「うっわ、アーシャどうしたんだよその格好！ 泥だらけだぞ？」

「んー、この周りをぐるっと回つてあちこちに土を盛つたから汚れちゃった」

そこまで喋つたところでどうやらアーシャは夕食の匂いに気がついたらしい。いい匂い、と呟くと鍋にそつと近づいてきた。

「簡単な保存食を使った料理だな。手を洗つてきたら夕食にしよ
う」

「うん。あ、これちょっとここに置いて」

そう言つて腰につけた木の实や草をその場に置くとアーシャは川原の方へ走つていった。

その場に残された木の实の一つをジェイは手にとつて見る。

丸くて茶色い殻がいかにも固そうな、こぶし大くらいの大きな木の实だ。

「こんなの見たことないけど……食べるのかなあ？」

「採ってきたからには食べられるのではないか？」

「でもすっげ固そうだぜ？ほら」

プチ、と一つを枝から切り離すとジェイはそれを近くの木に投げつけた。

カン、と硬い音がして木の实が跳ね返ってくる。

跳ね返つたものを拾つてみたが、割れ目どころか傷一つ付いていない。

「……まあ、無意味なものをとってはこないだろう」
そう信じることにしてディーンは予定通りチーズを探しだすと、削って鍋に落としたく。

やがて手を洗って戻ってきたアーシャは料理をするディーンの側に座り込んだ。

ついでに洗って持ってきたらしい川原の石で採って来た葉っぱをすりつぶし始める。

「薬草か」

「うん、シャル頭痛いって言ってたから、とりあえず簡単な痛み止め作ろうと思って」

「痛み止めならこれさえあれば大丈夫とかなんとかいうセットに入ってたかったっけ？」

魔法薬屋で買ったあの微妙なネーミングのセットには確かそんな薬も入っていたはずだ、とジェイは告げたがアーシャは首を振った。
「さっきシャルに聞いてみたけど、もう使ったって。でもあんまり効かなかったって言ってたから」

アーシャは手際良く潰した葉っぱを器に移すと、今度は枝に付いた小さな木の実をむしり取り皮ごと荒くひき潰した。

「アルシエレイア、この実は……これは確かイエメスの実じゃないのか？　こんなものを使うのか？」

ディーンが手に取ったのは今アーシャが潰している実の残りだった。

細い枝には薄紫の皮に覆われた小指の先ほどの大きさの紡錘系の木の実がびっしりと実り、彼の手に揺られてシラシラと音を立てる。

魔法薬学の講義を受けているディーンは、実物を見るのは初めてだがその正体がわかった。

「なんだよ、その実がどうかしたのか？」

「この実は痛み止めなどではないはずだ。確か、魔力を抑制する効

果がある、と教科書には書いてあった。だから、制御が下手な人や自分で魔力制御が出来ない幼児の為の薄い飲み薬にするとか」

「そうだよ。当たり前」

軽く答えてアーシャは潰した木の実をばらばらと器に加える。

「制御って……じゃあ、シャルの具合は単なる疲れとか高山病とかの頭痛じゃないってことか？」

「多分、ね。この森はそんなに高いとこにないし。この薬が効いたらそれを確かめられるかなと思って。別にこの実は毒じゃないし、痛み止めの薬草もいれるから、ちよつとした試しだよ」

アーシャはそれ以上答えず、更に何種類かの薬草を混ぜるとそれを水で溶いて布で絞ってカスを捨てる。

残った液体を別の器に移すとそれを両手で捧げ持った。

『森の恵みに更なる力を』

ぽう、と器から緑の光が漏れた。

アーシャは器の中を確かめると、先ほどよりも一層色濃くなった緑色の液体をちよつと味見し、うん、と頷いた。

「ものすごくまずい」

「……」

「……」

シャル飲んでくれるかなあ？ と心配する声に、希望的観測を言うべきかあるいは改善を促すべきか。

結局男二人はそのまま黙ってそれを見守ることにした。

「美味しかったわ、ごちそうさま！」

起きてきたシャルは意外にも夕食を良く食べた。

アーシャが夕食の前にあの緑色の液体を無理やり一口飲ませた結

果、元気になったと同時に早急に口直しが必要となつたらしい。

理由はともあれ食欲があるのは良い事だったので男達は黙って彼女におかわりをついでやった。

役割が逆なような気がするのには既に諦めている。

そのアーシヤは食事を終えると、鍋が置いてあつたかまどの穴に先ほどの大きな方の木の実を放り込んで棒でつついている。

「あと一日歩いて方向を変えるんだつたわよね？」

「ああ、大体予定通りだ」

三人は地図を広げて頭を寄せると今はどの辺か、と話し始めた。

「アーシヤ、今俺達どの辺りかわかるか？」

「ん？ んー、と大体この辺かな」

この辺り、と思われる場所をアーシヤが指で示すが、そこから最深部まではやはりもう少し距離がある。

「ねえ、じゃああいつらは今どの辺？ 近いんでしょ？」

昨日のうちに変な頭の人のチームと接触する可能性がある事をアーシヤは皆に告げてあつた。

「あの人たちは多分この辺だと思う」

そう言つて指差したのはここからあまり遠くない森の中だ。

四人のいる川沿いよりまだ少し北西だが、急げば追いつきそうな距離だつた。

「ぶつ、おつそいわねえ！ 絶対コーネリアが我俣言つて遅らせてんのよ！」

シヤルは面白そうにくすくす笑う。

一日遅れで出発して、遠回りのルートを選んだこちらに追いつかれている事がおかしいらしい。

シヤルの笑い声を聞きながらアーシヤは穴の中の木の実をひよいと器用に転がして取り出した。

熱で炙られた木の実にはぱっくりと割れ目が出来ている。

ちゃんと割れているのを確かめてそれが持てるくらいに冷めたか

そつと触ってみてから手に取った。

木の実の割れ目に指を差し込んで力を込めると、パキンと固い音と共に中身が顔を出した。

中に詰まっていたのは濃いクリーム色の柔らかそうな実だった。

かすかに甘い香りが周囲に漂う。

「はい、甘くて元気が出るよ」

種が固いから気をつけて、と言ってアーシャは続けて何個かの木の実を割ると皆に配った。

三人は見た事のない木の実に少し怯えつつ、それでも礼儀正しく口に運んだ。

「……美味しい！ 甘いわ！」

中身は優しい甘さのクリーム菓子のような味だった。

ふわりと柔らかくていくつでも食べられそうだ。ほんのり暖かいのがまた美味しい。

「チエクっていうんだ。日持ちするし、栄養あるんだよ」

「あんな石みたいな殻の中にこんな実が入っているとは」

感心しながらディーンもパクパクと木の実を食べている。

どうやら彼は意外にも甘い物が好きらしい。

アーシャがおかわりを差し出すとディーンはためらわず受け取って礼を言った。

「俺にはちよつと甘いかなあ」

反対にジェイは少し食べ残していた。

それでも栄養があるから、というアーシャの言葉に負けてどうにか一個を食べきる。

アーシャは残ったチエクの実を一まとめにして大きな葉っぱで包むとシャルに差し出した。

「シャル、もう休んだ方がいいよ。さっきの薬、瓶に入れておくから明日の朝また飲んでね」

「ええええ！？ まだ飲むの！ あれを！？」

「残ったチエクの実あげるから、これ口直しにしたらいいよ」

木の実が美味しかったがあの薬を思い出すと全然喜べないらしい。だが、それが効いて楽になったのは事実なので反論もできない。シャルはしぶしぶとチエクの実を受け取り、うう、と悲痛な声を上げながらテントへと入っていった。

シャルがテントに入った後、残った三人は簡単に後片付けを済ませた。

洗い物などをきれいにしてから、アーシャがそつとテントを覗くとシャルはもう小さな寝息を立てていた。

静かな寝息にほつとしてその事を少年達にも告げる。

二人も安心したようだった。

「具合はよくなったようだが……さっきの薬が効いた、ということか？」

「ん、多分ね」

「あの薬が効くってのはどういうことなんだ？　なんかすごく悪いとかなのか？」

心配そうにするジェイをよそにアーシャはしばし考え込んだ。

「ねえ、ジェイ。シャルって昔からあの髪の色だった？」

「へ？　え、いや、そうだと思うけど」

「ほんとに？」

「ああ……いや、ちょっと待ってくれ」

んー、と額に手を当ててジェイは必死で考えた。シャルとジェイの付き合いは長い。彼は小さい頃のシャルの姿を頭の中で思い描いた。

学校に入った時には間違いなく今と同じ赤茶の髪だった。それからずっとあの色だ。

けどその前は、確かしばらく会えなくて

「あっ、違う！　学校に入る前は、確か今みたいな色じゃなかった
」！

「どんな色？」

「どんなって、もつと赤毛って感じで……それこそ、髪だけじゃなくて瞳ももつと鮮やかな赤だった気がする。でも、学校に上がった頃にはもう今の色だったはずだ」

そっか、と呟くとアーシャはまた考え込んでしまった。

「髪の色と、あの薬と何の関係が？」

「うん、それはまあ一応あるんだけど……シャルの頭痛はね、多分魔力の制御が上手くいってないからだと思っただよね。ここは、風が強すぎるから」

「風が強いのかなんか関係あんのか？」

アーシャは空を仰いで風を頬に受ける。

ここは木の陰になっているから今はあまり風を感じない。

「焚き火に風が吹き付けるとどうなるかな」

「そりゃ、こつ煽られて……」

「十分な燃料があるならますます燃え上がるだろうな。飛び散ったりもするだろう」

「だよね？」

「……」

「なるほど」

そこまで言って二人にもようやくアーシャが言いたいことが判った。

しかし、人の持つ魔力が風に影響を受けるものかと考えてディーンはその疑問を口にする。

「うん、普通はね、発現した魔法の炎が風に影響受けるってことはあっても、自身の持つ魔力が風に影響を受けるっていうのはないと思うよ」

「なら何故？」

「シャルは、その体に持つ魔力自体が、火の力を帯びすぎてるんだ。それだけ火の精霊に愛されてるんだよ。だから、その魔力がこの森

に満ちる風の気に煽られてシャルの制御を離れようとしている。

シャルは多分それを本能で感じていて、必死で抑えようとしているから頭痛とかそういう形で具合が悪くなったんだよ。きつと苦しいと思う」

「それで、魔力を抑制する薬、か」

「シャルみたいに魔力が強い人には気休めみたいなもんだけど、でも少しは違うから」

「なら、あの薬さえ我慢して飲めば大丈夫ってことか？」

ジェイの質問にアーシャはまた少し考え込む。けれどその顔は明るくなかった。

「多分、駄目だと思う。これから西へ進めば進むほど風の気は濃くなっていくはず。シャルはこのままだと奥までいけないかもしれないかもしれない」

「そんな……なんとかしてやれないのかよ？」

ジェイは自分の事のように心配そうな顔をしていた。

だがアーシャはその心配に安易には答えられない。

「明日、もう一日様子を見よう。それで駄目ならシャルにも話して考えるよ」

その夜も森に吹く風は止まなかった。

14：森に落ちる影（後書き）

ここ数日毎日キーボード叩いてばかりいたら手の筋が痛くなってきました……。

うーん、貧弱。

15：夜と森の瞳

夜半、静かな森の中をゆっくりと歩く足音がした。

川のせせらぎにまぎれたその小さな足音は水辺で止まる。

灯りも持たずに川原へと歩いてきたのは黒髪の少年だった。

ディーンはきよるきよると辺りを見回してから川原に降り、辺りに生えている草を眺めると、その中から背の高いすんなりとした草を一本摘んだ。

確かめるように見つめた後、辺りの草の中から同じものを探し出す。黙々と草を摘み始めた彼の背中に、不意に声が掛けられた。

「何してるの？」

突然どこかから降ってきた声にディーンはギクリとした。

内心の狼狽を抑え辺りを見回しても声の主の姿は見えない。

「上だよ」

また声がして慌てて上を見上げるとディーンの立つ川原に向かって斜めに張り出した木の枝に座る少女の姿があった。

暗闇の中にその姿を確認して、ディーンはホッと息を吐いた。

「……驚かせないでくれないか」

「ん、ごめん。」

木の枝に座っていたアーシャは素直に謝るとトン、と木の枝を蹴った。

じゃり、と軽い音を立てて地面へと降り立つ。

アーシャは迷いもなくディーンの前まで歩いてくると、彼が手に持っている草に目を留めた。

その視線に気づいたディーンは手に持った草を少女に示す。

「薬草を取っている」

「ふうん。シャルに？」

「それもあるが、ついでに自分の分もだな。実習の途中で採集した薬草などは、二割を学校へ提出する決まりになっているがあとは自由裁量が認められている」

そう言つてディーンはここに来るまでに摘み取つた他の数種類の薬草も見せた。

「私は武術学部での選択の他に魔法薬学をとっているからな。自分でも使えるし、余つた分は街の業者に売るんだ」

学園都市にはそういった買取業者がいくつか存在する。

生徒が実習で手に入れた薬草や鉱石、倒した生き物の毛皮などを良い値段で買い取ってくれるのだ。

それらは採集に出かけられない年齢の生徒達が自習の為に買つたり、時間のない研究生や教師の手にも渡つたりする。

奨学金を貰っている生徒や、外に出る機会が多い武術学部や魔法学部の生徒はそういったことで小遣い稼ぎをしている者も多いのだ。

「ディーンは奨学生？」

そんな風には見えないけど、とアーシャは更に聞いた。

いや、とディーンは首を振る。

「それを考えた事もあつたが母に止められた。奨学金はもつと環境に恵まれない子供のものだから、譲つてやれと」

「良いお母さんだね」

「……ああ」

実際ディーンは物腰も服装も庶民の雰囲気とは少し遠い。

だが彼は、貴族や上流階級だという意識も特に強くはないように見える。

裕福なのに小遣い稼ぎをする理由はどこにあるのか、アーシャはなんとなく気になった。

「ディーンがここに付いて来た理由はそれ？何か目的があるの？」

「まあ、そうだな。この森は有用植物が多いというから、合間を見て採集して帰るつもりだった。目的はたいしたことじゃない。早く

自立したいただけだ。その準備の資金を貯めている。」

問いに答える声は固く、苦々しいものを隠した口調にアーシャは少し驚く。

「もしかして、失礼だった？ ごめん」

「いや……まあ、かまわない」

本音を言えば聞かれたくない部類の質問だったが、それを少女にぶつけるほどディーンはもう幼くもない。

アーシャが嫌がらせなどではなく、単なる他人への興味から質問している事もわかっていた。

少し無遠慮な、幼い子供の好奇心だと思えば怒っても仕方ない。

「ごめんね」

そういうとアーシャは近くまで歩み寄り、ディーンの手の中の薬草を見つめた。

彼が今取っていたのは夜霧草という草だった。

精神を静める魔法薬の材料になる。

今の季節の夜明けに花開く草だが、夜中に採った蕾のままの方が薬効が高い。

ディーンがこんな時間に起きてきた理由はそれだろう。

「お詫びに手伝うよ」

アーシャはそう言っただけの袖を軽く引いて歩こうと誘った。

「いや、別に一人でも大丈夫だ」

謝られるほどのことはされていないし、同情されるのも困るディーンは断ろうとしたが、アーシャはなおも続けた。

「夜霧草ならあっちの方に群生してたよ。それに、そんな上の方だけとっても勿体無いし」

その言葉にディーンは軽く目を見開いた。

「薬効があるのは上の方だろう？ 根には何も無かったと思うが」

「うん。薬にするなら上の方だね。でも、その根を乾燥させると綺麗な青い色が出て、染色に使う染料が取れるんだよ。技巧学部の生

徒が使う道具屋に買い取ってもらおうといいよ」

そこまでは知らなかったディーンは軽く目を開いた。

「本当に詳しいな」

「森や山のことなら良く知ってるから」

行こう、と再び誘われるままに川原を歩くと、やがて少し開けた場所に出た。

辺りを見回すと確かに夜霧草が沢山生えている。

川原の土は柔らかく、草はぐつと引つ張ると簡単に抜け、球根のような根が付いて来た。

「夜霧草は綺麗な流水のある水辺にしか生えない草だけど、相性の良い場所なら生命力は強いんだよ。だから根っこごととっても大丈夫。けど、あんまり同じ場所でだけ取らないでね」

「わかった」

それからしばらく二人は黙ったまま草を抜いた。

そういえば何故彼女はこんな時間に寝ていないのか、とディーンはふと思に至る。

自分のことを差し置いているが、ディーンの睡眠時間はもともと余り長くない。

しかしアーシャの睡眠時間はかなり多かったはずだ。

「アルシエレイア、君は寝なくて平気なのか？」

今更な質問にアーシャは顔を上げて少し笑った。

「うん、別に平気。森の中は楽しいから、勿体無くて」

「だが、君の睡眠時間はかなり長かったらう？」

ああ、と少女は頷く。

ディーンが何を心配したのか気づいたのだろう。

「元々そんなに寝なくてもいいんだ。ただ退屈だから寝てるだけ。

あと、寝る子は育つってじいちゃんが昔言ってたから」

「……」

間違っではない。間違っではないが、何か違う気がする、と

ディーンは考え込んだ。

「……長く寝るよりも、規則正しく寝て、栄養のある食事をちゃんと取った方が育つと思うが」

「えっ、そうなの!？」

どうやら本気で驚いているらしい少女に、ディーンは技巧学部の栄養学の受講を勧めようかと本気で考えた。

「アルシエレイア、君の知識は少し偏っている気がする。もう少し日常生活を大切にされた方がいい」

「……うん、ありがとう」

少女は素直に頷いた。

その姿を見ながら、ふとディーンはここしばらく気になっていた事を思い出した。

これを聞くなら今しかない。

「そういえば、聞きたい事がある」

「ん？ 何？」

「最初の宿で、川沿いに行く道を勧めたのは、シャルがああなる事が判っていたからか？」

ピタ、と少女の手が止まった。

答えようかと迷っているその様が何よりの答えだ。

アーシヤはしばらく迷った後、うん、と小さく答えた。

「予想、だけだったけどね。相性が悪いつてのは教授も言ってたでしょ。私もそう思ったから。水の気が少しでも中和してくれるかと思ってる」

「なら、何故最初にそう言わない」

固い口調だった。

何故かいつもより口調がきつい、とアーシヤは感じて驚いて顔を上げた。

「だって、確信はなかったし……私もここは初めての森だもん」

「それでも、もっと早く忠告だけでもしたなら魔力を抑える魔具な

り薬なり、ちゃんと用意できたはずだ」

それは確かに一理ある。

あらかじめ忠告しておけば、こんな森の中で気休めの薬ではない
ちゃんとしたものも用意できたかもしれない。

「……でも、それはシャルの」

そこまで言ってアーシャは口ごもった。

これはシャルの抱えるものにおそらく関わってくる。

それを気安く告げていいのか迷ったのだ。

アーシャを除く三人が友人であることはちゃんとわかっている。

けれど、どの程度の友人なのか彼女には良くわからなかった。

「また、言わないまま済ませるのか」

風が向かい合う二人の間を吹きぬけた。

アーシャは困惑していた。デイーンは何かを怒っているように感
じる。

正確に言えば怒っているのは少し違う気もするけれど、いつも
と違う事以外は良くわからない。

彼が何を問題にしているのが少女にはわからないのだ。

(……森のことなら良くわかるのに)

沈黙が嫌でまた薬草を抜く手を動かしたが、手元が狂って違う草
を抜いてしまった。

ごめん、とアーシャは心の中で謝ってそれを元に戻す。

デイーンをそつと見ると、彼はまだ黙って立っていた。

こんな気まずい気持ちを感じたのは初めてで、もう帰ろうかと悩
む。

するとデイーンが口を開いた。

「……アルシエレイア、私には君の事がよくわからない。

その年で、驚くほどの知識を持っているかと思えば、自分の生活
には無頓着で。そのくせ時々、こちらの事をどこまでも見透かして

いるかのようだ」

そんなことはない、とアーシャは言おうとしたが上手く口は動かなかった。

「君には何が見えている？ 何を知っている？ それすらも私達に教えてはくれないのか？」

それは、とアーシャは口を開きかけてまた閉じた。

何を言えばいいのかわからない。

「私は君を仲間だと思ってはいる。だが、私は人の手の上で踊らせる事を好む趣味はない」

不快なのか、とアーシャは気づいた。

彼が怒っている訳ではないらしいことに少しほっとする。

確かにアーシャには、彼らに黙っていたことがあるのは間違いない。

けれどそれはそんな操るような意図があつた訳じゃなく、少女の個人的な理由がほとんどだ。

だが何をどう言ったら彼にわかってもらえるのか、デーンがどんな弁解を求めているのか、アーシャにはやはり考えても思いつかなかった。

考えた挙句、アーシャは結局素直にそれを告げた。

「何を、言ったらいいのかわからない……」

「そうだな、例えば、この森に入ってからずっと気になっている事がまだある。この森には危険な動物がいる、と聞いていた。だが森に入ってから私達が遭遇した動物といえは小さな物ばかりだ」

熊や狼などの危険な動物と出会う事を考えてデーンは剣を身から離れた事はないし、今も勿論持ってきている。

だが、それが杞憂に思えるほど、この森は平和だ。

平和すぎる。

「君が何かしているのか？」

アーシャは観念したように素直に頷いた。

「森に、大きな動物をこの付近に近づけないように頼んである。

本当は、この森には大きな森熊や、狼とか猪とかもいるよ。けど、森の生き物を食べる以外の目的で死なせるの嫌だったから……」

なるほど、とディーンは頷いた。不自然なほど順調すぎる道程の謎が一つ解けた。

だがディーンにはもう一つ、聞きたいことがあった。

「もうひとつ、君は、さつきから私がこの暗闇の中を灯りなしで歩いていても一言も何も言わない。君自身も灯りを持っていない。何故だ？」

アーシャは少し考えてからこれにも素直に答えた。

「それは、多分ディーンと同じ理由。闇の精霊の力を借りているから、暗くても物が見える」

ディーンはやはり、という顔をした。

今までディーンが知り合った中で、彼が灯りを持たずに闇の中を歩く所を見た者は必ずと断言しているほど全員がその理由を聞いてきた。

その理由を聞いて示す態度はそれぞれに違ったけれど、好意的な者は非常に少なかった。

ディーンにとってそれを問いただされなかった事も初めてなら、同じように闇の中を普通に歩く人間を見たのもアーシャが初めてだった。

「いつから私が、闇の精霊の加護を受けている事を知っていた？」

「だって、そんなに綺麗な真つ黒い髪と瞳だし。いつからって言うなら、初めて会った時からわかってたよ」

しかしその答えにディーンは首を振った。

「髪や瞳が精霊の色をしていても必ずしも彼らに愛されている者とは限らないはずだ。それは一つの目安に過ぎない。君だって、色は違うが精霊を味方につけている。」

ずっと気になっていたが……アルシエレイア、君には、精霊が見えているのか？」

アーシャはその問いに目を伏せた。

口を開きかけ、また閉じる。しばらく躊躇った後、少女はこくりと小さく頷いた。

「……見えるよ。声も聞こえるし話もできる。ディーンの側に闇の精霊がいるのも、最初から見えてた。ディーンの周りには、黒い光みたいな精霊が幾つもあるよ」

アーシャの言葉にディーンは頷いた。

アーシャが時々、人が見ていないだろう時にちらりと宙に視線を向けたり、何かと会話するかのようにつまづいてることが気になっていたので。

ディーンは自分の周りに闇の精霊がいる事をなんとなく知っている。

精霊の深い加護を受けたものは、呼び出さなくても傍に彼らがいれば気配で気づく者が多いと聞く。

見えなくても聞こえなくても、今も精霊は彼の傍にいる。

けれど、彼らの姿が見え、声が聞こえる人間の話にディーンは聞いたことがなかった。

世界が一つだった頃、精霊は我らの隣人だったと言う。

けれど世界が二つに分かれた時、精霊は人の目から姿を消した。

彼らはこちらの世界に渡って来ているが、本来はもう一つの世界に属している。

精霊が自ら姿を消しているのだとも、神の施した理だとも言われている。

存在する世界の位相がずれているから姿が見えないのだ、と言う学者もいた。

「やはり……そんな気がしていた。姿はともかく、少なくとも何か精霊と交信できるのだらうと。だからシャルの事もわかったんだな。それは昔からか？」

「……うん、多分ね。気が付いたら見えてたよ。じいちゃんは、精霊の多い場所で育ったからだらうって言った。けど、人に言うなっって言われたから。」

人は変わってる事を好まない性質だから、きっとあまり良い事はないから信用できる人以外には言うなっって」

「……私達は信用できなかったか」

アーシャは一瞬迷ったようだったが、正直に頷いた。

「信用、するほど知らないもの。言う必要もなかった」

それは確かにアーシャの言う通りだった。彼女は正しい。

まだ出会ってからたった一週間だ。

信用しろという方がおかしいに違いないのだ。

ディーンは目を伏せて少女の言葉を反芻する。

自分だって本当は彼女にこんなことを言う資格はない。

人を簡単に信じたりするのは愚かだ、と彼も常日頃から考えている。

それに精霊が見える特異な人間がいる、と知れ渡れば彼女はあっという間に自由を奪われ学園都市の研究者達の玩具にされかねない。アーシャが間違っているとは決して言えない。

だが何故こんなにも自分は苛々しているのか。

ディーンは目の前で小さな体を更に小さくすくめている少女を見下ろした。

闇の加護を濃く受けた瞳はこんな夜の森の中でもその姿をはっきりと映す。

(この瞳だ)

森の色のこの瞳が、似ているのだとディーンは気がついた。

「私……本当は人が、嫌い。よくわからないから、怖いよ」
鏡の中にディーンが見る、彼自身の瞳に。
だから、こんなにも。

「……そうか」

「それでも、皆はね、精霊が大丈夫だって言うからついていこうって思った。精霊を、信じたの。それだけ」

「精霊は、私達のことをなんと？」

「何も。彼らはそんなに何でも話したりしないよ。小さな精霊ならはつきりした意思も薄いもん。ただ、大丈夫だって言うだけ」

シャルのことはね、とアーシャは小さく呟いた。

「シャルは、火の精霊にとっても愛されてる。いつも側に沢山火の精霊がくっついてる。火の信仰が盛んだっていう南の大陸に行けば、それこそ《炎の愛し子》なんていって大事にされるくらい。でもそれなら、シャルの髪の色はおかしいんだよ」

「おかしい？」

「うん。多分本当ならシャルの髪の色はディーンみたいに、その精霊の色そのものに染まっても良いくらいのはずなの。シャルはそのくらいの加護を持つてるはず。でも、シャルは髪も瞳もそこまでの火の色じゃない」

ディーンはシャルの赤茶の髪と琥珀色の瞳を思い返す。

「理由は？」

「……多分、シャルが本当の意味で、火を受け入れてないから」

「そこまで言っただけなら困ったような顔をした。」

「でも私ができるのはそこまで。シャルの周りの火の精霊が、悲しそうにしてるのはわかるけど、その理由までは彼らは私に語ったりしない」

精霊が自分に語らないことが少し寂しい、とアーシャの瞳は告げていた。

それでも、それを聞き出さないことは彼女の誠意なのだろう。

アーシャが全てを語らないのは、シャルへの思いやりにも他ならぬ。
い。

ディーンは少女にそんな顔をさせた自分を心の中で恥じた。

「すまない」

「へ？」

ディーンが素直に謝罪するとアーシャはぽかんとした顔をした。
どうやら謝られるとは思っても見なかったらしい。

「言いたくないことを言わせてしまった」

ディーンは謝罪の意図がわかってアーシャは首を振って少し笑った。

「私こそ、ちゃんと言わなくてごめんね。何をどこまで言っているかわからなかったから……でも、明日もしシャルが具合が悪かったら今度はちゃんと言おうよ。シャルと、話してみる」

「そうしてくれると助かる」

うん、と頷いてアーシャは空を見上げた。

木々の間から月が顔を出している。

ここへ来る前より太くなった月を見ながらアーシャは小さな声で呟いた。

「怖いからさ……知れば、怖くなくなるかなと思った。でも、怖いから、言わなかった」

人が怖いから、知ろうとした。

けれど人が怖いから、自分のことを言えない。

「ずるいのは、私。だから、謝らなくていいよ」

そういつてアーシャは少し笑う。

その瞳は、行く場所がないからここにいて、そんな陰を宿しているように見える。

彼女の瞳には、何が見えて何が聞こえているのか。

自分の周りにいるという闇の精霊と何か話したりしたのだろうか。

そんな事を気にしていたディーンは、いつの間にか手の中が薬草
じゃない草でいっぱいになっている事に、アーシャに怒られるまで
気が付かなかつた。

16：チームBの事情

「清らなる水よ 我が前に集いて 敵を穿つ槍となれ！」

ドン、と鈍い音が森に響いた。

コーネリアの放った無数の氷柱が熊の足を止め、更に何本かがその毛皮に突き刺さる。

グオウ、と痛みに大きく吠えた熊はその原因たる少女に襲い掛かるべくそちらに向き直る。

しかしすぐさま眼前にもう一人の少女が立ちふさがってその鼻面を蹴り飛ばした。威力は大きくなかったが、熊はその衝撃に思わず身を引き、嫌がるように向きを変え逃亡を図る。

だがその行動は果たせなかった。

熊の足元にはしっかりと縄が絡みつき、それに阻まれその場から離れる事ができないのだ。暴れても解けることの無い縄は近くの木や地面に打ち込まれた杭に固く結ばれ、熊の逃亡はただ縄の範囲でぐるりと向きを変えるだけで終わってしまった。

「モース、そつち！」

「まかせろ！」

ブン、と風を切る音と共に振りかぶられた大剣は無常にもその厚い毛皮を切り裂いた。

熊の悲痛な叫びが森に響き渡った。

「ふう、終わったな」

熊に止めを刺した大柄な青年はやれやれ、と肩をすくめるとその毛皮で剣に付いた血糊をぬぐった。

「まあったく、これで何匹目？ ほんっと、冗談じゃないわ！」

側にいた背の高い少女はポニーテールの頭を振り、苛立たしいという様子を隠しもせずに、動かなくなつた熊の体を軽く蹴つた。

「ア、アロナ、やめなよ。可哀想だよ……」

「可哀想じゃないわよエナ！ この森に入ってから熊だの狼だのにしょっちゅう会つてばかりじゃない！ もういい加減見飽きたつてのよ！」

エナ、と呼ばれた少女はその剣幕にビクリと体を縮めた。

肩の長さで切りそろえた真っ直ぐな茶色の髪がその動きにあわせて揺れる。

髪と同じ色の瞳には友人の怒りに対する怯えが浮かんでいた。

「女の手ステリーはおっかないね」

「まっただ」

それを遠巻きに見ていた二人の少年がぼそり、と感想を漏らす。

しかしそれはしつかりと本人の耳に届いたらしい。

アロナ、と呼ばれた少女はギロリとそちらを睨むと標的を変えて怒鳴り散らした。

「何か言つたその役立たず！ コード！ ライ！ あんた達戦闘でたいしたこととして無いくせに無駄飯食らつてんじゃないわよ！」

「なっ、なんだとこの大女！ 何だかんだ言つてお前とモースが一番飯食つてんじゃないやねえか！」

「そうだそうだ！ 大体役立たずつてな、その熊が動けなかつたのだつて俺のおかげだろ！」

役立たず呼ばわりされて黙っていられなかつた二人の少年も負けじと言い返した。気が立っているのはお互い様という訳らしい。

「いい加減になさい、見苦しい！」

甲高い声はその醜い言い争いを切り裂いた。

ピタリ、と三人の怒声は止み、誰もが気まずそうに目をそらす。

「まったく、もうすぐ最深部だと言つのにこんな所でくだらないことで言い争っている暇はないんですよ！？」

そう言つてコーネリアは戦闘で乱れた髪を丁寧に直すと側でビクしている少女に視線をやった。

「エナ、お願いしますわ」

「う、うん……。は、母なる大地よ、役目終えし命をその御手に今再び抱きたまえ」

少女の唱えた呪文に答えてばこ、と地面が動く。

熊の亡骸の下の地面がぼこぼこ盛り上がり、あるいはへこみ、じわじわとその巨体を飲み込んでいく。

五人が見ている前であつたという間にその体は地に飲まれて見えなくなつてしまつた。

「ここにいと残つた血の匂いでまた獣が来てしまいますわ」

コーネリアのその言葉を合図に五人はそれぞれ放り投げてあつた自分の荷物を背負いなおすと場所を移動し始めた。

コーネリアのチーム六人がこの森に入つてからもう五日になる。まっすぐ西に行けば早ければ四日ほどで最深部につく、と村では言われたのにもうその予定をとうに過ぎていく。

「まったく、ほんとに野蛮な動物ばかり！ 嫌な森ですわ」

コーネリアは歩きながら大層憤慨していた。彼女の予定ではシャルフィーナのチームよりも早く課題をクリアして、帰りにすれ違いざまにせいぜい笑つてやろうと思つていたのだ。

その為に一日早く出発し、彼女より早く森に入ったと言つのに。

しかし結局は行く手を深い森と度々襲つてくる獣に阻まれ、一向に目的地に辿りつけないでいる。

同じ魔法学科から連れてきたひよろりと細長い背丈の男子学生のコードに命じ、彼の得意の風の探索魔法で探させたシャルフィーナのチームはもう自分達のすぐ後ろまで来ているらしいというのだ。

一日目の道中で突然の突風に見舞われお気に入りのリボンがなく

したのを始まりに、この実習の旅は全く上手く言っているとは言い難い。

おまけに、もう一つ彼女の予定を壊す出来事が起こりつつある。

「なあ、俺腹減った」

「またなのモース！ まだ昼にも早いじゃないのよ！」

武術学部では少数派の女子学生、アロナが彼を怒鳴りつけた。

腹が減った、と訴えたのは武術学部剣術科のモースだった。

彼は大人の中でもはや巨漢に入るくらいの体つきだが、これでも立派に同じ学年の生徒だ。

その体の示す通りモースは良く食べる。

勿論、体格が体格だけに誰よりも大きいバックパックを背負っているのだが、その中にたっぷり入れた食料が先行き不安になるほど食べるのだ。

つまり、大変に燃費の悪い体の持ち主だった。

「いい加減にしるよ、モース！ お前のおかげでこっちまで割り食ってたんだぜ？」

小柄ながら同じ武術学部の男子生徒、ライが彼を諷める。

並んで歩くとまるで大人と子供のようにだった。

「そうよ！ 私まで大喰らい呼ばわりされて、冗談じゃないわよ！」

「おやめなさい！ 食べ物のことと争うなんて見苦しいですわよ！」

コーネリアが怒鳴るも彼らの間のぎすぎすした空気は消えそうに無かった。

と、そこでコーネリアの同級生、魔法学部のエナが小さな声を上げた。

「でも、コーネリア……食料、このままじゃ足りないよう。行きは良いけど、どう考えても帰りの分が……」

コーネリアは苦々しい顔をする。

全く、予想外だ。彼女の予定が予想外に崩れつつある。

コーネリア率いるチーム・無謀Bの旅の予定を壊しつつある事態。

それは、じわじわと迫り来る食糧難に他ならなかった。

(やっぱりメンバーの選出を間違えたかしら)

コーネリアはそんな今更なことを胸の奥で思う。

コーネリアのチームは魔法学部から彼女とエナとコード、武術学部からモース、アロナ、ライの合わせて六人。

エナは同級生だし実家同士が付き合いがあるので自ら誘って仲間にしたのだ。

しかしエナの実家がコーネリアの実家に頭が上がらない為、誘われた時点で彼女に選択肢は無かったという事実をコーネリアは知る由もない。知っても恐らくは気にしないだろうが。

コードも同じクラスで、彼はコーネリアの大変良く取れているノット目当てで取引を受けた。それからわかるとおり大した成績ではないが、いないよりはましだと考えたのだ。

気の弱いエナと二人では実習に不安が残る。

武術学部の三人は、エナと親友のアロナが彼女を見かねて手伝いを申し出、その伝で集めた仲間達だった。

その選出はアロナに任せ、自分が関わらなかった事をコーネリアは激しく後悔していた。

(大きい体は荷物が沢山運べて便利だと思いましたが、まさかあんなに食べるとは思いませんでしたわ)

コーネリアは現在の食糧危機は全てモースの食べ過ぎによるものだと考えている。

自分達魔法学部生が貧弱すぎて、彼らの半分以下の荷物しか持っていない(しかもそれでも歩きはものすごく遅いのだ)という事や、自分が粗末な物は口に合わないと言い張って、日持ちのあまりしない物や嵩張る物を食料として選んだと言う事実は完全に無視されていた。

後残された食料はおよそ三、四日分。これでは奥まで行ってもその後森を出ることが出来ない。

森では木の実や山菜が取れると村の人間は言っていたが、彼らは薬草にはある程度詳しくても、食べられる物となると知識に乏しい。結局今は、ここで引き返すかどうかのぎりぎりの距離にいるという訳なのだ。

ここで引き返せば勿論課題は失敗となってしまふ。

ここまでの旅の経緯をレポートにして提出すれば零点は免れるが評価が低いのは間違いない。

旅の目的地や荷物の選び方などの不備も指摘されるだろう。

そうなればもはやシャルフィーナを笑うどころではなくなってしまう。

それだけはなんとしても避けねばならない、とコーネリアは心を決めた。

（あのお二人に嫌われるのは痛いですが……この際仕方ありませんわ）

コーネリアは立ち止まって仲間達に向き直った。

「こうなったら仕方ありませんわね、リタイアを避ける手段はもう一つだけです」

仲間達の視線が彼女に集う。

（お二人には作戦の立案者は他の人間で逆らえなかったと後で訴えることにしましょう）

腹の中で黒い笑顔を浮かべながら、コーネリアは切なそうな表情で仲間告げた。

「もう一つのチームに、ちょっとご協力いただきましょう。ね？」

16：チームBの事情（後書き）

今回はちょっと短めです。

サブタイトルにいつも悩んでしまう……。……。

17：子供達の影

「いくよー」

「おう！」

ジェイの掛け声と共にバン、と何かを強く叩くような音が周囲に響く。

激しい音は波を伴って離れた所にいるジェイの足元まで届いた。水中にその身を半分隠した大きな岩がみし、と悲鳴を上げる。

直後、アーシャが乗っている川の中の大岩の下からぶか、と何匹もの魚が水面に浮いてきた。

「つとと、すべるぞこいつ」

少し川下の水の中に立つて待機していたジェイは、蔓草で急ごしらえた簡単な網で浮いて流れてくる魚をせき止めて捕まえる。

「ビックリして気絶してるだけだからすぐ目を覚ますよ」

アーシャの言葉に急かされながらジェイは次々に魚を拾っては川岸にいるディーンの方へそれを放り投げる。

ディーンはそれを集めるとナイフで素早くワタを取り、川の水で洗ってきれいにする作業をしていた。

全ての魚を拾い終わるとジェイは川から上がり、アーシャも岩からひょいと飛び降りた。

「いっぱいいたね」

「そうだな、けどあんなに簡単に獲れるなんてなあ。俺も前に一回魚釣りしたことあんだけど、全然だったぜ？」

ジェイはアーシャに手伝ってもらい、蔓草の網を回収して川原に広げた。これはとっておけばまた使えそうだからだ。

二人が並んで戻る頃には、十匹近い魚はすっかりきれいにされ、既にかまどの周りに整然と並んでいた。

「こういう川なら岩の下とかによく魚が隠れてるんだよ。釣るより

「簡単だよ」

「さっきのも魔法？」

「うっん、ただ自分の魔力を衝撃にして岩にぶつけただけ。簡単な無属性の物理魔法になるかもね。ジエイもきつとできるから覚えたら良いよ」

コツや応用法を話しながら二人もかまどの周りに座る。

辺りには魚の焼ける良い匂いがかすかに漂い始めていた。

森に入って四日目のこの日、シャルは朝になると大分回復していた。

相談の結果、様子を見ながら歩き出したが、昼を過ぎた頃に彼女はまた辛そうな顔を見せるようになった。

頭痛がする、と訴えるシャルの体は触れると熱く、熱が出ていることは明らかだった。

結局、歩くと言い張るシャルを宥めすかしてジエイが背負い、シャルの荷物はアーシャが、軽くしたジエイの荷物はディーンがそれぞれ持つて行く事になった。

そして川の分岐点の近くまで来た所で、このままコーネリアチームと接触するのは避けようということでもより少し早い野営となったのだ。

コーネリアのチームはここから少し離れた川の分岐点のすぐ手前にいる。

まだ少し距離があるので、お互いの姿も声も確認はできない。

もっとも積極的に会いたい訳では決して無いからちょうど良い距離だ。

安全さえ確保できれば皆の目下の関心は、今日の前で焼けていく魚にある。

たまには違うのが食べたいというアーシャの意見に皆が合意し、

本日の夕食は今獲ったばかりの川魚の塩焼きと、ディーン特製の山菜と穀物の雑炊だった。

シャルはずっとかまどの近くに座り鍋の火加減を見ていた。

本当はディーンが近くに居るのだからシャルがすることも特にな
い。

皆に気を使われている事に勿論気づいているシャルは心苦しい気
持ちを抱えていた。

だが、頭の中から響くような痛みと、体を覆う熱っぽさはじつと
していても収まる気配が無い。

先ほどディーンが薬草を採って来て作ってくれた熱冷ましも余り
効いていないようだ。

(情けないわ……)

シャルは珍しく、随分と弱気になっていた。

アーシャがどこかから探してきた森イチゴを食べながら自己嫌
悪を覚える。

あれだけ大丈夫だと啖呵を切ったのにこの様だ。

甘酸っぱいイチゴさえ苦く思えるほど自分が情けない。

今の彼女に出来る事といったらこれ以上皆に迷惑をかけないよう
大人しくして、愚痴を吐きたいのを我慢することくらいだ。

はあ、と深い深いため息が口から漏れた。

夕飯は大層美味しかった。

成り行き上いつもこのメンバーの中で料理を担当しているディ
ーンは、その小まめな性格ゆえに料理にも様々なこだわりを見せる。

荷物の中にもかさばらないよう細かく挽いた香辛料を入れている
くらいだ。

その小さなこだわりが大きな違いを生むのだ、という彼の言葉通
り、出来上がった料理はその材料から考えても、いつもとても美味

しく仕上がっていた。

ジェイは小さい頃から寮暮らしで、およそ料理というものと縁が無い。

食べる方以外にこだわりは無いらしく（食べる方にも少ないようだが）未だにお湯を沸かす以上の事は出来ないと誰もが知っている。シャルは祖母に多少は習ったらしいが基本的に彼女は不器用だった。

家庭の使いやすい台所でも時間がかかることを、野外の限られた時間と道具の中で任せるのは愚かな行為だ。

勿論本人もわかっていて「私はやらないから！」と最初に宣言している。それで皆が諦めて納得する所が彼女らしいといえれば大変にらしい。

一度アーシャが自分が作るうかと聞いたことがあったが、彼女が作れる料理は焼くか茹でるか生かの選択肢しかないと知ったディーンが頑なに断った。

火を通せばいいと言うものではないとディーンは丁寧に少女に言い聞かせたが、きょとんとしていた様子からすると理解されたのかどうかは限りなく怪しい。

食材を集める才能は感心するものがあると思うが、そのせつかくの食材を食べる方にこだわりが無いというのは寂しいものだ、と後片付けを皆でしながらディーンは考えていた。

そのこだわりの少ない少女は今日は朝からなんとなく落ち着かない。

原因は昨晚のあの会話だろうと思うが、今更これ以上こちらから話を蒸し返すのも気が引けて、ディーンは何も言わずに一日を過ごしていた。

アーシャは時々物言いたそうにシャルの方を見るが、未だ話をするタイミングが見つからずにいるようだ。

人数分の食後のお茶と、シャルのための追加の熱冷ましを用意しながらディーンは今も落ちつかない少女を見やった。

助け舟を出そうか、と考えているとそれは意外なほうからやってきた。

「ねえ、アーシャ。今日どうかしたの？ 何か落ち着かないわね」
当の本人であるシャルに突然話を振られアーシャは珍しくビクリと驚いて口ごもった。

瞬間、ちらりとディーンの顔を見て迷うそぶりを見せる。

「ん？ 何？ ディーンが関係してるの？」

シャルは女の勘なのか、鋭く関係者を察するとディーンの方をじろりと睨む。

「ディーン、あんたまさかアーシャに何かしたんじゃないでしょうね？ こんな年下の子苛めるんじゃないわよ！」

「……そんな事はしていない」

そんな事はしていないが、自分の糾弾が原因でアーシャの挙動がおかしいことは事実だったのでディーンも強くは否定できない。シャルはそれをまた怪しいと睨んだようだった。

「あんたの仏頂面とその口調なら何もしてなくても苛めになるのよ！ いい加減ちよつとは愛想つてもんを覚えなさいよね！」

気に入らないとあれば辺り構わず威嚇して回る女に言われたくは無いとディーンは思ったが、女との言い争いほど非建設的なものは無い、という信条の彼は静かに沈黙を守る。

「アーシャ！ こいつに苛められたり何かされたらすぐに私に言うのよ！？ こういうタイプはむつつりなんだから！」

「む……？ う、うん。」

「人聞きの悪い事を言うのは止める」

むつつりの意味する所が良くわからなかったらしいアーシャは疑問を顔に浮かべながらも律儀に頷いた。

ディーンにしてみればそんな間違った知識に頷かれても不本意な

事この上ない。

見かねたジェイが苦笑しながら助け舟を出す。

「その辺にしとけよ、シャル。また具合悪くなるぞ」

「あら、だってこのままにしてアーシャが本当に苛められてたらどうするのよ。可哀想じゃない」

そう言いつつもシャルの口調は本当にそうだと決め付けている訳ではない。

ただ、何かあったことは確からしいのでディーンに釘を刺しておこうと思っているだけのようだった。

「あの、シャル、違うの。私が……シャルに話があって、その」

ディーンにかけられた在らぬ疑いを訂正しようとアーシャは慌てて二人の間に必死で割り込んだ。

「私に話？ 一体何？」

「うん……あのね」

いつの間にか日も沈み、辺りは暗くなって来ていた。

アーシャの話が一通り終わった後、四人はしばらく黙ったままだった。

シャルは静かにアーシャの語った言葉をかみ締めていた。

今言われたことを頭の中で繰り返し考えてみる。

アーシャが精霊の姿を見て、声が聞こえる。

相当驚いたけれど、これはまだいい。

世界は広いのだから自分の知らない事があるだけだ、と無理矢理納得できなくも無い。

だがその後の、自分の事についての件はシャルにとって納得できるものではなかった。

けれど、精霊と話が出来るといふ少女の言葉は重みを持って彼

女に迫る。

「……私が」

考えた挙句、シャルは小さな声で呟いた。

「私が火を、受け入れていないってのは、具体的にはどういうことなの？」

「……シャルが、本当は火が嫌いだとか、怖いとか思ってるって事なんじゃないかと思う」

アーシャの言葉にシャルは目を見開いた。

そして、何か苦い物を飲み下したかのような顔を一瞬見せた。

「そのさ、良くわかんないんだけど、受け入れてるのと受け入れてないので違いってあるのか？」

ジェイが重い空気に割って入った。

ジェイの疑問に、アーシャはしばらく考えたあと慎重に口を開いた。

「シャルみたいに精霊に愛された人が、自分に与えられた加護を本当に受け入れると一般的にその人の魔力は極めて調和された状態になるはずなんだよ。」

例えば、ディーンはすごく安定してる。シャルと同じくらいの強い加護を受けているけど、ディーンは意識下でも無意識下でもそれを完全に掌握して、コントロールしてるように見える。元々闇は揺らぎにくい性質でもあるけど、その分維持するのは難しい種類に入るのよ」

そう言っってアーシャがそちらを見ると、ディーンは当たり前だとも言うようにひとつ頷いた。

「火は逆で、揺らぎやすいけど維持はしやすい。だからそれを受け入れると、安定した炎になる。」

例えば……風の吹き込まない火屋にいたランプの火みたいに、絶え間なく燃えているけれど静かな感じ。そしてそうなればそれは風の気に当てられても揺らいだりしないはずなの」

「……つまり、この森の風にやられてるのが、受け入れていない何よりの証拠って訳なのね」

自分を苛む頭痛や熱の正体がわかっててもシャルはまったく救われた気がしなかった。

その原因が他でもない自分自身だというのだから。むしろ、今すぐここから逃げ出したいような気分になる。

そうして逃げ続けたツケがとうとう回ってきたのだ、とシャルは唇を咬んだ。

「結局……私は、どうなの？ 奥へは行けるの？」

アーシャはしばらく考えた後、首を横に振った。

「多分、無理だと思う」

今のまま奥に進めばシャルの具合はどんどん悪くなるだろう。もしかしたらどこかで魔力を暴走させてしまうかもしれない。

もしそれが奥地の風の一際強いところで起こりでもしたら最悪だ。

「奥に進むのはよした方がいい、と思う」

「でも！ じゃあ、このまま課題はクリアできないって事！？ それじゃ困るのよ！」

シャルがそう言う事もアーシャは予想していたらしかった。

固い表情でこく、と頷くと三人の顔を見渡して告げた。

「うん、だから、私が奥へ行ってくるよ」

「え……」

「ちよつ、一人で！？」

「幾らなんでもそれは無茶だ。送り出すわけには行かない」

三人の当然の反応に首を横に振ると、アーシャは続けた。

「課題は奥にある石碑の文字を写してくるってことだったよね？」

そのくらいなら私一人でも大丈夫。距離的にも私なら行って帰って

一日で済むと思うし。皆はここで待ってて」

「何言ってるのよ！ 何がいるのかわからないのよ！？」

「そうだぜ、危ない獣だっているだろうし、一人で行かせるわけに

行くかよ！」

「それに、奥にいるかもしれない得体の知れない生き物のことだつてあるだろう」

「でも、成功させたいんでしょ？」

「それで貴女が危険な目に遭うなら失敗だつていいわよ！ 私が用意された婚約者も学校も魔法でぶつ飛ばせば良いだけの話だわ！」

その光景を想像したのか、アーシャはこんな状況なのに面白そうな顔をした。

「それもすごく面白そうだけど、でも大丈夫。むしろ私一人なら森も生き物も見逃してくれると思うから。だから、行かせてよ。もし駄目なら無理しないで逃げ帰ってくるよ」

「でも……そんな、私が、自分の魔力を何とかすれば良い話でしょ？」

アーシャはその問いにまた首を横に振った。

「今一番早いのは私が行くことだと思う。大丈夫、すぐ帰ってくるよ」

「アーシャ……」

アーシャの決心は固かった。

三人が必死で止めようとしてもそれ以上聞くそぶりも見せず、少女はさつさと寝床へと向かっていく。

結局アーシャはその日はそれっきり、何も答えなかった。

朝、ようやく空が白み始めた頃、薄闇の中を歩き出す人影があった。

その人影は静かにテントを抜け出し、木の陰に張られた野営地からそつと川原に向かって歩く。

と、川原に差し掛かったところでその足は止まった。

「本当に行くのか」

「……なんで」

誰にも気づかれぬ時間にとっと出かける予定だったのに、アーシャの目の前にはディーンが立っていた。

「きつとこうするだろうと思っていた」

アーシャは凶星を突かれて思わず顔を伏せた。

どうもディーンの洞察力には負けてばかりいるような気持ちになる。

「本当に、大丈夫だから」

「……私はそこまで心配はしていない。この森はどう考えても君の味方だ」

意外な言葉にアーシャは伏せていた顔を上げた。

「ただ、君がこんな提案をしたのは、私のせいではないかと考えていた。もし私が問いただしたことが、結果的に君を追い詰めたならすまない、と」

その言葉にアーシャは思わずふるふると首を振った。

「違うよ、多分。これは私の問題、かな」

「どういう問題だ？」

「……もうなんか面倒くさい、に近いのかな？ あの、ごめん、皆が嫌なんじゃなくて、私……他人とこんなに長く一緒にいたの初めてで、問題が起こっても、もうどうしたら一番いいのかわかんないんだ……」

そついうとまたアーシャは顔を伏せた。

「色々考えたけど、結局、私が一人で行くのが一番簡単で、早い選択肢だっただけ。私、多分楽な方に逃げるの」

ディーンとの会話の後、アーシャは何度も仲間達とこの先へ行く方法を考えた。けれど結局、それ以上の良い考えに辿り着かなかった。

皆で行く道を考えるよりも、自分が解決する方が面倒がない。

慣れない森の中で体調不良を抱えて頑張っているシャルを偉いと

思うし、できれば課題を成功させてやりたい気持ちに嘘はない。

用意された実習課題としては、当然チームの全員で奥まで行く道を探るべきなのだろうと思う。

けれど、シャルを奥に連れて行くのはやはりためられる。

ならばとりあえず、それが実習として正しい形であるかどうかはともかく、より成功に近い道を選択するならば許してもらえるんじゃないかとアーシャは結論を出したのだ。

「どうしたらいいか、良くわからないから」

それは、何とも頼りないしょんぼりした声だった。

ディーンは思わず天を仰いだ。

彼自身も人付き合いが上手い方ではないと自覚している。

だが、彼女は見かけはそうでもないのにどうやら自分以上にそれが苦手らしいという事によろやく気づいたのだ。

目の前の少女は知識や山を歩く体力はあるけれど、それ以外は年相応なのだ。

むしろ森で育った、と言う分人付き合いに関しては年齢以下なのかもしれない。

それなのにそんな少女を追い詰めたのはディーンに他ならない。

少女の道案内や知識に頼り、その力に密かに助けられていたくせにそれを責めてしまった。

これではシャルに苛めた、と糾弾されたのもあながち嘘ではなくなってしまう。

「その、本当にすまない。君が気にする必要は全然無いんだ。君一人に問題を背負わせる気はない。私の言葉が君に煩わしい想いをさせたなら謝る」

「……うつん、ディーンは悪くないよ。私、面倒くさがりだから説明しなくてもこっさり無事に終われば良いなって思ってた。実習だけど動物を遠ざけて楽しんで、私の力だからズルじゃないって。」

でも、それを説明も無くされた皆がどう思っかって考えなかった」
だから、とアーシャは顔を上げて真っ直ぐディーンを見つめた。
「ちよっと一人で考えてみようと思っつて。ちよっとだけ時間を貰っ
て、皆のこと、ちゃんと考えてみる。私、多分皆のこと嫌いじゃな
いから」

彼女の目は真剣だった。

そんな目をされたら、もう止められない。

ディーンはそう思っつた。

「……わかつつた。頼む。気をつけてな」

「うん。ディーンも、ジェイと一緒にシャルを頼むね」

そう言っつてアーシャはディーンの脇をすり抜けて歩き始めた。

振り返っつてその背中を見送る。

ふと、その背中がもう一度こちらを振り向いた。

「そっついえばあのね、あの変な頭の人のチーム、昨日の昼間から移
動してないの。なんか変だから気をつけてて！」

「わかつつた。皆にも伝えておく」

じゃあいつつてきます、と言っつてアーシャは岩をひょい、と飛び移
り、川向こうへと見えなくなつた。

それを見送っつてなお、ディーンは川の向こうの森へと視線を向け
る。

考えてみる、と真剣に言っつていたその目を思い返す。

もう一人、自分と向き合っつる事を余儀なくされてる少女はまだ眠
りの内だろう。

森の朝は静かで、澄んだ空気は己の心を落ち着かせてくれる。

その静けさは夜の闇と同じくらい、自分と向き合っつる為になさわし
い時間のように思えた。

鳥の声を聞きながら、ディーンは静かに自問してつた。

自分は、己と向き合っつてつると言えるだろうかと。

17：子供達の影（後書き）

毎日書いていて、前日に書いた分をアップしているのですが、段々追いつかなくなってきました（笑）

終わらせてからより書きながらいった方がアップする気分になるかと思っただんですが……。

1章ずつ毎日書いていると前後のバランスが上手くない気がしてきて難しい。

チェックし切れてない部分もありそうなので、誤字脱字等ありましたらお知らせくださると助かります。

感想、一言などもお待ちしています。

18：招かれざる客再び

川の水は澄んでいて冷たい。

シャルは川に足を浸して、冷たい水が自分の熱を冷ましてくれるのを感じながら気持ちよく空を見上げていた。

この森に来てからずっと足元ばかり見ていた。

慣れない森の中、足元を見ないと木の根に躓いたりしてすぐ転びそうになるからだ。けれどこうして顔を上げて見る森はとても綺麗だった。道中勿体無い事をしてきたな、と少し思う。

森の縁に額縁のように縁取られた空も綺麗だ。

街の中で見る、建物に切り取られた空とは色まで違って見える。

こんなに沢山の木々を見るのも、それに囲まれてのんびりと空を見上げる事も多分初めての経験だった。

シャルは去年祖母を亡くすまで、学園都市にある祖母の住まいでずっと二人で暮らしていた。

祖母は結婚して旅を辞めてからはアウレスーラで長く教鞭を取っていた為、上級学部の近くに家を持っていたのだ。

シャルをその家に引き取った時に彼女は学園を辞め、非常勤や相談役のような事をずっとしていた。

シャルは生まれこそ王都の実家だが、ほとんど全ての時間を学園都市の祖母の家で過ごした。

シャルの母は祖母にとって遅くに生まれた一人娘で、母が死に、祖母がシャルを引き取った時、彼女は既に結構な高齢だった。

それでも十五年近い年月を二人で過ごした。

だが昨年の秋、季節の変わり目に体調を崩した祖母は病の床に付き、そしてそのまま最期まで笑みを絶やさず、冬が来る頃眠るよう

に旅立っていった。

魔法も医学も、年齢とそれが引き起こす病には未だ無力だ。

シャルが寮に入ったのは祖母を亡くしてからだった。

今も祖母と暮らした小さな家は売ったり貸したりせずそのままにしてある。

それも祖母が彼女に遺してくれたものの一つだ。

いつか戻りたいと思っているけれど、それにはもう少し時間が必要だった。

(もっとあちこち行ってみれば良かったわ)

祖母が元気だった頃、彼女は休みの度にどこかへ行こうとシャルを誘ってくれた。

けれど魔法の勉強に打ち込んでいた彼女はいつもそれを断っていたのだ。

祖母のように立派な魔道士になることが、自分の夢で、祖母への恩返しだと思いついていたから。

何より、それが楽しかったから。

『シャルフィーナ、公園にピクニックに行かない？』

もうちょっと、これが終わってから。

いつもそう言っていて結局いつの間にか夕方になってしまっても、祖母は何も言わずににこやかに笑っているだけだった。

シャルの成績をいつも優しく褒めてくれた。

そこにほんの少し、寂しさを滲ませていた事にどうして気づかなかったのだろう。

祖母が逝ってから、数え切れないほど後悔ばかりしてきた。

だからこそシャルは、最期の約束だけは守って見せると思ったのだ。

だが、それも今となつてはどうなるのかわからない。
空を見るのをやめて俯くと、昔より茶色くなつた髪がばさりと視
界に入った。

この髪が、あの頃のように紅かつたなら何か違つていただろうか？
シャルは側においてある形見の杖にそつと手を伸ばした。
杖はひんやりと優しい冷たさで、シャルの手の熱をそつと吸い取
つてくれた。

「おーし、いくぞー」

「ああ」

少年二人の掛け声と共に何かを叩くような大きな音が聞こえてシ
ャルは顔を上げた。

シャルの居る場所よりも少し上流でジェイとディーンが魚を獲つ
ているのだ。

ジェイは昨日アーシャがやって見せたのと同じ方法で魚を獲ろう
と岩に登っている。教わつたように岩に魔力を叩きつけたらしいが
少し威力が弱かつたようで、ぷかりと浮いて来た魚は昨日より大分
数が少なかつた。

ディーンはその魚をさつと拾い集めて川原に投げた。

「うーん、やつぱまだ威力が弱いかなあ」

「単純に強くするだけでは駄目なのか？」

「何か加減が上手く行かなくてさ、強くしすぎそうなんだよな。」

アーシャが、あんまり強すぎても小さい虫とか他の生き物に良くな
いって言つてたし」

「なるほど。無駄に川の中を荒らすのは確かに良くないな」

後でもつかいな、と言いながらジェイは岩から飛び降りると川原
で跳ねている魚を集めた。

旅の日程が予定より延びる可能性を考えて、二人は今朝からこつ
して食料を集めているのだ。

昼食は先ほど取つたばかりだから、これは夕飯の分だろう。

二人は川原を少し掘って岩で囲って作った生簀に魚を入れる。気絶していた魚はゆるゆると水底に逃げていった。

アーシャがいつの間にか採って来ていたり、教えてくれたりした食べられる山菜や木の実もジェイとディーンが手分けして集めてきていた。

それを見てシャルは少し申し訳なく思う。

魔法も使えず、そんなことも手伝えない今の彼女は本当に役立たずのように思えた。

この旅でシャルが思い知ったのは、学校で過ごした時間は現実では全く役に立っていない、という事だけだった。

「シャル、具合どうだ？」

いつの間にかジェイが側に来てしゃがみこんでいた。

シャルは彼らの作業を見ながらぼんやりしていたらしい。

「水に浸かっていると悪くないわ」

「そっか、良かったな」

ほっとした様子のジェイにシャルの胸が痛む。ジェイだって彼女と同じ立場なのだ。

この課題を成功させる必要性に駆られているのはシャルと一緒にそれを思うと自分を置いて行ってくれても良かったのに、とシャルは思ってしまう。

彼らがここにいるのは他でもない自分の為だと言うのに。

「でもお前、気分は最悪って顔してんなあ」

「良くわかってるじゃないの」

げらげら笑いながら隣に座るジェイを、シャルは横目でじろりと睨む。

「良かったの？ あんただって切羽詰ってるくせに、アーシャ一人を行かせて」

「んー、まあ心配はしてるけどな。けど、ここまで歩いてきて、どう考えても足手まといだったのって俺達の方だろ。アーシャは大丈

夫だと思っぜ」

そういう心配よりさ、と呟いてジェイは足元の石を拾って川に向かって投げる。

勢い良く投げられた石は一回、二回と跳ねた後、川の波にぶつかって水に沈んだ。

「悪いなあって気持ちの方が強いな。俺達の問題に巻き込んで、拳句一人で行かせちまって、何にもできない自分が情けないっつかさ。それとも俺達が足手まといだから、アーシャに見限られたのかなあとかも考えちまっし」

それはシャルも全く同じ気持ちだ。

「なんかそのうち埋め合わせとかしないとなあ」

そう言っただけはさっきまでシャルがそうしていたように空を仰いだ。

「いい天気だな」

「……」

いつの間にかディーンの様が見えない。恐らく近くの森を散策しているのだろう。

「なあ、シャル。お前さ……学校入る前、少しの間病気だとかで寝込んだことあったろ。六歳くらいの頃。」

「……どうだったかしら」

口ではそう答えたが勿論その頃の事は覚えている。

「俺、お前のお見舞いに行くってばーちゃんに頼んだのに駄目だっって言われて、会いにいけなかつたんだぜ」

会いにいられてもきつと会わなかつたろう、とシャルは思った。

「あの後しばらくして、学校の入学式で会ったお前は、もう今みただった」

そうだ、確かに入学式で久しぶりに会ったジェイはシャルを見て不思議そうな顔をしていた。

「あの頃からだろ、お前が今みたいな髪になったの。なあ、あの頃、何かあったのか？」

「……それは」

シャルはその問いに答えられなかった。

『キヤアアア！！』

「！？」

「何！？」

シャルが口を開きかけたその時、森に悲鳴が響き渡った。

「コーネリア？」

「違うわ、あの女の声じゃない。でもあいつらのチームのメンバーなのは確かよ」

ザツと近くの繁みが揺れ、ディーンが森の中から走り出てきた。

「何だ？」

「わかんねえ、でも多分コーネリアのチームになんかあったんだろ」

「そうか……どうする？ 様子だけでも見に行くか？」

「ああ、そうだな」

ジエイはちらりとシャルの方を見た。

「いいわよ、二人とも行ってきた。私はテントの結界の中に入って待ってるわ」

「……ジエイはここに残れ」

「大丈夫よ。全く魔法が使えないわけじゃないんだから。水辺にいて調子もよくなったしね！」

二人はしばらく迷ったようだが、その言葉に従うことにしたようだった。

「すぐ戻ってくるからな！」

「いいからさっさと行きなさい！ 女の子のピンチかもしれないんだからね！」

シャルの怒声に追い立てられ二人は走り出した。

その背中を見送ってからシャルは立ち上がり、足を拭いてブーツ

を履いた。

結界の中へ戻ろう、と歩き始めた途端、キン、と頭の中を走った頭痛に思わず身を屈める。

次の瞬間、ゴウツと音を立てて、屈めた体の上を何かが通り過ぎた。「えっ!？」

バシヤアンツ!

目標を失った水の塊がその向こうにあった木にぶつかって弾ける。頭の上を横切ったその水の帯を避けられたのは、全くの奇跡だった。「ちっ、外しましたわ! 運がいいですね!」

声と共に繁みから姿を現したのは、言わずと知れたおかしな金髪の少女だった。

ジェイとティーンは走りにくい川原を懸命に走っていた。

前方に川の分岐点が見える。

連中はこの辺で野営していたはず、と辺りを見回したが川原には姿は見えなかった。

自分達のように川原から少し入った所で野営をしている可能性もある、と二人は進路を森の方へと変える。

森の中に踏み込むと少し進んだ所に開けた場所とテントがいくつか見えた。

「あれか」

「何か見えるか？」

「いや……」

危険な獣に襲われているなら助けなければいけないが共倒れしては元も子もない、と二人は走りつつも慎重に近づく。

間近に見えてきたテントはぐしゃりと傾き、その前には誰かが倒れていた。

茶色い髪をポニーテールにした少女が一人うつ伏せで横たわっているようだが、辺りには他に人影も生き物の姿も見えなかった。

デイーンはその状況をすばやく観察すると、他のメンバーは強制送還されたのかと考えた。

しかしそれにしては少女一人取り残されているのはおかしい。

野外実習では生徒は皆、胸に小さなバッジをつけることを求められる。これには複雑な魔法がかけてあって、生徒が命に関わるような怪我をしたりそれに準じた状況になったりすると自動的に魔法が発動して、学園の医務室まで強制送還されるのだ。

勿論自分でもうリタイアだ、と思えばそれを使って帰る事も出来る。

もし一つの班のメンバーが次々強制送還されるような事態になればすぐに学園側からの操作で残ったメンバーも連れ戻されるはずなのだ。

周囲を良く見ればテントが崩れている以外は木がなぎ倒されたりした様子も特に無い。何かに襲われてメンバーが全滅して強制送還された、と言うにしては辺りの様子は平和すぎる。

その違和感が、デイーンの足を止めさせた。

「ジェイ、ちよつと待て」

「あ？ なんだよデイーン、早くしねえと！」

「何かおかしい」

「え？ おかしいってな」

パキン、と枝が折れる音がした。

ジェイの足元から妙に響いて聞こえたその音を訝しく思った次の瞬間。

「う、うっわあああ！」

「ジェイ!？」

バサバサと音を立てて木々が揺れ、悲鳴と共に不自然に跳ね上がったジェイの体は近くの大木に当たって止まった。

木から逆さまに吊られたその足首にはロープが絡まっている。

「いってえ！」と叫びながらジェイは木に打ち付けた頭を抱え、身を縮めた。

先ほどの音はジェイが繁みに仕掛けられていた罠を踏んだものだったらしい。

「チツ！」

デインはすぐにロープを切ろうと木に駆け寄ろうとしたが、一歩足を踏み出した次の瞬間ザツとその場から飛び退いた。

タン、と一瞬前まで足があった場所にナイフが刺さる。

「へえ、やるね。今のを避けるなんて」

彼の足を狙ってナイフを投げたのは、なんと二人が助けに来たはずの先ほどまで倒れていた少女だった。

いつの間にか半身を起こしていた彼女はゆっくりとその場に立ち上がる。立ってみると彼女はかなりの長身で少女というほど可愛らしくない。

「くっそ、このっ！なんだよこれ！」

ジェイはその間にも体を持ち上げてロープを解こうと暴れているが素手では流石に分が悪いらしい。

デインはそれをちらりと横目で見ながら立ち上がった女と向かい合った。

「女の子が倒れてるってのに、すぐに側まで駆けつけてこないのはひどいんじゃない？」

「……」

女 アロナは余裕の表情で側に立てかけてあった棒を手に取った。

背が高くしつかりした体格から見ても棒が杖ではないことから、

武術学部生か、とディーンは判断した。

コーネリアはあの食堂でメンバーは六人だと言っていた。周囲の気配を探ると、もう一つの気配が今来た道を塞ぐように近くの繁みの中を移動しているのがわかる。

ガサ、と音を立ててディーンの背後の繁みから姿を現したのは大剣を携えた大柄な男、モースだった。

「目的は何だ」

「ふふ、あんた達のリタイア。なーんてね」

ブン、と背後から剣を振る音がする。

ただの威嚇だが、その音から考えてもかなりの重量級だ。

「別に目的は一緒でも妨害しあう必要はないはずだ。競い合う必要の無い課題での妨害は禁止されている」

「妨害じゃないわよ。言うなればちよつとした協力をお願いね。あんた達の持つてる食料を分けて欲しいだけ」

それが目的か、とディーンは納得する。

班同士の無意味な妨害は禁止されているが、協力し合う事は許されている。

恐らくはこのチームは自分達から食料を奪い、学校側にはあくまでリタイアする予定のチームから協力してもらった、とでも言い張るつもりなのだろう。

それが通るかどうかは問題にしていけない所を見るとかなり切羽詰っているらしい。

(わざわざ罨まで用意して、手を出してこないのは時間稼ぎか)

「随分と礼儀を知らないお願いもあつたものだ」

「だって、食料全部ちょうだい、なんて言つたつて断るでしょ？ 仕方ないじゃない」

「当たり前だ！ ざけんなこのやろつ！」

下ろせと叫び続けるジェイを放つてディーンは考えを巡らせた。

恐らくはこの二人が自分達の足止めをしている間に、他の人間がシャルと野営地のところへ向っているのだろう。

連中の人数とリーダーの性格から判断すると、恐らくコーネリアがシャルの足止めをし、その間に残ったメンバーが食料を奪うという計画の可能性が高い。

そこまで考えて、しまった、とディーンは内心で舌打ちをした。連中の目的が食料だけなら黙って取らせてやればこちらの被害は小さい。足止めして作戦が成功した後は連中は引き上げるはずだからだ。

食料を失う事はこちらも痛い、この森は動物もいるし、魚も取れる。アーシャが帰ってくれば森から出るだけなら難しくは無いはずなのだ。

けれど、テントとそこに置いた荷物の周りには昨日アーシャが嚴重に結界を張って行ったばかりなのだ。

体調の悪いシャルを守るように、と丁寧に張られた結界は広く彼女がくれた蔦の腕輪の持ち主だけをその奥に通す仕掛けになっていると言っていた。

シャルがもうその中に避難していればいいが、もしそうでなかったとしたら。

荷物を奪いに行った連中が結界を解けなければ、足止めされているシャルにそれを解かせるために脅しにかかるだろう。

そうでなくてもシャルとコーネリアが会って、ただの足止めで済むとは考えにくい。

今のシャルの状態からの最悪の事態を想像してディーンは思わず軽い頭痛を覚える。

一刻も早くシャルの元へ戻らなければならない。

「ジェイ、喧しいから黙れ。ところで平気か」

「うう、お前ひでえ……まあ、なんとか」

シャツと剣を鞘から抜く。ディーンが得意とするのは長剣だ。

体に合わせた長さの細身の剣が木漏れ日を弾く。

重さでは負けるが、背後の男は自分が相手にするべきだろうと判断した。

女の方は剣を抜いたディーンを面白そうに見つめ、少し距離を詰めてきた。

だがすぐに踏み込んでこない。

その姿に、恐らくこの周辺には他にも罠が仕掛けてあるのだとディーンは気づいた。

一瞬考えした後、結局剣を鞘に戻す。

女がその行動を見て不審そうに眉を上げたのを見ながら、ディーンは極めて何気ない仕草で一步横に踏み出した。

そのまま足元に突き立ったナイフを静かに拾って女に向き直る。

目の前の女はすぐにディーンの動きに身構えた。そのナイフを投げ返されると思ったのだろう。

ヒュツ、と風を切る音と共にディーンの手が大きく振られ、何か空を切る。それに反応して女の持っていた棒が素早く跳ね上がった。

カンツ、と固い音を立ててそれはあっさりと棒に弾かれた。

何の芸も無い攻撃にニヤリ、と笑った女の顔は次の瞬間驚愕に変わった。

「よつと、サンキュー！」

木に吊るされていた少年がぐるりと一回転してトン、と地面に降り立ったのだ。

ハツとして木を見ると幹にはナイフが突き立っていた。

ディーンは女にナイフを投げると思わせて、それを本当はロープに向かって投げていたのだ。

彼女が棒で弾いたのは同時に投げられていた石か何かだったらしい。

「……面白いじゃない」

こここのところ、知恵の無い獣ばかり相手にしてアロナは少し

飽きてきていた。久しぶりのやりがいのある相手のようだ。

「ジェイ、シャルが危ない」

「おう。俺どっち？」

「棒の女を。だが罨が他にもあるはずだ。まだ動くな」

誘うように笑う女を無視して二人はごく短い打ち合わせを終えた。了解、という返事を確認してディーンはすう、と息を吸って意識を澄ませる。

『優しき闇の精霊よ、我に応えよ』

その聖句に反応して、サワ、と辺りを包む木の陰が濃くなった気がした。

ディーンは自分の周りに漂う慣れ親しんだ気配に向けて願う。

「悪しき意思の排除を」

途端、ざわりと繁みが揺れそこから何か跳ね上がった。

「何っ!？」

ブン、と跳ね上がって向かって来た何かをアロナはとっさに避けた。

避けてから良く見るとそれは仲間がこの周辺に仕掛けていった罨の一つ、輪になったロープだった。

慌てて周囲を見回せば、辺りに仕掛けられていたロープや杭、蔦で編んだ網などが次々と繁みから現れ、木から落ちて行く。

近くにあった落とし穴が、何も乗っていないのにぼこり、と音を立ててその姿を晒す。

彼らを誘い出し嵌める為に手間をかけて用意した物なのに、その全てが目の中の人物のたった一言で明らかになってしまった。

「なっ、何したのよあんだ！」

「別に何も。ジェイ、行くぞ」

「おう！」

ジェイとディーンは身を翻し全ての罨が無くなった森の中へ走り出した。

「モース！」

その声に反応して大柄な青年が剣を構えて前に出る。

殺すつもりは無いだろうが、その剣を受ければただでは済まないに違いない。

二人は一瞬目配せするとモースの間合いに入る直前にぱつと左右に分かれた。

「!?!」

ブン、と剣が宙を切る。

モースは小回りが不得手と見た二人は二手に分かれて木々の間に走りこんだ。

「馬鹿！ 何やってんのよ！」

走り去ろうとする二人を慌ててアロナは追った。

二手に分かれた二人を追えば自分達も当然分かれる事になる。

アロナは走る二人の速度を目測する。

「モース！ あんたそつちよつ、黒い方！」

「おう！」

モースはその大きな体が邪魔をして走る速度は速くない。

足の速い方は自分が行くしかない、と踏んだのだ。

彼女の指示にどたと走り出した仲間を見てアロナも速度を上げる。

金色の髪が開けた川原の方に向かって走っていく。

走り去る彼女は、ディーンがわざと走る速度を調節していた事にとうとう気づく事はなかった。

19：少年の決意（前）

ジェイは木の根を避けて走りながらこの後の事を考えていた。

デーンはシャルの所へ走れ、とは言わなかった。ということはあの棒の女を何とかしてから行けという事だ。

確かコーネリアのチームは六人。このままシャルのところへ駆け戻れば分かれているあいつらを合流させてしまう。

（やっぱ六対三は分が悪いよな……）

しかもシャルは今まともに戦えるか怪しい状況だ。デーンもそれを考えた上での指示なのだろう。

となると、次はどこで戦うかを考える。

相手は棒を持っている。棒術の相手と戦ったことはあるが、武器を持たないスタイルのジェイとは余り相性は良くない。切れない分、剣よりは多少ましという程度だ。

まあそれを言ったらジェイと相性の良い相手など居ないに等しいのだが。

相手の間合いを考えると森の中で戦う方があれを振り回せなくて危険は減るだろう。

（けど、そりやお互い様だよな。こんな足場の悪いところじゃなあ）

ひょい、と木の根を避けて軽くジャンプする。

今の速度は本来のジェイの出せる速度よりも随分と遅い。

相手の武器の危険を減らすか、自分の機動力を活かすか、ジェイは頭の中で天秤にかける。

（まあ、なるようになるか）

ジェイはそう結論付けるとザッ、と明るい方へと走り抜けた。

そのまま川原を少し走り、開けた場所で立ち止まる。女もすぐに追いついてきて少し離れて立ち止まった。

「あら、止まったのね。ここでやり合おうって事？」

ジェイは改めて女をよく観察した。

ポニーテールの茶色の髪にきつめの顔立ち。

丈が長く、袖が大きく広がり、胴周りは動きやすく絞った道着のような服を着ている。ジェイと少し似たスタイルだ。

防具は少ない所を見ると、やはり同じように機動性重視なのかもしれない。

武器らしい物は手に持っている棍だけだ。

武術学部に棒術の科はあるけれどこんな女いたっけ、と考えたが心当たりはなかった。

「拳闘科のイージェイでしょ？ 名前聞いてるわ」

「そりゃどうも」

「私はアロナよ。よろしくね」

女は聞いても居ないのに勝手に名乗るとにつこりと笑った。

だがジェイには何の興味も湧いてこない。

「別によろしくしたくもされたくもないから」

「あらあ、随分冷たいじゃない。もつと優しい男かと思ってたのに」

「生憎そんな気分じゃなくてね」

アロナは面白そうにくすくすと笑ってヒュン、と棒を振り回した。威嚇のつもりか、とジェイは面白くなく眺める。

こんな所でもたもたと女と遊んでいる暇は無いのだ。

(……バチが当たったかな)

ジェイはふとそう思った。

昨日アーシャの話聞いた時、ジェイはそれで楽だったのかと思っただけだった。

楽で助かったな、とすら考えたのだ。

自分の才能を示す、などと口では言っても、本当に自分に並々な

らぬ才能があるなんてジエイは思っていない。

もしそんなものがあるなら、無理な課題にわざわざ挑戦しなくても親は既に納得しているだろう。

だから、アーシャの助力で簡単にシャルと自分の自由が手に入るならそれでもいいじゃないかと思っただ。

そんな怠けた事を考えたから、バチが当たって今こんな面倒な事になっているのかもしれない。

挑発するように軽くステップを踏む度、アロナの髪が揺れる。

茶色い髪は今のシャルを思い出させた。

(昔はあんなに紅かったのに)

シャルは、自分にもそうなった理由を話さなかった。

それが少し悔しい。

(こんなに頼りないままじゃ、当然か)

ジエイはス、と前へ一歩踏み出した。

ヒュツと即座に突き出される棍を上半身を軽く反らして避ける。

「はあっ！」

高い気合の声と共に次々と棍が突き出されたがどれも比較的単調な攻撃だった。

棒自体も重いものではないらしく、攻撃はスピードはあるが軽い。次々と繰り出される突きを上体を左右に振って避けていく。

避けられるものはそうして避け、際どいものは籠手で弾いた。

何度目かの突きをパン、と籠手で逸らして一歩間合いを詰めた。

次の瞬間、弾かれた棍がぐるりと回転して斜め下から戻ってきた。パツと身を引くとその鼻先を棍が掠める。

「すばしこいね、あんた」

くすくすと笑う彼女に合わせて笑うように、ひゅう、と棍が大きく弧を描いて鳴った。

こちらの反応を見て遊んでいるようにも見えて大変面白くない。

アロナは間合いを戻して手の先でくるくと棍を回す。

突きで様子見をしていたらしいがそれはこちらと同じことだ。籠手で受けた感じからしても急所を突かれぬ限りは大したダメージにならなそうだった。

軽く打たせて懐に入り込んだ方が早い、とジエイは判断した。サイドステップを踏んで今度はこちらから相手の動きを誘う。

左右に相手の意識を振らせると今度は先ほどとは違う動きで棍が降って来た。

くるりと回し、振り下ろし、跳ね上げ、突く。

棒術の見本のような動きは隙が少ない。

けれど素早さには自信があるジエイはそれらの全ての攻撃を簡単に受け流し、避け、機を狙う。

「ちよろちよると！」

ヒュツ、とアロナが幾分深く踏み込み、大きく突きを出してきたのをジエイは見逃さなかった。

「ハッ！」

ぐつと左に体を沈め突きを避けた瞬間、棍に向かって右足を出す。ガン、と棍を大きく蹴られたアロナはそれに引きずられて体勢を崩した。

その隙に一足で間合いを詰め懐に飛び込む。

固く握られた拳はアロナの胸に吸い込まれる、はずだった。

チカ、と銀色の輝きが一瞬ジエイの視界に入る。

「っ!？」

それが何かと認識する前に体は勝手に動いていた。

ザシュッ!

右頬と右耳に熱い感覚が走る。

思わずバツと飛びのくと、ぱたぱたと赤いものが川原の石の上に散った。

「あら、浅かったね、残念」

そつと触れて確認すると、右頬に触れた手にぬるりとした感触が伝わった。どうやら頬を斜めに切り裂かれたらしかった。

傷は耳をも掠めている。

体が勝手に反応して顔を傾けなければもつとざっくりやられていただろう。

相手の手元を見ればそこにはいつの間にか細身のナイフが握られていた。アロナはそれをひよいひよいと片手で放り投げて遊んでいる。

どうやら彼女はジェイが間合いに入った一瞬の内に、棍から片手を離しどこからかナイフを取り出していたらしい。その素早い攻撃の変化はジェイにも予想外のものだった。

「隠し武器……暗器使いか。あんた、特殊戦闘科か？」

「うふふ、当たり前」

油断した、とジェイは内心で舌打ちした。

どつりで棍の攻撃が軽かった訳だ。もっと早く気づいても良かったことなのに。棍は相手にそれを印象付けて油断させる為の手の内の一つだったのだ。

恐らくはあの広がった袖の奥に何本もの武器を隠しているのだろう。

「あの罨もあんたか？」

「あれは違うわよ。私はあんなに陰険じゃないもの。あれは同じクラスのライの仕事よ」

どつちもどつちだ、と思うがそれはこの際どうでも良い。

特戦の生徒は厄介だと言う噂を、ジェイも良く知っていた。

特殊戦闘科は同じ武術学部の科の一つだが、その科は人数も少なく、教室も奥まった所にあるため他の科との交流は無いに等しい。

噂によると、扱いの難しい特殊な武器や、罨などを使った待ち伏せによる戦い方、暗器のような身体的不利を補う手段や、極力戦わない戦い方などを学ぶのだと言われている。

彼らは基本的に他の学科とは合同授業を設けないし、学部主催の武闘会などにも出席しないから情報が少ないのだ。

アロナがライと呼んだ人物のように、畏れ得意とする人間もいるとは聞いていたが、そういつた話が噂の域を出る事は少ない。

直接の戦闘に向かない技中心の者もいるし、彼らの強さは自分の手の内を出来る限り明かささない事が大前提の場合が多いから、学園から大会参加を免除されていて大会に出てくるのは希望者だけだ。

「どつりで、見た事ない顔な訳だな」

「そーよう。大会に出られないとか、他の科の生徒と戦えないのって結構退屈なのよね。今回の実習も別に期待してなかったけど、我俣お嬢様のおかげで役得だったわね」

(……特戦が歪んだ人間が多いって噂、本当だったのか)

ケラケラと笑う女はどこか危ない空気を漂わせている。

逃げた方が早いかもしれない、と考えて思わず一歩引いた足元にタン、とナイフが刺さった。

「っ！」

「あら、だめよ、逃がさないわ。もっと私と遊んでくれなきゃ。走り出したらその背中がちょうど良い的になるから、覚えておいてね」
内心を見透かされて思わず唇を噛む。

「あんたの逃げ足と私のナイフ、どっちが早いかしらね？」

につこりと笑う笑顔がどこか恐ろしい。

恐ろしい女はシャル一人で十分なのに、とジェイは内心で愚痴をこぼしながらこの場を切り抜ける手を考えていた。

棍とナイフ相手では流石に徒手空拳ではやり辛い。

かといってあまり手間取って無駄な時間もかけるのも困る。

ジェイは相手のような武器をこれといって持たないスタイルだ。

空手での動きは極めれば全ての武器の動きへと通じるから、体がもっと育つまではとことん基本をやれ、と昔通っていた道場の師に

厳しく言われたからだ。

ジェイの武器らしい物と言えば、せいぜいが自分の拳を守る為と、打撃力を上げる為に付けている金属板が張られた籠手くらいだった。自分の手足の長さの間合いしか持たないジェイの方がどう考えても不利だ。

アロナは、間合いを保ったまま仕掛けないでいるジェイを、警戒してためらっているものと思っただらしい。

フン、と鼻で笑って棍を持ち替えると自分から仕掛けてきた。タツと走り出し、一息に間合いを詰める。

ブン、と斜め下から振り上げられた棍を体を反らしてジェイが避けると、一拍遅れてナイフが飛んできた。

左肩を狙ったそれをキン、と固い音を立てて籠手のはじく。軽いナイフくらいならちゃんを受け止めれば弾くのは簡単だ。避けた、とジェイは思った。

ガツツ!!

「ツツ!?!」

かわした、と思った次の瞬間右肩に衝撃が走った。振り上げた棍がすぐさま打ち下ろされたのだ。

「チツ!」

ジェイは舌打ちをしてすぐに間合いを離れた。肩の関節を狙った一撃は重くはなかったが痛いところに入っている。

右手にジン、と痺れが走る。

アロナの戦術の変化にジェイは少し感心した。

両手で勢いをつけて斜めに振り上げ、瞬時に右手を離してナイフを投げる。

ナイフが手を離れた次の瞬間には、再び棍に手を戻しそれを振り

下ろす。

それだけの動きを瞬く間にやって見せたのだ。

棍が随分と軽い、と思ったが、動きを早くするためにそれ自体が軽く作られているらしい。

ナイフの間合いの狭さ、棍の間合いの中の弱さをお互いが上手く補っている。

敵が離れた時の投擲の腕もかなりのものだ。

一つ一つは軽いが、手数の方多さと急所や間接を狙った攻撃を得意としてくるようだ。

これは一筋縄ではいかなそうだとジェイは認識を改めた。

考えている間にもまた棍が飛んでくる。気がつけば防戦一方でどう見ても押され気味になっていた。

(あれしかねえかな)

出来れば使いたくない手段を思い出す。

万々に備えて、何時でも道具は持っているし、多分できると思うが、実戦で使うのはこれが初めてだ。

いつもはディーン相手に訓練しているだけの手段だ。

『やる時はためらわずきつちりやるのよ！ 凡人に手段を選ぶ権利なんかないのよ！』

脳裏を聞きなれた声が過ぎった。

そうだと、迷ってる場合じゃない、とジェイは頭を軽く振った。

これ以上遅くなったらきつとこっぴどく怒られる。

怒ったシャルは何より恐ろしい。

駆けつけた時の第一声まで簡単に想像できる。

『遅いわよ、ジェイ！』

行かなければ。

自分とあいつの自由のために。

20：少年の決意（後）

ジェイがシャルと初めて会ったのは零歳の時。もちろんその時のことは覚えていない。

ちゃんとお互いの事を覚えているのは二歳か三歳になった頃になつてからだ。

親兄弟に捨て置かれ近所に同年代の友達も居ない孫達を心配して友人だった二人の祖母がお互いの家を訪ねては度々彼らを引き合わせたのだ。

ジェイの思い出の中のシャルは、小さい時から乱暴で横暴な幼女だった。

今までに一体何度泣かされたことか、もう数えるのも虚しい。

それでも、自分と同じ年で、自分の目を真つ直ぐに見てくれるシャルと会うのは子供のジェイの何よりの楽しみだった。

ジェイはその頃ずっと実家の離れで祖父母と乳母と一緒に暮らしていた。

小さい頃のジェイは泣き虫で、四つ上の我侷な姉に苛められ、かわかれては良く泣かされていた。

だからジェイにとって家族とは優しい乳母と愛嬌のある祖父母で、友達と言えばシャルだった。

それ以外の人間とは、たまにすれ違ったり、自分の気分で理不尽な小言をぶつけてきたり、突然やってきてジェイをいじめたりからかったりする厄介な災害くらいの認識しかなかったのだ。

あれは二人が四歳だったか五歳だったかの頃。

沢山の思い出の中でも一際ジェイが忘れられない出来事がある。

あの日、ジェイは離れの庭先で一人泣いていた。

そこに、祖母に連れられたシャルが遊びに来たのだ。

『なあに、またないてるの？ こんどはなによ！？』

『ねえさまが……ぼくのこと、いらないからだからおじいちゃんたちにくれたんだって。だからはなれからでてくるなって』

『なにそれ！ それでだまってここでないてるの！？ あんたもたまにはいいかえしなさいよ！ おとこでしょ！』

『だ、だって……』

『もう！ いいわ、あたしがしかえししてあげる！ きなさい！』

自分の晴れ舞台に鬱陶しい弟が決して近づかないようにと釘を刺したことがジエイの姉の決定的な敗因となった。

その日、彼女は取り巻きの友人達を集めてお茶会を開いていた。

それは大人達のサロンを真似たママゴトの延長のようなものだったが、親バカな両親はガーデンパーティー形式の結構な規模の場を用意したのだ。

庭に用意された会場では、白いクロスを掛けられたテーブルの上に様々な菓子や軽食が美しく並び、その周りでは子供なりに着飾った招待客達が賑やかにおしゃべりに興じていた。

招かれざる二人の客はその華やかな庭の植え込みの陰に仔細みのように隠れてそれを覗いた。

真新しいピンクのドレスに身を包んだジエイの姉の姿はすぐに見つかった。

彼女は女主人をきどって上機嫌で会場の真ん中でコロコロと笑っていた。

『みてなさい！ あたし、もうまほうがつかえるんだから！』

あの時の騒ぎを思い出すと、今でもジエイは笑いがこみ上げる。

『えーっと、いたずらなにかぜよ そのきまぐれなところを ひときここにあそばせたまえ』

それは本来ならほんのささやかなそよ風を起こす、練習用の初歩

の魔法のはずだった。

だがシャルは魔法に関してはあの頃既に疑いよりの無い才能を見せていたのだ。

じっと見守るジェイの目の前で、ぶわり、と風が起こる。

シャルの真つ赤な髪で一瞬遊んだ風は、次の瞬間子供達の笑い声が響く華やかな会場の中を吹き抜けた。

『キヤアアツ！』

姉の自慢のピンクのドレスのその華奢な生地にたちまち絡みついた風は、それをふわりと頭上高くまで舞い上げた。

必死に抑える手も間に合わず、白いレースのペチコートやドロワーズが風にはためく。

大人を気取ってアップにした髪にごてごてとつけた飾りが更に彼女に災いした。

舞い上がったドレスの裾のレースが髪飾りの一つにしつかりと引っかかったのだ。

その姿の無様な事と言ったら例えようが無かった。

『いやあ！ とつて、とつてえ！』

姉は羞恥からパニックになり、顔を真つ赤にしてテーブルの間を走り回ったあげく、その幾つかをなぎ倒した所でパタリと気絶した。

二匹の仔ねずみはそれを確認すると、そつとその大騒ぎの場から逃げ出して心行くまで笑い転げた。

あれ以来ジェイの姉はガーデンパーティと名のつく物が大嫌いになつたらしい。

『やっぱり、このくらいはやらなくちゃね！』

そう言つて笑うシャルの顔は誇らしげで自信に満ちていた。

幼いジェイは、そんなシャルが誇らしかった。

振り下ろされた棍を飛び退って避ける。

ジェイは十分な間合いを取ると腰につけた小さなポーチから、更に小さな瓶を探して取り出した。キュ、と栓を抜いてそれをポタポタと辺りに撒く。

中に入っているのはほんの少しばかりの聖水だった。

光の教会で清められたそれは光の精霊を呼ぶ為の助けになる。

(一発で、決める)

ジェイは空になった瓶を投げ捨てて、唯一これだけ覚えている古代語の聖句を唱えた。

『光の精霊よ ここに』

シン、と静寂が二人を包む。風だけがその場を吹きすぎた。

変化は何も起こらなかった。

アロナはジェイの動きに、彼が何か魔法でも使うのかと身構えていたが何も起きなかった事に拍子抜けしたようだった。

「なあに、失敗？ 魔法でも使うのかと思ったのに」

馬鹿にしたように笑いながら、アロナもまた次の手を考えていた。手数ではアロナが遙かに押しているが、未だ決め手にかけているのだ。

ジェイのようにすばやいたイプは的にしにくいし、殺してはいけないから狙える場所が少ないのが面倒だった。

先ほどから何度も打ち込んだり切りつけたりしてみたが、どれも間一髪で避けられている。

アロナがいくら打ち込んでも頬と肩に与えた以上の打撃を与えられないでいる。だが、本気で急所を狙うわけにはいかないのだ。

(腕か足……肩くらいにしとかないと駄目よね。面倒くさいなあ)
あまり体に傷をつけて強制送還されるようなことになったら自分

達が妨害したのがばれてしまうからそれは避けたいのだ。

せいぜい動けなくして、恥をかかせて学園に訴え出れないようにするのが理想的だが、彼女としては時間が稼げればそれでいいから最悪このままだったらと戦い続けてもいい、と思いなおす。

よし、と方針を決めたアロナは、もう一度攻撃をしかけようと棍を構えた。

しかしその次の瞬間、アロナはジェイの行動に目を見張った。

「えっ!?!」

タツと軽く川原の石を蹴ったジェイは、なんと突然身を翻し、背中を向けて走り出したのだ。

「なっ! ちょっ、バカにしてんのっ!?!」

カアツとアロナの頭に血が上る。

ついさつきその背中を的にする、と宣言したばかりなのにバカなのかそれとも、と一瞬考えたが怒りの方が先にたった。

「お望みどおりのにしてあげようじゃない!」

距離はまだ十分射程内だ。

アロナは棍を離すとさつと袖に手を滑り込ませ、両手に握ったナイフを無防備に見せ付けられた背中に向かって本気で投げつけた。

とつさに数を減らして六本にしてやったが、間違いなく全てがその背中を捉えている。

(もらった!)

アロナは思わず笑みを浮かべた。

次の瞬間、くるり、とジェイが体ごと振り向いた。

「!?!」

アロナは仰天した。思わずジェイの正気を疑う。

そのまま体の正面で受ければただではすまないはずだ。ナイフの軌道はジェイの部分鎧では避けられない場所を幾つも狙っている。

死にはしないだろうが下手をすればすぐさま強制送還の魔法が発

動するだろう。

(しまった、それが狙い!?)

けれど、それもハズレだった。

当たる、と彼女が思った瞬間、パツと全てのナイフが掻き消えたのだ。

「えっ!?!」

何が、と思う間もなかった。

タタン、と固い音が自分の周囲で響いた、と気づいたその一瞬の後、

「雷よ、降れ!」

ピシャアアン!!!

「キヤアアツ!」

衝撃と熱が、彼女の体を駆け抜けた。

強い痺れがアロナの全身を覆う。思わず膝を突いて、彼女はガクリとその場にくずおれた。

何が起きたのかアロナには全くわからなかった。

だがどうやら彼女の手足は火傷を負ったらしく、痺れたような感覚と共に熱を持ってヒリヒリと痛む。

じやり、と足音と共に目の前にジェイが戻ってきた。

「もう動けねえだろ。じっとしてろよ」

「……あんだ、何、したの」

アロナは荒い息の間から問いかけたが、何をされたのかはなんとなくわかっていた。

気がつけば彼女の周りには、立っていた場所をぐるりと取り囲むように、砂利の間にナイフが突き立っている。

恐らくはこれを避雷針にして、雷を投げたのだ。雷はナイフで囲

まれた空間で暴れ、アロナを襲った。

だが彼女にわからないのはその速度だ。

ジェイの反射神経はかなりのものだったが、それでもアロナと大差は無かった。

なのに最後のあの、ナイフが消えた瞬間。

あれは恐らく彼が飛んできたナイフを全て手で受け止めたから消えたのだ、とアロナは今気づいた。

背を向けて逃げ出したのも、彼女にわざとナイフを投げさせる為だったに違いない。

一瞬で彼女の投げたナイフを受け止め、それを投げ返した。その全てがアロナには見えなかった。

「聞くなよな。手の内は明かさない。特戦科のお得意だろ」

「そう……そう、ね！」

「うわっ!？」

突然顔めがけて投げつけられた砂利にジェイは思わず腕で顔を覆った。

てっきりもう動けないと思った相手に油断したのだ。

その隙にアロナは置いてあった棍を手に立ち上がり、それを支えにして傍らの大岩に棒高跳びの要領で飛び乗った。

ジェイが慌ててそちらに向き直る瞬間にはもうナイフを手にしていた。

「ならもう一度実演してくれたら嬉しいわ。今度こそ見極めてあげる！」

シャツと鋭い音を立ててナイフがその手を離れる。

体は痺れ、痛むだろうにそのしぶとさにジェイは内心で舌を巻いた。

そんな事を考える間に、さっきよりも遙かに近い距離から投げられた兇刃がジェイの眼前に迫る。

だが、ジェイには自分に迫るその全てが良く見えていた。

意識を集中すれば目の前に迫る刃に映る景色さえ見て取れそうだ

った。

す、と何気なく手を伸ばせばそれはたやすくその指に収まる。

ジェイは全てのナイフをそっと掬い取った後、ジャラ、とそれを川原に落とす。

アロナは驚愕に目を見開いていた。

彼女にはジェイに迫った刃が、またも突然掻き消えたようにしか見えなかった。

消えた、と思った瞬間それはジェイの右手からバラバラと地面に落とされた。

アロナはその光景に恐怖を覚える。

「何……したの」

「ちよつと見えやすくしてるだけさ」

そういうとジェイはアロナの乗る大岩に近づいて、棍が届かないぎりぎりの範囲で止まる。

見上げるほどの大きな岩だ。岩にはナイフは刺さらないし、遠ざかればナイフを投げ、近づかれれば棍で叩き落せる、それでも駄目なら飛び降りて逃げればいい。

そう思つてアロナはそこを避難場所を選んだのだろう。

いつもだったら、自分はここであっさりと身を引いただろう、とジェイは思う。

彼女は意地だけで自分を保っているが、もうほとんど戦意を喪失している。

逃げる自分の背に攻撃してくる可能性は少ないかもしれない。

だが、それが皆無だとは言えない。

『いい、ジェイ。あんたはもうちよつと悪くなりなさい！ 育ちが良いだけの男なんてゴミよ、ゴミ！ 男はちよつと悪いくらいがいいのよ。そうじゃないと生き残れないわよ！』

シャル語る人生への指導はいつだって極めて独善的で、ある意味

とても正しい。

ジェイは深呼吸して両手に魔力を込めた。

「来ないでよ！」

ブン、と振られた棍はあっさりと宙を切る。

棍をやり過ぎたジェイは深く一步を踏み込んだ。

ジェイの手が、ヒタ、と岩に触れた。

ドゴン！！

岩は重い音を立てて激しく揺れた。

「キヤアアツ！！」

アロナは大岩から振り落とされて激しい水音を立てて川の中に落ちた。水飛沫が高く吹き上がる。

ジェイがやったのはアーシャに教わった、魚を取った時の方法の応用だった。

あの時よりも遥かに強い力を真横から叩きつけられた岩は激しく横に揺れ、上に乗っていた人間を振り落としたのだ。

水面にぷかりと仰向けのアロナと数匹の魚が浮いてくる。

「ふう……」

ジェイは目を閉じて、光の精霊に感謝と、開放する意思を送る。

ふっと自分の体が重くなったような感覚がして、光の精霊が離れた事を感じた。

同時に目の奥がチクリと小さく痛んだ。

だが痛みはすぐに治まり、まだ回復するほどのダメージではないと判断する。

ジェイが使ったのは一種の光の精霊魔法だ。

精霊をその体にほんの短い時間宿し、神経の反応を加速させたのだ。

体に宿った光の精霊は恐るべき速度で神経を駆け抜け抜け体の動きを助ける。

加速された動体視力や腕の動きなら高速で投げつけられたナイフすら止まっているのと変わらない。

ただ、その代わり長い間は持たないし体に負担もかかりやすいのが欠点だ。

「何とか、役に立ったなあ」

投げたナイフに呼んだ雷も光の精霊の力だった。

いつもは専用の符を投げるのだがこんな風のある土地ではナイフの方が都合が良かったから利用させてもらった。

実は情けない事に、まだ符などの補助なしに雷を命中させられないのだ。

ジエイは自分が光の精霊の加護を受けている事を知っている。

けれど、本当は魔法はあまり好きじゃなかった。

勉強も訓練もサボっているから補助がないと精霊をまともに呼び出すことも難しい。

それでも普通よりも簡単な補助で足りているのは精霊の方が積極的に手を貸してくれるからだ。それを考えるとちよっと精霊達に申し訳ない。

(やつぱり、もうちよい真面目に魔法も勉強するかなあ……)

ジエイの家系はこの大陸に割と古くから存在するらしく、そのせいか光の精霊の加護を受けている者が生まれる事が比較的多い。

兄弟は皆金髪で、中でも三番目の兄はジエイとよく似た輝くような金の髪の毛の持ち主だ。

その長く美しい髪の毛の示すまま、光の精霊に愛され才能を開花させた彼は王都の神殿で神官をしている。

柔らかな笑顔や気品に満ちた物腰が評判で将来を囑望されているらしいと聞いた。

だから、ジエイが生まれた時も彼の髪は誰にも感動を与えなかった。

三番目の兄と似ているな、と周囲に言われただけだ。

剣の訓練をしても、学問を学んでも、精霊に愛されても、ジェイはいつだって何をしてでも二番煎じだった。

拳法を始めたのも元はと言えば、それに兄弟の誰もが興味を示さなかったからだ。

だから、光の精霊に愛されてもちつとも嬉しいと思った事は無い。ただ、そう告げたジェイをシャルだけが怒ってくれた。

『バカねえもう！ 私達みたいなのはね、手にした物は全部使つての上がるしかないのよ？ せつかくの数少ない祝福を、自分の物に出来るよう精進しなけりゃ勿体無いじゃないの！ だからあんたは何時までたつても弱っちいのよ！』

そう言つてシャルに尻を叩かれたから、かろうじて幾つかの魔法を覚えたのだ。

ジェイの戦い方に合うように調べて工夫して、色々なアドバイスをくれたのもシャルだった。

『あんたは頭悪いんだから、短い呪文にしないと絶対使えないわよね』

それが今、彼女の所へ行く為の役に立ってくれた。

けれど、拳だけでは得られなかった勝利はやはりジェイにほんの少し苦い思いを残す。

(弱いのが悪いんだから仕方ないよな)

本当に、シャルの言つた通りだ。

やっぱり自分は弱い、とジェイは改めて思う。

弱いんだから、使える物は何でも使うのだ。

ここで負ける事を考えたら魔法に対する自分のちつぽけな矜持などなんだというのだ。

ジェイは自分の中の苦い思いをぐつと飲み下すと頬の血を服で拭いて歩き出した。

さつきから川の中が静かな事をいぶかしんでそちらを見ると、どうやらアロナは気を失っているらしくかるうじて岩に引っかかってそこに止まっていた。

助けるべきか、と一瞬迷う。

けれど、それよりも行かなければという気持ちの方が勝った。

足元に落ちていた棍を拾って川に向って投げる。

投げられた棍はカン、と固い音を立てて岩に引っかかってどうにか彼女の体を支えた。

それだけ確認すると、くるりとジェイは踵を返した。

助けられないのか、と胸の内で囁く声がある。

死んでもいい、とそれに答えた。

自業自得だと無理矢理思う。

運がよければ目を覚ますだろうし、ひよつとしたら強制送還されるかもしれない。

ジェイは迷いを振り切るように走り出した。

死んだら、その死を背負おう。

全部を助けたいなんて偽善は言わない。

大事な物はその先にはない。

いつだってあの炎に追い立てられるように導かれ、叩かれながら助けられてきた。

けれど、それが今は消えている。

だから今度は、自分が行くのだ。

たった一つの為に他を切り捨てる事を、ジェイはついに覚悟した。今日の前に見えるのは、紅い面影唯一つだった。

20：少年の決意（後）（後書き）

シャルはジェイのヒーローなのです（笑）
ジェイはちょっとMですね……！

21：彼の小さな悩み

ディーンは森の中を走りながら少し悩んでいた。

後ろからはまだ少し距離はあるが、背の高い大柄な男が懸命に彼を追ってくる。

ジェイと二手に分かれた時、ディーンはわざと速度を落として走って見せた。

走るのが遅そうな方を誘ったのだが、やはり彼を追ってきたのは重量のありそうな大剣使いの男のほうだった。

時々その姿をチラ、と確認して記憶を探るがやはり見たことの無い顔だと思う。

ディーンと同じ学年で大剣を武器とするものは多くない。

まだ体格的にも成長の段階としても不向きな場合が多いため、教師も生徒に勧めないからだ。

だから、幾ら生徒の人数が多くても大剣を専攻する人間にはある程度の見覚えがあるはずだった。

くわえて、同じ学年にして既にあの体格という事はひよっとするとあれかもしれない。

それならばあまり見覚えが無いのも頷ける。

人のことは言えないとは思うが、さっきの罨といい、棒を持っていた女の雰囲気といい、随分と癖のあるメンバーを揃えたものだと相手チームに感心すらする。

まあ、そもそもリーダーからして彼女なのだから妥当なメンバーが集まったのかもしれない。

だがディーンの悩みは実の所それではなかった。

(どのくらいまでなら正当防衛の範囲に入るだろうか……)
自動的に緊急強制送還されるほどはやりすぎだろうと思うが、あ
あいう無駄に体力のありそうなタイプは半端な事をするといつまで
も立ち上がってくる場合が多い。

(臆を切ってもすぐに医務室に送られるなら治ると思うが)
だがあまりやりすぎて学園側から過剰防衛で責められるのも面倒
だし、おかしな逆恨みをされてもうっとおしい。

どのくらいの怪我ならそれらをちよつと良くすり抜けられるのか。
走りながらディーンはそんな実に物騒な案件で頭を悩ませていた。
そのまま少し走り続けていると、前方に少し開けた場所が見えた。
どうやら年を取った木が倒れた為にできた空間らしい。朽ちかけ
た倒木が転がり、周囲には若木が茂っているがちよつどいいスペー
スだ。

ディーンはその場で立ち止まると相手が来るのを待った。

「くっそ、やっと、止まりやがった、か」

ゼエゼエと呼吸を荒げながらやっと男が追いついた。

(このくらいで息が上がるならたいしたことはないな)
すぐに終わらせよう、とディーンは決める。

木々の隙間からはちよつどいい具合に日が差し込み、周囲の木々
や自分の影を濃くしている。

「抜け！」

そういつとモースは背中に背負っていた大剣を抜き放ちディーン
へと向けた。

ディーンもそれに応えて一応剣を抜く。

だがその構えにはまるで気迫がなかった。

(怯えてやがるな……)

モースはいつものようにそう判断した。

同学年の生徒は彼を見るといつもその体格や持っている剣にしり込みをするのだ。

こいつはもう少し骨があるかと思っただが、所詮はこんなものだろう、と勝利を確信してモースはニヤリと笑った。

しかし不意に、ディーンが口を開いた。

「留年組か？」

モースはその唐突な質問に一瞬ぼかんとした顔をし、次に思いきり渋面で答えた。

「だったらなんだ！ 老けてるとでもいいたいのか！？ 年下だからって手加減しねえぞ！」

「いや、別に。確認しただけだ。ただ、何年留年しているかは気になるが」

モースの顔に血が上る。それは彼にとって完全に地雷だった。

「俺が何年留年しようと思関係ねえだろうが！ すぐに気にならなくしてやるよ！」

ブオン、と風を切って大剣が迫る。

そのまま受ければ剣は弾かれ下手をすれば腕の骨が折れるほどの勢いだ。

（怒る所を見ると少なくとも一年じゃないだろうな。三回目くらいか？ 学科での留年だろうか）

単なる好奇心からそんな事を考えながら、ツ、と一歩後ろに下がって間合いから外れる。

ディーンの鼻先を剣先が通り過ぎ、後からきた風が髪を揺らした。「チッ！」

バサツと音がして彼が振り切った剣の先にあった若木がぱっさりと切り落とされた。

「！」

それに目を留めたディーンに気づく事もなくさらにモースは剣を振るう。

デーンがその剣をひよいひよいと避ける度、バサ、バキ、と痛々しい音が森に響き、力任せのモースの剣は森の木を折り、削り、切り落とした。

「……木が」

「木の心配なんてしてる余裕あんのかあ？ さっきから逃げてばかりじゃねえか！」

モースはそう言っただけで、獰猛に笑うとまるで見せ付けるかのように、しっかりと根付き始めたばかりの若木を踏みつけた。

彼が暴れた為、日の光を受けて育っていた草花も既に散々に踏みつけられ蹴散らされていた。

デーンはその光景に思わず眉を寄せる。

「……アルシエレイアが」

「ああ!？」

ガキインツ！

甲高い音がして剣と剣がぶつかった。

デーンが始めてモースの剣を避けずに受け止めたのだ。

ギチ、と絡み合った剣が嫌な音を立てる。

チャンスだ、とばかりモースは剣を押す手に力を込めた。

長剣ならその重さから言ってもたやすく押し負かせるだろうと思っただのだ。

ぐぐぐ、とモースの剣がデーンの顔に近づく。

モースはデーンのそのいけ好かない取り澄ました顔にせひとも傷の一つでも付けてやるつもりだった。

だが剣の方に意識を集中していたモースは気づかなかった。

地面に落ちる二人の影が重なり合い、そこからひゆるりと何かがモースの影に移ったことに。

それによって自分の影がデーンのそれよりも一色濃くなったことに。

次の瞬間デイーンがふっと剣から力を抜いた。

(力尽きたか！)

歡喜を顔に滲ませてモースは止めとばかりに剣に力を込めた、つもりだった。

「!？」

異変はすぐに起こった。

腕が動かないのだ。

幾ら筋肉に力を込めても、体ごと傾けて体重をかけようとしても、自分の体がピクリとも動かない。

モースの体は彼の意思に反して突然動かなくなり、完全に硬直してしまった。

困惑するモースをそのままに、デイーンはすつと身を引くと剣を鞘に納めた。

そしてモースにも命令をする。

「剣をしまえ」

(何をバカな)

モースはそう言おうとしたが口すらも開かなかった。

それどころか、次の瞬間モースは更に驚愕した。

自分の腕が勝手に動いて剣を背中の中へ納めようとしているではないか。

パクパクと口を動かして抗議しようとするがそれすらも敵わず、己の意に反旗を翻した腕はそのまま背中へと回り、丁寧に剣を鞘に納めてしまった。

カチリ、と留め金までかけた腕は仕事が終わるとまるで次の命令を待つかのようにだらりと垂れ下がった。

(何をしゃがった!?)

問いただしたくてもモースの口からは荒い呼吸が漏れるだけだった。

それを無視してディーンは足元でぐったりとうなだれる花を見つめ、そつと手を伸ばして植えなおしてやった。

「……アルシエレイアが悲しむな」

ディーンは相手に好き勝手に剣を振らせた自分を反省していた。すまない、と小さく森に向かって謝ると立ち上がってモースに向き直る。

今やモースは得体の知れないものに対する恐怖で精神までもが完全に硬直していた。

彼はディーンの事をただの長剣科の若造だと思っていたのだ。

流石の彼でも今自分を捕らえているのはきつと魔法だろう、と予測はついたが相手が魔法が使えるなんて聞いてない。

コーネリアからも事前に相手チームについて簡単に聞いてあったが、魔法を使えるのは女達だけだと言われていたのだ。

（卑怯だぞてめえ！）

口が利けたならそう怒鳴ってやりたかったがそれはやはり叶わなかった。

ディーンはこの相手をどうするか少し考えた。

殴って気絶させても良いが打たれ強くてすぐ目を覚まされても困る。

だがすぐにそれよりも面倒のない方法を思いついた。

「少し眠っていてくれると助かる」

ディーンの声に呼応してザワ、とモースの影が動いた。

陰からひゆるりと細い手が伸び、見開いたままのモースの目をそつと覆う。

「……そうだな、ああ、いや永遠でなくていい」

さらりと物騒な事を言われ、視界をふさがれたモースの体に震えが走る。

ディーンはそんな事は無視して精霊へと願う言葉を考える。

「一日……では少ないか。先に目を覚まされてある事ない事言われ

ても困るな」

人間の定める善悪も、力の加減も精霊には関係がない。

して欲しい事の範囲をきちんと定めなければ、彼らは愛した人間の命令にはすぐにやりすぎる。

このままにしておけばそれこそモースは永劫の闇の中で眠ったままになるところだ。

それが精霊魔法の恐ろしさの一つだ。

「長すぎても魔法医がどうにか目を覚まさせるだろうしな。ではできれば七日くらい眠って、今の事は全て忘れると良いだろう」

その言葉に呼応した闇がまたぞろりと動く。

しゆる、と衣擦れにも似た音を立てて影はすっばりとモースを包み込んだ。

一瞬だけ完全に彼を黒く覆った、と思った途端、影はまたひゆるりと離れる。

ドサリと重い音を立てて、モースの体はようやくその場に倒れる事を許された。

倒れた彼はピクリとも動かず、いびきもかかないほど深い眠りに落ちていた。

ディーンはそつと彼に歩み寄った。

ディーンの足元、再び交わったモースの影から、それはまたディーンの影へと帰っていく。

「……重い」

ディーンはモースの重い体を乱暴に蹴り転がして仰向けにした。

鎧下のシャツの襟に付けられた小さな銀のバッジをそつと摘む。

真ん中の小さな飾り石をぐつと押すとカチリ、と音がした。

「リタイアだ」

そう告げてさつと離れると、ウン、と音がしてモースの周りに魔法陣が展開された。

陣がパアツと一瞬の強い光を発する。それが治まった時にはもうモースの姿はどこにも見えなかった。

ディーンは足元を見た。影はまたいつものように濃くなっている。「ありがとう。お疲れ様」

そう言っただディーンはずっと傍にいた闇の精霊を開放した。それでも彼らが遠くへは行かない事はわかってはいたけれど。

周囲の草木を直してやれない事をすまなく思いながらディーンはまた走り出した。

また少しばかり悩みを抱えながら森の中を走る。

(こんなに大した事がないならジエイに譲ってやれば良かった。…

…こんな風では剣の腕が落ちるかもしれない)

簡単過ぎた勝負は実に退屈だった。

先を急ぐのだから仕方ないが、物足りなさは否めない。

帰ったらジエイを訓練に付き合わせよう、と考える彼の足元の影は未だ濃い色のままだった。

21：彼の小さな悩み（後書き）

ディーンは実は相当なマイペースです。

22：森の王

アーシャは黙々と森の中を西に向かって歩いていった。

張り出した木の根や段差を飛び越え、時には木の枝に掛って渡っていく。

彼女の歩みは四人と一緒に歩いていた時とは比べ物にならないくらい早い。

歩いている、というよりは、もはや走っているといってもいいような速度だ。

この分なら予定通り昼くらいには目的地に着くはずだった。

アーシャが歩いていく側を大きな熊が通りかかった。

だが熊は彼女をちら、と確認しただけで興味を失ったように歩き去っていく。

熊には彼女の姿が、リスなどのように小さすぎて腹を満たす対象にならない生き物に見えているかのような態度だった。

勿論、森の精霊が彼女の願いを受けてそう見せてくれているのだ。アーシャはそんな風に、森の小さな生き物の一員になって森を走り回るのが好きだった。けれど同時にそんな自分を少しずるい、といつも思ってきた。

彼女は森の生き物を食べるのに、森の生き物からは食べられないように精霊の力を借りている。

そんな、森の命の連鎖から外れた自分がずるい気がしていた。

それを育ての親に言うと、彼は困ったように笑っていた。

『それは仕方ないじゃろう。アーシャは人間なのじゃから。牙や爪の代わりに知恵を使って生き延びるのが人間のやり方じゃ』

精霊に力を借りるのはずるい事ではないよ、と優しい声は何度も言った。

『生き物は何だって自分の持てる力を使って、他を喰らい、食われぬようにして生きていく。その力が衰えた時が、その身を地に返し、闇の神の御手に還る時じゃ。それまではどの生き物も、精一杯生きる義務がある』

だから諦めないでくれ、と何度も願うように告げられた。

『命としての役目を果たし、闇の神が迎えに来るまで生きるのだよ。ただ失うことに慣れてはいけない。理不尽に奪われる事を受け入れてはいけない。精一杯、生きなさい』

今の少女は、失った事から始まった命だった。

それでもまた与えられたものを、今度は奪われて、失った。

もう失いたくないと思う気持ちは、もう得たくない気持ちへと繋がっていた。

その気持ちのまま、少女はただ情性で生きてきた。

そして今、ここにいます。

この森に来て、どこにも仲間の気配を感じられないほど彼らから離れたのは初めてだった。

人間の気配はどの動物とも違う独特のものだから近ければアースヤにはすぐにわかる。

動物のように澄んでいたり、研ぎ澄まされたりしていない、雑多で騒々しい混沌を含んだような気配。

学園にいた時は、どこに行っても感じられるそれが鬱陶しくて仕方なかった。

だから彼女は、少しでも人気の無い所を選んで昼寝ばかりして

いたのだ。

こうして一人で森の中にいると周囲には密やかな生き物の気配が漂うだけでとても静かだ。

でも、同時にそれを少し物足りないと思うのはどうしてだろう。

最初の夜、他人のいるテントで眠れなくてこっそり木に登って眠った。

けれど、今では隣で眠るシャルの寝息を聞くとなんだかほっとする。

人の気配を温かいと思ったのは初めてだった。

アーシヤは森を歩きながら幾つもの問いかけを自分に投げかけていた。

一人で歩く森の景色が、以前ほど輝いてないのは何故だろう。

精霊の歌が前ほど眠りを誘わないのは何故だろう。

一刻も早く、行って帰ってきてやりたいと思うのは何故だろう。

考えても考えても、答えは遠い。

(……わからない事ばかり)

答えが出ないまま、アーシヤはただひたすら西を目指して歩き続けた。

太陽が頭の上に近くなった頃、アーシヤは突然森を抜けた。

「！」

繁みを掻き分けて踏み出した途端に、固い地面に足がついたのだ。その感触にびっくりして踏み出した場所を良く見ると、草に埋もれてはいるが平らな石が薄っすらと見える。

目の前を見渡せば、森の中にぽっかりと石畳が敷かれた空間が広

がっていた。

「……ついた、のかな？」

恐る恐る繁みを掻き分け、石畳を踏みしめる。

久しぶりに踏む人工的な地面はなんだか落ち着かない。

森は整然と並べられた石畳によって広く半円に切り取られ、見上げれば青い空が見えていた。

アーシャの出てきた所から広場を真っ直ぐ西へ進んだ突き当たりは切り立った崖になっていた。

崖はどうやら山の一角らしかった。

その切り立った崖の一部におかしな色の部分が見える。

茶色い岩肌から浮かび上がるように、一部分だけが長方形の緑色をしているのだ。

(あれが石版かな?)

きっとそうだろう、と思いアーシャは歩みを速めた。

念のため周りを見回して危険はないか慎重に確認しながら歩く。

切り立った崖の上から吹き降ろす風が強くて、体重の軽い彼女には歩きにくいという以外は何も障害はなさそうに見えた。

そのまま身を低くして風を耐えながら歩く。

不意にその頭上に影がさした。

ハッ、と気付いた時にはもう遅かった。

バサバサッと大きな羽音がして次の瞬間強い風が小さな体を襲った。

「っ！」

とっさにその場にしゃがみこみ身を縮めたが、あまりの風の勢いに一瞬体がふわりと浮く。

何が現れたのか確認しようにも目も開けられなかった。

「うっ、ひゃあ!？」

アーシャはそのまま風の勢いに負け、今来た方に飛ばされた。

せめて少しでも衝撃を小さくしようと頭を腕でかばってできる限

り身を縮める。

「ごろごろと転がった体がドン、と何かに当たった。

「……」

じつと身を丸めたまま耐えたが、それ以上の衝撃は起こらない。ぶつかった物もあまり固くないもののように体はそんなに痛くない。

「……？」

静かになったことをいぶかしんでアーシャはそつと目を開けた。いつの間にか風も弱くなっている。

目を開けて、最初に視界に入ったのは何だかよくわからない茶色と白のものだった。

大きな白が目の前を覆い、大きな茶色に自分の体が寄りかかっている。

「……っ!？」

それが何なのか気づいた瞬間、アーシャの顔から流石に血の気が引いた。

彼女は今間違いない、何か大きな生き物の懐にいる。

何故なら寄りかかっている茶色い物はどう見ても毛皮で、しかもほんのりと暖かい。

上を見上げるのがたまらなく怖い。が、そのままにいる訳にもいかない。

アーシャは恐る恐る後ろを向き、そつと視線を上に向けた。

金色の巨大な瞳と目が合う。背中を冷たい汗が流れた。

巨大な目は面白そうに目の前の小さな生き物を眺めている。

アーシャが転がらないよう支えてくれていたのは彼(?)の茶色く太い左前足。

アーシャを風から守るように覆ってくれていたのは、真っ白い翼。

今彼女を見つめているのは精悍な驚の顔。

アーシャはその生き物を知っていた。

育ての親が色々な事を語って聞かせてくれた中に登場し、学園の図書館で読んだ古い書物でも見た事のある生き物。

鷲の頭と獅子の体を持つ、力強く賢き獣。

時に欲深い人間を罰する事もあるという、それは。

「グ……グ、リュプス？」

つまりところそれは、いわゆるひとつのグリフォンだった。

グリフォンは、その横たえた獅子の体の脇にアーシャを捕らえている。

アーシャは古い本で読んだはずのその幻獣の特徴を思い出そうと必死で考えた。

だが空回りする頭からは役に立ちそうな事が何一つ出てこない。

珍しく彼女は非常に焦っていた。

流星に何の準備もなく、いきなり相手の懐に迎え入れられるとは思っても見なかったのだ。

（こ、言葉って通じるんだっけ？ 現代語？ いや、古代語？ あ

あ、でも何を言えば……）

何かしなければ、と焦りまくった挙句ようやく口を突いたのは、至極平凡な言葉だった。

『「……こん、にちは』

「……」

（は、外した!?)

やっぱりだめか、とアーシャは必死で退路を探ったがとても見つかりそうに無い。

猫の前足に捕まえられたねずみとはこういう気分だろうか。

サイズのにも近い比率だな、と現実逃避したがっている頭のどこ

かがそんな事を呑気に考えた。

不意にぐい、と大きなくちばしが彼女に近づいた。

(ひゃああ！)

ついに自分も連鎖に組み込まれる時が来たのかとアーシヤは本気で覚悟して固く目を瞑る。

ぶふあ、と生暖かい息が顔にかかった。

『こんにちは』

頭の中に響いた声は雄々しく、落ち着いていた。

その声の意味が一瞬分ならず目を開ければ、自分を見つめたままの金の瞳とまた目が合った。

「…………え？」

グリフォンは良く回る首をぐるりと傾げるとアーシヤの反応を確かめるような顔をした。

そしてまたアーシヤの内に声が響く。

『ふむ、すまんが少し離れてくれるか？ 我は近いとよく見えないのだ』

「う…………あ、は、はひ！」

どうやら声の主は間違はなく目の前のグリフォンらしい。

アーシヤは転がるようにその前足の上から抜け出した。

心臓がバクバクとうるさい。

こんなにドキドキしたのはものすごく久しぶりだ。

アーシヤがヨロヨロと抜け出すと、グリフォンは翼をたたみ、のっそりと立ち上がって今度は体全体で風をさえぎる位置に座った。

少し離れるとようやくその体の大部分がアーシヤの視界に納まる。改めてその姿の全景を見る。

それはとても大きく、力強く、美しかった。

「綺麗…………」

ぼかんと見上げるアーシヤを鳥の瞳が面白そうに見つめる。

『これはまた、随分小さなお客が来たものだ。しかも我が声が聞こえるとは。そなた一人かね?』

また頭の中に声が響いた。

どうやら彼は声帯ではなく念話を使うようだ。

戸惑いはしたが、幻獣の事はほとんど何もわかってないに等しいのだからそういうこともあるのだろうと無理矢理納得する。

精霊の声も同じように耳ではないところで聞いているのでそれと同じだと思えば順応も難しくくない。

『う……ん、えと、仲間は森に。あ、あの、私はアルシエ……グラウルの娘、アルシエレイア、です』

アーシヤは古代語の丁寧語を一生懸命思い出しながら口に出し、慌ててペコリと頭を下げた。

『これは丁寧にどうも。我らの言葉も使えるとは、ますます驚かされる。生憎我は名前を持たぬが、好きに呼ぶと良い。かしこまらなくともかまわぬ』

『う、うん、あの、助けてくれてありがとう』

アーシヤの言葉にグリフォンは軽く首を振った。

『元はと言えば我が急に降りてきて飛ばしてしまったのだ。まさかこんなに小さな者が来るとは思わなかったから、すまなかった』

『うっん、びつくりしたけど大丈夫、です。あの、貴方がこの森の主?』

『まあ、そうだな。この森は私の狩場だ。普段は山の上に住んでいる』

それがか、とアーシヤは頷いた。

川を渡ってから何度か森に、奥地のことについて聞いたのにグリフォンの事など木々は言わなかった。

普段居ないならわからなかったのも頷ける。

『学校の課題とやらで来たのだから? 何故一人なのだ?』

『課題って……そんな事まで知ってるの?』

驚くアーシャにグリフォンは大きく頷いた。

『ここは元から私の狩場の一つだったが、少し前に人の魔道士がやってきた。この森の調査に来て我と出会ったのだが、彼は私と言葉が通じる者だった。それが学園とやらの創始者の一人だ』

アーシャは目を見開いた。

学園の歴史はもう百年を越える。

それを少し前と言うのはさすが幻獣というべきだが、創始者と出会ったというのも驚きだった。

『我等は気が合つてな、簡単ではあるが契約をしたのだ。

彼は森を包む結界を張り、ここを保護する。我はこの森を学園とやらの貸し与え、森に入ってきた子供らに軽い試しを与える』

そういつてグリフォンは嬉しそうに羽をばたつかせた。

アーシャはその風圧で少し後ろへ押されたがどうにか踏ん張った。

『思えば彼以来だ。我と話ができる者が訪れたのは』

『い、いつもはどうしてるの？』

『簡単だ、我は先ほどのようにここに舞い降り、そして動かない。

子供らが通じなくても話しかけたり、挨拶をしたりすれば合格。

黙って飛び去るのみだ。そっと脇を通り抜けるのも良し。何も言わず攻撃してきたら不合格で、適当にあしらって追い返す』

やはり、とアーシャは思った。

もし知恵ある獣がいるのならきつとそういう趣旨の課題なのだろうと思つていた事はどうやら正解だったらしい。

これなら、後は石版の文字を写させてもらうだけでいい。

しかし、安心したのは一瞬だった。

『そこまでで、半分は合格だ』

『え？』

それはどういう意味なのか、と問う前にグリフォンがゆったりと立ち上がった。

『後は自分の目で確かめるが良い。珍しい人の子よ』

彼はそういうと石版の方へと歩き出す。

翼を半分広げて風を遮ってくれている所を見ると付いて来いというこころらしい。

アーシヤは慌ててその後を追った。

少し歩くと岸壁がどんどん近づいてくる。

崖の目の前までくると、それは見上げると首が痛いほどの高さだった。

視線を戻すとその下の方に、アーシヤの二倍くらいの大きさの巨大な緑の石版が崖の壁に埋め込まれるようにして張り付いている。

石版はつやつやと輝き、半透明の美しい緑色だった。

表面には古代文字が書き連ねられている。

『綺麗な石……これが、課題の石版？』

『そうだ。これは我からの試練であり、贈り物。さて、これが読めるかねグラウルの娘』

アーシヤは二、三步離れて大きな石版を見上げた。

掘り込まれた文字を一つ一つ目で追う。

『え……と、我が慕わしき風の兄上、我ら……我ら幼子の』

ぶつぶつと声に出して文字を追い、最後の行に差し掛かった時アーシヤの目が見開かれた。

『これ……これは』

『わかったかね？』

『……写すだけでは、ほんとの正解じゃないんだね。でも、これじゃ……仲間を、シャルを、ここまで連れて来なきゃいけない』

『正解だ。過去、この文字を読み、本当に課題を解いた者達は数えるほどだ』

文字を写すだけなら意味が判らなくても書き写せばいい。

だから、大半の学生は意味も判らないままそれを写して帰ってしまっただらう。

だが、この文字は最後まで読めばそれだけでは駄目な事がわかる。書かれている事はとても簡単だった。読めさえすれば別に難しいことではない。

ただそこに書かれている事を行う為には仲間全員がここまで来なければいけない。

たったそれだけの事が今の彼らには何より難しい。

(……シャル)

アーシャは胸の内でも今誰より頑張っている彼女の名を呼ぶ。

また難題が増え、途方にくれた気分だった。

思わず膝を抱えてその場にしゃがみこむ。

その様子をグリフォンは面白そうに眺めていた。

22・森の王（後書き）

結局アーシャの方を先にしました。
次はシャルですが直しを入れたりしてちょっと難航してます。

23：不本意な戦い（前）

「清らなる水よ その清き御手にて 我が敵を絡め取れ！」
「大地よ！ 我が眼前に盤石なる壁を成せ！」

ザン、と水が壁にぶつかる音が周囲に響いた次の瞬間、地面から盛り上がっていた土の壁は水に負けてぼろぼろとその場に崩れた。どうにか魔法は相殺できたが、思ったよりも壁の強度を上げられなかった事にシャルは舌打ちをした。予定では壁はもう数回は持つはずだったのだ。

突然目の前に現れたコーネリアと対峙したシャルは、先ほどからこうやって何回か魔法をぶつけ合っていた。

しかしどう見ても押されているのはシャルの方だ。シャルは防御ばかりで攻撃魔法を使えないでいる。その防御の魔法もこうして作った端からあっさりと崩されてしまう。

対してコーネリアが使っているのは捕縛の為の魔法が多い。つまり彼女は本気ではないという事だった。

恐らくは何かの時間稼ぎなのだ、と気づいてはいるが、それはこちらにも好都合でもある。

（ジェイとティーンが戻ってくるまでは、持ちこたえないと……）

シャルはまた始まった頭痛と戦いながら必死でイメージを練った。「光よ！ 我が身を包む堅固なる鎧と成れ！」

シャルの声に合わせて光が彼女の周囲に集まる。

しかしその体を包むかと思われた光は、突然ふうつと風に吹かれたかのように消えてしまった。

「なっ！？」

その様子を見てくすくすとコーネリアが笑う。

「随分調子が悪いみたいですね？ やっぱり火しか取り得がないと大変ですわぁ」

その言葉に、シャルはぐっと唇を噛んだ。

普段火の魔法ばかりを使ってきたツケだ、と苦々しく思う。

火のようにたやすく燃え上がり変化しやすい属性に慣れてしまっているから、他の属性のイメージを瞬時に掴む事が出来ないのだ。

特に、固いものや変化に乏しいものをイメージする事が、頭痛と戦う今の状態では上手く出来ないでいる。

それならば火に近い光を使おうと思ったが、やはりそれを固定させることが出来なかった。

詠唱魔法において呪文はあくまでも起こす現象のイメージを明確にする為の呼び水でしかない。唱える人間によって少しずつ言葉が違うのもその為だ。

だから幾ら呪文が正しくても、自分の中に魔力を注ぎこむ器たるイメージがしっかりと作り出せなければ現象はすぐに霧散してしまう。

頭痛などはその最たる敵の一つなのだ。

(こんなんじゃ皆に顔向けできないわね)

自嘲気味に笑って、シャルは杖を握りなおした。

ふと思いついて胸元を見る。そこには学校支給のバッジが着いている。

シャルはそれをプチ、と外すとポイと脇に放り投げた。

本当は規則違反だがこの際仕方ない。負ける気はないが、うっかり怪我でもして強制送還されたらたまったものではない。

目の前の少女と向かい合ったまま、じりじりと時間が過ぎる。

(遅いわよ、ジエイ)

脳裏を、金色の短い髪と明るい笑顔がよぎった。

ス、とコーネリアが杖を振り上げる。また仕掛けてくるつもりだ。何か手はないか、とシャルは必死で考えた。

火は柔らかいイメージで使う場合が多い。できれば火に近い何かを、と必死でイメージを探る。

ふと、コーネリアに破壊された水浸しの土の壁の残骸が目に入った。

(これだ！)

シャルは高らかに呪文を唱えた。

「大地よ！ 其は水を得て柔らかき波となる！」

途端、足元の土がぐにやりと崩れた。

ざあつと崩れた土は柔らかかな泥となりコーネリアへと押し寄せ。崩れた泥が地面を走る姿は炎が地を舐める様子にどこか似ていた。

これも詠唱魔法の利点だ。イメージさえ固められれば即興でも、多少の無理を通す事もできる。

(行け！)

しかし即座にコーネリアも迎え撃つ呪文を唱えた。

「清らなる水よ 我が前に集いて 敵を穿つ槍となれ！」

たちまち空中に生まれた無数の氷の槍が地面に突き立つ。

けれど氷柱では柔らかかな泥の勢いを止める事は出来なかった。

泥はその間を縫って走り、たちまちコーネリアの足元を埋めた。

「きゃあつ！」

シャルは泥をかき集めてコーネリアの腰までを覆った。

(火が使えれば……！)

火が使えたならその泥を乾かして完全に固めてしまう事も出来たのに、と思うが仕方ない。

せめて更に泥を増やして重みで足止めするしかない。

シャルの意思に導かれて更に泥が増え、コーネリアに向かって押し寄せた。

「くっ、清らなる水よ！ その清き流れで全ての穢れを押し流せ！」

次の瞬間、コーネリアの声に答えて川の水が溢れ出した。

泥に固められた彼女に向かって、かなりの勢いの水が流れてくる。

「大地よ！ 彼女の為にその身を守る壁を成せ！」

とっさにシャルは防御の為に呪文をコーネリアのために使った。

コーネリアの周りに土壁が立ちはだかり、コーネリアが川から呼んだ水を弾く。

強度の足りない土壁はすぐに崩れ始めてしまったが十分に水をせき止めた。

その隙にコーネリアに絡んだ泥はじわじわと更に彼女を深く包む。

気がつけばコーネリアは胸までを重たい泥に覆われ動く事ができなくなっていた。

「こつ、この非常識！ 敵に防御の魔法を使うなんて！」

自分についた泥を水で洗い落とすつもりだったコーネリアは、シャルの予想外の行動に驚き、頭にきたらしい。

「ふん、カナヅチのあんたが水に流されたらいけないって、助けてあげたのよ」

「自分の放った水で流される魔道士なんているわけないでしょう！」

怒鳴りながらもコーネリアはシャルの魔法の使い方に内心では驚いていた。

シャルの強さはこの咄嗟の機転にある。

いざと言う時の判断力や魔法の選び方が優れているのだ。

その点ではコーネリアはまだシャルに劣っている事を認めざるを得ない。

そんなコーネリアに軽口を叩きながらシャルは頭の中で必死で自分に残された手段を探っていた。

火は絶対使用禁止、土は強度不足、光はいまいち反応薄し、風は……得意な属性だが、さつき使おうとしたら自分の中の魔力が煽られて暴走しそうな嫌な予感がしたから却下。

あとは水と闇は大の苦手だ。

(まったく、最悪ね)

せめてこの頭痛がなかったら大分違うのに、それは治まるどころか段々ひどくなるばかりだ。

それでもシャルは必死で自分の中でイメージと魔力を練りながらこの後の手を考えた。

これ以上魔法戦を挑んでも今の状態ではこちらが消耗するばかりで、恐らくいずれは彼女の魔法に捕らえられてしまう。

コーネリアは今杖こそ振れないが呪文は唱えられる。じきにあの泥も崩されるだろう。

それまでにテントの所まで行けば結界に逃げ込める。

だがそこまで考えてそれにも不安があることを思い出す。

そもそもコーネリアがここに一人で来るはずはないのだ。

さっきの悲鳴は恐らくジェイとディーンをおびき寄せて自分達を分断する為のもの。

となれば、あっちに何人いるのかはわからないが、この近くに他に仲間がいないとも限らない。

森に逃げ込んだ自分を待ち伏せする者がいるかもしれない。

(けど必ずそうとは限らないし、テントの方は無理でも森に逃げ込めば川は遠くなるからその水は利用しにくい。木を盾にもできそうね)

よし、とシャルは心を決めるとさっさとそれ以上の魔法を諦め、即座に踵を返して走り出した。

熱を持った体は重いが少しの距離なら走れない事はない。

「あっ、お待ちなさい！ もう！ 清らなる水よ！ その清き流れで全ての穢れを押し流せ！」

今度はコーネリアの呪文の効果はちゃんと彼女に届いたらしい。けれどその泥が洗い流される前にシャルは森の中に逃げ込む事に

成功していた。

「清らなる水よ！ 我が穢れを洗い流したまえ！」

川から押し寄せた水はコーネリアの足を開放した。

彼女はもう一度呪文を唱えて、流れてきた水で今度は上のほうも綺麗に洗い流す。操られた水球はブラシのようにコーネリアを撫でて泥を落とす。

しかしローブに絡みついた泥は完全には落ちず、その上水浸しでどっしりと重たくなってしまった。

「もう許しませんわ！ よくも私を泥だらけに！」

コーネリアは重たいローブを手で掴みながらシャルの後を追って森に向かって走り出した。

シャルは森の中に分け入り、茂みを掻き分けて走った。

あまり遠くへ行く事は体力的に難しいと判断して、視線を走らせて隠れる場所を探す。

格好悪いが仕方ない、と自分に言い聞かせて木の根を乗り越えて奥へ走った。

非常事態にはプライドをたやすく捨てて見せる柔軟性もシャルの持つ強みだ。

テントの方から外れた方向へ来たためか辺りに人影はない。

賭けの第一段階は成功したらしかった。

そのまま目の前の木の後ろへ、と思った瞬間、

「きゃっ！」

ドサツとシャルはその場に倒れこんだ。

足がもつれ、木の根に躓いたのだ。

「いったあ……」

シャルはどうにか起き上がると、足を引きずりながら目指してい

た大木の影に座り込んだ。

膝を見ると木の根で擦ったらしく血がにじんでいた。体のあちこちを簡単に点検したが傷はそれだけで足も挫いたりしていない。

まだ走れる、と思ったが一度座り込んだ体は急に重くなり、立ち上がる力が湧いてこない。

だが直にコーネリアが森の中へ追ってくるだろう。ここはまだそんなに距離が離れていないから見つかる可能性は高い。

（仕方ないわね。見つかったらまあ、その時はその時よね）

シャルはあつさりとこれ以上の逃亡を諦め、ひとまず呼吸を整える事に専念した。

すう、と深呼吸すると森の涼しい空気が熱を持った体を少し静めてくれる。

ふと視線が自分の手首に落ちた。

アーシャがくれた蔦を編んだ腕輪が目に入る。

大丈夫だ、と言っていた少女の姿が思い出される。

（アーシャが戻ったら誰もいなかった、なんて事には絶対させないんだから）

シャルの為に一人で奥地を目指してくれた彼女の厚意を無駄にはさせない。

戻ってきたら全員強制送還なんて笑えない事この上ない。

「……光よ、一時その輝かしき道を曲げ、愚者の目から我が姿を隠せ」

シャルは光を屈折させ姿を隠す魔法を使った。

キラキラと彼女の体の周囲が一瞬輝き、そしてそれも消える。

今シャルがいる所を誰かが見ても、恐らく何の変哲もない森の風景に見えるはずだ。

それは一つの属性でどんな現象が起こせるのか学ぶという授業で、

理論だけを学んだ魔法の一つだった。

シャルは姿を隠す事なんて趣味じゃなかったから実際に使ったのはこれが初めてだ。

魔法とは、在り得ることを理解し具現させ、そしていつかその壁を越え在り得ない現象を具現させてこそそのものだという。

シャルはまだやつとその奥への入り口に立ったに過ぎない自分を改めて認めた。使った事のない魔法なんて山ほどある。

地味だとか趣味じゃないとか、くだらない理由で無視してきた魔法に今助けられている。

（火が……恋しいわ。火でも、きつともっと色々な事ができたかもしれないわね）

燃やすとか壊すとか、気づけばそんなバリエーションばかりをシャルは増やしてきた。

火の魔法にも、在り得る現象だけにすすっかり囚われてしまっていたと深く反省する。

そんな事を考えていると、背後からガサガサと音がした。

「どこに行きましたの！ 隠れてないで出てきなさい！」

コーネリアの出現時間が大体思った通りだった事にシャルはほっと息をつく。まだ頭はそれなりに働いているらしい。

コーネリアはぶつぶつ言いながら繁みを掻き分けて奥まで進んできた。

シャルが息を潜めて隠れている場所は、途中で転んだ事もあって川原からそんなに離れていない。

しかしそれと気づかずコーネリアはきよろきよろしながらシャルの脇を通り過ぎてしまった。

（魔法効いてるみたいね、良かった……）

そのまま奥へ行くか、諦めてくれとシャルは祈る。

祈りが通じたのか、コーネリアが奥へと向かって歩みを進めたその時、

「コーネリア、コーネリアー？」

(!?)

コーネリアを呼び止める声が彼女の足を止めた。

ついさっき自分達が来た方向から、ガサガサと歩く音が近づいてくる。

「エナ？ どうしましたの？」

(仲間か……まずいわね)

エナはよたよたとコーネリアの所までやってきて、ふう、とため息を吐いた。

「テントの方はどうになりましたの？ もう終わりました？」

「そ、それが、テントを隠す結界が強くて……テント自体がまだ見つからないの」

「なんですって？」

狙いはそつちか、とシャルは納得した。

(それで魔法が大人しかった訳か……全く、ろくでもないわね)

大方荷物の準備が悪くて食い詰めたのだろうと予想がついた。

それで他のチームの食料を狙うなんて本当にろくでもない話だ。

「わ、私とローグで探査してみたけど、この辺にあるっていう大体の場所以外どうしても見つからなくて……それで、結界を張った人を捕まえてくるしかないって」

「なるほど。そうなるかどうかあってもシャルフィーナを捕まえるしありませんわね……多分結界を張ったのは彼女でしょう」

「この近くにいろの？」

「この先の森に逃げ込んだようなの。まだ余り遠くへは行ってはいはずですから一緒に探して頂戴」

「う、うん……」

少女二人は森の奥へと歩き出した。ちょうどシャルに背を向けて歩いていく形だ。

(よし、そのまま奥まで行って！)

このまま彼女達が森の奥へ消えれば自分は逃げ切れる。そうすればどうにかジェイやディーンと合流できるはずだ、と思つた矢先だつた。

「おーい、シャルー？ どこだー？」

(！?)

川原の方向から自分を呼ぶ声がしてシャルは仰天した。それは間違いなくジェイの声だつた。

「シャルー、おーい！」

ジェイはそのままガサガサとこちらのほうへ近づいてくる。

このままでは確実にコーネリア達と鉢合わせだ。

(こ、このバカ！ なんて間が悪いの!!)

立ち上がつて怒鳴りつけたいのをシャルはぐつと堪えた。

大きな動作をしたり声を出したりすればこの魔法は解けてしまうのだ。

コーネリアとエナはジェイの出現に気づいて少し離れた所で足を止めて振り向いてしまった。

シャルがハラハラと見守る目の前で、二人に気づいて近づいたジェイが立ち止まる。その位置はシャルからみれば目と鼻の先だ。

「あ、あらジャスティン様！ ご、ごきげんよう！」

「ご機嫌なんかよくねーよ。シャルはどこだ？」

ジェイらしからぬ不機嫌な声音の返答にシャルは目を見張つた。

ジェイは人にそんな口を聞くことは滅多にない。

口は悪いがそれは大抵シャル限定で、他の人間には当たり障りなく優しい普通の少年なのだ。

シャルは誰かにこんなぞんざいな口調を使うジェイを今まで見た事がなかった。

「し、知りませんわ！ 森の方へ走っていったのを見ましたけれど

……」

「あのな、いくら俺がバカでもそんな事信じるとでも思うのか？ お前ら俺達を足止めして荷物を奪うつもりだったんだろ？ だったら、シャルの相手するのなんてあんたくらいしかないはずだ」

「そ、それは……」

コーネリアは思わず言葉に詰まった。ジェイ相手にはあくまで猫を被っていたかつたらしい。

「シャルはどこだ？ どうかしたっていうなら女でも容赦しない！ いつものジェイからは想像もつかない厳しい顔でジェイは淡々と告げた。

その言葉と気迫にコーネリアとエナは思わず後退る。

「な、何も、本当に何もしていませんわ！ ただ、彼女に逃げられただけです……！」

「……そっか」

ジェイはほつとした様子を見せた。

それがコーネリアには面白くなかったらしい。

ジェイの気迫に押されはしたが、よく考えてみれば二対一なのだ。

コーネリアはそつと杖を握る手に力を込め、魔力を練った。

『聖なる光の精霊よ！ 我が呼び声に応えよ！』

「っ！？」

ジェイがシャルを追うべきか、と一瞬考えた際にコーネリアは高らかに聖句を詠唱した。

キーン、と高い音と共に一瞬彼女の周りが光る。

「光の精霊よ！ その腕を網となし彼の者を捉えよ！」

コーネリアの声に反応して即座にその目の前に光が収束した。

彼女が杖で指し示す方向へ、その先にいるジェイを捕らえんと向ってくる。

シユル、と投網のように広がる光の帯に、避けられない、とジェイが身構えた次の瞬間、

「どりゃあ……！」

ドカツ！

「どわぁっ！！？」

斜め後ろから突然の激しい衝撃を受けてジェイの体は吹っ飛んだ。
コーネリアが放った光はついにジェイを捕らえる事ができなかった。

23：不本意な戦い（前）（後書き）

シャルは多分一番頑張り屋です。
そして一番乱暴者……。

24：不本意な戦い（後）

「キヤア！」

派手に吹っ飛んで転がったジェイを見てエナが悲鳴を上げた。

気の弱い少女は巻き添えを恐れたようにさつとコーネリアの影に隠れる。

「いつててて……」

ジェイは地面で一回転した後、どうにか起き上がった。

一体何が、と振り向くと何とそこにはジェイを捕らえるはずだった光の網に代わりに捕らえられて倒れているシャルの姿があった。

「シャル！？」

「ぼさつとしてんじゃないわよ！ さつさと立って！ 逃げるわよ！」

シャルはもがきながら半身を起こしてジェイを叱咤した。

突然現れたシャルと、その行動に呆気に取られて固まっていたコーネリアがハツと我に返って声を張上げた。

「なっ、あ、あなた今ジャスティン様に何しましたの！？」

「はん、何って見てたじゃないの。飛び蹴りよ飛び蹴り！ このバカが遅く来た上にぼさつとしているから活いれてやったのよ！ 文句ある！？」

「飛び蹴り……」

自分吹っ飛ばしたものの正体を知ってジェイはげんなりとうなだれた。

何故どこにも見えなかったシャルが突然現れたのかとか他にも気になる事はあったがそれよりも飛び蹴りはショックが大きい。

自分を狙っていた魔法から助けてもらったのは確かだがもつと他にやり方というものがあったんじゃないかと文句が口から出そうになる。助けに来たはずの人間に飛び蹴りを食らわされて吹っ飛ばなんて

経験をする人は滅多にいないのではないだろうか。

遅くなったらどやされるに違いないとは思っていたが、やはりシャルの行動はいつもジェイの想像を軽く蹴倒していく。

「ちよつとジェイ！ ぼさつとしてないで、私を担ぎなさいよ！」
「お、おう！」

その声に半ば条件反射のように一瞬で立ち直ったジェイは、命じられるままに慌ててシャルの体を左肩に担ぎ上げた。

持ち上げた時に右肩が痛んだがそんな痛みは無視して走り出す。

「あつ、お待ちなさい！」

走り出したジェイの肩の上で、シャルは自分を戒める光の帯を解こうとぶつぶつと幾つかの呪文を呟いていたが、何回か試した後諦めたようにため息を吐いた。

「だめね、解けないわ……ランクは高くないみたいだけどやっぱりさすが精霊魔法ね」

「コーネリアは精霊魔法使えんのか？」

「そうよ。あんまり大したランクじゃないけど光の精霊魔法ね。参ったわ……」

「お前でも解けないのか？」

「精霊魔法つてのは、本人が解除するか、最初に限定した条件に達するか、逆属性で相殺するか、それを凌駕する力をぶつけるかくらいしか解除の方法がないのよ。後はかけた本人が意識を失うとかもあるけど……」

「つてことは……」

「デーンを探すしかないわ。あいつと合流して闇の精霊に相殺してもらうのが一番ね。私は今火の精霊を呼び出す訳にはいかないもの」

「つつても今どこにいるんだか……」

合流しようにもこの森の中では連絡を取り合う手段がないのだ。

川原を進んだジェイとは逆に森の中を走って行ったから、戻って

くるとしたら多分テントの方角からだろうとは思っ。

だが今テントに戻ればコーネリアの他の仲間と鉢合わせになる危険がある。

足が遅いとはいえ後ろからコーネリア達二人も懸命に追って来ている今、下手をしたら挟み撃ちにされてしまう。

「なあ、俺が光の精霊を呼び出して、それ解いてもらっつてのは無理なのか？」

「修行不足のあんたに呼び出せる精霊なんてたかが知れてるわ。コーネリアの精霊魔法を打ち消すのは無理ね。あんだだっけかなりの加護を持つてるんだから死ぬ気になれば助けてくれる精霊もいそうだけど、今そんな賭けしてられないわ」

ジェイがちゃんと魔法の修行もして精霊に心を開き親しくしていたなら、恐らくはコーネリアよりも遥かに強い精霊を呼べた可能性はある。

けれど、それは仮定の話だ。

「じゃあ、俺がコーネリアを気絶させるとかは？」

「それも考えないでもないけど……不利ね。あの女は精霊をもう呼び出してしまっているし、恐らくまだ傍に置いているもの。精霊は呼び出した人間の危機には敏感だから、多分すごく抵抗されるわ」
考えれば考えるほど事態は悪くなるばかりらしい。

やはり危険は承知でデーンと合流するしかないか、とジェイは進路をテントの方角へと変える。

と、その時だった。

「は、母なる大地よ、その道を行く者を その御手に捕らえよ！」
遠くからかすかに呪文が聞こえた直後、ドン、と足元に衝撃が走った。

ヤバイ、とジェイが思った次の瞬間、踏んでいた地面が突然隆起した。

「うわっ!?!」

「キヤア!」

盛り上がった地面に足を取られジェイはシャルを抱えたまま倒れこんだ。

ジェイは地面に倒れこむ寸前にとっさに体を捻りシャルを上へ逃げた。

ガツツ!!

「ッ!」

痛めた右肩に体重がかかってジェイは思わず歯を食いしばったが、かすかなうめきが漏れる。

「ちよつとジェイ? どうしたの!?!」

「何でもねえ……」

起き上がってシャルを背中にかばうとコーネリアとエナが走ってきた。

自分の足元を見れば、彼女らの来た方向からモグラの通った跡のような盛り上がった土の道が蛇行してここまで届いていた。

どうやらエナの放った地の魔法に捕まったらしい。

まだ二人との距離はかなりあったはずだが、これだけ離れていても届くとはなかなかの実力だ。

「追い、つき、ました、わ、もう逃が、しません、わよ!」

「ぜえぜえと息を吐きながら二人がついに追いついた。

「どう考えても、あなた方の、負けですわ! 大人しく降参して、私達に協力して下さいな!」

エナが杖をくるりと振ると、シャルとジェイの周りを円で囲むように地面がぼこぼここと盛り上がった。

逃がさない、という意思表示のようだ。気が弱そうだが魔法の腕は確からしい。

ジェイは慎重に二人との距離を測った。

ジェイのスピードなら本気で行けば二人とも魔法を使われる前に倒せる距離だ。

だがコーネリアは光の精霊が守るはず、とシャルは言っていた。

こうなればせめてエナだけでも気絶させるか、と考える。

「ちよつと、ジェイ」

シャルはそつと小声でジェイに話しかけた。

彼女の体は相変わらず自由になっていないままだ。

「あんた一人なら逃げられるでしょ。行ってよ。行ってディーンを連れてきて」

「お前はどうすんだよ」

「なんとかするわよ。口が利ける限り魔法は使えるし、一旦わざと捕まっただっていいわ」

わざと捕まっつて、テントの結界を解くと言ってそこへ逃げ込む手だつてある。

ここでこれ以上無理をして傷つくのは避けた方が良さそうだ、とシャルは判断したのだ。

「……お前、アーシャのかけた結界解けんのかよ」

「解けるわけないでしょ」

さらりと言われてジェイは頭を抱えた。

そんな事を言われてなお、ここに置いていたら男じゃない。

一瞬の躊躇の後、ジェイは腰のポーチからありっただけの聖水の瓶と符を取り出した。

「ジェイ!?!」

「行けるかよ。んな体で何言っただよ。お前、いつつも一人で何でも抱えやがって。たまには周りとか、俺の身にもなれつての」

やれる事はやる、と言いながらジェイは全ての瓶の口を開けた。

バシャバシャと聖水を自分の周囲に次々に撒いていく。

「さっきだつて俺の事勝手に庇いやがって。せつかく隠れてたみた

いなんだから、あのまま静かにしてりゃよかつたじゃねえか」

「ふん、あんたが簀巻きになったら誰が担ぐのよ。私はか弱いんだからね！」

「……か弱い女が飛び蹴りかますか普通」

がつくりしながら更に聖水を撒くジエイに、量があれば良いってもんじゃない、とシャルは思ったがそれを止める事ができなかった。自分を庇う背中がなんだかいつもより大きく見える。

(泣き虫の鼻たれだつたくせに、生意気よ)

そう思いつつも、悪い気がしないのは何故だろう。

シャルはそんな自分に苦笑しながらジエイの背中に声をかけた。

「……しょうがないわね。もし課題が駄目だったらあんたの婚約者も私のも、皆飛び蹴りで吹っ飛ばして破談にしてあげるから安心して好きな事やつちゃっていいわよ」

「……女もかよ」

「私は男女差別はしない主義よ」

何か違う、と思ったがジエイの口から零れたのは突っ込みではなく笑いだつた。

くすくす笑いながら、ジエイは強く強く望んだ。

ずつとこうして、軽口を言い合つて、傍にいられることを。

そのために力を貸してくれ、と精霊に初めて心から祈つた。

『光の精霊よ ここに 』

(どうか、シャルを自由にする力を)

ジエイの願いは、ずつとそれ一つだつた。

その願いに応えるように彼の体をつつすらと光が覆っていく。だがその光の反応はいつもと明らかに違っている。

シャルはすぐにそれに気づいたが静止するには既に遅く

「ちょ、ちょっとジエイ！ あんた、ちゃんと条件限定したの!？」

ジェイの回りから溢れた光は留まる所を知らぬかのようにどんどん広がり、周りを飲み込み始めた。

焦ったシャルの声さえ白く塗りつぶし、辺りに広がる。

「う、うわぁ!?!」

「キヤアア!」

森に、光が溢れた。

25：彼の不運

ディーンは立ち止まって太陽の位置を確認していた。

方角としてはこのまま行けばテントの辺りにおおよそ出るはずだ。だがそのまま進むかどうかを考えていた。テントの辺りには恐らくコーネリアの仲間がいる。

その連中とこのままぶつかるべきかどうか考えたのだ。

しかし川原の方へここから迂回すればかなりのタイムロスになる。シャルやジェイがどの辺りにいるのかわからない今あまり時間をかけるのは避けたかった。

(テントの辺りに誰かいたら倒すか)

それが早い、と決めてジェイはまた走り出した。

しばらく走り続け、恐らくもうすぐテントが見えるという所まで来た時、ゾクリ、と嫌な感覚が背中を走った。

「!?!」

ディーンは咄嗟に地面に身を投げ出した。

ヒュツと風を切る音が彼の髪を掠めた。

身を投げ出したその頭の上でカツと固い音が響く。ディーンはそれを確認する間もなく立ち上がると姿勢を低くしたまま近くにあった木の陰に隠れこんだ。

音はその後を追うように更に響いた。

そつと木の陰から覗いて音の正体を確かめた。避けたディーンの後ろにあった木に突き立っていたのは矢だった。

刺さった位置からいくとディーンの肩辺りを狙った高さだ。

相手は、と気配を探るとそう遠くない位置に二人ほどの人影が見えた。

「下手くそ、どうすんだよ。あつちに気づかれたぜ」

「仕方ねえだろ、今のを避ける方がおかしいんだって！」
ディーンを狙ったのはライの放った矢だった。
やはり二人は未だ見つからないテントの周辺で仲間が戻ってくるのを待っていたらしい。

弓ならば何とかなる、と判断してディーンは走り出した。
森の中ならば木が障害物になってくれる。ディーンは木々の間を縫うように走り、二人との距離を縮めていく。

カツツ、カカツ、と走るディーンの後を追うように矢が木々に突き立つ音が響いた。

距離が縮まって避けにくくなってきた矢は剣で叩き落す。

何本目かの矢を剣で弾こうとした時、ざわ、と嫌な感覚がディーンの背中を通り過ぎた。

「ッ!？」

咄嗟にぱつと地面に伏せる。直後、その頭上を矢と一緒に何かを通り過ぎた。

ヒュオツ!!

空気を鳴らして通り過ぎた何かは、背後にあつた木に強く当たって弾けた。

ディーンは顔を上げて木を見上げる。

幹には斜めに真っ直ぐ、まるで斧でも振り下ろして削ったかのような傷跡がぱつくりと開いていた。

木に刺さるはずだった矢も巻き込まれずたずたに折れて地面に散らばっている。

「マジかよー、今のも避けられるってどういう反射神経だよ」

「タイミングが悪いんじゃないかねえの？」

どこか呑気なぼやきが聞こえてそちらを見れば、二人の人影はもう随分と近づいていた。

ローブの男が杖を構えている所を見ると、どうやら傍らの背の低

い男が放った矢に隠れるように、時間差で攻撃をしかけてきたらしかった。

(……風か?)

どちらにせよ厄介な事だ。

ディーンは一旦木の後ろに隠れて対抗手段を考えた。

矢だけなら剣で叩き落すか避けるかすればいいが、魔法はそうはいかない。

さっきの攻撃もあのまま剣を振っていたら魔法を避けきれず負傷していただろう。

(なかなかやるな)

一人の力の弱さを連携で補うつもりなのだろう。

二人はぼそぼそと何かを相談している。

それを確認するとディーンは木の作る影と重なっている己の影を見下ろした。

ディーンの影は未だ濃い色のままで木の陰にも隠れていない奇妙な姿を晒している。

『闇の精霊よ 我に応えよ』

さわり、と影がうごめいたような気がした。

呼びかけなくても精霊達は常にディーンの傍にいますが、それでも声に出すのは彼なりの礼儀のようなものだった。

そんな律義な彼に精霊は喜んで応える。

彼が言葉にせず投げかけた意思に従って影はそろりと二つに分かれた。

一つはディーンの黒い服の左腕に絡まり、一つはするりと森の中に離れていく。

それを確認するとディーンはパツと木の影から走り出した。

「おい、ライ！ 来るぞ！」

「へいへい。俺は戦闘向きじゃねえんだけどなあ」

そういつつもライは弓矢を構えて放った。

木を盾にして少しずつ近づいてくるディーンに弓矢を放ちながらライはその先の彼の進路を予測する。次に隠れるであろう木を予想しながらその進路の方に向けて矢を放つ。

更にライは間に何本かわざと外して弓を放った。

それによって相手の進路を少しずつ操っていく気なのだ。獲物の速度と進路を予想し、それをほんの少し誘導するように弓を放つのはライの得意技だった。

「行くぞ」

ライがコードに声をかけるとライが弓を向けた方にあわせてコードもその場に屈んで膝立ちになると杖を構えた。

ヒュン、と弦が鋭い音を立てた。音は一つだったのに、速射された弓矢は二本続けて飛んでいく。

放つ音はほとんど間を空けず連続して聞こえるほどの早さだ。

「風よ！ その鋭き爪にて 敵を切り裂け！」

ライが矢を飛ばした進路からさらに少し先にずらしてコードが風の刃を放った

風の刃は辺りの草や若木を切り飛ばしながらディーンの足を狙って飛んでいく。

矢と風の進路に、ディーンは止まりきれず走りこんだ。

キン、とディーンの剣で叩き落された矢が跳ねた。

しかし先ほどと違って低い位置を走る風の刃は転がってももう避けきれない。

もらった、と二人は思った。

ザシュツ！！

鋭く切り裂く音がして、ディーンの体がある場にドサッと倒れる。「やっつりいー！」

「ヒュー、マジで当たった！」

ライの作戦に半信半疑だったコードは立ち上がって喜ぶ。

「なんだよ、大した事なかったじゃん。こんなの逃がすなんてアロナもモースもなつてねえなあ」

「大方モースの足が遅くて逃げられたんじゃないかねえのか？」

ありえる！ などと二人はひとしきり笑い、それから倒れたままピクリとも動かないディーンに視線を戻した。

風は足を狙ったと思ったが、それにしても倒れた相手は動きもしなければうめき声も上げないのはおかしい。

「起き上がらねえな……」

「……打ち所が悪かったとか？」

「怖いこと言うなよ。俺らの責任になるじゃん！」

「う、うん……強制送還される気配もねえしな。大体、魔法の威力は絞つてあるから死ぬほどじゃねえ、と思うけど……」

二人はそろそろと倒れたままのディーンの方へと向う。

こちらをおびき寄せる作戦という事も考えて、とりあえずコードは離れた所で立ち止まりライがディーンに近づいた。

大分近づいた所でライは違和感を感じて立ち止まった。

目の前の人影はうつ伏せで、向こうを向いて倒れていて顔は何もない。

何かがおかしい、とライは思った。だが具体的に何が、と答えを出す前にそれは起こった。

「っ！？」

突然脇の繁みから飛び出した人影が、ライが構えていた弓に向かって剣を振り下ろした。

ピン、とかすかな音を立てて弓の弦が断ち切られる。

しまった、と思う間もなく間近に迫った剣の柄が彼の首へと振り下ろされた。

「ライっ！？」

ドサ、と音を立ててライはその場に倒れ伏した。

「くっ、こ、この！ 風よ！ その鋭き爪で 敵を切り裂け！」
ヒュオ、と風が鳴ってディーンへと迫る。

するとディーンは迫り来る見えない刃にスツと左手をかざした。

「!?」

当たる、とコードは思った。

しかし無防備に差し出された左腕が風によって切り裂かれる直前、ディーンの腕を包む服の袖がぶわり、と広がった。

薄幕のようになった黒い袖は、ディーンの腕と体を守るように大きく広がり風の進路を阻む。

だがその布は明らかに風の刃を止めるには頼りない。

何を広げたのか知らないがそんな物簡単に切り裂ける、とコードは勝利を確信した。

しかし

「はあっ!？」

次の瞬間、目の前で広がった袖は不可視の刃を絡めとり飲み込んだ。

布に触れた音すら聞こえず、わずかに黒い幕が揺らめいた事だけが風が当たった事を示していた。

直後、風の刃に細く繋がっていたコードの意思がプツリと断ち切られた。

それっきり、風の刃は完全に黒い布に飲み込まれ消失してしまっ

た。切り裂けると思った布には穴一つ開いていない。

バカな、とコードは震えた。

まるで手品でも見ているかのようなだった。

コードは風の魔法には自信があるし、とりわけこの森に来てからというものの彼の魔法は調子がいい。この森に満ちた風の気が彼の力を助けているのだ。

それなのに今、彼の魔法は何の余韻もなく簡単にかき消されてしまった。

しかも相手は武術学部在籍の人間だというのに、だ。しゅる、とディーンを包んでいた布が彼の腕に戻る。その布の向こうから姿を見せたディーンは傷一つない。先ほどディーンが倒れたはずの場所を見れば、いつの間にかそこには何もなかった。

ディーンが今使ったのは勿論闇の精霊だった。闇の精霊を自分の身代わりとして木の陰に入り込んだ時に入れ替わって走らせたのだ。

常に彼の傍に寄り添う精霊達は彼の意思を組み、簡単な事なら独自の動きもこなしてくれる。彼の腕に宿り、盾となったのも闇の精霊だった。

ディーンが黒い服を着る事が多いのは趣味というよりはこういう実用面からの理由なのだ。

先ほどまで身代わりをしていた影は既にディーンの足元に戻ってきている。

そんな事はコードにはわからなかったが、完全に騙されたのだという事だけは彼にも理解できた。

魔法学部の人間が、武術学部生の使う訳のわからない魔法に負けたのだと思うとコードの中に怒りが湧く。

「風よ！ その鋭き牙にて 我が敵を捕らえ噛み砕け！」

怒りに駆られたコードはさつきよりも威力のある魔法を唱えた。

風は獐猛な牙を持つ獣のように渦を巻いてディーンに押し寄せた。しかしその牙も彼に届く事はなかった。

ひゅ、と今度はディーンの足元から立ち上がった影が彼の体全てを包んだ。

「なっ!?!」

驚くコードの目の前でディーンを包んだ影に風の塊がぶつかる。

しかし今度もその牙は振るわれる事のないままヒュウ、と小さな

音を立ててそれに飲み込まれた。

「ぼちゃん、と一瞬だけ水面に小石を落としたかのような波紋が表面に広がる、ただそれだけ。」

その影がまたただの影へと戻る頃には無傷のディーンがそこに立っていた。

「諦める。攻撃は効かない」

「くっそ、なんだよそれ！ 反則じゃねえか！」

「反則というならお前達の行動の方だろう？」

「チャ、と剣を構えなおしたディーンが一直線にコードの元へ向ってくる。」

「くっ、か、風よ！ 風の刃よ！」

半ばパニックになったコードは立て続けに苦し紛れの呪文を唱える。

完全な呪文ではないそれは、それでもこの森の力を借りて幾つかは形を成しディーンに襲い掛かった。

しかしそれを左腕に宿した闇の精霊の盾で打ち消しながらディーンは気にせず進む。

「うっ、うわあー！」

ディーンの剣がコードの杖を弾き飛ばし勝負が決まった、と思われた瞬間、森に異変が起こった。

森の奥、ディーンが先ほどまで目指して走っていた方角から突如光が溢れてきたのだ。

「！？」

「わあっ！？」

森に光が溢れ全てを飲み込んでいく。

光に飲まれる瞬間、影はそれでもディーンを守ろうと一際大きく広がり、コードは闇雲に最後の魔法を放った。

そして森は、白に包まれた。

「　っ、っ……」

光に包まれたのは長い時間ではなかった。

ディーンはほんの一瞬気を失ったが、すぐに自分の身に起きた異変で目を覚ました。

「つつっ……」

ポタポタと地面に赤いものが散る。ディーンはそつと身を起こして自分の体を確認した。

左の肩から胸に向けて、大きくはないが浅いともいえない傷がぱつくりと開いている。

あの光に包まれた瞬間、コードが最後に放った風の刃で切り裂かれたのだ。

軽く動かしてみると痛みはあるが肩は動いた。

指も腕もちゃんと動いた事にほっとする。

目の前をみればコードはあの光を受けたショックで気を失っている。

ディーンの身は闇の精霊が最後まで守ろうとしてくれた為、光の影響は小さくて済んだらしい。

だが圧倒的な光に負けて闇の精霊はどこかに飛ばされてしまった。そのせいで、コードが最後に放った魔法が掠めてしまったのだらう。

「……ついてない、というべきか」

周りの気配を探ったが闇の精霊はどこにもいなかった。

どうやら随分遠くに飛ばされたらしい。

恐らく今呼び出してもこんなに光の気が溢れた後ではすぐには戻ってはこれないだろう。

いつも傍にいた気配がない事で少し周りが寒くなったように感じながら、とりあえず止血をとディーンは動いた。

丁度良い布が目にとまり、ディーンは握ったままだった剣で目の前に倒れている少年のローブの裾を、起こさないように気をつけながら勝手に大きく切り取った。

それを裂いて包帯代わりにして肩に巻き、簡単な止血を施すとすぐに立ち上がって歩き出した。

ついでにその時に指に触れた、襟に止めてあった学園のバッジは外して捨てて置く。

「今戻されたら困るからな……」

倒れたままの少年二人を強制送還させるべきかと一瞬悩んだが、その時間が惜しいとディーン判断した。

あれだけの魔法を誰が使ったのかはわからないが、そっちの方がかなり切羽詰った状態になっている事は間違いなさそうだ。

あんな暴走でも言うような光が放たれば獣達もしばらくはこの近くに近づかないだろう。

(急がなければ)

肩の痛みを振り払ってディーンはまた走り出した。

走るといには少し足りない速度しか出せなくなっていたが、それでも懸命に光の放たれた方向を目指す。

あの光に驚いたのか森の中は驚くほど静まり返り、鳥の声すら聞こえない。

ディーンはその静けさを、今なお嵐の前の静けさであるように感じていた。

26：問いの答え

『そうか、精霊の声が聞こえるのか』
『うん』

森の最奥の広場では、のどかな光景が広がっていた。
グリフォンは風の弱い崖のすぐ側にその巨体をどっしりと下ろし、翼をたたんで休んでいた。

座り込んだその背の上には小さな人影が見える。

『それで我の声も聞こえたのだな。我等幻獣も精霊族にも会話に声を使わぬものが多いが、そういう者達は皆同じ波長を使って会話しておるゆえな。む、もう少し左を頼む』

『そうなんだ……この辺？』

アーシャは手に持った木の棒でコリコリとグリフォンの首を掻いた。

彼女は先ほどから彼の大きな背中にもちょこんと乗っかり、その太い首の後ろの部分の棒で擦っていた。

グリフォンは気持ち良さそうにパタンパタンと尻尾を振る。

あの後、途方にくれて石版の前に座り込むアーシャに、グリフォンは気を使って近くの背の高い木になっていた果物を取ってくれた。果物は大きくて甘く、お昼ご飯代わりにそれを食べた少女は少し元気を取り戻していた。

アーシャはそのお礼に、くちばしも足も今ひとつ届かない、と彼が訴える首の後ろを手入れしてやっているのだ。

『毛づくろいしてくれる仲間はいないの？』

『ふむ、いないことはないが、今は離れておる』

アーシャは首を傾げた。

『なんで？』

『まあ、我等にも色々あるということだ』

彼はそれ以上は言おうとはしなかった。

人知を超えた存在なのだから仕方ないか、とアーシャもそれ以上の問いをあつさり諦めた。

そのまま黙って、擦って毛羽立った羽毛を手で梳いてそつと整える。真つ白い羽はすべすべしていても手触りが良くて気持ち良い。

『それよりも、仲間を連れてこなくて良いのか』

『……』

アーシャはピタリと手を止めてまたしょんぼりと俯いた。

本当はそろそろ仲間のところへ帰るためにここを出発しなければいけない時間だ。ここまで来るのに半日かかっているのだからこれ以上遅いと向こうに着く前に日が完全に落ちてしまう。

夜の森を歩くことは少女にとってなんと言うこともないが、仲間達は心配するだろう。

『そなたの仲間はあるの？ 悩みはそれか』

やはりあの一日目の大風が吹いた時、彼は森に入り込んだ自分達を見に来ていたらしい。

彼が語るのにはシャルの事に間違いはない。アーシャはこくりと頷いた。

『彼女をここに連れてくるの、難しいと思って』

『ふむ、なるほど。確かにあのままではそうであるな。あの炎は全く調和が取れていなかった。あれでは火種が歩いているようなものだ』

まさに彼の言う通りだ。

あのままのシャルをここへ連れて来る為にアーシャが思いつく手はほんの少ししかない。

この森の風を止めるか、一日ほど雨を降らせて大量の水の気でシャルの炎を無理矢理中和するか、せいぜいその程度だ。

けれど、それをやれば多分他の問題が出てくるだろう事もアーシヤには予想がついた。

『もしこの風を止めたら……ここはどうなるかわかる？』

『ふむ……まあ、間違いなく、結界が切れるだろうな』

そう言っつてグリフォンは山を仰いだ。

アーシヤもそれに釣られて高い高い崖を仰ぎ見る。

『この森に結界を張ったのは魔道士だが、その結界を維持しているのはこの風だ。絶え間なく吹き降ろす山からの風を原動力にこの森の平和は保たれている。そして森と結界が風を弱め、この周囲に人が住むことを許しているのだ』

やはり、とアーシヤは唇を噛んだ。

百年も維持されている結界を勝手に解けば恐らくただではすまない。森から噴出した風は周囲を荒らし、近隣の村に被害を及ぼすだろう。

そして結界のなくなった森は人に荒らされる。

それでは課題が成功しても学園側から責められる事になるかもしれない。

そうなると後は雨か、と考えるがそれも簡単には思えなかった。

アーシヤは短い時間の雨でいいなら、精霊に呼びかければさほど問題なく呼ぶことができる。

だが一日もの長い時間、無理矢理雨を呼ぶとなるとまた別だ。

それを維持する為には多くの水の精霊を呼ばなければいけない事になる。

けれどそうなればこの周辺の精霊達のバランスは崩れ、しばらくは雨がひどく降る場所、全く降らない場所が出るなどの二次被害がきつと起る。

アーシヤは迷っていた。

この文字を、書き写して戻るだけでは駄目だろうか。恐らく少女以外の仲間達はこれを読めないに違いない。もし読めたとしても、写しでは課題の達成は半分だ、と言う事は言わなければわからないだろう。

ならば何食わぬ顔をして、課題はクリアした、と皆にそれを見せてそのまま森を出ればいい。

この課題を本当にクリアした者は少ないというグリフオンの言葉もある。

それならば、多分ここまで来ただけでも高得点にはなるはずだ。三学年なら尚の事、文字を写して帰っただけでもきつとSランクが貰えるに違いないと思う。

それなら、シャルとジェイの目的は達成されるのだ。誰も傷つかないし、これ以上楽な道はない。

『また、言わないまま済ませるのか』

アーシャの胸の奥にここにはいない彼の声が響いた。

だって、その方が良い事だってきつとある、と少女は胸の内での声に言い訳をする。

『私達は信用できなかつたか』

だって、この短時間でシャルが自分自身に打ち勝つ事ができるとは思えない。

小さい頃に火を受け入れるのをやめたのだとしたら、きつとその根は深いところにある。

それを克服できるかどうかは、危険な賭けだ。

アーシャはぎゅっ、と目の前の羽を掴んでしがみついた。

暖かい。生き物の暖かさを久しぶりに感じた、とアーシャは思っ

た。

どうして他の命はこんなに暖かいのだろう。自分一人の時は、命が暖かいなんてそんな事忘れているのに。ずっと忘れて、生きてきたのに。

『どうした』

『……このまま、帰ってしまえばこれ以上誰も大変な思いしなくて済む。それが一番いいって思う。でも』

『でも？』

『そうしたら……私、もう皆と一緒に居られない気がする。自分が、きつと嫌だ』

グリフォンは面白そうに首を回して自分の背でうずくまる少女を見た。

『一緒に居たいのか』

『……居たい、と思う』

皆と居たい。それが、アーシャの答えだった。気づいてしまえばあまりにも簡単な事だ。

だって、とアーシャは自分の胸の内を呟く。

だって、シャルの歌はあんなに暖かった。

ジェイの笑顔はあんなに明るかった。

デイーンの料理はとても美味しかった。

自分の作った物を喜び、お礼を言ってくれた。

色んな話をしたり、一緒に魚を獲ったり、アーシャを怒ったりしてくれた。

彼らはとても面白い。

だから、一人の森はつまらなかった。

自分の味方のはずの森の中を歩きながら、ずっと心細いようなおかしな気持ちだった。

あの心細いような気持ちを寂しいと言ったのだと、ようやくアーシヤは思い出した。

この森を出て、旅が終わって、学園に帰っても、アーシヤはまた皆に会いたいと思うだろう。

でも、もし皆に黙ってこの課題をこのまま終わらせたなら、きつともう真っ直ぐに彼らの顔を見られない。

『どうしよう……私、もうわかんないよ』

『ならば、信じてみると良い。仲間がどういう結論を出すのか。聞かずに悩むのは早いのではないかな?』

泣き出しそうな細い声にグリフォンは優しく言った。

もはや自分をも恐れぬ豪胆な少女が、人の抱く当たり前の恐れを得て自分の背で震えている。

人らしいその姿が、彼には不思議と愛しかった。

『皆で我に会いに来てくれればうれしいものだ』

『……うん』

アーシヤは小さく頷いた。

信じるのは怖い、と思う。

けれど彼の言う通り、その道を探してみようかと考えた。

アーシヤはもう一度頷くと顔を上げた。

その刹那

『 ! 』

キーン、と高い耳鳴りがアーシヤの耳を打った。

思わず耳を手で押さえると、グリフォンもぐるる、と苦しげな声を上げた。

『何だ!?』

『森が何かを』

直後、ドオン、と大きな音が森を揺らした。

アーシヤはハッと空を見上げた。まばゆい光が青空に上る。

シャルの炎か、と焦ったがそれは火ではなかった。空を切り裂くように、一本の光の柱が森の向こうから上がっている。

光はしばらく天へと向かって立ち上った後、周囲に大きく広がり、そして唐突にふっとかき消えた。

それが炎でなかったことにアーシャは胸を撫で下ろしたが、まだ安心するの早い、と思いなおす。

『何かあつたんだ……行かなきゃ！』

アーシャは慌ててグリフォンの背から滑り降りると、その脇に置いてあつた荷物を背負った。

『ありがとう、西風の王。また来るね。今度は、多分皆で』

それだけ言つてアーシャは駆け出した。

『待て』

その白いマントの端をぐい、と大きな嘴が摘んだ。

小さな体はそのまま宙吊りにされる。

「ひゃっ」

グリフォンはアーシャを軽々と持ち上げ、そのままひよい、とまた己の背中へと戻した。

『そなたの足でも時間がかかるだろう。送つてやるからしっかり掴んでいる』

バサ、と力強く白い翼が羽ばたく。

巻き起こる風に飛ばされないうよう、振り落とされないうようアーシヤは必死で彼の背中にしがみついた。

彼に運んでもらえるならあつという間だろうが、流石にちよつと恐ろしい。

『西風の王とは、嬉しい事を言つてくれる』

そう言つて笑つとグリフォンはバサリ、と大きく羽ばたいて飛び立った。

空があつという間に近くなる。

けれどその青い空も、今のアーシャの目には映っていなかった。
眼下の森には奇妙な静寂が広がっていた。

27：争いの結末

「……ル、シャル！ おい、しつかりしろよ！」

「……う、ん」

「おい、シャル！ 起きろ！」

「……ジェイ？」

「おう！ 大丈夫か？」

シャルはちかちかする目を数回こすってから起き上がった。

しかし起き上がったものの自分を取り巻く状況が一瞬わからなくて辺りをきよろきよろと見回す。

目の前にはジェイが跪いてこちらを見ていた。辺りの森はさつきまでと特に変化はない。

「何が、あつたんだっけ？」

「俺が精霊魔法を使ったんだって。大丈夫か？」

「精霊魔法……！ あーっ！ あんた！」

突然怒鳴ったシャルにビク、とジェイが一瞬怯えを見せた。

「ジェイ、あんたねえ！ なんてことすんのよ！？ 条件の限定もせずに精霊魔法使っなってあれほど私が教えたじゃないの！」

シャルはさつきここで何があつたのか全てを思い出した。

ジェイの意思に応えて光の精霊が集まった、そこまでは良かったのだ。

ジェイが彼らに何をさせようと願ったのかはわからないが、集まった精霊はジェイが今まで呼び出した事のある精霊よりも随分ランクが高かった。

多分それだけジェイが真剣に精霊に呼びかけたと言う事なのだが問題はその後だ。

ランクが高い精霊になればそれだけ細かな指示や条件の限定が必

要となるのに、ジェイは恐らくそれを怠ったのだ。

その結果、光の精霊はどこまでもジェイの意思に応えようと奮起し、周囲の全てが光に巻き込まれることになってしまったに違いない。

見れば二人から少し離れた場所でコーネリアとエナが倒れている。恐らくあの二人も防御できなかつたのだ。

「すつごく危険なんだってあれだけ教えたのに！」

ガン、とジェイの頭を一発殴る。

ぐえ、とジェイは妙なうめき声を上げた。

それを聞きながらシャルは自分がジェイを殴れた事に気がついた。シャルの体に絡み付いていた光の網は、ジェイの放った光で跡形もなく消し飛ばされていた。

明らかにやりすぎたとはいえ、ある意味成功ではあつたらしい。

それならば敵が倒れているこの隙を無駄にする事はない。

よし、とシャルはその場に立ち上がった。

「ジェイ、行くわよ。この隙にテントのとこまで戻って、ディーンと合流するわ」

「……なあ、シャル」

「何よ？」

さつきから跪いたまま動かないジェイをシャルは訝しげに見た。

ジェイはシャルが立ち上がった後も、シャルの座っていた位置を見つめたままだ。

「お前一人で行け。俺は、行けないから」

「……なんですって？」

「目がさ、なんか、さつきの光の影響かちょっとおかしいんだよ。ちかちかして、まともに歩けそうにない」

「目が！？ 見せなさい！」

グキ、と音がしそうなほどの勢いでジェイの顔を自分の方に向け

ると、シャルはまじまじとその目を覗き込んだ。

見た感じは特に変化はない。だが確かに焦点が合っていないようにも見える。

「どんな感じなの？」

「んー、なんかこう……見えすぎて見えない、みたいな感じかな？色んな光がちらちらして視界がそれに埋め尽くされて、まともに見えないっばい。大まかな形くらいはわかるんだけど、森の中を歩けるかどうかは微妙？」

シャルはその答えにため息を吐いて掴んだままのジェイの頬をぐい、と左右に引っ張った。

「この、バカ！自分の放った魔法でやられるなんて前代未聞よ！あんた、ここに来る前も魔法使ったわね！？」

「う、うん、使った……けど」

「あの魔法は、目に負担が掛かるから一回使ったら回復しなさいって言ったでしょ！？多分、それをしないままあんな馬鹿みたいなことしたから何か悪い影響がでたのよ！」

そうなのか、とジェイはどこか呑気な返事を返した。

「あんたは、もう……！」

シャルは思わず途方に暮れた。

あれだけ気をつけて使え、と言ったのにと苦く思う。

だが今ここでそんな事を言っても仕方ない。

「もう！仕方ないわ、行くわよジェイ！」

「えっ、で、でもよ」

残る、と言おうとしたジェイを制してシャルはその手を取って立ち上がらせた。

「こうして行けば歩けるでしょ！ほら、行くわよ！」

渋るジェイと手を繋ぎ、問答無用で引きずってシャルは歩き始めた。

手を繋いで歩きながらも木の根や枝が下がっている所を避けたり、

ジェイに注意したりしながら気をつけて先に進む。

ジェイはシャルに引つ張られ、先導されながらよろよろと後を追った。

「……昔を思い出すな」

「何よ？」

「昔もさ、よくこうしてお前に引きずられてあちこち連れまわされたよな。悪戯とかに散々付き合わされてさあ、俺だけ捕まって割食ったりして」

フン、とシャルは鼻で笑う。

「あんたつてはあの頃からちつとも成長してないってことよね」

ひでえ、と嘆くジェイの声を聞きながら、シャルの顔は笑っていた。

口には決して出さないが、いつまでもこうして昔の事を忘れないでいてくれる幼馴染の存在が、シャルには本当は嬉しかった。

泣き虫で頼りなかった少年がいつも後ろに居たからシャルは振り向かないで歩いてこれた。

祖母を失った時ただ黙ってずっと傍に居てくれた。

頭痛はまだひどいし体もだるい。ジェイはこんなだし、ディーンもどうしているやら。

なのに、諦める気にならないのは何故だろう。

卒業したらもつと旅をしよう、とシャルは胸の内で呟いた。

その時には例え嫌がってもジェイを付き合わせよう。

この手を掴んで、無理矢理でも彼を引きずって一緒に世界を回るのだ。

きっと面白いに違いないわ、とシャルはまだ見えない先を見て微笑みを浮かべた。

不意にガサガサと近くから音がした。

思わず二人は身を固くして音のした方を伺う。

だが身構える二人の前に現れたのは、繁を掻き分けて歩いてくる

ディーンの姿だった。

「ディーン！」

「え、ディーン!?」

「無事だったか、二人とも」

ディーンはほっとした様子を見せると二人に歩み寄った。

だが、シャルに手を引かれるジェイの様子がおかしい事にすぐ気が付き眉を寄せた。

「ジェイ、どうかしたのか」

「どうもこうもないわよ、こいつ自分の放った精霊魔法に目をやられて……って、あんたも怪我してるじゃない！」

シャルは思わず目を見開いて声を荒げた。

ディーンの服も肩に巻かれた布切れも黒い色なのでわかりにくかったが、その下のシャツや左手にはべったりと付いた赤黒い色が見える。

「え、ディーン怪我したのか!? 珍しい……大丈夫か?」

「さっきのアレはジェイの仕業か。ならこの怪我は半分はお前のせいだぞ、まったく」

ディーンはハア、と深いため息を吐いた。

「さっきの光、あんたのとこまで届いたの?」

「届いたどころじゃない。戦闘の真っ最中に、防御に使っていた闇の精霊を吹き飛ばされた。おかげでこの有様だ」

「わ、わりい」

もはやジェイには謝ることしかできない。

「まあいい。それよりも問題は、アーシャが張っていった結界も吹き飛ばされたかもしれない事だ」

「ああ、そっか! あーもう、あそこに隠れようと思って来たのに!」

アーシャが張っていった結界は森の精霊の力を借りたものだと云っていたはずだ。

その力がどの程度かはわからないがジェイの魔法の暴走加減から考えると、一緒に吹き飛ばされている事は十分考えられた。

「闘っていた連中は気絶していたが、無理矢理リタイアさせる余裕があったのは一人だけだ。もしまた彼らが来るようなら、いっそ食料を渡してやった方がいいかもしれない」

「……腹立たしいけど、それが一番かしら」

こちらの負傷の具合を考えたらそれが一番の選択肢に思える。

けれど荷物の全てを渡す訳にはいかないし、特に二人の傷を治す薬は取ってこなければいけない。

「でも、薬がいるわ。あんた達の怪我を何とかしないと。私が治癒魔法が使えればいいんだけど」

シャルは悔しそうに口ごもった。治癒魔法は彼女にとって大の苦手の部類に入るのだ。

治癒を得意とする属性は水や光だが、水はそもそもシャルの苦手だし、光の属性の治癒魔法もシャルは上手くない。

治癒は慈愛のイメージだといわれている。

他者の傷や痛みを和らげたいという意思が魔法を起こす。

だがシャルは、慈愛とは程遠い自分を良く知っている。

シャルは隣人とトラブルがあっても愛するよりも戦う主義だ。

その自分が治癒魔法なんて上手くなりっこない事も良くわかっていた。

そんなシャルとは対照的に祖母は治癒魔法に長けた人だった。

隠居してからも良く頼まれて近所の人の急な怪我を治したりしていたものだ。

学園の医学部の魔法医学科などからもよく講義に招かれていた。

優しい祖母に育てられたのにシャルの気性は彼女と正反対だった。それを治そうと思った事はないが、こういう時は少しかだけ反省してしまう。

「大丈夫だろう。連中もまさかこちらの薬を奪うまでの事はしないだろうし。とりあえずテントに戻るのが先決だな」

「……そうね、行きましょ」

三人はテントのある方角に向かって歩き出した。シャルは相変わらずジェイの手を引いたままだ。

ここからならテントはさほど遠くない。

そのまま少し歩くと前方の大木の影に自分たちが作った野営地が見えた。やっと戻ってこれた事に、三人の口から思わず安堵の息が漏れる。

しかし、三人がテントに向かって歩みを速めたその時だった。

「そこまでよ」

カツ、と脇の木にナイフが突き立った。三人は足を止め辺りを見回す。

斜め前の木の陰からゆっくりと現れたのはアロナだった。ついでコードとライの二人も同じように姿を現す。

「……チツ、無事だったのかよ」

相手の声に聞き覚えのあったジェイが思わず舌打ちをする。

「そうよ、おかげさまでね。でも体中やけどで痛いし、ずぶぬれだし散々よ?」

アロナはそう言うてにっこりと笑ったが目が笑っていないのが恐ろしい。

「そういえば、ライとコードは見つけて叩き起こしたけど、モースはどこ行ったの? 見当たらなかつたけど」

「……あの男なら私が強制送還した。森に転がしておいて獣に襲われても寝覚めが悪い」

「あら、そうなの。それだと困ったわね。荷物持ちがいなくなっちゃったわ。どうする、コーネリア?」

アロナの声に三人はハッと後ろを見る。

後ろにはどこかまだふらついているが、コーネリアとエナが追い

ついでにきていた。

考えうる最悪の事態だ、と誰もが思う。

なんてしぶとい連中なの、とシャルが小さく呟いた。

きちんと止めを刺して強制送還しておくんだった、とジエイとデインは後悔に眉を顰めた。実戦の厳しさと連中のしぶとさを誰もが軽く見ていた、その結果が出たのだ。

「そうね、とりあえず、この状況ならもう降参していただけてますわよね？」

コーネリアはにこやかに三人に問いかけた。

デインは眉を顰めたまま不快そうな声でそれに応じた。

「仕方ない。食料は持っていくといい。だが、薬は置いていってもらう。こちらもこの有様だからな」

「そうですね、まあそれはよろしいですわ。ところで……ずっと気になっていたんですけど、貴方達、もう一人のメンバーはどうしましたの？ あの小さい、失礼な子の姿が見えませんが……」

「……」
三人はそれには沈黙を守ったが、その答えは意外な所からもたらされた。

「俺知ってるぜ。お前らの行動は風の魔法で朝のうちから監視してたからな。一人だけ、今朝から森の奥に行ってるはずだ。かなりの速度で進んだからひよつとしたら夕方くらいには帰ってくるんじゃないの？」

答えたのはコードだった。どうやらどちらもお互いの行動を密かに監視していたらしい。

デインは内心で舌打ちをした。アーシャが奥まで行った事がばれているならその目的も明白だ。言い逃れのしようがない。

「まさか、一人で課題をこなしに行きましたの？ 無事に戻ってくるのかしら」

「へえ、じゃあ丁度いいじゃない。あんた達を人質にして、その子

が戻ってきたらその写しだけ貰おうよ。戻ってこなかったら予定通り食料だけ貰って明日の朝出発すればいいしさ」

当然そうくるだろうと思っていた提案をアロナが持ち出した。

「それが良さそうですね。写しを頂ければ皆様は解放して差し上げますわ。その後はお好きになさってどうぞ？」

コーネリアは舞い込んだ幸運に嬉しそうにくすくすと笑う。

どこかからプチ、という音が聞こえたような気がした。

昔から何度も経験している不穏な気配を感じてジェイの腕に鳥肌が立つ。

本能が逃げろ、と警戒を発する。

マズイ、とジェイは未だ繋いだままの手に力を込めたがそれはバツと振り払われた。

「……冗談じゃないわよ」

「あら、何か言いました？」

「冗談じゃないわよ！ ふざけるのも大概にしなさいよ！ 突然襲い掛かってきて、挙句になんだったの！？」

ひっ、と小さな悲鳴をあげてエナがコーネリアの後ろに隠れた。

そのコーネリアもシャルの剣幕に思わずたじろいで一步後ろに下がる。

「な、何ですのいきなり！ 貴女こそこの状況がわかっていますの！？」

「わかってるから何だったのよ！ あたしはね！ あんた達にあの子のした事を横取りされて無駄にされるくらいなら、この森全てを焼き払った方がまだましだったのよ！」

ジェイは思わず息を呑んだ。ちかちかする視界に薄っすらと映るシャルの姿がおかしい。その髪の色が明らかに増している。

口調もいつもと違ってきている。

はつきり言ってもものすごくヤバイ状況だ。

シャルはやると言ったら必ずやる女だ。長年一緒にいたジェイは

それを嫌と言うほど知っている。

シャルはいつも乱暴で怒っているように見えるためそうと知らない人が多いが、実は本当に本気で怒ることは稀なのだ。

その代わり、彼女を本気で怒らせたならその怒りは留まる所を知らない。

本当にこの森を焼き払うくらいの事はしてのけるかもしれない。

「シャル、落ち着け、な！」

「落ち着けですって！？　これで落ち着いたらあたしじゃないわ！　ふざけた事抜かしているとあんたからぶっ飛ばすわよ！？」

逃げ出したい。

ジェイは本気でそう思うが、ここでシャルを置いて逃げたら本気で森は火の海だ。

ジェイはシャルの形相が良く見えなくて良かった、と思いながら必死で説得した。きつと顔が良く見えていたら恐ろしくて止める気が萎えていただろう。

「さ、さすがに森を燃やすのはまずいって！　ディーンからも何とか言ってくれよ！」

ジェイは傍らのディーンに助けを求める。しかし無常にも助けの手は差し伸べられなかった。

「……止めないから好きにしたらいい。手伝おう」

ジェイはさつと青ざめた。ディーンも切れている。

普段物静かなディーンは実は見かけに寄らず物騒な性格だ。

ディーンはスラリと剣を抜き放つと片手で構えた。

二人の本気を感じ取ってジェイはますます青くなる。

するとシャルがごく小さく囁いた。

「ディーン、コーネリアの一発目は何とか反らすから、誰か一人、人質にとつて」

こく、とディーンは不自然に見えないよう小さく頷いた。

そして自然な動きでジェイを押しやり、シャルと背中合わせに立

つ。
「ジェイは私が魔法を展開したら適当に左に飛んで木の陰に隠れて」
「どうやら二人は切れる寸前ではあったが、完全に切れたわけでは
無かったらしい。」

ジェイはほつと胸を撫で下ろすと、わかった、と小さく返事をし
た。

それを横目にシャルは杖を真つ直ぐに構え、コーネリアと対峙す
る。

シャルは、本当は言った通りに辺り一面燃やしてやりたい気分だ
った。だが、そんな事をすればこの森にいる全てが無事ではすまな
い。

勿論、森の奥に居るアーシャもだ。

シャルは、いつもならたやすく身を委ねているはずの眩暈がしそ
うなほどの怒りを必死で押しやり、今できる事に強く集中した。

(お願い、力を貸して……おばあちゃん)

祈りに答えるかのように、杖の石がきらめく。

「強情ですわね！ それならばらく嫌でも大人しくしていただき
ますわ！ 『聖なる光の精霊よ！ 我が呼び声に答えよ！』」

コーネリアの声に応えて一瞬の光が彼女の周りに集う。

さつきジェイが放った光の影響の残る森で、精霊はすぐに彼女に
応じた。

捕縛の魔法が来る、とシャルは踏んでいた。

光を止めるなら地の魔法でもいいが、できれば

「光の精霊よ！ それを網となし彼の者らを捉えよ！」

ヒュウ、と光が収束する。と同時にシャルは高らかな詠唱でそれ
を迎え撃った。

「水よ！ 我が前に集いて壁を成せ！」

「なっ、水!？」

驚くコーネリアの予想を裏切り、水は、シャルに応えた。

空気中から一瞬にして水が集まり、シャルの前に厚い水の壁が現れた。シャルは更にその壁に命じる。

「波打ち弾け！」

コーネリアの手元からシャルに向かって真っ直ぐに放たれた光が水の壁に激突し、一斉に周囲に弾けた。

シャルの作り出した波打つ水の壁に当たった光の帯は、あるものは弾かれ、あるものは曲がり、辺り一面に乱反射する。

ジェイは言われた通りに左の木の陰へ飛び込み身を低くした。

その頭の上を光が通り過ぎる気配がしてさらに低く伏せる。

飛び散った光はぶつかった物全てに次々絡みついていく。

その光の合間を縫ってディーンはアロナへと走った。

屈折して己の方へ向ってきた光をかるうじて避けたばかりのアロナは反応が一瞬遅れた。

ディーンの剣が彼女の棍をスパン、と二つに断ち割りその喉元にピタリと突きつけられる。その冷たい感触にアロナは息を呑んで動きを止めた。

これで形勢はわからなくなった、と思われた刹那、
「待った」

ギリ、とディーンの脇から音がした。

ライが間近から弓を構えてディーンに狙いをつけている。

「あんた達もいい加減諦めが悪いな。なんかするとは思ってたけどさ。大人しく降参しなよ、怪我が悪化するぜ。大分悪いんだろ？ スピードがさつきと全然違ってたし」

ディーンは思わず舌打ちをした。

ライの言う通り、思ったよりもすばやく動けなかったのがディーンの敗因だった。

彼の予定では、一番近くにいたアロナの後ろに瞬時に回りこみ彼女を盾にするつもりでいたのだ。

しかし傷の痛みと少なくなかった出血のせいで自分が思っていたよりも素早く動けなかった為、彼女に剣を突きつけるのが精一杯だった。

結局これでは振り出しに戻ったに過ぎない。

シャルの努力を無駄にさせてしまった事をディーンは苦く思う。

「ふ、ふん、もう終わりかしら？ 今度は大人しく魔法を受けていただけますかね？」

シャルは矢を突きつけられているディーンを振り返ると、一瞬迷ったが結局杖を持っていた腕を下ろした。

木の陰のジェイにもコードが近寄っている。これ以上の抵抗は二人を危険に晒してしまう。

ディーンは怪我が本人の様子よりもずっと悪いらしい事も気になった。

このまま大人しくしていれば流石に手当てはしてもらえらるだろう。諦めたくはない。けれど、今は諦めたふりをするのだ、とシャルは自分に言い聞かせる。

コーネリアの杖が上がった。

しばらくの辛抱だ、とシャルは唇を噛んだ。

たまらなく、悔しかった。

「光の精霊よ！ それを網となし彼の者らを捉えよ！」

三度目の光がシャルへと向う。眩しさに、シャルは目を瞑った。

その刹那

『森よー！』

高い声が森に響き渡った。

28：森の怒り

『森よ！』

響いた言葉は簡潔だった。

だが森はその言葉を確かに聞き届けた。

突如シャルを取り囲むように地面から緑の壁が立ち上がり彼女を飲み込む。

彼女に襲い掛かった光の帯はその壁に激しく衝突し閃光を放った。
「きゃあっ!?!」

上がった悲鳴はシャルではなくコーネリアのものだった。

光が弾けたと思った次の瞬間、辺りを激しい突風が襲ったのだ。

コーネリアは耐え切れずにその場にしゃがみ込んだ。

一瞬の激しい光はすぐに治まったがその風の強さに目を開けることも敵わず、その場の誰もが必死で踏ん張ってそれに耐える。

その突風がようやく治まった後、顔を上げて瞬きするコーネリアの目の前に立っていたのは、びっしりと鳶が絡んだ緑のドームだった。

そこはさっきまでシャルが立っていた場所だ。

「何ですのこれは!?!」

完全な彼女の勝利だったはずだ。

光の網は今度こそシャルを捕らえ、無力にする予定だったのだ。

シャルにはもうこんな壁を用意する暇は絶対になかったはずなのに、とコーネリアは齒噛みした。

それが何なのか確かめようと一歩踏み出した直後、バサッ、と大きな音がしてその壁の向こう側に生えている大木の天辺近くの枝葉

が激しく揺れた。

「な、何？」

バサバサバキドサバサメキ、と不吉な音と共に枝の揺れは見上げた木の一番上から段々と下に下りてくる。

そして最後に、ドサツと音を立てて、木の一番下に張り出した太い枝に何か落ちてきて引っかかった。

「なっ、何ですの一体!？」

「アルシエレイア!？」

振り向いたディーンの目に映ったのは木の枝に引っかかってぶらんと二つ折になっている少女の姿だった。

全員が突然の闖入者に驚き、ぽかんとそちらを見つめた。

「い、いたた……うう、けほっ」

見つめる全員の目の前でアーシヤはもそもそと頭を上げ、体をよろよろ起こすと木に座りなおした。

その髪にも体にも葉っぱや枝が絡みつき、あちこち擦り傷だらけだ。

「ああ、痛かった」

「……」

皆が声も出せずに見つめている中、アーシヤは気にした様子もなく辺りを見回す。

「……間に合った、かな？」

安堵に満ちた小さな声がコーネリアの耳に届いた。

コーネリアはその声で正気を取り戻した。

「あっ、貴女は!」

それは食堂でコーネリアを激しく侮辱した（と彼女は思っている）憎たらしい少女だった。

「貴女が邪魔しましたの!？ せっかくの私の勝利を!」

アーシヤはコーネリアの言葉に眉をしかめた。

「弱ったシャル相手に勝利だなんて、随分安っぽいんだね」

少女の言葉には遠慮がない。

パチン、とアーシャが手を叩くと地面から生えていた蔦達はしゅるしゅると姿を消し、目の前の緑のドームがゆるりと開く。

シャルはその中に無事に立っていた。

「アーシャ！」

「ごめんね、遅くなって。」

シャルはその言葉にぶんぶん首を横に振った。

少女は森の最奥に行っていたのに、今ここに来てくれたことだけでも奇跡のようだ。

「この人たち、何してるの？」

その質問にはディーンが答えた。

「自分達の食料が足りなくなっただのでこちらを襲って奪おうとしたのだがな、君が奥地に行った事を知って今度はその成果が欲しいらしい」

「そんな理由で皆を襲ったの？」

呆れた、とアーシャはため息を吐いた。

アーシャが見回せば、シャルはひどく具合が悪そうだし、ディーンは怪我をしている。ジェイも頬に怪我しているし他にも何か様子がおかしい。

そんなくだらない、自分勝手な理由で皆をこんなに傷つけたのかと思うとなんだかすごく腹立たしかった。

「理由なんてなんだって構いませんわ！ とにかく、石版の写しをよこしなさい！」

ギリ、と弓を引き絞る音がした。

ライがこれ見よがしにディーンを狙っているのだ。だがディーンは弓を間近に突きつけられても顔色一つ変えていない。

どうしてか、何とかなるような気持ちが仲間達の中に湧き始めていた。

彼らは静かに木の上のアーシヤを見つめた。

アーシヤはキツと目の前のコーネリアを睨みつけ、宣言した。

「変な頭の人、シャルや皆を苛めたから気に入らない」

「変な頭……！ ふ、ふん！ 気に入らないからなんですよ！？」

魔技科の貴女が私に勝てるだけでも？」

コーネリアはいきり立って杖を少女へと向ける。

杖も持たない、魔法学科でもない少女など敵ではないという態度だ。

アーシヤは珍しく少し怒っていた。

コーネリアがアーシヤに気を取られている隙にシャルはそつとアーシヤがいる木の下まで移動してきた。

アーシヤはちらりとその姿を見る。

シャルは木にもたれかかって荒い息を吐いているが、杖を構えたままだ。彼女はまた戦う気持ちを失っていないし、いざとなればアーシヤをも自分が守る気であるのだ。

(シャルはこんなにながらばってるのに)

アーシヤは自分の中に湧いた怒りに任せて、コーネリアに向かって、細い指を突きつけた。

「見せてあげるよ。学校じゃ教えてくれない、ご当地魔法」

「は？ 何ですの、それ！」

鼻で笑う彼女を無視してアーシヤは空を見上げるとすう、と息を吸う。そして大きな声を出す時にするように両手を頬に当てた。

何を仕掛けるつもりか、とコーネリアも油断無く構える。

アーシヤがおもむろに口を開いた、直後

『 助けてえーっ！！ 』

少女の悲鳴は高らかに森に響き渡った。

シン、とした空気が辺りに満ちる。

「……は？」

誰もが、一体今のは何だったんだ、と思った次の瞬間

「デーン、そこに伏せて！」

突然の指示にデーンは反射的に剣を引いてその場に伏せた。

一瞬周りの二人の行動が遅れる。

バンッ！！

「グエツ！？」

「キヤアツ！？」

突然、ライとアロナが吹き飛んだ。

二人は同じ方向に強く弾き飛ばされごろごろとその場に転がる。

二人を殴り飛ばしたものの、それは

「……き、木の枝？」

デーンは伏せたまま上を見上げて呆然と呟いた。

なんと彼らのすぐ脇に立っていた大木がまるで腕を振るうように

その枝をブンと振ったのだ。

避ける間もなくそれに殴られた二人は大きく吹き飛ばされて転が

り、痛みに呻いている。

「なっ、なっ、何をしまし　キヤアアアア！？」

コーネリアは疑問を最後まで口にする事が出来なかった。

突如視界がぐるりと回り彼女の世界の全てが逆さまになる。

「キヤツ、キヤアアアア！？」

「コーネリア！？」

エナが引き止める間もなく彼女の足に絡んだ鳶はコーネリアの体を逆さ吊りにした。

激しく悲鳴を上げて手足をばたつかせたが持ち上げられた体は自由にならない。

生乾きのローブが重力に負けてばさりとひるがえり、ベシヤッと

彼女の顔にかかった。

コーネリアのローブの下はなんとこんな森の中なのに制服だった。そのスカートもあられもなくバサリと落ちてくる。下に短いスパッツを履いていたのがかろうじて彼女の救いになった。

「くそ！ か、風よ！ その鋭き牙を　！？ なっ、なんだこりやあっ！」

風の刃で鳶を切ろうとコードは呪文を唱えようとした。しかしやはりそれを最後まで唱えることはできなかった。

彼の構えた杖の柄にぼこりと小さな瘤ができたかと思うと、なんとそこからよきによきと芽が伸びたのだ。

「わわ、わああ！？」

芽はめきめきと音がしそうな勢いで伸び、枝を広げ葉をつけ、更にその腕を伸ばす。

学生用の木の杖は見る間に立派な若木になってしまった。

「お、俺の杖があっ！ この、この！」

コードは慌ててその枝をむしりとろうとしたが、逆にしなりをつけて向ってきた枝に往復ビンタをかまされとうとう杖を放り投げた。

「くっ、よくも！」

「変な魔法を使いやがって！」

どうにか痛みを振り払って立ち上がったアロナとライは、この不気味な現象の原因と思われる木の上の少女へ向かって走り出した。

しかしその目の前に緑の鳶が現れ、更にそれは彼らの行く手を阻むようによろよると広がっていく。

「こんな鳶！」

そう言っただけに手をかけたアロナは悲鳴を上げた。

「キャッ、やだ、なにこれ！ いた、いたたた！」

「いつてえ！ こ、この、離せて！」

先ほどと同じように見えた鳶は、しかしただの鳶ではなかった。

ごく小さな緑色の棘がびっしりと生えた茨のようなものだったのだ。

しかもそれがぱつと見ではわからないような細かな棘だったのが二人に災いした。

いつの間にか足にも絡みついた蔦が動こうとする二人に更なる痛みをもたらす。

二人は暴れようにも上手く行かずその場に釘付けにされ、それでも小さなナイフで必死に最後の抵抗を始めた。

しかしそんな彼らの頭の上にまたも木の枝が振ってくる。

ライは慌てて身をかがめ、アロナは何とかナイフで足元の蔦を切り、転がってそれを避けた。

しかし彼女が転がった先の地面からぼこり、と何か顔をだす。

彼女の前に顔を出したもの　真つ白い大きな茸は、驚く彼女に向かつてばふ、とたつぷりの胞子を振り掛けた。

「ふぁ」

その胞子を避ける間もなくしつかりと吸い込んだアロナは、場違いな欠伸を一つするとかくりと倒れ、すやすやとその場で眠り込んでしまった。

人間達のささやかな抵抗をあざ笑うように、今や森のすべてが彼らに牙を向いていた。

地面に伏せたままのディーンは呆然とその騒動を見つめていたが、突然その胸にひゅるりと蔦が絡みついた。

「!?!」

ディーンは一瞬慌てたがそれは棘の無いもので、しかもそつと彼を持ち上げるような仕草だったので暴れるのを止めた。

見れば動けずにいたジェイも同じように蔦に巻きつかれそつと運ばれていた。

蔦はするするとりレーをするように優しく二人の体を運び、アーシャが座っている大木の枝まで行くとそこに彼らを下ろした。

シャルもいつの間にか木の上に持ち上げられ、座ってこの騒ぎを眺めている。

四人の目の前で今やコーネリアはぐるぐると鳶に振り回されて眼を回し、コードはバシバシと自分の杖に叩かれて追いついて逃げ回っている。

アロナは地面に倒れてすうすうと寝息を立て、ライは茨の檻にすつかり包まれてそれでも必死で茨を引き剥がそうとしているが全く逆効果のようだった。

エナはと言えば、コーネリアを助けようと杖を構えた直後に木の上から大量に降ってきた毛虫にたかられ、泡を吹いて一人気絶している。

「……恐ろしい」

「ほんとね……」

ディーンとシャルはその光景を眺めながら、アーシャの言う所のご当地魔法の恐ろしさを思い知っていた。

この森という範囲に限られているとしても、その全てを支配すると何ができるのかを見せ付けられたのだ。

今までも不遜な振る舞いをしてきたつもりはないが、これからはその土地を支配するものにはさらに十分な敬意を払おうと心に決める。

そんな二人の決意をよそに、この事態を引き起こした少女はもはやそつちには興味なし、とばかりにジェイの容態を見てやっていた。アーシャはジェイの眼をまじまじと覗き込み、うん、と一つ頷いた。

「治るか？」

「大丈夫、眼は無事だよ。あのね、ジェイが魔法に細かい限定をしなかったからいつもやってる事を精霊が勝手にやろうとしたんだよ。でもジェイの意識がそつちに向かなかつたから、結局上手く働けなくて眼に宿ったままになつてみたい」

そういつとアーシャはジェイの目をそつと両手で塞いで意識を集中させた。

『開放を』

ぼう、と塞いだ手の平の下から淡い光が漏れた。

光が消えたのを確かめてからアーシャはその手を外す。

ジェイはゆっくりと目を開けてぱちぱちと瞬きを繰り返した。

「お、見える！ 普通に見える！」

辺りを見回すジェイの言葉にシャルはほっと胸を撫で下ろした。

「ディーンの肩は？」

アーシャはそういうとディーンの隣にひょい、と移動した。

その肩の布をそつと取って傷を検分する。

ぱっくりときれいに切れた為、見かけは元通りくっついていてはよ
うに見えるが、周りに固まった血が傷の深さを物語っていた。

「結構深いね」

「大した事はない。魔法薬があればすぐ治るだろう。それを取りに
行ってからで大丈夫だ。」

「ううん、今治すよ。『森よ その癒しの力をここに』」

アーシャが傷に手を当てるとそこに緑の光が灯る。

「回復魔法も使えるのね」

「ん、森の中なら力を借りられるから一応はね。でもあんまり使わ
ないよ。頼りすぎると体に良くないもん」

アーシャの手の下でディーンの傷は見る見るふさがっていった。

その肩に走るむず痒いような感覚が治癒している事を彼に伝える。

ついでにアーシャはジェイの顔や肩、シャルの膝も治してやった。

三人にそれ以上の傷がない事を念入りに確かめると、アーシャは
最後に自分の体のあちこちにできた打ち身や擦り傷におざなりに触
れた。

痛みがすっかり消え、ディーンは軽く肩を回した。

完全に傷がふさがった事を確認するとアーシャに礼を告げた。

「助かった、ありがとう」

「ううん。でも結構血が出ちゃったみたいだから、しばらくは静か

にしておいてね」

アーシャが手に持っている布はまだ軽くない。簡単に乾ききらない量の血を吸った証拠だ。

デインは頷くと地上に目を向けた。

「さっき叫んだ古代語は呪文か？」

「んー、呪文というより、助けてって叫んだだけ」

「……助けてって」

そのあまりの単純さにシャルは頭痛が増す気分だった。そんな魔法の使い方を聞いた事もない。

「でも結構面倒なんだよ。声を聞いて集まってくれた精霊に意思を飛ばして、やって欲しい事はちゃんと限定しないとだし」

「参考までに聞くがどんなこと頼んだんだ？」

「えーと、敵を倒す事と、殺しちゃだめって事と、味方を助ける事、かな？」

全然難しそうに聞こえないのは何故だろうと三人は思う。

たったそれだけの指示で目の前の事態が引き起こされたかと思うと尚恐ろしい。

「でも多分あの人達、森の中で好き勝手やってたんだと思うよ。森も怒ってたもん。楽しそうに仕返ししてるよ」

森に敬意を払ってここまで歩いてきて本当に良かった、と誰もが思った。

「……ところで、そろそろ止めてやった方がいいと思うのだがどうだろう？」

いつの間にか、地面の上にはもう動くものは居なくなっていた。

「よいしょっと、これで最後だな。リタイア、っと」

ジェイは言いながら気絶したままのエナのバッジを押し、彼女の姿が光に包まれて消えるのを見送る。

全員気を失ってしまったコーネリアのチームを学園に送り返す作

業はようやく最後の一人まで終了した。もう日は西の空に大分傾いている。

事情を書いた手紙を添えて送り返したが、帰った後はまた面倒な事になるだろう。

それでも、ひとまず自分達がまだここに居られる事に誰もが安堵していた。

ジェイは辺りを見回してからアーシャと並んで野営地へと戻る。シャルとディーンは一足先に帰して休むよう言っている。辺りにはまた鳥の声や虫の声があちこちから響いていた。

あんなに暴れまわった鶺鴒は跡形も無く消え、木の枝も、生えてから一度も動いた事など無いとでもいうように静まり返っている。

ジェイが見たのは後の方だけだが、シャルやディーンがそうつと森の中を通っていった所をみるときつとよほど恐ろしい光景だったのだろうと思う。

「……魔法って、いろんな事ができるんだな」

「ん？」

「嫌ってて、損したかなって思ってたさ。結局苦し紛れで呼んだ精霊も暴走させちまったし」

アーシャは首を傾げた。

「でも、ジェイならその気になればすぐに上手くなるよ。あの光すごかったもん。森の一番奥からも光の柱が見えたよ」

「ははは、そっか。って、そういえばアーシャはどうやってここまで戻ってきたんだ？」

「んー……それは後で話すよ」

そういうとアーシャはそれ以上は語らず黙ったまま歩く。

ジェイもしばらく黙って歩いてしたが、意を決したように顔を上げた。

「なあアーシャ、今度さ、俺に魔法教えてくれねえ？」

「私が？」

「頼むよ、帰ってからでいいから。精霊魔法得意だろ？俺は他の魔法は端から諦めてんだけどさ、今回みたいなことになったらやっぱり笑えねえし。それに……」

そこまで言ってジェイは声を潜めた。

「シャルに教わるともんのすげースパルタなんだよ」

「……いいよ」

くす、と笑いながらアーシャは頷いた。

「やった！よろしくな！」

ジェイはうれしそうにアーシャの右手を取るとぶんぶん振り回した。

アーシャが初めて触れたジェイの手は、少年らしい彼の見かけに反してごつごつして固かった。

小さな手に触れる幾つもの固いタコが彼の長い努力を物語っている。

「……きっと、魔法も上手くなるよ」

アーシャはシャルと同じ、明日の為の努力を怠らない少年を眩しそつに見上げて告げた。

間に合ってよかった、と素直に思えた。

彼らのその努力を無駄にしないで済んだのだ。

夕暮れの森にはいつの間にか煮炊きをする良い匂いが漂い始めている。

長い長い一日がようやく終わるつとじていた。

28・森の怒り（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

ちょっとこの後が部分的に詰まっているので数日間が空く予定です。

ここまでの感想やご意見など頂けると嬉しいです。

29：彼女の決意

パチ、と炎が弾ける音が辺りに響いた。

日も落ちた頃、四人は食事を終え、小さな焚き火を囲んで暖まっていた。

初夏とは言え夜になれば森の気温はそれなりに下がる。

いつもは安全を考え火を熾さないが今日は出血したディーンのためもと、嚴重に風避けして小さな焚き火を熾したのだ。

火にくべた枯れ木の爆ぜる音や暖かさ、炎の揺らめきは久しぶりの安らぎを皆に与えていた。

アーシャは食後のお茶を飲みながら、森の奥地であった出来事をぼつぼつと皆に語って聞かせた。

「……ほんとにいたのね、すごいのが」

「よく無事だったなあ」

「最初はすぐくびくりしたけど、優しくったよ」

どのくらいのサイズかはわからないが、幻獣ならかなり迫力のある見かけや大きさだろうに、それを優しくったと表現する所がアーシャの驚く所だ。そう思う三人をよそに彼女はさらに続けた。

「それに、ここまで送ってくれたし」

「……ちょっと待て。送ってもらった、とは？」

アーシャが事も無げに語った言葉をディーンは聞きとがめた。

彼女はその時の事を思い出すようにのんびりと語る。

「んーと、森の奥からもジェイの出した光の柱が見えたから、慌て帰ろうとしたら送ってくれるって背中に乗せてくれたの。すごく早かったよ」

だが送ってもらったものの、大体この辺と言う場所の上空に着くまではあつという間だったが、鬱蒼とした木々に阻まれみんなの正確な場所がよくわからずぐるぐると上空を回る羽目になってしまっ

た。

結局、シャルが弾き返したコーネリアの光が見えてやっとその場所がわかったのだ。

「でも降りる場所がなかったからちよつと低く飛んでもらって飛び降りたんだよ」

「……」

間に合って良かったよ、と語る彼女の何でもない口調に三人は呆れて言葉を失う。

一体どのくらいの高さから飛び降りたのか想像するのも恐ろしい。幾ら身が軽く、森の木が受け止めてくれたとは言え落ちてきたアーシャは傷だらけだったのだ。

他に手がなかったとは言え、簡単に危ない真似をする少女に三人は不安を感じてしまう。

「アルシエレイア。助けに来てくれた事は感謝するが、自分の身を粗末にするのは感心しない」

ディーンが厳しく言うと言とシャルもそれに続いて釘を刺す。

「そうよ。打ち所が悪かったりしたらどうするのよ！ 本当に感謝してるけど、あんまり危ない事しちゃ駄目よ？」

「そうそう。生きてさえいれば、例えばタイアしたって俺達の問題なんかどうにかできないことないんだから。無理して怪我されたら、そっちの方が痛いぜ」

アーシャは三人の顔を見回した。

彼女の行動は皆に注意されたが、それは自分を心配しているからこそだと言うことが良くわかる。

うん、と頷く顔はどことなく嬉しそうだった。

ちゃんと理解したらしい事を確認したディーンは一つ頷くと肝心の事を彼女に尋ねた。

「それで、石版は写せたのか？」

「うん……写せたよ」

内心ぎくりとしながらもそれを隠し、アーシャは黙って文字を写したメモを取り出して見せた。三人は頭を寄せて覗き込んだ。

「古代文字ね。わ……わが、した、しき、風……うん、読めないわ。私古代文字の授業まだ取ってないし、苦手なのよね」

シャルは早々に根を上げそれをディーンに回した。ジェイはちらと見ただけでもう既に諦めている。

「我が したわしき、風、我ら、幼子に、優しき、息を送れ、か？
かろうじて単語は読めるが……アルシエレイア、読めたか？」

アーシャは頷くとディーンから紙を受け取った。

「これは、精霊歌の詩に近いようなものみたい。変形版かな。えーとね、

『 我が慕わしき風の兄上

我ら幼子にその優しき吐息を送りたまえ

その吐息は花を揺らし

その吐息は種を届ける

世界を巡り季節運ぶ祝福の歌

この西風の森を訪ねし我ら幼き子ら

その名と絆を貴方に捧げん

どうか我ら幼子の想いを受け取りたまえ

我らの旅路にいつも風の祝福のあらんことを
』

って感じかな」

アーシャが読み上げる詩をしばらく三人は黙って聞いていた。

風を称える詩の形式は確かに精霊歌の詩とよく似ていた。

ジェイはへえ、と感嘆の声を漏らし何度も頷いた。

「そんな事が書いてあったのかあ。なんにせよ、これで課題は終わりだな！」

「そうね、思ったよりも早く済んで助かったわ。ありがとうアーシャ」

「……ん」

アーシャは小さく首を振った。

言おうか言うまいか、少女はまだ迷ってしまふ。

「ちよつと待ってくれ。今の文面、少し気になる。アルシエレイア、本当にそれで全文か？」

「え……う、うん。書いてあるのはこれで全部だったよ」

「一体何が気になるってんだ？」

ディーンは顎に手を当ててしばし考え、そして口を開いた。

「絆と名を捧げる、と書いてあったのだろう？ ならばその名が書いていないのは何故だ？ その文面ならその石版を立てた者達の名が書いてあるのが自然な流れだろう」

「そう言われてみれば……確かにそうかもしれないわね」

(やっぱりディーンは鋭いや)

アーシャは密かに感心していた。と同時に、やはり話すしかない
と心を決める。

グリフォンも、仲間の判断を聞いてみたらいいと言っていたのだ。
森を後にしてから後悔するよりは、今一緒に悩んだ方がきつと良
い。

そう決めて、顔を上げた。

「……あの、それね、本当の課題を意味しているんだって」

「本当の課題？」

「うん、詳しくは聞かなかつたけど、多分その文字が読めるかどうかとか、読めたとしてもそれを額面通りに受け取って済ませてしま
わないかとか、そういうことみたい」

「ではこれを読んで、更に何かしなければならぬと言ふ事か」

「うん。でもそれはそこに書いてある通りだと思ふよ。石版の前で
全員でそれに触れるとかして、名を告げるとか……多分それだけだ
よ」

文字が読めるかどうか、その意図する所を理解するかどうかと

いう事自体が最後の課題なのだとしたら理屈は通っている。行為自体は確かに難しくない。

けれどそれだけだ、という言葉に全員が押し黙ってしまった。それだけの事が今の状態ではとても難しい。

実際、それが出来そうにないからアーシャー一人を奥へと向わせてしまったのだ。

「それだけ……ね。確かにそうね」

シャルが自嘲気味に呟いた。彼女の体調は未だ思わしくない。

頭痛こそ薬で少し治まったが、体は相変わらずだるいし熱っぽい。

シャルはゆっくりと全員の顔を見回した。

全ては彼女次第だった。

シャルが奥へ行けるなら、誰もが迷わず行くだろう。

(今日の水の魔法……久しぶりに上手くいったわね。杖があったからかしら)

勉強熱心なシャルは当然水の魔法も勉強してきた。

けれどどうしてもうまく使えなくて、もう随分前に知識を詰める以外の実践は諦めてしまっていた。

祖母がいなくなってからは練習もしていない。

だが自分にはもっと可能性があるのかもしれない、とシャルは思う。

例えばそれが祖母の杖のおかげであったとしても、まだ出来る事があるのならそれをどこまでも追求したい。

そして、そのためには

「……三年なら、写しを持って帰っただけでもSかAプラスの評価は取れるかもしれないな」

「そ、そうだよな！ ここまで来ただけでも三年なら上出来だろ

? これで帰ったって誰も文句言わないって！」

「……そうね」

シャルの呟いた答えに誰もが黙って彼女の方を見た。

俯いた顔からは表情が良く見えない。

「確かに、これだけでもいいかもしれないわね。もう一度奥に行くなんてリスク、冒さなくても済むかもね」

アーシャはシャルの言葉を聞きながらぎゅ、と小さな手を握った。彼女の出すその答えを望んでいたのか、それとも望んでいなかったのか。

アーシャはどちらともいえない複雑な気持ちに襲われ、俯いたシャルを言葉もなく見つめた。

だが、シャルはその直後、キツと顔を上げて三人にきつい眼差しを向けた。

「でも、嫌よ！」

「なっ!?!」

「ここで帰るなんてぜったいに嫌！ 奥へ行くわよ！ 当たり前でしょ!?!」

「け、けどよ、シャル……」

これ以上進めば彼女の具合は悪くなる一方だろう。

それがわかるだけにジェイはここで引き返しても構わなかった。

これだけの結果を持って帰れば、後はなんとか家を言いくるめることだつてできるはずだ。

「嫌ったら嫌よ！ 大体、奥にそんなすごいのがいるってわかったの！ここで帰るなんて冗談じゃないわよ！ 一目見なきゃ勿体無いじゃないの！」

そう宣言してシャルは一同を見回した。

一瞬目を瞑って深呼吸をした後、シャルは深々と皆に頭を下げた。

「お願い、協力して欲しいの。私が足手まといなんだって、嫌と言っただけでわかってるわ。でも……」

「シャル……」

「一晩、時間を頂戴。何とかできないか考えてみたいの」

勝気な少女が頭を下げたまで願った言葉に、誰もがそれ以上何も

言う事は出来なかった。

29：彼女の決意（後書き）

お待たせしました、再開です。

このままラストまで走ればなあと思ってるんですがどうなるやら。
がんばります。

夜半、アーシャは川原の近くの木に登っていた。

枝に座ってぼんやりと空を見上げる。

森に来てまだほんの数日なのに、もう随分ここにいるような気がする。

皆と出会ってからだってまだほんの短い時間しか立っていない。

けれど三人は今まで出会った誰よりも強い印象をアーシャに与えていた。

ここまでの旅を一日ずつ振り返ると、それが終わってしまうのが惜しいようにすら思える。シャルがどんな結論を出すのかでこの旅の期間も変わるのだ。

明日彼女はどんな答えを出すのだろうかと考えてみたけれど、アーシャには見当もつかなかった。

不意にガサガサと草を分ける音や枯れ枝を踏む小さな音が聞こえてアーシャは森を振り返った。

闇の中に小さな明かりが見える。それはゆらゆらと近づいてきていた。

気配から誰かがわかったアーシャは、驚かせないようにと枝から地面に飛び降りるとその場で明かりが近づくのを待った。

「シャル？」

薄っすらと明かりの向こうに見える姿に声をかける。

「アーシャ？　こんなとこにいたの？」

少女に気づくとシャルは足元に気をつけながら歩み寄ってきた。

彼女は闇の中で目が見える訳ではないのでその足取りは幾分危なっかしい。

「どうしたの？　こんな時間に」

「そのセリフそっくり返すわよ。目が覚めたら隣にいないから、どうしたのかと思ったわよ」

「あ、そっか。ごめん」

シャルは少女の謝罪に首を振ると手近な木に灯りを吊るし、その張り出した根にそつと腰を下ろした。アーシャもそれに倣う。

「いいのよ。貴女と話がしたかったから探しにきたの」

「私に……話？」

こくりと頷くとシャルは一瞬躊躇して顔を伏せた。

きゅ、と引き結んだ口を躊躇うようにゆっくりと開く。

「私が……奥に行く為にはどうすればいいと思う？」

「……」

きつとその質問だろうと予想はしていた。

アーシャももう何度も方法はないかと考え続けた。

けれど、結論は出なかった答えだ。

「……一生懸命考えたけど、三つしか浮かばなかったよ。この森の風を無理矢理止めるか、奥に行ってる間中、雨を無理矢理降らせて火の気を中和するか……」

「そんなことできるの？」

「できるよ、多分。でもどちらも、後でこの周囲にすごく影響を残してしまうと思う。それも、悪い影響を」

魔法というものを良く知っているシャルにはアーシャの言葉が良く理解できた。

魔法は決して万能の力ではない。

大きな現象、在り得ない現象を起こすにはそれだけ大きな代償が必要となる。

それが自分の魔力だけならまだいい。だが、実際はそれでは済まない事の方が多いのだ。

大きな魔法を使ったとしたら、その後この周囲にどんな大きな影響が出るのか想像もつかない。

森を愛する少女に、それが解つていながらその行為を求めるのは余りにも利己的過ぎるといふものだろうと、シャルは小さく首を横に振った。

「……もう一つの方法は？」

「シャルが……自分の火を治めること」

やはりそれしかないのか、とシャルはため息を吐いた。

自分でも判つてはいたがそれができるかどうかの自信はない。

自分の中を見つめても、それを克服する方法がわからないのだ。

「私……どうしたらいいのか判らないのよ。アーシャ言ったわよね

私が心のどこかで火を恐れてるって。けど、そうじゃないのよ」

「どういうこと？」

「……私は、どこかできつと火を……憎んでいるの」

その言葉にアーシャは目を見開いてシャルを見つめた。

シャルは彼女らしくない弱弱しい笑顔で笑う。

「聞いてくれる？ 私の、昔話」

夜の闇が一層濃くなったような気がした。

「そうね、何から話そうかしら……アーシャは私のこと全然知らないものね」

こく、とアーシャは小さく頷く。

それを見てシャルはポツリポツリと口を開いた。

「私ね、生まれた時もう少して男の名前をつけられるとこだったのよ」

「男の名前？ なんて？」

「父親がね、今度こそ跡継ぎの男の子をつて望んで信じていて、男

の名前しか用意しなかったんですってよ。

ところが生まれたのはまたも女。おまけに母親もそのお産で死んでしまうし、自分の嘆きで手一杯の父は生まれた私を抱く事も新しい名前を考える事もしなかったらしいわ」

アーシヤは眉を寄せ、そんなことで、と小さく呟いた。

生まれた子供の性別なんてそれほど些細な事は無い。

この世に生まれた命は全て祝福されるべきなのに。

「いいのよ。結局、見かねた母方の祖母が私に素敵な名前をくれたしね。

引き取って育ててくれたのも祖母なの。だから、生まれは王都だけれど育ちはアウレスーラの学園都市ってことね」

『貴女の名前はシャルフィーナにしましょう。貴女が素敵な友達に恵まれるように』

そう言って祖母はシャルを抱き、この名前をくれた。

シャルは疳の強い子供だった。

しかも火に愛された赤ん坊は、泣く度に蝋燭の火を燃え上がらせ、暖炉の炎をくすぶらせる。

生まれてすぐの彼女を預けられた乳母ら周囲はほとほと手を焼いたらしい。

「祖母は名の知れた魔道士で、アウレスーラ学院でも教鞭をとるほどだったし、特に水の魔法が得意で、暴走した私を止めるのにはうつてつけだったという訳ね。けど祖母は私を大切に育ててくれたし、いろんな事を教えてくれたわ」

例えば魔法とか、と言ってシャルは笑った。

彼女はシャルの成長に合わせて、感情と魔力を制する術や歌を教えてくれた。

祖母は魔力と祈りを乗せた呪歌を得意とする魔導士だったから様々な歌を知っていた。

童謡、民謡、祭祀に歌われる祈りの歌から古い神を称える歌まで。

シャルも一生懸命真似をして歌い、歌が大好きになった。祖母はシャルに、水を称える歌を良く聞かせてくれた。

『私はね、若い頃は日照りの夏に良くこの歌を歌ったのよ。日照りの町に行つて心からこの歌を歌えば、歌に乗せた言霊が遠く遠く水の女神の元まで届いて恵みの雨が降るの』

そう言つて聞かせてくれた歌は何よりも美しかった。

シャルは祖母と二人の世界に何の不満も持たずに成長した。

そんなシャルが父親に会つた最初の記憶は五歳の半ばで、もう魔力で火を起こす事は滅多に無くなつていた頃のことだ。

祖母の家を訪ねてきた父は彼女の赤い髪を見て、似ていないな、とだけ言つた。

「私は面白く無さそうな顔をしたその人が誰なのかわからず、ただ客に対する礼儀としてこんにちは、と言つたわ」

それが今もつて続く、シャルとその父の関係そのものだ。

「私が魔力を制御できるようになったと知つた父は、それから頻繁に祖母の家に訪ねてくるようになったのよ。でも目的は私じゃなくて、祖母と話をする事だつたの」

彼はシャルを王都の貴族の娘の大半が通う有名な学校へ入れたい、と祖母を説得に来ていたのだ。シャルがそれを知つたのはもつと後のことだつた。

シャル本人の希望通りアウレスーラに入れるという祖母と、魔力の制御が出来るならそれ以上の魔法なんかいいから将来の為に王都の学校へ入れるべきだ、と言う父は会う度口論していた。

「もう、ほんと最悪の仲だつたわよ。母親が生きてた頃は、おばあちゃんも娘の夫だからって遠慮してたらしいんだけど……で、結局私が六歳になる少し前、決定的な出来事が起こつたのよ」

その日、シャルは学園に招待講演をしにいった祖母を見送り一人で留守番をしていた。

そこに、父が訪ねてきたのだ。

祖母はいない、とシャルが言うと父は彼女に家に来ないかと言った。

今日は弟の誕生日で、弟がシャルに会いたがっているから迎えに来た、と父は言うのだ。

シャルはまだ見た事のない、腹違いの弟に興味を持った。

王都には何度も行っていたが、行き先はいつもジェイの家だけで実家は訪ねた事がなかったのだ。

祖母に言わないと、と言う彼女に、書置きを残せばいいと父は言い、結局シャルは誘われるまま馬車で三時間ほどの王都へ父と向う事を選んだ。

「記憶にある限りほぼ初めて訪ねた実家はね、そりゃもうきらびやかで悪趣味極まりない家だったわ。珍しくてあちこち回ってみただと、姉達も弟も、どこか余所余所しくてまるで他人みたいだった」

結局、早々に屋敷に飽きたシャルは、夕方が来る前に家に帰りたいと父に言った。

けれど父はそれを許さなかったのだ。彼はシャルに、王都に留まりここから学校に行けと言い張った。

『王都の学校はあんな田舎の学園よりもずっと優れている。お前をきちんとした淑女に育ててくれるんだぞ！魔法なんかを学ぶよりも、そこに通ってどこに嫁に出しても恥ずかしくないような娘になるべきなんだ！』

嫌だ、と言い張り暴れるシャルはとうとう離れに閉じ込められ、鍵をかけられてしまった。

「閉じ込められながら、私はずっと怒っていたわ。理不尽な事をい

う父だと言つ男と、こんな所にこのこ来た自分に。今思えば心細いとか怖いとか帰りたいとか、そういうのを全部隠す為に、怒りに変えたのよ」

不安を怒りで覆い隠して一人耐えていたシャルの所へ祖母が駆けつけたのは、その日の夜だった。

騙すようにシャルを連れ去った父を祖母は激しく怒り、シャルを今すぐつれて帰ると言つたらしい。

「何でお父さんはそんなにシャルを王都の学校へ入れたがったの？」
「それがねえ……」

シャルは困つたように笑いながら自分がそれを知つたあの日の事を苦々しく思い出した。

怒鳴る祖母を見たのはあの日が初めて最後だ。

あの時の祖母は普段の穏やかさをかなぐり捨てるように怒り狂つていた。

発端はシャルより四つ年下の弟だった。

母に死なれたシャルの父はその二年後に再婚し、そして更に二年後、今度こそ待望の男の子を得た。

やっと生まれた跡継ぎに最良の人生を歩ませるのだ、と彼はずっと心に決めていた。

最高の教育を受けさせ、出世の見込める職業に就かせ、そして出来れば位の高い貴族から最高の嫁を貰うのが彼の望みだった。

その為の準備は早い方がいい、使える駒は何でも使うのだ、と彼は考えた。

幸い彼の手元には三代に渡つて商売で培つたコネと、賄賂や贈り物に使えるたつぷりの金と、そして四人の可愛らしい娘がいた。

彼は待ちに待つた息子が生まれた時に、それら全てを有効に使つて息子の代に下級貴族から脱却する事を夢見たのだ。

まずは三人の上の娘をそれぞれそれなりの相手と次々に縁組させ

た。

中級くらいの貴族や商売の付き合いのある富豪との縁は今後役に立つ。

そして最後に目を向けたのが、今は一緒に住んでもいない四番目の娘の存在だった。

『惜しいと思わないんですかお義母さん！ あれだけの魔力があればどんな貴族にだって求められるんですよ！』

力があることが権威になるのはどの世界でも変わらない。

こと貴族の間では昔から、魔力の高い人間は多少地位が低くても嫁や婿や養子に欲しいという話が少なくない風潮がある。

『火じゃなく光の精霊に愛されていれば言うことはなかったが、それでも嫁に欲しいという大貴族は多くいるはずだ。そうすればそのツテで息子にだって最良の嫁を探してやれるんです！』

『冗談じゃありませんよ！ 貴方は自分の息子の為に、娘を捨石にしようというのですか！？』

『家の為です！ それにあの子にだって悪い話じゃない。魔力はもう制御できるんだし、後は淑女になる為の最高の教育を受けられて、求められて嫁に行けて実家の格も上がる。女としてこれ以上望むことはないはずだ！』

『それを望むかどうかはあの子が決めることです！』

シャルが閉じ込められた離れの前で繰り広げられた言い争いは二階の窓からそれを見守る彼女にも聞こえていた。

『貴方が娘に交際を申し込んだ時から気になっていたけれど……もしかして貴方は私の娘だからあの子に近づいたんじゃないのですか！？』

父の家系にはそれまで魔力の高い者はほとんど生まれてこなかった。

そういつた家の人間が多少なりとも魔力が強い家系の人間と縁と結びたがるのもよく聞く話だ。

祖母は自分の娘の結婚を認めたものの、その心の奥底ではずっとそれを疑っていたのだ。

祖母の家系は代々魔力が強い傾向にあったが母はそれほどの力は持っていなかった。

だからあるいは気のせいかとも思ったのだが、それでもその子供に魔力が受け継がれる可能性は皆無ではない。

結局生まれた子供達の中で魔力が強いのはシャルだけで、それも持て余されて捨てるように祖母に預けられたから、彼女もしばらくはその疑いを薄めていた。

だがここへ来てのシャルに対する父親の執着はそれを期待していたと再び祖母に思わせるには十分だった。

『娘が幸せだ、というから黙っていたけれど……』

父は否定も肯定もしなかった。

けれどそれこそがその答えを語っていると、幼いシャルにもおぼろげに理解できた。

シャルはとても悲しかった。

何がとは上手く言えないけれど、多分何もかもが。

(こんな家、なくなっちゃえばいいのに)

消えてなくなればいい、とシャルは望んだ。

祖母が声を荒げるのも、父という人が醜く笑うのも、もう見たくなかった。

(なくなっちゃえば、もうここにいらなくてすむのに)

シャルの心に浮かんだ強い強い願いに、精霊は応えた。

精霊は愛する者を裏切らない。

離れが突然の業火に包まれたのはその直後の事だった。

「……それで、どうなったの？」

「勿論離れは全焼よ。幸いその時離れには私以外誰もいなかったから怪我人なんかは出なかったし、母屋に燃え広がる前に祖母が止めてくれたけどね」

そう、と呟くとアーシャは俯いた。

幼いシャルを追い詰めた出来事が悲しかった。

「私、一生懸命火を止めようとしたのよ。なくなればいいと思ったけど、まさか本当になるとは思わなかった。けど、全然精霊は言う事を聞かなくて……火は私には優しく、触っても少しも熱くなかったけれど、怖かった。すごく怖かったわ」

火の中で気を失い、次に気がついたのは母屋の客室のベッドの上だった。

祖母が心配そうに覗き込んでいたのをシャルは良く覚えている。火を制御できなかった事を思い出し、ごめんなさいと謝るシャルに祖母は優しく笑って、帰りましょうとだけ言うてくれた。

「帰る支度をしていた時、実家の人間が私を見る目はそりやもう最悪だったわ。まるで化け物でも見るかのような顔だった。その時にね、姉が……二番目だったかしら？ 怒ったような顔で近寄って来て怒鳴ったのよ」

『離れの物は皆燃えたのよ！ あそこにはお母様の形見がいっぱいあったのに！』

あの離れは母が好んで使っていた建物だったという事をシャルはその時初めて知った。

大きな家を好まなかった母の為に父が建てた物だったのだ。

そこは生前の母が好んだままに整えられ、思い出の品が沢山置いてあったのだという。

『お母様の思い出を返してよ！ あんたなんか妹じゃないわ！』

チクリ、と小さな痛みがシャルの胸を指した。

まだ胸が痛むとは思っていなかった。

もう昔の事だ、と思っていたのに。

「そんなの、シャルのせいじゃないよ……」

この話を誰かに語ったのは初めてだった。アーシャの切なそうな顔がシャルには少し辛い。

そんな顔をさせてしまった事を申し訳なく思いながらシャルは首を振った。

「私のせいよ。後は、父のせいでもあるかしらね？ なんにせよ私はその姉の言葉で、自分と家族の全ての繋がりがその時断たれた事を知ったの。私が、自分のこの力で断つたのよ」

祖母とシャルの、二人だけの生活は満たされていた。

どこかに他の家族がいるのだと知ってはいたけれどそれだけで、シャルはほとんど興味を持たなかった。

なのに、初めて顔を合わせて、それでもぎこちなく微笑んでくれたりもした彼らとの繋がりが、顔も見たことのない母親の思い出の品がそうと知る前にもうなくなつたのだ、という事実はシャル自身も予想しなかつたほど彼女を打ちのめした。

シャルは祖母の家に帰ってから熱を出し一週間ほど寝込んでしまった。

起き上がれるようになってから鏡を見ると、もう彼女の髪は今のように茶色く変わってしまった。

「私……後悔はしてないのよ。アウレスーラに行つて、魔法を学ぶのは楽しいわ。自分の力を伸ばすのはすごく楽しい。けど……」

祖母の葬式に彼らは一応家族揃ってやってきた。

父は元のような赤い髪でなくなったシャルを見てほっとしたような顔をした。

それ以外の家族は、彼女を見てもそこにいないかのような扱いだっただ。

彼らはほとんど顔を合わせた事もない母方の祖母の死に、さほど悲しみも感じなかったようだった。

シャルや、数多く駆けつけた祖母の友人達が嘆くなか、彼らはおざなりに式に参列した後、何の感慨も見せず馬車に乗って去っていった。

帰り際に遠くから見送った、その家族らしい光景がシャルには苦しかったのは何故なのか。

「ごくたまに、思う事があるの。もし……もしよ？ 私が、火の精霊に愛されていなかったら……私は、家族に愛される事があつたのかしらって。あの中に入る事ができたのかしらって」

女に生まれたのも、お産の床で母が死んだのも、火の精霊の加護を受けたのも、何一つシャルのせいではない。

なのに自分のせいではない事によって彼女は与えられてしかるべき物を何一つもらえなかった。

その、名前さえも。

「私……火が、好きよ。火の精霊が私に伝えてくれること、すごく感謝してる。なのに……心のどこかで受け入れてないってこと、ずっと分かってた。どこかで、火の精霊に愛されなければって思ってるのよ」

膝の上で固く握られたシャルの手はかすかに震えていた。

ずっとそれを認めるのが怖くて、シャルは自分の内面から目を背け続けてきた。けれど今それを認めなければ自分の道はここまでだと言ふ事も彼女にはわかっている。

「……最低よね。精霊達にいつだって助けてもらっていなながら、こ

んなひどい話ないわよね？ 愛されていながら、心のどこかで彼らを……本当は憎んでるだなんて！」

アーシャはキュ、と唇を噛んだ。

苦しそうなシャルが悲しい。

彼女の周りでずっと悲しそうにしてる精霊達が悲しい。

けれど、それはここにいて誰のせいでもないのだ。

「……アーシャにね、ずっと聞きたかったの」

「何を？」

「精霊は、私をどう思ってるの？ 本当は精霊達にはこんな私の思いなんて全部通じているって、きつと分かってしまっているって思ってたのよ。でも、精霊達は変わらず力を貸してくれる。どうしてなの？ 何故彼らは私を見捨てないの？ 貴女が精霊と話せるって分かってから、ずっと……それが、知りたかったの」

精霊が彼女をどう思っているのか、アーシャはその言葉を受けてシャルの周りにいる精霊達に意識を集中してみる。

彼らはいつもと変わらない。ただ悲しそうにしているのが分かる。

(何故悲しいの?)

アーシャは心の中で呼びかけてみた。

誰かの支配下にあったり、その人を慕って周りに集っている精霊は呼びかけても答えを得にくい。

本人の意思とは無関係に傍にいる精霊は下級の場合が大半だから尚更だ。

だが彼らがシャルをどう思っているかというのは聞かなくても分かる。

彼らはシャルを深く愛している。それに間違いはない。

けれど悲しいのは何故なのかアーシャには分からなかった。

シャルに憎まれているからか、とも思ったが少し違う気がする。

(何が悲しいのか教えて)

何度か呼びかけると彼らは小さく応えを返してきた。

アーシャの胸に届いた小さな声。それは 謝罪の声だった。

「……謝ってる。悲しんで、シャルに謝ってるみたい」

「謝るって、何故？ 謝るのは私の方じゃないの？」

うーん、と小さく唸ってアーシャは首をひねった。

30・昔の話(後書き)

ちよつと半端ですが長くなったので二つに分けました。
続きはまた明日にでも。

31：過去からの歌声

アーシヤは目を閉じて精霊の声にもう一度意識を集中した。

けれどやはり聞こえてくるのは許しを請う悲しげな声ばかりだ。

その声の切なさに自分まで更に悲しい気分になってしまいうそで引きずられそうな気持ちを振り切りながらどうにかその声の中から幾つかの音を拾い出した。

「もうちょっと強い精霊の言葉なら良く聞こえるんだけど……何か、メル……メルフィナを許してって言ってるみたい」

「メルフィナって、それ私の祖母の名前だね。許せて一体どういうことなの？」

精霊達に謝られる理由も、祖母を許さなければいけない事も、何も心当たりがない。

シャルはひどく困惑した。きっと精霊達は自分を責めると思っていたのだ。

「うん。じゃあちょっと待ってね、やっぱりもうちょっと強いのに聞いてみるよ」

そう言つとアーシヤは川原を歩き出した。シャルも慌てて灯りを持って後を追う。

アーシヤはきよろきよろと辺りを見回すと、少し離れた場所上が比較的平らになっている大きな岩を見つけた。

上面は少し斜めになっているが、その表面はきれいだし、一、二人なら乗れそうだ。

近寄って表面を調べ、使えそうな事を確認する。

よし、とアーシヤは一つ頷くと腰につけてきていたヒップバッグのポケットから小さなチョコクを取り出した。

「何するの？」

「うん、結界張ろうと思って」

見つめるシャルの目の前でアーシャの手は器用に動き、二重の円とその中や外を取り巻くように細かな文字や記号をびっしりと書き込んでいった。

どれも古代文字でシャルに読めるものは数えるほどだが、炎や封じる、などを意味する見覚えのある言葉から自分の力を抑えるためのものかもしれない、と予想する。

「よしと。シャル、この真ん中に立ってみて」
完成した魔法陣は淡く光を放っている。

シャルは言われたままに岩に登りその円の真ん中に立った。
ふわり、と一瞬下から風が起こりシャルの体を包んだ気がした。
不意に体が楽になった事に気づく。ずっと彼女を悩ませていた、あの内側から体を叩くような力が消えうせたのだ。

「どっつ?」
「すごく楽になったわ。体が軽くなったみたい」
良かった、と言いながらアーシャは更に円の外側に幾つかの文字や線を書き足してそつと手を当てた。

「こんなもんかな。あんまり長くは持たないかもだけど、これが魔力が外に出るのを抑えてくれるから。じゃあシャル、火の精霊を呼び出してみて」

「……本当に、大丈夫?」
きつとそのためのものなのだろうとシャルも予想はしていたが、呼び出すことには一抹の不安を感じてしまう。

そんな彼女にアーシャは力強く頷いた。
「大丈夫。もし何かあっても、私が止めるから」
迷いのない様子に少し考えてからシャルも頷き返した。

「判ったわ……じゃあ呼ぶわね。」
『猛々しき炎の精霊よ 我に応え我が下へ来たれ』

ふわ、と魔法陣の中だけで起こった風がシャルのローブを揺らす。

シャルの全身を実に久しぶりの暖かな火の気配が覆う。シャルはその心地よさに思わず深いため息を吐いた。

アーシャには一瞬魔法陣が真つ赤に染まったように見えていた。結界が壊れない自信はあったがそれでも少しひやりとした。

赤い光と風が治まると何事もなかったかのように辺りは静まり返った。

けれどアーシャの目にはシャルの周りをちらちらと舞い飛ぶ無数の小さな赤い光と、彼女の前にゆらゆらと揺れる一際大きな赤い光が映っている。

それは他の精霊よりも明らかに強かった。そして、恐らくこれがシャルを昔から守ってきた精霊である可能性が高い。

こく、と息を呑むとアーシャはゆっくりとその大きな光に右手を伸ばした。

(お願い、聞かせて)

そう祈りながらその火の精霊に触れる。

「アーシャ!？」

ボツ、と何もない場所に突然炎が熾った。

シャルの目には自分の前に伸ばしたアーシャの手が突然の炎に包まれたかのように見えた。

自分が何かしたのか、と焦ってシャルは意識を静めようとしたが、精霊達にまだ何の命令もしていないことは確かだ。

炎に包まれても燃えているわけではないようだがそれでも熱いのだろう、アーシャはぎゅつと眉を寄せて耐えている。

「……大丈夫、だから」

小さく囁かれた声は、彼女が苦痛を感じている事を教えている。

他人の支配下になっている精霊はその時点でアーシャとは相容れない存在になっている。

自分が呼び出したものなら何ともなくても、人の呼び出した精霊に直接触れるのは多少の反発を伴うものだった。

ましてやその精霊の意思を深く探ろうとすればその反発は更に大きくなる。

それでも、アーシャは自分の意思を必死に精霊に合わせてその声を聞き取るうとした。

じりじりと焼ける手が痛みを訴えている。けれど、そんなものよりも胸に響いてくる精霊の嘆きの方がアーシャにはずっと痛かった。

『……どうか この子に……きる……を』

途切れ途切れに聞こえるのは歌のようでもあり、祈りの聖句のようでもあった。

もっと深く、とアーシャは更に一步踏み出した。手の上に乗せた精霊がバチバチと更に炎を放つ。

いちかばちか、一瞬の深い接触到アーシャは賭けた。シャルのために、という強い気持ちを精霊に投げる。

(教えて!)

バチン!!

「わっ!」

「キヤツ!?!」

大きな音ともにアーシャは弾き飛ばされて川原に転がった。

その姿にシャルが悲鳴を上げる。彼女は一瞬結界から踏み出そうとしたが、はっと気づいてどうにかその場に踏みとどまった。

「アーシャ! アーシャ、大丈夫!?!」

「うー……だ、大丈夫。平気だよ」

アーシャはヨロヨロと起き上がったがその足元はふらついている。シャルがはらはらと見つめる前でアーシャは再び岩に登ってきた。「シャル、手を出して」

そう言っただけでアーシャは左手を伸ばした。少女が利き手を出さなか

った事に気づき、ふとその右手を見てシャルは仰天した。

「アーシャ、その手！」

だらりと脇に下げたアーシャの右手は今や真っ赤に腫れ上がり火
張れが出来ている。それでもアーシャはなんともないかのように更
に左手を彼女に突き出した。

「後で治すから大丈夫。それより早く！」

焦った声に押されてシャルはしぶしぶ左手を伸ばした。少女の右
手の怪我が気になって仕方ない。

「シャル、目を閉じて意識を集中して。私に聞こえた、精霊の記憶
をシャルに送るから」

アーシャはシャルの手を強く握り、それだけ言つと自分も目を瞑
ってしまった。その手を気にしていたシャルも慌てて目を瞑る。

アーシャはこれが終わるまで手当てもしないつもりなのだ。何を
するのかはわからないが、それなら早く済ませて手当てする時間を
作るのが早い。

言われたとおりじっと目を瞑り、シャルは体の余分な力を抜いて
深呼吸した。魔法を習う者が必ず行う精神統一の基本だ。

風の音と葉ずれの音が辺りを覆っている。

シャルはふと、その中に違う音を聞いた気がした。

その音に意識を傾ける。風の音に紛れがちだが、どこか遠くから
かすかに鈴の音のような音がする。

リン、と小さく、けれど意外なほど耳に響いたその音にシャルは
ハッと息を呑んだ。

この音を知っている。いや、知っていた。

去年の春、祖母が亡くなるまでシャルが毎日聞いていた音だ。

彼女が昔から大切にしていた、野ばらを模した金のブローチの端
についていた小さな金の鈴　その音に間違いない。

祖母は、シャルが生まれる前に亡くなった祖父からの贈り物だと

いうそれを毎日その胸元に、時には帽子に、スカーフの留めにとどこかに必ず飾っていた。

最後の最後まで、祖母の共をしたのはあのブローチだ。けれどあれはもう、祖母と一緒に土の下に
そこまで考えた時、シャルは息を呑んだ。

また別の音が聞こえたからだ。今度はもっと別の、人の声のような。

『どうかこの子に、娘のお腹の子に……生きる力を』

シャルは声を上げそうになった。聞き間違えるはずがない。

シャルの記憶にあるよりも若い気がするが間違いなく、シャルが生まれてから十四年間聞き続けた声だった。

あの最期の日からもう一度聞きたいと何度思ったか判らない。

(おばあちゃん……！)

シャルはぐつと歯を食いしばってその音を逃がすまいと意識を集中させた。

『闇の女神よ、どうかまだこの子を召されたもうな。この子はまだ生まれて来てもないのです』

『お母さん……ありがとう』

次に聞こえたその声には聞き覚えがなかった。

弱々しい、けれどどこか意志の強さを秘めた若い女性の声だ。

『この子の為に、歌ってくれるのね』

『……ええ。お前が最期にこの世に送り出す命の為に。私の、最初で最後の火の精霊賛歌よ？』

悲しみを押し殺したかのようにかすかに歪み、それでも必死で明るさを装った祖母の声。

すう、と息を吸う音が小さく聞こえ、そして流れてきたのは歌だった。懐かしい祖母の優しい歌声にシャルは思わず涙をこぼしそうになった。

けれどその歌はシャルが聴き慣れた穏やかな水の精霊歌とは違っていた。

それは時に勇壮で、時に猛々しく、そしてどこか暖かい。シャルが初めて聞く、祖母の歌う火の精霊賛歌だった。

『 暖かき炎の兄上

ここに生まれくる命にその御手を垂らしたまえ 』

(どうか、どうかこの子に生まれてくる為の力を)

歌に混じって祖母の祈る声が聞こえた。祖母は心からの祈りを乗せ、悲しみを堪えて力強く歌っていた。

『 力満ちる炎よ ここに宿りて小さな灯火となれ

此は暖かな灯火の運び手に

優しき暖炉の守り手に 』

(どうか、この子に生きる為の強い力を)

祖母の願いを乗せて歌声は高く低く胸に響く。歌詞はシャルの知るものと所々が違っていた。

『 時には旅を癒す小さな炎に

春の運び手 夏の踊り子 秋の灯火 冬の守り手 』

(この願いに私の人生の全ての火を捧げます)

祖母はシャルの記憶にある限り一度も火の魔法を使わなかったこ

とを思い出す。家の暖炉や釜の火を熾すのも、全て手作業でやって
いた。

シャルはそれをずっと、彼女が火の魔法が苦手なせいだと思って
いた。

「その御手を経て 生まれ来る子に祝福を

どうか我らの幼子の傍に祝福を」

(どうか、どうかこの子に祝福を！)

オギヤア、と甲高く、力強い声が一瞬間こえた気がした。

それではその願いは、彼女が人生でただ一度と歌ったその歌は、
確かに届いたのだ。

「ありがとう……母さん、どうか、この子を見ていてあげてね」

「……ええ、ずっと。お前の分も見ていますよ」

その言葉を最後に泣き声は静かに遠くなっていった。

シャルの頬に当たる現の風が、流れ落ちる雫をひんやりと撫でて
いく。

いつの間にか全ての音は止み、ただ立ち尽くすシャルをアーシャ
が心配そうに覗き込んでいた。

「……聞こえた？」

シャルは返事をする事も出来ずただ頷いた。

流れ落ちる涙を拭う気にもならない。

祖母と、そして恐らく初めて聞いた母の声がまだ胸の奥に響いて
いる。

「シャルのお母さんは……シャルがお腹にいた時に体を壊してもう
お産に耐えられなかったんだって」

シャルはぼんやりと顔を上げてアーシャを見た。

「けど、どうしてもシャルを産みたくて、お祖母さんに頼んだんだ。子供が無事に生まれてくれるよう、力を貸してって。弱ったお母さんのお腹の中のシャルも随分弱っていて、生まれてくれるかわからなかったから」

「……それで、祖母は歌を？」

「うん。全ての命に活力を与える、炎の歌を歌ったんだ。お母さんのお腹の中の、シャルの為に」

シャルは笑った。笑おうとして失敗した。

「ふ、ふふ、おばあちゃん、あんなに火は苦手だつて言ってたのに」
嘘だったのね、とシャルは小さく呟いた。

その言葉にアーシャは首を振る。

「嘘じゃないと思うよ。水の魔法の方が得意だったのは多分本当だと思う。けど、シャルの為に、誓いを立てて全身全霊で得意じゃないあの歌を歌ったんだよ。だからこそ、その願いは届いた。シャルは無事に生まれて、そしてその身に強い精霊の加護を受けていた」

祖母がシャルに教えてくれた歌の中に火の精霊歌もあった。

けれど祖母は決してそれを歌って聞かせなかった。

歌わないから忘れてしまったの、と言って歌詞だけを簡単に教え、火の教会へシャルを連れて行ってくれた。

シャルはそこでその歌を覚えたのだ。

「シャルが自分の火のせいだ家族と離れる事になった時、シャルのお祖母さんはすごく悲しんでいたって。シャルに何度も謝ってたって」

「だから……精霊達は、祖母を許してと代わりに謝ってくれているの？」

シャルの目からまた涙が幾つもこぼれた。

精霊達の優しさに気が遠くなりそうな気持ちになる。

そんなの憎めるわけがない。彼らのせいでも、祖母のせいでもないのだ。

顔も知らぬ母が子供の生を望み、祖母はその為に歌い、自分の火を捧げてくれた。

そして精霊はそれに応えて力を貸してくれたただけだ。

シャルには憎めない。憎めるわけがない。

こんなに祝福を受けて、この世に生まれてきたのだから。

「許せなんて、そんなのこっちのセリフだわ……！」

六歳になる前の、あの時。

熱が下がって起き上がったシャルの髪の色を見て祖母は彼女を抱きしめた。

ごめんね、と何度も言いながらシャルを強く抱きしめてくれた。

あの時は訳がわからなかったけれど、今なら良くわかる。

きっと祖母にはわかったのだ。

シャルがその苦しみから、与えられた祝福を否定した事が。

ごめん、とありがとうをシャルは言いたかった。

この世に送り出してくれた事に深い感謝を捧げたい。

母と、祖母と、精霊に。

ぐい、と涙を拭って、シャルは目の前で心配そうにこちらを見つめている少女を見た。

さつと手を伸ばして彼女を抱きしめた。

「シャ、シャル!？」

驚く声に構わずぎゅうぎゅうと感謝を込めて細い体を抱きしめる。

「ありがとう、アーシャ。本当にありがとう」

唐突な感謝に戸惑いながらもアーシャは頷いた。どうしたらいいかわからない、という風にもそもそと体を小さく動かす。

不意にアーシャは思い出したように顔を上げた。

「あ……あのね、シャル、もう一つだけ。シャルの名前、お祖母さ

んがつけたって言ってたよね？」

「ええ、そうよ」

「……シャルの名前、ちゃんと意味があるんだよ」

シャルは体を離してアーシヤを見る。

意味があるなんて初めて聞いた。祖母もそんな事は何も言っていなかった。

「シャルフィーナっていうのは古い言葉で言うと、シアル・フィーネラ …… フィーネラは水の女神の名前で、シアは友。だからその意味は水の女神の友。つまり水の友ってことだよ」

水の友、とシャルは繰り返して呟いた。

それは水の魔法の得意な祖母自身の事であり、そしてシャルがきっと将来苦手だと思っただろう水の魔法や精霊もが、その友であるようにという彼女の祈りでもあった。

火の愛し児であり水の友であれ。

シャルは、祖母の深い深い想いに触れたような気がした。

また頬を涙が幾つも転がり落ちる。

「……いい名前だね。さすがおばあちゃんね。私に、ぴったりだったわね」

そう言っただけでシャルは涙と共に鮮やかに笑った。

ぐす、と小さく鼻をすする音が木陰で響いた。

「……見つかるぞ」

「だって、しょうがねえだろ！ あんな話聞いてよお！ お前冷たいぞー！」

「ありがとう」

「褒めてねえ！」

シツ、とディーンに窘められてジェイはしぶしぶ口を閉じる。ぐし、と鼻を擦ると必死で涙を堪えた。

二人共ずつと少し離れた木の陰から少女達を見ていたのだ。彼女らが声を使わずに交わした会話こそ聞き取れなかったが、シャルに起こった出来事はジェイには身に応えた。

ずつとシャルの傍にいたのに彼女にそんな事があつたなんて知らなかった。ジェイは何の力にもなれなかった自分を殴りたい気分だった。

「俺、結局何の役にもたつてもねえんだよな……」

「そんな事はないだろう。お前は多分役に立っていると思うが」

恐らくシャルが過去の出来事から魔法の道を志す事を止めてしまわなかったのはジェイによるところが大きいか、とディーンは思う。

基礎学校の頃、シャルが新しい魔法を覚える度に、ジェイに自慢半分で報告していた事を思い出す。

その度にジェイは持ち前の素直さで、「すつげえシャル！ もう一回見せてくれよ！」と何度も魔法をせがんでいた。

シャルはいつも満更でもなさそうな顔をして、しょうがないわねと言いながら魔法を披露した。

時にはその魔法で髪の毛を焼かれたり、実験台にされたりしてもジェイは懲りることなくシャルの魔法を褒め称え続けた。

（あの頃からこいつの女の趣味はなんて悪いんだと呆れてさえいたが……）

「まあ、そう捨てたものでもないな。安心するといい」

何に対しての言葉なのか、深くは語らずにディーンはジェイを慰めた。

川原の少女二人は一息ついてアーシャの怪我を思い出したらしく騒がしく手を川の水に着けたり、回復をしたりしている。

ディーンの目で見るシャルの髪はまだ茶色いままだ。前よりも少し赤みを取り戻しているようには見える。

「一晩待ってくれ、と言った彼女が今晚のこの出来事からどんな結論を出すのか。」

「デーンはジエイを促してテントの方へ静かに歩き出した。」

「結論の出る朝まではまだ大分ある。」

「空には月がぼんやりと輝いていた。」

31・過去からの歌声（後書き）

35くらいでこの話が終わるときりが良くていいなと考えています。
あと一息……

32：水に捧ぐ歌

夜が明けて間もなくシャルはまた川原に来ていた。

川原の浅瀬に足を浸し、川の中に立っていた。気分は昨日より随分いい。

傍の岩の上にはアーシャが座り、心配そうにシャルを見つめていた。

少し離れた場所にはジェイとティーンがいる。

シャルはやってみたい事がある、と朝早くにアーシャを起こした。そして二人が川原へ向う足音に目を覚ました少年二人も勿論ついてきていた。

何をするのか、と問うアーシャに、シャルは雨を降らせるのだと答えた。

一日中降り続くようなものでなく、ほんの一時のわか雨だと思っけど、とシャルは悪戯っぽく笑って、それを見ていて欲しいとアーシャに頼んだ。

アーシャは心配しながらも、シャルの精神統一を邪魔しないように黙って彼女を見つめていた。

シャルが言ったようにほんの一時降る雨なら、アーシャが精霊を長時間呼ぶよりも周りへの影響は遥かに小さく済む。

けれどそれではシャルの火の気を中和するには足りないはずだった。

水の魔法の苦手なシャルが本当に雨を降らせる事が出来るのかどうかもわからない。

シャルの意図する所が良くわからないアーシャには、ただ見つめる事しかできそうになかった。

シャルは祖母の形見の杖を胸の前で固く握って、空を仰いでいた。

明け方の空は朝焼けの名残を残して鮮やかな金と赤に染まっている。

今日も晴天で、雨が降りそうな気配はどこにもなかった。

三人は静かに川の中の少女を見つめていた。

不意にシャルがくるりと振り向いた。

三人のギャラリィを順に見つめると、高らかに宣言した。

「私、水の魔法は大の苦手だわ。雨なんて降らせたくもないし、水の精霊歌だって、ただの歌としてしか歌えたこともないわ」

突然の言葉に三人はきよとん、とシャルを見つめる。

「けど、これは私にとつてのけじめみたいなものなの。私が、水の友だって事、確かめたいのよ。だから絶対成功するから！ ちゃんと見てなさいよ、特にジエイ！」

そう言つてシャルは笑つた。夜明けのような笑顔を誰もが眩しく見つめる。

「おう！ お前こそとちなよ！」

笑いを含んだいつものジエイの返事に送られ、シャルは静かに目を瞑つた。

シャルは祖母の言葉を思い出していた。

歌を教えてとせがんだ時の思い出だ。

難しい単語の多い精霊歌の歌詞を覚えられなくて、紙に書いてもいいかと聞いた彼女に、祖母は言った。

「だめよ、シャル。紙に書いてはいけないの。紙に書いたら間違えなくなるでしょう？」

「どうして？ 間違えちゃだめなんじゃないの？」

「いいえ。いい、シャル。精霊の歌というのはね、精霊と神様に、私はこんな人ですよって、聞いてもらう為の歌なの。その時の自分

の魂と、自分の願いを神様に見てもらったための歌なの。』

『その時の自分？』

不思議がるシャルに、祖母はそれはそれは大事な秘密を教えるのだ、というように指をぴん、と立てて厳かに告げた。

『そう。だからね、本当は決まった歌詞があるわけじゃないの。もし、自分の中のどこを捜しても言葉が見つからなかったらそれでも良いくらいなのよ。』

若い時の歌、年をとってからの歌だって違うわ。だから、私が教える歌も、本当は私の歌なのよ。

それを間違えずに歌えるようになってしまったら、それに囚われて自分の歌が探せなくなってしまうかもしれないわ。そうしたら、もう神様にも精霊にもシャルの歌は届かないのよ？』

届かないなんてそんなのやだ、と言うシャルに祖母は優しく笑いかけて言った。

『だから貴女の歌を歌いなさい、シャル。貴女を表すような歌を。願いを込めて、世界の壁をも越えて、精霊や神々に届くように』

すう、と深呼吸した。

あれほど彼女の頭を悩ませた頭痛が今は感じられない。

吹き付ける風も、木々の音も、何も聞こえなかった。

無音の中、シャルはただ自分を見ていた。

泣いている小さな子供。

六歳のままの自分。それがシャルフィーナだった。

小さな小さな灯火だ。いつか大きな炎になれるだろうか？

目を開く。

シャルは今初めて自分を見つけた、そう思えた。

何かに導かれるように、その唇から自然に音が零れた。

『麗しきフィーネラ、水の姉上』

その暖かな涙をこの幼子の上に降らせたまえ。』

この身の炎を鎮める、天からの慈悲を強く願う。

雨を浴びればこの身の火を治める事が出来るという保障はどこにもない。

けれど、これは自分にとっては大切な儀式だと、シャルには思えていた。

『その涙は炎を鎮め』

その涙は怒りを癒す

その涙で我は小さな灯火へと還る。』

安らかなのにどこか高ぶっているような、不思議な気持ちがあった。遠く遠く、自分の歌がどこまでも届くような気がする。

闇の女神の御手に抱かれているはずの、祖母にも届けばいいと思っただ。

『春に訪れ 夏に遊び 秋を喜び 冬に囁く』

水は炎を鎮め 火は水を天へと還す。』

祖母と過ごした日々が胸をシャルの過ぎる。

昨夜初めて聞いた母の声が聞こえる。

世界は、祝福に満ちていると初めてそう思えた。

『我は貴女の友 いと小さき灯火』

今日は家々の暖炉に 明日は旅人の傍に

我が我たる為に どうかその涙を此処に

どうかその祝福の涙を此処に 』

静かな余韻を伴って穏やかな歌は終わった。
シャルは水の中、目を閉じたまま動かない。
誰もが、息を潜めてその歌に聞き入っていた。
まるで森までもが耳を済ませているかのような時間だった。

ポツン

小さな音がしてハツとアーシャは水面を見た。
向けた視線の先でポツン、とまた一つ水面に波紋が生まれる。
思わず空を見上げたがそこには相変わらぬ晴天が広がるばかり
で、雨が降るような空ではない。

それなのに、ポツリ、ポツリと大粒の雫が次から次へと降りてき
始めていた。

「雨が……」

「ほんとに降った……」

晴れた空から落ちてくる雨はあっという間に量を増やし、ぽかんと空を見上げる四人を徐々に濡らしていく。

「あは、あはははは！ やったわ！ やったわよ！」

歡喜の声を上げてシャルは両手を高く空へと伸ばした。

降ってくる雫が、水の女神の涙が、シャルの中の暗い炎をじんわりと癒していく。

もうシャルの中には憎しみも怒りもなかった。

暖かく自分を取り巻く精霊の気配を、ただ愛しいと思った。

頬を雨よりも暖かい水が一筋伝い、雨に混じって落ちる。

願いを聞き届けてくれた水の精霊と、自分を守り続けてくれた火の精霊に深い感謝を胸の奥でそっと送った。

いくら感謝してもし足りない、もっともっと叫びたいような気分だった。

「シャル！　すごいよ！」

「本当に降るとは……」

誰もがその全身で雨を受け止める。

夏の晴れた朝の突然の雨は暖かく、優しかった。

「すっげえな、シャル！」

自分の事のように笑顔を見せるジェイにシャルはいつものように高らかに答えた。

「あつたり前でしょ！　私を誰だと思ってるのよ！」

誇らしげに笑う彼女のその髪と瞳は、雨の雫を浴びることに朝焼けの空で染め替えたかのような鮮やかな赤い色へと変わっていた。

朝の森に子供達の喜びの声がいつまでも木霊した。

33：秘密の欠片

「……」

今日も森は風は強いがいい天気だった。

四人は森の奥の広場に体を寄せてしゃがみこみ、良く晴れた空をポカンと見上げていた。

バサバサ、と大きな羽音と共に強い風が吹き付ける。

飛ばされないように十分に距離をとってあったが、それでも体重の軽いアーシャは三人の体の影に隠れさせてもらって風を避けて姿勢を低くしていた。

シャルの降らせた雨が止んだ後、四人は服を乾かして荷物をまとめ、昼前に森の奥へと出発した。

今度こそ、シャルは具合を悪くする事なく一人でちゃんと歩く事が出来た。

森の奥に大分近づいた所で日が暮れ、奥の広場への到達は翌日に持ち越された。

そして今日、森に入って七日目の昼少し前にととう最奥にたどり着いた一行は、目の前にゆっくりと降りてきた巨大な生き物を呆然と見詰めているのだった。

グリフォンはふわりとその大きさや体重を感じさせない動きで地面に降り立った。

金の瞳が四人を順に捕らえて興味深そうにきらめく。

その瞳には確かに知性を感じられ、アーシャ以外の三人は思わず息を呑んだ。

先に近づいたのは勿論アーシャだった。彼女は固まっている三人を置いてぱたぱたと小走りでグリフォンに近づくとばふ、とその首に抱きついた。

「……！」
その行動に三人が声にならない悲鳴を上げているのも知らず、アーシヤはグリフォンを見上げて気軽に挨拶を交わす。

『こんにちは、西風の王。約束通りまた来たよ、今度は皆で』

『よく来た、グラウルの娘。待っていたよ。あちらが仲間かな？』

うん、と頷くとアーシヤは固まっている三人の方へ振り向いて手招きした。

「大丈夫だよ。ね、教えたとおり言ってみて」

その言葉に恐る恐る近づくと、三人は夕べ教わった古代語での挨拶を口にする。

『……こんにちは』

『こ、こん、にちは』

『こころ、こ、こニチワ』

ぐる、とグリフォンはそれに唸りを返し、三人は思わずびくりと身構える。

それが笑い声だと知っていたアーシヤは大丈夫だ、と三人に声をかける。

「笑ってるよ。こんにちはってさ」

恐ろしい笑い声に思わず顔が引きつったが、どうやら歓迎されているらしい事を知って三人は胸を撫で下ろした。

その間にアーシヤはグリフォンと何ごとか会話と交わしていた。

といってもグリフォンは軽く唸るだけなので、アーシヤが一方的に話しかけているように見える。

古代語で交わされる会話はシャルやジェイには全く聞き取れない。デインだけがかるうじて幾つか単語が聞き取れる程度だった。

『一昨日はどうもありがとう。おかげで間に合って、皆を助ける事が出来たよ』

『どう致しまして。無事に降りられたのかね？ 突然飛び降りたか

ら随分驚いたのだが」

「どうやらアーシャは、彼に低く飛んでもらった後何も言わずに飛び降りていたらしい。」

「ん、大丈夫。木に助けてもらったし」

「それならいいが、余り無茶をするのは感心しない。人は壊れやすいのだから大事にした方がいい」

「……はい」

人ならざる者にまで注意されてしまった。だがアーシャはそれもなんだか嬉しかった。

それから少女は振り向き、まだ固まっている三人を一人ずつ示して紹介した。三人は名前を呼ばれるときこちなく頭を下げた。

「火の娘はどうやら良い形に落ち着いたようだ。そなたの友達はどうもなかなか見所がありそうだ」

「……友達？」

「ああ、違うのかな？」

「ね、アーシャ。何て言ってるの？ 何かこっち見てるけど」

何か自分たちの事を言われている事に雰囲気で気づいたのだろう。シャルが質問してきた。その質問にどう答えたらいいものかアーシャは少し迷う。

「あ、えと、その……私の、と、友達は何見所がある、って……」

「あら、嬉しい事言ってくれるじゃない！ やっぱり見ればわかるのかしらね？」

「シャル、お前……。気持ちわかるけど、もうちょっと……」

「謙虚さの欠片もない返答だな。アルシエレイア、今のは通訳しなくてもいいぞ」

「何言ってるの、実力に裏打ちされた単なる事実よ！ 事実を語るのに謙虚になる必要がどこにあるのよ！」

シャルはすっかりいつもの調子を取り戻している。

むしろしばらく大人しくする事を余儀なくされていた分、鬱憤を

晴らすかのように全開だった。

友達、と言った言葉を誰もが否定しなかった事にアーシャはほっとすると同時になんだか恥ずかしいような何とも言えない気持ちになった。

グリフォンに対する怖さが薄れていつの間にか近くに寄ってきている三人の顔が見れなくて、慌ててグリフォンの方に向き直る。

そんな彼女を面白そうに見つめる金の瞳と目が合う。照れ隠しに手を伸ばすと大きな嘴が優しく触れた。

不意にグリフォンが立ち上がり、翼を半分広げて奥の方へと歩き出した。

「付いて来いって」

四人は慌てて歩き出し、翼の影に隠れるようにしてその後を追った。

やがて彼らはずいに、見上げても上が良く見えないような高い崖と、その崖に埋め込まれるようにしてきらめく緑色の石碑の前に辿りついた。

「これが……」

「ついに来たのね」

「きれいだなあ」

思い思いの感想を呟きながら三人はそれを眺める。

ついにここまで来た、という思いが胸に迫る。

本当はほんの数日の旅だというのに、もう随分長い時間がたっている気がした。

『さあ』

グリフォンに促され、アーシャは小さな手をそれに伸ばした。

ぺちぺちとその磨き上げられた表面を叩く。

「多分これでいいんじゃないかと思うんだけど……皆もこれに触ってみて？」

ぺた、と三人も次々に石に手を伸ばした。ひんやりとして滑らか

な感触が心地いい。

最後に、一旦手を離していたアーシャが再びそれに手を触れた。

「あー！」

「わ、光った!？」

「手を離すな、ジェイ」

変化は、四人の手が石版に触れた途端の事だった。

ポウ、と石版が内側から緑の光を発したのだ。

ジェイが驚いて一瞬手を浮かすと光も呼応するかのように弱くなり、彼は慌ててもう一度石版に手を這わせた。

「あ、文字が」

見上げれば光を帯びた石の表面からは先ほどまで彫られていた文字が消え、薄っすらと新しい文字が浮かび始めている。

「なんて書いてあるのかしら。アーシャ、読める？」

「えーとね、『幼子らよ、祝福を求めるならば汝らの名を捧げよ』
だって」

「順番に名乗ればいいのか？」

「まあ、恐らくはそうだろう」

四人が顔を見合わせるとシャルがにっこり笑って真っ先に名乗りを上げた。

「私はシャルフィーナ・ラド・ブランディアよ！ 未来の大魔道士
ね！」

「最後のはいらないんじゃないか……いやあの、俺はジャスティン・ジャン・イー・ジェイ」

「ディラック・アルロード」

「アルシエレイア・グラウルだよ」

順番に名乗る四人の声に反応して石版の光は小さく明滅を繰り返した。

最後にアーシャが名乗った時、石版が一際大きく光った。

その眩しさに一瞬四人が目を瞑り、そしてまた開くとそこに書か

れている文字は再び変化を見せていた。

「アーシャ、今度はなんだ？」

アーシャは素早く目を走らせて文字を読み上げた。

「えっと、『汝ら、その旅路の終わりに……何を求める』かな？」

「その旅ってこの旅のことか？」

「その、というのだから違うんじゃないのか？ 言葉の雰囲気としては、学生時代とか人生とかといったもっと大きな意味を含んでいるように感じるが」

「石版の癖に随分哲学的な質問するのね。けどいいわ、どうせ私は一つだけだもの。私が求めるのは自由よ。私という魂の自由！」

「俺は……強さかな？ 大事なもん守れるくらいの」

「……真実だ。己にとっての真実を」

「……」

アーシャは言う事が見つからずに黙ってしまった。そんな彼女を三人が心配そうに見つめる。

「アーシャ？」

「うん……求めるもの、だよな」

とは言ったものの何も思いつかなくてアーシャは途方に暮れる。

少女には昔から積極的に何かを求めた記憶がほとんどないのだ。

本当に求めるものはもう手に入らない。それ以外に欲しいものは何一つなかった。

だが、なかったはずだ、と考えた時、一つだけ心に引っかかる言葉が浮かんだ。

それはこの石版にも刻まれていた言葉。

その存在を彼女は疑っていたけれど、今ここに皆と立っている事はその証の一つでもあるような気がする。

アーシャは迷いながらもゆっくりと口を開いた。

「き……絆、を。自分が、どこかと繋がっているという証があったなら……」

いい、という最後の声は小さくかすれて消えた。

ポウ、とまた光が一際強くなる

もう一度四人が目を瞑り、そしてまた開いた時にはやはり石版の文字は変化を見せていた。

『 幼子よ、汝ら求める道は遠くても その旅路にいつも良い風が吹くよう ここに祝福を贈る 』

アーシャがその文字を読み上げる。けれど何も起こらない、と思つた次の瞬間、石版に当てていた四人の手の平がずぶりと中に飲み込まれた。

「キヤア!？」

「うわっ!」

「ひゃっ!？」

「……!」

石の中はその外側と同じくひんやりとして、まるで冷たいゼリーに手を突っ込んだような感触がした。

四人は驚いて慌てて手を引っこ抜いた。その途端石版の中に灯つていた光はすう、と消えうせた。

後にはただ、最初と変わらない文字を刻んだ石版が残った。

四人は思わず顔を見合わせる。

「な、なんなのよっ!？」

「び、びびったあ」

「む?」

「あ」

慌てて抜いた手は無意識の内にこぶしを握った形になっていた。

その手に違和感を感じてアーシャとデインはそつと握った手を開いた。

「あ……!」

「これは……」

二人の手の中にあつたのは、親指と人差し指で輪を作ったくらい

の直径の、緑色に透き通った丸い石だった。

よく見ると森の緑の中に透明な部分が混じりあい、角度によって薄い緑にも見えるような不思議な色をしている。

二人の手の中の石を見て慌ててシャルとジェイも手の平を開くとやはり同じ石を一つずつ握っていた。

「わあ、綺麗ね……」

シャルがうつとりと呟いてその石を光に翳す。するとその石の中心に一瞬小さな光が見えた。

「これが祝福って奴なのかな？」

「恐らくはそうなのだろうが……一体どういうものなのか」

アーシャはじつと石を見つめたまま動かなかった。

少女はこの石を知っていた。少女の知っているものとは違うけれど、これはきつと

アーシャはくるりとグリフォンの方へ向き直った。彼は楽しそうに子供達を見つめたまま、ただそこに佇んでいた。

『西風の王、これは……』

『久しぶりに楽しい時を過ごした。お前達の答えが面白かった故、特別に少しばかりおまけをつけておいた』

その言葉にアーシャは目を見張り、やはりと思う。

幾つもの疑問が頭を過ぎる。

これが自分が知っている類のものならば、彼は。

『貴方は……貴方は、どうして、どうやって』

ぐるる、とグリフォンは喉の奥で笑った。そしてすく、と立ち上がり急に翼を広げる。

『我らにも色々ある、と言ったろう、グラウルの娘。だがそなたなら、あるいはいつかそれを見出すかも知れぬ。しかし今はまだ早い』
バサ、とグリフォンは大きく羽ばたいた。

「ひゃっ！」

「アルシエレイア！」

風に煽られよるけて転がりそうになったアーシャをディーンが腕が捕まえた。

アーシャはよろよるとその腕にしがみつき、飛び立とうとするグリフォンを必死で見上げた。

「待って！」

「いずれかまた会おう、無垢なる白よ。その時にはそなたの求めるものがその傍にあらん事を祈る」

風に耐えながら見上げる四人の前で、グリフォンはゆっくりと羽ばたき、飛び立って行った。

力強いその姿が悠然と崖よりも高く上り山の中に消えていく。

その姿が完全に見えなくなるまで、四人は呆然とそこに座り込んでいた。

「……で、結局、この石ってどういうものなのかしらね？」

風の少ない場所を探して昼食を取りながら、四人はまた石を眺めていた。

アーシャはそれに答えようとして口を開きかけたが、また閉じてしまう。

グリフォンが飛び立ってからずっとアーシャは様子がおかしかった。

何か考え込むように黙ったまま炙った固パンとチーズをもそもそと齧っている。

他の三人はさきほどからそっとお互いの顔を見合わせ様子を伺っていた。

見かねたシャルは肘でジェイをつつき、それに促されたジェイがディーンに救いを求めるような目を向ける。

ディーンは深いため息を吐いた。

「アルシエレイア」

ぴくん、と細い肩が揺れた。

「君が何を悩んでいるのかは知らないが、相談に乗る用意のある人間がここに三人もいるんだが？」

「え……そ、相談？」

「私達は君のような知識はないかもしれないが話を聞く事はできる。アーシヤは驚いたように順番に三人の顔を見た。

「水臭いわよ！　ね、何を悩んでるのか、教えて？」

「そうだけ、まあ聞く事しかできないけど、ちっとは気が楽になるぜ？」

「さっきこの石を受け取った後、グリフォンに何か話しかけたらう。その時に何かを言われたのか？」

自分を心配する気持ちが伝わってきて、アーシヤは顔を伏せ、そのまま首を横に振る。

「違う……むしろ、何も答えてくれなかった」

「何か質問したの？」

こく、と頷いてアーシヤは手の平を広げてその上の石を見た。

何度見ても不思議な色合いの石だった。見る角度によって全く違う色を見せ、内側から薄っすら光っているようにも見える。

それはアーシヤの目にははつきりと光って見えていた。内部に白い光を灯し、それは時折届くはずのない外の風を受けて揺らめいている。

アーシヤは手の平を三人の前に差し出した。

「皆、魔石の定義って、知ってる？」

「知らねえ！」

真っ先に手を上げたのは勿論ジェイだ。シャルとディーンは知っていたので頷く。

魔石、とはそれ自体が魔力を帯びた石、もしくは外側から魔力を込めて魔法的な処理を施した石の総称だ。

ある程度の質の高い貴石や宝石なら力の差はあれ大抵は加工できるのでその範囲は広い。

だからカットしただけの石でも、宝石店で売れば宝石と呼ばれ、魔法具店で売れば魔石になる、というのも良くある事だ。

魔法具には大抵の場合その魔石が要や媒介として使われているが、有名でわかりやすいのは魔道士の持つ杖にはまった石だろう。

ジェイわかりやすいようににアーシヤは自分のマントの留め具に嵌っている青い石を見せながらそれらのことを説明した。

「魔石って、魔力を持つ石と、魔力を込めてある石のことを言うけど、本当はほとんどが後の方のものばかりなんだよ」

「後の方って、魔法で加工してある石ってことか？」

「うん、例えば私が護符にしてるこれも、中に魔力が込めてあるから、もしそれが消費される事があつたら魔力を補充しないとただの石に戻ってしまうんだ」

へえ、とジェイは声を上げた。魔石とは無縁で過ごしてきたからそんな事は初めて聞いたのだ。

「魔石も宝石も、同じように鉱山から取れて行く先で名前が変わっただけってというのがほとんどんだけど、極まれにその中に最初から魔力を帯びてる物があるんだよ」

「そういうのは魔石の中でも精霊石って呼ばれる貴重品なのよね」
精霊の力が宿るのだとも、精霊が作るのだとも言われる精霊石は本当に貴重で、それが掘り出され流通しても買えるのは王侯貴族やごく一部の富裕層、あるいは名のある魔道士ぐらいだ。

「シャルのお祖母さんの杖の石はその貴重品の一つだよ」
「えっ、そうなの!？」

シャルはどうやら知らなかったらしく、仰天して自分の杖を慌てて確認した。だが杖はそんな様子などちらとも見せない。

石としてはかなり大きい美しいが、ただそれだけだ。精霊石なら自らもつと魔力を発散していて気づくのが普通なのだ。

「ほんとに？ そんな感じ全然しないけど……」

「それは多分お祖母さんがそういう風に封印して置いたんだと思うよ。それ一つで貴族街に豪邸が建つなんて知られたら、シャルが危ないし。今度よく調べてみるといいよ」

その言葉に杖を持ったままシャルは硬直し、ジエイはヒヤア、と声を上げて恐ろしい物を見るような目を向けた。

「……家に帰ったら、もつと大人になってこれを自力で守れるくらいになるまでしまっておくわ」

「その方がいいと思うよ」

「まあ、それは置いておいてだ。その話からするとこれは精霊石なのか？」

ディーンという言葉にアーシャは首を横に振った。

「魔石には、もう一つ種類がある。あつた、と言われている」

アーシャは空を見上げた。けれど晴れた空に彼の姿を見つけることはできなかった。

「まだ世界が一つで長命な者と短命な者の交流があつた頃、力のあつる精霊や幻獣がその力を結晶化させ人に贈つたと言われる石があつた。それを生み出した者の力の一部を封じた石……聖霊石と呼ばれるものがあつたって言われている」

三人にはアーシャが何を言いたいのかわかつた。

わかつたけれど疑問が残る。

「それが、これだつて言うの？ でも、普通の魔石とどう違うの？ この石からはそんな魔力は感じないわよ。これも封印されてるとかなの？」

精霊石は手に取っただけでそれとわかるほど力に満ちているからすぐにわかる場合が多い。

けれど四人の手の平の石はそんな力を発散したりはしていない。

見た目はただの変わつた石だ。

色が混じっているので見える目がなければガラスと間違える者もいるだろう。

「うっん、私には、怖いくらいの力を秘めているのが見えるよ。力が外に出てないのは、これ自体が力の結晶として完全に安定してるからだよ。聖霊石は、彼らが認めた者だけに与えられるものだから、その人が命じた時にだけ力を現すんだって聞いたけど……多分、風や森の魔法を使う時にはこれ一つあればどんな媒介もいらなくて相応な力を出せると思う。使い方は、後で調べて考えてみるけど……」
アーシャは視線を手元に戻した。

「これは贈り物だって、彼は言ってたんだ。でも、聖霊石は力のあがる長命種だけが作れるんだって私は聞いた。そしてその存在はこの世界にはもう残っていないって」

「残っていないものが実は残っていたという事か？」

「デインの言葉にアーシャは首を横に振った。」

「違う……この世界にずっといれば、どうしたって彼らは少しづつ力と知恵を失うっていうのが定説なんだよ。だから精霊達もこの世界と向こうを定期的に行き来するんだって。現に飛竜達は年を重ね、代を重ねることに小さく弱くなってるって本で読んだよ。」

「ちよつと待って、じゃあ、まさか……」

「そんなばかな、とついよんだシャルの言葉の後をデインが引き取った。」

「まさか、あのグリフォンは現在もエル・ロレインの住人だということか？ 精霊だけじゃなく、幻獣も二つの世界を行き来しているという事か？ どうやって、何の為に？」

「それは私が知りたいよ。聞いてみたけど……我らにも我らの事情があるということだって、答えてくれなかった。」

「答えなかったがその言い回しはまさにそれが正解であることを告げているように聞こえる。」

三人は恐ろしげに手の中の石を見つめた。

物言わず鎮座している石が、そんな秘密や強い力を秘めていると

は到底思えない。むしろシャルには普通の魔石より静かに感じられるくらいだ。

「どつりで、言葉が通じすぎると思ったんだ」

もっと早く気づくべきだった、とアーシャは後悔していた。

気づいていたら、聞きたい事があつたのに。

もう彼は別れを告げて去ってしまった。ここで待つても姿を見せはくれないだろう。この広大な山脈から彼を探し出す事は絶望的だ。

ましてや、彼がここに住んでいるという保障もないのだ。

はあ、とアーシャはため息を吐いて固いチーズを口に放り込み噛み砕いた。

喜ぶべき家路が疑問を残して後ろ髪を引かれるようなものに変ってしまった。

だがそのアーシャの重い気分を明るい声が打ち消した。

「でも、それってすごくラッキーって事じゃない？」

「え？」

「だって、そりゃあ疑問は残ったけど、そんなすごいのと出会ってこんなすごい物貰っちゃって、課題は完全クリアよ！ もう言う事ないわ！」

それは言われて見れば確かにそうだった。

おまけ付だ、という言葉から察するに、本来貰うはずの物よりも良い物を貰ったのも間違いないだろう。

一度は無理かとも思った課題をクリアし、後は帰るだけということとここまで四人はついに辿り着いたのだ。

「ね、アーシャ、きつと今全部秘密がわかったらそんなの面白くないわ。また一緒に来ればいいじゃない？ もうこの森の事もわかったんだし、今度は彼に会いに」

「そうそう、また来ようぜ。出直してくれば気が変わって色々教え

てくれるかもしれないし！」

「その時はぜひ付き合おう」

「皆……」

その言葉がただの慰めではない事がアーシャにはわかった。

この旅を楽しく思っていたのは自分だけではなかった事に初めて気づく。

いつかまた、この四人でここに来たら彼は会ってくれるだろうか？

「……うん。また、またきつと来ようね！」

頷いて、空を見上げる。

またいずれ、とどこか遠く、山の向こうから笑う声が聞こえた気がした。

34：夜明けの歌

夜明けの近い森で、アーシヤは一人木の上に座っていた。

今日は森に入ってから十二日目の朝。もうこの森の中の道程は終わりに差し掛かっている。

帰りの道は行きに比べれば順調すぎるほどだった。

朝が来て歩き出せば今日の夕刻には森を抜け村が見えるだろう。

森を抜けてしまうのが何となく寂しくて、アーシヤは昨日も今日もこうしてこつそりと木の上で夜を明かしていた。

手の中にはあの石がある。

あの出会いで、世界にはまだ沢山の秘密がある、とアーシヤは改めて知った。

旅をするには年齢が足りていなくてどこにもいけないことがとても悔しい。

けれど何もかも置いて飛び出すのも、今は未練を感じている。

この旅は彼女に少なくない変化をもたらしていた。

トン、と小さな音を聞いてアーシヤはハッと下を見た。

木の下にはいつの間にかデイーンが立っていた。デイーンはアーシヤの方を見上げながら、トントンと彼女の座る木の幹を小さくノックする。

「デイーン……」

「この前は驚かされたからな。今度は驚かせてみた」

そう言いながら彼はアーシヤの座る枝のすぐ下まで歩み寄り、そこに張り出た木の根の一つに座って上を見上げた。アーシヤは低い枝に座っているので見上げるのはさほどの苦にはならなかった。

「今夜も考え事か」

「……気づいてたんだ」

「どんなに安全な結果だろうと野外で熟睡したりしないものだ」

「全然熟睡しないの？」

デインは少し考えて首を横に振った。

「闇の聖霊が常に傍にいるから、ほんの少し寝ただけでも深く眠れる。隣でジェイが深い眠りにつく前に短い熟睡をしている」

便利だなあ、とアーシャは感心した。

闇の聖霊の与える眠りならきつと深く体と心を癒してくれることだろう。

そんな事をしなくてもすぐに眠れるからやってみた事はなかったが、今度ぜひ試してみようと少女は思う。

感心しているアーシャを見上げてデインは先を促した。

「そんなことより、今度は何の悩みだ？」

う、とアーシャは言葉に詰まった。

「一人で抱えるのは感心しない」

「別に、悩みって言うほどのものじゃないよ。ただの……一人反省会？ もうすぐ森を出るのも寂しいし、何かもやもやするから外の空気吸ってただけで」

「そのもやもやを一般的に悩みと言っただと思うが」
的確に表現されてアーシャは唸った。

悩みと言ってもアーシャにも、自分が何で悩んでいるのかすら判然としないのだ。

何から話したらいいのかもわからない。

少女がそれを素直に告げると、何でもいいから語ればいい、とデインは促した。

仕方なしにアーシャは思いつくままに重い口を開いた。

「私ね……三年前、本当は学園に入るつもりじゃなかったんだ。世界を見ておいでって育ての親に言われたから、そうするつもりだった

た。だから一人で旅に出たの。なのにな」

ひどいんだよ、とアーシャは憤慨した口調で訴えた。

「旅を始めたらさ、迷子や家出と間違われたり、人買いに攫われそうになったりして。お金があっても宿に泊まるうとすれば怪しまれるし、短い間なのにもう散々だったよ」

アーシャは不満そうだが、それが普通だろう、とディーンは思わず頷いた。

十歳やそこらの子供が一人旅をしているなどと言っても、多分誰にも信じてもらえないだろう。

その苦労の様子や憤慨する少女の姿が目には浮かぶようで、ディーンは彼女には悪いがうっかり笑ってしまいそうだった。

「結局さ、泊めて貰った地の教会の神父さんに相談したら、働くにもまだ早いし、お金があるなら学校にでも行つて成長するまで待つたらどうかって言われたんだよ。」

それでアウレスーラなら色々な事が学べるし、門戸が広いつて教えてもらつて、孤児だつていう紹介状書いてもらつてここに来たんだ」

「なるほど。では卒業したら旅をするのか？」

「旅に出てもおかしくなくくらい大きくなつたら途中でも出て行くつもり、だつただけだよ」

アーシャは空を見上げた。

「あのね、分かたれた二つの世界には道がついているって言う話、知ってる？」

「そうなのか？ 知らないな。初耳だ」

「この世界のどこかに、二つの世界を繋ぐ道と扉があつて、精霊達はそこを通つて行つたり来たりしてるんだつて。……私、世界を回つたらいつかそれを探すつもりだった。それが本当にあつても、なくても」

アーシャの手の中にはまだあの石が握られている。

「……それはもしかしたら確かに存在するのかもしれないと、この旅で確信を得たという事か？」

こくり、とアーシャは頷いた。

「今すぐにも学園を飛び出してその道を探しに行きたい……ちょっと前だったら、本当に行ってたかもしれない」

でも、とアーシャはディーンを見下ろした。

彼の黒い姿は木の陰にほとんど溶け込んでいる。まるで闇の聖霊そのもののように見えるほどだ。

「……私、退屈だから皆に付いて来たんだ。ちょっとした気晴らしになればいいなって思ってた。でも、なんか思ったよりもずっといろんな事があって、すごく、すごく楽しかった」

「確かに色々あったな。私にも久しぶりに刺激になった」

「うん、だから……だから、まだここにいたい。でも、今すぐ行きたい。けど、やっぱり行きたくないって、ずっとぐるぐるしてて……」

……なんか、変だよな」

ディーンは首を横に振った。彼女の迷いが良くわかったから。

それはとても人間らしい矛盾に満ちた迷いだ。

何ものにも執着が無さそうに見える少女がそれを感じている事が、ディーンには何故だか少し嬉しかった。

「どうせもう数年の我慢だ。君はまだ余り大きくなったとは言いがたいし……もう少しここに居て、それまでこうして時々一緒に旅に出ることで気を紛らわせて過ごせばいい」

「……一緒に」

「ああ、嫌だろうか」

アーシャはぶるぶると慌てて首を振った。

「嫌じゃない、けど……ほんとにいいの？ 私がみんなの傍にいても」

「どういう意味だ？」

「だって、人数合わせだったでしょ、私。もう無理な課題をこなさ

なくて良いなら、他に少人数で出来る丁度いい課題色々あると思うし……」

どうやらアーシャは自分が三人の中に加わったら迷惑なんじゃないかとまだ思っているらしい、とディーンにもわかった。

少女の意外な気の弱さを示す心配事がなんだか可愛く思える。

「私だけをあの二人の間に取り残すのは全く勘弁して欲しいところなんだがな」

冗談めかしてディーンがそう言うときアーシャも少し笑った。

「まあ、あの二人は置いておいても私は君とまた旅をしたいと思っている。沢山の貴重な体験ができたしな。そしてできればいつか、学園を出た後のその道を探す旅にも同行させて欲しいのだが」

「え……なんで？ あるかもっていう可能性がちょっとだけ強まっただけで、そんなのほんとは見つかるかもわからないだよ？」

「それでも、何も知らず旅もしないよりは見つかる可能性があるだろう？それに、それは私の目的とも近い気がするからな」

アーシャは首をかしげた。

そしてディーンがああ石版の問いに返した言葉を思い出す。

「……真実を求めるっていうのと関係があるの？」

「ああ」

己にとつての真実を求める、とディーンはああ石版の前で言っていた。

それが何を意味するのかアーシャには判らなかった。

「聞いていい？ ディーンの求める真実って、何？」

聞かれることを予想していたのだろう。ディーンはうるたえもせず静かにそれに答えた。

「私が知りたいのは……世界と、精霊と、人に関する事だな」

「例えば？」

「例えば、世界は本当に二つに分かれているのか？ 分かれた本当

の理由は？ 神は今でもエル・ロレインにいるのか？」

それは学者達が昔から研究している普通のテーマでもあった。

創世記を聞かされた子供達が良く親に聞いて困らせる類の質問でもある。

「何故精霊は別れたはずの人間に手を貸す？ 何故彼らは気まぐれに人を愛するような事をする？」

これはアーシャも時々考える疑問だ。

精霊達は何故あんなに優しいのか、と少女はいつも思う。

だがそこには愛される者とそうでない者という理由のわからない不公平も確かに存在する。

「それを知ろうと様々な文献を読んだが結論は得られなかった。だが、もし向こうへ行けるならそれを調べる事もたやすいかもしれない」

「それはそうだけど……何でそんな事が知りたいの？」

「理由は……私もシャルと同じだから、だな」

「え？」

「つまり、精霊に愛されたが故に捨てられた子供だ、という事だ」

ざわ、と風が二人の間を通り過ぎる。

森の中は暗く、その暗がり座り込むディーンの様子はいつもと変わらない。

余りに変わらないその様子に、アーシャの方が冗談でも言われたのかと一瞬うろたえてしまった。

「ほんとに？」

「ああ」

ディーンの声は静かだった。そこには怒りも憎しみも無い。

ただ微かに、水底の泥のように長い時間をかけて静かに積もった悲しみと、諦めの臭いがした。

ここは光が愛される国だ。この国で闇の精霊に愛されているとい

うことはそれだけでも生き辛いものなのかもしれない。

そんな風に、受けた祝福がその人を悲しませる呪いになっちゃってしまふなんて、と少女は悲しく思う。

「別に面白い話でもないが、まあ興味があるならいざれ話そう……。」

だから、私を育ててくれたのは闇の精霊達のようなものだ。それだけがただ優しくかった」

ディーンは静かに左手を前に伸ばした。

側に浮かんでいた小さな闇の精霊がその手に一瞬、するりと絡まる。

ディーンには見えていないはずだ。けれど、何かを感じるのかもしれない。

「だが、同時に私もシャルと同じ疑問をずっと持っていた。何故精霊は人を愛するのか。精霊に愛されたから私は捨てられたのか。精霊の加護がなければどんな見かけで、どんな風な人生だったのか」
くだらないな、とディーンは笑った。

「私がこの旅への協力を了承したのは、似たような境遇の人間に対する少しばかりの同情と、好奇心が主な理由なんだ」

「好奇心？」

「自分とどこか似た境遇の二人が、未来を掴む事ができるのか興味があった。その為に困難に立ち向かう事が出来るのか見てみたかった。ひどい理由だろう？」

アーシャは何とも言えず、ただ小さく首を横に振った。

「私も好奇心で言えば似たようなものだもん。でも……ディーンにも二人みたいに掴みたい未来があるの？」

「どうか……私が知りたいのは、過去や仮定の事ばかりだからな。過去の真実を得てから未来を向くのかどうかはまだ判らない。ただ、いずれはこの国を出るといのは決めている。それは掴みたいとかそういうことではなく単なる決定事項だ。変更する気はない」

ああ、とアーシャは胸の奥で納得した。自分と彼がどこか似ていないとずっと思っていた理由がやっとわかったのだ。

アーシャもまた、道の先に求めるのは過去だからだ。それが未来に繋がらなくても、きつと自分はそれを求めてしまう。

世界を見て回るのは約束だから、必ずそれをするだろう。

でもその後はきつと自分は過去に繋がる道を探してしまう。

例え、その先に未来がないとしても。

「私は、この国が嫌いだ。この国の全てが。ただ闇に愛された、それだけで私に何も与えなかったから。だからいずれこの国を出る。だが、精霊の事は憎めなかった。彼らはどこまでも優しくかったから」
デインは古代語を学び、許される限りの古文書を漁って、古い創世記の写しを幾つも読んだ。

けれど、そのどこにも闇は忌むべきものだとも、神や精霊に優劣があるのだとも書いていなかった。

デインにとってはそれだけでもう良かった。もとより、精霊を憎むには彼らは優しすぎた。

むしろ憎むべきは、光に生まれても還る時は闇に抱かれる癖にそれを認めようとしない、自分の周りの愚かな人間達だ。

生まれたことさえ認められないなら、そんなものこちらから捨ててやると彼は決めたのだ。

そしていつかその先で、己にとっての真実を探し求めようと。

「……光と闇は、仲の良い夫婦神なのに。馬鹿だね」

「全くだ」

二人の間に静かな時間が流れる。

この時間も、この闇もどこまでも彼らに優しい。

「デインの秘密を聞いたお詫びに、私の秘密も教えようかな」

いたずらっぽいアーシャの言葉にディーンは木の上を仰ぎ見た。
「私の髪の色、何色に見える？」

アーシャの髪の色はオレンジがかった茶色のはずだ。
そう答えるつもりで彼は闇の中に目を凝らした。

だが答える前にアーシャはタン、と木の枝を蹴って飛び降りた。
ディーンの前目にふわり、と白いものが降り立つ。

アーシャのマントの色だと思った。
けれどそれは。

「……白」

「当たり前」

それは、完璧な白だった。

混じりけのない純白の髪。目だけが、緑のままだ。

この世界に、生まれながらに白い髪を持つ者はいない。
いないと言われている。

ありえないその色が人に現れたとしたらそれは忌むべき徴に違
ないと言う。

それは、何の加護も持っていない、見放された者の証。

けれど、アーシャはそんな風には見えなかった。

その髪は闇の中でうつすらと輝いて見える。

「魔法か何かで染めていたのか？」

「ん、普段はね。この指輪で明るい茶色になるようにしてるの」

アーシャは小さな指輪を見せる。

少女が左手の小指にいつもしていた細い指輪だ。シンプルな銀の
台座にオレンジ色の小さな石が嵌っていた。

「今ほどの精霊の干渉も断つてあるし、これがほんとに元の色」

「それは、どういう……」

ディーンの前には発せられる途中で口の中に張り付いたよう
に止まってしまった。

アーシャの髪の色が目の前で見る見る変わり始めたからだ。

ふわふわとはなた毛先をじわじわと染めていくその色は、この夜の闇を溶かしたような、黒。

「デインみたいな黒はどうか？ 似合う？ 闇の精霊の干渉を

受け入れてみたんだけど」

「一体、どういうことだ？」

「私にもほんとの原理とか、理由とかはわかんないだよ。私が森で拾われたのは四、五歳くらいだったってじいちゃんも言ってたけど、それ以前のこととは何一つ憶えてなかった。その時には、もうこんなだったって。」

言葉も喋れず、ただ傷だらけで森の中で蹲っていた、と育ての親は言った。

争いに巻き込まれたか何かで森に迷い込み、それっきり故郷を失い、全ての繋がりがりや記憶を失くしたから、こうなったのかもしれないと彼は言っていた。

けれど本当の所はわからないままだ。

「中身が空っぽだからなのかな？ 私は全ての精霊に干渉したり、されたりする事が出来る。側にいる精霊の影響を受けてこうして表にその色を出せるんだよ」

例えば森にいれば緑や茶色に、夜の下では黒く、光を浴びれば金に。

「森に長くいたから、森の色に染まればいいと思っていたのにダメだった。森を出たら元に戻っちゃった。目は緑のままだったからこれは元からのかもしれないけど……私が特別森が好きだからかもしれないね。それだけは救いかな」

アーシャは上目遣いでちらりと見える自分の前髪を見つめた。

その視線の先でまた髪は白へと戻っていく。

「街にいる時はその地域の人に溶け込める色になるように調整してるだけ。本当はどんな色も持たない。どこにも属さない。何者でも

ない。

どの精霊も優しいけど、シャルやディーンみたいに一番にはなれない。……それが、私」

自嘲するような言葉を少女は紡ぐ。

けれどディーンには、アーシャの髪はむしろ全ての精霊の加護を受けるが故の白のように思えた。

その白は、美しかった。

「記憶や、故郷を探しているのか？」

アーシャはふるふると首を横に振った。

「育ったところが故郷だから。もう迎えてくれる人がいなくても帰る場所はそこだけ」

森の奥に向けた瞳はどこかここではない森を見ている。

「でも、まだ……を嫌うには早いから、世界を見ておいでって言われて森を出されて、帰れない。いつになったら帰れるかもわかんないし。ほんとに早くもっと大きくなりたいよ」

その言葉には本当に実感が込められていたので、ディーンは思わず軽く声を上げて笑ってしまった。

「あ、ディーン笑った！」

「す、すまん」

いいよ、とアーシャは面白そうに言う。

「ディーンが笑ったの、初めて見た気がするよ」

「……そうだろうか」

「うん、初めてだよ。ね……なんかさ、おかしいよね。皆、迷子みたいだよね」

シャルも、ジエイも、ディーンも、アーシャも。

「四人もいるのに、全員迷子か。確かにそうだな」

「だから、精霊が代わりに愛してくれてるのかもしれないね」

精霊が代わりに愛してくれているのか、精霊に愛されたから迷い子になったのか。

ひどい話だ、とディーンは思う。

だが、何が本当にひどいのだろう。

気まぐれに人の子を愛した精霊か、生んだ子を愛さなかった親か、精霊に愛されてなお人の愛を求めの子供達か。

人の愛を求めから迷子になるのだろうか、と彼は胸のうちで小さく呟いた。

精霊に愛されている事実だけで満足していないのは、自分達に他ならない。

けれどそれでも、きっと人は人と共にしか生きられないのだ。

だから、ディーンもここではない、自分が人として生きていける場所を探し続けている。

今、この闇に満たされた森で、一人でない事を心強く感じている。

「夕方には、森を抜けるね」

「ああ、もうすぐだな」

「帰ったらさ、ちゃんとご飯食べるよ。それで、大きくなるんだ」
「そうしてくれると、私も安心できる」

遠くから、夜が明けようとしていた。

木々の合間から明るくなり始めた空が見える。

二人は並んで座ってそれを眺めた。

闇に愛されていて夜明けを待つ自分を、いかにも人間らしいとディーンは思った。

不意にアーシャが小さな声で鼻歌を歌い始めた。

それはゆったりとした不思議なメロディーだった。

優しいような、どこか悲しいような。不思議に懐かしく、少し切ない。

ディーンはその歌に黙って耳を傾けた。

「夜が明けるよ」

「ああ」

「精霊がね、歌ってる」

そういつてアーシャはうつすらと明るくなり始めた空を見上げる。

「今のは精霊の？」

「そう、精霊の歌う夜明けの歌。朝を喜び、夜に別れを告げる歌。

夜明けには闇の精霊と光の精霊と一緒に歌うんだよ。だから、本当は二重唱なんだけどね」

「聞いてみたいな……」

もしそれが聞こえたなら、少しは世界を許せるような気がした。

彼には見えない、聞こえない世界を見ているアーシャを、ディーンは少し羨ましく思う。

「じゃあ、今度教えるからさ、二人で二重唱しようか？」

「二重唱……」

その様子を想像してディーンはくすりと笑う。

歌なんて基礎学校での授業で習って以来、もう何年もディーンは歌ったことがない。

こんなでこぼこした二人が二重唱をしている姿を想像するとなんとなくとても可笑しかった。

「ジェイにも覚えてもらってジェイとディーンで二重唱したら、ほんとに光と闇の精霊みたいになるかもね」

「……それだけは勘弁してくれ。それにジェイはあいにくひどい音痴だぞ」

「音痴？ 音痴って何？」

ディーンはそれから数分かけて、その単語を知らなかったアーシヤに様々な説明をさせられた。

どうやら精霊には音痴はいなかったらしい。

夢が壊れなくて喜ばしいようなそうでもないような、何ともいえない気持ちをディーンはしばし味わった。

一通り説明が終わった頃、ふあ、とアーシャが小さなあくびをした。

「少し眠るか」

「うん」

二人は立ち上がり、ゆつくりとテントの方へ歩き出した。

デイーンの目の前をひよこひよこことよぎる白い髪が、昇り始めた朝日を浴びてキラキラと金色に光る。

それを見てデイーンは、ふと昔学んだ古代語の言葉を思い出した。幾つかの単語が彼の頭の中で意味を伴って、パズルのようにカチリとはまる。

「……アルシエレイア」

アーシャが足を止めて振り返る。

「ア・ルシエ・レイア」

見開かれた目は強い驚きを映している。

「古代語で、愛しき光 か。…良い名だな」

「……やっぱり、デイーンはすごいなあ」

そう言って、彼女は鮮やかに笑った。

初めて見た、晴れやかな本当の笑顔。

それは、確かに愛しき光だ、とデイーンにも感じられた。

森は、夜明けの光で満たされようとしていた。

第一部 epilogue : 始まりの終わり

夢を見ていた。

懐かしい、幸せだった頃の夢だ。

夢を見ながらいつもこれが夢だとわかってしまう。

眠りの中で帰る故郷と呼べる場所は変わらず美しく、アーシャ、と自分を呼ぶ声は優しくかった。

懐かしい森を背に、彼はいつも笑っている。

聞きたい事も話したい事も沢山あったけれど、夢の中ではいつもそれは叶わなかった。

それでも、頭を撫でて名前を呼んでくれるだけで十分だ。

最近、過去を辿る夢は少しずつ回数と時間が減っている。

それが良い事なのか悪い事なのかはわからない。

けれど、減っている事自体を余り寂しいと感じていない自分には少し戸惑っていた。

「……エレイア」

誰かが自分を呼んでいる。

それが誰だかわかったから、これ以上眠る事を諦めた。

またくるね、と胸の内告げ意識を現からの呼び声に向けた。

ゆっくりと意識が浮上する。

「アルシエレイア」

パチ、と目を開くと、自分を覗き込み、呼んでいたのはもうすっかり見慣れた黒髪の少年だった。

「デーン、おはよ」

「……おはようではない気がするが、まあおはよう」

ふわ、と一つ欠伸をしてアーシャは木に吊るしてあったハンモックに身を起こした。

いつもの魔法学部棟の裏庭の奥、林の中に入りかけた目立たない場所にそれはあった。

このところ段々暑い日が増えているから日の当たらない昼寝場所を、と自分で作って木の陰にこっそり吊るしたハンモックは実に快適だ。

通気性も良いし、虫除けの魔法を施してあるから蚊に刺されたりといった事もない。

ここで寝るのは最近のアーシャの一番のお気に入りだ。

昼寝の回数や時間が減った分、量より質を追求しようと言う少女の熱意が存分に発揮されている。

仲間達がそこに寝ている自分の事を網に捕まった小動物のようだと思っっている事をアーシャは知っていたが快適だから別に良いと思っっていた。

「で、どうしたの？」

ハンモックを眺めていたディーンに質問すると、彼はああ、と目的を思い出した。

「タウロー教授からの呼び出しが来ている。教授会の結果が出たらしい。」

「あ、もうそんな時間？」

「ああ、二人はもう先に行っている」

アーシャは急いでハンモックを降りる。

今日はこの結果待ちのため講義を休みにしてあったのだ。

一週間前、学園に帰ってきた彼らを迎えたのは教授達からの呼び出しだった。

強制送還されたコーネリアチームが当然のごとく、自分達は妨害されて強制送還されたのだ、と言い張ったのだ。

競う必要のない課題でチーム同士の明らかな妨害が行われた場合、教授会は厳罰に処する事を定めている。

今回は一つのチームが全滅して強制送還されたこともあり、教授

会はあらかじめ送っておいた手紙だけではなく、直に真偽を問いた
だそうとシャル達のチームの帰還を待ちわびていた。

そしてこの一週間、何度も双方への聞き取り調査や、旅に用意し
た装備、実際の行程などのレポートを提出し、今日それらを審議し
た結果が出た、と言う訳だ。

二人はその結果を聞くために目の前の魔法学部棟目指して歩き出
した。

「まずは課題達成おめでとう、と言わせてもらおう」

呼び出されてやってきた四人を教授はにこやかに迎えてくれた。

ありがとうございます、と四人がそれぞれ答えるのを教授は満足
そうに見つめて笑った。

「あの課題を三年でクリアするチームが出たのは実に久しぶりだ。

しかも古代語も読み解くとは全く驚かされるばかりだよ」

教授の手元には自分達が提出したレポートがある。

教授はそれに目を落とすと今日の教授会の結果を伝えた。

「結論から言うと、教授会は君らの主張を全面的に認めた。君達の
提出した旅の詳細を記したレポートは実に素晴らしかった。準備の
段階から十分な装備を整え、無理のないルートを辿り、なおかつ現
地で食用の植物や魚の調達までしている。君らが物資で不足したと
いう事はありえないと教授会も判断した」

決め手となったのはディーンのつけていた旅の記録だった。

万事においてまめな彼は十年日記を毎日欠かさずつけている。

今回の旅にもなんと荷物の中に持参して寝る前に毎日書いていた
のだ。

それを元に作成されたレポートははつきり言って非の打ち所がな
かった。

旅の日程の細かい予定から始まって荷物を買った店、中身、値段、毎日歩いたおおよその距離、辿ったルートや使った食料の分量まで事細かに記録されていた。

アーシヤが採って来た山菜や木の実、魚の種類や大体の数まで書かれていたほどだ。

「対してデッセル君のチームは用意した食料などの荷物に不足や不向きな物が目立った。旅の行程も詳細は記録されてなかったし、不備が多かったようだ」

（デッセルって誰？）

（コーネリアよ。コーネリア・レイズ・デッセルってのがフルネームなの）

アーシヤの疑問に隣のシャルがこっそり答えてくれたが、アーシヤはコーネリアが誰なのか思い出すのに時間がかかった。

しばらく考えてやっと、ああ、あの変な金髪かと思いつく。

自分を負かした少女に、実は名前すら覚えて貰えていなかった事を知ったらコーネリアはさぞ激怒した事だろう。

「実際の妨害についても、君達のレポートは時系列に沿って実に理路整然としていたし、正確な内容だった。あの状況で冷静に対応し、相手を必要以上に傷つけることなく退けたのも教授達の評価は高かったよ」

「ありがとうございます」

ディーンがまとめたコーネリアチームの妨害に関する記述も仲間達からの聞き取りを加えた正確な内容で、アーシヤの特殊な能力の事など一部だけごまかしてあったが、どこから見ても矛盾の感じられない完璧なものだった。

それに対してコーネリアのチームはと言えば、襲撃されたと言いつ張るもその証言には矛盾や穴が多すぎた。

結局、彼らの主張は一切受け入れられることなく終わり、むしろ六対四という不利な条件での突然の襲撃を跳ね除け、かつ大きな怪我を負わせることなく冷静に対処したと言う事でこちらのチームの株が上がる結果になったらしい。

「アクシデントに見舞われても諦めることなく現地で食料を調達しながら課題を完遂した、と言う事で教授会は文句なしに君達を無罪放免、今期の実習ではS評価確定だ」

「本当ですか！」

「やったぜ！」

「ああ。それと、心配していたようだが君達が森の奥で手に入れた風の森の証……あの石の事を我らはそういう通称で呼んでいるのだが、それはそのまま君達の所有になる。優秀な魔石だ、今後に役立てるといいだろう」

「ありがとうございます」

どうやら教授達もあの石がどのような物であるのか、正確には知らないらしい。

もっとも、百年に及ぶ歴史の中で手に入れたものが数えるほどであるなら無理はないかもしれない。しかも前の所有者が手に入れたものがこれと同じだとは限らない。

だがそれについては四人は慎ましく沈黙を守った。

「コーネリア達は処分されるんですか？」

「ああ。まあ、本人達も事実が判明してからは全面的に認めて反省していると言っているから、たっぷりの反省文と奉仕活動、夏休みを全て使った補習授業と実習の追試くらいで済むだろう」

そうですね、としおらしく言ったシャルは内心で万歳三唱をしていた。

これで当分静かになるに違いない、と思うと思わず顔がほころびそうになる。

だが彼女は顔の筋肉を総動員して礼儀正しくそれを堪えた。

「まあ、そういう訳だから、君達は安心して夏期休暇まで勉学に励んで欲しい。次の野外実習は後期になるし、じきに前期試験も行われる。がんばってくれたまえ」

「はい！」

昼時の中央棟の食堂は人でごった返していた。

快適な昼食の為の席取り合戦やあちこちに出来た列に、生徒も教職員も幾分うんざりした顔を並べている。

早めに来る事が出来た四人は二階の奥に陣取りそれぞれ好みのラUNCHを口に運んでいた。

アーシャは丈夫な海の魚の骨と格闘しながら煮込み料理を堪能していた。

煮込み料理はたっぷりの魚貝から出たスープがとても美味しかった。

煮崩れたトマトが所々に姿を残していて、それをちぎった雑穀パンに乗せてスープを少しかけて食べると更に美味しい。

(いつもこんな食べれたらいいのになあ)

アーシャは今まで余り料理の出来栄えに興味がなかった。

火を通さなければ危険があるかどうかとか、茹でないとかアクが強くて食べにくいとか、そのくらいの基準しか持っていなかったが、味がわからない訳ではないのでこういう食事を取るとやはり美味しい物は良い、と思う。

毎日自分の食べたいものを食べたい時に食べられると言う点で料理と言う作業に最近興味が湧いている。

野外実習以来、アーシャは周囲の色々なものに興味を持ち始めて

いた。

「後は前期試験が勝負ね」

「試験かあ……」

選択している授業は実技試験が多いジエイだが、さすがにいくつかは必修の筆記試験が入っている。

それを考えて今からジエイは憂鬱そうだった。

だが実技だけSでも他が散々では意味がないのだから頑張るしかない。

「ジエイ、今から死ぬ気でやんなさいよ！」

「はい……」

もう既に半分死んでいるような返事にアーシャはくすくす笑った。デインはいつもの事と涼しい顔でコーヒーを飲んでいる。

「そういえば皆は夏期休暇どうするの？ 私はここで過ごすけど、たまには会って遊びたいし、後期の実習の相談もしたいのよ」

「俺もここで過ごすぜ。実家に帰ったら何が用意されてるか考えるのもこえーもん」

「私もいつも通りだな。特に予定はない」

「まあそんなもんよね。アーシャは？」

「んー、私いつも夏は森で過ごしてるから……学園の近くの森の管理小屋借りるんだ」

アーシャの答えに三人は目を丸くした。

学園を囲む森にはところどころに管理用の小屋や実習用のログハウスなどが用意されているのは知っている。

だがそれを個人で借りられるというのは初耳だった。

「借りられるのか、それは」

「うん、事前に申請出せば、ここの生徒とか先生なら借りられるんだよ。でも自炊だし、井戸とかないし、食料も持参だからあんまり

「人気ないみたいで格安なんだ」

「アーシャ良くそんなの知ってるわね」

「ん、休みは冬以外は森で過ごすから。野宿してるって言ったら先生が教えてくれたんだ」

「アーシャがこの小屋を使うのも2年目だ。」

「へえ、親切な先生がいたのね。誰？ 魔技科の先生？」

「ううん、学園長」

ぶは、とジエイは飲んでいた水を吐いた。

「が、学園長に聞いたのかよ！ どこで会ったんだ！？」

「やっぱり森だよ。一年の時に森の奥で野宿してたら散歩してた学園長と会ったの。その時に聞いたんだ。学園長も時々使ったってさ」

それは学園長も、森で平気で野宿をする少女を心配して見かねたのではなからうかと三人は思う。

「学園から歩いて二時間くらいだから、約束してたら帰ってくるよ」
アーシャはそう言ったが、三人にはそれは聞き逃せない話だった。

「いえ、ちょっと待って。その小屋って大きさはどのくらい？」

「うんと……私がいつも借りるのはあんまり広くないかな。部屋も二つだし。でも他にもうちよつと大きい所もあるよ。そっちは、居間や台所の他に一部屋と屋根裏部屋があったはずだと思う」

「……いいかも知れないな」

「うん、実家から迎えが来ても逃げられるよな」

「森の中なら騒いでも平気よね」

「きよとん、としているアーシャを他所に三人は顔を寄せて何事か話し合った。」

そして話がまとまるとぱつとアーシャの方に向き直る。

「アーシャ！ 頼む！」

「は、はい？」

「お願い、一緒に森で過ごさせて！」

「大きい所を全員で借りればさらに暮らしやすいし割安だろう」

「え、え？ 皆も森に来るの？」

急な提案にアーシャは驚いて三人の顔を見回した。

「嫌か？」

「え、嫌、じゃないけど……不便だよ？」

「大丈夫よ、森の暮らしなら実習で慣れたもの。二時間で帰ってこれるんだから、あれより全然いいわ」

「そうそう、頼むよ！ 力仕事とかなら俺が手伝うからさ」

三人の顔は本気だった。

どうやら本気で夏を森で過ごす気らしい。

不便さも平気だというならアーシャには特に反対する理由もない。むしろ、一人よりも楽しそうだ。

「皆が良いなら私も良いよ。じゃあ今年は大き目の小屋、借りとくね」

「やった、頼むぜアーシャ！」

「ありがとう！ じゃあ後は、問題は前期試験のみね！」

ガタン、と音を立ててシャルは立ち上がり、ジェイの襟首を捕まえた。

「さ、食事も終わったし行くわよ！ 今日授業は休みにしてあるんだから試験の傾向と対策を練るのよ！」

「なっ！？ い、今から？」

「あんたが高得点取るためには今からでも遅いくらいよ！ 黙って来る！」

「じゃ、二人ともまた後でね」

「あ、ちょ、待っ！ 助けてくれー！」

ぽかん、と見送る二人を置いてシャルはジェイを引きずりながらにぎやかに食堂を出て行った。

しばらくしてからなんだか急に可笑しくなってアーシャはまた笑った。

「にぎやかだったね」

「うるさくて困る」

ディーンはいつの間にか持ってきていた二杯目のコーヒーを飲んでいる。

アーシヤは忘れていて溶け出したデザートシャーベットを慌てて口に運んだ。

「ほんとに、森に来るの？」

「ああ。君が嫌じゃなければ」

「……嫌じゃないよ。むしろ……嬉しい、かな。面白そうだもん」

「それなら良かった。夏の間よろしく頼む。森の事を教えてくれると助かる」

「いいよ、とアーシヤは笑って答えた。

その後ふと思案する顔になる。

「ね、じゃあ代わりに教えて欲しい事があるんだけど、だめかな」

「私で教えられる事ならかまわないが、何だ？」

「うん、あのね」

午後、皆と別れたアーシヤは魔法学部棟の空き教室で窓の外を見ていた。

カランカラン、と大きな鐘が何回も鳴り、授業の終わりを知らせている。

教室や校舎から続々と生徒達が吐き出されて来る。

彼らは思い思いの放課後を過ごすために、広い学園に散って行く。アーシヤはそれらをじつと眺めていた。もうこの景色も、以前ほど退屈に感じない。

いろんな事が楽しかった。

こんな日々が出来るだけ続けば良い、と心から思う。

天気は快晴だけど今日は眠たくない。

夏の休暇や、後期の実習、これから待ち受ける色々な事に思いをめぐらせながら鼻歌を歌う。

それはあの日聞いた夜明けの歌だった。

まだ二重唱は実現していない。

(いつか、世界を見に行く。そして道を探しに行こう)

それが一人でなのか、そうでないのかまだ先のこととはわからないけれど、もうそれを待つ時間が苦しくも、退屈でもない。

だから

(だから、今はもう少しこの揺り籠に)

アウレスーラ総合学園

古き言葉で

幼子の揺り籠

を意

味する学び舎は今日も多くの子供達でにぎわっている。

迷い子達はこの揺り籠で一時羽を休め、明日を夢見て眠る。

いつか、それぞれの夜が明けるまで。

第一部 epilogue：始まりの終わり（後書き）

最後まで読んでくださってどうもありがとうございました！

何か話を書いて見ようと思いつてから一月半くらいでやっとここまでこぎつけました。

オリジナルを書いたのは初めてなのですが、こうして書いて見ると自分の欠点などもわかり、色々な発見がありました。

この四人の話はまだ続きます。これはその始まりの話です。構想が練りあがったらまた書き始めるつもりです。仕事の合間に更新できるといふ社会人失格な理由でここをお借りしているのですが、続編などが書き溜まったらそれ用のサイトなども始めるかもしれません。またどこかでお目にかかれれば幸いです。

読んでみての感想などもお待ちしております。

どうもありがとうございました！

1：旅に誘う風

アーシャの庭は魔法の庭だ。

それは魔法のように美しいといった単なる比喻ではなく、本当に所々に魔法が掛けてある、という意味だ。

夏の午後、この庭の主は色鮮やかな花や草木の間を歩き回っていた。

彼女は時々立ち止まっては、庭のあちこちを点検する。

花壇を仕切る柵代わりの石積みの一つを手にとって裏返し、そこに彫られた魔法陣を眺めた。

風雨に晒され少し表面が減ってきている。

アーシャは持ってきた専用の彫刻刀で減っている部分を少し深くして、石の中心に埋め込んだ魔石に軽く魔力を込めてまた元の場所にそつと積みなおした。

この花壇は水切れに弱い薬草や香草が多く生えている。

だがこの石が維持する水の魔法のお陰で、真夏でも花壇はつつすらと湿り、乾燥しすぎる事は決してない。

この花壇の他にも、水気がありすぎる事に弱い植物のための花壇や、虫に弱い植物の生える花壇、暑さに弱い植物の花壇、寒さに弱い植物の花壇といった具合に、実に様々な条件に合わせた魔法があちこちに施されてこの庭を維持している。

森へと続く林に面した庭は一人で手入れするにはかなり広い土地で、そこには決して美しい花ばかり生えている訳ではない。

様々な草が奔放に伸び、一見すると雑草が生え放題で手入れを怠っているようにすら見える。

だがそこに生える植物達はどれもつやつやとした葉を太陽に向け、

活き活きとしていた。

いくつかの石をチエックしたアーシャは目を閉じて耳を澄ませた。小さな声が庭のあちこちから聞こえる。

その声が促すままに彼女は忙しく庭を歩き回った。

暑いと嘆く木の伸びすぎた新芽を間引き、傍に気の合わない草が生えてきたという声に従って植え替えをし、今が採り頃だと誘う薬草達を収穫して陰干しにする。

明日から暫く留守にするからアーシャは忙しい。

それでもどうにか一通りの作業を終えてぐるりと庭を見回すと、ふう、とため息を吐いた。

「明日から暫くないから、よろしくね」

応えはあちこちから聞こえてきた。

庭の中の精霊達は快く留守を引き受け、彼女に笑いかけた。

「川の街、初めてなんだ」

アーシャはそう言いながら履いていたサンダルを脱ぎ、ぽいと投げ出すと裸足でのんびりと庭を歩いた。

不ぞろいな草と土の感触が足の裏にとても気持ちいい。

こつやつて裸足で土の上を歩くと元気が出るのだが、暫くは出来ないから今沢山触れておこつとアーシャは石積みにも腰を下ろして脚を伸ばした。

「人ごみも都会も嫌だけど、きつと楽しい気がするよ」

何故？と精霊達が疑問を投げってくる。

それには答えずに、ただアーシャは笑顔を浮かべた。

夕暮れが近い庭に吹く風は緑の匂いがする。

「川の風はどんな匂いだろうね」

目を瞑ってまだ見ぬ土地を想う。

魔法の庭に精霊の歌が緩やかに流れる。

旅立つ者を送る、動かぬ木々が歌う歌は静かに彼らの主を包み込んでいた。

「え？ アーシャは夏期休暇に、森に行かないの？」

試験も終わり成績も出て終業式を終え、明日から待ちに待った夏期休暇、という日。

この日の昼、一同は休暇の過ごし方を相談しようと久々に集まっていた。

「この所ずっと試験に追われていたから余り顔を合わせていなかったのだ。」

「ううん、行かないんじゃないかって、ちょっと森に行く前に行きたいところがあるの」

アーシャはふるふると首を横に振ると、冷たいお茶を一口飲んだ。

もうすっかり季節は夏だ。

アウレスーラ学園は山脈の麓にあるので比較的海抜も高く、夏場は涼しい地域にある。

それでも夏真っ盛りとなれば石畳が大半の学園内はどこへ行ってもやはり暑かった。

四人は暑さを避けて魔法学部棟の裏庭の森の木陰に集まり、芝生の上でそれぞれ持ち寄った昼食や飲み物を楽しんでいた。

「行きたいところ？ どこなの？」

「うんとね、レイアル公園。あそこでそろそろ始まる夏の市があるんだって。知ってる？」

「ああ、レイアルの夏市か。あれは有名だな。私も名は知っている」「へえ、俺もまだ行った事ないなあ。名前は聞くけどさ」

「私はあるわよ。昔祖母に連れられて何回か行ったわ。すごい規模の市でなんでも売ってるの」

三人の言葉にアーシャは頷いた。

中央大陸と通称で呼ばれるレアラード大陸には現在、大小合わせて5つほどの国がある。

かつてはもつと沢山の国があったらしいが世界の分裂とその後の戦乱の時代に多くが消え去り、結局残ったのはわずかそれだけの国だった。

そしてそれらの国々は全てこの大陸の半分の東と南側に位置し、山脈を隔てた向こう側、つまり北と西は広大な森や山といった未踏地域となっている。

開拓や探索が盛んな現在には残った国々はそれなりに円満な関係を維持し、協力して少しでも北と西の秘境を踏破しようと冒険者や開拓者を送り続けている。

しかし険しい山脈に隔てられて向こう側にいける場所が極めて限

られているのでその地図の進みはとても遅かった。

その険しい山脈に沿うようにして大陸のほぼ中央に存在するのが
アウレスーラがあるハルバラード王国で、その周囲を囲むように二
つの大きな国ともう二つの小さな国が存在している。

レアラード大陸で唯一海を持たないハルバラードは肥沃な土地に
恵まれた農業国家だ。

対してレイアルという国はハルバラードの南東に位置した海辺の
小国だった。

ただ、地理的には東の地の大陸と北東の水の大陸、南の火の大陸
に航路を持つ為、他大陸との交易で非常に栄えている。

6つの大陸はレアラード大陸をほぼ中央に、歪な5片の花びらを
配置したように点在している。

レアラードを中心に時計回りに、北西に闇の大陸シェイアス、北
東に水の大陸フィネラス、東に地の大陸ロアレス、南に火の大陸エ
ラード、西に風の大陸シーレイドと並ぶが、それら全てがお互いに
交流があるわけではない。

航路の都合などによってどうしても交流は隣り合わせた大陸同士
に偏りがちで、さらにレアラード大陸とその北西のシェイアス大陸
のように人の住む国が北側にはない、などの理由で隣り合わせても
直接の交流が全く存在しない大陸同士もある。

レイアルはレアラード大陸の中で3つの国と隣接し、国を流れる
広い川に運河を整備し、さらに3つの他大陸と航路を持っていると
いう立地から、小国とはいえこの大陸の商業の中心と言える国だっ
た。

勿論海に面したほかの3つの国も他大陸との貿易は行っているが
その規模はレイアルほどではない。

「レイアルの市で買いたいものがあるの？」

「うん、本とか、魔具の材料とか色々ね。何か掘り出し物とかありそうだしさ、夏期休暇の課題でオリジナルの魔具を作れって言うのでてるんだ」

「そっか、じゃあ森には帰ってきてから行くのか？」

アーシャは一つ頷くとポケットから小さな鍵と一枚の紙切れを取り出して差し出した。

「うん、でももうログハウスは借りてあるから。こっちが鍵でこれがそこまでの大体の地図。皆先に行って過ごしててね」

アーシャはそう言ってその二つを更に差し出したが誰もそれを受け取ろうとはしなかった。

「アルシェレイア」

「うん？」

「まさかとは思うが、レイアルまで一人で行くつもりなのか？」

ディーンの指摘にアーシャはきょとんとしながら頷いた。

「だって私の用だもの。それがどうかしたの？」

はあ、とため息が三人の口から零れた。それは無言の嘆きをたっぷりと感じさせる重いため息だった。

流石にこれには彼女も何か感じる所があったらしい。

三人にそれとなく責められている雰囲気気づいてアーシャはおろおろと仲間たちを見回した。

「……もしかして、だめ？」

「駄目に決まってるじゃないの！ もう、何で最初っから一人で行くつもりなの！ 危ないじゃない！」

「そうだけ、レイアルの夏市って言ったらその人の多さでも有名なんだ。そんなだけ人が出てりや治安の悪さだってこと比べ物にならないんだぜ？」

「レイアルの住民は夏の市が立っている間は子供達を決して一人では外に出さないし、大通り以外には行かせないと聞く。そんな街で君のような子供が一人で出歩くなるとんでもない」

三人からの攻撃にアーシャは身を縮めた。

「そ、そんな子供じゃない、もん。ちょっとは背だつて伸びたし……」

「そういうセリフは私を見上げてても首が凝らなくなってから言ってくれ」

ガーン、という擬音で表現するしかないような表情を浮かべ、アーシャはがっくりとうなだれた。まさに完敗だ。

ディーン顔を上げると首が痛くなって密かに困っていることを何故か知られている。

アーシャは人のことはよく見ているが自分が人に見られているという事には三人が呆れるほど無頓着だからだ。

最近では彼女と話をする時はディーンの方が気づかれないように少し屈んでいる事をアーシャはまだ知らなかった。

「とにかく、一人でなんて絶対駄目よ！ アーシャなんて小さくて軽いんだから、あつという間に袋に詰められて手荷物で運ばれて市場の棚に並べて売られちゃうわよ！」

「や、いくらなんでもそこまで小さくないだろ……」

シャルの厳しい追い討ちとジェイのささやかなフォローを浴びてアーシヤは更にうなだれた。

「そもそも泊るところはどうするんだ？ この季節はあの街の宿屋はどこもいっぱいだろう」

「……それは大丈夫なの。タウロー教授とこの話をした時に教授が知り合いに頼んでくれて、民宿やっているとここに泊めてもらえるから」

学園の施設の使用申請書は学生課に持っていくか、所属する学部の教授に持って行く事になっている。

アーシヤは魔法学部で多少の付き合いのあるタウロー教授の所に夏期休暇に使う予定のログハウスの使用申請書を持ち込み、その時教授からレイアルとその市場の話聞いたのだ。

行ってみる、と言ったアーシヤを教授は特に止めはしなかった。

「教授は許可したの？」

「うん。でも仲間と何か約束してるならちゃんと皆に話してから行きなさいって言った」

さすがタウロー教授。

三人はなるほど、と深く頷いた。

アーシヤが仲間に話せば、彼らが決して彼女一人では行かせない事も読んでいたに違いない。

ひよつとするとアーシヤが泊めてもらえるという民宿も泊る人数は四人だという連絡が入っている可能性すらある。

「じゃあ我々も準備をしなければならぬな」

「そうね、教授の方は私が確認しておくわ」

「おー、俺レイアルの市って初めてだな！ 美味しいもんとかあるかな？」

「え、え……？ あの、皆行く、の？」

アーシャは今にも立ち上がって準備をしに行きそうな三人を再びおろおろと見回す。

「あら、アーシャ、嫌？」

「え、や。んと、嫌じゃないけど……でも、船で行くし、何日かあつちにいるつもりだから、多分お金かかるよ？」

「んな心配すんなって。俺たちって皆夏期休暇にも帰れねえくらい実家と縁薄いだろ？ こうみえてもちゃんと言々蓄えてる訳よ」

「今期の試験対策のノートとヤマも随分売れたしな」

「デーン……あんたまだその商売やってんのね」

「まだどこか上級に入って科目が増えてからは商売繁盛で困るくらいだ」

ちなみに親友と言う立場に免じてデーンからタダでノートを提供してもらっているジェイはその代わりに顧客を探してくる事で彼に貢献している。意外にも持ちつ持たれつの関係だ。

デーンはその他にも普段から、仲のいい教授や先輩の研究を手伝ったりする簡単なアルバイトをいくつもこなしているから親からの仕送りは手付かずで貯まっていけばかりだった。

一見貯金とは縁の無さそうなジェイも、デーンやシャルの強い忠告（という名の脅しだが）もあって昔からそれなりに貯えをしている。

貯金というものは習慣になってしまえばさほど難しいことでもない。

大人に頼る事が難しい彼らは将来の自立を目指して必然的に助けあって生きてきた。

だからこそ、一度仲間になってしまえば懐はとことん深い。

アーシャがどうしても嫌だと言わないなら、彼らはなんとしても

治安の悪い街に彼女一人で行かせはしないつもりだった。

「そういえばアーシャはお金大丈夫なの？ 旅行して買い物っていうんだから大丈夫とは思うけど」

「ん、私は元々じいちゃんから貰った物で生活してるから。じいちゃんて若い頃ピカピカキラキラした物が好きでいっぱい集めてて、私に全部くれたの。いっぱいあるからそういうのたまに売ってこの学費とか払ってるの。でもまだほとんど使ってないから全然平気だよ」

ピカピカキラキラ、と言う事は恐らくは高価な貴金属の類のことだろう。

まるでカラスのような育ての親の趣味に救われている、と言う事らしい。

森で暮らしていたと言うアーシャの育ての親がそんな趣味を持っていたというのは随分と意外だった。

だがそもそもある程度の持ち合わせがなければ子供のアーシャが一人旅をしてこの学園まで来るのも無理だったに違いない。

「でも普段はそれは使わないで、自分で採って来たり庭で育てたりした薬草売ったりしてるんだ」

どうやらそれなりに自活もしているらしいアーシャの生活の謎の一端に触れた三人はなるほどと納得した。

だがそうなるのとまた別の心配事が浮かんでくる。

以前見たアーシャの家の殺風景さは金銭面の問題ではなく、生活の質の向上に興味がないからという理由から来るものだったということだ。

生活に必要な最低限のものはあるかもしれないが、あれでは情緒とかそういうものが育たないのではないかと心配してしまう。

最近の三人はすっかりアーシャの保護者のような気分だ。

「そうなの……ねえ、アーシャ、一緒に行くのが嫌だったらそう言うってもいいのよ？ でも嫌じゃないなら一緒に行かせて欲しいの」「そうそう、どうせ森で一緒に過ごす予定だったんだし、それがちよつと場所が変わったっただけだからな。でも嫌なら遠慮しないで言ってくれよ？俺らもそうしてるしさ」

「付いてこられるのが迷惑なら別行動しても構わないが」

問いかける三人の顔は真面目なものだった。

彼らがアーシャを心配して、仲間としてついて行きたいと言ってくれていることが顔を見れば良くわかる。

彼らがそれをちつとも嫌だと思っていない事も。

「ううん……全然嫌じゃないよ。楽しいと思うし。皆がいいなら私はいいいよ」

アーシャはもじもじとそう言うのと不意にぱつと立ち上がった。

「あ、あの、私明後日の朝一の馬車に乗って出かけるから！ 準備があるから……先帰るね！ また明後日ね！」

「あつ、ちよつと！アーシャ！？」

三人が止めるのも待たずアーシャはパタパタと走り去っていった。それでも出発の予定を告げていったと言う事は一緒に行く事に同意はしたらしい。

小さな背中を見送った後三人はふう、とため息を吐いて顔を見合わせた。足の速い少女はあつという間に見えなくなってしまった。

「なあ、俺らまだアーシャに信用されてねえのかなあ？」

「そんな事もないと思うけど……慣れてないだけじゃないかしらね？」

「多分そうだろう」

そうは言いつつも、アーシャに無理矢理ついていくと言ったが本当は迷惑がられていたら、という不安が三人の胸をじんわりと冷やす。

「付き合いも短いし仕方ないけど……私、アーシャともつと仲良くなりたいたいんだけどな」

「なんか危なっかしいしほっとけないよな。妹が出来たみたいない気分です」

「まだ過ごした時間は短い。仕方ない」

シャルもジェイもディーンも、お互いの他にそれなりに友人と言える人間は沢山いる。

けれど心の底から信頼している、と言える人物は数少なかった。

良くも悪くも同年代の子供達は、いわゆる普通の幸せな子供達が多いのだ。

頼る事に慣れ、一人で立つ事の出来ない子供達は当たり前障りのない友人にはなれてもその背中を預ける気にはなかなかない。

同じように環境に恵まれなかった人間もいるが、彼らは逆に金銭的には不自由していない三人を敬遠する事が多かった。

大人でもなく、そして子供でも居られない。けれど他人からそれでも恵まれていると見られている彼らは同じ場所に立てる人間を求め、大切にする。

普段接点の少ないシャルとディーンさえ、一応お互いを認め合っ
てはいるのだ。

アーシャは三人にとってお互い以外で初めて出会った同じ匂いの

する少女だった。

だからこそ気が急くのだろう。

「時間はある。こういうものはゆっくり進むしかない」

「そうよね……」

「んだよ、らしくねーなあ。初めて対等の女友達が出来そうで嬉しくて焦ってんのか？」

「んなつ!？」

バコン、と気持ちの良い打撃音が辺りに響き、傍にあったカバンで殴られたジェイは地面に突っ伏した。

殴った犯人の頬は凶星を突かれた為かほんのりと赤く染まっている。

素直じゃない人間に直球を投げすぎるところなる、という良い見本を見ながらデインは胸の中で密かに合掌した。

ギィ、と木の扉が軋んだ音を立てて閉まった。

アーシャはパタパタと居間まで走りこむと置いてあった椅子にトサ、と座り込んだ。

ずっと走ってきたので流石に息が荒い。

きつと顔も赤いに違いない。

アーシャは居間のテーブルにおいてあった水差しを掴み、渴いた喉に直接水を流し込んだ。

朝汲んだ水差しの水はすっかりぬるくなってしまっているがそれでも喉を潤す役には立ってくれた。

ひとしきり水を飲むと、アーシャは水差しを置いて深い息を吐い

た。

「びっくりした……」

アーシャは未だ治まらない鼓動の速さを持って余して椅子の上で膝を抱える。

さっきは何故だか急にあの場に居られないような気がして走って逃げてしまった。きつと皆変に思った事だろうと少し後悔する。

まさか皆がレイアルまで付いてくると言うとは思わなかったのだ。勿論アーシャにとってそれが嫌な訳ではない。

むしろ嬉しかったのだが、なんだか急にいてもたってもいられないようなおかしな気持ちになったのだ。

「皆と……旅行？ 買い物？」

小さく呟くとまた胸の鼓動がうるさく聞こえてくる気がした。

「私の都合の用事なのにな……」

心配だと言ってくれた。一緒に行くと。

以前はアーシャが彼らに付き合う立場だった。

アーシャ本人は実習内容は何でも良くて、三人の実習の為の人数あわせだと言う事も勿論理解していた。

それでも別に構わなかったから、特に意識したことはなかったのだ。

アーシャはもうずっと一人だった。

だから一人で生きる方法はちゃんと知っている。

危険に対して、避ける、隠れる、逃げるはアーシャの得意とするところだ。それで生きてきたと言ってもいい。

嘘をついてアーシャを騙そうとする人間がいてもすぐにわかる。傍にいる精霊がそれを見分けて警告を発してくれるからだ。流石に初めてした旅では多少の危険にもあったが大事には至っていない。

今ではどんな場面でもちゃんと切り抜ける自信はあった。

それを三人に言う暇はなかったけれど、言っても彼らは付いてくると言ったかもしれないという気がした。

「なんで……？ なんだろ、これ」

あの実習で知り合ってから、彼らはとても自分に良くしてくれる。それが何故なのかアーシャは良くわからない。

友達と言うものがそういうものなのかとも考えたけれど、生まれて初めてそんな存在を持ったアーシャにはその考えが正しいのかどうかもさっぱりわからなかった。

自分が何故逃げ出してしまったのかもいくら考えてもわからないのだ。

「変なの……」

アーシャは抱えた膝に顔を埋めた。

旅行に合わせて今日の午後は庭の手入れをしようと思っていたのになんだかそんな気分にもなれない。

明後日が待ち遠しいような不安なような、そんなおかしな気分だった。

1：旅に誘う風（後書き）

第二部の始まりです。

まだどのくらいの更新ペースにするか決めてはいませんがとりあえず始まりだけ。

あまり間を空けずに更新したいと考えています。

最後までお付き合い頂ければ幸いです。

2：休暇の幕開け

約束の朝、四人は朝一番の乗合馬車に乗れるよう街の中央広場に集合した。

学園都市の中央には広い公園と馬車の発着場がある。

夏期休暇が始まって二日目のこの日、朝早いにも関わらず発着場は帰省する子供達で賑わっていた。

どうにかお互いを見つけることが出来た四人はおはよう、と幾分ぎこちない挨拶を交わすとハルバード方面へ行く馬車の列に急いで並んだ。

レイアルまではハルバードの王都の更にある川沿いの小都市から船に乗らなければならない。

そこまではおよそ馬車で半日と少しというところだ。

そこからレイアルまでは川を下って一日半程、帰りは風がよければ二日くらいの行程だ。

アーシャは列に並びながら、ふと大事な事に気がついて三人に問いかけた。

「あの、三人とも船の乗船券とか宿とか、どうなったの？」

一昨日は勢いで一緒に行く事を承諾したものの、本来なら帰省とも被るこの時期はある程度の準備がなければ船にも乗れないはずなのだ。

アーシャは随分前に、街の中に臨時で作られた帰省する子供達のための代理店で船の乗船券を買ってあった。

三人はその問いに顔を見合わせて笑うと心配するアーシャに一枚

の紙を見せた。

「船の乗船券の予約票……？」

「そう。一昨日あの後タウロー教授のところに行ったらこれを渡されたのよ。三人分とつてあるから船着場でこれを見せれば切符が買えるって」

「民宿も四名で予約済みだつてよ」

「え、ええ？」

「教授は最初から我々が付いて行くと言い出す事が分かっていたのだらう」

タウロー教授は穏やかな顔をしているが実は食えない男というのが裏での評判だと言う事をデイーンは知っていた。

生徒達には余り知られていないが、その洞察力や行動力は同僚の教授陣や研究生達からは密かに恐れられているらしい。

そんなタウロー教授が生徒の性格や動向を把握している事は不思議でもなんでもない。

多くの生徒を抱える中で一生徒とその仲間の事情が分かっていることには感心するが、先日の実習の件で目に留まったのかもしれない。

だがそれにしては手回しが良すぎるような気も多少はする。

けれど、タウロー教授を結構気に入っているらしいアーシャにわざわざそんな疑問を投げる事もなかつとデイーンは沈黙を守った。誰かを気に入る事自体がアーシャにとっては珍しいらしいのだから、そんな数少ない憧れに水を差す事もない。

「な、なんで？」

「さあ？」

自分を置いて進んでいるらしい物事にアーシャが首を傾げている

間に乗りに場には馬車が次々と入ってきた。

四人は同じ方向へ行く馬車が何台も連なってくる中の一台にどうにか全員乗り込み、固い座席に座り込んだ。

やっと訪れた夏期休暇が楽しくて仕方がない、という雰囲気の子供達に囲まれているとなんとなくその空気が伝わってきて彼らも落ち着かない。

やがて沢山の子供達を乗せた馬車は列を成してゆっくりと動き始めた。

その日の午後、アーシャは川に張り出した広い棧橋の片隅にジェイと二人で座っていた。

ここは川を行き来する船が出るリドという名の街だ。

船が出る夕方まではまだしばらく時間があり、ディーンは予約票を乗船券に引き換える為、一人で発券所へ出かけていた。

西に傾き始めた太陽が川面をキラキラと照らして少し眩しい。

暑いけれど風があるので耐え切れないほどではなかった。

二人は日に焼けるかな、などと言いながらさつきから川面を眺めていた。

レアス川の川幅は驚くほど広く、遠くにやっと対岸が見えるくらいだ。

セドラ山脈から流れ出た豊かな水の上を大小様々な船が盛んに行き来してずっと見ていても飽きることはない。

川というよりは小さな湖のようにすら見えた。

これだけの川幅だからこそ大きな船も行き来できるのだろう。川の対岸にも街があり、そちらの方には小型の船が沢山停泊しているのが見える。

あっちも同じリドの街だが、こちら側と違って漁業が盛んなのだと棧橋にいた船の乗員から教えてもらった。

三人は途中で通り過ぎた王都ハルバードでシャルと一旦別れて先にここへ来ていた。

シャルはちよつと実家に寄って成績表を叩きつけてくると言っておかけていったのだ。

三人は少し心配したのだが、

「大丈夫よ。いざとなつたら今度はあの悪趣味な屋敷を全焼させてくるから心配しないでいいわよ！」

と朗らかに笑ってジェイに別の心配をさせながら行ってしまった。今も何となく無口なジェイはきつとシャルの暴挙他を心配したままなのだろう。

アーシャは静かな川面を見ながら小さく欠伸をした。

「船、来ないなあ」

せつかく早くついたのでから川を遡ってくる船の姿を見たかったのだが、目当てのそれはまだやってこない。

明るい内にじっくり見たかったのだがこのまま行くとすぐに夕方になってしまいそうだった。

「魔風船、て言ったっけ？川遡るんだよな」

「うん、そう。でも私もまだ見た事ないんだ。本では読んだけど」

魔法技術を使った大型建造物を作るのはかなりの技術と人手と高価な材料が必要だ。

だからこそそれらは注目度が高く、教科書などにも載っている。数年前に開発された魔風船と言う名のその船も魔法技術に関する本に度々登場していた。

だが紹介されていた本には勿論その技術の全てが載っている訳ではなく、だからこそアーシャは実物に興味があった。

「名前からすると、魔法で風を起こすようなもんなのか？」

「うーん、無風の時には風を自力で起こすこともできるって書いてあったと思うけど、どっちかって言うと船の周りの風を常に操るような原理みたいだったよ」

「操る？」

「うん、川を下る時は普通に流れに乗るんだけど、遡る時は帆を張って、方向の違う風が船の周りに吹くのを捕まえて、常に帆に向かって吹くように方向を変えるの。そうするとあんまり余分な力を使わなくていいから効率が良いんだって。

確か船体にも水の抵抗を少なくする魔法技術が使われてるし、光球が開発されてから夜も運行できるようになたって本には書いてあった気がする」

「へえ！何か良くわかんねえけどすごそうだな！」

ジェイの正直な答えにアーシャはくすくすと笑った。

「あつ、ジェイ！消えるよ、ほら！」

「あつ、やべ！」

ジェイはさつきから右手の人差し指を一本立ててその先に小さな光を灯していた。

彼が喋るたびにちかちかと明滅したその光はいまや消えていきそ

うに小さくなっている。

「ん！」

ジェイがもう一度気合を入れて指先を見つめると、その視線の先でまた光が明るくなり始めた。

「おー、セーフ」

「うん、大分上手くなったね」

これはアーシャがジェイに教えている魔法の訓練の一環だった。彼女はジェイに、ごく弱くて良いから精霊を聖水なしで呼び出し、指先に光を灯し続けるように、という訓練を試験の前からずっと課している。

そしてそれをしている最中のジェイにこうして時々話しかけ、彼の気をわざと散らすのだ。

最初はすぐに光を消してしまっていたジェイも、今では消さないまま大分ちゃんとした話ができるようになってきていた。

精霊は呼び出しても人の目には見えない。

呼び出した瞬間は一瞬の現象が起こるが、それくらいだ。

だがこうして小さな光を灯すようにと心の中で考え続ければ、それが灯っている間は精霊が傍に居る事が分かる。

アーシャに言わせると精霊は呼び出すというよりも、近くを通った彼らに声をかけて呼び止めるというのが正しいらしい。

遠くにいる精霊や力のある精霊は、呼び止めようとしてもなかなか来てはくれない。

そこら辺が本人の力量に左右されるところらしい。

要するに呼びかける声が大きいかどうかと考えると分かりやすく、その声の大きさが生まれ持った素質のだとアーシャは説明した。

加えて精霊達は一つの場所に留まっているものは多くないから、呼び止めた本人が他の事に気を取られればもう用は済んだと見て、すぐにその場を去ってしまう。

だから精霊を扱う時は、常に意識の一部を彼らに向けていなければ長く拘束しておけないのだ。

ジェイが行っているのはいわばそのための基本の訓練だった。

ごく弱い精霊を呼び出し、指先に小さな光を灯して集中力が切れるまで続ける。

たったそれだけの事に見えるが、常に精霊の存在を意識する事で少しずつ彼らに馴染み、いずれは呼吸をするように精霊を傍に置く事ができるようになるだろうとアーシャは説明していた。

どのみち光の精霊にとっても好かれる性質のジェイの傍にはいつも大なり小なりの光の精霊が行き来している。

今までは本人の意識が減多に彼らの方を向かないので仲良くしたくてもできなかっただけだ。

ジェイの方から働きかけるようになれば彼らは先を争ってジェイに力を貸すだろうとアーシャは見ていた。

「そういえば、ジェイは宣誓とかする気はないの？」

「……それって、教会でやる奴だっけ？」

光から目を離さないジェイにアーシャはうん、と頷いた。

「光の精霊や魔法しか使う気がないなら、宣誓するともっと簡単に強い魔法が使えるようになるっていうよ？ ジェイは精霊に好かれるから、多分かなり強い神聖魔法まで使えると思うけどな」

「俺は別に、神官とか魔道士になりたい訳じゃねえからなあ。大体、宣誓とか神聖魔法とか、そういうの良くわかってねえし。何が違う

んだ？」

アーシャはそれらの定義を思い浮かべて、ジェイに分かりやすい言葉を選んで説明した。

「んと、要するに宣誓ってのは、私はこの属性の精霊と神に一生を捧げます。他の属性の魔法は決して使いませんって宣言して誓うの。そんで、その代わりにこの属性の更なる加護を下さいつて願うわけ」「そうするとどうなるんだ？他の魔法は使えなくなるのか？」

「うん。魔具を使った場合を除いて、他の属性の魔法は唱えても一切発動しなくなる。その代わりに、誓った属性の魔法の威力はすごく上がるんだよ」

正確なところを測定するのは難しいが、例えば五級の魔法しか使えなかった人間が一気に二、三級クラスの魔法が使えるようになるくらいだと言われている。

最初から上位の魔法が使えるものはそういう変化は少ないが、その属性の高位の精霊が呼び出しやすくなったり、詠唱魔法の呪文が簡略化できたり、魔力の消費が減ったりと言った様々な現象が起るらしい。

そして、神聖魔法も使えるようになる。

「神聖魔法って言うのは神の名が入った聖句を呪文として使う魔法なんだ。宣誓すると大きな教会で習う事ができるんだって。

呪文がすごく長いし、宣誓しても使えない人もいっぱいいるみたいだけど、もし使えればものすごく強いらしいよ。

聖なるものだから簡単に使うのは戒められているけど、一つ使えるだけでも出世間違いなしのステータスなんだってさ」

「へえー、なんかすごそうだけど……ちょっとおっかないな」

「確かにね。でも光属性のなら、確か癒しの魔法が多いって聞いた

「よ」

「うーん、けどなあ……俺、ほんとに教会あんま好きじゃないんだよな。まあ、そのうち気が向いたら考えてみるよ。最初から楽しんでもなんだしさ」

「ん、わかった。じゃあやっぱり自分その訓練ね。ほら、光消えそっだよ」

「おっとと」

慌てて光を強めるジエイを見てアーシャはくすくすと笑いながら、彼の集中力を試すような次の話題を頭の中で探した。

「そういえば、ジエイは成績表どうしたの？ 実家にも届けた？」

「ん？ ああ、俺のは郵送したぜ。自分で届けになんか行ったら、親兄弟総出で待ち構えられるに決まってるしな。全部SとかAとは行かないけど、俺にしちゃ上出来の結果だったよ」

シャルとデイーンのスバルタに耐えたかいたがあった、とジエイはしみじみと思う。

試験前のあの日々を思い起こすと涙すら浮かびそうになる。

それだけ辛い時間だったのだ。

短い人生だがあれだけ勉強したのは今までで初めてだった。

「そういえば、そういうアーシャはどんくらいの成績なんだ？ 野

外実習はSだろうけど、他は？」

「んーと、Bだよ」

「どの学科が？」

「全部。いつもは全部Bが揃っててちょっと可愛いんだけど、今回はSが一個着いちゃった」

「……」

アーシャの成績について具体的なところは聞いた事がなかったが、揃っていない事がちよっぴり残念そうですらあるその答えにジェイは思わず沈黙した。

「……わざと？」

うん、とアーシャは一つ頷く。

「かなり難しいんだよ、全部とるのって。普段の授業態度とかも含まれるし、先生の好みとか癖とかもあるからさ、そついつの皆ひってくるめて程々って、逆に綱渡りみたいで楽しいの」

そんなところに楽しみを見出すか？とジェイは激しく疑問に思う。

「どうせなら全部Aとか取る方で綱渡りしないのか？」

そのもつともすぎる質問にアーシャは首を横に振って答えた。

「それじゃだめ。一年の時普通にしたら、次の学年に上がる時の科目変更で何人かの担当教授に渋られて大変だったから。」

私、自分が受ける授業くらい好きに選びたいもん。平凡な成績なら誰も引き止めないからいいの」

「ああ、なるほどなあ。確かにそついつの話は結構聞くよな」

昔から教授達は自分の担当する学科や教科に優秀な生徒がいると次の学年でもそれを選ぶことを強く勧める傾向にある。

授業のレベルが上がれば優秀な生徒や良い研究の結果が出ると、その学科、教科に出される予算が増えるからだ。

だがアーシャのような好きな事をやりたいタイプの学生にはそれは迷惑なことなのだろう。

アーシャは軽く肩を上げてため息を吐いた。

「美味しいケーキでも、同じのを無理矢理二つ続けてはいらないよ。それがうんと好きだったりしたら別だけどね」

おかしな例えにジエイはけらけら笑った。

そのどこまでも自由な精神が彼には少し眩しかった。

しばらくするとティーンがようやく戻ってきた。

随分と時間がかかったが、どうやら何か買い物もしてきたらしく色々と入っているらしい重そうな布袋を片手に提げていた。

「おかえり、遅かったね」

「ああ、発券所で聞いたら船の中では食事が出ないらしい。食料を持っていない客向けの販売はあるが、高いと聞いたので買って来た」

「おお、さすが。助かるな」

「ついでに船室も、アルシエレイアは大部屋だったが四人一緒の個室に変更してきた」

教授が予約していたのは四人部屋を一つ借りるという乗船券だったから、アーシャをそちらに変更するのは大した手間でもなかった。本当にどこまでも教授の手回しがいい事に頭が下がる。

「別に大部屋でも良かったのに」

アーシャはなんだか過保護な気がする手配に軽く頬を膨らませた。川に行く船は中型船だから船内は広くないので大部屋が基本で、大抵は床に毛布を敷いての雑魚寝になる。

寝心地は良くないらしいが男性と女性に分かれているので荷物さ

え気をつけていれば特に危険な事もないはずなのだ。

「四人部屋はハンモック式の簡易寝台があるそうだ」
「じゃあそつちにする！」

ハンモックが大好きなアーシャは即答した。
「どうやらタウロー教授は本当に彼らのことが良くわかっているらしい。」

この分ではアーシャが裏庭に作っている寝床の事も当然良く知っているのだろう。

ディーンは苦笑しつつも教授の得体の知れなさを実感していた。

カーンカーン、と甲高い鐘の音が辺りに響いた。
その音にハツと川の方を見ると、下流からゆっくりと一隻の船が川を遡りやってくるのが目に入った。

赤く染まり始めた太陽の光を映した帆が美しい。
アーシャは大きく目を見張ってそれを見つめた。

「……綺麗」

川からの風は船の横から吹いているのに、帆は風を孕んで大きく膨らんでいる。

広い川を行く為なのだろう、横幅が広く喫水が浅めのどっしりとした船だった。

中型船と聞いていたが想像していたよりも随分と大きい。

アーシャは船体のあちこちに目を走らせた。

船の舳先や船体、帆の布までも様々な魔法技術が使われているのが見て取れる。

こんな大きな物をどうやったら作れるのかアーシャには想像がつかなかった。

自然と口からため息が零れる。

「すごいなあ」

人の手がこれを作り出したなんてアーシャには簡単には信じられそうもない。

船がゆっくりと入港しその動きを止めるまで、少女はひたすらその姿を見つめていた。

シャルが合流したのは彼らが乗る船が入港してまもなくの事だった。

戻ってきた彼女は足取りも軽く極めて上機嫌で、ジェイはまさか本当に家を燃やしてきたんじゃないだろうかとひやひやしながらシャルを呼び止めた。

「あら、待っていてくれたのね！ 先に乗っても良かったのに、ありがとう」

シャルの口調は今にも鼻歌でも歌いだしそうな明るいものだった。シャルに慣れているジェイは逆にその口調が恐ろしい。

「ね、シャルどうだったの？ 認めてもらえた？」

恐れを知らない少女はさらりとシャルに疑問を投げかけた。シャルはその問いにっこりと笑顔を見せた。

「もう、サイコーだったわよ！ あの父親の顔、アーシャにも見せてあげたかったわ！」

実家に成績表持って乗り込んだんだけどね、誰も私の素晴らしい成績表見てくれないのよ？」

「なんで？ 聞く耳持たなかったの？」

シャルは上機嫌に笑いながら首を振った。

「昔、離れを全焼させた頃と同じ色に戻った私の姿を見て、全員怯えちゃって、もう可笑しいつたらないわ！」

ケラケラと笑いながら自分の髪をするりと撫でる。

しなやかに背中まで伸びた髪は瞳と揃いの鮮やかな赤だ。

美しく手入れされた赤い髪は最近のシャルの自慢だった。

だが茶色になった髪を見てほっとしていたという父親はさぞびっくりした事だろう。

「自分の才能を磨いて、炎を極める為にがんばりましたの、だんだん使える炎も高温になってきましたわって言ってちよつと青っぽい火を見せてやったら、『そ、それは感心な事だ、その調子で学業に励みなさい』ですってよ！」

もう声が震えてて、私の方が笑いを堪えるのに必死だったわよ！」

「それですぐ帰れたのかあ」

「よ、良かったな、シャル……」

「……賢明だったな」

誰が、とは言わずにディーンは静かに感想を締めくくった。

ゴォン、と重い鐘の音が不意に辺りに響いた。

出航の時刻が近い事を知らせる音だ。

気がつけば周囲に居た人々はほとんど船の中に入っている。

四人は顔を見合わせると慌てて船に乗るべく荷物を持って立ち上がった。

夕闇に浮かんだ船は黒々としたシルエツトでそれだけでは美しいとは言い難いが、見上げる彼らの心は妙に浮き立ちざわめいている。

「……なんか、船っていいわね。すごく旅って言う感じがするわ」
「うん、いいね……」

ゴォン、ともう一度鳴った鐘に追われるように、四人は船に向かって走り始めた。

船に近づくごとにその胸が少しずつ高鳴る。

どんなに短い旅でも、旅立ちはいつでも少しの不安と大きな期待で彩られているように思えた。

四人の夏の休暇はこうしてゆっくりと幕を開けたのだった。

3：運河の街の出会い

「いないわっ！！！」

沢山の人で埋め尽くされた街の一角で甲高い少女の叫び声が響いた。

道行く人の何人かが何事かと振り返るが、通りの端できよきよると辺りを見回す三人の少年少女の姿を見ると誰もが何事もなかったかのように歩き去っていった。

それはこの時期のこの街では珍しくも何ともない光景だからだ。なんといてもこの人の多さだ。

人ごみに紛れて連れと逸れて途方に暮れる人間の姿は日に何人も見かける事もある。

この運河の街、レイアルは様々な意味で今一番暑い時期を迎えていた。

レイアルの首都の人口は夏のこの時期だけ通常の5倍にも10倍にもなるといわれている。

レイアルは海と運河の国だ。

海側には波の穏やかな広い湾を持ち、その湾に流れ込む大きなレイアルが国の中心を流れている。

国土はさほど豊かではなく特産品と呼べるものは少ないのだが、その代わり立地に恵まれたこの国は昔から交通の要所で国を挙げて商売に取り組む交易の国だった。

首都自体は海から離れているが整備された運河を持ち、海を持たない国ハルバードともその川で繋がっているので両国の交易も盛んだ。

魔法技術によって川をさかのぼる事が出来る船が開発されてからは二国の距離はより縮まっている。

そんな交易の国の夏の名物が街を挙げての大市だ。

ある種の祭りともいえる大規模な市はおよそ半月も行われ、街の大通りを埋め尽くしても尚足りず、あちこちの通りであらゆる物が売られている。

この時期のレイアルには国の内外どころか大陸の外からも様々な品がやってくる。

食べ物や織物、宝飾品や生活雑貨、貴重な薬草や鉱石、遠い国の本や魔具など、およそ手に入らないものはないと言われるほどだ。

そしてその集められた品々に比例してこの時期は街を訪れる人の数も増える一方だ。

珍しい品を求めて商売人も一般人もこの暑い時期に旅をする事を厭わずにこの国にやってくる。

街に点在する宿屋だけでは宿の数が到底足りないほどで、この時期だけ宿屋を営む民家や、都市の城壁の外に色とりどりに並んだ宿泊テントの群れすらも名物になるほどの人間が訪れるのだ。

それらの人々はそれぞれ思い思いに目当ての品を探し、観光がてら店を冷やかし、名物の運河での舟遊びをしたりしてこの市を楽しむ。

だから訪れる人の多さと迷子の率は綺麗に比例するという現象が起こっても何の不思議もない。

この時期のこの街では迷子などというものは、一日に三回鳴らされる大鐘楼の鐘の音と同じくらい、聴き慣れた当たり前のものだった。

川からの風が頬をなで、街を吹きぬける。

高い鐘楼の屋根の下からアーシヤは賑やかな街を見下ろしていた。地面の上に居た時と違って、ここに居ると風が涼しくとても気持ち良かった。

川面を滑ってやってくる風は地面の上でも感じられるが街を包む熱気を冷ますには到底物足りない。

眼下にはこの都市の名物の広場と市場通りが広がっていた。

アーシヤ達がレイアルに到着したのは今日の昼近くだ。

四人はまずは紹介された宿屋を訪ね荷物を預けて食事をしに街に出かけたが、噂以上の人波にもまれて食堂に行くだけでも一苦労だった。

食事を終え、とりあえずざっと市でも見て回ろうとしたものの歩きだして幾らもたたずにアーシヤは仲間とはぐれ、仕方がないので一人でふらふらと市場を眺めながらこの鐘楼へと辿り着いたのだ。

鐘楼は高く、ここからだ街の様子が一望できた。

この鐘楼の立つ広場を中心に大きな市場通りは四方へと真っ直ぐ広がり、そこから無数の細い路地が枝分かれしているのが良くわかる。

通りには色とりどりのテントが立ち並び、その頭上には通りを横切るように建物と建物を繋いだ細い紐に鮮やかな三角旗がずらりと飾られ風に舞っている。

それらの下を無数の人々が行き交い、地面もろくに見えないような人ごみが川の流れのように緩やかに動いていく。

アーシャはさつきまで熱心にその人ごみを見つめていたが、その中に仲間の姿を探すのはもう諦めていた。

この人ごみの中で仲間とはぐれてからもう小一時間ほどたっている。最初はあちこちと通りを歩いて見回してみたが小柄な少女は人ごみに飲まれるばかりでちっとも彼らを見つけられなかった。

結局彼女は下から仲間を探すのを諦めて、街のどこからでも見えるこの大きな鐘楼にこっそりと忍び込み上まで登った。

向こうからこちらを見つけてくれるのを願って、今はこうして涼しい風を楽しみながら街を見渡している。

店を覗くのは楽しかったがこの人の多さには閉口し、もう随分と疲れていたのもむしろ丁度いい一休みだ。

もう少ししても仲間たちが見つからなかったらまだ大分早い時間だけど一度宿屋に戻ろうと考えていた。

アーシャは腰をかけている鐘楼の石の手すりをぺたぺたと撫でた。石造りの鐘楼は随所に繊細な彫刻が施されていて美しかった。

鐘楼の中央にすえられた大きな鐘にも当然様々な彫刻がなされている。

川の流れを表した流水模様や、川の精霊だろう美しい乙女達の意匠はこの運河の街に相応しい。

鐘楼にも鐘にも随所に青い石が嵌めこまれ、それらには風化を防ぐ魔法が掛かっているのをアーシャは見取っていた。

このレイアルという運河の街は割合歴史が古く、そのせいかもしれない。とても美しい。

アウレスーラやハルバードの王都のように整然と区画整理された清潔な美ではないが、都市の風土や生活の匂いと結びついたどこか暖かい美しさがある。

この街は流れ込む各地の特産物の恩恵もあって、それらを材料に使う様々な工房があることでも有名だ。

特産品がない国はその代わりのように技術や芸術の振興を奨励している。

眼下に広がる色鮮やかな三角の旗の群れは、街の大人から子供まで、一人一人がこの時期にあわせて自ら生地を選び、縫い合わせ、刺繍を施して作るのだと聞いた。

そうやって人がその手で作る物は、時々驚くほどの美しさでアーシャの心を捉えた。

アーシャはちらりと胸に抱えた物に目をやった。

この鐘楼に登る前から大事に抱えてきたそれは一冊の古い本だった。

革張りの重厚な本はアーシャの腕で抱え込むのがやっとという立派な物で、背表紙や角は銀の縁飾りが覆っている。

精緻な透かし彫りの飾りは時を経て尚美しく、彫り込まれた題名も繊細な飾り文字だった。

随分古いものだが保存の魔法がしっかりとかけてあったらしく、若干の補修の跡はあってもさほど傷んだ様子もない。

アーシャはその美しい本をじっくりと眺めて、ほう、とため息を一つ吐いた。

古書を売る店でこれを見つけて気を取られていたことが原因で仲間とはぐれるはめになってしまったのだがそれはもう気にしない事にする。

アーシャは膝に乗せたままの本の飾りを指でゆつくりと辿った。彼女にはまだこんな風な精緻な彫り物は作れない。

(来年の授業は、彫刻とか彫金技術をとろうかなあ)

アーシャが作る事の出来る道具は実用一辺倒で、美しさとは今のところ無縁だ。

それらにも素朴な良さがあると言われたこともあるが、こういった美しい物に惹かれる心も持っているからそれなりの憧れも生まれてくる。

特に仲間を経てから彼らにあちこち連れまわされるようになり、美しい物に触れる機会も増えている。自然と憧れも募るというものだ。

美しい物を作り、それをどこかにひっそり残せたならいい、とアーシャは最近思っていた。

「六賢者、かあ……」

この本のタイトルでもあり、その内容を示す文字を指で辿って口に出してみた。

この本に書かれているというその単語については授業でも習った事がある。歴史と言うには余りに不確かな、お伽話に近い伝説の一つだ。

曰く、時を越えて世界を巡る六人の賢者がいるという。

彼らは何事かの目的のために世界を巡り、時に国々の争いを諫め、時に災害や魔物を鎮め、この世界を見守りながら遙かな時を生きているという。

アーシャがこの本を買ったのはその精緻な装丁が気に入ったからが主な理由だったが、書かれている内容に心引かれたと言うのも少しある。

お伽話の域を出ないような話なのに、歴史の節目で確かに人の口にするその六賢者に関する逸話を集めた古い本は、古い歴史が好きだなアーシャには楽しめそうだった。

公式な記録はないが六賢者は世界が二つに別たれた時代の前後から存在しているのではないか、と言われているらしい。

長命種と短命種の不和を解消しようと奔走したが力及ばず、世界が別たれた後はエル・アウレに残ったという話だ。

学者達は、彼らが長命種の一つなのではとか、密かに代を重ねて名や役割を継いでいる人の一族なのではとか、何か不老長寿の秘術があるのではなどと地味に研究していたりもする。

賢者達は若いとも年寄りだとも言われるがその姿や性別さえも正確には伝えられてはいない。

ただ、本当かどうかはわからないが、六賢者も長い時の中で何かの理由で数を減らし、今は四人になってしまったと言う。

(もし長く生きてるんだとしたら、それってどんな気分だろ?)

アーシャはこの夏、13歳になった。

とはいっても本当の自分の歳も、本当の誕生日もアーシャは知らない。

拾われた時の大体の背格好から年齢を数えて、拾われた日を誕生日にしてそれらを勝手に決めていただけだ。

そうやって数え始めてからの年月もまだ両手で余るほどにしか過ぎない。

過ごしてきた年月の分指を折り曲げながら、アーシャは自分の両手をじっと見つめた。歳相応の大きさのその手はまだまだ小さかった。

小さな手指は弱々しくも見えるけれど、その代わり器用に動かす事が出来るのを良く知っている。

この手を動かして、何かを作るのは好きだと思えた。

小さな手から何かを生み出した時、アーシャは自分がか弱い人間だ、と密かに自覚する。

弱いから知恵を使い、道具を作る。

弱い自分のために自分で何かを作りだすたび、育ての親はそれを褒めてくれた。

だから道具を作りそれに頼るのは好きだ。

人らしくあれ、と言った彼の心に添うことが出来た気がするから。

アーシャは長く生きたいとは少しも思わない。

けれど、いつかこの手で何かを作り、それが自分よりもほんの少しで良いから長くこの世に残ったならとささやかに望む。

自分と言う存在を、誰かがほんの少しだけ憶えていてくれたらそれで良い。

それが歳に似あわない、どこか哀しい願いだと少女は思わなかった。

「おや」

突然聞こえた声に、考えに沈んでいたアーシャはハッと振り向いた。

後ろの床にぽっかりとあいた入り口の方を見れば、そこから一人の青年が上半身を出していた。

アーシャは驚きと共に、失敗した、と苦く思った。

ここは本当は一般人が登るのは禁止されているのだ。

この鐘楼の鐘は一日に朝と正午と夕方と三回鳴らされる。

今日はアーシャが仲間とはぐれる少し前に正午の鐘が鳴ったばかりだったから、もう夕方まで人は来ないだろうと考えていたのだ。

行き交う人々が見慣れた鐘楼に見向きもしない事をいい事にこっそりと鍵を魔法で開けて忍び込んだのだが、まさかこんなに早く人

が来るとは思わなかった。

青年は面白そうな表情を浮かべたまま、ゆっくりと鐘楼へと登ってきた。

「こんにちは」

「……ご、こんにちは」

アーシャは反射的に答えてから唇を噛んだ。

先手を取って謝ってしまおうと考えていたのに挨拶を交わしてしまった。

怒られるだろうか、と思いながらアーシャは青年との距離を確かめ、そっと相手を観察した。

後ろで一つにくぐられた薄い金の髪が、川風にふかれてゆらゆらと揺れる。

若草の色の目は優しく細められていた。

その目に不法侵入者を咎める様子や怒りの色が浮かんでいない事に少しほっとする。

穏やかで優しくそんな顔立ちのその青年の歳が幾つなのか、アーシャには良くわからなかった。

アーシャは人の外見年齢から歳を測るのが苦手だ。

自分より年上か年下かという基準くらいしか持っていないから、とりあえずこの人はどう見ても年上だとだけ結論付けた。

それなら尚更一応謝らねば、とアーシャはぺこりと軽く頭を下げた。

「……あの、勝手に入ってごめんなさい」

「ん？ああ、うん。いいよいいよ」

青年はアーシャの謝罪にパタパタ手を振って笑顔を見せた。

「僕は別にここの関係者って訳じゃないからね。ただたまにここの魔法の具合を見に来る……修理屋ってとこかな？だからここにこっそり入り込む悪戯な子供が居ても叱る義務はないんだよ」

そう言っただけは少し風変わりな旅装のポケットの一つに手を突っ込んで歩み寄ってきた。

「手を出してごらん」

言われるままにアーシャが右手を出すと、彼はポケットから出した手をその小さな手の平の上でそっと開いた。

するとそこからころころと色とりどりの紙に包まれた飴玉が零れ落ちた。

「さつき下の露店で買ったんだよ。美味しいからどうぞ」

「ありがとう……」

警戒を解かない少女の不安を和らげるための厚意なのだろうそれを素直に受け取ってアーシャは礼を言った。

青年はアーシャにっこりと笑いかけると、自身の肩から斜め掛けにしたかばんを開いて中から茶色い布を取り出した。

パン、とそれを広げて手すりの傍の床に敷くとアーシャに向かって手招きをした。

「こっちにおいで。入っていた事は怒らないけど、手すりに座っているのは危ないからね。落ちたら大変だよ」

アーシャは言われるままに彼に近づき、布の上に腰を下ろした。

青年は座り込んだアーシャの頭を優しく撫でると鐘の方を振り返った。

「僕は仕事をするけど、居ただけ居ていいよ」

アーシャはその背中を眺めながら不可思議な気分を抱いて自分の頭にそつと手を乗せた。

誰かに頭を撫でてもらったなんて随分と久しぶりだ。

知らない人間にされたら不快に思うはずの行為は、何故だか妙に心地よかった。

彼の穏やかな雰囲気がそう思わせるのかもしれない。

少しばかり困惑した気持ちを抱きながらアーシャは鐘に手を当てて何かを調べている青年の背中を見守った。

彼は鐘の彫刻に埋もれるようにして点在している青い石に順番に手を当て、掛かっている魔法の具合を見ているらしかった。

時折その手元から石に魔力を込めなおしているらしい光が漏れるのが見える。

指で触れてその魔石の魔力の量を測り、簡単な呪文を唱えてその石に隠された魔法陣を展開させる。

そしてそれに綻びがあつたなら魔力を乗せた指で陣を書き直し補修する。

一連の作業はなかなか手馴れたもので、アーシャは感心しながら見つめていた。

人の作業を見ている時は静かにしているのが礼儀だ。

アーシャはただ黙って作業が進んでいくのを見ていた。

「こんなもんかな」

しばらくしてようやく点検を終えたらしい青年はもう一度辺りを見るりと見回して呟いた。

大した時間もかけずに結構な数の石の点検を終えた事にアーシャ

はまた感心する。

「……魔技師なの？」

アーシャが声をかけると青年は振り向いて首を振った。

「違うよ。本職じゃない。でもこういうものの修理が得意だっていうだけかな」

「でもすごく手際が良かった」

「そりゃ、もう結構長い事頼まれ仕事を色々こなしてるからね」

いたずらっぽく片目を瞑って笑うその顔は随分と若く見えるけれど仕事振りはなかなかのものだった。

今のアーシャが同じ事をしようと思えばもつと時間がかかるのは間違いない。

少なくとも一番高い石には背伸びしても手が届かない。

青年とは少なく見積もっても30cm以上の身長差があるのだから当然の事ではあるのだが。

(このくらい背が高かったらなあ)

シャルが聞いたら嘆くような事を考えながらアーシャはさっきよりも一色鮮やかになったように見える青い石達を見回した。

「そつえば、君はここで何をしてたんだい？かくれんぼ？」

不意の問いかけにアーシャは視線を青年に戻して首を傾げた。

「かくれんぼ？何それ……んと、良くわかんないけど……人を探してたの。仲間とはぐれたから、上から見えないかと思って」

「……かくれんぼを知らないのかい？」

青年が少し驚いたような顔をしたその時

バサバサッ

羽音と共に何か白い物が突然塔の中に飛び込んできた。

「わっ！」

「おっと」

バサ、と羽ばたく白いものが青年に一直線に向かい、その頭の辺りにぶつかった。

それはしつかりと彼の頭に取り付いてバタバタと暴れる。

「……いつて！ちよ、こらー！」

目を丸くするアーシャの前で、青年はその暴れる白い物を頭から引き剥がして抱え込んだ。

それは真っ白い一羽の鳥だった。

暴れたせいで白い羽毛は大分乱れているが、とても綺麗な鳥だ。

鶏くらいの大きさだがその体はもう少し細身でずっと優雅だ。黒い目がくりつとしてとても可愛い。

体は白いが冠羽と尾羽だけが不思議な虹色をしていた。

そんな綺麗な鳥は、ふっくらした胸の羽をふわりと膨らませて首を前後に忙しなく揺らし、人間で言えば不機嫌極まりない、といった様子でぐるぐると鳴いている。

こんなに表情豊かで、かつ不機嫌そうな鳥を見るのは初めてだった。

「なんだよもう！何怒ってるんだ？いてて！！」

鳥は抗議なのか、自分を抱え込んでいる青年の手を盛んに突付いた。

「わかったよ、悪かったって！」

青年は突付かれていない方の手で鳥の首の後ろから背中を何度も撫でてしきりに謝った。

鳥はしばらくは青年の手を突付いていたが彼が「帰りに市場で果物買ってやるから」といった所でようやく機嫌を直したらしく、くるる、と一声鳴くと嘴を収めた。

凶暴な鳥に驚いて固まっているアーシヤに苦笑を浮かべながら、彼はやっと機嫌を直した鳥をその肩に乗せた。

「ごめんね、驚かせて。これ、僕の鳥なんだけど仕事だからって宿屋に置いてきたのが気に入らなかつたみたいでさ」

「……………変わった鳥だね」

「……………よく言われる」

青年が苦笑しながら擦った腕には赤い痣があちこちに散っていた。どうやらいつものことらしい。

「えと、話しの途中だったよね。仲間とはくれたんだっけ？」

「あ、うん。本買ってたら皆見えなくなってたの」

そう言ってアーシヤは膝に抱えた本を示した。

青年はそれをちらりと覗き込んだけれど余り興味は惹かれなかったらしい。

うん、と頷くと窓の外に視線を向けた。

「この人ごみじゃあ探しようがないものなあ。待ち合わせ場所とかわかるのかい？」

「ん……宿屋に戻れば何とかかなと思うから大丈夫」

「そっか、じゃあ大丈夫かな……ココ？」

青年のその最後の言葉は肩の鳥に向けてのものだったらしい。

彼は急に肩から動いた白い鳥に訝しげな視線を向けた。

白い鳥はバサ、と軽く羽ばたくと彼の肩から飛び立ち床に降り立った。

二人の目の前で床に降りたそれは首を前後に揺らしてひよこひよことアーシャの足元に歩み寄った。

鳩や鶏と良く似た愛嬌のある動きは先ほどの凶暴さを忘れさせるほど愛らしい。

白い鳥はポカンとするアーシャのすぐ脇に歩み寄ると、そのベルトについている飾りをツン、と突付いた。

「ココ？」

ココ、と呼ばれた鳥はアーシャのヒップバッグのベルトにぶら下がっている、丸い銀枠にはめ込まれた大きな緑の石をコツコツと突付くとその先にぶら下がる紐の房を嘴で引っ張る。

「この飾りが気になるの？」

アーシャはパチン、と銀の止め具を外してそれをココの目の前に差し出した。

ココはくいと首を傾けてそれを眺めた後、くるりと青年の方を振り向いた。

「ああ、そうか」

青年はそう言って頷き、アーシャと鳥の前にしゃがみこむと、アーシャが手にぶら下げたままの飾りを指差した。

「これ、お守り？触ってもいいかな？」

「あ……うん。どうぞ」

青年はそれを手の平に乗せてしばらく眺めると顔を上げてにっこりと笑った。

「良い石だね。もしかして仲間とお揃いで持っていたりするかな？」

「え、うん。皆持つてる、けど」

「そうか」

青年はその答えに頷くと窓に歩み寄り、手すり越しに街を見下ろした。

ひゅう、と吹き抜けた川風が彼の髪で遊んで通り過ぎていく。

アーシャは、その時ようやく彼の周りにいる沢山の風の精霊に気がついた。

薄い青緑色の光に見える風の精霊達がくるくると彼の回りで踊るように遊んでいる。

『賢き北の乙女達』

ひゅう、と北に空いた窓から急に風が吹き込んだ。

青年は自分の周りを風が取り巻いたのを確認すると、手にぶら下げた飾り石を持ち上げて示した。

「これと同じ物を持つ子供達に僕の声を伝えてくれるかな。『探し

物は鐘の塔に』と」

その声に答えるように、北風の精霊達はアーシャにしか聞こえない声でくすくすと笑いながら飛び立って行く。

精霊を扱いなれたその様子にアーシャは軽い驚きと共に青年を見つめた。

彼は振り向くとアーシャに石を差し出した。

「はい、ありがとう」

「あ、うん。んと……こちらこそ？」

大した事はしてないよ、と青年は朗らかに笑った。

「その石、何か願いがかけてあるね？」

「え？」

「そういう石は、自分がそれに何を求めたかを思い出すともっと仲良くなれるよ」

「それはどういふ……」

アーシャが問い返そうとした時、くるる、と手すりの上から白い鳥が彼らを呼んだ。

「来たみたいだよ」

「えっ！」

アーシャは立ち上がってパタパタと手すりに走り寄った。

遙か下を見下ろせば、人ごみを掻き分けるようにして見慣れた赤と金と黒い姿が目に入る。その取り合わせは人ごみの中でも良く目立っていた。

彼らの視線が上を向いたのを見て、アーシャはパタパタと手を振っ

た。

それから後ろの青年の方を見た。

「どうして……あれ？」

振り向いたアーシャが見たのは、ついさっきまでと同じように静かにそこに下がる鐘だけだった。

きよろきよろと見回すが辺りにはアーシャ以外誰もいない。さっきまで座っていた茶色い布も既にそこになかった。

アーシャは夢でも見ていたような心地で手の中を見つめた。そこには確かにさっき腰から外した緑色の石が乗っている。

「なんだったんだろ……」

アーシャは階下から響く仲間達の足音を聞きながら、さっきの青年の名前も聞かなかった事に気がついた。

夏の日の不可思議な出会いに首を傾げるアーシャに、川風達はくすくすと笑うのみだった。

4：不機嫌な天気

レイアルに着いて二日目の朝。

『はぐれたら昼までに宿に戻る』

そう約束して今日も街へ出かけた一向は、大通りに出て早々にアーシャを見失った。

今日はアーシャとシャルは手を繋いでいたのだが、運悪く太ったおばさんにぶつかつた時にその体に挟まれて二人は引つ張られ手が離れてしまったのだ。

一度離れてしまうとどんどんと動く人並みに飲まれて流されていく小さなアーシャを捕まえるのは至難の業だった。

「もう！炎でなぎ倒してやろうかしら、この人ごみ！」

「んなつ、お前物騒な事言うなつての！」

「だってもう見えなくなつちゃったじゃない！今日こそはアーシャと可愛いアクセサリーとか見に行こうと思ったのに！！」

そつちかよ！とジエイは脱力を覚えながら憤る少女を宥めた。

こんな人ごみで本当に炎を出されては大惨事だ。最近シャルの魔法は炎に関して更に精度を上げ実力をつけている。

炎の色が段々高温のものに変わってきているのも良く知っていた。

「そんなものは学園に帰ってから他の女友達と見に行けばいいだろう」

「何よそれ！ディーン、あんた女心が分かってないにも程があるわよ！？せつかくこんなとこまで来たんだから、地元にないデザインのを探すのがいんじゃないの！」

「なら一人で探せばいい。アルシエレイアにそんな物の良し悪しが

分かるのか？他に目的があるのに付き合わされる方も迷惑だろう」

ふふん、とシャルはディーンを鼻で笑った。

「女の子同士なんだからちよっと一緒に買い物するくらい良いじゃないの！それにアーシャのセンスは悪くないわよ。」

アーシャは品物の材質や細工の良し悪しを見分けるのがすごく上手いの。魔技科だからかしらね？

あの子は似合う似あわないをはつきり言ってくれるからすごく有難いのよね」

「……そんな事で良いなら幾らでも言っただけでいいが」

「あんたの思いやりの欠片もない意見なんてまっぴらごめんよ！」

段々ヒートアップしてきたディーンとシャルのやり取りに青ざめたジェイは慌てて二人の間に体を割り込ませた。

道行く人も不穏な空気を感じるのか立ち止まった三人を避けるようにして遠巻きに通り過ぎて行く。

「まあまあ、往来で喧嘩はよせよ！昼に宿に戻ればアーシャとまた合流できるかもしれないし！ディーンも、天気が良いからって機嫌悪くすんなよな！」

ディーンはいつもの無表情な顔を幾分不機嫌そうに歪めて顔を反らした。どうやらジェイの言葉は凶星だったらしい。

「まったく、天気が良いのが嫌いだと晴れてると不機嫌になるなんてあんたってほんと根っからの閻属性ね！」

「だからよせってシャル！」

ふん、と鼻を鳴らしてシャルも顔を反らした。

「……昼には合流する」
「えっ!?!」

言い終わるが早い、ジェイがそちらを振り向く前にディーンの様子は人ごみに消えていた。

流れていく人の流れの向こうに時折黒い髪が見え隠れしたがそれもすぐに見えなくなる。

「あーあ、つたくもう」

「ほんと、勝手な男ね!アーシャが来てからちよつと丸くなったかと思っただけど、相変わらずだわ!」

お前もだろ!という心の叫びを飲み込んでジェイは乾いた笑いを浮かべた。

ジェイの内心の思いなどにせぬようにシャルは彼の腕を掴んで軽く引つ張ると歩き出した。

「とりあえずあんたがいれば荷物持ちは確保だからまあいいわ。行きましょ」

どうやらジェイはいつものごとくどこまでも勝手な幼馴染に振り回される運命らしい。

潔く諦めたジェイはシャルの向う方向に歩き出し、先に立って人波を避ける壁を作ってた。やった。

生来の優しい性格とシャルの厳しい躰の賜物だ。

(アーシャと会う前は、いつもこんなだったっけか?)

ディーンとシャルは本人達は決して認めないが深いところが結構

似ていて、それ故なのか昔からごくたまにぶつかっていた。

ジェイに関すること（主に進級などだが）では協力する事はあっても、それ以外でははつきり言っただけが良いとは言いがたい。

だが普段はジェイとシャルが言い争いをする事の方が格段に多く、女と言い争う事ほど時間の無駄はないと公言して憚らないディーンの方からシャルに突っかかることは極めて珍しい。

ジェイはまだほんの数ヶ月なのに、アーシャが仲間になる前に二人をどうやって宥めていたのかももう上手く思い出せなかった。

それとも宥めることもないくらい二人は接点を持つともしていなかっただろうか？

三人をそれと感じさせないまま自分のペースに巻き込んで、いつの間にか彼らを息のあった保護者にさせてしまおうアーシャの存在が今のジェイには恋しかった。

（なんだっけ、これ。子はかすがいって奴か？）

どこかピントのずれた事を考えながらため息を吐き、ジェイは人ごみの中を掻き分けながら歩いていった。

ディーンは天気が良い日が嫌いだ。

暑いとか日差しが強くて眩しいとか髪が黒いから日光を集めて熱がこもるとか、説明しようと思えば無理矢理に理由を付けられない事もないが、とにかくさしたる理由もなく昔から晴れた日が嫌いなのだ。

だから夏場のディーンは大抵毎日機嫌が悪い。

いつも無表情なので顔には出ないがジェイやシャルのように長い付き合いの人間にはそれは知られていた。

こんな天気の良い日には真っ赤なシャルの髪を見ているだけで暑苦しくて苛々してくるのだが、勿論それを告げない分別は持ち合わせている。

だからこれ以上の不毛な言い合いを繰り広げる前に二人の前から離れたのだ。

だがこうして人ごみを歩いていると段々と苛々も募り、青い空がどうしようもなく疎ましく感じられて、隣を歩いている汗かきの男を不意に殴りつけたような衝動を覚える。

(……いかん)

自分が少し冷静さを失っている事に気づき、ディーンは軽く頭を振った。

そもそもシャルがうるさいのはいつもの事で、普段の自分ならあそこでもくだらない言い争いなどしなかつたはずだ。

どうやらディーンは自覚しているよりもずっと不機嫌であるらしかった。

ディーンの目指す場所は魔具などが売っている地区だ。

広い市場通りも良く見ていけばその並びには多少の法則性がある。アーシャが向かうとしたらそこだろう、とディーンは予想していた。

人の波に合わせて歩きながらディーンは前方に目を凝らした。

暫く前方を見ながら歩いていると不意に自分の視界に違和感を覚えた。

ディーンは元々視力は良い方だし、背の高さも手伝ってそれなりに遠くまで見渡す事ができる。

だが、その距離が以前より随分と伸びている気がしたのだ。

何だかかなり先を歩く人々の服の模様まではつきりと見える気がする。

最近、妙に視力が良くなっている気がしていたがやはり気のせいではないのかもしれない。今までにないほど遠くまではつきりと見えてそれを半ば確信した。

視力が良くなって困る訳ではないが理由が分からない突然の変化は気になった。

気を散らして歩いていたら他人にぶつかりそうになり、ひとまずそれは置いて歩く事に集中する事にする。

前方を見つめながら歩いていると不意に何となく気になる場所があるように思えて通りの右の端に視線を向けた。

ひよこ、と人と人の間に一瞬だけオレンジ色の頭が見えた。それと白いマントも。

デインは泳ぐように人波を掻き分け、出来るだけ急いで先を指した。

それが彼女だと言う確証がある訳ではないがどうせ向かう方向なのだから無駄にはなるまいと判断して急ぐ。

もし少女を見つけられたら、今日こそは見失う前に捕まえようと決めていたのだ。

昨日アーシャとはぐれた時は本当に驚いた。

宿に戻って帰りを待とうかと相談していた三人の耳元に突然知らない男の声が響いたのだ。

ひゅう、と吹きすぎていった風と共に聞こえたそれが幻聴でない証拠に三人共が同時に顔を見合わせた。

『探し物は鐘の塔に』

ひとまず真偽は置いて慌ててこの街の中心に聳え立つ鐘楼に走ってみれば、立ち入り禁止のはずの鐘楼の天辺の窓からアーシャが呑気に手を振っていた。

合流したアーシャを問い詰めると、鐘楼の点検に来た修理屋が三人に伝言を届けてくれた、という。

名前も聞いてない男を信用するな！と三人に怒られてアーシャはしょんぼりとしていた。

そんな事があったからこそシャルもアーシャとはぐれてあれほど憤っていたのだろう。

だからとにかく、今日は捕まえる。

ディーンはそんな事を考えながら先を急いだ。

もう気分はすっかり過保護な保護者となっている事に、本人はまだ気づいていなかった。

アーシャは一人で市場通りをふらふらと歩いていた。

三人とはぐれてしまったのは困ったが、どうせ昨日もはぐれたのだし、待ち合わせは決めてあるので気にしない事にしてあちこちの店を覗き込んで楽しんでいた。

元々は一人でも平気な性質なのだ。

一日目は余りの人の多さに目が眩んで大した買い物もしなかったが、二日目の今日は多少は慣れて市場の様子をじっくりと見る余裕も出来た。

一見雑多に見える市場の連なりだがそれなりに法則があるらしい

事にアーシャは気がついていた。

食材を売る地区や服や布のような服飾品の地区、生活雑貨を売る地区、宝飾品などの高級なものを数点を厳選なケースに入れて店頭に出して商談は奥でなどと言う地区、武器や防具、魔具に本、大まかな種類だけでも随分と多種多様だ。

店舗持ちの店の出す立派な露店もあれば、その間を縫うように場所を借りているだけの小さなテントもある。

アーシャはそんな小さなテントの一つを覗き、魔法で凍らせた果物に蜂蜜をかけた氷菓子を一つ買った。

カリ、と齧ると程よく溶けた状態の果物の酸味と蜂蜜の甘さがぴったりでとても美味しい。

氷菓子を齧りながらアーシャは魔具やその材料を売っている一角を目指して歩いていた。

アーシャの目当ては主に本と魔具の材料だ。基材になる石板や木の板、魔法で石を溶かし込んだ高価なインクや耐魔法加工のしている布地、ガラス加工の材料や、石を研磨する為の良い研磨剤も探したい。

そんな事を考えながら歩いていたアーシャの目に完成品の魔具を置いた露店が映る。

置いてある売り物はどれも大したものではなく、せいぜいが面白い発明品といった品々だ。

アーシャは並べてある品々とその隣に書かれている用途を眺めて笑みを浮かべた。

一定以上の温度には耐熱効果があるので決して焦げ付かない鍋、乾きの魔法がかかっている水が残らないので錆びにくい包丁、洗濯物と水を入れると水流が起きてぐるぐると回る桶、床を拭いたあと水に入れるとぶるぶると揺れて自分で汚れを落とすモップ。

アーシャはこういふ他愛もない、日常生活を便利にする目的で作られたような魔具が結構好きだった。

魔法と魔具の平和的利用、と言う命題を掲げてこうしたものを研究しているチームが学園にもある。

アーシャはそれらを面白く眺めながら今作ってみたい魔具をイメージして、欲しい材料を指折り数える。

「夏期休暇の課題、鍋にしようかな、やっぱり」

野菜などの材料をそのまま放り込むだけで一定の大きさに切れ、規定の時間勝手に煮てくれる鍋などはどうだろう。

野菜を入れた後水を入れて適当に煮た所で調味料を入れればもう野菜スープが食べられる。1cm角くらいの大きさに切れるように調整すれば煮る時間も余り長くなって済む。

「切る行程は……風の刃みたいなのが鍋の縁から出るのがいいかな？皮は……まあいいよね、それも栄養で。でも手やお玉が切れたりしたら困るからそこはどうしようかなあ」

ディーンが聞いたらまた懇々と二時間は説教してくれそうな事をぶつぶつと呟きながらアーシャはしばしその露店の前に佇んでいた。

「ディーンには内緒にしなきゃ……」

「何が内緒なんだ？」

ピタ

アーシャは後ろから聞こえた声に一瞬動きを止めた。が、そのまま振り向かずタツと走り出す。

「何故逃げる」
「ひゃっ」

だがその逃走は悲しいかな人ごみと腕の長さの差にあっさりと阻まれ三步で終わってしまった。

マントの襟首をつかまれて猫のようにぶらん、とぶら下げられてしまえばいくら手足をばたつかせても前には進めない。

「せっかく迷子を見つけたんだから逃げるな」

「……はい」

アーシャは暴れるのを諦めてだらんと手足を下ろした。

「で、何が内緒なんだ？」

「べ、別に……何にもないよ」

ディーンはちらりとアーシャが先ほどまでぼんやりと見つめていた露店に目をやった。

そこに並ぶ品物と、脇に書いてあるその使用用途をざっと眺めるとまだ捕まえたままのアーシャに目を落とす。

「……アルシエレイア」

「な、何？」

「あそこの店でもし料理道具を買ったら三時間ほど特別講義を設けよう」

予想より時間が長い事に驚くべきか、核心を外れた事に喜ぶべきか分からず複雑な顔をしながらアーシャはぶるぶると首を振った。

よし、とアーシャに頷き返すとディーンはその襟から手を離して、今度は腕を取った。

「行きたい所があるなら付き合おう」

アーシャはその手がうつすらと湿っている事に気がついた。彼の額にもうつすらと汗が浮かび、どうやら随分急いでここまで来たらしい。

ちらりと見上げた顔はいつもと同じく無表情で、強い日差しが彫りの深い顔に影を落として実に不機嫌そうにも見える。

「ありがとう……じゃあ、えと、あっち」

アーシャが指差した方に彼は歩き出した。

上手に人の流れに乗り、アーシャが離れないよう歩みを調節してくれるのでとても歩きやすかった。

彼は優しいのか厳しいのか、そのバランスが良くわからない。背中しか見えない後姿を見ながらアーシャはくすりと笑った。

435

やがて二人は一軒の店の前で足を止めた。

アーシャが立ち止まり、くい、とティーンを引っ張ったので彼も止まったのだ。

バルド工房、と書かれた看板の下がったその店は老舗だと見て取れるなかなか立派な佇まいだった。

大市に合わせて店への入り口の通路だけ少し開けてその脇にはテントと露台が設置してある。

露店に並んでいるのは女性の好みそうなアクセサリーの形をした様々な護符の類だった。

通路から開きっぱなしの店の入り口を覗くと、そちらにはもっと大きな道具の類が所狭しと並んでいるのが見える。

どうやらこの工房は魔技師の工房らしい。

アーシャは露店に並ぶ護符を一つ手にとって眺めた。四角いペンダントの形の護符は中心に青い石が嵌り、その周りに水の神の加護と幸運を願う意味の古代文字が彫り込まれている。素材は銀で石も高いものではないが緻密な細工は美しく、簡単ではあるが防御の魔法がかかったそれなりに力のあるものだった。値札からすればなかなかのお買い得だ。

女性に受けそうなデザインの手頃な値段の物を中心に目立つ所に並べてある為、店頭はかなり賑わっていた。

商売上手な事に感心しながらアーシャはそのペンダントを元の場所に戻した。

こういった護符の類ならアーシャは自分で作れるから特に困ってはいない。

それよりも老舗らしい工房の技術が見てみたかったので奥の店の方が気になった。

「ここに入るのか？」

「うん、見たい」

アーシャは人で賑わっている露店の脇をすり抜けて店の入り口へと向かった。

露店で接客をしていた女性二人に目を向けると、二人は会釈と共にどうぞ、と奥を示した。

店の中に入ると明るい場所から急に移動したので目の前が一瞬暗くなる。

目が慣れるまで二人はしばらく店の入り口で立ち止まった。

「いらっしやい！」

店の奥から愛想の良い声が聞こえ、店員が出てくる。

目が慣れてきたアーシヤはぺこりと軽く頭を下げると店の中へと進み、近くの棚へと歩み寄った。

店の中は様々な魔具の類が所狭しと置かれ、壁に掛けられている。アーシヤはその一つ一つをじっくりと見て歩く。

「……あれ？あんだ」

不意に店員がアーシヤに声を掛けた。

品物を見ていたアーシヤが顔を上げると、彼女をぽかんと見つめている店員と目が合う。店員はアーシヤより少し年上の少年だった。

「あ、やっぱり！アーシリア・グラウルじゃん！」

「……？」

「知り合いか？」

アーシヤは首を傾げて相手の顔をまじまじと見た。

栗色の髪に水色の瞳、頬にそばかすが散った愛嬌のある顔立ちの少年だった。

だがいくから見ても心当たりを見出せない。

「……知らない」

「なっ！？ライラスだよ、ライラス・バルド！あんだのクラスメイト！」

クラスメイト、と言つ言葉にアーシヤはああ、と大きく頷き明るく告げた。

「じゃあやっぱりわかんないや。クラスメイト憶えてないもん」

「そりゃないだろ！？俺らもう同じクラスになって三年目だったのに、ほんとに!?!」

「……流石にそれはどうかと思うが」

魔技科を一年から選ぶ人間ははっきり言って少ない。

二年三年と学年が上がるに連れて魔法科からの転入者が増えるのが毎年のもので、そうなるかどうかしても授業の進みにある程度の差が出てしまう。

だから一年から魔技科を選んでいる人間はずっと魔技Aクラスと決められていて、転入者は魔技Bクラスに自動的に入る。よほど授業についていけないとか、優秀だと言う場合を除いて基本的にクラス替えはない。

三年近くも同じクラスなら流石に全員の名前と顔くらいは覚えているのが普通だろう。

「私、人の顔と名前覚えるの苦手なんだもん。最低でも五回くらい話さないと見分けつかないし……多分人の顔、両手と両足の指で足りるくらいしか憶えてないよ」

なんとと言っても一度見たら忘れない、あの印象深いコーネリアさえもアーシャに名前を覚えてもらえなかったくらいだ。

カウンターに深く突っ伏した、愛嬌はあるが平凡な顔立ちの少年は話した回数が少なければ確実に覚えてもらえていないだろう。

デインは胸の内密かに同情を寄せた。

5：不可解な忠告

「……まあ、それは置いて」

アーシャはとりあえず話題を変えようと、パイと少年から視線を外してまた棚を見た。

「置いてくのかよ……」

少年はぶつぶつと小さく呟いたが激しく突っ込む気力はないらしい。

そこでもっとはつきりと突っ込んで自己主張が出来るようであればアーシャに名前を覚えてもらう日はまだまだ遠い。

なんといつても三年目でもまだ駄目なのだ。

今置いておかれたらまた彼は忘れ去られるんだろうな、とティーンは思ったが自分の事ではないので追求しない事にした。

「バルドって事はこの工房の身内？」

「……ああ、俺が後を継げばもう五代目だな」

「ふうん。これは全部ここの工房で作ってるの？」

アーシャは棚に置かれた道具達を見ながら質問した。

並んでいるのは実に様々な品々だった。

魔具にも実用品から嗜好品、子供の玩具まで色々とあるが、この店はどちらかと言えば実用品の類を多く販売しているらしい。

店内には店頭と同じような様々なアクセサリーの形態をした護符や、使い捨ての符の類、きちんと置まれた旅装らしい服やマント、一見何の変哲もない砂時計や水晶球などが所狭しと並んでいた。防具や剣の形をしたものもある。

壁にオーダーメイド受付の文字が書かれた張り紙がある所を見ると、自分に合わせた護符や杖、魔法を付与した武器防具の類なども作ってもらえるらしい。

「ああ、大体はな。光球なんかも一応置いてあるけどそついうのは余所から買ってる」

「あれは学園が特許持つてるもんね」

少年は頷くと壁の張り紙を示した。

「うちのメインはあれだ。武器防具、杖のオーダーメイド。これでも結構な老舗なんだぜ」

へえ、とアーシヤは感心したようにその張り紙を見つめた。

「武器とか防具全部ここで作るの？」

「いや、分業だな。大体は昔からの付き合いの職人に発注出して、仕上げはうちでやるんだ。杖なんかはうちで全部作るけどな」

「へえ……じゃあ、ここが実家だから魔技科選んだの？」

ライラスは誇らしげに少し胸をそらすと、大きく頷いた。

「俺はこの工房で育ったようなもんだからな。いずれはうちの看板継げるような立派な魔技師になるんだ。」

魔力は家族の中じゃ結構ある方だけど、魔法科よりもやっぱり魔技が良くてさ。もう俺の作った物、時々店に出してもらってんだぜ」

少年の顔からは魔技師への強い憧れと誇りが伺えた。

その手から何かを生み出す事を喜び、生きがいとする者の顔だ。

アーシヤはその笑顔を見ながら何となく今度は彼の名前と顔を憶

えられそうな気が少ししていた。

ディーンは二人の会話を聞きながら棚を眺め、見下ろしていた棚の端にあった小さな壺をなんとなく手に取った。両手で抱えて少し手からはみ出すくらいの大さのそれは、持ってみると見かけよりも重たい。

壺のふたの持ち手代わりに楕円系の青い石がついていて、ふたにも壺にも美しい意匠の古代文字が彫りこまれている。

用途が良くわからず見つめていると不意にその文字がぶれたように見え、ディーンは軽く軽く瞬きをした。

するとぶれは治ったが、そのかわり何かおかしなものが見えた。手に持った壺のふたに、二重写しにするように半透明の魔法陣が見える。

青い石を中心に空中に広がったその魔法陣は美しい青い色で、幾つかの言葉や記号が描かれていた。

「……？」

ディーンはそれが何なのか理解しないまま、もう片方の手をそっと伸ばしてその魔法陣に触れてみた。

けれどそこには何も存在しなかった。

伸ばした手はすかすかと宙を切り、薄青い線をすり抜けた。

「ディーン、それ開けちゃ駄目。水が溢れるよ」

小さな手が壺を持った彼の手に重なってディーンはハッと動きを止めた。

その手に促され、壺をアーシャに渡すと彼女はそれをそっと棚に

戻す。

ライラスは面白そうに二人の行動を眺めて言った。

「よくわかったな、それが水の壺だって。でもふたは封印してあるから鍵の呪文知らないと開かないから大丈夫だぜ」

「水の壺？」

「ああ、ただの略称だよ。正式名は親父がなんちゃらいう洒落た名前付けてたと思うけど……まあ、空気中の水分を勝手に集めて中に溜めるっていう道具なんだ。一人用だけど、魔法が使えない人でも旅行とかに一つあると飲み水には困らないのさ。」

ただ、閉じてある時間に応じて水が溜まって中で結構圧縮されるから開ける時はうんと気をつけないと零れるっていうのが欠点なんだけどな」

だからあんまり売れないんだ、とライラスは困ったように笑った。デイーンは棚に置かれた壺をもう一度見たけれど、あの青い魔法陣はもう見えなかった。

だが、とデイーンは胸の奥で思い返した。

あの青い魔法陣に書かれていた文字、あれは封印を解く為の鍵となる言葉ではなかったか？

けれどそれなら何故それが彼に見えたのか。

ぶる、と頭を振ってデイーンはおかしな考えを振り払った。

何故か妙に喉が渴いた気がして、冷たいものでも飲みたくなった。

「アルシエレイア、表の店で何か飲み物を買ってくる。ここに居てくれ」

「うん、わかった」

アーシャの返事を聞くとデイーンは日差しの眩しい市場通りへと

歩みを進めた。

その背中をアーシャは少し不思議そうに見送り、やがて見えなくなった頃振り向いてまた店内へと意識を戻す。

「ここでは、今は何か作ってるの？」

「ん？ああ、いや……今は大市の時期だからオーダーの納期はずらしてあるし、市が立てば仕事は夏の休暇だ。

祖父さんと親父も他の職人も大市の前ばかりは皆オーダーよりも小物なんかを多く作るんだ。

だからこの時期に店で売る小物はかなり出来が良いのが混じっておすすめなんだぜ。祖父さんや親父のがあるからな。

俺はこっちに帰るとそれを売る手伝いして、その間に……ほら、これ」

ライラスは一枚の紙をカウンターの下から出して広げて見せた。

そこにはアーシャが普段から見慣れた様々な道具の図案が幾つも描かれていた。

「この夏の課題で、魔具作りに使う自分の道具を幾つか作ろうかと思つて。こういうのって店では在り来たりのしか売ってないだろ？本当は魔技師は自分の道具は大抵自分で作るもんなんだ」

様々な形をした彫刻刀やノミ、金槌や鋏といったそれらの道具はアーシャも勿論一揃い持っている。

だが学園都市でセットで買ったそれはあくまで学生用で、確かに余り良い物とは言い難い。

「俺もそろそろ自分のを作ってみろつて親父に言われたんだ。だからこの夏は店の手伝いしながらこれを完成させる予定なんだ」

「……いいね」

アーシャはその図案を眺め、自分がライラスの作った物を今までに何度か見たことがある事に気がついた。

描かれた図案の工具の持ち手に見覚えのある意匠化されたRの文字が入っている。

これと同じ文字の入った魔具を、生徒達の作った魔具の品評会で見て感心した事がある。

(確かあの時は杖だったかな?)

アーシャは昔見て感心したシンプルな細い杖を記憶の中から呼び起こした。

「……そう、確か、すごくシンプルな奴だった」

「え?」

「イチイの木に……銀線で模様を描いた水晶の杖」

去年の終わり頃に授業で出た課題で、杖を一本作れというものがあつたのだ。

魔技科で良く出されるテーマが決まっている課題というのはその条件も事細かに決められている場合が多い。杖の課題も確かそうだった。

長さは自分の腕以下、基材は木、金属を使う場合は銀のみ、石の使用は自由だがその等級は四まで、と言った具合だ。

その条件の中で生徒達は自由に杖をデザインして作る。

だが大抵の生徒は余り大人しいデザインの物を作ったりはしない。上級学部とは言えまだ歳若い子供達は、その子供らしい冒険心や自己顕示欲を思い思いに盛り込んだ派手なデザインのものを生み出

す者が多いのだ。

派手な彫刻が入った太くて持ち辛そうな杖や、色石がふんだんに散りばめられた女の子らしくけばけばしい杖、見かけばかりで使用する事を全く考えていない物が目立つ中、シンプルなもの杖は逆に目を引く物だった。

少し細身で短めのイチイの柄は丁寧に磨き上げられ、派手な銀飾りや彫刻がなく握りやすそうだった。

上に行くに連れて緩やかに太くなるその上部には細かな古代文字が同じ大きさを隙間なく正確に彫りこまれ、更にそこには細い銀線が一つ一つ丁寧に埋め込みにされていた。

埋め込まれた銀がキラキラと控えめに光を返す柄の天辺には丸く研磨された水晶が一つ、シンプルながら透明な輝きを灯す。

そしてそれは大きな力はない代わりに使用者の魔力を安定させ、収束しやすくする効果にとっても優れていた。

他の杖に比べると一見シンプルすぎるその杖は周りの子供達に、地味だの貧相だのと笑われていたが、見るものが見ればその美しさも仕上がりの確かさも、そして実際に使う上での安定度も郡を抜いた物だということがすぐに分かったはずだ。

もちろん教授の評価は一番高かった事がそれを証明していた。

恐らく魔法学部の学生用杖としてなら今すぐに求められ、役に立つに違いないそれにアーシャは随分と感心したのだ。

だがこれを目の前の本人が作ったと言う事は全く知らなかった。

「銀の模様の一部に、小さくRって入ってた。覚えてるよ」

「……」 “ごぼう杖” だろ

ライラスは決まり悪そうに肩をすくめて、かつて同級生達が見かけを見て口にしていたからかいの言葉を呟いた。

自分の作品を卑下するような言葉にアーシャは不思議そうな顔をした。

「なんで？すごく良い杖だった。それを言ったら私のなんて”ただの杖”だし」

その言葉にライラスは思わず噴出してしまった。

確かにアーシャの作った杖は皆に密かにそう呼ばれていたのだ。

細長い木の杖を使った柄は、上部で枝分かれした木の形そのままの奇抜な代物だった。

枝の節に実と葉っぱが一つずつ残り、それは銀でコーティングしてあった。

後は真ん中より少し下に銀の持ち手がついていて、そこに小さな緑色の石が一つはまっているだけ。

シンプルと言えばこの上ないほどだ。

けれど木の研磨や銀の持ち手の仕上げなどはとても丁寧だったし、しかも地の魔法に対して特化してその効果を増幅するという風変わりな杖と言う事で、個性を重んじる教授の評価はそれなりに高かったはずだ。

「でもあれただの杖って言っても、ヤドリギの杖だろ？しかも結構太かったし、見つけるの大変だっただろ？」

「うん。森の奥で探したオオバヤドリギだよ。よく育ったのを見つけるの苦労したよ」

「やっぱりなあ。あれ、俺は好きだったぜ。魔力が良く集まる良い杖だった」

「ありがとう」

アーシャは少し笑顔を見せてお礼を言った。

同じ魔技科の人間に、自分の作ったものを褒めてもらったのは初

めてだった。

ライラスは学園では滅多に見ない少女のその笑顔を驚いたようにしばらく見つめていたが、不意に困ったように俯いた。

「なあ、アーシリア」

「……アーシリアじゃないよ」

「あ、ゴメン、違うのか？皆そう呼んでるから……」

「幾ら訂正しても皆憶えないみたい。だから私も、興味ないし憶えないの。言いにくいならアーシャかグラウルでいいよ」

「わかった、ごめんな」

ライラスはそばかすの浮いた鼻を決まり悪そうに掻くと顔を上げ、さっきディーンが出て行った入り口とアーシャとを交互に見つめた。

「えと……お前さ、この辺に住んでるってわけじゃないんだろ？観光？」

「そう。買い物に来たの」

「あいつと？あれて、アルロードだろ、剣術科の」

「うん。でもディーンだけじゃなくて他の仲間も一緒。シャルとジエイとはさっきはぐれちゃったけど」

二人の名前を聞くと少年は一瞬更に困ったような、何かに迷うような顔を見せた。

彼がそんな顔をする理由が分からず、アーシャは首を傾げた。

「何？」

「や、その……大した事じゃないんだけどさ。お前さ、あいつらと最近仲いいだろ」

「知ってるの？」

「お前……知ってるかって言や知らない奴の方がもう珍しいんじゃない」

ないか？

なんていうか……お前は知らないかもだけど、普通は学部とか学科を越えて普段から一緒に飯食うほど仲が良い奴らって結構少なくて、それだけでも目立つんだよ」

広い学園で、多い生徒数となれば必然的に毎日顔を合わせている者同士が仲良くなることが多い。

基礎学部ですっと仲が良かった者達でも学部や学科が大きく分かれると疎遠になる事がほとんどだ。

三年になればチームを組む機会もあるのでまた仲が良くなる者達も出てくるが、それでも実習のない時期は疎遠、という場合が多い。だから学部を越えて実習が終わった後でも度々一緒に過ごし、ましてや休暇の旅行に一緒に出かけるチームの話なんてライラスは今まで聞いた事がなかった。

おまけにそのメンバーがメンバーなのだ。

「それに何よりさ……あいつらって色々有名なんだよ。俺らの学年じゃ一番目立つ部類に入る奴らなんだぜ？」

「ふうん」

「ふうんってお前……」

少女の手ごたえのなさにライラスは頭を抱えたい気持ちだった。

何からどう話せばいいのか分からず途方に暮れた彼はとりあえず思いつくままに不器用に言葉を繋げた。

「俺さ、お前の作る魔具、結構好きなんだ。変てこなもんも多いけど、丁寧だし、何か斬新でさ……お前だったら良い魔技師になると思うんだ」

同じクラスになってからアーシャが課題として提出する魔具を見て、ライラスはこっさり彼女をライバルのように感じていたのだ。いつも授業は寝てばかりの癖に彼女の作る魔具は飾り気こそないものの、刻まれた文字も施された処理も丁寧で正確だった。

逆に余分な飾りがないからこそ、長持ちしていつまでも大事に使えそうな良さがある。

「お前ってちょっと変わってるけど、良い物作るから、仲良くしたいって思ってる奴とかもいるみたいだし……」

魔技科Aクラスでも、将来に余り夢や希望を持っていない生徒は実は多い。

魔法に関わる仕事がしたいけれどさほどの適正がないと、基礎学部頃から挫折を味わってきたからだろう。

魔技師を目指しているくせに魔技師が嫌いだという連中を見ているのがライラスには辛い。

子供の頃から魔具と魔技師に囲まれて育った彼には、その作品を見れば魔具を作る事が好きな人間とそうでない人間がすぐに分かる。そんな彼の見立てではアーシャはかなり魔具作りが好きな部類の人間に入るはずだった。

だから、勝手だと分かっている彼女にはその道が続けて欲しいと願ってしまう。

「こんな事、俺が言う事じゃないし……お前が嫌な気持ちになるって分かっているんだけど……」

「……？」

首を傾げるアーシャに向かい、ライラスは言い辛そうに言葉を紡いだ。

「これ以上あんまり、あいつら三人と仲良くしない方が良い、と思う。お前のために……多分ならないから」

「……なんで？」

「その、お前が、そのうちきつと嫌な思いとかするんじゃないかと思っから」

アーシャはますます首を傾げた。

「……意味が良くわからない」

「意味が判らなくても止めた方が良いんだって！とにかく、忠告だから！」

強く言ったライラスの言葉にアーシャは眉をひそめた。

「誰と仲良くするかなんて私の勝手。一緒に居たいからいるだけ。皆が嫌だって言わない限り、一緒にいるよ」

「それはそうだけど！でも……」

「アーシャッ！」

ライラスの言葉は入り口から響いた明るい声に遮られた。

光を背に受けてパタパタと入ってきたのはちよつと怒ったような顔を浮かべたシャルだった。

「まあ、やっと見つけたわ！せっかく一緒にあちこち回ろうと思っただのに居なくなっちゃって！」

「あ、シャル。ごめんね」

「あはは！いいのよ、冗談よ。アーシャのせいじゃないもの。あの人がみじやしょうがないわ」

シャルはパツと笑顔を浮かべるとアーシャの手を取って表へと誘った。

「ね、アーシャ、ここの表の護符、なかなか良いと思わない？良かったら見立ててくれないかしら？」

「いいよ、とアーシャが頷くとシャルは先に立って外に向かった。アーシャもそれに続き、店の入り口に向かう。

「おい、待てよ！」

呼び止めたライラスにアーシャは足を止めて振り返った。

「心配してくれたって言うならありがとって言うべきなのかな？でも私は嫌な思いなんてしないから大丈夫」

ライラスは彼女の顔に目を凝らしたが、逆光に邪魔をされてその表情を伺う事は出来なかった。

ただ少女の静かな声だけが街の喧騒に負けず、凜と響いた。

「私の心は動かないから」

「……！」

入り口をくぐり明るい表通りに出て行く小さな背中にかける言葉をライラスはもう持たなかった。

カウンターの後ろのイスに静かに腰を下ろし、少女の最後の言葉の意味を考えた。

「……俺よりずっと、強いつてことかな」

少女に忠告しようと思ったのはただなんとなくだった。

けれど、友人と仲良くするその姿にかつての自分を重ねなかったかと言えばその自信はない。

だが、少女から返って来た答えは、あの頃の自分よりもはるかに強く潔かった。

「あーあ、俺、かつこ悪い……」

カウンターに突っ伏して頭を抱えライラスは小さく唸った。

余計な事を言ってしまったかと後悔しながら、けれど同時に小さく祈る。

どうか、あの風変わりなクラスメイトが俺のような思いをしないように、と。

5：不可解な忠告（後書き）

誤字などお知らせいただいたで大変助かっています。
ありがとうございます！

6：物と心と

アーシャが表に出るとシャルは露店の台に並んだ様々な護符を熱心に眺めていた。

色々なアクセサリーの形をしたそれらは彼女にとってどれも魅力的で悩んでいるらしい。

その傍にはジェイとディーンも立っている。

どうやら飲み物を買いに出たディーンを二人が見つけて合流できたようだ。

アーシャは三人に声を掛けず入り口の脇に立ったままその姿を見つめ、今さっき言われた言葉を思い返して薄く笑った。

三人と居る事で嫌な思いをしてもアーシャはちつともかまわないのだ。

少女にとって少し前までの学園の生活は大体が嫌な事と退屈な事の繰り返しだった。

人が多いのも嫌だし、自分を珍しそうに見る視線も嫌だし、口うるさく指図されるのも嫌だ。

授業は退屈だし、覇気の無さそうなクラスの間人は居ないも同然だし、一向に伸びない自分の背の高さも憂鬱だった。

彼女の中で日常の全ては、嫌いじゃないから始まり、どうでもいい、嫌い、という分類に分けられていた。

だがそれも三人と出会うまでの話だ。

今は毎日がとても楽しい、とアーシャは感じている。

彼らと共に過ごす時間が何よりも楽しい。

自分を心配してくれたのも、怒ってくれたのも、力を認めてくれたのも、当たり前前のことを聞いても馬鹿にせず答えてくれるのも、学園の生徒では彼らが初めてだ。

そんな三人と一緒にいることが好きだ、と素直に思う。

一度それを認めてしまつてからはなんだかその思いが強くなつて
いる気がしていた。

まだそれを彼らに言つた事はないのだけれど。

だから、アーシャにとつて彼らと離れる以上に嫌な事は今のこ
ろ存在しない。

クラスメイトの忠告がどんな意味を持っていたとしても、そんな
事に左右されて自分の心を動かす気は全くなかつた。

「あつ、ねえアーシャ、これとこれどつちが良いと思つ？」

外に出てきたアーシャを見つけたシャルが手招きした。

歩み寄つた少女に差し出されたのは、小さくすんだ赤い石が幾
つも飾られた華奢な細工の銀の腕輪と、それよりも幅広で大き目の
ピンクの石が一つ嵌つた金の腕輪だつた。

金の腕輪は銀の土台に金を薄くコーティングした物だつたが、そ
の分手頃な値段で丁度良い品だ。

アーシャは差し出されたそれを手にとつて交互に眺めると、こつ
ち、とピンクの石の方を指した。

「ピンクの方がシャルと相性が良いよ」

「赤はだめ？」

「んー……シャル似たようなのもう持つてる。それにこつちの方が
細工も良い出来だよ」

そつ言つてアーシャは首を振つた。

「そつ、じゃあこつちにするわ、ありがとね！」

アーシャはこつちの買わないの？ここの店の細工はちょっと地

大陸風らしいわよ」

「うーん……私はこういうの必要なら自分で作るから」

中央大陸では庶民的なアクセサリーや護符と言えば革を土台や紐に使ったものが多い。広い土地を利用した牧畜もそれなりに盛んだからだ。

逆に平地が少なく鉱山が多い地大陸では豊富な金属を使った細工が多かった。金属加工の技術もとても優れている。

コーティングの技術も地大陸の物だろう。

細い鎖や針金のような銀線を何本も組み合わせたり、幅のある銀環に植物を透かし彫りにしたりと言ったデザインは確かに繊細で目を引いたが、アーシャはそれらをじっくりと眺めるに留めた。

ここですぐに買い求めるよりも、いずれはこういう物を自分で作れるようにと目指した方がアーシャには楽しいからだ。

材料専門の店に行けば専用の型やパターンを写した手本集もあるかもしれないからそちらを探して帰ろうと決めていた。

アーシャが商品を違う観点から眺めている間に、シャルは手に持った腕輪をジェイに手渡した。

「ジェイ、これ買ってよ」

「……なんで俺が？」

「私の誕生日プレゼントよ。もうすぐだもの」

「まだ一ヶ月近く後だろ。大体そついうの自分で選ぶか普通？」

ジェイは呆れた声を上げたがシャルはフン、と鼻で笑って彼の胸に指を突きつけた。

「あんたが選ぶのが毎年毎年変わり映えしないから、今年は私が自分で選んであげようつていうのよ。悩まなくていいんだから助かるでしょ？」

私の部屋もこれ以上ぬいぐるみやら人形やらで埋まらなくて済んで一石二鳥なの！」

「……未だにぬいぐるみを贈っていたのかお前は」

ディーンに呆れたような白い目で見られてジェイは慌てふためいた。

「い、いいじゃねえか！そもそもシャルが好きだって言ったんだぞ！？」

「えーえー、確かに私が言ったわよね、好きだって。四歳の時に！けどそろそろお互いの年とか考えなさいってのよ！」

十年も同じようなものを贈り続けていれば流石にシャルが痺れを切らしても仕方がないだろう。

むしろシャルの性格からすると年々大きくなるぬいぐるみやリアルさが増す人形に、お年頃になってからも何年も我慢し続けただけものすごく寛大だったと言える。

しかも何だかんだ言っても実はシャルはそれを律義に全て部屋に飾っているのだ。その部屋の様子をディーンやジェイが見たら軽い眩暈を覚えるのは間違いない。

「十年も……馬鹿の一つ覚えという奴だな」

「ひでえっ！そこまで言わなくても！」

ジェイは打ちひしがれて思わずがっくりとしゃがみこんだ。

確かにジェイもそろそろぬいぐるみや人形には限界を覚えてきていたが他に思いつかなかつたしリクエストもなかったのだ。

「だからそろそろ新しいリクエストをしてあげようって言うんじゃないの。来年からこういうの選んでくれれば喜んで受け取るわよ？」

「うっ……」

それでも一応毎年のシャルの誕生日プレゼントを四苦八苦しながらも自分で選んでいたジエイは悩む様子を見せた。

彼はどこまでも根が真面目だ。

すると頂垂れたジエイの脇に同じようにしゃがみ込んだアーシャがちよいちよい、とその腕を突付いた。

「ん？」

顔を向けたジエイにアーシャは小声で告げた。

「あのね、それ、精神をバランスよく保ったり、女性らしさとかを引き出すようなそういう効果があるよ」

「よし買う。お姉さん、これ幾ら？え、五シル？もうちよいオマケしてよー！」

あっさりと宗旨替えして値段の交渉を始めたジエイをディーンは苦笑と共に見つめた。

彼にもアーシャの小声が聞こえていたのでその気持ちはとてもよく分かる。

「アルシエレイア、あの赤い方は？」

「ん？んーと、あれはすごく元気が出るの。多分シャルには向いてるけど、でもシャルはもう似た様なのいっぱい持ってるし」

なるほど、とディーンは深く頷いてアーシャの判断に賛同した。

これ以上シャルの元気が出て勢いが増したらますます手におえないだろう。

他に良い物がないかと余所見していたシャルはそんな会話も知ら

ず、ジエイが買った腕輪を彼から受け取ると嬉しそうに早速腕に嵌めていた。

「どう?」

振り返って腕を見せて聞くシャルに、似合う、とアーシャも笑顔を返す。

柔らかく光を通す薄紅の石と金の蔦模様が透かし彫りにされた幅広の腕輪は実際彼女に良く似合っていた。

シャルの買い物も済みそろそろ移動しようと言う時に、アーシャは露台の端でふと気になる品を見つけた。

近くによって手にとって見るとそれはチョーカーだった。

目を引いたのはその石と細工だ。

石は美しい半球形に研磨された大振りの草入り水晶で、透明度の高い水晶の中に別の鉱物である緑の線が沢山入っている。

真ん中で重なった二本のヤドリギの枝がその石を下から支え、緩やかにカーブを描いて囲うように斜め上へと伸びている。小さな実まで付いている精巧な細工だ。これに使われているのはちゃんとした金だった。

けれど変わっている事に、そのトップを左右から支える形の紐はどうやら植物で出来ているらしかった。

恐らく丈夫な蔦を細い繊維状にほぐし、それを編みこんで細く柔らかい帯状にしてあるのだろう。薄緑の帯はシンプルだがそれが逆に細工の美しさを引き立てていた。

石の嵌めである丸い土台には細かな古代文字が刻んである。

『草木が育つように 健やかなれ』

良い言葉だ、とアーシャは思った。

派手ではないけれど、作り手の想いを感じられるような暖かい品だった。

石自体には、体や魔力のバランスを整えるのが目的の癒しの魔法が掛かっているようだ。

紐が短めなのは幼い子供の為の護符にしても良いようにという配慮からかもしれない。

蔓草の帯も肌に優しく当たるに違いない。この帯なら傷んでも取替えは容易だろう。

素材やモチーフが良く調和した見事な出来にアーシャは感心した。

「あら、お目が高いわ」

「え？」

不意に声をかけられてアーシャは顔を上げた。

いつの間にかすぐ近くに店員の女性が来ていて、アーシャの手の上を覗き込んでいた。

癖のある栗色の髪に水色の目の女性だ。彼女の持つ色合いはライラスと同じで、恐らく家族が親戚なのだろうと言う事はかるうじてアーシャにも分かった。

「それはうちの三代目が作った品なのよ。だから細工が一味違うの」

その言葉にアーシャは頷いた。確かにこれは他の物とは少し違う感じがする。

細工も、その込められた力や気持ちも。

「もつうちの三代目はこういう細かい品物はほとんど作らないんだけど、気に入った石がある時だけ作るのよ。」

他の職人は作りたい細工に合わせて石を選ぶんだけど、三代目だけは石に合わせてその細工を決めるの。石がこうしてくれって言う

んだって」

「へえ……すごい」

「あはは、偏屈なだけよ！それだって、細工は一流なのに石が地味すぎるから売れないの。帯に蔦を使った変り種だしね。困ったものだわ」

アーシャは首を振ってそのチョーカーを棚に戻した。

「そんな事ない。私でも欲しいくらいだよ」

「あら、ならいかが？お買い得よ？」

アーシャはその言葉に少し悩んだ。

値段を聞くと十シルだという。アーシャ一ヶ月分の食費くらいの金額だが、土台は金で更にこれだけの細工なら安過ぎるほどの値段だ。

楽に払えるだけの持ち合わせはあったが、それでもアーシャは首を横に振った。

「似あわないしつける場所がないし。いつかこういうの、自分で作るからいいの」

女性は頷くとにっこりと笑った。

「あら残念。でもじゃああなたも魔技師の卵なのね。うちの弟もなのよ。中にいたでしょ？」

やはり彼女はライラスの姉だったらしい。

アーシャは頷いて会ったと答えた。クラスメイトだったらしいと言っ事は言わずに留めたが。

三代目を作ったと言っ事は彼の祖父がこれを作ったのかとアーシ

ヤはもう一度チョーカーを見つめた。

いつか彼もこんな物を作るような職人になるのだろうか。
そうなら少し羨ましいと感じた。

「……じゃあライバルかもね」

「ふふ、そうね。お嬢さんもがんばってね！」

ライラスの姉の笑顔に送られ、アーシャは小さく手を振ってその店を後にした。

いつか自分もあんな暖かな物を作れるようになると胸にその面影を残して。

「そついえば誕生日って物を贈る日なの？」

シャリシャリと本日二回目の氷菓子を突付きながらアーシャは三人に聞いた。

四人は鐘楼の周囲の広場の一角、氷菓子屋の隣に立てられた休憩用のベンチに座ってそれぞれ好みの食べ物を食べていた。

彼らの足元には本日の戦利品がそれぞれ置かれ、特にアーシャはあの後色々な店を梯子して手に入れた材料や道具で埋もれそうになっていた。

良い買い物が出来たらしくその顔もどことなく満足そうだ。

夕暮れが近くても夏の街は暑かったが、ベンチの上に掛けられたテントが眩しい西日を遮ってくれるので少しはましだ。

良い買い物をして程よく疲れた後に食べる冷たい物は最高だった。

アーシャが今度食べてるのは、甘い果汁を魔法で凍らせた物を細かく砕いてフルーツとクッキーを添えたものだ。

木の器に入っていて、後で器は返すのだと教わった。

隣と向かい側ではシャルとディーンが同じ物を食べ、ジェイは甘い物は苦手だと言って別の店で買った串焼きの肉を食べていた。

アーシャの質問に三人は驚いたように上げた顔を見合わせた。

「え……アーシャはしたことないの？誕生日のお祝い」

「うん。そういうの教わらなかった。何か贈った方が良いの？」

「ううん、そういう訳じゃないわ。無理に何か贈るっていうものじゃないの。」

家族とか友人とか親しい人同士がその人がこの世に生まれた事と、一年無事に過ごして歳をとって、また新しい一年が始まることを祝うの。だからカードとか、おめでとうってという気持ちだけでもいいの。

「大陸によって微妙に違うらしいが、この大陸では大体が親しい者同士でパーティでもして、ささやかな贈り物でもするというのが一般的だ」

「まあそうは言っても実際はこうして俺のように贈り物を強要されることもある訳だけだな」

ゴン、と鈍い音が響く。

音がした一瞬後にはシャルはもう何事もなかったかのように氷菓子を口に運んでいた。頭を抑えてうめくジェイが可笑しく見えるほどの澄ましぶりだ。

最近アーシャもすっかりこの光景に慣れてしまってもう驚く事もなくなった。

あんなに音高く殴られてコブも出来ないジェイの頭は丈夫だなあ

と感心する程度だ。

それともシャルの殴り方が上手いのだろうか？

そんな事を考えているとディーンが彼女に声をかけた。

「アルシエレイア、君の誕生日は？」

「へ？ああ、んと……もう過ぎたけど七月の十五日」

「ええっ、もう終わっちゃってるの！？しかもついこないだじゃない、言ってくれば良かったのに！」

「でもただの私の目安の日だし。ほんとの誕生日は知らないもん。

七月くらいの森で拾われたから、その真ん中の日に歳を数える事にしてるだけ。だから別に新年でもいいくらいのものだよ」

アーシャにとってその日は育ての親との出会いを思い出す日だ。

とは言っても拾われた直後のしばらくの間の事をアーシャは覚えていない。

だから拾われた日付もはっきりしないのだ。

彼女にとっては切りがいいから真ん中にしてあるという、ただそれだけの日だった。

しかしシャルにはそれだけで済ますことは到底出来なかったらしい。

「だめよ！私は友達の誕生日を祝うのが好きなの！

よし、私の誕生日の時にはアーシャのも一緒に祝いましょ！プレゼントとか、ご馳走とか用意して！」

「ええ！？いいよそんなの！」

「だーめ、もう決定よ！どうせその頃なら森で一緒だもの。という訳でわかったわね野郎共！」

シャルが海賊の女親分のように威勢良く少年達に宣言すると、おう、とかああ、と言った覇気のない返事が返ってきた。

自分達に課せられた役割を思つての憂鬱さが声ににじみ出ている。

「でも……ほんとにいいのに……そんなのした事ないし」

困った顔をするアーシャにディーンが首を振った。

「気にしない方がいい。どうせ君が辞退しても無理矢理開催される事は決定済みだろう」

「そそ。シャルの誕生日があるからな。毎年休暇中だから時期ずらしてやってたけど今年は休暇中に出来るから楽なくらいさ。」

それに……」

ジェイは急に声を潜めてアーシャに囁いた。

「アイツ友達少ないから祝うの嬉しいんだよ。祝われてやってくれ」

ゴン！と再びの鈍い音が辺りに響く。

「聞こえてるのよ！」

今度の拳骨はさつきよりも効いたらしい。

ジェイは頭を抱えて突つ伏して動かなくなった。

呻き声すらも出てこない。

しかしシャルはそんなものは目に入らないとばかりに上機嫌でアーシャの方を振り向いた。

「プレゼント、何か希望はある？服とか小物とか……そういえばアーシャはぬいぐるみとか人形は好き？」

アーシャはしばらく考え首を傾げた。

「ぬいぐるみは知らない……人形って、人を対象にした術を使う時の形代にする奴なら知しってるけど、アレのことじゃないんだよね？」

「……違うわね」

「激しく違う」

「全然違うだろ……」

三人に激しく否定されたアーシャはその後、似た所があるかもしれないと形代の作り方を図解入りで詳しく説明しようとしたが残念ながら聞いてはもらえなかった。

しかしその説明の中に「自分で作ったものでなくても人の形をしていれば使える」という発言があった為、三人の選ぶアーシャへの贈り物からはぬいぐるみと人形がそつと除外される事となった。

少女がぬいぐるみや人形の何たるかを知る日は未だ遠いようだった。

6：物と心と（後書き）

書きませんでした。が通貨は金銀銅各2種ずつの計6種類です。
必要があったらその辺の設定もどこかに載せるかもしれませんが今
のところは保留で。

7：おかしな変化

「お世話になりました」

レイアルでの六日目の朝、朝食を終えて宿を出た四人は宿の主人とその奥さんにお礼を言った。

「やーね、改まって！最後まで行儀良いんだから。あんた達またおいでね！」

「タウローによろしくな」

無口な主人と、対照的な明るい奥さんが切り盛りするこの季節だけの民宿はとても暖かくて快適な宿だった。

二人は子供達が独立してから市に合わせて民宿を始めたということだが、普段は主人は漁師をし、奥さんはこのレイアルの基礎学校の教師をやっているらしい。

元々は奥さんがタウロー教授と友人で時々お互いの所を歩き来していたそうだが、今では主人も教授と釣り仲間なのだということだった。

宿の食卓にはその主人自らが釣ってきた川魚が沢山並び、アーシヤを大いに喜ばせた。

四人は後ろ髪を引かれながらも手を振って宿屋を後にし、まだ朝早く人の少ない街の中をのんびりと歩く。

結局この街には丸五日滞在していた事になる。

その間に思う存分買物したり川で舟遊びや釣りをしたりと四人は大いに楽しんで、今日これから帰りの船に乗る。

「ジエイ、デーン、ごめんね荷物……」

アーシャは両手に荷物をぶら下げたジェイの脇を歩きながら、申し訳なさそうに少年二人に声をかけた。

「良いって。大した量じゃないし大丈夫」

「問題ない」

ジェイとディーンがそれぞれの手に持っている荷物の半分はアーシャの買い物だった。どうしてもカバンに入らなかった物を二人が持つてくれているのだ。

少女にとつて市場に溢れた色々な物はどれも珍しく魅力的で、つい調子に乗つて買い物をしすぎてしまった。

荷物をまとめる段階になつてその事に気づいたが時は既に遅かった。

アーシャは以前作つた、物が沢山入るディパックを持つて来ていたし、いつも着けているヒップバッグもかなりの量の物が入るのだがそれでも溢れてしまったのだ。

その溢れた物を、比較的買い物の少なかつた少年二人が手分けして運んでくれているのだから何とも申し訳ない。おまけにアーシャの買い物は結構重たい物が多いのだ。

済まなそうにしている少女にシャルは朗らかに笑いかけた。

「いいのよアーシャ。どうせ二人にとつてみれば軽い物なんだから」

「や、お前の荷物重いぞ……何入つてるんだこれ」

ジェイはその右手を塞ぐもう半分の荷物を少し持ち上げてシャルに示した。その袋はアーシャの物よりも随分と大きい。

「服とか布よ。火大陸産の巻きスカートとか、水大陸の織物とか色々買ったもの。でも軽い布地が多いはずよ？」

だが軽い布でも大量になればかなりの重さになる事は想像に難くない。

シャルは布のままだと安かったそれらを大量に買い、友人達への土産にしたり、自分の服を作ったりする予定だった。

「そうは言っても重いのは事実なんだけど……」

「男がぐだぐだ言わないの！あんた最近力強くなっただって喜んでたじゃないの、こういう時に使わないでいつ使うのよ！」

余計な事を言ってしまった、と軽く後悔しながらジェイは諦めて荷物を持ちなおし足を速めた。

船に乗ってしまうまでの我慢と思って先を急ぐ。

ディーンの方はアーシャの荷物の他は自分の買い物だ。重いらしいがさほど量は多くない。

シャルはディーンには自分の荷物を持たせるつもりがない。

頼んだ際に返って来る言葉の嫌味っぽさが予想できて嫌なのだという。

「世の中不公平だぜ……」

「何か言った？」

「いーえ、何も！」

今日も二人は相変わらず仲が良い、とジェイが聞いたら異論を唱えるような事を考えながらアーシャはくすくすと笑った。

青い空の下に大きな帆を広げ、船は滑るように川を上って行く。
レイアルの船着場は広い街の外れにあるのでそこまでは結構歩いたが、乗ってしまえば後はすこぶる暇だ。

荷物を船室に置いた四人は狭いそこから離れ、船の中でそれぞれ思い思いの時間を過ごしていた。

アーシャは行きも散々眺めていたのに、帰りの船でも飽きもせず船内のあちこちを見て回っていた。

中でも少女はこの船の大きな帆が気に入りで、一回りを終えた今はデッキの上の船尾の方に座りこみ、風をはらんで大きく膨らんだ帆を熱心に眺めている。

その目には楽しそうに帆で遊ぶ風の精霊達の姿が映り、自分も加われたらいいのにと少し羨ましくなる。

精霊達のおかげで風はとても気持ち良いが、日差しが強いので辺りには人の姿はほとんどなかった。

アーシャにはとてもありがたい。

川を遡る船は行きと違ってどうしても逆波を船体に受けるので多少は揺れてしまう。

その揺れがシャルには嫌だったらしく、彼女はデッキにしばらく出ていたが軽い船酔いを覚えて今は船室で休んでいる。

逆にジェイはその揺れが気に入ったらしく船首に陣取って船の先を眺めて楽しんでいた。

デーンの様子は見えなかったが、恐らく日陰にいるのだろうと少女には予想が付いた。

闇の加護を受けた人は明るい日差しを余り好まない事をアーシャは知識として知っていた。

全てがそうだとは言い切れないが、精霊の加護を強く受ける人はその性格や嗜好に偏りが出る事が多いことが定説とされている。

加護を受けたからそうだったのか、元々そういう性格だから加護

を受けたのか。その結論は未だ出ていない。

「卵が先か、鶏が先か……」

アーシャは小さく呟き、傍にあった樽に寄りかかった。

「何の話だ？」

その声に視線を下げると船首の方からディーンが歩いてくる所だった。

「あれ、ディーン、どうしたの？」

ディーンはその問いには答えずアーシャの前まで歩いてくると彼女の目の前の床に腰を下ろした。

「相談したい事がある」

「相談？何？」

ディーンは何から話したものが迷うようなそぶりを見せた。

アーシャが黙って待っていると、不意に彼は右腕を上げて遠くの空を指差した。

「あそこに鳥がいるのが見えるか？」

アーシャはその指が指し示す方向を見た。

自然の中で育った少女は視力には自信がある。

昔よりは若干落ちたかもしれないが、それでもかなり遠くの物も見えるはずだ。

けれどその空には一見した所はつきりした物は何も見えず、目を

凝らしてどうにか見えたのは何か居ると言われればそうかもしれない、という程度の小さな点だった。

「……見えない。鳥だって言われれば、空にいるしそうかなって思う程度かな」

「あそこにいるのは海鳥に近い種類だと思うが……頭と体は白く翼は灰色、その先が少し黒い。足と嘴が赤い鳥だ」

「そんな事まで分かるの？」

驚く少女にディーンは困ったように眉を寄せて頷いた。

「見える、ようになったらしい」

「どういうこと？」

「私の目は今までも悪くはなかったがあんな遠くの物は到底見えなかった。ここ最近でどうやら急速に視力が上がったらしい」

アーシャはもう一度空を見た。けれどやはりそこには小さな点が見え隠れするだけだ。

「視力が良くなっただけ？他に変化は？」

「他には……時々おかしいものが見えるな」

「おかしい物って、例えば？」

ディーンはきよろきよろと辺りを見回すと、船の帆を見上げて指し示した。

「あの帆に、時々魔法陣が見える。後は、君が身に着けている物にも同じようなものが見えるな」

「え……ほんとに？」

アーシャは驚いて目を見開いた。ディーンは少女に頷く。

「……あれが見えるって事は……じゃあ、これは？」

アーシャはそう言うつと自分のすぐ脇の空中を指差した。

ディーンは言われた場所に目を凝らしたがそこには何も見えなかった。

「何も見えない」

「そっか……うーん、なんだろ」

「最初は何か精霊の加護の影響かと思ったのだが、闇の精霊でそういう加護があると聞いた事がない。だが、ジエイは光の精霊を目に宿したりするからあるいは、と」

アーシャは頷くとディーンを手招きした。

「ちょっと見せてね」

そう言つて小さな両手を伸ばしてディーンの目をそつと覆つ。目を閉じて集中したが、そこに何かが宿つていると言つ気配はない。

「何もないみたい。精霊じゃないみたいけど……変化に気づいたのはいつから？」

「さて……しばらく試験で忙しかったからな。試験の後には何となく変化があったように思う。もしかしたらその前にもあったが気づかなかつただけかもしれない」

うーん、と唸りながらアーシャは自分の中の魔法の知識を漁つた。視力が良くなる魔法は確かにあるがそれはあくまで一時的なもの

だ。

視力を補助するような魔具を作ればその効果をある程度継続する事は出来るが、ディーンは勿論そんなものを使っていない。

それにあれまで見えるとなるとまた話が違う。

そこまで考えた所でディーンがもう一度帆を指差した。

「アルシエレイア、それで、あれがなんなのか聞いてもいいか。度々見えて気になっている」

「ん？ああ、うん……あれはね、あの帆に掛かっている魔法の源。多分この船の重要機密の一つ、かなあ」

アーシャの目には揺れる帆の上になかなか緻密に描かれた薄水色の魔法陣がずっと見えていた。恐らく今のディーンにもこれが見えているのだろう。

この帆は、その帆布自体が風を集める為の一つの魔具なのだ。

「重要機密、と言う事は本来は見えなくしてあるものなのだろうか？
そういう技術なのか？」

「うん、そう……何ていつたら分かりやすいかなあ」

アーシャは少し考え、自分の胸に付いた銀の土台に青い石が嵌ったブローチを取り外して手の平に乗せた。

「魔具ってね、こういう目に見える文字が刻まれてる物が多いって思われがちだけど、本当はそうじゃないのがほとんどなんだ」

少女が指差す丸い銀の土台部分には、その言葉の通り目に見える古代文字が刻まれている。

物が小さいから刻まれている文字も細かいが、守護や水、熱などを表す文字が刻まれているのをディーンは見取った。

そしてそれを持つ彼女の手と重なるように、もう一つの半透明のうすばんやりした魔法陣がその目には映る。

「魔具を作る時の魔法陣の形成は、こうやって目に見える形で刻んだり、描いたりするのが一番簡単な方法なの」

そう言ってアーシャは青い石に指で触れ、一言呟いた。

『青き花、開け』

次の瞬間、ふわ、と青い魔法陣が石を中心に広がった。

さつきよりもずっとくつきりとディーンにも見える。

「さつきまでもディーンに見えてたかも知れないけど、これがこの石の中に私が隠したもう一つの魔法陣。

この魔法陣は魔力で描いたもので、それを石に込めたの」

「……こちらの方が随分細かいのだな」

ディーンは外側の陣よりも遥かに複雑な魔法陣が石の中に隠れていた事に少し驚いた。

「そう、こっちの方がメインの魔法陣だから。外側の目に見えるのは補助的な役割なの。石を要に使っている魔法陣はほとんどがこういう構造のはずだよ」

「さつき唱えた言葉は？この陣の中にも書かれているようだが」

ディーンは薄青い魔法陣の中にさつきアーシャが唱えた言葉が小さく書き込まれているのに気づいて問いかけた。

「さつきのは隠された魔法陣を呼び出す鍵の言葉。」

鍵の言葉ってというのは魔法陣を描く時に中に書き込むからそれを作った人によって全部違って、その言葉を知らない限りこれを見る事も手を加える事も普通は出来ないの」

「……知らないな。魔技科で習う技術なのか？」

「うん、多分ね」

ディーンも基礎学部で簡単な魔具についての授業もやったが、子供でも作れるようなごく初歩の魔具の作り方などを習った程度でそういう技術がある事は知らなかった。

「それで、あの帆はそれと少し似てるんだけど、最近……って言うてもここ二十年くらいの事らしいけど、錬金術と魔技の混ざったみたいな新しい技術が世に出るようになったの」

「どんな技術だ？」

「ん」と、鉱物を特殊な液体に溶かして、それでインクを作るの。そのインクは見た目はその鉱物の色をしてるんだけど、魔力を乗せて魔法陣を描くと、乾いた後には石に魔法を込めた時と同じように目に見えなくなる」

「それは特別なことなのか？」

「単に魔力だけで描く魔法陣っていうのは、こういう魔力を付与できる石なんかに入れないとすぐに発動するか霧散しちゃう。」

だから今までは布みたいな石を取り付けにくい素材には目に見えない染料で描くしか方法がなかった。

でもそのインクだと目には見えなくなるけど消えないから、あの帆みたいに布とか革とか色んな素材に使えて、応用範囲がすごく広がったんだよ。

定期的に書き直す必要はあるけど、同業者に秘密が見えないってのは一番大事な事だしね」

「なるほど……じゃああれが見えるというのはやはりおかしい事なんだな」

「見えるなんていつたら大騒ぎだと思っよきつと」

アーシャは頷いてそう言った。

あの帆の魔法陣にも当然鍵の言葉が記してある。

だから普通はその言葉を唱えない限りは魔法陣は決して人の目には映らない。

独自の技術を使っている魔具はメンテナンスもそれを作った工房が行うのが当たり前の事だ。

その為の鍵の言葉は工房に保管されていて決して外には漏らされない。

もしくはうんと高い金を対価として払ってその鍵も一緒に買うのが普通なのだ。

なのにそれが何もしなくても鍵の言葉ごと見えている、などと知れたらどうなるか。恐らく魔技師協会に追い回される羽目になるのは間違いないだろう。それで済めば良い方だ。

「今のディーンには私と近いくらい見えてるんだね……」

「君にはいつもああいうものが見えているのか？」

アーシャは一度頷き、それから首を横に振った。

「見える、けど見ない。

いつも見て歩いてたら道なんて歩けないよ。

何で見えるかは私も知らないけど、普段は見ないように意識を反らしてるから」

「そうか、なるほど」

納得したディーンに頷きながらアーシャは青い石にもう一度指で触れた。

『青き花、閉じよ』

見えていた魔法陣がフツと消え失せる。

ディーンの目には魔法陣の色が急に薄くなったように見えていた。アーシヤはブローチを胸に戻すと腕を組んで首を捻った。

「前よりも視力が良くなって、見えないものが見える……でも精霊は見えない」

アーシヤがさつき指で示したのは自分の隣に浮かんでいた水の精霊だ。けれどそれはディーンの目には見えなかった。

「視力が変化してるってことはこれから見えるようになるのかな……でも何でもかんでも見えるときとすごく大変だよ」

「そうなのか？」

アーシヤは嫌な事を思い出した、とでも言うようにため息を一つ吐いて頷いた。

「私、初めて森から町に出た時は町にこんなに色々な魔法が使われてるって知らなくて、あんまり色々見えすぎるから目が眩んで全然まともに歩けなかった。

しばらく町を遠巻きにしながら旅をしたよ」

「なるほど……見えないようにコントロールできるならそれに越した事はないが、原因が分からないとどこまで進行するのも判断が付かないからな……」

「うーん……」

二人は頭を付きあわせて深く考え込んだ。

7：おかしな変化（後書き）

長くなったので二つに分けています。

二部は一部とはテーマが大きく違うので前回とは進み方も違っています。

特に前半は楽しい夏休みを強調しているのでほのぼのです。

よろしければ気長にお付き合下さい。

8：やつかいなおまけ

二人が考え込んでいると船首の方から明るい声がかかった。

「おーい、ディーン、アーシャ。何してんだこんなところで？」

声のした方に目を向けるとジェイが手を振りながらこちらに歩いてくるところだった。どうやら川を眺めるのに飽きたらしい。

ジェイは二人の所まで来ると彼らに倣ってその傍の床に座り込んだ。

そしてその顔を交互に見て、なんとなく真剣な雰囲気気付いたらしい。

「ん、何だ？何か大事な話？」

「んと……ちよつとしたディーンのお悩み相談？」

アーシャがそう答えるとジェイは目を見開いて口をぽかんと開いた。

「ディーンが人に悩みを相談！？明日は雪でも降るのか？」

「……休暇の課題へのアドバイスはいらならしいな」

「あつ、嘘ですごめんなさい！！俺も相談に乗ってやるから！」

「お前に相談して解決した事があったならその事例を具体的にあげてもらいたい」

アーシャはそのやり取りにくすくす笑った。

ジェイが来ると途端に賑やかになる雰囲気可笑しい。

「あのね、ディーンの目が最近急に良くなったんだって。それで原

因がわかんなくて悩んでたの」

へえ、と言ってジエイは横からディーンの目を覗き込んだ。

だが別にいつもとどこが違うという風にも見えない。

すつきりとした切れ長の目は相変わらず表情に乏しい。

変化といえは、外が眩しいせいや背の低いアーシャと話をしているせいか少し俯き加減で、いつもより若干不機嫌そうに見えている事くらいだ。

「そんなに良くなったのか？いつから？」

「すごく遠くの鳥の羽の色まで見えるくらいだって」

「ああ、気付いたのは最近だが、恐らく変化は試験の前後からだろう。確信したのはレイアルにいた時だ」

「へえ……試験の前後かあ」

そう呟いてから、ジエイはふとある事に気が付いた。

「そういえば、俺も最近なんかちょっと変だぜ。どうも妙に右手だけ力が強くなってるみたいなんだよな」

「ええ？」

「そう言われてみれば試験の時にやった体力測定の結果がどうとか騒いでいたな」

そうそう、とジエイは何度も頷く。

「なんかさ、右手の握力とか腕力が妙に強くなって……懸垂とかやっても右手だけで片手懸垂出来ちまいそうなくらい楽だったんだ。最初は筋力がついたのかとも思ったんだけど、左手はそんなに変わってなくて右手だけってのが気になって……」

「ジエイ、ちょっと手を見せて」

アーシャはジェイの右手を取って見てみたが特にこちらにも変化は感じられなかった。

見た目も別に、左手に比べて太くなっているといった事もない。

「気づいたのは試験の時？」

「ん、多分……あ、でもそういえば試験前のあの地獄の勉強の日々で、なんでか鉛筆を随分駄目にしたっけ……ひよっとしてあん時からか？」

その言葉にアーシャはますます考え込んだ。

その前後からの変化と言えば四人が良く一緒にいるようになった事くらいだが、特に原因として思い当たる事もない。

「試験の前から……力が強く、目が良く……二人だけなのかな。でも私はなんともないし、シャルも何も言っていなかったしなあ」

484

その時、不意に風が強く吹いた。

ギヤアギヤアと濁った声が頭上から聞こえ、アーシャが顔を上げると隊列を組んだ白っぽい鳥の群れが風に乗って空を渡っていく所だった。

白いその姿は太陽に見え隠れして少しずつ遠くなっていく。

アーシャはその姿に一瞬既視感を覚えた。

白い鳥を肩に乗せた姿が記憶の中を過ぎる。

「自分がそれに、何を求めたか」

もう面影も薄いが記憶の中の彼はそう彼女に言った。

アーシャは弾かれたように自分の腰を見た。

そこには自分が作った銀の枠に嵌った緑の石が下がっている。飾り紐が風に煽られてゆらゆらと揺れた。

彼はあの時、これを指してその言葉を告げたのではなかったらうか。

目の前の二人を見れば彼らも同じようにこれとそっくりな物をベルトに身に着けていた。

四人のそれに枠や金具を取り付けたのはアーシャなのだから、揃いなのは当たり前だ。

それは確かに彼らだけの共通点だ。

「まさか……」

アーシャは恐る恐る腰につけた飾りを外して手に取った。

その緑の石は勿論、あの風の森で四人が手にした、森の王からの贈り物の聖霊石だった。

どんな力を秘めているのか、帰ってからアーシャも探っては見たが短い時間では良くわからず、とりあえず失くさぬようと四人の石をそれぞれ身につけやすく加工したのだ。

そのまま試験に突入しそしてこの旅行となったから、その間その存在をすっかり忘れ去っていた。

だがもし二人の変化がこの石によるものだとしたなら时期的にも丁度合っている。

「……おまけ付きって言うてたっけ」

アーシャは石をきゅっと右手で包むとじつと考えた。

ジェイとティーンもアーシャの仕草に、彼女が考えた可能性に気づいたらしい。

まさか、という顔で自分達の石とアーシャを交互に見つめている。

「……どう思う？」

「そう言われて見れば……時期は合うかもしれないが」

「まさかこれが？」

「可能性だけど……二人ともこれ、いつも着けてた？」

二人はそう問われて少し考えた。

「そういえば、最近はずっと着けているな」

「俺も。なんかこれ着けると気分が爽やかかつつーか、涼しくなるような気がするんだよな」

そつか、と頷きながらアーシャは石を掌で転がした。風の石だからそういう事もあるのかもしれない。

彼らがいつもこれを身に着けているとなると益々異変の原因である可能性は高い。

そうなれば後は試してみるのが早い。

アーシャがあの場合で求めると告げたのは絆だ。けれどそれは随分と漠然としているように思われた。

だから彼女には何も変化がないのか、それとも気づかないだけなのか。

だが絆なら危険は少ないかもしれない、とアーシャは軽く考えた。まあ何とかなるか、と覚悟を決め、それがどんな現象を象徴するのか分からないまま、アーシャは石を握りなおして小さく呟いた。

「求めるは……絆」

キイイイン！！

「ッ!？」

次の瞬間、アーシャの頭の中に激しい耳鳴りと共に何かが入り込んできた。

思わず頭を抑えたがその流入は止まらない。

何が、と思う間もなく自分の思考がそれに侵食されていく。

少女の頭の中に響き渡ったのは、溢れるほどの”声”だった。

それはまるで衝撃すら感じるような、頭が割れるのではないかと
思うほどの量の、音を持たないはずの声の波。

様々な精霊の声がいつもよりも遥かに強く聞こえる。

上空を行く渡り鳥達が交わす声が聞こえる。

川の兩岸に揺れる木々が囁く声が聞こえる。

その向こうの草原を走る動物達の声が聞こえる。

水の中を泳ぐ魚達の意味にもならぬ声のようなものが聞こえる。

そして何よりも大きく、この船に乗る人間達の聞こえないはずの
声がアーシャの耳を埋め尽くす。

余りにも多くの声が一度に押し寄せ、一瞬何も聞こえていないか
のような錯覚すら起しそうになる。

その中にほんの一瞬、船酔いも良くなったしお腹が空いたな、と
呟く馴染み深い声を聞いたような気がしたがそれが現実なのかも分
からない。

「やあっ!」

アーシャは堪らず短い悲鳴をあげ、耳を押さえつづりくまっていた。けれど耳ではないところを通して聞こえる声はその手では何一つ遮れない。

自分と他人の境界線が薄れていくような感覚にアーシャは恐怖を覚えた。

この声を止めなければ、と意識のどこかが囁く。けれどその方法を思いつく事も出来ない。

「アーシャ!?」

「アルシエレイア、どうした!」

目の前の二人が発した直接の声とは別に、その心の動きが音としてアーシャに瞬時に届いた。

彼女を強く心配している思い、そして突然の事態に対する不審、困惑。それから少しの恐怖と、解決策の模索。

彼らが発する自分を心配してくれている声と、それでも冷静さを失わない心は薄れ掛けていた少女の意識を現実にし少し引き戻した。

アーシャは耳を塞いでも消えない声に喘ぎながら、意思の力を総動員して右手を耳から離してその手をゆるゆると開き、握ったままだった石をぼとり、と手放した。

カシャン、と硬い音がその場に響く。

途端全ての声が掻き消えた。

だがアーシャはまだ頭の中に声が聞こえる気がして、うずくまっていたまま荒い息を繰り返した。

「だ、大丈夫かよ! くっそ、この船に医者つて乗ってたっけ!？」

「医者は常駐してないはずだ、どこか川岸にある村か町に行かないと……」

アーシャは慌てる二人の声を聞きながらどうにか息を少しだけ整えた。

そして重い体をゆっくりと傾け、その場にころりと転がって彼らを見上げる。

ディーンもジェイもひどく心配そうな顔で少女の顔を覗き込んだ。アーシャは二人に小さく手を振って平気だと示した。

「だいじょうぶ。ちょっと、びっくりした、だけ……もう平気だよ」

「アーシャ……けどすげー汗だけ？ほんとに大丈夫かよ」

「顔色も良くない。一体何があった？」

アーシャは額の汗を拭い、まだ荒い息の合間からゆっくりとその問いに答えた。

「なんか、色んな生き物の声が……声なき声、みたいなのが、一度に聞こえて、頭が割れそうだった。

この船に乗る人達とか、鳥とか魚とか、木とか……私が普段聞いている精霊の声もすごく強く聞こえたし……二人が私を心配してる心みたいなのも聞こえた、みたい」

その言葉に思わず二人は顔を見合わせた。

アーシャはそれを見ながらどうにか半身を起すと後ろの樽にゆっくりと寄りかかり、疲れきったように足を伸ばした。

時間にしたら恐らくほんの短い間の事だっただろうに、よほど体が驚いたのか手足が軽く震えていた。

震えをなだめようと手を擦ったがその指先も驚くほど冷たかった。

「……まだ良くわかんないけど、もしかしたら今は……あのグリ

フォンが使ってた心話とか、そういうのなのかも。その範囲をすくく広げたっていう感じだった」

「じゃあ、やっぱり俺達の変化もコイツが原因？」

ジェイが自分の腰についた緑の石を恐る恐る指差した。

アーシャは弱く頷く。

「多分。二人があそこで、求めると告げたもの……真実と、強さだよな。」

ジェイのそれはそう考えると一番分かりやすいし、ディーンのもそれを象徴する現象が起こってるんだと思う。シャルのはまだわからないけど……」

「……なるほど。確かに、納得できなくもないな」

「さっきのアーシャみたいに、言葉を告げたらもつと強くなるのかな？」

うう、とアーシャは呻いた。さっきのひどい衝撃を思い出したらしい。

それを振り払うように小さく頭を振る。

「多分……私のは、さっきのが一番強い状態だと思う。」

あれと同じのはもう絶対嫌だけど……でもあらかじめ分かってれば、慎重にやればコントロールできると思う。」

けど今ここで試すのは止めた方がいいと思うけど」

「……そうだな、とりあえず原因が分かっただけでも何よりだ。これを体から離せば一時的な進行は止まると思うか？」

「うん、きつと。私も、さっきのは手を離したら止まったし」

ディーンはそれを聞いて頷くと、床に落ちたままのアーシャの石を拾い上げた。

「これは私が預かるう。しばらく触らない方が良さそうだ。荷物の奥にでも入れておく」

「そうだな、アーシャもその様子じゃちょっと休んだ方が良さそうだしな」

ジェイは右腕を伸ばすとぐったりしているアーシャの体をひよいとその腕に抱え上げた。

元から細くて軽いアーシャの体は今のジェイなら朝持った荷物よりも軽く感じるくらいだ。

「とりあえず、日陰に入ろうな。汗もかいてるしここじゃ体に悪い」

子供のように抱え上げられたアーシャはジェイの気遣いをありがたく受け取り、その肩に寄りかかってため息を吐いた。

「私の、絆だなんて……こんなおまけ、あんまりいらないよ。もっと違うこと言えばよかったかな……」

「使いようによっては役に立つかもしれない。嫌になったらその時は持ち歩くのを止めたらいい」

「そうそう。まだわかんないって。何か役に立ちそうな事とか聞こえなかったのか？」

「……そういえば、シャルが起きてお腹を空かせてたような気がする」

ぷっ、とジェイは吹き出し、明るく笑って歩き出した。

「そりゃ急がなきゃな、腹を空かせて火を吹かれたら困るしな！」

部屋に戻ると案の定お腹を空かせたシャルが、簡単な食事の準備をして仲間達を待っていた。

「あら、丁度良かったわ、今呼びに行こうと思っていたのよ」

三人はそれを聞いてこっそりと目配せして笑顔を交わした。

「お昼にしようと思って……ってアーシャ、どうしたの!？」

「色々あってな。とりあえず水を飲ませてやってくれ」

「わかったわ、ほら、ジエイこっちに座らせてあげて!」

「おう」

シャルはぐったりとして抱えられてきたアーシャに、すぐに水を用意してくれた。

カップに注いだ水の上に手をかざし、その水からそっと熱を奪う。火の魔法の簡単な応用だ。

「はい、アーシャ。冷たくしたわよ」

「ありがとう……」

シャルが冷やしてくれた水を飲み、切ってくれた甘い果物を少しだけ食べ、皆が食事を終える頃にはアーシャの具合も大分回復していた。

気分が良くなった事を伝えると三人もほっとした様子を見せた。けれど気分が良くなると今度は疲れがじわじわと強烈な眠気に変わり、段々と起きているのが辛くなる。

皆に休む事を勧められ、石に対するシャルへの説明はディーンとジエイに任せ、アーシャは急速に重くなった体をハンモックに沈め

て深く息を吐いた。

(さっき聞こえたシャルの声、当たってたのか……離れてても仲間の事がわかるなら……使いこなせば、助かる事もあるかもだけど)

けれどさっき聞こえた人間達の思いのようなものの鋭さがアーシヤの気分を暗くする。

あんなものばかり聞こえるんだとしたら、良い事より悪い事の方が多い気がした。

本当にとんだおまけ付きだ、と少しだけ恨めしく思ってしまう。

それでもとりあえず、森へ行ったらこの石を手懐けるのに時間を使ってみよう、とアーシヤは心を決めて目を瞑った。

瞼の裏に一瞬見えた緑の石は、まるでそれに応えるようにゆらゆらと揺れていた。

9：夏の満ちる森で

夏の森は明るい色と賑やかな音に満ちている。

木々の間からは光が零れ、地面を照らすそれは風の音に合わせてゆらゆらと揺れる。

森の中のどこに行っても夏を歌う蝉や鳥達の声が迎えてくれる。

夏であってもこの森の中はひんやりと涼しく心地いい。

特に、高原地帯と言ってもいい場所にあるアウレスーラを囲む森は避暑には最適の気候だった。

その代わりに当然冬は厳しい。

だが今はその冬を記憶から呼び出そうとしても難しいほど、緑の森は美しい季節だ。

「いくわよー！」

「おう！」

「がんばってー！」

賑やかな鳥や蝉の声を遮るように、木々の間に明るい声が響き渡った。

アーシャはログハウスの脇に据えられた木陰のベンチに座り、目の前の広場に立つシャルに応援の意味を込めて手を振った。

ジェイはそのシャルから少し離れた所にしゃがみ、立っているシャルをじっと見つめていた。

ぐっと拳を握り真剣な顔で立つシャルは、彼女にしては珍しい動きやすいパンツスタイルだ。

シンプルな半そでのワンピースを着たその姿は何故かいつもより一回り大きく見える。

それもそのはず、その細い背中からは、なんと彼女の背丈よりも大きな一對の翼が生えていた。

それは以前どこかで見たように真っ白で、けれど先の方だけがほんのりと赤い。

バサ、と音を立てて翼が開いた。彼女の周りに大きく風が起こる。強い羽ばたきによって、ふわり、とその体が浮き上がった。

バサバサと翼を大きく広げ、両手でバランスを取りながらシャルはゆっくりと上を目指す。

翼の長さは片方だけでもシャルの背丈を三割増したくらいだ。

だがそれでも普通に考えたら彼女の体を浮かせるためには全然長さが足りないはずだ。

なのにああして浮かぶのだから、やはり何か不可思議な力が働いているのだろう。

見た目には魔法を使っているように見えないのが不思議だった。

アーシャがそんな事を考えながら見ていると、シャルは自分の背の倍の高さくらいまで上がったところで、不意にバランスを崩して空中でよろめいた。

それを見てジェイが慌てて立ち上がり即座に駆け寄る。

「きゃっ！」

「シャル！」

どさ、ぐえ、とおかしな音がして、シャルは彼女を受け止めようとしたジェイの上へ落下した。

「シャル、大丈夫？」

「いたた……うん、何とかね……あーあ、また失敗か。やっぱり滑空するのと違って地面から飛び立つのは難しいわね」

「そつか……飛び立つ時に風の魔法で補助したらどうかな？下から巻き上げる感じで」

「いい考えだけど、それだとかえってバランス崩して目を回さないかしら？」

「……それはいいからとりあえずどいてくれえ」

シャルの下からジェイの悲痛な声が小さく上がる。

あら、とシャルは今気づいたかのように咳き、ようやくジェイの上から降りて立ち上がった。

「開放を。一休みにするわ」

シャルの言葉に反応して背中 of 翼がふつと掻き消える。

うーん、と一つ伸びをすると、シャルも木陰に入ってベンチに座った。

「練習楽しそうだね、シャル」

「そりゃあね。せつかくの贈り物だもの、有効活用しなきゃ。

最初に使った時は最悪な気分だったけど、もう慣れたわ。

それに私のだけはまさか街や寮で練習するわけにいかないもの、ここにいるうちに頑張らなきゃ」

そう言っってシャルは自分の腰に下げた緑の石を見た。

それは勿論あの風の森でグリフォンに貰った聖霊石だった。

帰りの船を下りて数日後、四人は様々な準備を済ませてようやく森へとやってきていた。

四人が借りた学校所有のログハウスは古いものだが定期的に手入れがされているようで、最初こそ掃除に手間取ったが住み心地は悪くない。

アウレスーラ学園の夏期休暇は七月の終わりから九月の終わりまで。

休暇の開始早々に旅行に十日近くを費やしたが、まだまだ十分すぎるほどの日々が彼らには残されている。

だから当然四人が森に来てまず始めたのは休暇中の課題などではなく、その好奇心の追求だった。人が居ないこの場所はそれぞれの石に付いたおまけとやらの検証にはうつつつけだ。

けれど始めてみるとそれは思ったよりも大変な作業だった。

中でも特に大騒ぎだったのはシャルだった。

シャルが初めて石を使った時のことを思い出すとアーシャは今でも少し笑ってしまう。

あの日も今日と同じく良い天気だった。

「じゃあ、あの石板に告げた言葉を言えばいいのね？」

「うん、そうみたい。適当でいいから試してみて。危なそうだったらずくに石を離してね」

シャルが求めたのは自由。

それがどんな現象を起こすかは分からないが、自分のようにひどい事にはなるまいとアーシャは考えていた。

何かあっても石を手放せば元に戻るようだから余り心配しても始まらない。

シャルもそれに納得して頷いた。

「じゃあいくわよ」
「おう」

ログハウスの前の小さな広場の真ん中で、シャルは周りを囲む仲間達をぐるりと見回してから右手に石を握った。

誰もが少しの緊張と共にシャルを見つめる中、シャルは高く声を上げた。

「我は自由を求める！」

次の瞬間、その周囲に風が起こった。

ぶわ、とシャルの回りの空気が膨れ上がる。

「キヤツ！」

シャルを中心に巻き起こった突風はぐるりと渦を巻く。

飛ばされるほどの風ではないが、巻き上げられた草や砂がびしびしと顔や体に当たる。

四人はそれらを避けるように目を閉じて腕で顔を覆ったが、風が吹いたのはほんの短い間だった。

風が唐突に止んだ事に気づいたシャルはそつと目を開けた。

目の前に立った三人も目を開いて辺りを確認しているのが見える。それ以外はさつきと変わらない風景が広がるだけで、自分にも何も変化はない。

シャルは何も起こらなかった事を確かめると、少しがっかりしながら仲間達に大丈夫かと問いかけようとした。

だがその問いは先に彼らによって遮られてしまった。

「……シャル」

「え？」

アーシャはぽかんとシャルを見ている。

アーシャだけではない、ジェイも、ディーンすら目を見開いて彼女の方を見ていた。

シャルはその視線を受けて自分の体を見下ろしたがやはり何も変わつた所はない。

訝しげに顔を上げると三人の視線が向かう先は自分ではなくその少し上、どうやら彼女の後ろもしくは背中を向いていることに気づいた。

シャルは振り向いた。だが後ろには何も無い。

しかし、視界におかしな白い物が映つた。

「え？」

今度は体ごとではなく、首をぐっと回して後ろを見た。

その視界に入った白い物は彼女の背中にぴったりと沿うように存在しているらしく、上から下まで見下ろすその動きに従ってそれも上下する。根元はどうやら彼女の背中に張り付いているらしい。

そう、それは、まさしく。

「は……羽？」

「うん……翼、だね」

「すげ……」

「……」

ぐるりと首を反対側に回すとやはり同じように白い翼が目に入る。その意味する所は一つしかない。

彼女の背中に、一對の翼が生えている。

しかも、あの森で会ったグリフォンと同じような、白い翼。

シャルは鏡がなくて見る事の出来ない自分の今の姿を想像した。

その想像が脳内で形になった時、彼女はピシリと固まった。

「シャル？」

立ち尽くしたまま動かない彼女にアーシャが訝しげに声をかける。

「……い」

「ん？」

「いつやあああああ……！！！！」

ブン！と風を切る音がして、何かがすごい勢いでシャルの手から飛んだ。

「うわあ！」

自分の方へ飛んできたそれをジェイが素晴らしい反射神経で受け止める。

それはシャルが握っていた聖霊石だった。

石を手放した事でシャルの背中の中もスツと空気に溶けるように消えた。

「ちよ、お前、石投げるなって！この罰当たり！！」

「うっさいわね！なんなのよ今の！！聞いてないわよ！何で羽が生えるのよ！！」

シャルは大声で叫ぶと頭を抱えてしゃがみこんだ。

「何なのよもうー！！何あれ！いやー！！」

「え、シャル、羽が嫌いななの？鳥が苦手、とか？」

アーシャはシャルの激昂ぶりに驚いていた。
少女はむしろ格好よくていいな、とちよつと思っていたのでその
シャルの嫌がり方が理解できない。

「か、かつこいいと思うよ？綺麗だったし……」

「そうそう、悪くなかったって！何がそんなに嫌なんだよ？」

「……何が嫌ってねえ」

頭を抱えたままだったシャルは二人の言葉に小さく呻くと、キツ
と顔を上げた。

「キャラじゃないのよ……!!」

「……へ？」

「……キャラ？」

「……確かに」

ぼそりと呟いたディーンをシャルは一瞬睨みつけた。

だがそれには納得するところが合ったらしい。

「そつよ！どう考えても私はこういうのが似合うタイプじゃないで
しょ……？」

「こついうのはもっと可愛いくってふわつとした感じの、いかにも
回復魔法が得意でえす、みたいな子がつければいいのよ……！」

「そつじゃなきゃいつそジェイみたいなキンキラ頭がつけるべきな
の……！」

「私はこつ見えてもそれなりに自分を知ってるの……！」

「なるほど、己を良く知る素晴らしい意見だ」

捲くし立てるシャルの言葉にアーシャもジェイもぽかんとする他
ない。

ディーンだけがそれに同意を示してパチパチとやる気のない拍手を送っていた。

「それなのにこんなの、恥ずかしいっいたらないじゃないの！
せめて赤とかならまだしもよりもよって白！純白！
いつそ黒の方がまだマシよ！あーもう絶対嫌あー！」

どうやら良くわからないがシャルにはシャルの美学のようなものがあるらしい、とアーシャは理解した。

似合っていたと思うが彼女には何か耐え難い地雷のような物だったらしい。

「で、でも、見かけは問題じゃないよ。翼が生えたって事は空を飛べるかもって事だよ？すごいよ！」

「すごくても嫌なのー！」
「わっがままだなあ……お前そんな性格でも結構可愛い物好きなくせに、喜んだらいいのに」

「可愛い物は好きだけどそれがあんな派手に人目に付くなら別なのよ！」

あーもう自由って言ってもこれじゃいやー！」

「……自由というのが幽体離脱などでなかったただけかもしれませんと思うが」

ディーンの見解に他の二人も強く頷いたが、余りシャルの慰めにはならなかったらしい。

人に見られたら恥ずかしくすぎて死ぬ！と騒ぐシャルを宥めるのは大変だった。

結局その日はそれ以上の説得は諦め、シャルの気分が回復するのに任せる事にして終了した。

与えられた物は最大限に活用する主義の彼女の事だから、諦めが付けばすぐに気を取り直すだろうと判断したのだ。

そしてそれから数日後、三人の予想通り今はこうして熱心に飛ぶ練習をするシャルの姿が見られるようになった。

背中の翼と自分とを意識の中で切り離し、自分の全体像を想像するような事は止めたらしい。絶対に鏡も見ないと言い張っていた。

何がそんなに嫌なのかアーシャにはやっぱり分からないが、シャルの翼は服を破つたりと言う事もしていないし、石の持つ力が実体化したのなら自分の意思を強く込めれば色が変わる可能性もある、と助言はした。

それ以来シャルは練習する度に赤をイメージしているらしく、ここ数日は羽の先がうつすらと赤く色づいてきている。

白い翼はすっきりしていて美しいと思うが赤いのもきつと似合うだろう。

技術的にはシャルは既に少し高い場所からの滑空をマスターし、地面から飛び立つ練習へと移行している。

地面から飛び立つのはなかなか難しいようだがシャルはそれも楽しんでるように見える。

シャルが求めた自由を象徴するグリフォンの翼を、彼女はいずれ思いのままに使いこなせるようになるだろう。

アーシャはシャルのその前向きな姿勢が少し羨ましい。

「ところでそろそろお昼だけど、ディーンは？またどこかに登ってるの？」

「んと、今日は山に登ってどこまで見えるか試してくるって言うってたよ。そろそろ帰ってくるんじゃないかと思うけど……ちょっと待

ってね」

アーシャは腰に下げた自分の石を取り出した。
石を手の平に乗せ、それを使う前に意識して心を閉じた。
他の意思が自分に伝わらないように、自分の心の中にある小さな
窓をパタリと閉める。

あくまでそう意識するだけの事だが、それによっていつも聞こえ
ている小さな精霊達の声も遠のく。
それからやっと言葉を使う。

「我求めるは その絆」

ぼ、と緑の石に光が灯った。手に石を握りこむと、この山と森の
全景がおぼろげに頭に浮かぶ。

ディーンのことを考えるとその森の一箇所がチカ、と光った。

(ディーン)

その光に向かって胸の内で呼びかける。

頭の中で話しかけるように使うそれは、精霊に意思を向ける時と
同じだから難しくはない。

しばらくすると同じように返事が届いた。

(アルシエレイアか?)

(うん、帰るのにあとのくらいかかるかと思って)

(もう少しだな。直に着く)

わかった、と意思を送ってアーシャは意識を反らした。そうする
ことで繋がりはすぐに消える。

「今森まで降りてきてたよ。もうすぐ着くって」
「そう。じゃあそろそろお昼の用意しようかしらね？」
「えっ、二人が用意すんの？」
「何よ。何か文句あるの？」
「いえ、ないです……」

シャルにすごまれてジェイはそそくさとアーシャの後ろに隠れた。シャルの料理はまずくはないが出来上がるのがとても遅い。だからこの森に来てからの食事の担当はやはりほとんどがディーンで、他の三人がそれを手伝うようにしていた。今からだと二時間はかかるかな、と覚悟をしたジェイにアーシャが笑って首を振った。

「ジェイ、あのね、ディーンが朝お弁当作ってくれてたよ。地下の食料庫で冷やしてあるの」
「おっ、まじ！？やった！」
「そうよ、良かったわねー？だからあんたが、中から机とか皿とかの道具をここに運んでくるのよ！」

げえ、とジェイは叫んだがシャルに追い立てられて慌ててログハウスの中に走っていった。

アーシャはいつものようにそれを見送り、それからやっと閉じていた自分の中の窓を元通りに開いた。

精霊達の声がまた近くなる。
アーシャは深いため息を吐いた。

アーシャにとってこの石は、使う練習をし始めてからも相変わらずとても扱い辛い代物だった。

元々アーシャは聞くという能力には長けている。

意識しなくても精霊の声が聞こえているのだから、改めてそれが聞こえても別に嬉しくもない。

その代わり、この石の力を知ってから精霊達に自分の意思を伝えるのがよいたやすくなっただと感じていた。

自分がして欲しい事を強く考えて放たなくても、古代語で語り掛けなくても彼らに意思が通じるのだ。

「……絆、かぁ」

小さく呟いた声を耳にしたシャルがアーシャの顔を覗き込んだ。

「やっぱりそれ使うの、嫌？」

最近アーシャは石を使う度に少しだけ憂鬱そうな顔を見せる。

それを知っているシャルはアーシャに問いかけた。

「嫌って言う訳じゃないけど……」

精霊達との絆がより一層深くなった事はとても嬉しい。

その他には、動物ともある程度意思の疎通が出来るようになったことは確かめた。

気が立ってない動物で、その姿がアーシャから見えるくらいの距離にいるなら、かなりの成功率で意思を伝えて傍に来てもらったりすることが出来る。それも嬉しい。

けれどその対象が人になるとアーシャは途端にしり込みしてしまふ。

「でもアーシャの石の力、便利だと思っわよ？私のと違って人前でもそれと分からずに使えるし、仲間とはぐれても安心なもの」

「ん……けど、これ街で使うのやだな」

あの船での一件はアーシャには本当にきつかった。
アーシャに聞こえるのは、その人の心全てという訳ではない。
その人が強く考え、無意識で外に向けている思いだけがアーシャに届くのだ。それは何度か試して理解できた。

けれどそれだけでも少女には恐ろしい。

あの船で一度に押し寄せたそれらは何がなんだか分からない声が大半だったけれど、その中に混じっていた悪意や悲しみに満ちた幾つかの音がアーシャの心を今でも怯えさせている。

自分の内でひっそりと思うだけに留まらず、外に向けて激しく発せられている負の感情はまるで鋭い刃物のようだった。

あんなものがまた聞こえたら、と思うとアーシャは人に対して心を開く気にはならない。

だから使う前にきつちりと自分の心を閉じ、仲間の声すらも無意識な物はうっかり聞いてしまわないように気を配って使っている。

まだこうして仲間達に意識を絞って連絡を取る以上の使い方をしたこともない。

もつとも、他人の心の声を聞いてまで知りたい事は何一つないし、仲間達以外に話しかけたい事もないのでアーシャはそれでいいと思っていた。

「それに、皆の心が聞こえるのって、マナーっていうか、なんかルール違反て感じがするし」

「あら、私は別に聞かれて困るような事思っていないから平気よ」

「お前は思った端から口にするからだろ」

会話が聞こえていたのだろう、ログハウスから出てきたジェイがシャルに突っ込みを入れた。

「うるさいわよ、あんただって同じでしょ！私は陰口とか腹に一物とか大っ嫌いなもの！」

口は悪くても腹は白い、というのがシャルが誇る方針だ。

「ま、それには同意するけどな。俺もどうせ腹減ったなあくらいの事しか考えないから別に平気だぜ、アーシャ」

「……ん、ありがと」

ジェイは笑いながら右手一本で運んできた大きな木のテーブルをベンチの傍に置いた。

「ったく、重い物つていうと全部俺かよー」

「当然でしょ、力を貰ったんだから。良かったわね、役に立って！」

ジェイはぶつぶつ言いながらも更に素朴な木の椅子二つを中から運び出してきた。

二つ一度に右手にぶら下げて軽々と木陰に運び、ベンチと向かい合うようにテーブルと椅子を並べる。

この強い力がジェイの貰った聖霊石のおまけだ。

体の一部にグリフォンの獅子の力を宿す事が出来るらしい。

利き手の使いやすさか主に右手に宿っているが、意識すれば左手に分散する事も少し出来るようになったと言っていた。

本当はアーシャ達が座っているこのベンチは元は一对になっていた、その傍に分厚い木の板と丸太で作ったテーブルがあったのだが、ジェイが石の力を呼び出した時にそれを試そうとして持ち上げ加減を間違えて壊してしまったのだ。

ベンチの一つは真つ二つになり、テーブルは足が折れてしまった。

だからジェイは今もつばら力の制御の訓練をしている。

アーシャの見立てではテーブルの方は修理が出来そうだったがベンはそうは行かない。

近いうちに街の資材屋に行つて木材を買い、テーブルの修理と新しいベンチの制作をしないといけないだろう。

借りたものは元通りにして返さなければもう貸してもらえなくなってしまう。

そんな事をアーシャが考えていると、足元の小さな草木の精霊がアーシャに声をかけた。

「あ、ディーン来るよ」

「お、じゃあ弁当取ってくる」

見れば広場の向こうからディーンが歩いてくる所だった。

ジェイは小屋の中に入り、地下に作られたひんやりした食料庫から大きな籠をとって戻ってきた。

「おかえり」

「ああ、ただいま」

「ちようど良かったわね」

ディーンが椅子に座ると四人はそれぞれ籠の中の料理を手分けして取り出し、冷やしたお茶をコップに注いでランチタイムを始めた。何種類かのサンドイッチに野草のサラダ、冷たくした野菜のスープ、それにチーズやピクルスが並ぶ。ちよつとしたご馳走だ。

育ち盛りの子供たちはそれぞれ勢い良く料理を口に運びながら午前の成果を話し合った。

「んで、デーンどうだった？」

「ああ、山の上から数km先の草原を走るウサギが見えたぞ」

「すごいね。ほんとに驚並みなんだ。」

自分の意思で聖霊石の力を使うようになってからデーンの視力も落ち着いている。

丁度いいくらいのところまで視力を調整して落とす事も可能になったようだし、少しずつ何を見るかの切り替えもできるようになってきているらしい。

薄ぼんやりした姿だが時々精霊まで見えるようになったらしく、自分と同じ物が見える人がいるというのはアーシャにとって少し嬉しい出来事だった。

「だが見えない物を見る時の細かい切り替えの方は相変わらず困っているな。時には人の顔まで見えないというのはちよつと、な」

「何で見えなくなるんだ？」

「その人の持つ魔力っていうか……気みたいなのが被さって見えるから顔が良く見えなくなるんだよ」

同じ経験をしているアーシャがジェイに説明する。

「そういうのが強い人がいると、周りの弱い人なんか幽霊みたいに存在感が薄く見えるしね」

「それはちよつと困るわね」

「最近アルシエレイアが人の名前と顔を覚えられない理由が分かるようになってきた」

目に見える物と見えない物の両方を見てみると、実は目を引くのは断然見えない物の方だ。

色鮮やかにちらちらと舞い飛ぶ精霊や、あちこちにひっそりと掛

けられている魔法の痕跡、人が色で示す気や感情の波のようなもの……それらはどれも目を奪われるには十分過ぎる光景だ。

それらを見てみると、今さっきまで話をしてきた人間の顔も忘れてしまうアーシャの気持ちやディーンにも少し分かる。

アーシャはうん、と頷いてため息を吐いた。

「印象の薄い人なんて皆一緒に見えるよ。特に魔技科の人間なんてどれもこれもなんか覇気がなくなってる薄ぼんやりしてて、区別のつけようがない」

「それでクラスメイトも覚えていなかったのか」

「じつと見れば顔も分かるしどうにかそれなりに区別はつくけど、別に興味ないから」

「俺達はすぐ憶えられたのか？」

ジェイの問いにアーシャは頷いた。

「だって三人ともすごくはつきりしてたもん。気も鮮やかな色してたけど、それに負けないくらい意志がはつきりしてた。あれなら忘れようがないよ」

だからこそアーシャは初めて会った彼らを面白いと思ったのだ。

「ねえ、じゃあコーネリアみたいなのはどつなの？あれも相当はつきりしてたと思うけど」

コーネリア、という単語をしばらく考えて、アーシャはああ、と頷いた。やはりまた忘れられかけている。

「あの人はあの変な頭の印象はすごく強かったけどその他は人よりちょっと強い程度で普通の範囲内かな。」

そこらにたまに在る貴族出身の学生と同じで、高慢そうな顔が曇って良く見えなかったし」

だから頭だけしか憶えられなかったの、というアーシャの説明にシャルは笑い転げた。

「すつごく良くわかる気がするわ！」

あの連中、この前買出しに行った時に中央広場の草むしりしてるの見かけたわよ。あれで少しは性格が矯正されるといいわね」

シャルはコーネリアのいかにも不満たらたらその姿を見かけて笑いを噛み殺したが、せめてもの情けとその時は声はかけないで置いてやった。

奉仕活動の一環だろうが真夏の草むしりはさぞ体力を使うに違いない。

夏期休暇が終わってもしまった噛み付いてきたら日焼けした姿を笑ってやるうとシャルは密かに思っていた。

「なんにせよこればかりは夏期休暇が終わる前にもう少しものにしておかなければ街中では使えないな」

「アウレスーラは他の街よりも見える物が多いからね。がんばってね、デーン」

「ああ」

返事をするときデーンはカップの中身を飲み干して立ち上がった。デーンとジェイは午後はいつも軽く体を動かす予定にしていた。ジェイには石の力を抑えながら適度に扱う為の良い訓練になるし、デーンにとっては力が強くなったジェイと立ち会うのはなかなか面白い。

ジェイの拳は鍛錬用に持って来ていた刃のない剣を折ってしまう

ほどの力なのだ。

今はアーシャに作ってもらったかなり強化した木の剣を使っているがそれも時々折られてしまうので油断がならない。元々速さで押すタイプのジエイが、力もつけたとなるとなかなかの強敵だった。

「おっし、後片付けしたらやるか」

「ああ」

「じゃあ私は午後はここで課題でもやってるわ。あんまりうるさくしないでね」

「へいへい。アーシャは？」

「んー、作りかけの魔具の仕上げ、かな。部屋にいるよ。」

夕飯の支度手伝うから声かけてね」

「ああ、わかった」

四人は手分けして後片付けを済ませるとそれぞれの目的の為に散っていった。

彼らは一緒にいても無理に行動を同じくしたりすることはない。

それぞれが自分のしたい事をし、それでいいとお互いを認めている。

この距離感が彼らには気持ちいい。

共に居ても個であることを尊重するからこそその心地良い空気がここにはある。

彼らはその空気を何より大事に思っていた。

子供達の夏の休暇はこうしてゆっくりと気持ちよく過ぎて行った。

10：祝福の言葉

「えー、それでは、二人の誕生日を祝しまして、カンパニー！誕生日おめでとー！」

「おめでとー、二人とも」

「ありがとう！」

「あ、ありがとう……」

カツン、と木のコップが打ち合わされ、中のジュースが揺れる。

九月も半ばの爽やかな日、シャルの宣言通りに開催された二人の誕生日祝いの宴は賑やかに始まった。

シャルの誕生日は八月の最後の日だったが、課題を終わらせて憂いなくやりたいという彼女の意見を取り入れ夏休みの終わりの打ち上げを兼ねてという形になっている。

参加者はいつもの四人だけで、毎年のように彼女の友人達が沢山来ると言う事はなかったが、シャルはそれでもとても嬉しそうだった。

外に据えられた大きなテーブルの上はディーンが作った様々な料理で溢れている。

外用のテーブルとベンチを修理し（アーシャに手伝って貰ったが）、材料の買出しや飾りつけに奔走したのはジェイだった。

アーシャも手伝おうとしたのだが、主賓は何もしちゃ駄目、とシャルに強く止められてここ数日少女は落ち着かない時間を過ごした。それでもこうして乾杯をし、料理を食べ始めると何となく気分も高揚してくる。

「ほら、アーシャ、まずは食べるのよ！」

シャルは楽しそうにアーシャの皿に次々と料理を盛ってくれた。

「お、多いよう」

「だーめ、大きくなるんでしょ！」

その言葉にアーシャはハツとし、フォークを握りなおして懸命に料理に挑みかかる。

それを見てジェイが大きな声で笑い、ディーンまでもが珍しく声を上げて笑った。

「ディーン、料理すごく美味しいよ、ありがとう」

「どういたしまして。腕を振るったかいがあるから沢山食べてくれ」

アーシャは頷いて料理を口に運んだ。

いつもよりもさらに手の込んだ料理はどれもとても美味しい。

「ほんとに、悔しいけど美味しいわよね。今年はディーンの料理が食べられて幸運だったわ」

「いつもは違うの？」

「ディーンが誰かの祝いに出るなんて事がそもそもないのよ。

私が呼んでも来ないし、ジェイのお祝いにだって始めに顔を出すくらいだし、祝ってやるって言っても嫌がるし。明日は大雪よ、きつと」

ディーンはその言葉に軽く肩をすくめて応えた。

「こうして共同生活をしているのに断るような事はしない。

そもそもシャル、君が開くパーティは男には難易度が高い事を自覚した方が良い」

「……確かに」

ジェイは呟いて強く頷いた。

毎年、女子寮の一室や街中の可愛らしい喫茶店の一角で行われる彼女の誕生日パーティはジェイもとても行き辛い。

女子寮となれば入寮許可を取ったりと色々大変だし尚更だ。

しかも招待客のほとんどが当然女子ばかりなのだ。

思い切り肩身の狭い思いをするのは分かっているが、行かなければ後が恐ろしい。

新学期が始まる頃に催されるそれはジェイにとっては一年に一回の、ある意味試練の日だった。

毎回何度もディーンを誘うのだが彼は祝いの言葉をジェイに託すだけで、連れ出せた事は一度もなかった。

「あら、可愛い女の子に囲まれてるんだから少しは喜べばいいのに」

「喜んだら喜んだで、鼻の下伸ばしてサイテーとか、勘違いしてんじゃないわよとか言うのはどこのどいつだ」

「あら、誰がそんなこと言ったのかしら？」

シャルはしれつととぼけ、アーシャはそのやりとりにくすくす笑う。

「ジェイの誕生日はどんななの？」

「あー、俺のは五月の初めだけど、逆に野郎ばっかだな。同じクラスのが多いからさ」

「馬鹿の集まりだからアーシャは行かない方が良いわよ。ジェイと同じクラスの馬鹿ばかりが集まって獣みたいに料理をがつついて一段楽したら変な余興をやるの。季節先取り水泳勝負だとか、片手腕立て伏せ勝負とか、学部一周鬼ごっこだとか」

「シャルやディーンも参加するの？」

「まさか！ディーンなんてそれが嫌だからすぐ姿を消すのよ」

ディーンは黙って頷いた。

「ちなみにシャルはその余興を傍観して、いつも最後にはぶっ潰してうやむやにして俺を勝たせてくれて終わるんだぜ」

ジェイはそれを思い出したのかげらげらと楽しそうに笑いながら言った。

シャルはツンと澄ました顔で当たり前だというように頷いた。

「誕生日なんだから主賓に花を持たせるのが当然でしょ」

シャルは毎年それと同じ事を言いながら、プールのお湯に泳いでいる連中を追い出したり、腕立て伏せをしている人間の上を踏みつけて歩いたり、走って逃げる連中を地の魔法で捕縛して一網打尽にしたりするのでジェイの友人達から悪魔のように恐れられ、ついでにちよつと待ち望まれている。

彼女の存在は恐ろしいが刺激的で、何となく病みつきになるらしい。

「でも来年はアーシャが来てくれたら私が女子一人にならなくて良いから嬉しいかもしれないわね。そしたら二人で馬鹿共にお灸を据えましょうね」

「……あまり変な事を教えるな」

ディーンが静かに抗議したがそれはシャルに黙殺された。

アーシャは武術学部に一度も足を踏み入れた事がないのでその雰囲気も良くわからない。

でも何となく楽しそうだと言う事だけは分かったから素直に頷いた。

やがて料理をひとしきり食べ終わるとディーンはデザートを持ってきてくれた。

森で集めた木の実を混ぜて焼いたナッツのケーキにクリームと木苺を飾った可愛らしいお菓子だ。

見かけによらず甘い物好きで凝り性な彼は当然お菓子まで上手に作る。

アーシャもこの休暇の間に料理と一緒にお菓子も幾つか教えてもらったがまだ簡単な物しか作れない。

少女が尊敬の目でケーキを眺めていると、ディーンはそれをテーブルに置いて席に着いた。

「アーシャ」

不意にシャルが少女を呼んだ。

「うん？」

「ハイ、これ。私からアーシャへの贈り物」

そう言ってシャルは四角い包みを彼女に差し出した。

「食事の最後に、贈り物を渡すのが普通なの。だからはい、受け取って？」

「え、えっと……ありがとう」

アーシャは友人からの初めての贈り物をおずおずと受け取ってお礼を言った。

「じゃあ俺達からはこれ。二人で用意したから連名だな」

そう言ってジェイとディーンはテーブルの下に用意してあったらしい小さな包みをアーシャに渡した。

ディーンはもう一つ、別の小さな包みをシャルにも渡す。

「あの、ありがとう二人とも」

「ありがとうディーン。あんたから贈り物を貰うなんてやっぱり明日は雪ね」

シャルは笑いながらその包みをそつと開けた。

中からは小さな金の耳飾が出てきた。

ジェイからの贈り物の腕輪とお揃いの薄桃色の石が嵌っている。

「あら、素敵！やっぱりジェイと違って趣味も良いわねえ」

「ほつとけ！」

「一緒にされては困る」

ひでえ、とぶつぶつ言うジェイをくすくす笑いながらシャルはアーシャに贈り物を開けるように促した。

皆に勧められてアーシャはシャルのものから順番に包みを開ける。

「わあ……」

シャルの贈り物は可愛らしいワンピースだった。

薄い生成りの地の裾に、緑の濃淡で草花が描かれている生地はアーシャの雰囲気によく似合っている。

「レイアルで買った水の大陸の織物で作ってもらったの。服飾科の知り合いが居残りしてくれて良かったわ。ちょっと大きめにしてあるけど、脇についてるリボンを後ろで結んで調節してね」

アーシャは嬉しそうにそれを広げて眺めるとシャルに何度もお礼を言った。

次にジェイとディーンから貰った小さな包みを開けると、中からは箱が一つ出てきた。

アーシャはそつとその箱のふたを持ち上げ、そして動きを止めた。

「……これ」

中から出てきたのは、アーシャがレイアルで見た、あの金のヤドリギと草入り水晶のチョーカーだった。

「レイアルの店で随分気にしていたようだったから、帰り際に買って置いた。君は自分で作ると思うたが、作れるようになるまで一つくらい持っていて悪い事はない」

「……でも、これ、安くなかったのに」

「だから二人で連名だって言っただろう？それは俺達二人から。それなら大した金額じゃないさ」

きつとアーシャが値段を気にするだろうと思ってそうしたのだと言っ事を二人は告げなかった。

アーシャはそつとそれを手に取ると恐る恐る持ち上げた。

「アーシャ、貸してみて？」

シャルはそれを受け取るとさつとアーシャの首に掛けて金具を力チリと留める。

紐の短いチョーカーは少女の細い首にぴったりだった。

「うん、素敵。すごくよく似合うわー！」

「そうかな……似合うかはわかんないけど、ありがとう二人とも、すごく、嬉しい」

「どういたしまして」

「良いつてー!」

照れくさそうな笑顔を見せる少女に二人も笑顔を返す。

アーシャはもう一度首にかかったそれを見下ろした。

蔦を編みこんだ柔らかな帯が心地いい。石や細工に手を伸ばしかけたが、指紋が付くのが勿体無い気がしてそつと手を引つ込めた。

アーシャはしばらく胸元を眺めていたが、ハッと大事な事を思い出した。

「あ、私からの贈り物!あるの!」

そう言って少女は慌ててごそごそとテーブルの下から大きな布袋を取り出した。

シャルに贈る物が入っているにしては随分袋が大きい。

「あの、包装とかしてなくてごめん……そのままなんだ」

そう言って取り出されたのは臙脂色の洒落た肩掛けカバンだった。アーシャはそれをシャルに差し出した。

「はい、これ私からのプレゼント」

「わあ、ありがとう!あら、これって……もしかして?」

「うん、私と同じような、いっぱい物が入るカバンだよ。遅くなっちゃったけど」

「ありがとう!すごく嬉しいわ!」

シャルは歓声を上げてそれを早速肩に掛けた。

「後これもシャルに」

シャルがカバンの中を開けて沢山付いたポケットなどを確かめていると、アーシヤはもう一つ両手に丁度乗るくらいの箱を差し出した。

表面には赤い石が一つ嵌り、その周りに素朴ながら愛らしい草花の模様が彫り込まれている。

「小物入れ？」

「うん。んとね、シャルが沢山身に着けてる護符の類はたまに休ませて上げないと早く傷むでしょ。これに入れて置くと、回復が早くて長持ちするの」

箱のふたを開けると、中は護符を入れやすいような大きさにいくつかに区切られ、柔らかい布張りがされていた。

「それすつごく助かるわ！でもいいの、二つも？」

悪がるシャルにアーシヤは首を横に振り、ディーンとジェイに顔を向けた。

「カバンね、ディーンとジェイの分も作ったの。だからそれはどのみち誕生日じゃない贈り物だから」

そういうとアーシヤは薄い布袋から黒と茶色の色違いの革のカバンを出して二人に渡した。黒はディーン、茶色はジェイの物だ。

「え、俺達も!？」

アーシャはこくりと頷いた。

「ほんとは皆にもっと早く作ってあげたかったんだけど材料が足りなくてずつと作りかけだったの。レイアルで必要な物を色々買えたからやつと完成したんだ」

「それでレイアルに行きたかったのか」

うん、とアーシャは頷いた。

ストックしてある材料が切れたので学園にある材料店を覗いたら、試験の前後や休暇前は品薄になるらしく必要なものが買えなかったのだ。

だからアーシャは遠出を決めたのだが、レイアルでは学園よりもずっと安く良い物が買えたので三人のカバンは満足いく出来に仕上がっていた。

「私のとデザインが違うのね？」

「うん、二人は動く事が多いだろうから、荷物が邪魔にならないように丈夫で背中に張り付くような感じのを選んだの」

二人がそれぞれ背負ってみると、なるほど確かにそれは背中にぴったりと張り付く感覚だった。

厚みと長さのある長方体の上開きのカバンは体からはみ出さない幅なので腕を大きく振っても違和感がない。

背負うためのベルトには腰と胸の前で留める補助用のベルトも付いており、激しく動いても背負っていられる仕様になっているらしい。良かった。

「うっわ、これ助かるなあ！ありがとな、アーシャ！」

「本当に何より助かる。ありがとう」

「どういたしまして」

アーシャは笑顔で二人に応えた。
三人のカバンを作るのは少女にとっても楽しい作業だった。
仲間達一人一人に合わせてその体や動きに相応しい物になるように心を配って丁寧に作った。
誰かの為に作った物を、その人に喜んで使ってもらえるのはとても嬉しかった。

「よし、じゃあ贈り物も渡した所で、もう一度乾杯しましょ」

贈り物を皆が一通り確認した所で、シャルはそう告げると全員のコップにジュースを注ぎ足した。

アーシャがその言葉に不思議そうに首を傾げた。

「もう一度？」

「そう、最後に一番大事な乾杯をするのが風習なのよ」

「アーシャは知らないだろうから、アーシャからだな」

そういうと三人はそれぞれ自分のカップを持って高く掲げる。デイーンがアーシャに同じ事をするように促した。

「アルシエレイア、カップを前に」

「え、うん」

アーシャがカップを同じように掲げると、シャルが頷いた。

「じゃあ私がアーシャの隣に座ってるから、私からね」

シャルはそういってアーシャのカップに自分のカップをカツン、とぶつけた。

中のジュースがぱちゃん、と小さな音を立てる。

「アーシャ、あなたが生まれ、今日ここに居る事に感謝を」

次いでシャルの前に座っていたジェイが手を伸ばした。

「一年を健やかに過ごし、時を重ねた事に祝福を」

カツン、とまたカップがぶつかる。

最後にディーンが手を伸ばした。

「君の新しい一年が良き日々となるよう、祈りを」

もう一度カップがぶつかる音が響き、シャルがアーシャを促した。

「さ、アーシャ、飲んで」

「う、うん」

アーシャはカップに口を付けた。

こく、と喉を通るジュースは、さっきまでと同じものなのに不思議と味までが違う気がする。

二口、三口と飲んでからアーシャは顔を上げた。

「あの……ありがとう」

三人はその言葉ににこやかに笑った。

「じゃあ今度は私。ジェイから時計回りね」

「おう」

今度はシャルのための乾杯がぐるりと一回りする。
アーシャも見よう見まねでたどたどしくはあったが、シャルの新しい一年のために祈りを贈った。

「ふふ、ありがと！」

シャルも嬉しそうにカップの中身を飲み干した。

「……なんか、いいねこういつの」

「でしょう？」

「じゃあ次はディーンのしよっぜ。冬だけどさ」

ジェイの提案にディーンは嫌そうな顔をした。

「ディーンは冬生まれ？」

「そ。どう考えても夏って顔じゃないだろ」

「まあ見たまんまよね。ね、アーシャもまたこういうお祝いしたいわよねえ？」

シャルがにっこりと笑顔で問いかけるとアーシャは素直に頷きディーンを見た。

「……」

三人の視線が黙り込んだディーンへと向かう。

視線を受けたディーンはしばらく黙っていたが、やがて耐え切れなくなつたのか深いため息と共に手を上げて降参の意を示した。

「……出席者がこのメンバーだけだというなら」

「おおお、やった！じゃあ決まりな！」

「男に二言はないんだからね！」

ディーンは基礎学部の一年の時にたった一回だけ彼の誕生日祝いを催してくれた友人達に素直に付き合ったが、それっきり毎年誘いを全て頑なに断ってきている。

ジェイと仲間達が騒ぎすぎ、最後には全員が教師に怒られたと言う微妙な思い出があるせいだと言われているが、その彼が祝いを受け入れるなんて実に八年ぶりくらいの快拳だ。

「わかったわかった」

少々げんなりとしながらもディーンは頷いて立ち上がった。

お預けになっていたケーキを器用に切り分け配ってくれるのを皆が受け取る。

甘いものが苦手なジェイはごく薄い一切れを受け取って、後は三等分されていた。

美味しい料理を食べ、笑顔を交わして楽しい時間は賑やかに過ぎていった。

夜、アーシャは一人で外に出ていた。

夜の森は彼女にとっては優しい揺り籠で、恐ろしい場所ではない。今夜は月も明るく、大きな木の天辺近くに登るとそれらがさらに近くなる。

月明かりに照らされた夜の森はいつ見てもどこか神秘的だった。

風に乗って小さな虫達が懸命に歌う秋の歌が聞こえる。

アーシャは座った膝の上に今日三人から貰った贈り物を乗せていた。

大事そうにそつと手で触れる。

そして、空を仰いだ。

「……じいちゃん、あのね。今日……生まれた事、祝ってもらったんだ」

アーシャは今日初めて体験した出来事を空に向かって報告した。

「なんかちょっと……変な気分」

育ての親が誕生日を祝ってくれた事がなかったのは、単に彼にはそういう風習がなかっただけだ。

アーシャはそれをよく知っていたから別に不満には思っていない。けれどこうして初めて祝ってもらって、それは少し照れくさく、とても嬉しい出来事だということを知った。

「贈り物、貰ったんだよ」

思えば育ての親以外から、何か貰ったのは初めてののような気がする。グリフォンから貰った石もある意味贈り物だが、それとは少し違う。

自分がこの世に生まれ、ここに居る事を祝ってもらえた。

それは、何故か胸が痛くなるくらいに嬉しい。

「私……もう少し、ここに居てもいいんだね」

育ての親からの初めての贈り物はこの名前だった。彼は名前を贈る事でアーシャに存在の証をくれた。ここに居て良いと言ってくれた。そして今日、それを仲間達からも貰った気がした。

「初めて、じいちゃん以外とこんなに長く一緒に過ごしたよ」

彼からの返事は届かない。それでも、アーシャは静かに語りかけた。

「休暇、楽しかったんだ……」

森で一人で過ごした去年までの夏と、比べ物にならないくらい色鮮やかな毎日だった。

一人で居た日々が随分遠く思え、どうやって毎日を過ごしていたのか思い出すのも難しい。

「すごく、すごく楽しかった」

夏が終わらなければ良い、と思ったのも初めてだった。でもきつと、新学期も楽しいだろうと思える。

「少しは、子供らしくなれたかな」

今の自分を彼が見たら、喜んでくれただろうかと考えた。きつと、皺だらけの顔をもっとくしゃくしゃにして笑ってくれたことだろう。

歳を取った木のような優しい手で頭を撫でてくれた事だろう。

「……会わせたかったな」

アーシャは呟いて目を瞑った。

頬を撫でる風はひんやりと涼しく、直に夏が終わることを少女にそつと伝える。

もうすぐ夏が終わって秋が来る。

もう何日かしたらここを引き払って学園に帰り新学期の準備をしないといけないだろう。

長いような短いような夏の休暇は終わり、また授業が始まる。

そろそろ帰省していた生徒達もぼつぽつと戻ってくる頃だ。

「今度は、どんな事があるかな」

アーシャはそう呟いて笑った。

夏が終わる。けれど寂しくはなかった。

やがて来る新しい日々を思いながらアーシャはいつまでも目を眺めていた。

10：祝福の言葉（後書き）

ここで一区切りです。

今週末は忙しいので更新が予定通りに行くかちょっと未定です。

遅れるとしても大して間は空かないと思いますが、予定は未定と言
う事で…

11：不穏な平穏

夏が行き去り、学園に騒々しい日々が戻ってきた。

新学期の始まりはいつも少し気が抜けたような、それでいて騒がしいような不思議な空気が漂っている。

急に慌しくなった日々の中、アーシャは相変わらずのマイペースな毎日を過ごしていた。

授業では時々寝て、時々真面目に受けて、昼休みや放課後は都合が会えば三人の仲間と過ごす。

変わり映えのしない毎日だがそれこそが楽しい。

ジェイに魔法を教えたり、ディーンに料理を教わったり、シャルとケーキを食べたり一緒に勉強をしたりといった毎日をアーシャはのんびり楽しんでいた。

そんな彼女の毎日に小さな異変が起き始めたのは、新学期が始まってしばらくしてからのことだった。

カラン、と授業の終わりの鐘の最後の一つが鳴り、アーシャはゆっくりと目を覚ました。

顔を上げて小さな欠伸をすると、生徒達がぞろぞろと教室から出て行く様子が目に入る。

アーシャは耳栓を外し、寝ていた為に少し強張った首や肩をぐりりと回して軽くほぐした。

「……次移動教室だっけ」

ふあ、ともう一つ欠伸をしてから立ち上がり、荷物をまとめようとノートに手を伸ばしたところで机の上に置かれた小さな紙切れが目に入った。

「ん？」

二つ折りにされた小さな紙を拾い上げて中を見ると小さな文字で走り書きがしてあった。

『次の教室は南二階Aから西三階Bに変更』

「変更……？誰だろ、教えてくれたの……」

首を傾げて考えたがアーシャが起きた時にはそれらしい人物は近くに居なかつた気がする。

辺りを見回してももう他の生徒の姿はない。

まあいいか、とアーシャはそれをポケットに入れて教室を出た。

廊下にもクラスメイトの姿は見えず、皆は既に移動したらしかった。今いる東棟から西棟は少し遠いので足を速め、渡り廊下を通り階段を登って教室へと向う。

西棟校舎は生徒達が居てもいつも何となく静かだ。実験室や作業室があるから騒ぐのは厳禁だからだろう。

「B教室、B教室つと………実用古代語の授業、西棟でやるなんて珍しいな……」

教室を示す札を確認しながら歩き、アーシャはようやく目当ての教室を見つけた。

「あ、ここだ」

「キィ、と小さな音を立てて軽い扉を開く。

「……あれ？」

カラインカライン、と授業を開始する鐘の音が響いた。

だが、アーシャの目の前には誰も居なかった。

授業が始まるはずのB教室には生徒達の姿は誰一人としてなく、ただ机と椅子だけが整然と並んでいる。

「……間違えた、かな？」

ドアの前に貼られた札を見たが、やはりここは西棟の三階のB教室で間違いない。

ではメモをくれた人が間違えたのだろうかとアーシャは考えた。だが今から南棟に行って確かめようにも、たった今鐘は鳴ってしまった。

恐らくもう教室には入れてもらえないだろう。この学園の授業は開始の時間には厳しい。

「……まあいつか」

アーシャはそう呟くと教室の中に入りドアを閉めた。そして椅子の一つに座って机に伏せる。

「どうせ今日はこの授業で終わりだもんね」

実用古代語はどのみちアーシャが熱心でない授業の一つだ。

魔具に良く使われる古代語の単語や、それらを分かりやすい定型文にしたものなどを習う授業だが、アーシャはその分野は特に苦勞

していない。必修だから受けているだけと言っていい。
静かだし丁度いいや、と思いつながらアーシャは再び眠りへと旅立
った。

ポケットに入った紙切れの事もその送り主の事も、もう少しも気
にならなかつた。

数日後。

ふわあ、と小さな欠伸が零れる。

アーシャは朝のいつもの時間、予鈴がなるほんの少し前に魔技科
Aクラスの教室に入った。

優等生は前、そうじゃない者ほど後ろという法則に則って彼女の
席は廊下側の一番後ろだ。

教室の席は後ろに行くにつれ斜めに高くなっていてるので背の低い
少女でも特に黒板が見えないと言う事はないのが助かる。

アーシャが自分の席に近づくと、三人掛け机の端の自分の席に異
変が起きているのを見つけた。

机の上に何故か黒い水溜りが出来ている。

良く見ればそれはインクだった。

どうやら備え付けの筆記具のうちのインク瓶が倒れ、中身が零れ
出たらしい。

「ありゃ」

出入り口近くの席にいと、我先にと走って出入りする元気の良
い生徒が机や椅子にぶつかる事が良くあつたりする。

だから今回もそれだろう、とアーシャは判断した。ふたの閉め方
が緩かつたに違いない。

そうなると次はこれをどう始末するのだが、少女は特に悩まなか
つた。

インクが零れたばかりでまだ乾いてない事を確かめるとアーシャ
は辺りをそつと見回し、弱い水の精霊が近くを漂っているのを見つ
けた。

(来て)

アーシャが心の中で呼びかけるとそれはすぐにふわふわと彼女の
傍に来る。

指で机をトントン、と叩き、インクが元通りになる姿をイメージ
した。

ポチャン

ごく小さな水音が立ち、机の上の黒い水が緩やかに波立った。

じつと見つめているとクラスの人間の遠くからの視線を何となく
感じ、アーシャは小さく口の中で何か呟くふりをした。

それとは関係なく彼女の目の前でインクはゆらゆらと波打ち、同
じ方向に向かつてゆっくりと集まっていく。

アーシャが見つめる前で、横倒しになったままのインク瓶の中に
まるで時間を逆に回したかのように黒い水が次々流れ込んでいく。

不思議な事にそれらは次々に流れ込んで、決してそれ以上流れ
出たはこなかった。

最後の一滴がぼちよん、と入っていったのを確かめ、アーシャは
インク瓶をひよいと持ち上げた。

(ありがとう)

アーシャの言葉を聞いてインク瓶の中からふわりと水の精霊が飛び立つ。

小さな精霊は嬉しそうにくるくると何回か回ると、やがて風に乗って窓の外へと出て行った。

アーシャは傍に転がっていたインクのふたをきゅっと閉め、元の場所へと戻した。

もう机の上は最初からそうであったかのように元通りになっている。インクの一滴も見当たらなかった。

カラーンカラーン、と一日の始まりを告げる鐘が鳴る。

それを聞きながらアーシャは席に座り、綺麗になった机の上に頬杖をつけて考え込んだ。

きっと今のならかるうじて、何か呪文を唱えて魔法を使ったように見えただろう。

アーシャは腰に着けたままのヒップバッグから小さなインク瓶とペンを取り出した。実習で使う事もあるので常備している魔具製作用の特別なインクとペンだ。

ぶつかりやすい席に座っていてまた面倒があっても困ると思ったのだ。

アーシャはさつき戻したインク瓶を手にとって眺め、どうやってこれを机に固定し、かつインクが零れないように出来るか考えた。ついでに机にも汚れを弾くような効果を付けたら便利な気がする。

次の授業は寝るつもりだったけれど、こういう事を考える時間なら幾らあっても退屈じゃない。

アーシャはノートの端に新しい魔法陣の草案を幾つも描き付けた。

一時間目の魔技歴史学の授業にやってきた教授は、一番後ろでい

つも寝ている少女がその日は真面目に授業を受けている事に少しだけ感動していたとかいないとか。

それからまた少し後のある日。

「あれ？」

アーシャは席に着くなりそう呟くと怪訝な顔をして机の中を覗き込んだ。

そこに入っているはずの教科書を取り出そうとして手を入れたのだが、何かがおかしい事に気がついたのだ。

中を覗くとそこには何もなかった。見事に空っぽだ。

アーシャはノートは常に持ち歩いているが教科書は大抵机の下の棚に入れっぱなしにしてある。だから当然そこにはそれらの教科書が置いてあるはずだった。

「変だな、確か五冊くらい置いてあったと思っただのにな？」

次の授業で使う基礎魔法理論の教科書を出そうと思っただのに勿論それもなくなっている。

どこかに持っていったつけ、と考えたが心当たりはなかった。

アーシャが考えているうちに鐘が鳴り、教授がやってきて生徒達もざわざわと席に着く。

まあいいか、とノートだけだしそのまま授業を受ける事に決めた。

やがて授業が始まり、教室には教授の声とノートを取る音だけが密やかに響く。

この時間の基礎魔法理論の授業はアーシヤにとっては退屈だ。少女は始まって早々に欠伸を幾つか噛み締めた。

今日は結界の強度と膜圧がどのつという話をしている。

アーシヤは寝ようかどうしようかと考えながらぱらりとノートを捲った。

そこにはこの前の授業中に考えた、物を固定する魔法陣が描かれている。

それを施してからアーシヤの机のインク瓶は倒れた事がない。

なかなか良い物が出来たとちょっと思っている。

これを応用すれば何か他にも役に立つ事がありそうな気がする、とアーシヤはその構想を練り始めた。

「グラウル君」

「……ん？」

不意に名を呼ばれて顔を上げるとこちらを見ている神経質そうな教授と目が合った。

どうやら珍しく起きているアーシヤを見つけ、彼女に問いを投げる事にしたらしい。

「結界の強化に関して近年画期的な理論を提唱した魔道士とその理論からなる有名な方法論は？」

クラスの視線が少女へと自然に向かう。

アーシヤは教科書で読んだその理論について思い返し、口を開いた。

「魔道士アンダー・ダグリー。結界構築理論を得意とし、理論のみならず己で立てた様々な説を実証した研究者として有名。

提唱した方法論として一番有名なのは『詠唱と紋陣の結界構築に対する汎用強化法』。

方法論を簡単にあげると、詠唱の場合、呪文は出来る限り韻を踏むような言葉を使うべきであり、濁音は減らした方がより精密度が上がる。発音はきっちり行うべし。

膜圧をあげたい場合は一節ごとの文字数を同じくし、最低でも二節以上の偶数小節からなる呪文構成にする。

紋陣の場合は例えば水なら水、地なら地と出来るだけ同じ系統を表す単語を使うべきである。魔法陣に描き込む同系統の文字の数で強度が変わり、膜圧を上げる場合は円の数を増やす。

ただし円の数が増えると発動までに時間が必要になる可能性がある。

魔法陣は一つの円の中の単語の数が多ければ多いほど強固になるが、その分不安定さも増すので制御が難しくなる……まだ言う？」「よ、よろしい。よく出来ている」

教授は教科書も見ずにすらすらと答えたアーシャに慌てて手を振った。

教科書も出していない不真面目な生徒に灸を据えるつもりが当てが外れたらしい。

他の生徒達にもざわざわと小さななどよめきが走り、教授は慌てて彼らを注意し授業を再開した。

アーシャはすぐにそんな教授に興味を無くしてまたノートに目を落とす。

教科書はどうせ自前の物だったからなくなっても学校に怒られる

事はない。

一通り目を通したので内容も覚えているが、物を大切にすることで取ってあったのだ。

いずれ下級生への寄贈品募集でもあったら出そうと思っていたから誰かが使いたくて持っていたのならそれはそれで構わなかった。少女は消えた教科書の行方を思うこともなくノートを見ながら思考に浸る。

アーシャにとって今大事な事は教科書の行方ではなく新しい魔法陣の応用方法だけだった。

放課後、アーシャは外を歩いていた。

夏の名残の日差しは眩しいが、もう気温は段々と穏やかになってきている。

魔法学部棟を出たアーシャは校舎に沿った小道を歩きながら中央棟へと向かっていた。

今日は夕方に仲間達と待ち合わせして一緒に食事をする約束がある。

中央棟の食堂のメニューに秋に海で取れる魚が出始めたというメニューが教えてくれたのだ。

アーシャはそれをとても楽しみにしていた。

秋の魚はどんなだろうと考えて微笑を浮かべたその頬を涼しい風がすずりと撫でた。

「……！」

不意に小さな声がアーシャに届いた。ハッと気づいて思わず足を止める。

それは傍を過ぎ去った風の精霊の

バシヤアン！

警告の声だったが、どうやら間に合わなかった。

「……何？」

アーシャは突然上から襲った衝撃に驚いて一瞬立ちすくみ、それから辺りを見回した。

見れば少女の足元の地面に派手に水が飛び散っている。どうやらこの水が彼女の頭の上から降りかかったらしい。

アーシャは上を見た。けれどそこには青空と学部の校舎とその脇に立つ木が目に入るだけで他にはなにもない。校舎の二階の窓が開いていたが人影は無かった。

「……魔法の悪戯して、失敗したのかな？」

たまに下級生などが窓の外に向かって魔法の練習や悪戯で放つて教師達に怒られることがある。今のも下に人が居た事を知らずに魔法を放ち、後で気づいて慌てて逃げたのかもしれない。

アーシャはふう、と一つため息を吐いてもう一度辺りを見回した。

「まあいつか、濡れてないし」

そう呟いた少女の体にはなんと一滴の水も着いていなかった。

頭の上から落ちて来たはずの水は全て彼女を避け、その回りに激しく飛び散っている。

アーシャは足元をもう一度見た。

そこにはアーシャの体を中心にして綺麗に円を描くようにぼつかりと濡れていない場所が出来ている。

アーシャはその状態をよく観察し、うん、と頷いた。

「結構良く出来たかな？」

そう呟くと少女はバッグのポケットを漁って中から巻尺と筆記具を取り出した。

「うーんと、半径は……やっぱり私の腕を伸ばしたくらいかな。水の飛び散り方からすると高さもそんなくらい……」

アーシャはぶつぶつと小さく呟きながら地面の乾いている部分の半径や飛び散った水の範囲を測ってメモを取っていく。

「一人用簡易結界としては十分かな……でもこの範囲だと誰かを一緒に入れる事は出来ないなあ」

アーシャはそう言って自分の胸元を飾るブローチを手にとって見つけた。

アーシャがいつも身につけているそれは、実は彼女が自分用に作った魔具の一つだ。彼女の回りに何か起こった時に一時的な結界を張る効果がある。

だから今も上から落ちてきた水に反応して勝手に結界が発動したのだ。そのおかげで少女は少しも濡れなくて済んだ。

身に着けていて良かったと思いつつ、そつと石に指を当てて残存魔力量を量るとまだあまり減っていない事が感じられた。

「でも一回でこんくらいの消費量なら上出来かな。継続時間と範囲は要検討っ」と

カリカリとメモに追記するとアーシャは満足そうに頷いてそれらをポケットにしまった。

良いデータが取れたからまた少し改良できそうだとアーシャはご機嫌だった。

誰が水を降らせたのかは知らないが、思いがけないアクセントは彼女の創作活動にちょっとした貢献をしてくれた。

再び歩き出した足元で、広がった水は早くも乾き始めている。

もうその頭の中は突然降ってきた謎の水よりも、自作魔具の改良案の事でいっぱいだ。

アーシャは小さく鼻歌を歌いながらのんびりとその場を後にした。

少女の日常は実に平穏だった。

12：晴れのち曇り

ある日の放課後、上級学部近くの可愛らしい喫茶店に賑やかな少女達の一団があった。

「それじゃ、シャル、誕生日おめでとう！」

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「おめでとう！」

幾つもの祝いの言葉と共にカチン、と細いグラスが打ち合わされる。

「ありがとう！」

シャルは自分を囲む四人の友人達に笑顔を見せお礼を言った。

いつもより授業が少なかったこの日、シャルの特に仲の良い友人達が放課後に集まり、ささやかながら彼女の誕生日の祝いを催してくれたのだ。

食事をするには中途半端な時間なので、お菓子とお茶だけの簡単な席だがそれでも祝ってもらえるとやはり嬉しい。

彼女達は毎年のようにちゃんとした祝いをやるうと言ったのだが、それはシャル自身が断ったのだ。

シャルには休暇の間に行った仲間だけの祝いでもう十分だった。

それでもこうやって友人達と過ごす時間もなかなか楽しい。

五人の少女達はそれぞれ好みのケーキを食べながら賑やかなおしゃべりに興じた。

いくら喋っても年頃の少女達の話題は尽きる事を知らないかのよ

うだった。

もつとも、学期始めのこの時期だけは休暇中にそれぞれがどうやって過ごしていたかという話題が多くなる。

友人達の帰省や旅行の話聞きながらシャルも仲間とレイアルに行った話をした。

お土産は皆と既に交換しあっていたが、まだゆつくりと旅行の話をしていなかったたので少女達の席は大いに盛り上がった。

「えっ、じゃあレイアルには実習の時と同じ四人で行ったの？」

友人の一人のニーナに問われて、シャルは頷いた。

「そう、皆居残り組みだったから丁度良かったの。買い物したり舟遊びしたりして、面白かったわよ」

「いいなあ、イージェイ君やアルロード君も一緒だったなんて！」

学校では大人しいのに放課後は賑やかなリゼットが腕をバタバタさせて羨ましそうに言った。

だがシャルは小さく首を振ると苦笑を浮かべた。

「ただの荷物持ちと用心棒よ」

「シャルはいつつも贅沢すぎるよっ」

おっとりしたトリスがくすくすと笑う。

「でも珍しいよね、実習のメンバーと旅行するだなんて。仲間の買い物に付き合うなんて大変じゃなかった？」

一番大人しいメイが首を傾げてシャルに聞いたが彼女は笑って首を横に振った。

「全然。すごく楽しかったわ。実習と違って危ないこともないし、普通の旅行って本当に久しぶりだったもの。買い物に付き合ってたっていうよりも、無理言っただけ行って良かったわ！」

シャルがそう言うと少女達は顔を見合わせ、何か少し困ったような呆れたような曖昧な笑みを浮かべた。

「あら？何か変な事言った？」

「あ、ううん！」

一瞬流れた微妙な空気にシャルは少し戸惑う。

自分が何かおかしなことを言ったのかと思っただがそれでもないらしい。シャルは内心で首を傾げながらも言葉を続けた。

「それに、皆にもお土産買ってこれたしね。毎年貰うばかりってちょっと心苦しかったのよ？」

シャルは家が学園にあるので休暇だからといって帰省する必要がない。

だから毎年長い休暇が終わる度に、友人達からお土産を受け取るばかりでちょっと申し訳なく思っていた。

シャルのその言葉に少女達は気にしなくても良いのにと口々に言っただけで笑った。

「でもやっぱり羨ましいよ、あの二人と一緒に旅行だなんて！」

少女達は羨ましげにため息を吐いた。

「ホントよね。あーあ、今年はシャルの誕生日祝いがごじんまりしてるからイージェイ君が呼べなかったのよね、残念」

ニーナはケーキを食べながら残念そうに呟いた。

それに釣られて他の少女達も口々に彼の不在を残念がる。

「ジェイなんてどうせ来ても黙って料理食べてるだけなんだから、いてもいなくても同じじゃない」

「ええ、違うわよ！居てくれるだけで楽しいじゃない！ねえ？」

ニーナはそう言って他の子達に同意を求めた。

「うん、居てくれるだけで楽しいわよね。目の保養って言うか……」

頬を可愛らしく染めながらメイが言い、リゼットも頷く。

シャルは理解できない、と首を振って肩をすくめた。

ジェイは仲間達からは誰も気にされていないが、その爽やかな容貌が女子生徒にかなり人気がある。

夢見がちな少女達に言わせると、輝くような金の髪に空の色の瞳が悪戯っぽく煌き、笑顔が素敵な甘い顔立ちなのに、程良く日に焼け鍛えられたしなやかな体がやっぱりどこか男らしい……ようなところがいいらしい。

シャルに言わせると、単に幾つになっても子供っぽさが抜けないお坊ちゃん顔で夏期休暇に必死で虫取りしてた頃とちつとも変わっていない、という事になるのだが。

「まあ……確かに見かけがそんなに悪くないのは認めるけど。でもイマイチ締りがなのよね」

「ええ、そのちよつと甘いところがいいんじゃないの！いつも笑顔だしすつごく優しそうだわ」

トリスはシャルの意見に首をぶるぶる振って反対した。ふわふわした金茶の髪が力説するたびに揺れて愛らしい。シャルにとっては締りのない顔でも、彼女達にとっては甘くてかっこいい、となるらしい。

お互い歩き出す前から顔を合わせているシャルには今更ジェイの顔に対して思うところは特にない。

友人達が騒ぐ声を聞きながらシャルは冷たいお茶を飲み干してお代わりをした。

「やっぱりさ、アルロード君と並んでる時が一番いいわよね！あの対比が！」

突然聞こえてきた声にシャルは思わずむせてしまった。

咳き込みながら友人達を見るとみんなうつとりと頷いている。

あの冷血漢の何がいいのかシャルにはさっぱりわからない。上級学部に入ってから友人になった彼女達は時々どうにも夢を見すぎだ。基礎学部から一緒に、デイーンと同じクラスになった事のある知り合いの女の子達は、あれは見ていただけがいいと口を揃えて言う。それにはシャルも全く同感だった。

デイーンは確かに眉目秀麗だとかそういう言葉で言い表せるような容貌をしている。切れ長のすつきりした目も、彫りの深いはつきりした作りもバランス良く整っている。

だが、シャルにとって彼は顔が良いからと騒ぐようなそういう対象になり得ない。

基本的にデイーンは男女分け隔てなく誰にでも冷たいからだ。

唯一の親友と言ってもいいジェイにさえ暖かいことは少ない。

彼は人への基本的な接し方がそもそも厳しいし、言葉遣いも非常に堅苦しいので相手の事を思っても実に分かりにくい。

皮肉を言う事も多いし、表情も乏しい。

何事も深く気にしないジェイじゃなければあれほど彼の傍にはいられないだろう。

シャルの中でのデインは、根暗そうで時々見てるのもうっとおしい、という少女達とは正反対の評価を得ている男だ。

「あいつを見ていると男は顔じゃないって本当に思うわ」

「またそんなこと言って！それはシャルだからそう思うのよ！」

「あんなにかっこいいのに何が不満なのー？あの切れ長のクールな目で見つめられたら最高じゃない！ちよつとくらい冷たくてもそこがまたいいのよ！」

デインと目が合うと大抵はガン付け勝負になってしまう少女は何も言わずに二つ目のケーキを注文した。

シャルにとっては切れ長だろうがクールで知的だろうがいつも憂いを浮かべた顔がサイコーだろうが全くの無意味だ。

二人は根本が似ているから合わないんだというジェイの意見は撲殺したが（もちろん殴って黙らせたのだ）、合わない相手と言うのはやはりいるものだ。

デインに時たま感じる苛立ちのようなものは、ジェイと言いつつ時とは全然違う。

それこそを同属嫌悪と言つのだとシャルは頑なに認めようとはしなかった。

（やっぱり男はちょっと馬鹿くらいで丁度良いわ）

口に出すと周りがうるさい事が予想できたシャルは、胸の奥でこっそりとそう呟いた。

その間にも彼女らの好みの男談義は収まる気配がない。

姦しい少女達の会話を聞きながらシャルは少し疲れを感じていた。

普段はとても大人しい女の子ばかりなのだが、こういう話題になると何故か誰もがやる気を出してしまう。

逆にシャルはこういう話題にはあまり乗る気になれなかった。

(前からこんなだったかしらね？何か……疲れるわ)

シャルはこつそりとまたため息を一つ吐くと、疲れを癒す甘い物を口に運んだ。

すると話が一段落したらしい少女達が、シャルの方を向き直った。

「あ、ねえそういえばシャル、後期の実習なだけどさ……」

「うん？」

「あの、良かったら……私たちと一緒に、行かない？」

「え？」

驚いて聞き返したシャルに、少女達はお互いを肘で突付き合って誰が先を言うのかを押し付けあう。

やがてそれぞれがおずおずと口を開き始めた。

「ほら、風の森は……私たち自信がなくていけなかったけど、もう同じところは行かないでしょ？」

「そうそう、あそこじゃなかったら、私達一緒に行けるんじゃないかって……」

「人数が多くても良い実習先ってまだ沢山あるしね」

「私達相談したの。ね？」

うんうん、と全員に頷かれ、シャルは少し困った顔をした。

「まあ、確かに同じ所を選ぶと評価が低いから続けては行かないけど……でも、気を使ってくれなくても大丈夫よ。また後期も同じメ

ンバーで行こうってもう決めてるの」

野外実習は毎回組む人間を変えても構わない事になっている。実習の内容によって適正人数が違うので、その都度多少の増減があるのも当たり前の事だ。

けれどシャル達は次もこの四人で行こうと約束をしていた。だから行き先は人数に合わせて選ぶ予定になっていて、今のところ他の人間を入れるつもりはなかった。

しかしシャルの言葉に少女達は口々に更に言い募った。

「でも、ほら魔技科の子と一緒に何かと大変でしょ？」

「そうそう、イージェイ君達もやっぱり苦労らしいじゃない」

「七人だったらどこ選んだって余裕だし！」

「シャル達と一緒にいたら楽勝でA判定くらいは取れるよね！」

シャルは困惑して、目の前の少女達を見た。

彼女達が一体何が言いたいのかわからずシャルは眉を顰める。

「……悪いけど、意味が良くわからないわ。七人で、一体どういうこと？」

シャルのその言葉に彼女達はきょとん、と不思議そうな顔をした。

「だって、魔技科の子なんてやつぱり足手まといなんですよ？」

「そりゃ、風の森に一緒に行ってくれたっていう恩は感じるかもだけど、あの子だってシャル達三人と組めたおかげでS判定取れたんだからそれでチャラじゃない」

「もうそんな苦労する事ないんだしさ」

「そうだよ、今度は一緒に班組もう！」

自分の友人はこんな人間達だったろうか、とシャルは軽い眩暈を感じそうな気分陥った。

要するに彼女らはアーシヤを外してシャル達三人と彼女達で班を組みなおそうと言いたらしい。

しかもアーシヤを足手まといだと信じて疑いもしていない。

シャルの中にふつふつと怒りが湧いてくる。それでもこの祝いを催してくれた彼女達の為に、シャルは激情を抑えた。

「……アーシヤは足手まといなんかじゃないわ。それどころかあの子がいなかったら絶対に実習は成功しなかったわ。知りもしないで何であの子を馬鹿にするような事を言うの?」

シャルの押し殺した怒りが伝わったのか、少女達はびくつと小さく身を引くと強張った笑顔を浮かべた。

「えと、その、馬鹿にするとかそういうつもりじゃなくて……」

じゃあどんなつもりだったのかと声を荒げたい気持ちをシャルは必死で抑えた。

「だって、魔技科だし……ねえ?」

「うん、大した魔法も使えないんじゃないかって思ってた……」

「それに、あの子寝てばかりだって聞いたし……」

確かに魔技科の人間は実戦に向いていない事が多いし、アーシヤが寝てばかりいるのは確かだ。少女の実力が彼女達にわからなくても仕方がない。

だがその魔技科の少女に誰よりも助けられたシャルは、そんな事はないと怒鳴りつけてやりたかった。

アーシヤがやった事は軽々しく人には言わない、と当の本人と約

束していなかったらきつとそうしていただろう。

ぐさ、と乱暴にケーキの残りをフォークで突き刺し、シャルはそれを無言で口に運んだ。

そうしないと本当に怒鳴ってしまいそうだったからだ。

味の分からなくなつたケーキをお茶で流し込み、気分を落ち着けてからシャルは黙っている友人達に目を向けた。

「魔技科だろうがなんだろうが、アーシャは私の大事な友達で仲間なの。彼女といた事で私は沢山助けられて、本当に感謝してるわ。

あの子のことをどう思ってるのか知らないけど、噂や偏見だけでおかしな事を言わないで」

怒りを押し殺した声でそれだけ言うとシャルは自分の分のお金を置いて立ち上がった。

彼女達が奢ると言ってくれていたが、素直に奢ってもらう気にももうなれない。

「待つて、シャル！」

「ごめん！そんなつもりじゃ……」

背中に聞こえる声を完全に無視してシャルは店を後にした。

足早に街を歩いて寮への道を辿る。

シャルは友人達の態度にひどく腹を立てていた。

（私だって魔技科の人間が実戦で役に立つのか最初は少し疑ってたけど）

でも自分は魔技科だからとそれだけで人を見下した事はないはずだ、と思いたい。

シャルは元来不器用だから、基礎学部で自分で作った魔具はどれ

も全く役に立たないものばかりだった。

それを思うと器用に動くアーシャの手は見ていて尊敬するばかりだ。

魔法科には魔技科を見下している者が多いのは知っていたが、まさか自分の友人までもがそうだとは思っていなかったからショックが大きい。

大人しい、良い子達ばかりだったのに、と苦々しく思う。

シャル自身は自分が不器用な事に加えて、昔から祖母の友人の魔技師にローブや護符を作ってもらったりと世話になっていたの偏見はない。

祖母がそういう謂れのない差別を決して許さない公平な人だったおかげでもある。

結局彼女達は何が目的だったのだろうか、とシャルは歩きながら暗い気分で考えた。

友人であるシャルと組みたいのか、憧れのジェイやデーンと組みたいのか、成績優秀者と組むことで良い成績を狙いたいのか、それとも魔技科の人間に負けた事が悔しいのか。

彼女達はあの四人で組んで前期の実習に挑戦したが、魔法科の生徒だけだったためか課題を完璧にクリアする事はできずBプラスくらいの成績だったと聞いていた。

(せめて最初なのであってくれればいいけど)

夏期休暇で少し会わないうちに急に知らない人間になったかのよくな友人達を思い返し、シャルはため息を吐いた。

自分が変わったのか、彼らが変わったのか。それとも今まで何も見えていなかったただけなのか。

「あー、もう！めんどくさい！」

シャルは暗い気分を振り払うように走り出した。
今日は四人で夕食を食べようと仲間達と約束をしている。まだ約束の時間には早いけど、皆を探そうと先を急ぐ。
何だか皆の顔が無性に見たかった。

その夜。

「ねえ、アーシャ。この二人の顔、どう思う？」
「……へ？」

夕食の席でシャルは唐突に隣に座ったアーシャにそんな質問をした。

「はあ？なんだよいきなり！」
「……くだらないな」

二人の反応を無視し、シャルは彼らを指差してアーシャに問いかけた。

「ね、アーシャ、正直に言うてみて？こいつらの顔についてどう思う？」
「どつって……」

アーシャはスプーンの端を咥えたままきょとん、とシャルを見た。

彼女の質問の意図が良くわからなかったのだが、見ればその顔は至って真剣だ。

それを見て取ったアーシャは目の前で固まっている少年二人に視線を向け、それから素直な感想を述べた。

「……目が二つあって鼻が一つあって口が一つある」

ぶはっ！

素直すぎる少女の答えに、ジェイは飲んでいた水を噴出し、ディーンはパンを手に持ったまま固まり、シャルは何故か目を輝かせた。

「あと眉毛が二本……」

「もうっ、アーシャってばやっぱり最高だわ！なんて素敵なお答え！」

シャルはそう言って嬉しそうに座ったまま手を伸ばして少女に抱きついた。

「ひゃっ」

「そうよ！そんなのよ！その反応を求めてたのよう！」

アーシャはスプーンを持ったまま、大喜びのシャルにもみくちゃにされてじたばたした。だがシャルはよほど嬉しかったらしく少女の頭を撫で回している。

ディーンとジェイはそれを眺めながら深い困惑のため息を吐いた。

「……何なんだ」

「さあ……しかしここまで顔に拘っていないといっそ清々しいものを感じるな」

「あー……まあ、確かに」

ジェイもディーンも自分達の顔など極めてどうでも良いと思っ
ている。

なのにそのどうでもいい顔の事で時々面倒に巻き込まれる事がある二人にとって、アーシャの答えは何だかちよつと感動すら覚えるような気がした。

顔を見合わせて頷き合う少年達の前で、シャルはようやくアーシヤを離して今度は上機嫌に何か話しかけていた。

男は顔じゃないわよね、などと熱心に言われ、少女は首を傾げながらも頷いた。

シャルと付き合いの長い二人には何となくこの原因を察することが出来た。どうせまた夢見がちな友人達にでも彼らのことで何か言われたのだろう。

今は大分減ったが、昔からシャルは少年達への伝言や手紙の橋渡しを良く頼まれ、その全てを断っては顔しか見てない同じ歳の少女らに憤っていた。

だから何となくシャルがアーシャの答えに大喜びしている気持ちもわからなくもない。

だが、顔しか見ていない年頃の少女と、顔すら見ていないアーシヤを果たして比べて良いものだろうか。

少年達は首を捻って考えたが、シャルの喜びに水を差すのも馬鹿馬鹿しい、と結論を出して食事を再開した。

秋の魚は脂が乗り始めていてなかなか美味しくかった。

12：晴れのち曇り（後書き）

まだまだ途中ですが、自分なりに楽しく話を書く事に集中したいので、更新がしばらく不定期になります。

頂いたコメントやメッセージへの返信も少し遅くなりますので、気長にお待ち頂ければ幸いです。

13：性質の悪い噂

放課後でも武術学部は騒がしい。

この学部は必然的に体力を持って余しているような生徒が集まる傾向があるので雰囲気自体がいつも賑やかだ。

他の学部同様に、武術学部の校舎にも放課後も生徒に解放されている教室や鍛錬の為の場所が沢山ある。

人気なのはトレーニング器具などが置いてある部屋で、この時期は夏期休暇にのんびりと過ごして鍛錬不足になった生徒達が多く利用している。

その反面何も器具のない広間だけの鍛錬場などは人気がなく、人の姿もまばらだった。

そんな場所の一つ、第三鍛錬場の中心でジェイとディーンは静かに向かい合っていた。

辺りには他に人影はない。人の来ない場所を選んで来たのだから当然だ。

対峙してからどのくらいたったのか、じつと睨み合っていた二人だが、先に動いたのはジェイの方だった。

いつまでも動かないお互いに焦れたのか、ジェイは深呼吸を一つすると地面を蹴った。

ディーンの懐を目指して距離を急速に詰める。その速度は身軽なジェイらしい、流石と言うべき速さだ。

ジェイが間合いに入るぎりぎりのところで不意にディーンが動いた。

ヒュ、と風を切る音が室内に響く。

懐に入らせないために斜めに大きく振り下ろされたディーンの剣は空を切った。しかしすぐに跳ね上がって戻ってくる。

初撃を避け、またすぐに足を踏み出しかけていたジェイは慌ててもう一度足を引いてそれをやり過ぎた。

だがその首元に鋭い突きが繰り出される。体を軽く沈め、横に振って避けたが髪の毛を一筋掠め取られた。

更に間髪入れずに繰り出されてくる素早い突きを、体を左右に振ってギリギリで避ける。

ディーンの突きは鋭い上に隙が小さく避けるのが精一杯だ。避けた剣がその度に髪の毛を一瞬掠める。

ジェイはそれに構わず左の腕に力を込めて機を伺った。

十分に力がこもったと感じた時、再び向かってきた突きを右に避け、その剣の腹に向かって左の籠手を当てた。

キン、と固い音が響きディーンの剣は大きく弾かれた。

以前のジェイにはその剣は少々重く、あまり強く弾く事ができなかった。だが今の彼の腕力ならかなりの強さで弾く事ができる。

左手に意識して力を振り分けるのもかなり上手になっていた。ただし強く弾きすぎて剣を駄目にしたことも何度もあるので手合わせの時の加減はいつも難しかった。

剣を強く弾かれたディーンの体は一瞬バランスを崩して大きく開いた。

ジェイはその機を逃さず懐に一足で飛び込んだ。

だがディーンは素早く半身を捻り、その腹を狙った右の一撃をわずかに掠らせただけでかわした。

同時に懐に入り込んでいたジェイの背中に剣の柄が振り下ろされる。

だがそれこそジェイが待っていた本当の機会だった。

素早く体を捻ったジェイはさつとその手を伸ばし、振り下ろされたディーンの腕に一瞬左手で触れた。

それはあくまで触れたただだった。しかしそのタイミングを狙ってジェイは叫んだ。

「いち!!」

バチンッ!

「っ!」

ジェイに触られたところから、何かを叩いたような音と共に激しい痛みと衝撃がディーンの腕を駆け抜けた。

剣を握る手から力が抜け、カラン、と音を立てて剣が落ちた。

ピタリ、とジェイの拳がディーンの顔の傍に当てられ、その立ち合いの終わりを告げる。

「……」

一瞬の沈黙の後、ディーンは両手を軽く挙げて降参の意を示した。

「やった!俺の勝ち!」

ガッツポーズをして喜ぶジェイに苦笑しながらディーンは右腕を擦った。最後のジェイの攻撃のおかげで右腕はビリビリとした痺れを訴えている。

ディーンは痺れた腕でゆっくりと鍛錬用の剣を拾うと鞘に納め、ジェイを振り返った。

「まあ……いつの間にか精霊を呼んでいたのは予想外だった。負け

を認めよう。……だが」

ディーンは急に眉間に皺を寄せてジエイに詰め寄った。

「なんだあの言葉は！」

「え、や、あれはー……呪文？」

「あんな呪文があつてたまるか！」

ディーンは彼にしては大変珍しく声を荒げた。彼がジエイの電撃を防ぐ間もなく受けてしまったのはあれが呪文だとはまさか思わなかつたからだ。

ディーン自身も闇の精霊を呼んであつたから、もしジエイが精霊の力を使う気配を見せたなら相殺することは可能だったかもしれない。だが彼が叫んだ短い言葉は絶対に呪文とはいえない言葉だった。

「いち！のどこが呪文だ！アルシレイアから何を教わつたんだお前は！」

「えー、いや、その……俺でも使える簡単呪文、アーシャが考案してくれたたつーか？」

ディーンは頭を抱えて唸った。あれが呪文として成立するなら精霊魔法を研究する魔道士達は即刻それをやめて自棄酒でも飲みに行くに違いない。

「や、アーシャが教えてくれたんだよ。精霊と仲良くなつたら必要以上に難しい言葉は使つなつて」

「……それで？」

「んー、だから、俺みたいなタイプは言葉や道具に頼れば頼るほど上手く行かないから、感覚で行けつて」

実的確なアドバイスにディーンは深い深いため息を吐いた。
だがやはりあの呪文はひどい。いや、あれを呪文とは到底呼びた
くない。

「だが幾らなんでもあれはないだろう。必要な事を何も言ってい
ない」

「うん、俺もそう思ったんだけどアーシャが、現代語による呪文や
言葉ってのは要するに自分の意識を……なんだっけ、喚起？させる
為の言葉だから、その言葉自体が精霊に働きかける力は意外に弱い
んだって言うんだ。」

精霊はむしろ、言葉によって湧いた本人のイメージを読み取るん
だって。

だから精霊魔法を使い慣れた人が、簡単な魔法なら思考だけで使
えるのはそのせいなんだってさ」

「……なるほど、それで？」
「だから、俺みたいなのはごく簡単な言葉とイメージを結びつけて
頭と体に刷り込んで、条件反射で使えるようになるまで練習するの
が良いって。」

例えば雷を使うならそれを大体の威力で五段階くらいに分けて番
号振って、その番号と威力のイメージを体で覚えろって」

ジェイが語ったその型破りな方法にディーンは呆れ、思わず遠い
目をして天を仰いだ。

「……要するに、犬に伏せを教えるようなものか」
「もうちょっとマシな例えはないのかよ！」

自分でもちよっとそう思っていたジェイはちよっぴり涙目で訴え
たが、その意見はあっさりとディーンに黙殺された。

「つまり」一」と言う事でそこに結び付けられたイメージが勝手に湧く程訓練をしたのか？」

「したした。もうそればかり。一は触れた所がしばらくの間痺れるくらいの威力の雷なんだけど、アーシャにまず見本を見せてもらって、自分でも食らってみて、それで後はひたすら反復練習。」

アーシャは難しい事は言わないけど結構厳しいんだよな」

それは何とも体育会系らしい訓練だ。ジエイに合っている訓練方法と言えそうだった。

「休暇中に姿が見えない時はそんな事をしていたのか」

「そう。まずそういう簡単なのを憶えてから段階を上げていくのが良いんだってさ」

だが当然光の精霊魔法にも様々な用途がある。あまり多くは憶えないとしてもそれでもその方法では限界があるはずだ。

デーンはそう考え、それをジエイに聞いた。

「あ、うん、アーシャもそう言った。」

だから、イメージするのが難しい魔法については、古代語を使うと良いってよ。

一方的でいいからやって欲しい内容を細かく詳しく話しかけるようにして使うと、精霊がその言葉を聞いてやってくれるんだってさ。古代語なら精霊に伝わりやすいから。

発動に時間かかるけど色々できるから、そういうのはそのうちカンペ作ってくれるって言った」

「カンペ……」

どこまでも精霊魔法学者達を泣かせる行為だ。

デーンはなんだかひどい頭痛がするような気がした。

「ディーンも教えてもらったらどうだ？面白いぜ」
「……考えておこっ」

恐らくそれはとても有意義だろうが、その代わりに自分の中の常識を売り渡すはめになるような気がしてならない。

堅苦しいのが好きだという自覚があるディーンは自己変革を求められる事になりそうだ。

強さを求めるか心の平安を求めるかでディーンがしばし悩んでみると、鍛錬場に立つ二人に声が掛かった。

「お、いたいた。おい、ジェイ、ディーン」

ジェイとディーンはその声に鍛錬場の入り口を振り向いた。

そこには見覚えのある少年が一人、手を振って歩いてくる所だった。

「よお、ルー、どうした？」

ルーと呼ばれた少年は困ったように笑うとポケットから数通の封筒を出してそれをぴらぴらと振った。

「ほら、お前らに届けもん」

そう言って差し出されたそれらの封筒はどれも随分と可愛い色合いで読まなくてもその中身を想像させる。それを見たディーン

とジェイはたちまち渋い顔をした。

「捨ててくれ」

「んなもん持つてくるなよ。俺らが受け取らないって知ってるだろ？」

ジェイはそう言って手を振って受け取りを拒否を示す。

だが少年も簡単には引き下がらず、押し付けるように封筒を差し出した。

「いや、頼むから受け取るだけ受け取ってくれよ。俺が恨まれるだろ？な！」

「ルイン、こういった物は受け取らないと何度言ったら分かる」

「ったく、お前お人好しだからな。それともまた女の子紹介してくれるとか言われたか？」

ジェイは受け取る代わりに手を伸ばしてピン、とルインの額を指で弾いた。

「うぐつ、い、いや、決してそんなことはっ！」

ルイン・オルワースはディーンと同じ剣術科で彼と交流のある数少ない同級生だが、同時に基礎学部からのジェイの友人でもある。成績などはそこそこといった所だが社交性のある明るい性格のため友人知人が多い。

ただお人好しなのが玉に瑕で、こうやって度々ディーンやジェイ宛ての伝言や手紙を託されてきては二人を悩ませていた。

「なあ、受け取ってくれるだけでいいからさ！」

「いらん」

「勘弁してくれよ、ルー。下手に受け取ったら後でシャルに嫌味言われ放題だぜ」

ジエイは昔、こういった物の中身を知らずにうっかり受け取ったら、未熟で弱っちいくせにもう女に余所見をするのかとシャルに鼻で笑われて半月も詰られて散々だった。

それ以後も度々こういった事に絡んでトラブルに見舞われているので今では一切受け取り拒否を貫いている。

「それは良くわかってるけどさ、でも今回はシャルフィーナだって文句言わないだろ？」

だがそれを良く知っているはずのルインは珍しく今日は引き下がらなかった。

いつもなら適当に受け取れ受け取らないと押し問答をした後、義理は果たしたとあっさりと諦めてくれるはずなのだ。

「シャルが文句言わない？そんな訳あるかよ」

「や、だってこういうのはさっさと決めておいた方がいいだろ？前の時だってギリギリだったじゃねえか」

どうも方向のおかしいルインの言い分にジエイとディーンは顔を見合わせた。

「ルイン、一体何の話をしている」

ディーンの問題にルインはきょとんとした顔をした。

「え？だから、手紙の話だよ。お前らのチームへの参加希望だろ？」

「はあ！？」

「……それを見せる」

ディーンはルインの手から封筒を奪い取ると乱暴に封を開けて便箋を開いた。

さつと中身に目を走らせた後それをジェイに渡し、他の手紙も開けた。ジェイもディーンも手紙を読むごとに眉間の皺が深くなつていく。全部で五通あったその手紙はどれも同じような内容だった。

「なんだこりゃ。欠員が出たならせひとも一緒につて、いつどこに欠員が出たんだ!？」

「しかも全員魔法科の人間か」

困惑する二人にルインは不思議そうに首を傾げた。

「や、だからお前らの班だろ? そりゃあまだ後期の実習の行き先とか決めるのにはちょっと早いけどよ、三人じゃやっぱバランス悪いじゃん。前がギリギリ登録だったなら今度は早く決めた方がいいぜ?」

「……我々の班に欠員が出たと?」

「どっから聞いたんだよ、それ」

二人に言われてルインはさらに不思議そうな顔をした。

「違うのか? 俺はそう聞いたんだけど……お前らの班、後期はあのちっこい女の子が抜けるから空きが出るって噂になってたぜ?」

「何い!？」

「一体どこからの噂だ?」

「さあ……俺も人伝に聞いたただけだからなあ。多分魔法学部からじゃねえの? あの子魔技科なんだろ?」

「……ルイン、お前が聞いた噂を正確に聞かせろ」

二人に口々に追及されてルインは驚いた様子を見せたが、ディーンがきつく睨むと慌てて記憶を辿って話し出した。

「だから、えーと、お前らの前期実習は大成功だったけど、やっぱり人数合わせで入れた魔技科の女の子は足手まといで大変だったらしいって。

んで、だから次はその子が抜けるから班に新しい奴入れる予定で、お前らもそろそろ新メンバー探し始めるんじゃないかって話だったぜ、確か」

だからそれ、と彼はジェイ達が手に持ったままの封筒を指差した。

「俺だつてそれがラブレターとかだったらなるべく受け取らないようにしてるけどよ、班のメンバー探すのって付き合いがないと結構大変だろ？だからちょっとは役に立つかと思ってさ」

どうやらルインは本当に好意で橋渡しをしたつもりだったらしい。それは理解したが気になるのはその噂の方だ。

「生憎だが私達は班のメンバーを変えるつもりはない。彼女は足手まといではないからな」

「そそ、助けられたのは俺達の方なんだぜ。なのに一体どっからそんな噂が出たんだか……」

二人の言葉にルインはどうやら噂が嘘だった事を理解したらしく、申し訳なさそうな顔をした。

「そっか、じゃあ悪かったなあ。

うーん、噂の出所は俺もわかんないけど……お前らさ、他の班の

事情とかあんま知らないだろ？

前期の野外実習の他の班の成功率ってどんくらいだか知ってるか？」

「知らねえ」

「……確か、完遂は四割くらいだと聞いた気がする」

「そ、完璧にクリアした奴らってそんなくらいの割合しかいないらしいんだよ。」

まあ、普通はそうなんだってさ。教授は例年通りだって言ってた」「へえ、意外に少ないんだな」

「うん、だって上級になつて、初めての野外実習だろ？」

自分の実力も行き先の難易度とかも良く判んなかったりするから、準備不足とかペース配分間違えたとか、そもそも無理めだったとかで完全にクリアできるって方が少ないんだってさ。

ちなみに俺はギリギリクリアだったけど結構やばかったもんな」

確かに実習に出かけてみると自分達の予想よりも遥かに大変だと思っただことは多かった。

自分達の甘さや弱さも良くわかり、己を過信していた事を二人も実感している。

恐らくは誰でも最初はそんなものなのだろうと二人にも良く理解できた。

「んで、前期に上手く行かなかつたら当然次こそはって思うだろ？」

一緒に行動すると気の合わない奴とかも良くわかるしさ。

だから後期は前期と違うメンバーっていう事がすげえ多いんだよ」「……じゃあこれもそれが原因ってわけか？」

ジェイがうっとおしそくに封筒を振ると、ルインも頷いた。

「多分な。誰だって次は成功したいって思ってるそこに、前期にあ

の風の森でS評価取った班がありや注目するだろ？

割り込みたいつて思う奴、いっぱいいるんじゃないの？」

「……迷惑な話だ」

それで勝手にメンバーを変える事を決定されては堪らない。

しかも外れる人間まで決定しているような噂はどうにも性質が悪いとしか言いようがなかった。

「魔技科の子が抜けるって噂は、多分一番弱そうに見えるからじゃねえのかな。魔法科の連中、プライド高いしな」

「確かになあ……」

二人が苦い顔で頷いたのを見て、ルインは彼らに手を差し出した。

「それ寄こせよ。俺が断っておいてやるよ。噂は嘘だったって言うてさ」

「お、サンキュー。助かる」

「頼む」

いって、と言いながら手紙を受け取ると、ルインは踵を返した。しかし不意に何か思い出したように足を止めてもう一度振り返る。

「あのさ、もしかしたらだけど……その魔技科の子、気をつけてやった方がいいかもしれないぜ？

お前らの班抜けるとかって脅されるとかあるかも」

「脅す！？」

「在り得るな……分かった、気をつける」

「おう、んじゃない」

ルインは二人に手を振ると鍛錬場を出て行った。

後に残された二人はその後姿を見送り、それから顔を見合わせた。

「行ってみる？」

「ああ」

慌しく後片付けをすると二人は鍛錬場を出て歩き出した。

今すぐどうと言う事はないかもしれないが、何かあってからでは遅いと思うと何となく足が速くなる。

アーシャは脅しなどは気にしなさそうだが、その分彼女の出方は彼らにも予想がつかなかった。

「噂の出所を突き止めなければな」

「……そうというのは任せる」

少しずつ人もまばらになってきた放課後の校内を少年達は足早に通
り過ぎた。

14：視線の行方

アーシヤは目の前にある物を見つめながら少し困っていた。

放課後の魔法学部西棟の裏はいつもにまして静かで、少女がその裏庭の端で立ち尽くしていても気にする者もない。

アーシヤが見ているのは、前期に自分が作った昼寝用のハンモックだった。

だがそれは今は以前と少し様子を変えている。

「うーん……」

アーシヤは唸りながら足元に落ちた蔦で編んだ紐を手を取った。

それはなんとこのハンモックから落ちた残骸の一部だった。

自分で編んだそのハンモックは数日前まで綺麗な網状だったはずなのに、今やそれは見る影もなくずたずたに切り裂かれている。

真ん中のあたりを縦に幾筋も切り裂かれ、飛び散った蔦が辺りに散乱している。木に結んであった端も片方が切れてぶらりと垂れ下がっていた。

アーシヤはふう、とため息を吐くと紐が結んだままになっている木に手を掛けた。

少女は軽い体をひよいとち上げてすると器用に木に登っていく。

そしてハンモックの紐が残る枝まで行くと、腰に差したナイフを抜いてその残りをプチプチと切り離れた。

たちまち支えを失ったハンモックの残骸はバサ、と繁みに落ちていく。

アーシヤは木から飛び降り、それらを集めると地面にひとまとめにして軽く土を掛けた。

元々は森で取った蔦を編んだ紐で出来ているのでこうしておけば

いずれは土に還る。

作業が終わるとアーシャは何もなくなった木の下を少しだけ残念そうに見つめた。

「教授の誰かに見つかったかな……次は隠蔽する魔法も掛けないとだなあ」

どんなのがいいかなあと呟きながらアーシャは裏庭を後にした。

新しい魔具のアイデアについてこのハンモックの上でゆっくり考えようと思つてここに来たのだが、それが無理なら別のことをしよう、と考えて歩き出す。

ハンモックに座っていると何となく落ち着くので昼寝以外にも読書や考え事の場所として時々使っていたのでなくなってしまうと少し寂しい。

「家の中にハンモック作ろうかな……」

そんな事を考えながら西棟に戻ろうとドアに近づくと、それは彼女の目の前で先に開いた。ドアの向こうから顔を出したのは見慣れた少年二人だった。

「あれ、デイン、ジエイ」

「あ、いたいた、アーシャ」

「やっぱりここか」

今日は二人と特に約束がある日ではなかったはずだ。

彼らが約束もしていないのにここへ来るなんて実に珍しい。何だか少し慌てた様子の二人にアーシャは首を傾げた。

「何かあったの？」

「……いや」

「まあ、それは俺達のセリフなんだけど……」

「へ？」

「あ、いや、まあいいや、今日飯一緒に食おうと思って」

慌ててジェイが言うとアーシヤはこくりと頷いた。そういう誘いなら別に断る理由はなかった。

「ん、いいよ。一緒に行く」

「よし、じゃあシャルも誘おうぜ。どこにいるか知ってるか？」

「うーん……図書館か練習室かなあ？ 最近練習室が多いみたい」

アーシヤの言葉に少年二人は頷いた。

「ああ、今年は大会があるからだろう」

「大会？」

「あれ、アーシヤ知らないのか？」

ほら、今年は二年に一度の魔法競技会があるんだよ。俺らのこの武道大会と同じような奴。

お互い見学できるようにって事で、一年おきに交代なのさ。シャルは今年も出るつもりなんだろ」

「……そついやそんなの一年の時にあったような気がするかなあ。

でも授業は休みだけど見学は義務じゃないって言うから家で寝てた」

やっぱり、と二人は思ったが黙って足を進めた。

三人は西棟へ入るとそこを真っ直ぐ通り過ぎる。この時間の西棟はとても静かだ。

ジェイは人気のない廊下を眺めながら隣を歩く少女に問いかけた。

「……なあ、アーシャ。最近さあ、なんか変わった事とかないか？」
「変わったこと？うーん……別にないかなあ」

「何も？」

「んー……レリアルで買った薬草の種が芽を出した事くらいかなあ？」

「そっか、ならいいんだ」

アーシャの返答に少年二人はほっと胸を撫で下ろした。

少女の様子は本当にいつもと何も変わりがなかった。まだ安心は出来ないだろが、それでも今のところは大丈夫かと二人は判断した。

「なんか変わったことあったらいつでも相談してくれよ？」

「ん、ありがとう」

アーシャは笑顔で頷き、やがて三人は渡り廊下を抜け南棟へと入った。

魔法学部の南棟は幾つかの特別教室と様々な魔法の鍛錬用の部屋がある。

魔法を使っても大丈夫なように厳重な結界で守られた部屋を一つ一つ覗いて歩く。

アーシャを真ん中にするようにして三人が歩くと、練習室を使う生徒達の視線がちらほらと向いてくるのを感じた。

アーシャはそんな中、腰に下げた聖霊石を何気ない仕草でそつと握りシャルの居場所を確認した。シャルはもう少し先の練習室の一つにいますようだった。

「あっちみたい」

「ああ」

「おっ」

アーシャが示すままに三人は廊下を歩いていった。
その背中に向けられた幾つもの視線の中に、何だか穏やかならざるものがある事に三人はその時気づかなかった。
通り過ぎる彼らを見送った者達から小さな囁きが漏れる。

「ねえ、どう思うあれ？」

「許せないよね」

「魔技科のくせにさあ」

だがその声は幸か不幸か彼らには届かない。

小さくなる三人の背中を一際熱心に見つめる少女がいる事にも彼らは気づかなかった。

「多分ここ」

そう言ってアーシャが立ち止まった所はかなり奥まった所にある練習室だった。

使用中の札がかかったそのドアを少女はコンコンと叩く。

中から聞きなれた声が出たのを確かめてからアーシャはドアを開けた。

「あら、アーシャ」

ドアを開けるとそこは普通の教室より少し狭いくらいの、何も無い空間だった。

真っ白に塗られた壁が目眩しく、それとは反対に床は黒っぽい。床に敷かれている石には様々な魔法陣が刻まれていた。

シャルはその部屋の中央で、手の平に青い炎を乗せて立っていた。三人が部屋に入り彼女に近づくと、シャルは軽く手を振ってその炎を消した。

「どうしたの皆揃って」

「ご飯誘おうと思ったんだって。シャルも行かない？」

「あら、いいわね。じゃあもうちょっとだけそこで待っていてくれる

？ 後一回試したい魔法があるの。ここももう少し借りてられるのよ」

「うん」

「おう」

三人はシャルの練習をしばし見学する事にして、入り口脇の壁際に立つと邪魔にならないようにそっと見守った。

シャルは彼らに向かって一つ頷くと前を向き直り、杖を掲げて精神を集中する。

そして強い声で呪文を唱えた。

「赤き衣を纏え 揺らめき踊る者 其は変化の兆し 再生への導き
我が内より出でよ 炎の蕾！」

ポツ、と音を立ててシャルの足元から炎が立ち上った。

ゆらゆらと揺らめく赤い炎はまさに蕾のようにシャルを包み込み、次第に上の方から青へと変化していく。

シャルは目の前が赤から青へと変わっていくのを見ていた。

そして

「炎の華、咲き誇れ！」

ゴオツ！！

爆発音にも似た激しい音を立てて、シャルを包んでいた炎が当たり一面にまさに華が開くように広がった。

「うわ！」

ジェイは驚いて思わず顔を手で庇ったが、熱は一切感じなかった。隣を見ればアーシャもデーンも平然とそれを眺めている。

シャルが杖を持った手を前に伸ばすと開いた炎の華はくるりと回るかのように前方へと進んでいく。

炎の範囲は既にこの部屋を埋め尽くすほどだ。

ゆっくりと回りながら進む炎の華はバチバチと花弁を散らしながら部屋の向こう側の壁にぶつかり、そして突然全てが掻き消えた。

「えっ！」

ジェイが驚いて声を上げた。

「ふう、まあまあかしら」

シャルは杖を掲げていた手を下ろすと三人の方を振り向いた。

「どうだった？」

「すっげーよ、シャル！今の、何がどうなってたんだ？」

「そっいえばあんたこの部屋に来るの初めてだったっけ」

ジェイの驚きぶりにシャルは楽しそうに笑った。

「ここは二級以上の詠唱魔法練習室なんだよ。」

威力が大きい危険な魔法を練習する為の部屋で、ここでは魔法は

本当には発動しないんだ」

アーシャが説明するとジエイは目を見開いて驚いた。

「ええ？でもじゃあさっきの炎は？」

「あれは本当は幻なの。本物の炎じゃなかったのよ。だから熱くなかったでしょ？」

驚くジエイとは反対にディーンはこの部屋の事を知っていたらしく平然と頷いた。

「ディーンは知ってたんだね」

「ああ。教授から聞いたことがある。この部屋は発動した魔法の全てを吸収し、消去してしまう。」

そしてその代わりに吸収した魔法が本当に発動していた場合の姿を幻として映し出す、と」

へえ、とジエイは感心して部屋をぐるりと見回した。何もなかった部屋は、とてもそんなすごい秘密があるようには見えなから益々不思議だ。

「でもシャルすごいね。もう二級魔法練習してるんだね」

「前期の実習以来、炎に関しては絶好調なの。もっとも他のはあんまり変わらないからまだまだ修行中よ」

シャルはそう言って楽しそうに笑うともう良いから部屋を出ようと三人を促した。そろそろと外にでると空はすっかり夕焼けに染まり、廊下はもう随分薄暗かった。

「あら、もうこんな時間なのね」

窓のない部屋にこもっている間に思ったより時間が過ぎ去り、シヤルは驚いた声を上げた。

「日が暮れるの早くなったね」

「腹が減るのも早くなった気がするよなあ」

「……お前だけだ」

楽しそうに笑い合いながら四人は歩き出した。

そこに幾つもの視線が向いていることなど、彼らは気にもしなかった。

仲良さそうに歩いていくその四人をコーネリアは別の部屋の戸口の陰からこっそりと見ていた。

部屋を出ようとしたところで歩いてくる四人に気付き、彼女は咄嗟に隠れてしまったのだ。何となく彼らに見つかりたくなかったのだが、自分のその行動が彼女のプライドをチクチクと刺激する。

コーネリアは苛々と親指の爪を噛み、ハッと気づいて慌ててそれを止めた。

以前よりも日に焼けてしまった手や腕が視界に入り、それがまた彼女を苛立たせる。

コーネリアが今いるのは三級から五級用の詠唱魔法練習室だ。利用者が多いこの部屋は張られている結界はあまり強くないがその分広く作られている。

だからもちろん今も部屋の中には他の人間の姿がある。人目がなければ苛立ちを隠さず怒鳴り散らしたい所だった。

コーネリアは出入り口の向こうをもう一度そっと覗き込み、少しずつ小さくなる四人の背中を見送った。その中の一際小柄な人物が

彼女の目を引く。

「……あんな子供に負けただなんて」

コーネリアを今何より苛立たせているのはシャルや少年二人の存在ではなく、その間に見え隠れしていた小柄な少女の姿だった。

あの森での敗北以来、コーネリアは補習や奉仕活動の合間を縫って魔法の練習を更に積んでいる。

彼女は今まで魔法学部と同じ学年の中で、成績でも魔法の腕でも自分が勝てないのはシャルフィーナー一人だけだと思っていた。

それもいつかはきつと勝ってみせると思っていたのだ。

ところがあの森で、彼女のチームは勝利を目前にしてたった一人の魔技科の少女の放った不可思議な魔法に破れてしまった。

あの時は分からなかったが、今はあれが森の精霊を動かした精霊魔法だということは分かっている。

森の精霊は地の精霊の下位に当たる。

そんな下位の精霊に、不意を討たれたとはいえなす術もなく叩きのめされた事実がコーネリアにはどうしても許せなかった。

少女の仲間達の姿がなければ今すぐこの場で一対一の果し合いを申し込みたかった程だ。

いつか必ず再戦を挑んでみせる、とコーネリアは壁に寄りかかって固く拳を握り締めた。

「ああ、コーネリアじゃない？ どうしたの、そんなところに隠れちゃって」

部屋の入り口から聞こえた艶やかな声にコーネリアは思わず身を固くした。

振り向くとそこには一人の少女の姿があった。面倒なのに見つか

つた、と内心で苦く思う。

「隠れているなんて人聞きの悪い事を言わないで下さいませんか？
ただ少し休憩してただけですわ。」

貴女こそなにか御用ですの、カトウラ？」

カトウラ、と呼ばれた少女はピンク色に塗った唇を上げ、にっこりと笑顔を見せた。その笑顔は少女と言うには大人びていて、女性と言うにはまだ足りない、どこか危うい魅力を放っている。

「大した事じゃないのよ。ちょっと世間話でもと思って」

そう言つてカトウラは入り口脇の壁に寄りかかったままのコーネリアの前までゆっくりと歩いてきた。

癖のある艶やかな褐色の髪が彼女の動きに合わせてゆらゆらと揺れる。まるで猫のようにしなやかな、どこか色気を感じさせるような動きだ。

コーネリアは彼女と同じクラスだが、このクラスメイトの事があまり好きではなかった。むしろ嫌っていると云つても良い。

実力はあるのに勉強よりも色恋に熱心で、高慢で陰険な性格だからだ。

薄っすらと化粧で彩られた顔は確かに大人びて美しいし、スタイルも良い。だが次々と男を取替え、時には他人から奪うような真似を平然とすると評判の人間を好きになれるはずもない。

最近彼女は五年の武術学部の男と付き合っていると言つ噂だったが、それが本当かどうか誰も確かめようもしないほど、しよつちゆう相手が入れ替わるのだ。

貴族出身の癖に下品な女だ、とコーネリアは彼女の事を内心では軽蔑していた。

「……貴女と私に共通の話題なんて何かあったかしら？」

「あら、その話題はさっき廊下を通って行ったばかりだと思ったけど、違ったかしら？」

「……！」

コーネリアが口を嚙むと、カトウラは楽しそうにくすくすと笑った。

「ねえ、貴女はどう思うの、あれ」

「どういう意味ですか？」

「だからあ、魔技科の人間があの中に混じってるなんて、場違いだと思わない？ってこと」

コーネリアはその問いに思わず唇を噛む。その魔技科の人間に負けた悔しさが沸き起こったのだが、カトウラはそれを違う意味に見て取ったらしい。

「あは、やっぱり面白くないわよねえ？ おまけにあの子、しょっちゅうアルロード君達と一緒になのよ。ちょっと許せたくない？」

綺麗に爪を塗った指を頬に当て、カトウラはつまらなそうな仕草をした。

コーネリアはその芝居がかった仕草を鬱陶しく思いながら、彼女の言葉に首を横に振った。

「そういえば貴女、随分前からディラック様に付き纏っていましたわね」

「付き纏うだなんてひどいわ。純粹に振り向いて欲しいからアタックしてるだけよ？」

「あら、その割には実際は違う相手ばかりとお付き合いしていますのね」

「だって、あの人だったら誰とも付き合ったりしないんだもの。相手にしてもらえないならやっぱり寂しいじゃない？」

でもね、誰かの物にならないならずっと憧れていられるからそれならそれでいいのよ」

カトウラは形の良い唇を面白くなさそうに尖らせた。そんな仕草も愛らしく見えるのだから、これに引つかかる男は多いだろう。

他の男と付き合っても彼女は本命へのアプローチを止めたことはないし、そもそも憧れなんて可愛いものを抱くような女ではないのだが、大抵の男達にはそれが分からないらしい。

コーネリアが馬鹿馬鹿しく思いながら黙っていると、それをどう受け取ったのか、カトウラは華やかな笑顔を見せて言った。

「だから、シャルフィーナならともかく、あんなちんくしゃが私より相手にされてるなんて許せないの。分かるでしょ？」

「……」

コーネリアは呆れてため息を吐いた。

彼女もその点は多少は同意しなくもない気持ちだったが、それを表には出さなかった。そんな単純な理由だけで相手を敵視するなんてプライドが許さない。

コーネリアはあくまでもあの少女を、シャルフィーナと同じく打ち負かしたい相手として見ているのだ。

「くだらないですわ。つまりは貴女の方が魅力がないということではなかつて？」

「そうねえ、人は時として完璧な物よりも他愛のない物を愛したりするから仕方ないかもしれないわね」

そういうことをぬけぬけと言いつつもカトウラが同性から嫌われる所以だろう。

「だったら貴女も少しはそういうものを目指して見てはいかがかしら。話がそれだけならもう失礼させて頂きますわ」

これ以上彼女とくだらない話をして同類に見られるのはごめんだつた。

同性に嫌われているカトウラは時々こうしてコーネリアに話しかけてくるから周りからはそう思われやすいのだ。

「あら、違うのよ。良かったら貴女にもちよつと手伝ってもらえないかと思つて」

「手伝う？」

「そう、私つたらほんのちよつとだけ悪戯してみたりしたのに、全然効かないんですもの。噂も駄目みたいだし、つまらないわ」

「噂つて……あれ貴女の仕業でしたのね？」

「やあだ、違うわ。私だつて人から聞いただけよ？」

シャルフィーナチームが新しい人間を入れることを考えていると言つ噂をコーネリアも知つていた。噂は随分と魔法学部に広まり、彼らのチームに入りたいと言いつ出す者もそれなりにいる。

コーネリアも同じクラスの者達が、やっぱり魔技科なんてだめなんだと馬鹿にしているのを度々聞いていた。

だが四人の様子からはチームを解散するような雰囲気は見えないし、おかしいと思つていたのだ。

噂を聞いたシャルフィーナの友人達が彼女と一緒に組むことを持ちかけて断られたと言つ新たな噂も出ている。

カトウラは否定したが恐らく彼女が発したか、煽っているかは間違いないだろう。彼女はいつだって男達を上手に使うし、上辺だけだろうが仲の良い似たタイプの女達も何人かいる。

コーネリアはそういうやり方は好きじゃなかった。文句があるなら直接言いに行けばいいのだ。自分がシャルフィーナに何度でも挑むように。

「この私に嫌がらせを手伝えと言うつもりですか？ くだらない！」

「あら、だって貴女がとつても怖い目であの子のこと睨んでたから。違ったかしら？」

「べ、別に睨んでなんていませんわ！私はただ……あの子が精霊魔法の使い手だから、挑んでみたいと思っただけですわ！」

あらしうなの、とカトウラはつまらなそうに呟くと何か思案するかのような顔をした。

「貴女が挑んでみたいだなんて、あの子強いのか？」

「そ、それは……そういう噂ですわ。でもきつと私が勝ちますけどね！」

まさか既に一回負けているとは言えなかった。

コーネリアのチームがシャルフィーナのチームを妨害した挙句に大敗し、課題に大失敗した事は生徒達には知らされていない。

ただ六人でも失敗した、という事実が伝わったのみで、それは風の森の厳しさを生徒達に知らせる結果になった。

シャル達も何故か言い触らす事はしていない。

内心の苦々しさや苛つきが顔に出ないように、コーネリアは必死で平静を装った。

そんな彼女の様子に気付く風もなく、カトウラは細い首を優雅に傾けた。

「……そう、挑んでみたいの。ふうん……面白いかもしれないわね」
「何を一人で納得してますの？」

コーネリアは苛々しながら問うたがカトウラは首を振ってにっこりと笑った。

「それ、実現するといいわね。じゃあまたね、コーネリア」
「は？」

ヒラヒラと白い手を振りカトウラは突然踵を返して部屋から出て行った。

あまりに唐突なその態度に、残されたコーネリアは彼女が何を考えているのかさっぱり分からず、そこに立ち尽くしたままそれを見送る。

だが彼女が何を考えているにしろ、良い事でないのだけは確かだろう。

そう考え、この事をシャルフィーナ達に話すべきかどうか、コーネリアは迷った。

だが自分が言ったところで信じてもらえるかどうかは分からない。

「……面白くありませんわ」

高慢で自信家で鼻持ちならないお嬢様と言われるコーネリアだが、同時に彼女は誇り高く勇敢なる挑戦者でもある。

敵に塩を送るべきか、成り行きを見守るべきか。

コーネリアはカトウラの出で行った扉を見つめたまま、深く考え込んでいた。

15：手紙の主

秋は早足で学園の周りに訪れつつあった。

そんな秋の色の学園では、十月に入ってから魔法学部魔技科の生徒達は何となく落ち着かない毎日を過ごしていた。

廊下を歩いていて他の科の生徒とすれ違ったりすると何となく馬鹿にしたような目で見られる事があるのだ。

別の学部から見ると全員同じように見える魔法学部の生徒達も、同じ学部内から見ると持っている道具などで何となくどの科か区別がつく。

魔技科を積極的に馬鹿にしているのはもちろん魔法科の生徒達だが、ここ最近は特にその風潮が強くなった気がして誰もが居心地の悪い気分を味わっていた。

ただ一人、その原因であると思われる少女を除いて。

「あれ？」

放課後の教室で、アーシャは小さな声を上げて机の中を覗き込んだ。

机の中に入れておいたバッグを取ろうと引っ張ったら、何かが床にばさりと落ちたのだ。

バッグを取り出して床に落ちた物を拾ってみると、それは封筒だった。

他にも白や薄いピンクといった可愛らしい封筒が数通、机の中に入れてあった。

「手紙？」

「表も裏も確かめたが、どれ一つとして宛名も差出人も書いていない。そんな封筒が机の中になんと六通も入っていた。」

「アーシヤは封を開けようかどうしようかと考えながら見つめ、微かに漏れる魔法の気配に気がついた。」

「んー……」

一度目を瞑り、それからまた開くとアーシヤの視界が一変する。

「良く見えるようになった目を封筒に向けると、手の中の六通のうち、三通に魔法が掛かっているのが見て取れた。」

「中の便箋に魔法陣が描かれているらしく、良くは見えないが開けると何か発動そうな予感がしたのでそっと脇に避ける。」

「残りの三通は危険が無さそうなることを確かめてから、そっと一つを封筒をあけて中身を取り出した。」

「……何だろこれ」

「開いた便箋にはびっしりと文字が書き連ねられていた。読むのが実に難しい、目が泳ぐような細かく丸い可愛らしい文字がぎゅっと詰まって並んでいる。」

「だが内容は、その可愛い文字に似つかわしくない罵詈雑言や悪口の類であるようだった。だった、というのは目が泳ぐのでまともに読めないのだ。」

「大した内容は無さそうだったし、手紙からは悪意がにじみ出ているような気がしたのでアーシヤはそれをそっと封筒にしまった。」

「もう一通開けてみると、こちらも似たような内容だった。ただ先ほどの物よりは少しだけ字が読みやすい。」

「ざっと斜め読みすると、アーシヤがシャル達と組んでいるのが気

に食わない、身の程を知れ、早く班を抜ける、といった事が書いてあるようだった。

「ふうん」

アーシャは面白そうに呟くとそれを避け、最後の一通を手にとった。

最後の手紙は実に簡潔に用件だけが書かれていた。

『魔法競技会で私と勝負なさい！私が勝ったらあの班を抜け、以後一切彼らに近づかないと約束しなさい！』

以下、貴女はあの三人とは不釣り合いなのです、怖気づいて逃げ出さずちゃんと競技会にエントリーするように、などと書いてある。

署名はコーネリアとなっていた。

「コーネリア、コーネリア……ああ」

どうやらコーネリアはようやくアーシャに何となく存在を憶えてもらえたらしい。

アーシャは手紙をひらひらと揺らすと、これはどういふことかと考えた。

こんな手紙を彼女から貰う理由が良くわからない。

「本人に聞くのが早いかな……」

もう放課後だし、今ならまだ学園内にいる生徒は多い。急げば彼女を捕まえられるだろう。

だがアーシャは彼女がどのクラスなのか知らなかった。魔法科

らしいということとはシャルから聞いて知っていたが、魔法科はクラスが結構多い。

アーシャはコーネリアからの手紙を畳んでポケットに入れ、その他の手紙を集めて入り口の脇にあったゴミ箱に放り込んだ。

魔法学部のカミ箱は多少危険な物を入れても大丈夫な仕様になっているので安心だ。

それからコーネリアの手紙が入っていた封筒を手にとった。中に便箋は戻していないので空のままのそれをアーシャはビリビリと手で千切り始めた。

なるべく小さくなるように何度も何度も千切る。

やがて小さな紙吹雪が手の平に一掴み出来上がった。

紙吹雪を手握ったまま、アーシャは廊下へ出て窓を開けた。ひゅっ、と気持ちのよい風が頬を撫でる。アーシャはその風に向かって頼んだ。

「これを送り主のところへ運んで」

千切った紙を乗せた手を開くと、風の精霊達がそこに集まる。

手の平に乗せた紙吹雪は瞬く間に風にさらわれ、ひらひらと飛んでいく。

その場でぐるりと一回渦を巻いた風は、紙吹雪を乗せたまま廊下を吹き抜けて行く。

アーシャはその後を追って歩き出した。

歩いていると置いていかれそうになるので、少し小走りで紙吹雪の後を追う。

魔法科のある階に来たアーシャはそのままそこに行こうと足を速めた。だがアーシャの目の前に行く精霊達は角を曲がらず、そのまま上の階に向かって更に進んでいく。

「あれ？」

アーシャは慌てて階段を登ってその後を追った。
魔法科は東棟の最上階にある。この上には教室はないはずなのだ。
訝しく思いながらも精霊を信じるアーシャは彼らの後に付いて行
った。

「じゃあ、また後でね」

「ああ」

そんな声が聞こえ、顔を上げると少年が一人降りてくるのとする
違った。

もちろん知らない顔だったが、どうやら魔法科らしい。アーシャ
が道を譲ると少年は礼も言わず、さも当然のような顔をして階段を
下りていった。

「きゃっ、何これ」

それをしばらく見送っていたが、不意に小さな声がしてアーシャ
は視線を階段の上へと戻した。

屋根裏の倉庫へと続く階段の突き当たりには、コーネリア
ではなく、褐色の髪知らない女生徒だった。

「やだもう!」

彼女は自分に纏わりつく紙吹雪を追い散らそうと懸命に手を振っ
て身を振っている。

アーシャは風達にもういい、と胸の中で声をかけた。

途端に紙吹雪は力を失い、ちらちらと女生徒の足元に降り積もる。

「なんなの、もう!……あら?」

「……こんにちは」

女生徒は階段の下の踊り場にいたアーシャに気付き目を見開いた。

「……こんにちは。何か御用かしら？」

「んー……、あなたに会うつもりじゃなかったんだけど、まあいいや。手紙、くれたでしょ」

「……何のことかしら？わからないわ」

女生徒は首を傾げて肩をすくめた。

だがアーシャは首を横に振り、彼女の足元を指差した。

「その紙吹雪、私が送ったの。手紙の差出人のところに精霊に連れてってもらおうと思って」

彼女はハツとした顔をした。一瞬眉を顰めたが、すぐに気を取り直して笑顔を浮かべた。

「そう、精霊魔法が使えるって言うのは本当だったのね。

そうね……確かにその手紙は私が出したのよ」

「何で？」

「コーネリアが貴女と勝負したがついていたから、実現させてあげようと思って。私達友達なの。受けてあげてくれないかしら？」

「断ろうと思ってきた。勝負する理由がないから」

「あら、勝負する理由は書いてなかったかしら？班を抜けるかどうかを賭けて、って」

そう言って彼女はにっこりと笑った。アーシャはその笑顔が気持ち悪い、と感じた。口だけが笑っていて、顔が歪んでいるように見える。

「そんなのは理由にならない。その賭けを受ける利益は私にはないし、私が抜けてもあの人はシャルと仲が悪いからきつと班に入らない」

アーシャがそういって彼女は面白く無さそうにフン、と鼻を鳴らした。

「あら、利益ならあるわよ。貴女がいなくなれば貴女の仲間達は足手まといが居なくなつて身軽になるもの。そうなれば貴女だつてうれしいんじゃない？」

「足手まとい？」

彼女の言った言葉の意味が判らず、アーシャは首を傾げた。

それをどう受け取つたのか、彼女は頷いて可哀想なものを見るような目をアーシャに向けた。

「そうよ。貴女何も知らないでしょう？魔法科では噂になつてるのよ。」

貴女が足手まといだつたから彼らは実習ですつごく苦労したつてでも貴女が可哀想だから班のメンバーから外したい事を言えないでいるつて」

「……」

「仲間達に悪いと思わない？彼らが言い辛いなら自分から離れてあげるのがいいんじゃない？」

だからコーネリアは貴女に口実を上げようと思つたのよ、きつと」

アーシャは彼女が切なそうな演技をしながら語る言葉を聞きながら、面白いなあ、と思つていた。

本当のところ、アーシャ達が具体的にどんな旅程で、どんな事を行いながら森の中で過ごしたのかは他の生徒達には一切公開されていない。

その理由は単純で、これからもそこに挑む生徒達がいるからだ。行く場所の情報が予め行き渡ってしまつと課題にならないから、ほとんどの実習の情報はクリアした生徒達も外部に語らないよう求められる。

それでもやはり多少は生徒達から漏れるものだが、アーシャ達の場合は色々隠しておきたい事があつたので、仲間達は誰かに軽々しく語つたりしていないと言える自信があつた。

それなのにこうして根拠のない噂が出てくるというのだから、生徒達の好奇心と言うのは本当に面白い。

(でもちよつと気持ち悪いな)

アーシャは目の前で語る女生徒を見ながら、人が集団になると起こる弊害についてしばし考えを巡らせた。

「……だから、つて聞いているの!？」

バン、と音がしてアーシャは意識を目の前に戻した。

女生徒が壁を叩いたのだ。彼女は苛立つた顔でアーシャをきつく睨みつけていた。

「聞いてなかった。えーと、つまり何？」

「なつ……だから！魔技科の癖に野外実習に参加するなんて場違いだつて言ってるの！彼らの班から抜けなさいよ！」

目の前の少女が全く動じていない事に苛立つた彼女は、先ほどまでのしとやかさを捨て怒鳴りつけた。

「やだ」

「っ！」

アーシャの簡潔すぎる返答に彼女は息を呑んだ。大人しそうな少女だから少し言い聞かせればすぐに諦めるだろうと思っていたのだ。

「名前も知らない人にそんな事言われる筋合いはない。それに、私の仲間達は私が要らないならきつとそう言っ」

自分を連れて行けない場所があるならば、彼らは必ずそう言っ
アーシャは思っている。

それは彼らの足手まといだからという事ではなくて、連れて行くことが少女の為にならないから、とそういう風に考える人達だと知っている。

それに今のところ足手まといになっているつもりもないのでそんな心配は不要だ。もしこの先一緒に行けない可能性があるのであれば、アーシャはちゃんと努力するつもりでいた。

彼らと一緒にいたいから。

アーシャがそう思っていると目の前の女生徒は信じられない、と言うように目を見開き、次いで顔を赤らめた。どうやら怒っているらしかった。

「カトウラよ！カトウラ・マグルール！貴女私を知らないの？」

「知らない」

どうせ忘れるだろう、と思いながらアーシャは頷いた。

「っもう！何なの……これじゃ……」

カトウラは苛々と足を踏み鳴らしながらぶつぶつと呟いた。どうやら計算が狂った事が苛立たしいらしく、艶やかな髪の一房に指を伸ばしくるくると捻っていく。

このカトウラという女生徒が結局何がしたいのかアーシャには今ひとつ分からなかった。

言いたい事は言ったし、そろそろ立ち去ろうかとアーシャが考えていると、カトウラは不意に気を取り直したように彼女の方を見た。そしてにっこりと笑う。

「貴女最近、なんだか運が悪かったりしない？」

「……運？」

「そう、身の回りでちょっとした残念な出来事が続いてたりとか……」

アーシャは軽く目を見開いた。彼女の言いたい事が分かったのだ。その様子を見てカトウラは悲しそうな顔を見せた。

「あら、勘違いしないでね。私じゃないわよ？けれど、悲しいかな世の中には噂に踊らされる人が沢山いるから仕方ないわ」

「……噂に？」

「そう、魔法科と魔技科は仲が良くないから。」

魔技科の貴女が魔法科のシャルフィーナと仲良くすることを面白く思わない人は、どちらの科にもきつと沢山いると思うのよ？」

アーシャは彼女が言った事を良く考えてみた。

だが、別にそれによって何か害が発生するとも思えない。

今までにあった小さな不運と呼べるような出来事も、結局は少女に何もダメージを与える事は出来ないでいる。

シャルにしたって、彼女に何かを仕掛けて勝てる人間がいるとは思えない。だからそれを素直に告げた。

「別に私は嫌な思いしたりしないし、シャルだって負けないと思うよ」

「そうねえ、シャルフィーナは強いものね。でも他の人はどうかしら？ 貴女のクラスメイト達とか、ね」

「クラスメイト？」

そういえばそんなのも居たか、とアーシャは薄く笑った。

それこそアーシャにとってはどうでも良い存在に他ならない。少女は肩をすくめると踵を返した。

「何だか良くわかんないけど、そんなのが私に対する効果になると思うなら勘違いだよ」

「え？」

「だからとりあえず競技会に出る気はないから。何がしたいのかわからないけど、班に入りたいなら直接シャル達に言った方が良く思うよ」

「……！」

頬を赤らめて黙ったカトウラの方を見もせずアーシャは歩き出した。つまらない事で時間をとってしまった、と少し後悔する。

何がしたいのかわからない変な人だったな、と思ったがもう考えない事にして少女は足を速めた。

階段を下りていく足音を聞きながらカトウラは苛々と髪をかき上げた。

「これだから子供は……全く、嫌になっちゃう」

自分が表に出る気はなかったのに予想外に見つかった挙句、どんな話も功を奏さなかった。

「魔技師なんて、弱くて役立たずの癖に……生意気だわ」

少女が抜けた後に自分が入れるとはカトウラはもちろん思っていない。

ただ単にとても気に食わないだけだ。

魔技科の生徒が自分の気に入っている人間の傍にすることが。

おまけにあの少女は精霊魔法が使える加護持ちだという。それなのに魔技科を選んでいる事も輪をかけて気に食わなかった。

「……面白くないわ」

カトウラは軽く唇を噛締めたが、すぐに気を取り直して前を向いた。

自分が蒔いた種はまだそこかしこに残っている。失望するには早いだらう。

とりあえず今はこの憂さを晴らす方法でも見つけよう。余裕がなければ考えも上手く回らない。

カトウラは頭の中で、呼び出せばすぐに出てくる男達のリストから適当な人間を探した。

金のあるのにしよう。何か美味しい物を食べれば少しは気も晴れるだらう。ついでに買い物にしても良い。

気晴らしになる事を考えながらカトウラは人の少なくなってきた校舎を優雅に歩く。

けれど、その眉間についた細い皺はいつまでたっても消えることがなかった。

15：手紙の主（後書き）

定期更新しなかった分をとりあえずまとめてアップしてみました。
もう結構後半まで順調に書き進んでいますので、暫くはこのまま不
定期で行く予定です。

16：大きな亀裂

ライラスは憂鬱な気分で廊下を歩いていった。

つい今しがた遭遇した出来事が彼の気持ちに暗くさせている。

廊下で魔法科の生徒とすれ違った時、工具を持っていたライラスを見た相手に道を開けると言われたのだ。

馬鹿にしたようなその口調に面食らっている肩を押され、持っていた工具の幾つかを落としてしまった。それをまた笑われて、ライラスは慌てて工具を拾い、逃げ出すようにその場を去ってきた。

最近の魔法学部ではこんな事が良くあり、魔技科の生徒にとって居心地悪い事この上ない。

前からなかったとは言えないが最近は何にひどい気がする。

この事態の原因は恐らく、最近ずっと魔法学部に流れている噂に違いないと思われた。

内容はもちろん、野外実習に付いて行った人数合わせの魔技科の生徒がひどい足手まといで迷惑をかけた、という奴だ。

結局他のメンバーのがんばりで課題は達成したものの、達成できたからこそ足手まといだった人間に抜けてくれと言えずにメンバー達は困っているという。

役に立たない足手まといだったくせに、空気も読めないなんて、と非難の声は多いらしい。

実習などの班編成を巡る大小様々ないざござは季節になればいつだってどこかで起こる類のもので、ある意味当たり前前の出来事だ。

なのに今回は何故だかその噂が大きく広がり、しかも噂の渦中の人物達が実に目立つメンバーだったこともあり、未だに消える気配もない。

だからその目立つ彼らのファンとも言える生徒達が、魔技科に向かつて同じ科なら元凶の少女に忠告すべきだろうと有形無形の圧力をかけてくるのだ。

魔技科の生徒達は、その圧力の中心となっている横暴な魔法科の人間にも、同じ科でありながら誰とも交流のない少女にも、どう出るべきか分からず誰もが困り果てている。

(こんなんじゃ何か面倒が起きるよな、きっと……)

渦中の少女の事も知っているし、会話を交わした事もあるライラスは何か言つてやるべきなのかどうか迷っていた。

夏期休暇中に会った時、もっとちゃんと忠告すべきだったかと少し後悔もしている。

ライラスは暗い気分を消せないまま、展示室と書かれた目的の教室に辿り着いた。

この部屋には、夏期休暇の課題として提出した生徒自作の魔具が展示されている。今日はその引取り日だった。

自分で作つて提出した工具セットをやつと引き取れる日が来てライラスはほつとしていた。せつかく良く出来たと思ったのにしばらく使えないのは残念で、ずっとこの日を待っていたのだ。

キィ、と音を立てて扉を開くと、同じように自分の作品を取りに来た生徒達が部屋の中にいるのが目に入った。

だがその数人の生徒達は何故が一箇所に集まり、ライラスの出現に驚いたように扉の方を見た。

一斉に視線を向けられ、ライラスの方が思わずたじろいでしまった。

「なんだよ、何して……」

ライラスはクラスメイト達に声をかけようと思ったが、彼らの一人がさつと後ろ手に隠した物に気付いて目を見張った。

「お前ら、それ……グラウルの作った奴だろ」
「……」

彼らが後ろに隠した飾り気のない小さな箱はアーシャが作って提出した物に間違いない。護符の消耗を減らすというそれを、売れそうだなと思いつながらライラスは良く見ていたのだ。

ライラスは彼らを思わず睨みつけた。

彼らの顔を良く見れば、クラスメイトもそうじゃない生徒も混ざっている。全員が魔技科なのは間違い無さそうだったが他のクラスの生徒までいる事にライラスは少し驚いた。

「お前ら、それどうするつもりなんだよ」

彼らは何も答えず顔を逸らした。

ライラスは何故だか無性に腹が立って足音も荒く彼らに近づいた。

「みつともない真似すんなよ！ お前らだって、自分が作ったもんに変な真似されたら嫌だろ！？」

「じゃあ私達が毎日嫌な思いしてるのは良いつて言つの！？」

後ろ手に小さな箱を隠した少女が叫ぶように言った。

彼女はライラスと同じクラスの、割と成績の良い部類の生徒だ。

大人しい人間の多い魔技クラスの中では明るくて、結構目立っていた。

「あの子が悪いんじゃない！ あの子が身の程知らずな事して、何でそれで私達が嫌な思いしなきゃいけないのよ！」

そうだそうだ、と賛成する声が周囲の人間から上がる。だがライラスは首を横に振った。

「だからって、お前らがしようとしてる事は違うだろ!？」

噂が本当かなんてわかんないし、そんな事して何か解決するのかよ!」

「噂が嘘だつて言う証拠だつてないじゃない!」

ライラスは少女が隠している小箱を取ろうとしたが、周りの生徒に阻まれて果たせなかった。

少女は箱を持ったままライラスから遠ざかり、それを高く掲げた。

「魔技科の生徒なら魔技科の人間と付き合いえば良いのよ!

そしたら誰にも迷惑をかけないし、私達だつて付き合い上げて良いのに!」

「別に付き合い合ってもらわなくて良いよ」

唐突に響いた静かな声に誰もが一瞬凍りつき、そして声のした方を見た。

いつの間にか入り口の扉に、小柄な少女が寄りかかって立っていた。

ライラスはアーシャとクラスメイトの少女を交互に見やり、そのタイミングの悪さというか良さというかに頭を抱えたい気持ちになる。

今彼女が現れても、火に油を注ぐ事になる気がした。

そんなライラスの心配を余所に、アーシャは部屋の中をぐるりと見回すため息を一つ吐いた。

「はあ……ほんと面倒くさい」

アーシャが小さく呟いた言葉は、小箱を持った少女の羨みかけた怒りに早速たつぷりと油を注いだ。

「面倒くさいって何よ！

あんたね、成績の良い人達とチーム組んだからっていい気になってるんじゃないわよ！」

激昂した少女の声に賛同した他の生徒達も、口々にアーシャに憤りをぶつけた。

「そうよ、本当は足手まといだったんじゃないかって周り皆そう言ってるじゃない！」

「大体精霊魔法使えるって本当なのか？ 怪しいもんだよな」

「そうよね、だったら魔法科に行けばいいじゃない」

「やめるよお前ら！」

ライラスは思わず叫んだが、クラスメイト達は非難をやめようとはしなかった。

責められているアーシャはと言えば、表情一つ動かさずそれらを黙って聞いた後、ふあ、と小さな欠伸をした。

あまりに場違いな呑気な様子にライラスも周りも思わず動きを止めた。

アーシャは退屈そうに彼らを見回すと、小さく肩をすくめた。

「……ほんとに、魔技科の人達って揃いも揃って、”魔法科の落ちこぼれ”なんだね」

「なっ！！」

少女の辛辣な言葉に誰もが顔色を変えた。だがアーシャはそんな事は意に介さず言葉を続ける。

「何で魔技科だつて誇れないのか、私にはそつちの方がわからないよ。」

何で魔法科に対してそんなに卑屈になるの？ どうして魔法が沢山使えると魔技科を選んじや駄目なの？ どうして魔法科の人と仲良くしちやだめなの？」

アーシャは部屋の中に飾られた生徒達の作品を眺めた。

良く出来た物もあればそうでない物もある。

懸命に作られた思いのこもった物もあれば、嫌々作られた投げやりな物もある。

「魔法科の人間だつて理解できない。魔技師が作った杖を持って、ローブを着て、護符を着けて、それでどうして魔技師を馬鹿にするのかな」

知ってる？ と少女はライラスの方を見て聞いた。

ライラスは小さく首を振った。

その場の誰もが少女の疑問に答えられなかった。彼女の問いは彼らの中に燻っていた様々な思いをじわじわと顕わにしてしまう。

「そ、そんな事どうでもいいのよ！ 私達があんたのせいで迷惑してるのは確かなんだから！」

「あつ！ おい、やめる！！」

ライラスが止める間もなく、小箱を手に持ったままだった少女はそれを高く振り上げた。

ガシャン！！

固い音を立てて箱は床に叩きつけられ、破片が辺りに散った。蝶番が弾け飛び、ふたが割れてそこに嵌っていた透明な石が外れて転がった。

アーシャはそれを無感動に見つめると、足元まで転がってきた石をひょいと拾い上げた。

光に透かして石の状態を確かめる。傷は付いていなかった。アーシャはそれをポケットに入れた。

これはアーシャがシャルの誕生日に贈った物の試作品だった。完成品よりは若干劣るが、そこそこの出来に仕上がったので休暇の課題として提出したのだ。

作った物はいつか壊れる。永遠などはない。

それが解かっているから壊れた事に対して特に何も思わないけれど、ほんの少しだけ悲しい気がした。

アーシャはまたため息を吐いて、望みを果たしたのに固い顔をしている少女の方を見た。

「結局、私に何を望むの？」

「そ……そんなの、決まってるじゃない。

あんたがああ三人の班を抜ければいいのよ。そうしたらもう周りだって何も言わないわ！」

「そう……」

アーシャはその答えに小さく呟くと、何か考えるように首を傾ける。

それからもう一度彼らに向き直り、小さく息を吸うと言いつつ放った。

「やだ」

べえ、と舌を出すとアーシャはすつと踵を返した。

その言葉の意味を誰もが捉えそこね、硬直している間にアーシャはするりとドアの向こうに姿を消した。

我に返ったライラスは慌てて後を追うべく廊下へと飛び出す。

背後からは同じように我に返ったらしいクラスメイトの怒りの声が聞こえてきたが全て無視して辺りを見回した。

足の速い少女はもう廊下の角へと差し掛かっていた。

ライラスは慌ててその後を追って走り出した。

アーシャは足早に一階まで行き、近くの窓を開けるとそこからひよい、と外に出た。

纏わりつく空気が気持ちが悪いくらいにして早く外に出たかったのだ。無性に森に行きたい気分にならぬが、アーシャは少しでも緑のある所へ行こうと、足を中庭へと向けた。

「おい、待ってっ！」

その声に後ろを見ると、少年が一人アーシャの出てきた窓から慌てて降りてくるところだった。

さっきあの場に居た顔だ。

茶色の髪と水色の瞳という見覚えのあるこの色合いは、レイアルで会って忠告をくれた人物だと分かっていた。

アーシャは名前を思い出そうと懸命に記憶を漁る。

「はあ、お前足速いな……」

少年はアーシャの前まで来ると荒く息を吐いた。
アーシャはそれには応えずぶつぶつと小さく呟いた。

「……ラ……マ？ んー……バルド？」

「ライラスだよ、ライラス！ 何でバルドしか覚えてないんだ！」
「良い工房の名前は覚える」

ライラスはその場にガクリと膝を着いた。

なんだか何かにすごく負けたような気持ちになったのだが、アーシャはそんな彼の悲嘆は無視して問いを投げた。

「何か用？」

「あー……用つつーか、その、ごめんな。さっきの、止められなくて……」

「別にライラスのせいじゃないから気にしなくていいよ」

「けど、作った物壊されたら、やっぱり悔しいだろ」

「物はいずれ壊れる。次はもっと良い物を作るよ。叩きつけても壊れないようなのを」

少女の答えにライラスは目を見張った。

「そっか……お前、やっぱり強いなあ」

ライラスは立ち上がって服の汚れを軽く叩くと、近くにあったベンチにアーシャを誘った。

ベンチに腰を下ろした二人はしばらく黙ったままだった。

アーシャは彼があの場合で自分を庇おうとしていた事を思い返し、その意味を考えながら口を開いた。

「……聞いていい？ レイアルで言った嫌な事ってのは、つまりはああいう事？」

「ん、ああ……憶えてたのか。まあ、そうだな、もうちょっと大人しいかと思っただけだな。似たようなもんだな」

「そう……じゃあ、ライラスは経験者？」

「え？」

アーシャは真っ直ぐな目をひたとライラスに向けた。

「そういう風に見えた。私よりライラスの方が辛そうな顔してた」

「お前が変化なさ過ぎなんじゃないのか……」

ライラスは呆れたように呟いたが、確かに少女の言った事は事実だった。

彼はため息を吐いてしばし俯き、それからゆっくりと、あの時語らなかつた話をポツリポツリと始めた。

「俺に限らず、魔技科ではまあ、よくある話なんだけどさ……」。

俺さ、基礎学部からここに通ってただけだよ、すげー仲の良い友達っていうか、親友がいたんだよ」

「……いた？」

「や、いや、えーと、今でもそいつは魔法科にいる……けどな。フランツって言うんだ」

うん、とアーシャは頷いて先を促した。

「ちょっと大人しいんだけど、気の優しい良い奴で、俺達は何するにも一緒で。」

「フ란ツは補助系とか回復の魔法が得意でさ、その分野では結構成績が良かった。」

「だから、上級に上がる時に、あいつは魔法科を、俺は希望通り魔技科を選んだんだ」

科が別れても、ずっと二人の仲は続くとライラスは思っていた。
あの頃は。

「俺はいつか立派な魔技師になって、お前の力になるようなすごい杖作ってやるって約束してて。」

科が違ってもしょっちゅう一緒にいるんだ……けど」

そのきっかけが何だったのか、ライラスは未だに本当の所を知らない。

ただ、彼が違和感を感じるのに時間は掛からなかった。

ライラスがいつものように魔法科の友人の所へ行った時、周りから馬鹿にするような笑いが漏れたとか。

会いに行くと笑顔を見せた友人が少しずつ笑わなくなったとか。

「あいつ、攻撃魔法が苦手で……そのせいで馬鹿にされたみたいなんだ。」

それで、魔技科の人間なんかと付き合ってるから、成績が下がるんだとか、お前も魔技科に言った方が良いんじゃないのかとか言われたらしくてさ」

それでもフ란ツはそれをライラスに言わなかった。

人伝にそれを聞いたライラスもまた、どうしていいのか分からなかった。

彼を訪ねる回数を減らした方が良いのかと考えていた頃、ライラスもクラスメイトに言われたのだ。

『お前さ、なんで魔法科の人間と仲良くすんの？ 仲良くしたいならあっちに行けばいいじゃん』

『相手だってもう迷惑に思ってるかもしれないよね』

「……なんか、そういう事言われて、すげーやな気分でき。

俺と付き合ってる事であいつはずっとこんな嫌な思いして我慢してるのかって思ったら、なんかもう駄目だって思ったんだ。それで

……」

「それでやめたんだ、友達」

「……やめたつもりはないけど、ただ、しばらく会つのをやめようって言った。

あいつは、平気だって何度も言ったけど」

それっきり、もうライラスはフランスと一年以上まともに会話もしていない。

時々彼の姿を見かける事はあったけれど声をかけたことはない。

「……それでいいんだ？」

「……良いなんて思ってない！ けど、そうじゃなきゃあいつが嫌な思いするから……」

「自分じゃなくて？」

ライラスはきつく唇を噛んだ。

少女のその言葉が音を立てて胸に刺さったような気がした。

そういう気がしたこと自体、それは一つの答えであるに違いない

のだ。

「……そうだよ。俺は……嫌なんだよ！ もうあんな思いするのは嫌だ！

あんな思いを親友にさせるのも嫌だ！ お前だって、嫌だろう、さつきみたいなの！？」

だがアーシャはその言葉に静かに首を横に振った。

「私は嫌な思いをしたりしないって前に言った」

「そんなのはただの強がりだろ！？ 実際は嫌じゃないのかよ！」

アーシャは少し考え、もう一度首を横に振る。

「私、別に他人に何かを期待したりしないから。優しい言葉も、穏やかな態度も」

「……期待？」

「そうじゃないの？ 他人から思いもしなかった悪意を投げられるから、傷つくんでしょ？」

それって、相手に普通の対応とか、期待してるってことじゃないの？」

そんな風に考えたことがなくて、ライラスは困惑を顔に浮かべた。そもそも日常生活の中で、普通の対応を相手に期待するというのは無理な話だ。

「心無い言葉を投げられれば傷つくっていうのは、分かる。

でも、最初っから、相手に何も求めなければそれはないのと同じ。人を簡単に信用してはいけないう前提で、他人に対する時は心を閉じていれば棘は奥までは届かない」

アーシャは知らない人間に不用意に近寄ったりしないし、近寄る時は周囲の精霊の声の方に耳を傾ける。危険な人間には近寄らない。普通の人間にも油断はしない。

自分が弱い事を知っているから、アーシャはいつもそういう選択をしてきた。

一見穏やかそうに見えても、それが他人である限り過度な油断も期待もしないようにしてその身や心を守るのだ。

それはもう半ば彼女の習性のようなものになっている。

「なんか……それって、寂しくねえ？」

「そうかもしれないね。でも、私が一人で生きていくにはそのくらいはしないとだから。それで損をする事があっても、独りになっても仕方ないよ。」

私は弱いから……小さい生き物は、用心深くないとすぐに死ぬもの

「死ぬって……」

ライラスは呆れた声を上げた。この少女が一体どんな環境で生きてきたのか想像も付かなかった。

アーシャの心の奥には常に人に対する恐れや警戒心がある。己の心を守るために、少女は人に対してはいつもその扉を閉じている。

だから、嫌なことも楽しい事も、アーシャにとっては心の表面にごくわずかな小波が立つようなものだ。

アーシャはいつもどこか一歩引いた奥から、その波を眺めている。嫌な波なら受け流すし、楽しい波なら少しだけ笑う。

「だから、私はずるいかもしれないね。ライラスの気持ちは本当にはわからないから」

「そんな……けど、じゃあ楽しい事や嬉しい事もあんまりそう感じないって事か？」

「……前はそうだったけど、最近は感じるようになってきたよ。」

皆が、私に教えてくれたから。皆といる時は、心を閉じなくてもいいから。」

……だから、私はあそこに居たい」

アーシャはそう言って空を仰いだ。秋の空は高く、美しい色をしている。

「でも、普通の人がそうじゃないって言うことは分かる。」

私が嫌な思いをしなくてもシャル達はするかもしれないっていうのもわかる。」

もしそうなった時、私はその痛みが本当にはわからないかもしれないっていう事も、それがずるいって言う事も。」

でも……皆は、きつとそんな事に負けないから。負けないって信じてるから」

今はもう彼らを信じられるから。」

「だから、私も負けないの。それだけ」

アーシャはそう言ってライラスを見た。少女の目には迷いも恐れもない。」

ライラスは、その瞳に映る自分の姿を見ていられなくて目を逸らした。」

あの時、友人を信じられなかったのは自分だ。」

彼もきつと負けてしまおうと思ったのだ。そして自分も負けてしまった。」

「俺が、あの時信じられてたら……何か変わってたと思うか？」
「……さあ。でも、多分ね」

アーシャはライラスの心中を知ってか知らずかそう言って頷いた。ライラスが少女に視線を戻すと、その目はやっぱり真っ直ぐに彼を見ていて、それだけでライラスは少し背中を押されたような気持ちになった。

「でも、今からでも遅くないと思うよ」

「そうかな……でも、俺だけじゃないからな……そういうの。」

魔法科を諦めて魔技科に移ってきて、前の友人との間にそういうトラブルがあつたっていう連中なんて後を絶たないしな。

実際魔法科には、昨日までの友人を手の平返したように馬鹿にする奴らもいたりするんだ」

「魔技科の人がもつと毅然としてればそんなのなくなるんじゃないの？」

アーシャの真っ直ぐな言葉にライラスは苦笑して首を横に振った。

「そう簡単にいきやいいけどさ……。」

俺は最初からこの道を決めてきたけど、実際はそうじゃない奴の方が多いんだ。

魔法科目指してた奴は挫折して魔技科に来てるから……どうしたって自分に自信が持てなくてあんなうちまうんだよ。

自分が一度は夢見た道を歩いてる奴らを真っ直ぐに見られないんだよな」

だからといって卑屈になったり、魔法科に友人を持つ人間を責めるのは間違っているとライラスも判っている。

けれど彼らはそうしなければ自分を保てないのだ。

「そっか……私、そういうのわかんないからひどい事言ったかな。でも、魔技科の生徒達にまで、魔技師を馬鹿にされたままっついのの、ちよっと嫌だな」

「……うん、そうだよな」

「そういう変な風潮を崩す方法が何かないか、考えてみるよ」

アーシャはそう言うтусつと立ち上がって中庭を歩き出した。

ライラスは少女ともう少し話がしたいと思って立ち上がったが、次の瞬間目を見開いた。

「危ないっ!!」

「え?」

アーシャはその声に振り向いたと同時にドン、と勢いよく突き飛ばされた。

バシャァン!!

少女の軽い体はたやすく飛ばされ、ドサ、と地面に落ちる。

「いたた……つて、ライラス!？」

起き上がったアーシャの目に入ったのは、ずぶ濡れになって地面に座り込むライラスの姿だった。

ハツと気付いて上を見ると、三階の窓にちらりと人影が見えた。

その後姿は褐色の髪を揺らしていた気がした。

「うへえ……参ったな」

ライラスは水を吸って重たくなったローブを摘み、ゆっくりと立ち上がって困ったように笑った。

「ちょっと待ってね」

アーシャは慌てて近くに駆け寄り、周囲に居た水の精霊を呼んだ。

「余分な水を集めて」

アーシャが願うと精霊達はライラスの衣服や髪を濡らす余分な水分を吸いだして一つに集めた。

アーシャが差し出した手の平の上に水が少しずつ溜まり、大きな球になっていく。

「こんなもんかな」

「すげえ、乾いた……お前ホントに精霊魔法使えるんだなあ」

ライラスは初めて見たアーシャの精霊魔法にしきりに感心した。少女はそれには構わず、手にした水球をばいと投げ捨てた。水は近くの植木に当たって弾け地面へと吸い込まれていった。

「ごめん、泥が付いちゃったね……庇ってくれてありがとう」

アーシャの謝罪と礼にライラスは笑顔で首を振る。

「いいって。お前に掛かなくて良かったよ」

ライラスは不思議と、さっきよりも晴れやかな気分だった。

少女の作品は守ってやる事が出来なかったが、今度はどうにか

助けてやれたからかもしれない。

けれど反対にアーシャはむっとしたような顔を浮かべて三階の窓を見上げていた。

「今のは、ちょっと許せないかな……」

アーシャは上を見上げたまましばらく考えた。この事態を打開する方法を頭の中で色々と模索する。

やがてアーシャは何かを思いついたのか一つ頷くと、ライラスに視線を戻して彼の腕を掴んだ。

「ね、来て。良かったら、少し協力して欲しい事があるんだ」

「え？ おい、ちょっと！」

ライラスの返事を待たずにアーシャは彼の腕を掴んだまま走り出した。

放課後の中庭を少女に引きずられて走る少年の姿を、庭の植木だけが眺めていた。

17：誤解と和解

放課後、シャルは学生課に向かって歩いていった。

今日は秋の野外実習の申請用紙と、その後に行われる魔法学部の競技会の参加申込書を取りに行くつもりだったのだ。

秋から冬にかけて、今年の魔法学部の生徒達は忙しい。

十月の終わり頃から十一月にかけては後期の野外実習が行われるし、それが終わればすぐに魔法競技会だ。

そろそろそのどちらも予定を組んで書類を提出しなければならぬ。

魔法競技会はその名の通り生徒達がそれぞれの魔法技術を競うものだが、幾つかの部門に分かれており基本的に学年別で行われる。

そして各学年の優勝者だけが、その後に行われる学年合同の試合に参加できる事になっていた。だが流石にその試合で学年を飛び越えて優勝するものが出ることはごく稀だ。

シャルは今年は何の部門に出ようか少し迷っていた。部門は二つまで自由に選んで参加できる。

個人部門を選ぶのは既に決まっているが、詠唱魔法部門にしようか、精霊魔法部門にしようか、それとも制限なしの部門にするかと頭を悩ませる。

やはり制限なしがいいか、とぶつぶつと考えながら歩いていると不意に後ろから声が掛かった。

「シャ、シャル！」

その声に足を止めて振り向くとそこにはシャルの四人の友人達が緊張の面持ちで立っていた。

シャルは何事かと少女達に向き直った。
彼女らはシャルが足を止めたのを見てパタパタとシャルに駆け寄
ってくる。

シャルと彼女達とはあの誕生日祝いの一件以来まだギクシヤクシ
ている。

自分が怒りすぎた、と折れる手もあったが、シャルは素直にそう
したくなくてそのままにしてあった。

「どうしたの？」

なるべくいつも通りに聞こえるように声をかけると、少女たちは
おずおずと更に近づいてシャルの前に立った。

「あの……」

「？」

訝しがるシャルの前で、お互いの顔を見合わせた四人はすうと息
を吸って、せーの、と小さな声をかけた。

『ごめん、シャル！』

次の瞬間、綺麗に声を八もらせて、少女達は一斉に頭を下げた。

「えっ!？」

シャルは突然の事にぎよっとして一步足を引いた。
だが少女達は頭を下げたつきり上げようとしない。
近くに行く生徒達が何事かと彼女らに視線を向け、シャルは慌て
て少女達に声をかけた。

「えっと、あの……分かったから、顔上げてよ。ね？」

困ったように頼むと四人は恐る恐る顔を上げ、次いで口々にシャルに謝った。

「シャル、ホントにごめん！」

「お祝いだっただのに、あんな事言っで、ごめんね……」

「あたし達、ほんとにあんなつもりじゃなくて」

「ごめんね、シャルう……」

シャルは次々と謝られてかえって慌ててしまう。

自分も少し態度がきつかったと思っていたのに、こんなに謝られてはさすがに立つ瀬がない。

シャルは両手をパタパタと振りながら、彼女らにもういいと必死で訴えた。

「もういいから、よしてよ皆！ほんとに、私だっであの時はちょっと怒りすぎたし……」

シャルの言葉に少女達はやっと謝るのをやめて少しほっとした顔を見せた。それからまたお互いの顔を見合わせ、たどたどしいながらも自分達の気持ちを懸命に語った。

「……私達、シャルが最近あんまり一緒にいないから、その、ちょっとつまんなかったの」

「風の森に自信がなくて行けなかったから、もしかしてそのせいでシャルに嫌われたかなってちょっと思っでたし……」

メイもニーナもしょんぼりとうなだれながらそういった。

子供っぽいちょっとしたヤキモチもあつて、そのせいでシャルに

嫌な思いをさせてしまった、と恥ずかしく思っているのだ。

「だからあんな噂、シャルに確かめずに鵜呑みにしちゃって」

「シャルが困ってるなら助けてあげなきゃ、とか勝手に思ってたの。友達を悪く言うつもりじゃなかったの」

「え？」

シャルはリゼットとトリスの語った言葉に疑問を覚え眉を寄せた。

「噂？ 噂って何？」

「え、シャル知らないの？」

「あんなにあちこちで言われてるのに……って、シャルはそういうの嫌いだったね」

「そっか」

ただでさえシャルは他人の噂話などがあまり好きではない。

更に普段そういう話を聞かせる少女達がしばらく離れていたのだから、仕方ない事だろう。

少女達は頷き合つと、今魔法学部で流れている噂を恐る恐るシャルに語った。

「……何よそれ！！ 誰がそんなの流してるの!？」

当然ながらシャルはそれを聞いて声を荒げた。今にも火を吹きそうなその剣幕に四人の少女は怯え、思わず少し後ろに下がる。

「どこから流れてるのかわかんないけど、前期の終わり頃からちらほらあったの……そういうの」

「でも、後期に入ってから全然消えなかったから、私達も結構ホントなのかもって思っちゃって……」

「それで……私が無理してアーシャに付き合ってるんじゃないかって思ったのね？」

「うん、シャルに確かめもしないで……ごめんね」

シャルはふう、とため息を一つ吐くと首を横に振った。

「もういいわ。皆があの子の事ホントに悪く思ってた訳じゃないって分かったもの。教えてくれてありがとうね」

「ううん、こっちこそ……あの、もし良かったら今度シャルのお祝い、仕切りなおさせて？ その……あの子も一緒に」

その言葉を聞いてシャルは思わず笑顔を浮かべた。

アーシャも一緒に、という彼女達の心が嬉しかったのだ。

大人しいけど皆良い子だと思っていたのはやっぱり間違いないじゃなかったとシャルは胸を撫で下ろした。

「もちろん！ でもきつとびっくりするわよ。アーシャってとっても面白くて可愛いから」

シャルは笑って手を差し出し、彼女達に仲直りの握手を求めた。

少女達は代わる代わるその手を握り、そしてほっとしたように笑い合った。

「噂に関しては、私も調べてみるわ。そんな勝手な噂、流したままにさせられないしね！」

「うん、私達も気をつけて聞いておくれ」
「じゃあまた後でね」

また後で寮で話をしようと約束して友人達は手を振って去って言った。

その背を見送ったシャルは踵を返すと途端に洗面を浮かべた。

「アーシャが足手まといですって？ 全く……！！！」

シャルは怒りを覚えながら足早に学生課に向かい、その入り口をくぐった。

早く用紙を受け取ってジエイ達と少し話をしようと廊下を急ぐ。

シャルは窓口に駆け寄り、慌しく二枚の紙を受け取ると用は済んだとばかりに建物を出ようとした。

しかし、建物の出口に差し掛かった時、またも背後から声が掛かった。

「ねえ、ちょっと」

シャルはその声を聞かなかったことにして足を速めた。

「ちょっと！ ねえ、聞こえませんか！？ シャルフィーナさん！」

ピタ

名指しで呼ばれては立ち止まらないのも感じが悪い。

シャルは嫌々立ち止まるとくるりとその場で振り向いた。

振り向いた顔はいかにも嫌々、と言う風だったが元よりそれを隠す気もない。

「何ですの、その嫌そうなお顔……失敬ですわよ！」

「あなたの普段の言動から考えて、にこやかな笑顔を向けてもらえるとと思う方がどうかしてるんじゃない」

そう言われてコーネリアは思わず目を逸らした。どうやらさすがに心当たりがあったらしい。

コホン、とごまかすように咳払いをするとコーネリアはシャルが手にした用紙を指差した。

「その今年の競技会、もちろん貴女も参加するんですね？」

「そりゃそうよ。あんだだっ出て出るんでしょ？ また張り合ってくるつもり？」

「当たり前ですわ！ 今年こそ勝つのは私です！」

いつもの調子のコーネリアに、シャルはうんざりのため息を吐くと手を振って踵を返そうとした。

「そう、楽しみにしてるわ、せいぜい頑張ってね」

「あつ、ちよつとお待ちなさい！ そんな話じゃないのですわ！」

コーネリアは話が逸れた事にハツと気付いて、去ろうとするシャルを慌てて引き止めた。シャルも嫌々ながらまた足を止める。

「じゃあ何なのよ。早く言ってちょうだい。私忙しいの」

「その……私は、今回はペア部門に出るのです。貴女もそうなのでしよう？」

「は？ ペア？ 違うわよ。私が出るのなんて個人に決まってるじゃない」

「ええ？ でも、貴女、あの小さくて失礼な子と一緒に大会に出るんでしよう？」

シャルは耳を疑った。一体どこからそんな話が出てきたのかさっぱりだ。

「小さい子って、アーシャの事よね？ 何よそれ、どこからそんな話になったの？」

だがコーネリアはシャルの返答を聞き、形の良い額に手を当てて考え込んでしまった。そして小さく呟いた。

「そんな……でもじゃあどうしてカトウラは……」

「カトウラ？ カトウラって、あのカトウラ・マグルール？」

カトウラ・マグルールの名前は一部では有名だ。

男子の間では色っぽい美人として、女子の間では嫌な女として。シャルも同じ魔法学部なので当然知ってはいた。だがクラスは違うし、好きになれそうにないタイプだから話したことはない。

「なんでそこでその名前が出てくるのよ？」

コーネリアは迷ったようだったが、顔を上げて口を開いた。

「……私、この間カトウラに話しかけられて、その時言いましたの。あの小さい子は精霊魔法の使い手だから挑んでみたいって。理由は……まあ、悔しいですが貴女なら本当の所はお分かりでしょうけど。」

そしたら、その少し後にカトウラが競技会参加用紙を持ってきて、あの子が彼女と私のペアとなら勝負するって言うから一緒に組んで出ようって言うてきたんですわ」

シャルはその話に見開いた。

「私、てっきり貴女があの子と組むんだと思っていて、それなら望む所ですし、カトウラは性格は好きではないけれど魔法の腕は確かだからと思って承諾しましたの。」

けれど、何だか彼女の話が不自然だったから、気になっていたのですわ」

不自然も何も、どこをどうしたらそんな話になるのかシャルには全く見当がつかない。

アーシャは普段は自分の魔法を人前で使うのをとても嫌がる。使ったとしても小さな魔法しか使わない。

だから実技のある科目は避けているはずなのに、競技会に出るなんてありえない話だ。

競技会に出ればどうしたって小さな魔法では何ともならないはずなのだから。

「あんだ、それカトウラに騙されてるんじゃないの？ カトウラが大会に出たくて利用されただけ、とか」

「それは考えられなくもありませんけど、彼女は一年の時の大会は不参加で、今回も最初はそうすると言っていたはずなのですわ。顔に傷が付いたりしたら嫌だ、とかで」

「ああ、そう……」

シャルはその理由に思わず脱力を覚えた。彼女が言いそうな事だけれど、それなら尚更カトウラが大会に出るといっことはおかしい話だった。

「わかったわ、アーシャに確かめてみる。教えてくれて助かったわ。あんたにしては気が利くじゃないの」

「べ、別に貴女のためじゃありませんことよ！ 私は悔いのない試合をしたいただけですわ！」

コーネリアはビシ、とシャルを指差してある意味お約束なセリフを言っただけだ。

「はいはい、分かったわ。まあ、私はとりあえず個人の制限なしは出るから、負けたかったらそっちにも参加するといいわよ」

「だから勝つのは私ですわ！！」

「そうだといいわねえ。それじゃあね」

シャルはコーネリアにひらひらと手を振ると今度こそ学生課を後にした。

あの分ならコーネリアは今頃もう一枚参加用紙を取りに窓口へ走っているだろう。

シャルはどこに行ったら事の真偽を確かめられるのか歩きながら考えた。

アーシャの居所は今日はわからないが、ディーンとジエイは鍛錬室に寄って帰ると昼に言っていた。

二人を捕まえ、何か知らないか聞いてからアーシャの家を訪ねるのがいいかもしれない。

そう結論を出すとシャルは足を速めて武術学部へと方向を変えた。シャルは蚊帳の外にされるのが嫌いだ。自分や仲間が少しでも関係あるなら尚更のこと。

その苛立ちに任せて、帰り際の生徒で賑わう校内を厳しい表情を浮かべたまま猛然と走る。そんな彼女の様子を見た誰もが無言で道を譲った。

シャルは今、とても不機嫌だった。

十分後。

「まあ、という訳だ」

「なーにが、という訳、よ！　じゃああんた達噂を知ってたのに何もしなかったのね!？」

シャルの剣幕にジェイは首をすくめた。

ジェイとディーンの稽古中に押しかけてきたシャルは、自分達に関する噂について彼らを問いただし、二人がそれをずっと知っていた事に大変お怒りだった。

「そもそも、知ってたならどうして私に教えないのよ！」

「教えたら騒ぎ立てるだろう?」

ディーンはシャルの怒りに少しも動じず無表情のままため息をつつ吐いた。

「そりゃそうよ。そんな噂打ち消さないと腹立たしいじゃない」

「君が騒げば噂は奥に潜る。そうなれば元凶を追うのが難しくなる。元を断たなければまた密かに広がるだけだ」

正論で返され、う、とシャルは一瞬黙ったが、それでも納得はできなかつた。

「でも、私が違つて言ったら消えるかもしれないじゃない！」

「そうしたらまた少し噂が変化するだけだろう。」

君は意地っ張りだから自分がお荷物を抱えて苦労していることを

周囲に知られたくないんだ、とかな」

「うへえ、ありそう。そしたらまたお節介な連中が増えるかもしれないよな」

確かにその可能性はあると思いついてシャルは思い切り渋い顔をした。面白くない事この上ない。

「じゃあどうしたらいいのよ！ アーシャが嫌な思いしてるかもしれないのに！ 大体、元凶は分かったの！？」

シャルの言葉にディーンは一つ頷いた。

「さっき自分で名を上げたろう。コーネリアと組むという女、カトウラ・マグルール。恐らくは噂の元は彼女だ」

「カトウラってあれだろ、なんか色っぽくて怖そうな女……でも、なんでそこで彼女なんだ？」

俺達に関係あるって言ったらコーネリアの方じゃねえの？」

ディーンは沈黙で答えた。

何か言いたくない事があるらしいその様子に、シャルはピンとひらめいた。

「カトウラって言ったら……ディーン、あんたに一年の時からずつと付き纏ってる女じゃないの？」

「あー、そういえば確かに……他の男と付き合ってる話は絶えないのに、時々、季節ごとの風物詩みたいにお前のとこに現れるよな」

「……ああ」

「……って、じゃああんたが原因じゃないの！？」

ディーンは眉間に皺を寄せて、極めて不愉快そうに頷いた。

「非常に不本意ながらその可能性は否定できない。まあ、それだけではないと思うが……」

「どうということよ？」

「調べた所、彼女は水大陸の貴族出身で、上級学部から入学。魔力は高く水の詠唱魔法が得意。そして、これは噂だが……魔技師がとて嫌いらしい」

「魔技師が？」

「ああ、なんでも早くに亡くなった父親が魔技師だったとかなんとか。まあ、それもあくまで噂ではあるが。」

だが実際彼女は魔技科の人間と付き合ったことは一度もないし、魔技科を馬鹿にしているのも日常的な事らしい」

シャルは呆れたようにため息を吐いた。

「自分の親が魔技師だったから嫌いだななんて、どんな育ちか知らないけど何だか捻くれてるわね」

「まっただけ」

ディーンもジェイもそれには深く頷いた。

「更に言えば、彼女が男を選ぶ基準も気になった」

「基準？ 顔とか金か？」

「いや……どうも、精霊の加護持ちばかりを選んで付き合っている、という話だ」

「何それ、じゃあ今までの全部？」

「まあ、確かめられる範囲内では、そうだな」

武術学部で彼女と付き合った事のある人間は多くない。

割合から言えばやはり魔法科が一番多い。

それらの中でディーンが確かめる事の出来た人物は皆、強さに差はあれ精霊の加護を持っていた。

「それでディーンなのかな。お前が闇の加護持ちだって、知ってる奴は知ってるもんな。他大陸の奴は闇でも気にしないしな」

「むしろ水大陸出身なら闇大陸とは隣り合わせだから仲がいいはずよ。いつそあんたがあの子と付き合ったら、噂も収まるんじゃないの？」

シャルの言葉にディーンは面白く無さそうに首を振り、ため息を吐いた。

「こつちにも選ぶ権利がある。精霊の加護持ちという理由だけで好かれて嬉しいはずがない。

それに、彼女は別に私が好きなわけじゃないだろう。自分に靡かないから腹立たしいだけだ」

「まあそうだよな……俺もあいうのは苦手だなあ」

「お前は大丈夫だろう。打算的な彼女は危険なものに手は出さない」

「……なんか引つかかる言い方ね」

「気のせいだ」

シャルの追求をさらりと交わすと、ディーンはそれよりも、と難しい顔で呟いた。

「気になるのはアルシエレイアだ。コーネリアの言ったことが事実なのかどうか、確かめた方がいいだろう」

「あつ、そうよ！ アーシャが競技会に出るなんて、何かあったっというようなものだわ。確かめなきゃ！」

「こないだは様子が変わらなかつたからって、油断して悪い事した

な……」

反省するジエイのその言葉に頷き返し、シャルは小さく唇を尖らせて、寂しそうな顔をした。

「……あの子ってば、何かあっても言わなそうなものね」
「言わないなら、聞きだすしかないだろうな……行こう」

そんな訳で、三人は夕暮れの学園都市の中を足早に歩きだした。

18：二歩目の決意

三人がアーシヤの家に着いた頃には太陽はすっかり姿を隠し、夕闇は更にその濃さを増していた。もうそろそろ寮でも夕食の時間のはずだ。

時間を多少気にしながらもシャルはアーシヤの家のドアを叩いた。すぐに中から小さな声が聞こえ、足音と共に誰？ と問いかけられる。

「私よ、アーシヤ」

「シャル？」

ガチャリと鍵が開き、ギィ、と音を立てて扉が開いた。中からアーシヤがひよい、と顔を覗かせる。

アーシヤはシャルとその後ろの少年達の姿を見て少し目を見開いた。

「どうしたの、皆揃って」

「ちよつと話があつて……今いい？」

アーシヤは少し考えてから頷くと、三人をドアの内側に招きいれた。

「部屋散らかってるんだけど、それでもよければどうぞ」

アーシヤに招かれるまま居間に進むと、そこは本当に散らかっていた。

本棚の上や床には呆れるほど大量の本が詰まれ、テーブルの上には開きっぱなしの本と沢山の紙、作りかけの魔具らしきものが所狭

しと広がっている。

部屋の端には大きな箱が置かれ、その中には何だか良くわからない道具が沢山詰め込まれていた。

「とりあえず、椅子使って」

アーシャは椅子の上にも置いてあった本を無理矢理移動すると三人に座るよう勧めた。

一階には部屋を隔てるドアのないアーシャの家は、どの部屋も少しずつ目に入る。

彼らが居間に行く途中にちらりと見たほかの部屋も同じような状況のようだった。

以前来た時はきちんと片付いて殺風景なほどだったのに、とその変わりように三人はかなり驚いた。

「ホントに散らかっててごめん、今お茶出すね」

「あ、いいわよ、構わなくて！ ちょっと話があったただけなの」

シャルに引き止められ、アーシャはお茶の支度を中断して三人の所へやってきた。

少女も椅子に座って、四人が顔を合わせるとシャルは口を開いた。

「あのね、アーシャ……」

「シャル、待って。悪いんだけど、私に先に話をさせて欲しい事があるの」

だがアーシャは話し出そうとしたシャルを遮った。

「え、うん、いいわよ？」

人の話をちゃんと聞く少女が、誰かの話を遮るなんて珍しい。
アーシャはシャルの了解を得て、何から話すか迷うようにしばし俯いた。

けれど、やがて顔を上げて決意したように口を開いた。
その口から出たのは、誰もが予想もしなかった言葉だった。

「あのね、私……次の野外実習、皆と行かない。約束してたけど、ごめん」

「ええっ!？」

「なっ、本気かよ、アーシャ!」

驚く三人を真っ直ぐに見て、アーシャは固い顔で頷いた。

「……何故だ? あの噂のせいかな?」

その表情を見つめながら、ディーンが静かに問う。

アーシャはその問いに少し迷って、それでも頷いた。

「……皆知ってるんだね、あの話。あれが理由っていえばそうかな、やっぱり」

「あんな嘘ばかりの噂がなんだっていうの! アーシャが抜けたら、それに負けた事になっちゃうじゃない!」

「アーシャ、やっぱり何かあったのか? あの時は何にもないって言ってたけど……」

「あつたつて言えば、あつたみたいなんだけど……あの時は気付かなかったみたい。大した事じゃないよ」

「私達に言えないのか?」

その言葉にアーシャは首を強く横に振った。

「そうじゃなくて……ホントに、私にはどうでもいいことだったから、気付かなかっただけ。」

今でもやっぱりどうでもいいけど、ちょっとやりたい事が出来たから、皆とは一緒に行けないの」

「アーシャ……あなたが、競技会に参加するって聞いたんだけど、ホント？ それと関係あるの？」

アーシャは一瞬沈黙し、それからため息を吐いて頷いた。

三人が心配するだろうことは予想がついていたから、出来ればそれは直前まで知られたくなかったのだが、ばれてしまったなら仕方ない。

「ばれちゃったんだね……そう、私、あれに出ようと思って。」

ライラスと組んで、ペア部門に出るつもりなの」

「ライラス……？ レイアルで会った……確か、君と同じクラスだと言っていた、彼と？」

「本当に出るのね……でも、出るにしても、なんでそいつなの？」

ペアに出たいなら私と組めばいいじゃない！ アーシャだったら大歓迎よ！」

シャルは面白く無さそうにアーシャに詰め寄った。だがアーシャは笑って首を横に振る。

「シャルじゃ駄目なの。シャルは強いもの。だから、きっと勝つても、シャルのおかげだって言われるから」

「自分の実力を示して、噂を消す気なのか。精霊魔法で？」

だがそれなら、なおの事サポートの意味でもシャルの方が適任だろう？ そのくらいならシャルに任せても、君の実力は伝わるはずだ」

魔法競技会は、当然全ての競技が魔法で行われる訳だから、魔法

科の生徒以外が出場するのは稀だ。

他の科の生徒が出たとしても回復や補助の魔法の正確さを測定して競うような部門がせいぜいだった。

ペア部門というのはチームを組んで実戦形式の戦闘を行う部門に当たる。

個人と違って細かく部門が別れていないので、魔法であればどんな種類でも使用が許可されている。

二人が組んで試合を行うわけだから、攻撃と防御、補助を分担したスタイルで戦う事が多い。

バランス的にもできればペアの実力は同じくらいである事が望ましい。

当然といえば当然だが、その試合に魔技科の生徒が二人で出場したという話は今まで聞いた事がなかった。

ライラスがどのくらい魔法が使えるのかは判らないが、アーシヤが精霊魔法で戦うのだとしても、彼がパートナーでは彼女一人の負担が重過ぎるはずなのだ。

「うっん、私……精霊魔法は使わない」

「えっ？」

「自分で作った、魔具だけで戦うつもりなの。だから、ライラスを無理矢理付き合わせて、挑戦するの」

「魔具だけで!? そんな事できるのか？」

「無茶だろう!」

三人は思わず驚きの声を上げた。

確か魔法競技会では多くの部門で魔具の持込は制限されている。

全ての部門で認められているのは杖のみで、護符の類などはあまり持ち込めない。

それにそもそも魔具というのは補助的な効果を持つ物がほとんど

なのだ。

魔具で戦うというからには攻撃的な効果のある物を用意しなければならぬのだろうが、それだつて大抵はほんの護身用の物を販売しているのしか見た事がない。

ジェイが使っていた符の類だつて、自分の力を高めたり制御をたやすくする為のもので、それ自体は大した力はないのだ。

「うん、教授に確かめたらね、ペア部門なら基本的に制限なしだから良いつて。攻撃用魔具持ってきてても大丈夫だつて言われたよ」

「そんな……でも、魔具だけなんて、聞いた事ないわ！ 危険よ！」
「制限の無い部門は生徒達の使える魔法が多くなるから攻撃の幅も広がる。それに対応できるのか？」

ディーンの言葉にアーシャは首を傾げた。

「さあ、わかんないな。でも……やるよ」

ディーンはアーシャの瞳を見つめた。森の色の瞳は少しも揺らがない。

あの時も、少女は引かなかった。

そして今も彼女は同じ目をしている。むしろ、あの時よりも強い目をしているかもしれない。

ディーンは深いため息を吐いた。

「君は時々呆れるほど頑固だな……あの時は、考える時間が欲しいと言った。今回は、何を求める？」

ディーンの言ったあの時、という意味がすぐに判つたのだろう。アーシャは首を傾げて考えると、やがて笑顔を浮かべて答えた。

「……皆の、隣にいる権利、かな」

アーシャの言葉に、その場にいる誰もが口を噤んだ。
シャルさえも、更に説得しようとしていた口を開いたままアーシヤを見つめた。

「この手で……それを、勝ち取れるかなって思って。

そりゃあね、精霊に助けてもらおう方がもちろん簡単だけど、それをして、魔技科の人達はきつとあのまんまだもの。

魔技科も、魔技師も、馬鹿にされたまま。

だから、この……弱い二本の手で、やってみたいんだ」

アーシャは細い腕を持ち上げて、それを見つめた。小さい手の平と細い指はいかにも頼りなく見える。

それでも、この手の可能性を信じてみたかった。

「でも、まだ私には色々知識や技術が足りないから、その為に時間が必要な。だから、実習の時間全部当てようと思って……」

一緒に行こうと言った約束を破ってしまう事だけが心苦しかったけれど、それでも譲りたくない。

アーシャの言葉を黙って聞いていた三人は、静かに顔を見合わせた。

そして、それぞれ深いため息を吐く。

「彼もそれを承諾したのか？」

「うん、かなりごねたけど、一緒に出てくれるって。

男なのに自分の技術に自信がないのかって言ったらやる気になっ
てくれたみたい」

「へ、へえ……そりやまた……」

そのセリフを自分より三つも年下の小柄な少女に言われたとしたらさぞかし効いた事だろう。

なんだか段々アーシャがシャルに似てきた気がしてジェイは先行きが少し心配になった。

「わかったわ……アーシャがそこまで言うなら、今回はそれでいいわ」

「ああ、仕方ないな」

「その代わり無茶するなよ？ ちゃんと飯食うんだぞ？」

「うん、約束する。それで、その……良かったら……次は、一緒に行こうね」

少女が小さく付け加えた言葉に、ジェイは笑って手を伸ばし、その頭をくしゃくしゃと撫でた。

「当たり前だろ！ なあ？」

「そうよ！ 次は絶対、嫌だつて言っても付き合ってもらうんだからね！」

「君がいなくてうるさい人間がいて困るからな」

「何それ！ 誰の事よ！」

シャルがディーンに食って掛かるのを見て、アーシャはくすくすと笑った。

カトウラとした賭けの事をアーシャは口にしなかった。

彼女がペアで参加するのなら、賭けを受けると言った事を。

アーシャはそれを仲間にならなくても、もう決めていた。

きつとまた、こうして彼らと笑い合うのだと。

アーシャの家を出た三人は無言で寮への道を歩いていった。

何も言わずとも、誰もが少女の言葉を胸の奥で反芻しているのは明らかだった。

誰にも関心を持たなかった少女は彼らに巻き込まれて一步前に踏み出した。

そして今、自分の足で二歩目を踏み出そうとしている事は分かるけれど、それに対して何もしてやれない事がとても悔しかった。

あの森では助けてもらえばかりだったというのに、彼女が戦おうとしている今、何も返す事が出来ないのだ。

じつと考えに沈んでいたディーンは、顔を上げて隣を歩くジェイを見た。

「ジェイ……お前の実家は今回の実習の結果に口を出すか？」

「へ？ ああ、いや……夏前に成績表送ったら、一旦は納得したみたいだからなあ。」

そこそこの成績維持してりゃ何も言わないと思うけど。それがどうかしたか？」

「そうか……シャル、競技会への参加申し込みはいつまでだ？」

「そうね、確か……あと一週間以内だったはずよ。」

その後にはもう実習に出かける生徒もちらほら出てくるから」

その返答にディーンまたしばし黙り込んだ。

シャルとジェイが黙って彼を見つめる。やがてディーンは顔を上げた。

「それなら、今回の野外実習は三人で行ってすぐに帰ってこれる簡

単な所を選択する事を提案するが、どうだ？」

「そりゃ、別にいいけどよ、すぐ帰って来てどうするんだ？」

「競技会へのエントリーが済んだら、ペア制限なし部門の参加者リストを何とかして手に入れてくる」

デイーンの言葉にシャルはにっこりと鮮やかな笑顔で答えた。

「あら、闇討ち？ それなら付き合っわよ」

「えっ、デイーン、お前ついにそこまで……」

ぐい、とデイーンは無言でジェイの耳を引っ張った。

背が高い彼ならそんな事もたやすい。

「イデデデ！ 嘘！ 冗談だつて！」

降参と叫ぶジェイの耳から手を離し、デイーンは呆れたようにため息を吐く。

「まったく、誰がそんな事をするか。」

ただ単に、参加者の得意な魔法や戦法などの情報を集めるだけだ。相手を知っていて悪い事はない。魔具で戦うなら尚更だ」

「それもそうね。それなら私も手伝えそうね」

「むしろ中心になってやってもらわなければ困るな」

「わかったわ」

ジェイは、珍しく協力する気になった二人を何か恐ろしいものも見るような気持ちで眺めた。

やはりアーシャが絡むと二人は過保護な保護者になってしまっらしい。

だが確かにジェイも、少女のために何もしてやれない事を心苦し

く思っている。

魔法を教えてもらったりと色々世話になっているのに、ちっとも返せていない気がしてならない。

「なあ、俺もなんかする事ない？」

「ない」

「ないわね」

二人に即答されてジェイはがっくりと肩を落とした。

「お前らばっかりずるいぞ！」

「だってあなたの交友関係って武術学部中心なもの。それに魔法の事良くわかんないでしょ？」

「今回は我慢しろ。何事も向き不向きというものがある」

「ちえー……」

ジェイは不満そうに口を尖らせた。歯がゆい事この上ない。

「応援してやれ。それだけでも違う」

「わあつたよ……」

せめてアーシャがいない間も魔法の練習を欠かさない事にしよう、とジェイは胸の奥で決意した。

少女が教えてくれた事だけでも、せめて完璧にマスターできるように。

それが今の彼に出来る精一杯の事と言えそうだった。

19：それぞれの実習

「……こんなに早く、また家に戻る事になるとはなあ」

あれから十日後、アーシャとライラスは再びレイアルを訪れていた。

ライラスにとっては随分と半端な時期の帰郷になる。

野外実習は仲間達と離れ、一人で研修に行く事を決めたアーシャは、その研修先にライラスの実家の工房を希望した。

バルド工房は今までアウレスーラの学生の研修受け入れを行っていなかったのだが、ライラスを通して頼んだところどうにか引き受けてもらえたのだ。

その際ライラスは実家にある程度の事情を話しており、それを聞いた彼の両親は老舗の誇りにかけて引き受けよう、と何だか妙に乗り気だった。

「ごめんね、無理言って。しかも一緒に来てもらっちゃって」
「気にすんなよ。行ってくて言ったのは俺だしな」

競技会の為に二人で魔具を作るのだから相談しやすい環境があった方がいい、とライラスも自分の実家で野外実習期間を過ごすことにしたのだ。

実はライラスが自分の実家を研修先に選ぶ事を許してもらえたのはかなりの特例だった。

アウレスーラには実家が商売や工房をやっているという生徒が少なからずいるが、そういう生徒は当然自分の家以外の場所へ研修に行く事を勧められるし、本人もそうしたがる。

どうしたって実家では甘えが出たり生活が楽だったりするから、まともな研修が期待できないからだ。

アーシャとライラスはタウロー教授に掛け合って、実家でも研修生として厳しく扱ってもらって、レポートの他に生活の様子を記した日報などを提出するという条件で何とか許可してもらった。

実習後も忙しいであろうことを考えると少し憂鬱になるが、直にそんな気分に戻る暇もなくなるだろう。

「いくか」

ライラスは重い荷物を背負いなおすとバルド工房の店の脇にある細い道へと入り、立ち止まっていたアーシャを手招きした。

「ほら、こっち。通用口があるんだ」

アーシャはパタパタと小走りで彼の後を追った。歩きながら良く見ると店の建物は随分と細長く、奥が広くなっている。

細長い店の建物が途切れたところには大きな門があった。人の出入りがあるためか門の鉄柵は開いたままだ。

「荷馬車が通れるような広さになってるんだ」

そう説明しながらライラスは門をくぐった。

アーシャもライラスに続いて通用口の門をくぐり、中を見回すとそこはちよっとした庭になっていた。

「わあ」

表から見るよりもずっと広く、暮らしやすそうな空間にアーシャは驚きの声を上げた。

「こっちの建物は店と倉庫で、こっちは住宅。あとあっちの奥のが工房だ。見かけより広いだろ」

「うん、すごいね」

表通りからは細長い店の入り口しか見えなかったが、通りに並ぶ建物の後ろに隠れるようにして沢山の様々な建物が並んでいる。

端の方には厩や井戸も備えてあった。

ライラスは住居だと説明した建物に近づき扉を開けた。

「おーい、ただいまー」

声をかけると奥から女性の声が聞こえ、ばたばたと足音が響く。

「おや、来たね。お帰り、ライラス」

出てきたのは大柄で明るい笑顔を浮かべた女性だった。

エプロンで手を拭きながら現れた彼女は恐らくライラスの母なのだろう。愛嬌のあるその顔はどことなくライラスに似ている。

金茶の髪はライラスとは違うが、水色の瞳が特に良く似ていた。

彼女は息子をぎゅっと抱きしめて頭を撫で、それからその後ろに離れて立っているアーシャに目を留めた。

「おや、あんたがうちの工房初の研修生だね？いらっしやい！」

「えと、こ、こんにちは。お世話に、なります」

なれない敬語で挨拶したアーシャにライラスの母は楽しそうに笑うと片手を差し出した。

アーシャもそれに応えて手を差し出し、握手をする。

少女のものより大分大きなその手は働く女性らしく荒れていたが

とても暖かった。

「あっはは、そんなにかしこまらなくてもいいよ！うちの連中は皆がさつで偏屈だからね、大人しくしてたら負けちまうよ！」

彼女はアーシャの手をぶんぶん振り、それから改めて両手を二人に差し出した。

「さ、あんた達の荷物は部屋に置いてやるから、先に工房に行つて偏屈な男どもに会つておいで。面白がつて待つてたからね」

「ありがと。よし、行こうぜグラウル」

「うん、あの……どうもありがとう」

「いいよいいよ、さ、行つておいで」

アーシャは初めてすぐ近くで見た母親という存在に少し緊張しながら荷物を手渡した。

初対面なのに不思議と警戒心が沸いてこない。

日に焼けた腕は女の人なのに逞しく、その手は荒れているのにとても優しい。近寄ると何だか香草のようないい匂いがした。

アーシャは工房へと歩き出したライラスの後を追いつつながら何度も後ろを振り返った。

笑顔で手を振る人を見ながら、この研修が楽しいような気がちよつとし始めていた。

「あー、もう、つまんなあい！燃え盛る炎よ、退屈だからドカンとやっちゃって！ミディアムくらいで！」

ドオンと音を立てて目の前の魔物が燃え上がる。

ギャウ、と濁った声を上げて、炎に包まれた狼に似た魔物は崩れるように消え去った。

「なんつーいい加減な呪文……」

「……精霊達は甘すぎる」

障害物のなくなった通路をつかつかと先に行くシャルを追いながら、ジェイとディーンはそれぞれに呆れた声を上げた。

ここは学園の地下にある、始まりの迷宮と呼ばれる学生用の実習場所だ。

正確な地図や階層などは明かされていないがおおよそ十層ほどかなっている広い迷宮で、あちこちに様々な仕掛けがしてある。

迷宮の通路はどこもしっかりした石造りで立派なものだ。

元々はこの学園が建っている場所にかつてあった、古代の遺跡を利用していろいろらしい。

今シャルがあっさりと燃やし尽くしてしまったが、あのように敵も出たりする。

だがそれらは本物ではなく学園が用意した人工の敵で、その本質は幻のようなものだと言われていた。

その原理は学園の機密になっているという話だ。

だが幻とはいえ襲われれば何故か怪我もするのでこちらもそれなりに気を引き締めてかからなければいけない。

魔物達は一定量のダメージを与えればさっきのように消えてしま
うが、実戦に慣れていない学生達には狭い通路で冷静に戦う事はな
かなか難しい……はずなのだ。

ちなみにこの世界で魔物というのは、体内の魔力が歪んでしまい
姿が変わったり凶暴化したりした生物の総称だ。

何故魔力が歪むのかや、変貌する種類に共通性があるのかなどは
まだ解明されてはいない。

魔力は多かれ少なかれ大抵の生き物が持っているから、それらの
生き物はどれも魔物になる可能性を秘めていると言える。

姿形が様々なのはそのためで、強さに差があるのは元となった生
き物の魔力の量によるのではないかと言われていた。

だが実物はほとんど目にする機会がないので、あまり研究は進ん
でいなかった。

大抵の魔物は未開の森や山、人の少ない海などに出ると言われて
おり、本来なら生徒達は見るとも戦う事もできない。

だから学園ではこうして、やがては外に出て未開地域に踏み込む
ことになるかもしれない生徒達に幻を与えて訓練させるのだ。

生徒達は本物ではないとはいえ初めてみる凶暴な生き物に怯えな
がらも少しずつ慣れ、強くなっていく。

というのがこの訓練施設の目的だ。

そんな訓練施設の地下三階を、ただ今三人は理不尽な速さでさく
さくと攻略中だった。

「シャル、止まれ」

前に行くシャルの更に向こうに視線をやっていたディーンが声をかけた。シャルはその声に素直に立ち止まる。

「また？」

「ああ、その足元から三つ目の敷石は踏むな」
「わかったわ」

ディーンの指示に床を良く見れば、確かにわずかに盛り上がっている敷石がある。だがその違いはほんのわずかで普通なら気付かずに踏んでしまってもおかしくない。

シャルはその敷石を踏まないように大きく踏み出してまた歩き出した。

ディーンはこの迷宮に入ってからずっと、通路や部屋にかかっている罫や魔法を見ながら歩いてきた。

最も彼に見えるのは魔法の痕跡だけなので、物理的な罫は闇の精霊に教えてもらっている。

以前より大分はつきりと見えるようになった闇の精霊が、罫のある所に不自然な影を落として教えてくれるのだ。

ここにアーシャがいれば掛かっている魔法を見極め、どんな罫かそれが解除できるのかも教えてくれたと思うが、ディーンは見るだけしか出来ない。

近道や宝箱が隠されている可能性もあるのだが、判別できない以上むやみに触らない方が良かった。

だから三人はそつとその罫を避けるだけで済ませ、急がば回れとばかりにひたすら歩いていたが、それでも相当の早さだ。

前から来る障害物をシャルが吹き飛ばし、道に仕掛けられた罫をディーンが見つける。

後ろから不意に襲ってくる敵はジェイが殴り飛ばしていた。

「あーあ、アーシャがいたらこんな擬似迷宮じゃなくって外の本物の遺跡とか行こうと思ってたのに。えい」

最後のやる気のない掛け声でシャルは火球を前方に飛ばした。炎は通路の先を飛んでいた蝙蝠のような小さな魔物に当たり、ぼつと大きく燃える。

それは敵を見つけると騒ぎ立てて仲間を呼ぶタイプの魔物だったが、叫び声を上げる間もなく一瞬で消え去った。

「その先を右だな。前方は畏だ。ジェイ、遅れるな」

「へいへいっと。よいしょ」

ドゴン、と鈍い音がして背後の床から音もなく盛り上がったゴレムがジェイに殴り飛ばされて転がった。

ゴレムは跳ね飛びながらぼろぼろと崩れて溶けるように消えた。アーシャの作ってくれた鞆を背中に背負っているおかげで、荷物が多くても身軽でいられて実に助かっている。

狭い通路で動きが軽いというのはジェイにとって何より助かる事だった。

三人はもうずっとこんな風に、それぞれが勝手な行動をしながらも不思議と息のあったコンビネーションで足を止めることなく歩き続けている。

だが何となく心はやさぐれていて、言動にもやる気のなさがにじみ出ているのは明らかだ。

この迷宮に入ってまだ半日だというのにもう退屈でしょうがない。

「大体、華がないのよね、華が。華！」

ぼつと前方に立ち上がった炎の華は大きな熊を焼き焦がした。

「右斜め前の壁は叩くな。後五歩進んだところの石も踏むな。それと実習に妙なものを求めるな」

「そうそう、仕方ないさ。それにアーシャは華って言うのとなんか違うだ、ろつと！」

ゴン、と鈍い音を立てて、素通りした通路から顔を出した骸骨の首がはるか遠くに飛んでいった。

「華じゃないけど野の花のような可愛らしさがあるじゃないの！」

「どちらかという警戒心の強い野生の小動物の間違いだらう」

「あー、俺リスとか小鳥に餌付けすんの好きだな」

そんなずれた会話を交わしている間に三人は更に下へと進む階段を見つめ、躊躇いなく降りていった。

階段の脇には安全地帯の小部屋が設置され、そこにはここまでクリアしたという証の札が置いてある。

だが三人はこのまま今日中に五階くらいまで行って帰ってくるつもりだったので見向きもせずさっさと進んで行く。

潤いの足りない会話を交わしながらも彼らの心は一つだ。

とにかく、このつまらない実習をさっさと終わらせるのだ。

階段脇の安全地帯には呆然と座り込む同じ学年だろう生徒達の姿があった。

入念な準備をして随分先にこの迷宮に入り、大きな荷物を抱えて罨を掻い潜り、敵と死闘を繰り広げ、この中で何泊もしながらやっとここまで来て休んでいた彼らは遠くなる三人の背中を怯えた顔で見送っていた。

20：少女の居場所

レイアルの秋はアウレスーラよりも足取りが少し遅い。

川から吹く風は冷たいが、まだ夜風に当たるのが耐え切れないほどではない。

夜、ライラスの実家の廊下をアーシャは一人歩いていた。

もう少女がここに来てから何日もたつ。

工房での研修は忙しくもなかなか楽しい日々だった。

ここの工房にはライラスの祖父と父の他にも職人や弟子が沢山いる。

通いの人が大半だが、遠方から来る者の為の部屋も幾つか用意してあって、アーシャはその一つに泊めてもらっていた。

最初に挨拶した時は、大きくてむさくるしい男達ばかりでかなり緊張していたアーシャだったが、今では大分慣れて普通に会話が出るようになった。

職人達は偏屈だったり頑固だったり、明るかったりむっつりとしていたりと個性も様々だが皆真面目で気のいい人達ばかりだ。

誇りを持って仕事に励むその姿をアーシャは気に入っていた。

研修は主に工房の掃除や下準備、後片付けや単純な作業が多く、その間を縫って様々な技術を少しずつ教えてもらえる。

その他に母屋の方の手伝いもちゃんとしなければならぬのだから本当に忙しい。

それでもアーシャは夜遅くまでそれらの仕事をこなし、それから自分の魔具の作成に勤しんでいた。

今は風呂を借りて部屋に戻る所だったのだが、風呂上りの体に当たる風が気持ちよくて廊下を歩きながら外を眺めていた。

ふとアーシヤの目に工房の明かりが目に入った。まだ誰かが作業をしているらしい。

アーシヤは少し考え、一度部屋に戻ると服を着替えて一階へと降りた。

外に出て、工房の明かりに誘われるように建物に近づきそつと扉を開ける。広い作業場の奥にはライラスの祖父が一人座っていた。

恐らく彼だろうとアーシヤは予想していたから驚かなかつた。

この工房の三代目であるライラスの祖父は、まるで作業場が自分の部屋であるかのようにいつも一番長くここで過ごしている。

「誰だい」

「……私、です」

後ろを振り向かずに関かけたライラスの祖父、ウルサ・バルドはアーシヤの声にああ、と頷いた。

アーシヤはそれを了承と受け取り彼の背中へと近づく。

ウルサはいかにも職人氣質な老人だ。

年月を経た岩のようなごつごつとした容貌はライラスとはあまり似ていない。

薄くなつた髪の毛も、もっさりとした顔を覆う豊かな髭も真っ白だつた。

口数の少ないこの頑固な老人は三代目というだけあつて熟練の技の持ち主で、工房の職人達全員から畏れ敬われている。

アーシヤもまた、この老人がとても気に入っていた。

アーシヤは静かに老人の作業している机まで歩み寄ると、その脇にあつた空いた椅子に腰をかけた。

老人は手に持った小さな石を研磨している所らしかつた。

アーシヤは彼の作業を見るのが好きだ。

ウルサは石をととても大切に扱う。

原石の沢山入った箱から特別な一つを選び出し、そのごつごつした手に道具を握り、丁寧に丁寧に削って石だけを取り出していく。彼の手はまるで魔法のように石と道具を扱い、その手に掛かると不器量な原石はたちまちその衣を優しく剥がれ、驚くほど美しい秘密の宝物を顕わにする。

アーシヤはしばらく黙って彼の手元をじっと見詰めていた。彼もまた、少女が穴が開くほど見つめていても決して咎めたりしない。

いつもは魔具に関しての質問があるとアーシヤが頃合を見て彼に話しかけるのだが、今日は珍しくウルサの方が口を開いた。

「……何を持ってきた？」

アーシヤは驚いて目を見開いた。

確かに少女の手元には小さな箱があった。けれど彼は自分の手元から一度も目を離してはいないはずなのだ。

「どうして、わかったの？」

「……ふむ。声がするから、かの」

アーシヤは手にしていた小箱をことり、と机の上に置き、そっと開いてウルサに見せた。

老人はようやく顔を上げ、箱の中身を見て、やはり、と頷いた。

「わしが作ったものじゃな。そうだろうと思った。お前さんが買ったのか」

「ううん。友達に、誕生日の贈り物に貰ったの」

ほっほ、と老人は嬉しそうに目を細めて笑った。

「なかなか見る目がある。それは最近作った中ではまあまあの出来じゃった」

アーシャは頷いて、ジエイとディーンに貰ったチョーカーを手を取った。

それは目の前の老人の太い手指から生み出されたとは思えないほど、繊細で美しい品だ。

「これを眺めてた時、ライラスのお姉さんに聞いたの。

これを作った三代目は石の声を聞いて細工を決めるんだって。本当に？今も聞こえたの？」

老人はまた笑い、そして小さく頷いた。

「聞こえるといつても、そんな気がするという程度のものじゃよ。何も語らん石も多い。

だが石が語った時はわしはその希望通りにしてやる。それがわしらの流儀じゃから」

「わしらの？」

アーシャの疑問の声に老人は頷くと、道具から手を離してそばにあったパイプを手を取った。

ゆっくりとした動作で火を点け、一息吸ってふう、と吐いた。

「言い伝えじゃがな。わしらの祖先は地の大陸に住み、大地と語った一族だったと言われている」

「大地と……」

「そう。大地の声を聞いて鉱脈を探し、掘り出した石の声を聞いてそれらを磨き、少しだけ削り、大切な子に晴れ着を着せるように美しく飾って地上へと送りだす。」

それが我らの仕事だったのじゃよ」

じつと聞き入るアーシヤに、老人は優しい目を向けた。

「今はもう一族はばらばらになり、血も薄くなり、言い伝えが本当かどうかもわからんがの。

それでもこういう仕事をしていると時折感じるものがある。それはそうして出来た一つじゃよ」

アーシヤはウルサの言葉に頷いてチョーカーに触れた。

アーシヤには石の声は聞こえないけれど、老人の思いは聞こえるような気がした。

「貸してみなさい。嬢ちゃんに合うように調整してやるわ」

ウルサはそういうと自分の作品を受け取り、石に手をかざし口の中でぶつぶつと何か呟く。

やがてその手の下にふわりと緑の魔法陣が現れた。

老人は指先に灯した光でそこに幾つかの言葉や線を描き足した。

「これはもう少し小さい子供用にどうかと考えとったからな。ほれ、これでいいじゃろう」

「……………ありがとう」

アーシヤは礼を言うとそれを受け取り、しばらくじつと見つめてから大切に箱にしまった。

ぶか、と煙をふかし老人はその様子を眺めていた。

「……………なあ、嬢ちゃん。お前さんが魔具を使って、大会に出るとい

う話を聞いた」

「……うん」

「それで、本当にいいのかね？」

その言葉にアーシャは俯いた。

ウルサの鶯色の優しい目が彼女の中まで見透かしてしまうような気がして。

「嬢ちゃんが物を作るのが好きなことは、見ていればわかる。

だがのう、お前さんは戦う事には向いていないじやろう。ましてや、自分の作った道具で戦う事をどう思っとるね？」

「……私、は」

「同じ魔技師として、お前さんが悔しいと思う気持ちも、よく分かる。

だが、そんないざごも嫌な思いも、時が立ち、それぞれが大人になった時には消えて行くものでもある。

嬢ちゃんには、今そこまでして得たいものがあるのかね？」

アーシャはそれに答えなかった。俯いたまま、ただ手元の箱を見つめていた。

そして、顔を上げると老人に問いかけた。

「おじいさんは……石の言葉が聞こえる自分で、どう思う？」

「どう、とは？」

「自分が、人と違ってっているってそう思う事はあった？」

老人は彼女の問いに、しばらく考えそれから首を横に振った。

「確かに、少しは違うじやろうな。だがそりやせいぜい、ちょっと変わっとるくらいのもんだ。

わしは普通の人間じゃよ」

アーシャはその言葉に頷いた。

それから、小さな手でぎゅっと自分の服の胸元を掴んだ。まるで苦しさに耐えるように、少女は言葉を紡ぐ。

「私……すごく深い森の奥で育ったの。

周りに他人はいなくて、そこで私は自分の事を、森の生き物の一つだって思ってた」

あの森は今でも少女の故郷であり続ける。これからもきつとそれは変わらない。

「だからなのかな、人里に出て来た時、私は……自分が人だって、どうしても思えなかった。

自分と同じ姿をしている人達が、どうしても自分と同じ生き物だと思えなくて、すごく気持ち悪くて、怖かった。

……今でもそれは、あんまり変わってない」

老人はただ黙って少女の話聞いていた。

話を聞いても変わらない瞳に勇気付けられ、アーシャは更に続けた。

「自分の仲間だって思えない群れの中で暮らしていくのは……本当は、結構辛い。

だから、自分が人だって思えるような……仮初めでもいいから、そう思わせてくれるような何かを探そうって思った。

そして、見つけたのが……」

アーシャは自分の両手を持ち上げ、その小さな手を見つめた。

「この手で、何か作る事」

その言葉に、老人は深く頷いた。

彼にはもちろん、少女の気持ちの全ては分からない。だが、彼は頷いた。

「道具を使い、物を作り、そしてそこから新しいものを生み出す事は人にしかできん。

人しかしない、と言ってもいいがの。いかにもそれは、人間らしい営みじゃな」

「じいちゃんも……育ての親も、そう言った。

じいちゃんは不器用で、私は道具が使えるようになったら、自分の物は大体自分で作ってた。

どれも下手くそだったけど、何か作るたびじいちゃんは褒めてくれて、すごいって喜んでくれて」

『アーシャ、お前のこの両手は神からの賜り物じゃ。

神々は人に新しい物を生み出す事の出来る手と智恵を下さった。

これは他のどの種族にもないものじゃ。大事にしなさい』

アーシャが見つめるその手がかすかに震えた。意識が、過去への道を辿る。

不意に、暖かいものがその小さな手に重なった。

それは目の前の老人の、職人らしく皮が厚くて固い手だった。

ごつごつしていてしわしわで、けれどとても暖かいその感触に過去から引き戻され、アーシャは目を伏せる。

歳を経るという事は、こんな風に敏く思慮深く、そして優しくな

るものなのだろうか。

自分の中にあるものが老人に伝わっている事を感じながら、少女は不器用に思いを語った。

「……たった一つ、それにしがみついてあの学園に一人でいた私に……初めて、仲間が、友達が出来たの。」

私に、ありがとうって言うてくれて、怒ってくれて、心配してくれて。

私が作った物も、ほんとに喜んで受け取ってくれた。

まだ、ほんのちょっとしか一緒にいないのに、私の中で、どんどん皆が大きくなって……」

もう、彼らがいなかった時の自分が思い出せなくなりそうだった。

それは少女にとっては、本当は少し怖い。

けれど、ここで逃げて森に帰る気にはどうしてもなれない。

「ほんとには、私は他人に何言われたって平気。心を閉ざせばいいだけだから。皆だって強いから、負けないってわかってる。」

何されても言われても無視して、普通に暮らす事はできる。

でも……私が、人である証だって思ってる事を人に否定されるのも嫌だって気付いたの」

仲間は捨てられない。

けれど、仲間が出来るまで少女を支えてあそこに留めてくれていたただ一つのものも捨てられない、とアーシャは気がついた。

そしてそれを馬鹿にされる事が嫌だという事にも。

物を作る事を学ぶ生徒達が、人にしかできない事を誇るべき彼らが、誰よりそれを誇れないでいる。

多分技巧学部の生徒達ならもつと考え方も違うのだろう。

だからアーシャには尚更、魔技科や魔法科の生徒達のあり方が納

得できない。

「私……逃げるのが得意。隠れるのも、危険を避けるのも得意。空気がたいに周りに調和して、ひっそり生きるのは全然難しくない。」

危険から逃げられない時は、精霊に助けて貰ってきた。

だから助けてもらうのも得意で……そんなことばかりで、自分で戦った事なんて、ないよ」

アーシャにとって人じゃなくなる事はひどく簡単だ。昔も今も、彼女はいつだって森に近い。

森はアーシャを拒まず受け入れてくれるだろう。人の群れよりもずっと優しく、暖かく。

だから深い森に行つてそこで暮らすだけでいい。

そこから帰つて来なければ、アーシャは人ではなく森の生き物として、その深い懐で守られて心穏やかに過ごせる。

けれど今、アウレスーラには少女を強く引き止めるものがある。今居るその場所を、アーシャは誰にも譲りたくなかった。アーシャがどこよりも、一人の少女でいられる居場所を。人らしくあれ、と言つた育ての親の言葉をどこよりも叶えてくれる彼らの傍らを。

「戦つた事はない……けど、この手で、守りたい。自分が人だつて信じられる場所を……守りたい」

何よりも、この二本の手で。

「私が、人で居られる場所を、人として戦つて、勝ち取りたい」

そうか、と老人は少女の手を握る己の手に力を込めた。
小さな手はまだかすかに震えている。

「嬢ちゃんは、まるで透明な石のようじゃな。
どんな色も持たず、向こうの景色を透かしてしまふような」

アーシャはその言葉に思わず俯いた。
だが老人は、優しく笑って言った。

「透明な石はな、どんな素材ともよく合う。
色々な使い道があるし、カットの仕方ですら全然違う表情を見せる。
どんな色の服や髪とも喧嘩をせん」

老人はアーシャの手をそつと離すと、机の上にあつた道具箱をキ
イ、と開いた。
そして中から何かを取り出し、またアーシャの手を取ってその上
にそれを乗せた。

手に乗つたのは、丸く磨かれた親指の先ほどの透明な石だった。
水晶のように見えるが、それは力を放っている。
精霊石だとアーシャにはすぐに分かった。

「それをお前さんにやろう」
「えっ」

アーシャは驚いて老人を見上げた。

「それは力があるから、良い魔具になるじゃろう。役に立てると良
い」
「そんな……でも、こんな高価な物、もらえないよ」

ふるふると首を振るアーシャに、老人は優しく笑った。

「なら、使い終わったらいつか返してくれれば良い。

いつになっても良いから、役に立ったならその話と一緒に持って、またおいで」

ぎゅ、と小さな手に石を握らせて、老人はその手を優しく叩いた。

「透明な石はな、どんな色も持たん代わりに何にでもなれる。お前さんも同じじゃよ」

その言葉は、ゆっくりとアーシャの胸の奥深くに沈んでいった。

「……………うん……………ありがとう」

強く握った手の中で、石が暖かな力を放つ。

老人の手と同じ、優しい優しい暖かさだった。

少女が部屋に戻った後、老人は半分開いたままだった裏庭に面した窓を更に開けた。

「聞いておったか？」

「……………」

窓の下には、膝を抱えて座り込んだ彼の孫の姿があった。

ライラスはその言葉に答えず、ただ小さく頷いた。彼は少女と同じように明かりのついた工房を訪ね、そこに老人と少女の姿を見つけてこっそりと裏側に回りこんだのだ。別におかしな意図があったわけではないが、少女が祖父とどんな話をするのか、少しだけ気になったから。

ライラスはショックだった。

少女は強いと思っていた。

強い友達がいるから、精霊魔法が使えるから、彼女は強いのだと思っていた。

けれど、それは違っていた。

強くあるうとする心が、彼女を強くさせているのだ。

嫌な事を強くは感じない、と言っていたのは、少女が自分と違う群れの中でそれでもそこに留まるための懸命な努力だったのだ。

彼女は、そうしなければ生きてこれなかったのだろう。

けれど同時に、人らしくないその心の動きを少女は厭うてもいた。

祖父が自分を見下ろす気配がしたが、ライラスは自分が恥ずかしくて顔を上げられなかった。

「俺……あんな風に、思ったことなかった」

「あんな、とは？」

「友達なんて……あいつも……フランスも俺も、一時会わなくなってもすぐにまた新しいのができるって思ってた。

親友だなんて言っても、きっとそうだって。

今でも、フランスと仲良くしたいけど、学校卒業してからでもいやって」

親友の事を思っ作った初めての杖は、渡される事もなく部屋の片隅に置いたままだ。

それを贈る勇気が、自分にはなかった。

「グラウルと出るって約束した競技会だって、ほんとは……どうせすぐ負けるだろうって。」

けど、出たっというだけで勇気があるし、ちょっと何かが変わればいいかなって程度に、思ってた……」

たった一つの自分の居場所を賭けて戦うなんて、そんな風に思ったことはなかった。

自分の場所がここしかないなんて思ったことがないから。

「魔技師だっ……今は馬鹿にされて嫌な思いすることがあっても、結局魔道士だっ俺たちの作った道具を使っんだから、そのうちせいぜい吹っかけてやるとか思ってさ。」

自分達の誇りのために今何かするよりも、嫌な思いしない事の方を選んだんだ……」

祖父は孫の言葉に、深く頷いた。

「それもまた道じゃよ。一つを諦め、一つを選ぶ。」

それは別に、恥ずかしい事ではない。逃げることも一つの選択じゃ

「でも、グラウルは、戦うって言っただ……」

「そうじゃな。あの子はきつと一人でもその道を行くじやろう。」

……お前はどっするね？」

ライラスは唇をきつく噛締めた。

自分にはその覚悟があるとは思えない。
少女の隣に立って、真っ直ぐに敵を見据える覚悟が、湧いてこ
ない。

けれど、彼女を助けたいとそう思った。

「俺……自分が戦えるなんて全然思わない。

けど、せめて、俺の作る道具が……あいつの助けになればいいな。
俺、これしかできないから、せめてできる事で手伝ってやりたい
……」

「そうか……」

祖父は窓から手を伸ばし、孫の頭を撫でた。
何度も何度も、優しく。

「お前達はまだここにはしばらく居られるんじやろつ。明日から、
敵しく行くぞ」

「え？」

「お前に伝えるのはまだ早いと思っとなが、必要な事を叩き込
んでやろつ。」

お前が、お前の戦いを出来るように」

ライラスは驚いて上を見上げた。

灯りの影になった祖父の顔は良くは見えない。

いつもと同じくむっつりとしているようにも、どこか笑っている
ようにも見えた。

「じ、じいちゃん……」

「明日からは、師匠じゃぞ？」

「う、うん……」

はいと言え、と祖父に怒られ、ライラスは笑った。

祖父の言う通り、自分は自分の戦い方で、できるだけのことをしようとは立ち上がった。

「よろしくお願いします！」

祖父は立ち上がった孫を、満足そうな笑顔で見つめ、頷いた。

21：吐き出された思い

ポン、ポポン、と青空に花火の音が響き渡った。

小さく白く弾けた花火は競技会が予定通り今日から行われる合図だ。

道に行く生徒達は秋の終わりの高い空を見つめ、白い煙をたちまち吹き飛ばした冷たい風に頬を撫でられて首をすくめた。

学園は冬が訪れる直前の冷たい空気に包まれている。

生徒達の身を包むローブや制服も冬の物へと変わっている。

シャルは、生徒達が登校する朝の街を赤いローブと白いマフラーを揺らして走っていた。

彼女は今日は寮を出てすぐに学校とは逆の方向へと走り、街の西の外れにあるアーシャの家を目指していた。

細い路地を縫うように走り、やがてシャルは古ぼけた家の古ぼけた扉の前に辿りつき荒く息を吐いた。

冷たい空気に晒された頬が赤く染まっている。

シャルは、今日から始まる魔法競技会の開会式に出るために少女を呼びに来たのだ。

アーシャと仲間達は少女の実習が終わってから何度か会ったけれど、魔具を作るのに忙しい彼女をそつとして置いてやるうとこころばらくはほとんど顔を合わせていない。

それでも今日くらいはいいだろうと思いつながら、シャルは古びた扉に付いたノッカーを叩いた。

コンコン、と何度か叩いてしばらく待ったが、中からは何も聞こえない。

ゴンゴン、ともう一度叩いて様子を見た。

もう学校に行ってしまったのだろうかとも思ったが、ここ数日アーシャは学校にもほとんど来ていないらしい。

出席日数に極めて厳しい授業にだけ出てすぐに姿を消すと人伝に聞いたのだ。

魔法学部に広がっていたあの噂は今回の実習でアーシャが別行動をとった事で一旦は鎮まっている。

もっともアーシャが居ない間は、やはり足手まといだったから抜けたんだ、とまことしゃやかに囁かれてシャルは切れそうなのを抑える事に必死な毎日だったのだが。

ドンドンドン！

「アーシャ？ アーシャ、いないの！？」

色々な可能性を考えていたら部屋の中で少女が倒れているんじゃないかと不安になり、シャルは古ぼけたドアをガンガンと叩いた。扉はギイギイと抗議の悲鳴を上げたがそんなことに構ってられない。

「いないのかしら……」

何度も叩いたがやはり返事はなく、裏に回ってみようかとシャルが考えた時、ガチャリ、と音が響いた。

「アーシャ！？」

「うっわあ！」

バン、と鍵の開いた扉を勢いよく引くと、突然開いた扉に引っ張られて少年が一人転がり出てきた。

「あら」

玄関の前に転がったのは、アーシャの臨時パートナーのライラスだった。

シャルはちよつとむつとして、ライラスを睨みつけた。

「いつててて……いきなり開けないでくれよ……」

「もたもたしてるから悪いのよ！貴方、ライラスよね？アーシャはどうしたの？」

矢継ぎ早に少女の行方を聞くとライラスは、中にいるよ、と家中を示した。

シャルは慌てて中に飛び込み、部屋のあちこちを見回した。

「どこにいるの？ 開会式に呼びに来ただけど」

「居間で寝てると思う……」

ライラスは力なく答えるとヨロヨロと立ち上がって家中へ入ってきた。

「貴方具合でも悪いの？」

「そりゃ……もうずっとまともに寝てねえし……今のは効いたし」

ここ数日ライラスは毎日のようにアーシャの家で魔具と一緒に作っていたのだ。

少女も彼も、もう何日もまともに寝ていない。

ライラスがさっきまで台所のテーブルに突っ伏していたように、恐らくアーシャも部屋のどこかで寝ていると思われた。

「アーシャも!？」

ライラスからそう聞いたシャルは慌てて居間に踏み込んだが、居間は道具や紙が散乱して足の踏み場もないような状態だった。

「うわ、何これ……アーシャ？ アーシャどこ？」

部屋の入り口で立ち止まったシャルは中を見回したが少女の姿はなかった。

やはり二階か、と部屋から出ようとすると脇からライラスが顔を出して中を覗き込んだ。

「ああ、いるじゃん。ほら、あそこ」

「え？」

彼の指し示す場所を見ると、背の低いテーブルの下に何か布の塊が置いてある。

ライラスは床の上に散乱した紙をバサバサと乱暴にまとめてどかし、無理矢理道を作った。

そしてテーブルに近づくとその布の端を掴んでぐい、と引っ張った。

「よっ、と」

ライラスはテーブルの下からずると引きずり出した布の塊をシャルの前まで持ってきてそつと開いた。

布の塊はなんと毛布にくるまって小さく丸まって寝ているアーシャだった。

まるで冬眠するヤマネか何かのようだ。

「明かり点けっぱなしだったから、眩しくて潜り込んだんだ。ここんとこずつとそうなんだ」

ライラスは呆れたようにそう呟いて傍にあつた椅子に座り込んだ。もう椅子の上の紙をどかす気力もなくそのままくしゃり、と尻に敷く。

「アーシャだったら……アーシャ、ねえ、開会式が始まるわよ？」

シャルはアーシャの肩に手をかけ、名前を呼んだ。

だが軽く揺すつても声をかけても、少女は動く気配もない。耳栓をしている訳ではないが、とにかく疲れているようだった。

「やめといたほうが良い……開会式、義務じゃないよな、確か……俺も出る体力ねえし」

ライラスは力なくシャルにそう勧めた。

その目の下に色濃くついた隈が彼も疲労している事を物語っている。

「そうね……でも、こんな調子で大丈夫なの？」

シャルは二人の顔を交互に見て無理に連れ出すことを諦め、アーシャにそつとまた毛布をかけた。

「競技会は長い……最初は実戦以外の部門だし、先に一、二年のがあるから、まあなんとか、かなあ」

「もう準備は終わったの？」

「やる事はやったよ……俺もちょっと寝ないと、使いもんにならないけどな……」

ライラスは部屋の隅にまとめられた大きな箱を指差した。
そこからは様々な道具が顔を出している。

「あんだ達が持つてきてくれた、対戦するかもしれない相手のデータを参考にここんどこずつと作業しっぱなしだったからな……グラウル、感謝してたぜ」

「そう……良かった……」

自分達がやった事が少しでも少女の助けになったのなら何よりだ。役に立たなかったら本当に闇討ちでもしてやるうかとシャルは苛々していたのだ。

「とりあえず俺は寮に帰って寝る……まだもうちょっと作業が残ってるから、しばらく通うけど、今日はベッドで寝てえ……」
「わかったわ、それが良さそうね」

シャルは少し考えて、アーシャを包んだ毛布をもう一度開いた。中で眠る少女を起こさないように毛布をそつと引っ張り、完全に彼女を包み込んで端をきゅつと二箇所縛る。

それからライラスを振り返ってにっこりと笑顔を見せた。

「帰る前に、こつち半分持つて。アーシャをベッドまで運ぶから」
「……はい」

疲れていて力が出ないと訴えるべきか、荷物のように人を包むのはどうなのかと突っ込むべきか、当然のように持つてと言われた事に文句を言うべきか、ライラスは動かない頭で一瞬考えた。

だが確かに少女をこのまま床の上で寝かせておくのも忍びない。

ライラスは諦めて、問答無用で渡された袋の端を持ち、シャルに

引きずられるようにしてどっにか歩いた。

「やっぱり寝てる人って結構重いわね……ほら、もっとしっかり持つてよ！」

「はい……」

疲れ切った彼がベッドで安らかに眠れるようになるには、まだしばらくの時間が必要なようだった。

魔法競技会を迎えた学園はどこか浮かれた雰囲気だった。

学園の行事には大小様々なものがあるが、一年おきに交互に開かれるこの魔法競技会や武道大会は規模が大きい。

技巧学部や医学部の生徒達が、日頃の訓練の成果や研究論文、作り上げた作品などを披露する行事も定期的に行われるが、そちらは比較的小規模だ。

大きな学園祭は四年に一度行われるのだが、今年度はその年ではないので目立つ行事は魔法競技会だけだった。そのせいもあって魔法競技会は始まる前から大いに盛り上がっていた。

競技会はルールさえ守れば上級学部の生徒なら誰でも参加可能で、毎回参加者の人数によって日程に差がある。

その日程の前半は実戦以外の部門が行われ、小さな会場が幾つも用意されていた。

ディーンは魔法学部内に設けられた会場の一つで行われる、魔法薬学の競技を見学しに来ていた。

魔法薬学競技は会場内に用意された道具と材料を使い、その日に発表された課題の魔法薬を制限時間以内に調合すると言ったものだ。参加者達は、課題として示された色や効果から正解の薬を予想しそれを調合する。

魔法競技会にはこういう実戦以外の競技もかなり沢山ある。

ディーンは魔法薬学を専攻しているので出場しても良かったのだが、今回ばかりは気がかりがあつて集中できそうにないため参加を見送った。

作る薬によつて制限時間にも差があるのだが、今年は制限時間四時間とかなり長かったので最後まで見る事は諦めた。

参加を見送つて正解だった、と思いながらディーンは懸命に調合をする生徒を見ながら途中で教室を出た。

隣の会場では紋陣魔法の競技が行われている。

こちらは制限時間内に、定められた魔法効果を示す魔法陣を描き、その正確さを競うというものだ。

その更に隣では魔法の矢を飛ばしてその飛距離で遠隔操作の可能範囲と正確さを競う競技、単純な魔法を行いそれをどれだけ持続しているか競う競技……と他愛ない競技が様々に行われている。

地味な種目が多いのであまりギャラリーはいないが、それでも出場者やその応援者が部屋を熱心に覗き込んでいた。

ディーンはそれらを横目に見ながら魔法学部の廊下を出口に向かって静かに歩いた。

シャルやアーシャが出場する部門はもう二日ほど後から始まる。それが始まると本当に学園はお祭りムードに変わり、幾つかある魔法競技場はどこもギャラリイでいっぱいになるのだ。

開会式の日、シャルがアーシャを訪ねた事をディーンは聞いていた。

家の中の様子を聞いて、やっぱり出場して魔具で勝負するつもりなのかと内心でため息を吐いた。

精霊魔法を使えばきつとそんな苦労もしなくて済むだろうに、と何度も思った。

やはり今からでも遅くないから参加者を闇討ちしてやるべきかとディーンは一瞬思ったが、首を振ってその考えを打ち消した。

(……そんな事をしても喜ばないだろうな)

その考えがシャルと実に似ていることに気付かないまま、ディーンは学部を出ようと出口に差し掛かった。

競技をやっているこの時間は生徒達はあまり建物の出入りをしないので、通路はシンと静まりかえっていた。

「こんにちは」

不意に横から掛かった声にディーンはピタリと足を止めた。

見たくなかったが嫌々横目で声のした方を見ると、そこにいたのは予想通りの人物だった。

「お久しぶり、アルロード君」

語尾にハートマークでも付いていそうな媚を含んだ声に思わず鳥肌が立つ。

長袖を着ていてそれが相手に分からないのが残念だった。

「……何か」

「あら、冷たい。用がなくちゃ話しかけちゃいけないの？」

こちらを苛立たせるためにわざとしているのだろうかと思うような歩き方でカトウラはしなしなとディーンに歩み寄った。

「用がないなら遠慮願いたい。私は君に用はない」

ディーンは固い口調で告げたが、彼女は引き下がらなかった。

「あら、私はあるわよ？ 大事な用が。」

あのね……次の野外実習に、私を入れてもらえないかと思って。駄目かしら？」

ぬけぬけと何を言うのかとディーンのコめかみが思わず引きつる。だがこの手の人間はどんな形であれ感情を露にして相手にすると後が厄介だと知っているディーンは怒りをぐっと堪えた。

「お断りする」

「あら、どうしてえ？ 貴方の班、今三人だけでしょ？ バランス悪いじゃない。私、役に立つわよ？」

「……今回は三人だったが、次回はまたアルシエレイアが戻ってくる事になっている」

努めて静かに告げると、カトウラは一瞬眉を上げた。

「あら、でもあの子、足手まといだから抜けたんでしょ？　そう聞
いてるわよ、私？」

「……君は」

ハア、とディーンは深いため息を吐きだす。

そして目の前の女をきつく睨みつけた。

「君がしたことを我々が知らないと思っっているのか。

それならばおめでたいにも程があるし、そうでないなら尚の事、

何故我々に近づく」

「……！」

ディーンが見せた冷たい目に、カトウラは思わず怯んで一歩下が
った。

だがすぐにそんな自分を恥じるようにまた一歩踏み出し強気に問
いかけた。

「何言ってるの？　私がかしたって言うの？」

……もしかして、あの子がか言ったの？」

今回の事や、賭けの事は仲間達に言わないようにとカトウラはア
ーシャに条件として告げてあった。

そして少女もそれを了承したはずだ。

それもあつて強気に出たカトウラだったが、だがディーンは首を
横に振った。

「情報と言うのは根気よく辿ればその源に行き着くことは難しくな
い。

まして君のような目立つ発信源なら尚更だ」

君は案外頭が悪いな、とディーンは馬鹿にした風でもなく呟いた。まるでただの事実を告げるようなその口調は、はっきりと馬鹿にするよりも遥かに彼女の神経を逆撫でした。

「なっ……！ それなら、どうして放って置いたのよ！ それこそがあの子がもういらないうって言う事の証拠じゃないの!？」

「別に放置したくてした訳ではない。

アルシエレイアが自分で何とかすると言い張るから、それを尊重して我慢しているだけだ」

それを聞いてカトウラはフン、と鼻で笑った。

そこまではれているのならもう取り付くろつても無駄だと思っただろう。あからさまに態度が荒くなる。

「自分でなんとかするですって!？ とんだ思い上がりね！

ちよつと精霊魔法が使えるからって、所詮は魔技科の人間に何が出来るの？

おまけにあの子、シャルフィーナと組まないんでしょう?」

「ああ、魔技科の生徒と組むと言っていた」

「ふふ、馬鹿げてるわ。

シャルフィーナが出てこないなら、私とコーネリアの勝ちに決まってるもの。賭けは私の勝ちね」

「賭け?」

ディーンはカトウラの言葉に眉を寄せた。

賭けの話などアーシャから一言も聞いていない。

「知らないのね。じゃああの子約束は守ったのね」

カトウラはディーンの様子にくすくすと楽しそうに笑った。

「私とね、賭けをしたのよ。」

あの子が私に負けたら、あるいは勝ち上がれなくて勝負できなかったら、貴方達の班から抜けるって。もう貴方達に近づかないってね。

私が負けたらあの子のいう事を一つ聞くって言う約束だけど、どうせ私達の勝ちに決まってるわ」

「……！」

「私が貴方達の班に入れなくても、あの子が抜けるならそれでもいいわ。目障りだったのがすっきりするもの。」

あ、でももし貴方が私と付き合ってくれて言うなら、賭けはナシにしてもいいわよ？」

楽しそうなカトウラの様子にディーンは尋常でないものを感じた。付き合いもないアーシャを、彼女が何故そこまで嫌がるのか全く理解できない。

「……お断りだ。私にも選ぶ権利はある。」

そもそも何故、君はそんなにアルシエレイアを眼の敵にする？理由は何だ」

「一体私の何が気に入らないの？ 貴方っていつつも失礼だわ。」

あの子が気に入らない理由なんて、そんなの何となくよ。貴方の傍にいるし、ただそれだけ」

だがそんな言葉でディーンが納得するはずもなく、彼は静かに首を横に振った。

「気に入られると思う方が驚くが……アルシエレイアが気に入らないのは、君の父親が魔技師だということの関係があるのか」

「っ……！」

ディーン言葉にカトウラは目を見開いた。
まさかそこまで知られているとは思わなかったのだろう。
綺麗なピンクに塗った唇を噛締め、カトウラは激情を堪えるかの
ように顔を歪めた。

「……父親なんて、そんなの関係あるわけ、ないじゃない。馬鹿じやないの？」

「そうか……ならば、君が精霊の加護持ちの男ばかり選んで口説くのも関係がないのか？」

「なっ……！」

ディーンはその深い色の目でカトウラの目を見つめた。

彼女の灰色がかった青い瞳がその心を映すかのように揺れる。

「私が君の誘いを受けない理由は幾つかあるが、一番大きいのは……
…君が私を嫌っている点だ」

カトウラは目を大きく見開いたまま何も言わなかった。

「君は加護持ちの男ばかりを誘っては、翻弄して捨てるような真似を繰り返している。」

本当は、加護持ちが嫌いなのだろう？ 嫌っている人間を何故誘うのか、私にはさっぱり理解できない」

カトウラはディーン視線から逃げるように顔を伏せ、無言で立ち尽くした。

強張った肩が小さく震える。

やがて、カトウラは深く息を吸い、ゆっくりと口を開いた。

「……そうよ。私は、精霊の加護持ちが嫌いなものよ。」

それがどうかした？ 大体、簡単に引つかかる方が悪いのよ」

「まあ、それには同意しよう」

「そもそも、加護ってなんなのよ！？ なんでそんなものがあるの？ 不公平じゃない！ 私だって、加護があれば……！」

カトウラは脇に垂らした両手をきつく握り締めた。

その姿からはいつもの艶のある雰囲気は消え、年相応の一人の少女がそこにいた。

少女は尚も拳を握り締め、苦しそうに言葉を紡いだ。

「私の父親が魔技師なんかじゃなければ……妹みたいに、私にも精霊の加護があつたかもしれないのに……。」

大した魔法も使えない癖に……魔道士と結婚なんかしなければ！」

「……それが理由か」

デイーンの静かな声に、カトウラはキツと顔を上げた。

「そうよ！ 私の父親は大した魔力も持たない魔技師で、早くに死んだわ！」

後から来た義父は魔道士で、生まれた妹は水の精霊の加護を持っていた……それだけで……たったそれだけで！」

たったそれだけの理由で、彼女は愛されなかった。

もちろん、父親が違っていたらカトウラにも加護があつたという保障があるわけではない。

家族にだって、もしかしたらそれなりに愛されてはいたのかもしれない。

けれど、妹ほどには彼らの関心を得る事は出来なかった。

幼い頃憧れた道さえも、自分の前ではなく妹の前に開かれた。

その悔しさや悲しさ、寂しさが彼女をいつの間にかこんなにも歪めてしまった。

「だから私は、魔技師も、加護持ちも嫌いなよ！
あの子なんて最悪だわ！ 加護があるのに、魔技師を目指すなんて無駄なこととして！ そのくせ貴方達と仲間だなんて！」

ディーンは深いため息を吐いた。

彼女の悲嘆は理解できる。

親に愛されない子供の苦しみは良く知っている。

だが、理解は出来ても同意も同情もできなかった。

彼女には、アーシャが自分より恵まれているように見えるのだろうか。

才能や友に恵まれているのに、それを無駄にしているように見えるのか。

「……アルシエレイアの選択は、正しかったかもしれないな。

君は、彼女と戦ってみるといい。そうすれば、何か見つかるかもしれない」

「何よそれ……！ 訳わかんない！ 貴方ってホントに苛々するわ！」

「そうか、初めて気が合ったな」

ディーンは自分を睨みつけるカトウラにそれ以上視線を向けず、踵を返した。

カトウラはもう何も言わなかった。

ディーンは自分の背に向けられた強い視線を感じながら、真っ直ぐ街に向かって歩いた。

アーシャに会いに行こうと、そう思っていた。

会って、頑張れと言おうと。

ディーンは歩きながら足元の影を見た。

いつもと同じ、濃い、黒い影。

これが欲しかったと彼女は言った。

だがディーンは、これさえなければ、と幼い頃幾度思ったかも
分らない。

加護があってもなくても、人はこうしてそれぞれに悩み苦しむ。

(精霊が悪いのではない)

苦しみを生むのは、全て人の心だ。

人は、どうしようもなく弱い。

何故こんなにも弱く作ったのか、ディーンは神々に問いたかった。
どこにいても知れぬ神々に。

22：始まりは笑顔で

ライラスはすっかり暗くなった寮への道を歩いていた。

今日もアーシャの所に行って作業をして帰るところだった。

もうほとんどの準備は済み打ち合わせもして、これからは夜はゆっくり眠ろうという事になったのだ。

競技会が始まってしまえば授業はしばらくなくなるので昼間作業に没頭する事が出来る。

ふわぁ、とライラスは大きな欠伸を一つし、伸びをしながら歩く。こんなに一生涯懸命何かに打ち込んだのは生まれて初めてだった。

二日後に始まる自分達の試合の事を考えると冷や汗が出そうな気持ちになるけれど、やる事はやった。

いつになく清々しい気分だった。

ライラスが入っている第三寮は上級学部内の西の外れだ。

ライラスは中央棟の脇を通り過ぎ、通りを西へと曲がった。

やがて寮の明かりが目に入り、布団で寝れることの喜びが胸に湧く。

まだ食事時間には間に合うはずだし、軽く食べたら風呂に入っさつさと寝よう、と考えながら寮へと続く道の階段を登った。

階段の一番上に足をかけた時、ライラスはふと足元に違和感を感じた。

「え？」

だがその違和感の正体を確かめようと思った次の瞬間、視界がぐるりと回る。

一瞬の浮遊感と、そしてその直後の衝撃にライラスは息を呑んだ。

ぐるぐると回る視界に見えた星が空に輝くものなのか、自分の視界に瞬いているものなのか、その結論を出す間も無く彼の意識は闇に飲まれた。

階段の上で夜闇にひっそりと煌いていた氷は、彼が通りがかった人に発見される頃にはすっかり溶け、姿を消していた。

「……ライラスが怪我をした？」

次の日、アーシャの様子を見ようと彼女を訪ねた三人は、少女の口からもたらされた報に驚きの声を上げた。

アーシャは今朝ライラスに頼まれた医務局の職員から連絡を受け、彼の所に行つて来たばかりだった。

だがライラスはベッドの上で静かに眠っていて、話ができなかった。

「うん……あのね、昨日の夜寮の前の階段から落ちたんだって」

「なんでこんな時に怪我すんだよ……！」

最もな意見だが、起きてしまった事故は仕方ないとしか言いようが無い。

アーシャも流石にしょんぼりとしていた。

「怪我つて、悪いの？」

「治療の経過は？」

シャルとデイーンの質問にアーシャはため息を吐いた。そして今朝彼を訪ねて医者に聞いてきた事を話した。

「右足の骨を折って、後はあちこち打撲がひどいって。

魔法で骨折は治療したんだけど、骨はそうやって治した場合でも二、三日は安静にしないといけないんだって。

それに彼は頭を強く打ってるから、様子を見ないとだめだって話で……」

「それじゃ間に合わないじゃない！」

「大体なんで階段から落ちたんだ？不注意か？」

アーシャは小さく首を振った。

「ライラスが目を覚まして医者に言ったらしいんだけど、階段の一番上が何か妙に滑ったんだって。

でも何かあったってという証拠は無いの。私が見に行った時はもう何もなかったし」

誰もが脳裏に同じ人物の顔を描いた。だが、証拠は無い。

アーシャは首を横に振って、顔を上げた。

「仕方ないよ、運が悪かっただけかもしれないし」

そういうとアーシャは話すために止めていた手を持ち上げ、持っていた針を動かし始めた。

「そうは言っても……って、何してんだ、アーシャ？」

「マントの内側にポケットと留め具を付けるの。」

ライラスが分担する予定だった魔具も、私が持たないとだからね」

「まさか、一人で参加する気なのか？」

ディーンの声にアーシャは強く頷いた。

「うん。出るよ。一人でも」

「そんな……！無茶よ！」

なら私が一緒に出るわよ！魔法使わなければ問題ないでしょ！？

「そうした方がいい。一人ではいくら何でも無理だ」

二人に言われてアーシャは少し迷う様子を見せた。

けれどやはり首を横に振った。

シャルは既に個人の精霊魔法部門と制限なしの二つに出る事を決めているはずだ。

「駄目だよ……シャルは、自分の試合があるし」

「そんなのいいわよ、どうだって！」

だがシャルのその言葉に、アーシャは目を見開いて立ち上がった。ガタン、と座っていた椅子が後ろに倒れた。

「良くないっ！！」

「っ！？」

少女が初めてあげた怒声に、誰もが驚いた。

「どうだって良くない！シャルには、頑張っただけいいの！」

シャルが、自分の試合をしないで私に出るなんて、そんなのやだ！勝っても全然嬉しくない！」

ぎゅっと固く拳を握って、小さな体をふくらませるようにして少女は怒っていた。

これはアーシャの選んだ戦いだ。

それを助けるためにシャルが自分の試合を放棄するなんて良い訳がない。

そんな事をされて勝ってもそれが勝利だとは到底思えない。

「私、シャルの試合見に行くんだから……！」

だから、自分の試合、ちゃんとしてくれなきゃいやだ！」

「アーシャ……」

シャルはもうそれ以上何も言えなかった。

ここまで言われれば、諦めるしかない。

何もしてやれない悔しさが湧くと同時に、少女が自分に強く意志を示した事が何だか嬉しくて、シャルはどんな顔をしていいのかわからなかった。

立ち尽くす二人を黙って見ていたジエイは、静かにアーシャに近づくと手を伸ばしてその髪をくしゃ、と撫でた。

「じゃあ、俺が出るよ」

「……え？」

「なっ!？」

「……本気か？」

三人に訝しげな顔を向けられて、ジエイは苦笑を浮かべた。

「おう、本気本気。要するに、自分の試合が無けりゃいいんだろ？
なら、俺でいいじゃん。どうせ上級学部生は誰でも参加オツケー
なんだしさ」

「何言ってるのよ！魔法で戦うのよ？」

「確か殴れば即失格のはずだぞ」

だがジェイは取り合わず、もう一度アーシャの頭を撫でた。

「判ってるって。だからアーシャの魔具使っただろ？」

あとは、俺の弱つちい精霊魔法くらいなら使っても邪魔にならないと思うんだけど、どうだ、アーシャ？」

いやか？と聞かれてアーシャは小さく首を横に振った。

武術学部のジェイが精霊魔法を使えることを知っている人はほとんどいない。

本人が好きじゃないせいであまり使ってこなかったからだ。

アーシャに使い方を教えてもらっているとはいえ、まだその威力は大したものじゃない。

ジェイと組んでも、シャルと組んだ時に予想されるような中傷は起きないだろうと予測はできる。

だが武術学部生と魔技科の生徒がペアを組んで出場するなんて前代未聞だ。

そもそも武術学部生が魔法での実戦に出る事がまず無いからだ。人はどうしたって切羽詰れば普段体に染み込んだ行動を起こしてしまう。

いざ戦闘になって、うっかり相手を殴ったりしない保障はどこにもないし、手や足を出せない戦い方は武術学部生に苛立ちを与える。だから魔法が使える武術学部生でも、魔法競技会の実戦部門に出ない事は半ば当たり前の風潮になっていた。

その代わりに武道大会なら魔法使用が許される部門があるのでほとんどの生徒がそちらに出るのだ。

「俺、何にも手伝ってやれなかったからな。良かったら、今度は手

伝わしてくれよ。

俺が相手にほんのちよつとだけ触る程度なら、問題ないだろ？
それ以上は絶対に、拳も足も出したりしないって約束する。誓うよ」

ジェイはそう言つて笑顔を向けた。

アーシャは何も言えずにただジェイの顔を見上げた。

「……なら私でもいいだろう」

不意に不機嫌そうな声が聞こえ、見ればディーンが腕を組んで不満そうな顔をしていた。

「私なら、剣を持たないだけでもかなり周囲に与える印象が違う。私でも可能なはずだ」

だがジェイはディーンに向かってパタパタと手を振った。

「あー、お前は駄目駄目！」

「……何故」

「だって、俺お前に闇の精霊使わせたくないもん」

「！」

「あんなギャラリイがいつぱいいるところで、お前に精霊使わせたくない」

ディーンは口を噤んだ。

その顔を、ジェイは笑みを浮かべながらも真剣な眼差しで見つめた。

衆人環視の中で、闇の精霊を使えばきつとディーンが嫌な思いをするだろう。

ジェイの目はそう言っていた。

「だから、今回は俺に譲れよ、な？ 俺にもちよつとは、良いカツ
コさせるよな！」

おどけたようにそう言つて、ジェイは明るく笑った。

シャルもそれを見て頷く。デーンも、諦めたように頷いた。

アーシャは困ったような顔でジェイを見上げた。

「じゃあ決まりな！アーシャ、よろしくな！」

「ジェイ……ありがとう……」

アーシャが小さく呟いて俯いた時、ゴン、と扉の方から音がした。

「客………？」

「私が出るわ」

シャルはそういうと居間から出て玄関に向かった。

ギィ、と扉が開く音が聞こえる。

「キャツ！ちよ、ちよつと……！」

だが次に聞こえたのはシャルの上げた小さな悲鳴だった。

切羽詰ったものではないが何かに驚いた声の様子に三人は顔を見
合わせた。

「何だ？」

「どしたの、シャル？」

全員がバタバタと玄関に出ると、玄関の扉の前で慌てているシャルの姿が見えた。

シャルは目の前にしゃがみこんでいる少年を必死で揺り起こしていた。

「ライラス!？」

アーシャは驚いて慌てて駆け寄った。

まだ彼は医療学部の隣にある学園の医療棟にいるはずなのだ。

ライラスはどうやらシャルが開けた扉にぶつかったらしく、うううと小さく呻いていたがやがて顔を上げた。

その顔にはまだあちこちに擦り傷が付いている。

アーシャは彼の水色の目を心配そうに覗き込んだ。

「よ、よう……」

「ライラス……どうしたの？怪我は？」

ライラスは傍らの松葉杖を手にとって軽く振った。

「もう歩けるし、頭も大丈夫だって言ってるのに出してもらえないから抜け出てきた。」

「まだ仕上げがやりかけの奴、あつただろ？」

「でも、安静だって……!」

「アーシャ、とりあえず中に入れようぜ」

ジェイはアーシャを遮るとライラスに肩を貸して彼を立ち上げさせた。

ディーンがすぐに奥から椅子を運び、玄関先にとりあえず彼を座らせた。

ライラスは笑っていたがやはり結構無理をしてここまで来たらしく、ふう、とため息を吐いた。

それから申し訳無さそうにアーシヤを見た。

「ごめんな、グラウル。土壇場でこんな怪我して……」

「ううん、私こそ。ライラスのその怪我、私が無理矢理付き合わせたせいかもしれないの……ごめん」

「いや、俺の不注意だし……それより、お前、これからどうするんだ？」

治療をしたとはいえ今の自分が本調子には程遠いとわかっているライラスは、アーシヤに問いかけた。

だがそれに答えたのはジエイだった。

「お前の代わりに、俺が出る事にしたんだ。

俺は魔法に関してはホントに大した事できないけど、いないよりはマシだろ？」

「あんたが……そっか」

ライラスはほっとしたように頷くと、うなだれたままのアーシヤを見た。

「グラウル、俺が使う予定だった魔具とか、全部持ってこいよ」

「え？」

「こいつに合わせて、調整しないとだろ。」

使い方も教えなきゃなんないし、落ち込んでる暇なんかないんだぞ？」

「……ライラス」

ライラスはアーシャに明るい笑顔を見せた。

「なあ、グラウル。お前、勝つんだろ？」

俺達、”魔法科の落ちこぼれ”に、格好良いとこ見せてくれるんだろ？

それに……お前の居場所、守るんだろ？」

アーシャは笑顔を浮かべる少年を黙って見つめた。

「俺、祖父さんと約束したんだよ。俺に出来る事で、お前の助けになるって。」

俺は俺の戦いをするってな。だからほら、早く持ってこい！俺に出来る事させるよ！」

「うん……うん！」

アーシャは強く頷くとバタバタと走って行った。

すぐに居間からは道具を掻き集める音がガシャガシャと響く。

慌てているらしいその音を聞き、ディーンは肩をすくめると手伝いをしに歩いていった。

あの分ではせつかく作ったものを壊してしまいかねない。

ライラスはそれを聞きながら、ジェイを見上げた。

「頼むな。あいつ、ホント頑張ってたから」

「おう、まかしとけ」

笑顔を交わす二人を見ながらシャルはフン、と面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「ねえ、貴方、腕は確かなの？」

「そりゃ……まだ修行中だけど、いずれはまあ立派な魔技師になる予定だぜ？」

「そう。じゃあせいぜい立派な魔技師になってよね。」

そうしたら、名指しでたっぷり注文させてもらうから、覚悟していてね！」

「……」

シャルらしい、実に判りにくい励ましのような感謝のような言葉に、少年二人は沈黙して顔を見合わせた。

「まあ、こういう奴だから、さ」

ゴン、といつもの音が清々しく響く。

目の前で起こった恐ろしい光景に目を見開きながらも、ライラスは思わず笑っていた。

痛みを頭を抱えるジェイも、拳を握ったままのシャルも、ディーンもアーシャも。

戦いを前にして、誰もがただ笑顔だった。

22：始まりは笑顔で（後書き）

仕事が少し忙しくなりそうなのでその前に終らせられればと考えながら続きを書いています。

夏の疲れが出てきたのかペースが遅れ気味なのが悩みですが…

二部が終わったらサイトを作ろうとそっちもちまちま作業を進めていきます。それを楽しみにがんばります。

23：二人の初戦

魔法学部の北側には大小合わせて三つの楕円形の建物が設置されている。

その一つの第三魔法競技場の客席は今日は多くの生徒や教授達で埋め尽くされていた。

階段状に外側に行くほど高くなっている客席からは広い試合場を見下ろす事が出来、誰もがそこで行われている試合を夢中で観戦していた。

観客達が熱心な視線を送る試合場もまた楕円形の形をしている。

その地面は土がむき出しで、周囲をぐるりと細い堀が囲みそこには水が流れている。四隅には大きなかがり火が焚かれ、天井は無いので青い空が良く見えた。

冬の入り口のこの季節、吹き抜けの競技場は寒くて長時間いられたものではない。

けれどこの時ばかりは会場は熱気に包まれ、誰もが寒さを忘れていた。

試合場には今、二組のチームが向かい合っていた。

彼らはそれぞれ青と赤に色分けされた細いリボンを手首につけ、十分な距離を取って睨み合っている。

やがて青チームの少年が先に動いた。

「炎よ踊れ！ 赤き鳥舞い上がれ その翼で我が敵を焼き尽くせ！」

唱えた呪文に反応するかのように、彼の立つ側にあつた篝火がゴツと勢いを増した。

高く燃え上がった炎から、その一部が分離する。

大小六羽ほどの鳥のような形の火の塊は、チラチラと燃え上がり

ながら少年の指し示す方へ飛び立った。

「清らかなる流水よ！ 我が前に来たりて川となれ！ その清き水にて壁を成せ！」

ザバアツ！

大きな水音と共に堀を流れていた水が大きく盛り上がった。

ザザザ、と音を立てて水は呪文を唱えた少女の下へと殺到する。

そして彼女とその傍らに立つ少年を守るように二人の周りで渦を巻きながら壁のように立ち上がった。

水で出来た壁に炎で出来た鳥が音を立てて次々にぶつかる。

ジュワア、と激しい音と共に大量の蒸気が立ち上る。

水の壁を破る事が出来ず、炎の鳥達は次々に消えていく。

形勢を見ていた青チームのもう一人の少女が杖を掲げて小さく何か呟いた。

少女の周りに風が起こり、その風はまだ上空に残っていた炎の鳥へと向かう。

炎を吹き消すのかと思われた風はそれをそっと取り巻き、弱弱しかった炎を再び激しく燃え上がらせた。

青チームの二人はお互いを見て頷き合った。

激しさを増した炎と、それを後追いする風が一斉に水の壁に襲い掛かる。

形勢はまだわからないようだった。

ワアア、と高い歓声が上がった。

試合場へと続く細い通路の中から、アーシャとジェイはその様子をそっとうけていた。

「へえ、ペアってあんな感じなのか」

「ふうん、予想はしてたけど、結構面白いね」

シャルの試合しか見たことが無かったジェイと、一昨年は観戦せず家で寝ていた少女は自分達の前の試合を見て楽しそうに感想を述べた。

その後ろでそんな二人を見ていたシャルとディーンは思わず頭を抱える。

「大丈夫なの、二人とも……」

「……頭が痛い」

本当は競技参加者は同部門の他者の試合を見ることは禁止されている。

だが怪我をしたライラスの代わりにジェイが出る事について許可を取りに行った時に、一緒に行ったシャルとディーンが一試合だけでも観戦できるよう交渉してくれたのだ。

個人部門は純粹に両者の魔法を交互に掛け合って防御して、といった力比べのようになる事が多いがペアとなるとその戦い方が少し異なる。

攻撃にも防御にも様々に連携が必要になるからだ。

それなのに一度もペアの試合を見たことが無い二人がそのまま参加するのは危険だと、シャルもディーンも力説して運営にこり押ししてくれた。

運営も最初は渋ったが、二人が魔具で戦うという前代未聞の戦い方だという事もあり、一試合だけ、という事で許可が下りた。

ちなみにジェイが代理で出ることも運営は相当渋ったが、彼が生徒に拳を振るわないと誓った事と、最後には学園長が「面白いからよし」と言ってくれた事で許可が下りた。

「もう……頼むわよ、二人とも」

「うん、がんばる」

「お前ら心配しすぎだって」

「お前が楽天的過ぎるんだ」

ワアア、とまた高く歓声が上がった。

試合がそろそろ決まりそうらしい。

シャルとティーンは後ろ髪を引かれながらも観客席に移動する事にした。

「じゃあ、そろそろ行くけど……ほんとに、無理しないでね！」

「気をつけて」

アーシャはそれに笑顔で答えた。

「うん、見ててね二人とも」

「まかせとけて!!」

手を振る二人に見送られ、シャルとティーンは何度も振り返りながら観客席への通路へと去っていった。

アーシャとジェイは顔を見合わせる。

「いよいよだな」

「うん。がんばろうね」

「最初の対戦相手は誰だっけ？」

ジェイの言葉にアーシャはポケットから小さな手帳を出した。

「えーとね、最初はクラーク・バーニス組だつて。クラークは攻撃、バーニスは防御や補助が得意で、二人とも資格は四から五級持ち。どちらも精霊は使わず。まあ、普通な感じかな」

ペア部門の参加者は個人の資格としては高い物を持たない事が多い。
い。

それを補い合う為にペアを組むのだから当然と言えば当然だ。

「了解。じゃあ、早めに決めような」
「うん」

頷きあつた瞬間、会場からの声が一際高く上がった。

どうやら勝負が決まつたらしい。

どちらが勝つたのか二人には興味がなかった。

ジェイは自分の体を見下ろし、いつもより仰々しいその姿を確かめて少し笑つた。

動きやすい服装のジェイに合わせてアーシャとライラスは、様々なアクセサリーの形の護符を大量に用意してくれた。

首や腕、足を幾つものペンダントや輪が飾っている。

その他に更に小さな符が沢山付いたベルトなどを巻いている。

傍から見たらなんだか怪しく見えるに違いない。

籠手もいつもと違う物を着けていた。

(聞こえる?)

不意にジェイの頭の中に小さな声が響いた。

(ちよつと小さいかな?)

(わかった)

今度の返事はさつきよりもはつきりと聞こえた。

アーシャはジェイが頷いたのを確認すると、手に握っていた聖霊石から手を離れた。

それはいつものように腰ではなく、手首に着けた腕輪にぶら下がっている。

アーシャはこの試合にジェイが出ることを決めた時、この石を使うことを決意したのだ。

口に出さずに指示を出し合う事が出来ればそれは相当の強みになる。

それによる弊害があることも予想できたが、アーシャはそれと向き合う覚悟だった。

お互いの装備を確認し、静かになった通路の先に目を向ければ前の試合の後始末が丁度済んだ所らしい。

次の試合を始めるといふ案内が聞こえる。

『赤、グラウル・イージェイ組!』

二人の名を呼ぶ声が響いた。

「行く」

「おう」

眩しい光と歓声が誘う通路の先へ、二人は並んで歩き出した。

ヒュウ、と冷たい風がアーシャの頬を撫でた。

冬の入り口の弱い日差しが、それでも眩しく目に刺さって思わず片手で顔を隠す。

ワアアア、とまた高くなった歓声が耳障りだった。

そのまま真っ直ぐに歩いて、真ん中よりも大分手前で二人は立ち止まった。

やっと眼が慣れてきたアーシャは手を下ろし、周りを見回した。

沢山の人達が自分達を見下ろし、声を上げている。

どれも同じ顔に見えて、気持ち悪くて少しだけ眉を寄せた。

「アーシャ！」

わんわんと耳に響く雑音の中にいるのに、耳はその声をちゃんと拾い上げた。

ハッと顔を上げると前列に近い席でシャルが懸命に手を振っていた。

ディーンは腕を組み、二人の方をじっと見つめている。

ジェイも二人に気付いたのだろう。軽く手を振り返してすぐ隣に居るアーシャの頭を軽く撫でた。

(……大丈夫)

アーシャは胸の奥で小さく呟いた。

誰かが自分を見ているという事は、こんなにも心を強くする。

少女は一つ頷くと、反対側から出てきた対戦相手の方を強い視線で見つめた。

「あいつだろ、噂の魔技科のつてさ」
「ほんとに出てきたんだね。嘘だと思ってたよ。しかも武術学部生と一緒になんてさ」

対戦相手は少年二人の組だった。

魔法学部の二人は黒いローブに身を包み、杖をぶらぶらと揺らしながら面白そうにアーシャとジェイを眺め回した。

「イージェイが魔法使えるなんて話聞かないよな？」

「殴ったら失格だから、なんか考えてるんだろうけど……せいぜい符とかじゃねえの？ 楽勝だろ」

クラークもバーニスも自分達の有利を確信して笑顔を浮かべていた。

挨拶を、という審判の声に従って二組は中央に向かって簡単に頭を下げる。

審判はそれを見て頷くと二組に向かって声を張り上げた。

「試合時間は三十分、物理攻撃は禁止。それ以外は制限なし！

一チームの二人共が戦闘不能の場合、どちらかが降参した場合、その腕のリボンが二人共千切れた場合を負けとする！」

二組はそれぞれ青と赤の細いリボンを手首に巻いている。

小さな石が一つ通されているそれは簡単ではあるが魔具の一種だ。これはある一定の限度を越えた強さの攻撃を生身で受けた場合、そのダメージを一度だけ肩代わりしてくれるのだ。

その一度の役割を果たすとリボンが千切れるようになっていく。

試合とはいえ強力な魔法を直接その身に受ければ当然ひどい怪我や死の危険も出てくる。

この石はそれを防ぎ、同時に明確な勝敗の基準となる。

だが、決められた限度以下のダメージは無効化してくれない為、弱い魔法でも回数を重ねて受けて負傷したり、眠りの魔法を防げなかつたりすれば当然戦闘不能になる事もある。

倒れなくても痛みの為に集中力が続かなくなれば魔法は成功しなくなるから、そういった場合は降参を宣言する者も多かつた。

審判がそれらを説明している間にジエイはアーシャに問いかけた。

「なあ、アーシャ、あの篝火とか掘つてのは何の為にあるんだ？」

「んーと、低学年であんまり魔法が上手く使えないうちはあれを補助に使うんだよ。」

全く何もないところに火や水を呼び出したりするよりも、既にあるものを動かす方が楽だから。

だから魔法の競技場には大抵光と闇以外の四属性を示すものが用意されてるんだって。ここだって、土はむき出しだし、空が見えて風が吹いてるでしょ。」

「あー、なるほど。そうすると光と闇以外はあれを使う奴が多いってことか」

「うん。でもそれを使うと逆に攻撃を読まれがちになるから良し悪しなの。あんまり威力の強いのは使えないしね」

オホン、と咳払いの音が聞こえ、審判が余所見をして話し込んでいた二人の注意を引いた。

どうやら前置きが終わつたらしい。

正々堂々と戦うようになどと色々言っていたが、二人はほとんど聞いていなかった。

審判はもう一度咳払いすると両者に配置につくようにと促した。中央より少し下がったところで二組は向かい合う。青チームの少年二人は面白そうな顔でニヤニヤしていた。こちらを馬鹿にしているのが一目でわかるような顔つきだ。

「……腹立つ顔だから速攻で行こうぜ」
「うん」

『始め!』

開始の合図と共に、青チームのクラークが杖を持った手を上げた。アーシャはそれに目を凝らした。

その隣ではバーニスも魔力を高め魔法の準備をしているのが見える。

アーシャはその二人の魔力の色から、彼らが行おうとしている行動を予測し、ジェイに伝えた。

それが見える事もアーシャの大きな強みだ。

(右のは風属性攻撃、その後左が水の結界を展開予定。初弾は防御するね)

了解、とジェイから返事が来たと同時にクラークの詠唱が響き渡った。

「風よ唸れ! その鋭き牙にて 敵を切り裂き噛み砕け!」

高い音を立てて不可視の刃が解き放たれた。風は真っ直ぐにアーシャとジェイの方に向かう。

風の刃はその速度と目には見えないところが強みだ。

だがアーシャは少しも慌てず、クラークの呪文の詠唱が終わる前

に、ポケットから取り出した魔法陣が描かれた茶色の札を手に持って魔力を込めた。

そして相手の詠唱が終わると同時にそれを、パン、と前方の地面に叩き付けた。

ゴゴンツと重い音を立てて二人の目の前の地面が瞬時に高く盛り上がる。

「なっ!?!」

バン、と破裂するような音を立てて風の刃は土壁にぶつかった。

その表面に幾筋もの傷跡を残して風はあっさりと消え去る。

土の壁は揺るぎもせずその場に立っていた。

「チツ、魔具かよ!」

クラークは小さく舌打ちをした。

手の内がわからないもの同士の間闘だから完璧な防御はできないだろうと思っていたのに、今は完全に防がれてしまった。

魔法科の者同士ならある程度相手の得意な魔法などの情報も入るので、手の内の予想が付き、対抗できる魔法を展開しやすい。

けれど今回は相手が魔技科と拳闘科ということで全く予測がつかず、クラークはとりあえずの様子見のつもりで今の魔法を使った。

だが手の内の予測がつかないのは向こうも同じ事で、そういう場合は相手が魔法を詠唱し始めると同時に自分が一番得意な結界を張るのが授業でも習う常套手段だ。

相手の魔法発動の速度などもわからないのでその詠唱を聞いてから用意しても遅いかもれないからだ。

だから、様子見の魔法でも運が良ければ多少のダメージが与えられるし、相手の得意な結界の種類も判るとクラークは楽観的に考え

ていたのだ。

しかし魔具を用意しているならその予想は当てはまらない。こちらの詠唱を聞いてから対抗する事は比較的容易なはずだからだ。

大きな声で魔法を詠唱するのは魔力を高める意味で有効な事なのだが、相手に攻撃を読まれてしまつという欠点もある。

「魔技科にしちゃやるじゃねーか！」

クラークは壁を崩そうと立て続けに風の刃を放った。

だがそれらもアーシャがそれに合わせて投げる札の前にあっさりと阻まれてしまう。

「だめだな、補助するぞ！」

それを見ていたバーニスは風の威力を増す為の補助魔法をかけようと杖を持ち上げた。

だがその時、効力が切ればこぼこと崩れる土壁の向こうにアーシヤの姿が見えた。

アーシヤは、その手に札ではない魔具を握って構えていた。複雑な模様が描かれた細い筒状の物だ。

クラークはそれに気付き手を上げてバーニスを制した。

「攻撃か！？ バーニス、くるぞ！」

「オツケー！」

バーニスは杖を強く握ると補助を止め、防御の為に高らかに呪文を唱えた。

「清らかなる水よ！ その清き御手を広げ 我が前にて壁を成せ！」

ザバア、と音を立てて堀から水が持ち上がり、彼らの周りに渦を巻いて流れてくる。

立ち上がった水は膜を作り、半球を描いてすっぽりと少年二人を包み込んだ。

それを見たアーシャはにこりと笑顔を浮かべた。

「えい」

ポン、と音を立ててアーシャの手の中の筒のふたが外された。

アーシャはそれをぽいと前に向かって投げ、筒はコロコロと試合場の中央付近に転がった。

開いたままの筒の口から奇妙な白い光がちらちらと漏れる。

そして次の瞬間

ボシユウウウツ

「えっ!？」

おかしな音を立てて筒から激しい煙が噴出した。

煙は見る見る量を増やして辺りに立ち上り、試合場に広がっていき。

奇妙な煙は試合場に吹く風にも飛ばず、その中心にわだかまりあつという間に辺りを煙で包んだ。

(ジェイ)

声に出さない声がジェイの脳裏に響く。

ジェイは姿が見えないアーシャに一つ頷くとそつと足を踏み出した。

「くっそ、なんだよこれ！ 魔法の不発か！？」
「これじゃ前が見えないぞ！」

水の結界に守られた二人は視界を奪われ困惑していた。
少女の攻撃が不発に終わったならこちらも攻撃に転じたいのに、
これでは相手の姿すら確認できない。

いつの間にか周り全てが煙に覆われ、高い所にある観客席すら確認する事は不可能になりつつある。

あの小さな筒に入っていたとは思えない程の煙の量だった。

「バーニス、結界を解け！ 俺が風で吹き飛ばす！」
「わかった！」

対魔法結界の欠点は、その中に居る間は中からも魔法攻撃が出来ない事だ。

その制限のない魔法もあるにはあるが相当高度なものになってしまふ。三年で使うのは到底無理なレベルだ。

だから魔法攻撃をするには一度結界を解くしかないのだが、それでも強い風魔法を使えばもし敵が攻撃してきてもそれをある程度相殺する事も可能だろうとクラークは判断した。

「水よ、散じよ！」

その言葉に従い水は力を失って周囲へと弾けた。
それを受けてクラークがすぐに詠唱に入る。

「よし！ 自由なる風よ、その」

周囲を包む煙を吹き飛ばそうと呪文を唱えたクラークは、それを最後まで果たす事は出来なかった。

結界に入るために近い距離に立っていた二人の首にスツと何か
触れた、と思つた瞬間

「二ー！」

バチン！

激しい衝撃と痛みにより二人の意識は一瞬で闇に飲まれた。
自分達に何が起つたのかを考える暇もなく。

試合場を取り巻く観客席はざわめいていた。

試合場が突然の煙に包まれたつきり何も見えなくなったのだ。

観客席は結界で保護されているため煙は観客の所までは来ないが、
中で何が起つているのかは全くわからない。

審判用の退避所に居た審判も困惑し、試合場に入ってみるべきか
と考えていた。

するとその時、一陣の風が審判の髪を揺らした。

ざわ、と周囲の音が大きくなる。

観客らが見守る前で、試合場を包んでいた煙がゆるりと動く。

試合場の中央から起つた風が、辺りを埋め尽くしていた煙をゆっ
くりと吹き散らしているのだ。

だが良く見ればそれは吹き散らしているというよりも、風が煙を
集めていると言つた方が正しいような動きだった。

やがて煙は徐々に薄くなり、ぼんやりと試合場が見えてきた。

それが目に入った時、観客席からはどよめきが起つた。

試合場の中央には先ほどまでと変わらない様子の一組の少年少女
が立ち、その前方には地面に倒れ付したまま動かない少年二人の姿

が見えたのだ。

少女は自分の投げた筒を手を持って上に向けている。煙はその筒の中にしゅるしゅると吸い込まれていた。

少年はそれを眺めながら大きく伸びをする。

その場違いに呑気な二人に会場には困惑の空気が流れた。

審判は慌てて倒れた少年二人に駆け寄った。

傍によって確かめるとクラークもバーニスも完全に気絶していた。

審判は彼らの体を簡単に魔法で調べた。

倒れた時の状況がわからなかったため、ルール違反の物理的攻撃が加えられたのではと疑った為だ。

だが彼らの体からはそういった反応は出なかった。どうやら魔法による電撃で気絶したらしい、と審判は判断した。

審判席とは反対側の待避所に居る救護班に目で合図を送り、救護班が担架を持って駆け寄るのを横目で見ながら審判は中央の二人に近づいた。

「何をしたのかね？」

アーシャとジェイはその質問に顔を見合わせた。

「何をしたか言わなくちゃいけないの？」

「君達が物理攻撃を加えていないことは確かめたが、審判としては知っておく義務がある。心配しなくても他言はしない」

その言葉にアーシャは頷くと、さっき拾った二枚の札を見せた。

「この筒で煙幕を張った後、ジェイが彼らの後ろにそっと回って二人が攻撃の為に結界を解くのを待ったの。」

それから、二人にちよつとだけ触って光の精霊魔法で電撃を送っ

たの。それだけだよ」

なるほど、と審判は頷きながらも内心はかなり驚いていた。敵に近づかない事が基本の魔法戦ではありえないような戦い方だ。

「魔法科の人は魔道士の戦い方しか知らないから、相手がすぐ近くに来るなんて思いもしないんだってね」

審判は深く頷いた。

アーシャとジェイのした事は、五、六年になってから学ぶ実践を想定した魔道士と戦士のチーム戦の授業のような戦い方だった。

魔法競技会の試合としては実に型破りではあるが、今までにない面白さがある、と審判は感じた。

「その煙は何だね？」

「ん、と……霧みたいなもの。害はないよ」

「俺が使ったのは暫くの間体が痺れて動けなくなるくらいの強さの電撃だ。大した事ないと思う」

「判った。君たちにルール違反はないと認めよう」

審判は頷くと手に持っていた赤い旗を高く掲げた。

『勝者、グラウル・イージェイ組！ ルール違反はなしとする！』

ワアアア、と高い歓声上がる。

歓声には他の試合の時よりも幾分戸惑いが混じっていたが、それでも勝者が決まった事には変わりはない。

二人は審判に礼をすると、仲間に手を振って出口へと向かった。

これが二人の初戦となった。

24：奇妙な試合

「大した事なくて良かったな！」

控え室への廊下を歩きながらジェイはアーシャに笑顔を向けた。

「うん……」

だがアーシャは何だか元気がなかった。

その様子にジェイは思わず身を屈めて隣を歩く少女の顔を覗き込んだ。

「どうした？なんか……落ち込んでる？」

「ん……ちょっと、気持ち悪いだけ」

アーシャの顔色はあまり良くない。ジェイは心配になって医務室に連れて行った方がいいかと考えた。

「アーシャ！ ジェイ！」

「おっ」

廊下の向こうから聞きなれた声がした。そちらを見ると控え室のすぐ脇でシャルとデイーンが二人を待つて手を振っていた。

シャルは立ち止まっていたアーシャ達の所にパタパタと走り寄り、アーシャの手を握ってぶんぶん振った。

「一回戦突破おめでとうアーシャ！」

「うん、ありがとう」

「おめでとう……どうした？ 顔色が良くないようだが」

ディーンにも問われてアーシャは首を横に振った。

「大した事じゃないよ……ちょっと、心を閉じ損ねて、気持ち悪いだけ……」

その返答にジェイはハッと気がついた。

「あつ、もしかして石を使って俺に話しかけたせいかな？」

うん、と小さくアーシャは頷いた。

「ちゃんとジェイだけに意識を向けて使ってたんだけど……魔法つて、あんなに人の思いがこもってるもんなんだね。」

相手の魔法、魔具で防御しただけなのに、なんか……ちょっと伝わっちゃって、気持ち悪くて……」

アーシャのすぐ傍で弾けたクラークの魔法の、それにこめられていた彼の思いをアーシャは受けてしまったのだ。

彼はアーシャやジェイをひどく嘲り、馬鹿にしていた。魔技科なんて、と嘲笑っていた。

いつもならその心の奥までは届かないそんな声が、石を介してアーシャに聞こえてしまった。

「私……やっぱりずるかったかな。あんなの受ければ、誰だって痛いよね……」

自分のせいでクラスの間はあんな嫌なものを他人から投げつけられたのだろうか、と思うとアーシャは俯いてしまう。

「アーシャ。駄目よ、俯いちゃ」

だがそれをシャルが優しい声で制した。

「ほら、顔上げて。あのね、嫌な事なら、私なんて昔っから何回言われたかわかんないわよ？」

「……シャルが？」

「そうよ。祖母がここの教授だったからひいきされてるとか、だから魔法が強いんだとか、家族が魔法教えてくれるとやっぱ違うよねとか。」

祖母に似ず回復魔法が下手なのは性格が悪いからだろうっていうのもあったわ」

「ははは、俺そついうの親戚とかに言われたぜ。」

俺に滅多に会わない癖にたまに顔合わせちゃ、勉強も剣も魔法も駄目で、兄貴達に似てない落ちこぼれだったぜ」

「私は協調性がない、クラスから浮いている、クラスメイトを内心で馬鹿にしている嫌な奴だと言われていた気がするな」

「そりゃ事実だろ……ってイデデデ！ 嘘です、嘘！」

ぐい、と耳をつかまれてジェイはディーンに慌てて謝った。

シャルはアーシャの頭を優しく撫でるとその目を見て言った。

「だからね、誰だってそんなことあるのよ。」

ただ、それをどう受け止めるかは本人の問題で、その後どうするかも本人の選択なのよ。

そんなのを受け流して気にせず飄々としてたって良いし、悔しいならやり返したって良いのよ」

「そうそう、生徒同士なら腹が立ったならその場で殴りかかって解決してもいいのさ。ガキ同士の小競り合いには教授達は結構寛大だもんね」

「結局、受け流すことも出来ず、奮起することもなく、被害者面してその場で蹲っているのは彼らの選択という事だ。

君が責任を感じる事はない。言い返すことも出来ない彼らの自業自得だ」

「でも、私のせいじゃないの……？」

それでも不安そうにしたアーシャにシャルは笑って首を振った。

「違うわよ！ 誰に責任があるかって言ったら、見下す相手がいないりゃ自分を保てない魔法科の馬鹿共と、見下されてるのに立ち上がれない魔技科の腰抜け連中よ！ 断じてアーシャのせいじゃないわ！」

「んなの気にするなって。アーシャは、自信持ってその馬鹿共の目を覚まさせてやりやいいのさ！」

「その石を使って、人の負の感情に触れて足が竦む気持ちは判る。けれどそんなものに負けてしまう事はない。顔を上げて、逆に相手を馬鹿にしてやるといい」

三人は口々にさういうと、代わる代わるアーシャの頭を撫でた。

そうやって頭を撫でもらうのがアーシャは好きだった。何だか皆との距離がとて縮まったように思えて。

うん、と力強くアーシャは頷いた。

「判った。私……気にしないでがんばる。なんかすごく、負けたくないみたい」

強く言ったその言葉に誰もが笑顔で頷いた。

「容赦しないで、きっちり勝つね！」

少女が容赦しないと一体どうなるのか彼らにも全く予想が付かず、微笑みながらもちよつと先が怖いと思う三人だった。

実戦部門の試合はどれもトーナメント方式になっている。

ペアに参加する人数はさほど多くなく、一学年が二日に分けて一チームが大体四か五試合することになっていた。

幸いというべきか、コーネリアとカトウラの組とアーシャとジェイの組は決勝までいかないかと当たらない組み分けになっている。

アーシャとジェイの二試合目は、昼過ぎに始まった。

二人は今度は少女二人組と対峙していた。

シラーとタリタという相手チームの女生徒達はアーシャ達を警戒していた。

アーシャ達が魔具を使って防御を行い、不可思議な手で一回戦の二人を下した事を少女達は知っていた。

他者の試合の観戦が許されないとはいえ、応援者が休憩時間にその試合の様子を伝えるのは良くあることだ。

一回戦をおかしな魔法で勝った二人の出方が判らない彼女らは、最初は様子を見ようと決めていた。

『始め！』

その掛け声と同時にタリタが杖を掲げた。意識を集中して魔力を収束させ呪文を唱える。

その手元に収束した魔力がオレンジの光を帯びるのをアーシャは

見ていた。

土の攻撃魔法かと思って警戒したが魔力の光は彼女らを囲むように拡散していく。

どうやら先に防御してこちらの出方をみるつもりらしい、とアーシャは気付いて思わず微笑んだ。

「母なる大地よ その優しき御手を一時我らに貸し与えたまえ！ その手の平は堅固なる壁となりて 我らを守る家となる！」

アーシャはそれを聞きながらヒップバッグに手を入れて中を探った。

「ジェイ」

小さな瓶を二つ取り出すとジェイにぱいと放る。

「おっと！」

ジェイはそれを慌てて受け止めた。小瓶はその手の中で茶色と青にきらめく。

茶色の丸い瓶の中は濃い色の液体と何かの粒が入っている。青く細長い瓶は液体が入っているだけだった。どちらも天辺に石が乗ったふたで封がされている。

「それ、あの壁が完全に立ち上がったなら、あれに向かって思い切り投げて。茶色い瓶が先で、その次に青を」
「わかった」

頷くジェイの目の前では地面から盛り上がった壁が完全に二人の少女を隠そうとしていた。

土の壁は彼女達の周りをぐるりと取り囲み半円を描くように立ち上がった。

天辺に小さな穴があるだけで、そこ意外には中を伺えるような隙間一つない。

なかなかレベルが高い頑丈な壁だ。タリタは土の魔法が得意らしい。

「いくぞ」

「うん、お願い」

アーシャはもう一つ、細長い木の棒を鞘から取り出すとそれを構えた。

「せーのっ」と！

ジェイは丈夫な肩で見事なコントロールを見せた。

ヒュツと音を立てて茶色い小瓶が真っ直ぐに壁に向かって飛んでいく。

パン、と固い音を立てて瓶は土の壁に当たって割れた。

その衝撃で中から飛び出したのは、妙にねっとりとした謎の緑の液体と無数の小さな茶色い粒だった。それらは辺り土壁の表面にべったりと広がり張り付いた。

「ジェイ、青！」

「おう！」

ジェイは大きく振りかぶってもう一つの瓶をさつきとほぼ同じ場所に叩き付けた。

さつきより少し大きい瓶はガシャン、と音を立てて割れる。

「キヤツ!？」

「何、水!？」

突然、土の壁の中で守られた少女達に、壁の上部に丸く開いた狭い穴からわずかではあるが水が降ってきた。

どうやら二つ目の瓶の中には水が入っていたらしい。

しかも少しの量ではなかった。その瓶に入っていたとは思えない量の水が中から溢れ出し、土の壁をじつとりと濡らす。

けれど上の穴から中まで届いた水はごくわずかで、少女達の服をほんの少し濡らしたに過ぎなかった。

「何よ、これっぽっちの水でどうにかなるとでも思ってるの?」

タリタは自分の壁が多少の水の魔法では崩せないことを良く知っている。

苦し紛れのような攻撃を鼻で笑った。

「このままあいつらの出方を見よう。魔具なら大した攻撃は出来ないもん。そのうちネタ切れするよ!」

シラーとタリタは顔を見合わせて頷いた。

魔法や魔具をこの壁に向かって無駄に使わせ、相手の手の内が減った所を叩くつもりで二人は笑った。

だがその時、おかしな音が辺りに響いた。

シヤン、と沢山の鈴が打ち合わされるような軽やかな音が聞こえたのだ。

「何……?」

シヤン、シヤン、とさらにその音は規則的に響く。

「何なの……？ 土の壁ってこういう時不便ね、向こうが見えないんだもん」

「悪かったわね……けどどうせ大した事出来ないわよ！ これは私
が作れる中で一番強い壁だもの！」

二人がそう言っている間にも不可思議な音は止むことなく続く。
シャン、シャラン、シャン、と音に緩急がついた、と思った直後

ポコ

「……え？」

目の前の土壁の一部がほんの少し剥がれ落ちた。

外側でなく内側で起きた変化に二人は戸惑う。

土壁をほんの少し突き崩し、目の前に現れたもの。それは緑色の
小さな植物の芽だった。

「……何これ」

二人がじつと見つめるその前で、小さな芽はぶるぶると体を揺す
るとパツと葉を開いた。

可愛らしい双葉が目の前でゆらゆらと揺れる。そしてそれを合図
とするかのように、同じ音が次々と土壁の中に響いた。

ポコポコポコポコポコ

「えっ、ええ！？」

その音に周りを見回すと、今度は別の場所から幾つもの同じ芽が出てきていた。

「なっ、何これ！ 気味悪い！」

シラーは慌てて手を伸ばすと伸びてきた双葉をぶちつとむしり取った。

けれどその間にも他のところから次々と芽が顔を出し、葉を開き、茎を伸ばす。

二人が慌てて草をむしっていると、不意に薄暗かった土壁の中が明るくなった。

「えっ？」

上を見ると真上に太陽がある。

さっきまでそんな位置に太陽があったか、と二人は訝しく思ったがすぐにそれどころではなくなった。

ざわざわわわ

「あっ、ちょっと、やだ！」

「キヤアツ、伸びてこないですよ！ この！」

上から光で照らされ、顔を出していた謎の草達が一気にやる気を出したのだ。

芽はぐんぐんと伸び、細長い蔦となって土壁に絡まりながら辺りを這い回る。

その細い茎を支える物を探して絡まるのが彼らの習性だ。

「やだ、痛い！ 髪の毛引っ張らないですよ！」

「もう、この！ 風よ唸れ！ その鋭き刃にて我が敵を切り裂け！」
「あつ馬鹿！ シラー、だめっ！！」

タリタが止める間もなく風の刃は鋭い音と共にシラーの手から放たれ、彼女達に絡み付いていた鳶を切り払った。

しかしその勢いのまま真正面の土壁に当たり、激しくぶつかって風が弾けた。

「キヤアツ！」

弾けた風は小さくなったが、それでも鋭い切れ味で少女達の手足へと跳ね返る。

「痛いっ！！ もうやだ！ シラーの馬鹿！」

「馬鹿って何よ！ 鳶を切ってあげたんじゃないの！」

「私の壁は固いって言ったでしょ！？ 跳ね返ってくるの当たり前じゃない！」

「固いって言ってもこんな草に負けてるじゃないの！ 何とかしなさいよ！」

だが鳶は遅しかった。

二人が言い争っている間にも風で切られた所のすぐ下からまた新しい芽が伸び、ぐんぐんと伸びるのだ。

光を求め、支えを求めて鳶は壁の中一杯に広がり、お互いを罵り合っていた少女達は気が付くと身動きすることも出来なくなっていた。

シャン、シャン、シャラン、シャン

アーシャは規則正しく手に持った棒を振っていた。それは以前彼女が課題で作ったヤドリギの杖だった。

木の形そのままに切り取って杖にしたそれには、銀でコーティングした葉っぱが一枚と実が二粒、そして今はその枝に小さな銀の鈴が沢山付いている。

アーシャはそれをシャンシャンと規則正しく振っていた。

ただそれだけで、目の前の土の壁はどんどんと緑の蔦に覆われてぼろぼろと崩れていく。

ジェイはアーシャの指示を受け、その壁の上に開いた穴の上空に精霊魔法で光を灯していた。

「……これ中で今どうなってるんだろうなあ」

「さあ。私も使ったことないからわかんないや。多分そろそろぎゅうぎゅうなんじゃないかなあ」

ジェイは中を想像して、ぶるつと小さく身震いすると乾いてきた土壁に向かって手に持った瓶を傾けた。小さな瓶からはコポコポと止め処なく水が流れ出る。

さっき投げた物と同じ水の瓶の二本目を開けて、乾かないように蔦に水を供給しているのだ。おかげで蔦は元気良くすくすくと育つ。

この蔦はアーシャが自宅の庭の裏手の林の中で育てている草の一つだ。

とても丈夫で成長が早く、広範囲に広がるので庭では育てられないのだが、根っこから薬になる粉が取れる。

アーシャは秋にとったこの蔦の種を成長促進効果のある魔法薬に浸し、成長を抑える魔法を掛けた瓶に詰めておいた。

それを割る事で土に蒔き、水を与え、土の魔法に特化した杖にさ

らに手を加えたヤドリギの杖で芽吹かせ、成長を早める。

あとは芽が出てしまえばジェイが光を与え、水を追加するだけで彼らは好き放題に育つという寸法だ。

「こんな壁の中に閉じこもってれば安全と思うんだから、面白いね」「全くなあ。シャルならこの壁ごと蒸し焼きだぜ。アーシャは優しいな」

「ううん、私にはあんなに強い炎が使えないだけだよ。道具だけで戦うと結構制約があるからやっぱり大変だね」

「そうだなあ、けどシャルみたいにはならなくても良いからな？」

どこまでも呑気な会話を交わしながら、二人は鳶が壁の上からひよろりと顔を出したのを見上げた。

「そろそろ止めないと窒息するかな」

「ん、じゃあこっちもいいかな」

ジェイは水の瓶を傾けるのをやめてふたをし、アーシャは杖を鳴らすのを止めた。

観客席はさつきから何故か、シンと静まり返っている。

静かなのをいいことにアーシャは壁の中に耳を澄ませ、二人の声が聞こえない事を確かめてから審判を振り返った。

「そろそろ出さないと窒息すると思う」

「はっ、はいっ！」

ポカンと試合を見ていた審判は慌ててその土壁に駆けつけ、中を覗こうと背伸びをした。

「あ、あの、これ崩してもらえませんか？」

「うん、じゃあちよつと下がって」

ジェイが光を消して後ろに下がり、アーシャも少し離れてから木の杖を逆さまにして振った。

シヤラララララ

「うわ！」

見守るジェイと審判の前で、土壁がバカン、と爆ぜた。

土壁に絡み付いていた蔦が外側にバンと一気に広がったのだ。

茎や根に絡みつかれて穴だらけにされた壁はいともたやすく弾けて崩れた。

「あ、いた」

アーシャの小さな呟きに目を向けると、広がって動かなくなった蔦の中心からぐったりとした少女二人が出てきたのが見えた。

手足に幾つかの軽い切り傷を負った少女二人は蔦の支えを失ってその場にくたりと倒れて動かなくなってしまった。

「軽い酸欠かもね」

「きゅっ、救護班！！」

ばたばたと救護班がその場に駆けつけ、地面に広がった蔦を気味悪そうに跨いで少女二人を連れ出した。

二人は酸欠で気を失っていただけらしく、救護班の応急処置と回復魔法を受けてすぐに息を吹き返した。

うっ、と小さく呻く二人を見て、アーシャもジェイもちよつとほつとする。やりすぎたかと思ってしまうのだ。

絞め殺すほどの力は与えていないから死にはしないと思っていたが、酸欠くらいなら許されるだろう。

二人が慌しく運ばれて行き、それを見送った審判はハッと自分の仕事を思い出した。

『しよ、勝者、グラウル・イージエイ組！』

静まり返っていた会場から歓声が沸き起こった。

今回も幾分戸惑いを含んだ歓声だったけれど、仲間に手を振る二人は気にもしなかった。

24：奇妙な試合（後書き）

あつさりめの試合です。

25：炎の鳥

「……なんて不気味な戦い方ですの」

第二競技場の控え室で、自分達の試合が終わったばかりのコーネリアはそう呟いた。もちろんその試合は彼女達の勝利で終わっている。

コーネリアが漏らした感想に隣ではカトウラも嫌そうな顔をして頷いていた。

「じゃあ結局あの二人は今のところ魔具ばかりで戦っているのね？」

「全然魔法は使っていないのかしら？」

「多分……あ、でもイージェイ君が光の魔法を少し使ってるみたい。多分精霊魔法だと思うんだけど、光を灯したりしてたわ。」

でも一回戦は煙の中で決着が付いたからよくわからなかったの……

……

エナは気の強い二人の少女に詰め寄られて自信無さそうな声で答えた。

コーネリア、カトウラのチームと、アーシャ、ジェイのチームはブロックが違うので試合会場も違う。

ペアの試合は二日にかけて行われ、一日目は幾つかの会場に分かれて試合をする。二日目は第二競技場で残りの試合が行われる予定だ。

あちこちで試合が行われている最中である今の時間はまだ別会場の結果はわかり辛い。

だがコーネリアは友人のエナに二人の試合を見てくるように命じていた。

そしてそのエナのもたらした情報によると、アーシャとジェイの

試合内容はどうやら彼女達が予想していたものと随分違っているらしい。

コーネリアは不機嫌そうにトントンと指で机を叩いた。

「魔具を使っているなんて……本気を出す気がないということかしら？失礼な話ですわ！」

憤るコーネリアにカトウラは面白そうに笑った。

「あら、わからないわよ？こっちの油断を誘うつもりかもしれないし、もつと勝ち進むまでは実力を温存する気かもしれないわ」

「……それはありえますわね」

コーネリアとしてはそうではなくては困る。

どうせ戦うなら本気を出して精霊魔法を使って貰わなければ勝った気がしないからだ。

「ふざけてるのはたしかだけれど、そういうのを叩き潰すのもきつと面白いわよ？」

「私はそういう趣味は……」

そう言いかけて振り向いたコーネリアは気が付いた。

面白いと言いながらカトウラの目は少しも笑っておらず、その両手が固く握り締められたままな事に。

カトウラは目の前のコーネリアやエナではなく、どこか遠くを見ている。

コーネリアは深いため息を吐いてエナの方に向き直った。

「……エナ、今日はあの子達はもう一試合ありましたわね？それも見てきてちょうだい」

「う、うん……」

エナは弱々しく頷くと、頑張つてねと二人に言つて部屋を出て行った。

部屋に残つた二人の間にはどことなく重苦しい沈黙が残つた。

コーネリアにはカトウラの真意が読めなかつた。彼女がこの試合で何をしたいのかわからないのだ。

それを聞くべきなのかどうかも悩んでいた。他人の事情に深入りするのにはコーネリアの好みではない。

だがこのまま事情も知らずカトウラと一緒に戦い続けていいものか、コーネリアは正直迷つていた。

「……カトウラ」

「悪いけど、ちょっと外の空気を吸つてくるわ」

「あつ、ちょっと!」

コーネリアが口を開く前にカトウラは言葉を遮るとさっさと外に出で行つた。

いかにも何も聞きたくも聞かれたくもないといった失礼な態度だ。

「何ですの、まったく……」

まったくもつて、訳がわからなかつた。

「よし、これでどうかな」

アーシャは調整を終えたりング状の魔具をジェイに手渡した。

ジェイがずっと足首に着けていた魔具の一つだ。

素早さを上げる効果がつけてあったのだが、どうも変化がないとジェイが申告したのだ。

ライラスに合わせて作ったものだから元々素早いジェイのための補助としては効果が薄かったのだろう。

一度は調整してあったが、やはり実際に使ってみると色々足りない点が出てくる。

「お、ありがと。後で試してみるな」

「うん、そうして」

そう答えながらもアーシャはジェイが身に着けていた他の魔具を一つ一つ点検する。

気配を隠すための物、魔力の制御をする物、精霊を呼びやすくする物、といった様々な効果の護符はどれもちゃんと機能している。

ジェイが元々していた物を土台に急ごしらえした籠手もそれなりにちゃんと役目を果たしている。

「籠手の感じはどうだった？」

「ん、こっちは悪くなかったぜ。いつもより雷が出しやすかった。制御が怪しかった二の魔法も簡単に使えたしな」

「そっか、なら良かった」

ジェイの籠手を加工して精霊を宿しやすく、より頑丈にしてくれたのはライラスだ。

それに更にアーシャが手を加え、まだジェイがうまく使えなかつ

た二段階目の魔法を出しやすくしてある。

右の籠手の甲には聖霊石が嵌めてある。

直接相手を殴る事はできないのだが、それでも守りにはなるし、力を発揮する場面があるかもしれないとアーシャが付けたのだ。

ジェイは魔具を使い慣れていないので、道具を使わせるよりも補助用の護符を多く持たせていつもより強い精霊を呼び出せるようにしよう、というのがアーシャとライラスが出した結論だった。

そしてそれは立派に役に立ってくれている。

「……試合、一人だとやっぱり大変だったね、きっと。ジェイが居てくれて助かったな」

「ああ、なら良かったよ。ライラスと二人だったらどういう戦い方するつもりだったんだ？」

「んーと、眠りの符とか、そういう類の色々用意してあったの。だからライラスが主に防御したり霍乱するような魔具を使ってから、私が後ろに回ったりして止めを刺すつもりだったよ」

「へえ、そういうのも面白かったかもな。アーシャも結構素早いもんな」

うん、とアーシャは一つ頷いて脇に置いてあったカバンの中をこそごそと漁った。

そして中から何か細長いものを取り出した。

「これ、次の対戦相手に使うかはわかんないけど、ジェイ持ってて」
「わかった。弓と矢か？直接攻撃は駄目だろ？」

アーシャが取り出した細長いものは小ぶりの弓と矢だった。矢の先端には黒い石の鏃が付いている。

「うん、でも大丈夫。使う時は言うね」

「ああ、頼むよ」

「ジェイと組むと攻撃のパターンが色々考えられて面白い。ディーンと出てもきつと面白いだろうね」

そうだな、とジェイは頷き二人はしばし笑いあった。

今日最後の試合の前とは思えない和やかな空気だった。

ワアアアア、と高い歓声が試合場に出た選手達を包んだ。

アーシャとジェイはあまりの煩さに眉を寄せた。これでは審判の声もろくに聞こえない。

「なんか、ギャラリー増えてねえ？」

「そついう気がするね……」

観客席を良く見ると、満員だった座席の間の通路に立ち見の人間が並んでいる。最初の試合ではそんなに人は居なかつたはずだ。

「皆暇なんだね」

「そうだなあ」

そんな事を呟きながら二人は審判の指示に従って向かい側に立つ少年少女と礼を交わした。

ジェイは礼をしてから顔を上げた二人をまじまじと見て少し驚い

た。

「そっくりだ」

「え？」

「あいつらさ、そっくりだ。双子かな」

「そうだよ」

ジェイの疑問に答えたのは相手チームの少年の方だった。

少年は赤茶の短い髪をかきあげ、細くつり上がった目を更に細めてにっと笑った。

相手チームの二人は、背丈や体つきを始めとして細かい点はさすがに男女の違いが出ているが、顔立ちはとてもよく似ている。並んでいれば一目で血縁だとわかるほどだ。

「まあ、見りや判るよな。俺はマリスだよ。こっちはポーラ。

魔法科のステラ兄妹っていや結構有名なんだぜ？」

「へえ、知らないけど。でも珍しいな、二人で魔法科か」

「あんたらほど珍しい組み合わせじゃないと思うけどな。まあ、よろしく。面白い戦い、期待してるよ」

「よ、よろしくお願いします……」

兄と違って気弱なのか緊張しているのか、妹のポーラは蚊のなくような声でそう言つとマリスの後ろに引つ込んだ。

双方の会話が終わった頃を見計らって審判が位置に付くようにと指示をした。

それぞれのチームは中央から少し距離を置いたところに向かって歩いていく。

「あれって、私達が朝見た青のチームの方だよね。双子って、顔が似てるの？」

「え？見てなかったか？そっくりだったぜあいつら。そりゃ男女の違いは多少あるけど」

アーシャは小さく首を振った。

「顔は……良く見たけどあんまり見えなくて。でも、魔力の性質は全然違ってた。面白いね」

「へえ、そういうところは一緒じゃないんだな。面白いなあ」

頷きながら二人は開始位置に立って振り向いた。離れた位置で向かい合う相手と目が合う。

「朝見たチームなら、まずは炎かなあ」

「かもなあ」

呑気な会話を交わしていると審判が双方を見る。

『始め！』

両者は向かい合って静かに構えた。

マリスはジェイとアーシャを眺めてにやりと笑って杖を振り上げた。

その杖の先に赤みを帯びた魔力が収束していくのがアーシャには見えた。

「炎よ踊れ！赤き鳥舞い上がれ！我が前に集いて群れを成せその翼は敵を焼く劫火となる！」

その声に被さるようにつまみ控えめなポーラの詠唱が響く

『自由なる風の精霊 我が声を聞き我が元に来たれ』

ふわ、とポーラのふわふわした髪が風に踊る。

「風の精霊……」

呟いたアーシャの見る前でマリスの近くの篝火から炎が高く立ち上り、次々に鳥のような姿に分離した。

「風よ その静かなる吐息で我が友を助けよ 奮い立つ為の息吹を与えよ！」

ポーラの周りに渦を巻いていた風が一斉に篝火の元へと向かった。篝火は更にその高さで勢いを増し、そこからは朝見た時よりもはるかに数の多い、無数の炎の鳥が生まれてくる。

「いくぞ！」

マリスの掛け声で炎の鳥達は一斉にアーシャ達に向かって殺到した。

「えいつ」

アーシャは掛け声と共に手に持っていた札を地面に向かって投げる。地面からは瞬時に水の柱が立ち上り、炎の鳥を数羽飲み込んだ。だが敵は数が多い。

アーシャは立て続けに札を何枚か投げて自分達の前方を半円状に

囲むように水の壁を作った。

水の壁は次々に炎を飲み込み、周囲は白い蒸気で包まれた。炎が当たる度に壁がゆらゆらと揺れる。

アーシャの結界札は普通の結界符よりも長持ちするが、やはり一回の効力に限りがある。

札にこめた魔力が残っているうちは水の柱は立ったままだが、札のタイプの魔法陣にはあまり多くの魔力は入れられないのだ。

この間に何か打開策を、と考えた時アーシャの後ろにあった篝火がゴツと高く燃え上がった。

「火は一つじゃないだろ！」

マリスの声と共に、背後の篝火からふわりと炎の鳥が飛び立った。そしてその一匹が少女へと一直線に向かう。

「アーシャッ！」

ぐん、と腕を引っ張られてアーシャは宙を舞った。

「ひゃあ！」

ジェイがアーシャを引っ張り、その腕に抱えて横に飛んだのだ。

アーシャが驚いている間に、ジェイは少女を抱えたままくると空中で体勢を整え着地した。

ゴオオッ！

一瞬遅れてさっきまでアーシャが立って居た所に炎の柱が立った。ジェイはそれを確認してふう、と息を吐く。

「大丈夫か、アーシャ？」
「ん、平気。びっくりしたけど」

ジェイはアーシャを小脇に抱えたまま声をかけた。
アーシャは軽く頭を振ってからそれに答える。一瞬目が回ったけどもう大丈夫だ。

「おっと、また来た！」

ジェイはそういうとアーシャを抱えたまま走り出した。
走り去ったその場所に次々と炎の柱が立つ。

アーシャが相手の方を見るとマリスは次から次へと炎の鳥を生み出していた。

これは今日最後の試合だ。彼らはどうやら魔力を温存しないで手数で押して勝負をするつもりらしい。

「どうした？逃げるだけかよ！」

魔具なんて悠長に使う暇を与えなけりゃいいんだ。さあ、どうするよー！」

マリスは楽しそうに笑って言った。

アーシャはそれを見ながら少し考え、それからごそごそと服の内側を探った。

「どうする？」

「んーっと、とりあえず堀に近づいて。あと篝火にも」
「了解」

ジェイは小刻みにジグザグに炎を避けて走りながら試合場の壁に向かった。

その間にアーシャは何か小さな物が沢山入った袋を取り出した。

「堀に沿って走って！」

「おう！」

ジェイが言われるままに堀に沿って走るとアーシャは袋の中身を掴み出してバラバラと堀の中に投げ込んだ。

ジェイがちらりと見ると、それはどうやら小さな札が貼られた透明な玉のようだった。

ざっと見ただけで十数個くらいの玉がポチャポチャと堀に落ちていく。けれどそれが何をするものなのかジェイには見当も付かなかった。

「次は篝火で一瞬止まって！」

ジェイは言われるままに篝火のすぐ傍まで走り、一瞬だけ止まる。まだこの篝火にはマリスの力が及んでいなかった。

アーシャはそこに向かって袋の中身をばらばらと放り投げた。

「おっと！」

ドオン！

一瞬足を止めた二人の元に炎が落ちてきてジェイは慌てて飛び退った。

「あっち！ ちつ、跳ねたな」

「ジェイ、ごめん、あとちよつとだけ逃げて！」

「おう、まかしとけ」

ジェイはむき出しの二の腕に負った軽いやけどをぺろりと舐めるとアーシャを抱えて再び走り出した。

試合場を無様に逃げ回る二人に、観客席から野次や嘲笑が飛んでくる。

だがアーシャはそんなことはお構いなしに今度は何か薄い布のようなものと、白っぽい石の嵌った小さな指輪をカバンから取り出すとそれを手に持ったままじっと時間を計った。

その間にもじわじわと炎の鳥は数を増やし、ポーラはそれに風で力を与えていく。

二人が試合場を逃げ回る様子をシャルとディーンは観客席からじっと見つめていた。

シャルはアーシャ達の試合を最前列で観戦しながら、もうずっとはらはらしっぱなしだ。

声を上げて応援するも周りの歓声や野次に負けて二人に届いていないのかは判らず、それがまた腹立たしい。

「ちょっと、ジェイ！ そんな魔法、素手で良いから叩き落しなさいよー！」

「無茶を言う……」

ディーンが呆れたようにため息を吐くのもお構いなしにシャルは声を張上げた。

ディーン達の目の前で、相変わらずジェイはアーシャを小脇に抱えたままひよいひよいと器用に逃げ続けている。

アーシャはジェイの負担にならないよう手足を軽く縮めて運ばれるに任せていた。

「猫か何かを運ぶように……」

少女を荷物のように抱えて運ぶ親友に突っ込むべきか、そんな風に運ばれても全く気にしていない少女に突っ込むべきか、ディーンは思わず頭を抱えた。

「ちょっとあんた達！ もう一回言ってみなさいよ！ 私の友達が何ですって!？」

隣ではいつの間にかシャルが、アーシャ達に野次を飛ばしていた生徒に激しく喧嘩を売っている。

ディーンは顔を上げてちらりとそちらを見たが、まだ相手の一人の首元を締め上げているだけなので放っておく事にした。

火を吹いたら止めよう、と決めて試合に意識を戻す。

試合の行方はまだまだ予想がつかなかった。

「そろそろかな……ジェイ、これ着けててね、取っちゃ駄目だよ」

アーシャは自分の首元に着けていたマントの留め具を外すと手を伸ばしてジェイの腰辺りに取り付けた。

揺れるのでやりにくかったがどうにかくっつける。

青い石が嵌ったブローチは簡易で狭くはあるが、強力な結界を作り出す防御用の魔具だ。

本当はアーシャはこれをもう一つ作りたかった。

けれどこれはアーシャがずっと昔に初めて作った魔具を、少しずつ時間をかけて改良したものだ。同じ物を作るにはそれなりの時間がかかってしまう。

そうなる则他の攻撃用の魔具を作る時間がなくなってしまつからできなかつたのだ。

「私が合図したら、最初の位置の少し手前で止まって」

「えっ……大丈夫か？」

「うん、大丈夫。それでね……」

アーシャは小さい声で何事かをジェイに囁いた。

ジェイはその指示に驚いたように目を見開いたが、すぐに頷いた。

「そろそろだよ、いい？」

「ああ」

あと十秒、五秒、とアーシャは胸の奥で数えた。

「あ、出た」

ゴバアツ!!

「キヤアツ!!」

「なっ、なんだ!？」

アーシャの声を合図にするように、突如として会場の周りを巡る堀の一部が沸騰した。

けれど良く見れば沸騰したのとは少し違う。正確には堀の一部から水の柱が何本も立ったのだ。

だが異変はそれだけではなかった。

ゴオオオオ!

会場の四隅の篝火の一つが、突然青白い炎を高く吹き上げた。それはさっきアーシャが何かを放り込んだ篝火だった。

「今度はなんだ!」

「やっ、マリス、あれ見て!」

ポーラが小さな悲鳴と共に兄の名を呼んだ。

高く立ち上った水柱から次々と水が分離している。

水の柱から離れた水は彼らが両手を伸ばしたほどの大きさの球状になり、ぽよんぽよんと弾みながら次々と地面に転がった。

そしてそれらは、大きく弾む度に辺りを群れ飛ぶ炎の鳥を巻き込み消し去りながらじわじわとマリスとポーラに近づき始めた。

「あっちからも!」

その声に慌てて目をやれば、高く立ち上った炎から、今度は火の

玉が分離してごろごろと試合場に転がり出していた。

「くっそ、気味悪い真似を！ ポーラ、風で吹き飛ばせ！」

「う、うん。風よ吹きすさべ！ その渦巻く両手で眼前の全てを吹き飛ばせ！」

ポーラの周りに渦を巻いた風は水の球に向かってぶつかった。

精霊が生み出した風は水の表面を激しく打ち、その一部を少しづつ削り取る。

だが風に千切られて飛んでいった水の一部は後ろにあった水の球に当たってくつついた。それによって後ろの球がまた少し大きくなる。

くつつかなかった水は更に後ろから来た炎の球に当たりジュウ、と音を立てて辺りに蒸気を振りまいた。

それでも水の球も火の球もその動きを止めようとしなない。

次々とマリスとポーラのところへ向かって跳ね、転がり、時にはお互いがぶつかってくつついたり、激しい蒸気を発したりしている。ハツと二人が気が付けば、いつの間にか試合場の半分以上が赤と青の謎の物体で占拠されている。

マリスの出した炎の鳥も彼の指示で果敢に立ち向かったが、水の球に消され火の球には飲み込まれてしまっでどんどんと数を減らしていた。

「おお、怖……」

ジェイは試合開始時に立っていた場所よりも少し下がった位置でそれを見ながら呟いた。

隣には何も言わずに立っているアーシャの姿もある。

彼らの所にも水の球や火の玉が傍を通り過ぎる際にぶつかってきたが、アーシャがジェイにつけてくれたブローチのおかげで事なきを得ていた。

「お前らっ、くっそ、なんだよこれ！」

「いや、何って言われても……なあ？」

マリスの怒鳴り声にジェイは隣に立つアーシャに同意を求めたが少女は何も言わなかった。

「くそ！ この、くるな！」

マリスは炎の鳥を呼び集め、炎の壁を立ち上げて水玉にぶつけた。けれど蒸気が高く立ち上って視界が悪くなるだけで、水玉は簡単には消えはしない。

一つが消えそうなくらい小さくなると、場所が空いて転がってきた隣の水玉に飲み込まれて一つになり、更に大きくなってしまっただ。

ポーラは懸命にそれらを近づけまいと風をぶつけているがあまりの不気味さに既に半泣きだった。

マリスとポーラは懸命に応戦しながらもじりじりと押されて、寄り添いながら少しずつ後ろに下がっていた。

ジェイはそれを黙って見ながら、背中に背負っていた弓と矢をゆっくりと下ろして手に取った。

アーシャに指定された時間がそろそろ近づいている。

(ジエイ、構えて)

頭に響いたアーシャの声に従い、ジエイは矢を番えて弓を構えた。キリ、と引き絞って前方に向ける。夕暮れの光が相手の方から指して来て少し狙いがつけにくい。

マリスとポーラの前には相変わらずあの赤青の球達が立ちはだかっているので、自分が狙う場所がどこなのか正確にはまだ見えない。だがジエイは構わずに適当に見当をつけた場所に弓を向け時を待った。

(ジエイ!)

アーシャの合図が響いた。隣に立つ少女は相変わらずピクリとも動かない。

次の瞬間、マリスとポーラは突然訪れた変化に目を見張った。目の前の水の球や火の玉が、一斉にぶるぶると激しく震えだしたのだ。

「なっ、今度は何だ!?!」

「もっやだあ!」

ポーラは恐慌状態になりかけ、闇雲に風を放った。

パン!

「えっ!?!」

風が当たった水の球がパチン、と激しく弾けた。

パン、パンパン！

二人が驚いて見つめる前で、風が当たっていない水の球も次々と震えては弾け飛ぶ。

火の球も同じだった。

パパパパパン！

激しい花火のように火花を散らしながら全ての火の球が一度に幾つも弾け飛んだ。

「うわあっ！！！」

「キヤアッ！！！」

水と火が一斉に辺りに弾けてぶつかり、激しい蒸気を吹き上げる。幸いそのほとんどが二人には直接掛からなかったが、立ち上った大量の蒸気の激しさと熱にマリスマもポーラも思わず顔を覆った。

ヒュンッ！

次の瞬間、風を切る音と、次いでタン、と軽い音がした。

マリスはその音にハッと息を呑むと、慌てて手を下ろし顔を上げた。

いや、下ろそうと思った。

「え……！！？」

マリスは自分の体に突然起こった変化に目を見張った。

腕を下ろそうとしたのに、その体がピクリとも動かないのだ。腕どころか、下げた顔を上げる事もできない。

その動きをとるはずの体が固まったように動かない。

予想外の出来事にかろうじて目だけを動かして隣を見ると、ポラが同じように固まったままパニックを起こした顔をしていた。

「何をしたっ!？」

上げたままの腕の間からかろうじて向こうを見ると、試合場の反対側で弓を下ろす少年の姿が見える。

何故彼が弓を持っているのか、それで何をしたのかマリスにはさっぱりわからなかった。

だが口が動くならまだ魔法は使える、そう思った直後

「はい、終わり」

ペタ、と背に何かに触れる感覚があった。

何故か後ろから少女の声がしたのにマリスは振り向く事も出来ない。

そしてどうしてか急速に意識が薄れていく。

暗くなる視界の端でマリスは前方に立つジェイの姿を見ていた。

そして、その隣に無言で立ったままの少女の姿も。

「おやすみ」

けれど背後からはまた少女の声が聞こえた。優しいとすら感じるその声マリスにはひどく恐ろしかった。

一体自分に何が起こったのか、何一つわからないままマリスとポラは深い闇に落ちた。

アーシャは静かになった二人を確かめて、右手に着けていた白い石の嵌った指輪をそつと外した。

ゆらり、とマリスの後ろの空気が揺れてそこから少女の姿が現れる。

それに気付いた会場がざわ、とどよめいた。

誰もが会場の反対側に立ち尽くした少女と、マリス達の傍に立っている少女を交互に見つめる。

アーシャはそんなことは気にせずマリスの後ろから顔を出してジェイに手を振った。

ジェイは少女に手を振りかえすと驚きに立ち尽くしていた審判を促し、彼と一緒にマリス達の方に向かって歩き出す。

だがジェイは歩き出したのに、その隣に立っていたアーシャはピクリとも動かずその場に取り残された。

ジェイが目指す先にも、何故か同じ姿の少女がもう一人立っている。

マリス達の隣にいたアーシャはジェイが近づくと彼に向かって手を上げた。

ジェイはその手に自分の手をパチン、と合わせた。

「お疲れ様、ジェイ」

「アーシャこそ。お疲れ」

二人が笑顔を交わす横で審判は立ったまま微動だにせず眠っている二人の周りをぐるりと回った。

彼らの背中にはアーシャが作った眠りの符が貼られている。

強力なものだから、剥がしても半日は眠ったままだろう。
審判は二人が戦闘不能であることを確かめて、大きな声で宣言した。

『勝者、グラウル・イージェイ組！』

ワアアアア、と高い歓声が沸き起こる。

もうそれは戸惑いを含んでおらず、純粹に彼らの試合を称えるもののように聞こえた。

ジェイとアーシャは顔を見合わせ笑顔を交わす。そんな二人に審判が恐る恐る声をかけた。

「この二人を運び出したいのだが……動かせるかね？」

アーシャは一つ頷いた。

「その二人、掴んで。倒れると思うから」

そう言っただけでアーシャはとことこと二人から少し離れた場所へ移動し、地面に突き立った物に手をかけた。

それはジェイがさっき放った矢だった。

その矢は寄り添った事で重なった二人の影を縫いとめるように地面に深く突き刺さっている。

「よい、しょ」

ぼこ、とアーシャが矢を抜くと、途端にマリスとポーラの体は自由になり、ぐらりと傾いた。

ジェイと審判は慌てて二人を支え、救護班を呼んだ。

「眠ってるだけだから、符を剥がして寝せておいて」

救護班は二人を担架に乗せて運んでいった。

アーシヤは歓声の途切れない試合場を横切り、地面に落ちた札や立ち尽くしたままのもう一人の自分の足元の布を回収した。

布を持ち上げた事で立っていたアーシヤの姿がふっと掻き消える。

「なあ、アーシヤそれなんなんだ？」

「ただの幻影だよ。私の姿を映すだけの。」

動かないし声も出せないけど目くらましになるかと思っ作つてみたの。結構役に立ったね」

「じゃああの球は？」

「あれはただのおもちゃの応用。ガラス球で出来てるんだ」

子供向けの高価なおもちゃの中には、魔石を中に入れて簡単な動きが出来るようにしたものがある。

だがそれはせいぜい前に進むとか、跳ねるとかそういう動きをするだけの他愛のないものだ。

アーシヤはその魔法をガラス玉に仕込んでみた。

ガラスは石と違って短い時間で魔法の負荷に耐え切れず崩壊してしまうという特性がある。

だからそれを逆に利用して一定時間だけ動き、崩壊する事で敵に驚きを与えるという効果を狙ったのだ。

そして使う時まで魔法が発動しないように、抑える効果のある紙の符を貼った物を、アーシヤは大量に用意しておいた。

水に放り込めば符は溶け、火に放り込めば符は焼ける。

後は火や水を身に纏い、指定された動きをするようにしておけばいい。

簡単なおもちゃでも、沢山用意すれば役に立つだろうと思ったのは正解だった。

アーシャは水の球や火の球が出てきて相手が混乱し視界が悪くなった後、ジエイを立ち止まらせたその脇に四角い布のような魔具を置いて指輪をはめ、そつと姿を隠した。

光の魔法を応用した魔具を身に付け、辺りに自分の姿を紛れさせた。

そしてその布の魔法陣を発動させればそこにアーシャがもう一人現れる。

それを目晦ましにしてアーシャは水球達の間を縫ってマリズとポーラに近づき時が来るのを待った。

やがて限界が来ておもちゃが壊れたのを合図にジエイが矢を放つ。闇の魔法をこめた魔具である鍔は彼らの重なった影を縫いとめ、その動きを止める。

後はアーシャが駄目押しで背中に眠りの符を貼れば出来上がり、という寸法だった。

「あの弓矢は闇の魔法が掛かってたのか」

「弓は普通のだよ。鍔だけね。この学園の生徒はあんまり闇の魔法好きじゃないから、多分見慣れないだろうと思って」

アーシャは以前ディーンが森で使った闇の精霊魔法の話聞いていた。それがこの学園ではあまり使われていないという事も。

だからこそ、使ってみようと思ったのだ。

闇の魔法を使ってこの大陸の出身者に嫌われてもアーシャなら今更痛くも痒くもない。

「ジエイが弓も上手くて良かった。」

ライラスはあんまり上手くなかったから、夕方になって影が伸びたら使おうと思ってたんだ」

「それで今まで使わなかったのか。しかし魔具って、色々できるんだなあ」

ジェイはしみじみと感心した。

アーシャはそれに笑顔で頷く。

「魔具って結構利点があると思うんだよね。

呪文が要らないから発動までの時間がほとんど掛からない。

決められた事を魔具がやるだけだからイメージしなくていい。だから、思考が自由でいられる。

もちろん、その分用意した道具の中で作戦を考えなきゃいけないから制約も大きいけど」

「でも、隙も小さくて済むのはいいな。俺らみたいな武術学部生に向いてそうだなあ」

「うん」

夕暮れの光と、まだ続く歓声を背に受けながら二人は試合場を後にした。

今日の試合はこれで終わりだ。明日はもう準決勝になる。

走り回って運動したジェイは腹減った、と呟いた。

「疲れたね」

「そうだな、今日はいっぱい飯食って、ゆっくり休もうな」

「うん」

パタパタと廊下を走ってくるシャルとディーンの足音を聞きながら、二人はそれぞれ小さく欠伸をした。

これで今日の試合はもう終わりだ。明日は準決勝と決勝が待って

いる。

今日は長い一日だった。

26・長い一日(後書き)

いつもコメントなどをありがとうございます！

お返事が遅くて申し訳ありません。

後ほどお返事させて頂きます。

27：その手を離れた力

ペア部門の二日目、冬らしい薄い色の青空の下で準決勝の第二試合が行われていた。

会場となった第二競技場は昨日に増して混雑している。

魔具と弱い魔法のみで戦ってここまで勝ち上がっているというチームの話は昨日のうちに学園内に大きく広がり、今日は誰もがそのチームの試合を見たがったのだ。

そしてその多くの観客達が見下ろす試合場の中は今、何故か局地的な激しい地震に見舞われていた。

ゴゴゴゴゴ、と地面が上下に激しく揺れる。

アーシャとジェイは立っていられないほどの揺れに思わずその場に膝を着いて体を支えた。

彼らの前方、試合場の中央付近の地面が激しく縦に揺れ、次々と隆起していく。

アーシャとジェイは揺れによって近寄る事もできず、巻き込まれない距離を取りながらただそれを見ていた。

二人の目の前に鋭い棘のような土の山が次々に立ち上がる。

揺れが収まる頃にはアーシャ達と相手のチームの間には、ぼこぼことした土の山脈が出来上がっていた。

アーシャ達の準決勝の相手の少年二人、リカーノとウエゼンはその山脈を見てにやりと笑みを交わした。

「へっ、所詮は魔具なんて近くに寄らなきゃ何にも出来ないだろ！」
「何かできるならやってみる！」

彼らはアーシャ達に向かって声を張上げた。

確かに試合場の中央は土の山脈で分断され、これではとても素早く動いたり身を隠して向こう側へ行ったりはできそうにない。

ジェイは悔しそうに舌打ちをした。

「くっそ、あいつら！」

「自分達だって魔具を使ってるくせに、よく言う」

アーシャも珍しく面白くなく感じたらしい。無然とした顔で呟いた。

「えっ、そうなのか？」

「うん、自分の力を増幅する高価な魔具と、あと地の精霊に呼びかける符を使ってたよ。隠してたけどね」

準決勝の試合開始早々にリカーノは火の柱を前方に立てる魔法を放った。

大して威力のあるものではなかったが、それをアーシャ達が防御してやり過ぎしている隙に二人は試合場の中心から随分と下がりに、アーシャ達からたっぷりと距離を取った。

その上で、今度はウエゼンが魔法を唱えたのだ。

シャル達が事前にもたらした情報で二人の実力は三級の魔法がほんの幾つか使えるが、後は四から五級程度と聞いていたのだ。

ウエゼンが使える精霊魔法もごく弱いはずだという情報だった。

だが実際にはさっきウエゼンが見せたのは、予想よりもかなり力のある精霊魔法だった。呼びだしたのもそれなりに力のある精霊のようだった。

地の精霊を動かし、この試合場の範囲内とはいえ地形を変えるほどとはなかなかのものだ。

「どうする、アーシャ。この山って越えていっても平気か？」

ジェイの言葉にアーシャは首を振った。

「だめ。地の精霊がまだいるから、下手をすれば地面に呑まれるよ」「うえ……」

だがこのままのんびり向かい合っている暇はない。

ウエゼンが杖を構えるその向こうで、リカーノが地面に何かを描いている。

地面に線を描く彼の杖は随分と長く、その背丈くらいの品だ。

アーシャはこの試合場に入って顔を合わせた時から、リカーノが持ち込んだ杖が随分長い事を不思議に感じていたが、どうやら彼はそれを魔法陣を描く為に使う気だったらしい。

普通こういった試合中に紋陣魔法を使う者はほとんど居ない。

紋陣魔法は大きな魔法陣を描けば強力な魔法を使う事が出来るが、その本来の用途は大掛かりな儀式用だ。作成するのに時間が掛かるため戦闘向きではないからだ。

リカーノ達はここまで普通に、魔法科らしい戦い方をしていたと聞いていた。

それがここへ来て強力な魔具の補助を得たり、時間を稼いでその間に紋陣魔法を使うというのは、いよいよアーシャ達を警戒してなりふり構わず勝利を掴むつもりなのだろう。

アーシャは思わず笑顔を浮かべた。

彼女達を馬鹿にし続けていた魔法科の人間から余裕が消えている事が嬉しかったのだ。

だがもたもたしている暇はない。リカーノの描く大きな魔法陣が完成すれば、アーシャ達には防ぐ事は難しい。

「ジェイ、こっち来て」

アーシャは中心から下がって距離をとり、ジェイをすぐ傍に呼んだ。

「おう、どうする？」

「あのね、まず光の精霊を開放して。今も呼んでるでしょ？」

「ああ、いる。開放していいのか？」

ジェイの問いにアーシャは真剣な顔で頷いた。

「うん、それで、なるべく遠くに行くように言って。ここから離れるって」

「遠くに？……わかった」

ジェイは少しの間目を閉じてアーシャが言ったことそのままを精霊に呼びかけた。

最近ジェイにも少しだけわかるようになってきていた彼らの気配が遠のく。

アーシャはジェイが精霊を手放したのを確認しながら、自分でも周囲にいる精霊たちにこの試合場から離れるよう呼びかける。

彼女の投げた声なき声に応えたものもいれば、それでもここに留まるらしいものもある。

留まるものは仕方ないと諦め、アーシャはポケットから妙なものを取り出した。

「これはできれば使いたくなかったんだけど……」

そして更にカバンから何か板のようなものを取り出して地面に広げる。

四つ折になっていたそれは広げると、丁度一人が入るくらいの大きさの魔法陣だった。

「ジェイ、この上に立ってて。足は肩幅くらいで」
「わかった」

それらが何なのかさっぱり判らなかったが、ジェイは素直にその板の上にしつかりと立った。

アーシャは頷くと、手に持っていた謎の物体を高く上げた。それは細い金属の棒で、途中から二股に分かれている。

少女はそれを左手に持ち、右手には同じ金属で出来た真っ直ぐな棒を握っていた。

ジェイは知らなかったが、それは一般に音叉と呼ばれる道具だった。

ジェイはアーシャと相手を交互に見つめた。

前に目を凝らすと、向こう側ではリカーノの魔法陣が七割がた完成しているのが見える。

「ごめんね、皆」

アーシャは小さく呟き、左手に持った音叉に向かって右手の棒を強く振り下ろした。

ジェイの目には二つの棒が確かにぶつかったのが見えた。

それらはほんのかすかに、カチ、と音を立てる。

金属同士がぶつかったにしてはささやか過ぎる音だ。その音は余韻も残さずたちまち客席からの応援の声にかき消された。

それつきり周囲には何の変化もない。

ジェイは思わず首を傾げた。

一体アーシャは何を、と思った刹那

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「うっわ！」

またも地面が激しく揺れ始め、ジェイは声を上げた。

だが今度は驚いたのはジェイだけではなかった。

試合場の反対側では描きかけの魔法陣が歪みそうになったりカーノが慌てた声を上げた。

「うわ!？」

「なっ、なんだ!？」

「おいウエゼン! やめろよ! 魔法陣が歪んじゃまっだろ!」

「俺じゃない! 俺は精霊を動かしてないって!」

「ええっ!？」

ジェイはかるうじてその場に立っていたが、揺れは相変わらず続いている。

アーシャは揺れに構わずもう一度棒を振り下ろした。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

更に揺れが激しくなる。

「せつ、精霊が！」

ウエゼンが悲鳴のような声を上げた。

精霊達が形作っていた土の小山が次々と崩れていくのだ。何故か精霊達はその場を嫌がってどンドン離れていく。

精霊の力を失った土の山は見る間にぼろぼろと崩れ平らな地面へと戻っていく。

ウエゼンは焦ってもう一度精霊を呼び出そうと符を取り出した。

彼は元々地の精霊の加護が少しばかりあったが、今日はその符によってもより強い精霊を呼び出していたのだ。

だがその精霊達は今や彼の命令を無視して遠くへと逃げていく。

ウエゼンは彼らを引きとめ山の崩壊を阻止しようと高く声を張り上げた。

『優しき大地の精霊よ！ 我に答え我が元へと来たれ！』

だがその声を重ねるようにアーシャはもう一度音叉を打ち、鳴らない音を鳴らした。

精霊はウエゼンに応えなかった。

(ごめん……ごめんね皆)

胸の奥で謝りながら、アーシャは辺りを見回した。

いつの間にか揺れは収まり、辺りからは精霊の姿が消えている。

アーシャが使ったのは、精霊が嫌う音を出す音叉だった。その本当の音は人の耳には聞こえない。

ライラスの実家で様々な事を学んだ中に、精霊が嫌う合金があるという話を聞いたのだ。

だが使い道がまだないというその製の法をアーシャは教わり、こっそりと金属を作ってみた。

そしてその何が精霊に嫌われるのかを突き止めた。

その金属がぶつかる時に出す固有の波長が精霊達にはとても嫌なもののだと、精霊達自身から教わったのだ。

防御に使えないかと音が響き易いよう音叉の形の道具を作ってはみたものの、本当は使う気の無かったそれを結局使う羽目になってしまった。

アーシャの耳に精霊達が残っていた悲しげな声はまだ残っている。

使うんじゃないかった、と今はひどく後悔していた。

試合場の周囲から精霊達が離れ、土の山がなくなった事を確認したアーシャは、腰の後ろに着けていた細長く厚みのある板を取り出した。

そして手首から腕輪を外し、そこに嵌った聖霊石を取り外した。

代わりに、その板の下部に開いた丸い穴に聖霊石を嵌める。

それからアーシャはジェイの立つ魔法陣に手で触れ、魔力を強く込めた。

「ジェイ、そのまま私を後ろから抱えてくれる？」

「お、おう。これでいいか？」

ジェイはそこに立ったままひよいと手を伸ばしてアーシャを背中

から腕に抱えた。

「しっかりと掴まえてて、離さないでね。これから、風を起こすから」
その言葉にジェイは頷くと、アーシャの腰をしっかりと抱えなおした。

背の低い少女は足を投げ出してジェイにぶら下げられる形になる。アーシャは手に持ったままだった細長い板を左右にぐっと引っ張った。

するとそれは引っ張られるままビラビラと開いて、大きな扇のような形になった。

ちょうど要の部分に聖霊石が嵌っている随分と大きな扇だ。

広がった扇を握ってジェイに抱えられたまま前を見るとリカーノはまた魔法陣を描き始めていた。

地面の揺れもおさまり、けれど未だ動かないこちらを見て取ったのだろう。

精霊は呼べなかったけれど、ウェゼンも防御の魔法をいつでも使えるように構えている。

「防御できればいいけどね」

アーシャはそう呟いて手を伸ばし、扇を振りかぶった。

「せーのっー！」

ブン！と音を立てて扇が横に打ち振るわれる。

一瞬、緑の石が強く輝いた。

ゴッー！

「うわっ！」

次の瞬間巻き起こった突風にジエイは思わず目を瞑った。風の向きはこちら側ではないが、それでもバタバタと服や髪が激しく揺れる。

「そーれっ！」

ブン、とアーシャはもう一度扇を振るう。緑の石が更に強く輝く。ゴウツ、と再び巻き起こった風は今度は竜巻のように渦を巻いた。試合場に突如として巻き起こった風はすさまじい勢いでリカーノとウエゼンに襲い掛かった。

「なっ、なっ!？」

「馬鹿、ウエゼン！ 防御だ！」

だが風はあっという間に彼らのところまで辿りつき、その体を強く打った。

彼らはたまらずその場にしゃがみこむ。

完成目前だったリカーノの魔法陣があっという間に風に攫われて消え去った。

「だ、大地よ！ 我らを守る堅固なる壁となれ！」

ウエゼンはそれでも苦し紛れに呪文を詠唱した。

彼の足元の土がぼこぼこ動くが、あまりの風の勢いに押されてまったく立ち上がってこない。

盛り上がるうとする端から風に崩され、土の壁はほとんど役に立たないまま姿を消した。

呆然と上を見上げれば、自分達に向かってこようとする竜巻が目

に入る。それはまるで天に昇るうかというほどの大きさだった。

「うっ、うわあああ！」

二人は悲鳴を上げながらその場に蹲り身を伏せる事しか出来なかった。

「……強すぎた、かな？」

アーシャは不安そうに呟いた。

二回目に振るった扇から巻き起こった竜巻は周りにぶつかり、地面の砂を巻き上げながらゆっくりと前方に進んでゆく。

あまりの有様に観客席からも激しい悲鳴が上がった。客席を守る結界と風がぶつかり火花が散る。

蛇行しているからまだかろうじて相手チームを呑みこんではいないが、それも時間の問題と思われた。

「アーシャ！ 威力が強すぎるわよ！」

あまりの威力に観客席にいたシャルも立ち上がって叫んだ。

けれど凄まじい風の音に掻き消されてその声が届くはずもない。

これではアーシャ達も危ないのではないかとシャルもディーンも風の向こうを必死で見つめたが、客席からではどうしてやる事も出来ない。

一方アーシャは、これはまずいかもしいかなり後悔していた。

まさか聖霊石の力がこれほどとは思わなかったので、思い切り扇を振ってしまった。竜巻が起こったのは全くの想定外だった。

「あ、アーシャ！ これっ、俺らは大丈夫なのか、よ！」

風に煽られて息が苦しい。

ジェイが途切れ途切れに言うと、アーシャは扇を慌てて折りたたんでジェイに向かって叫んだ。

「そこに、ジェイが立ってる限り、動かない、から！ だから、じつとしてね！」

そう言うとアーシャはジェイの腕から出ようとじたばたともがいた。

「ちょ、アーシャ！ 駄目だっ！ 飛ばされるだろ！」

「だめ！ やりすぎちゃったからあれ止めないと！」

だがジェイはアーシャを抱えた腕を離さなかった。ジェイの今の腕力で離すまいとがんばられたらアーシャは到底抜け出せない。

「ジェイ離して！ あの二人が飛ばされちゃうよ！」

「無理だ！ アーシャの方が先に飛ばされて終わりだ！」

アーシャとジェイは狭い試合場の中を荒れ狂う風に煽られながらしばしもみ合った。

けれどそのうち目を開けているのも辛くなる。二人は最早目を閉じてそれに耐えるしかなかった。

アーシャの胸元のブローチが少しでも風を打ち消そうと青い光を放つ。

向かい合っていた相手が今どうなっているのか、二人はもう考えられなかった。

耐えていたのはどのくらいだったのか。不意にバチバチと激しい音が試合場に響いた。

風が結界を打つ音かと思ったアーシヤはそつと目を開いた。

だが目に入ったのは全く違う光景だった。

なんと試合場をめちやくちゃにしていた竜巻が、倒れ伏す少年達の前で火花を放ちながら止まっている。

一体何が、とアーシヤは身を乗り出して風の中に目を凝らした。

竜巻は何か淡い光を放つドーム状の結界にぶつかり、その進みを妨げられている。

「あれは……学園長！」

「ええっ!？」

アーシヤが叫んだ声に驚き、ジェイも慌てて目を開いて前を見た。確かに、光のドームの中には学園の行事で見たことがある老人が立っている。

「いつの間に……」

学園長は長い杖を構えた手をさつと上へと振り上げた。

ゴオッ!!

途端、竜巻に下からぶつかるように新たな風が巻き起こった。

激しくぶつかり合った二つの風は周辺の砂を激しく巻き上げながら少しずつ浮き上がる。

見えないはずの風が目に見えるというのは恐ろしい光景だった。

「ふむ！」

学園長は白く長い髭を揺らしながらも一度杖を下から上へと振り上げた。

激しい音と荒れ狂う風が辺りを包む。結界に守られていなければ観客達も思わず我先にと逃げ出していただろう。

誰もが息を呑んで見つめる前で、竜巻は下からの風に押し上げられ渦を巻いたまま天へと登っていく。

「すごい……」

アーシャもジェイも呆然と竜巻が空に昇っていくのを見つめた。少しずつ小さくなった竜巻はやがて遙か上空で、青空に溶けるように消えてしまった。

後にはシン、と静まり返った試合場が残された。

アーシャはハツとしてジェイの腕から降りようともがいた。

「ジェイ！ 降ろして！」

「あ、ああ」

ジェイが腕を離すとアーシャは転がるように試合場を走り出した。

「おい、アーシャ、ちょっと待ってっ！」

ジェイも慌てて後を追おうとしたが、足が動かない。

なんと立っていた魔法陣にぴったりと足が張り付いたまま取れないのだ。

「なっ、アーシャ、これなんだよ！ おーい！」

だがそんなジェイを放ってアーシャは倒れたまま動かない相手チームの元へと駆けつけた。

二人の傍には学園長がしゃがみこみ彼らを覗き込んでいた。

「学園長っ、二人は!？」

「うむ、まあ無事じゃな。気を失っているだけじゃろ。あまりの風の勢いに呼吸が苦しかったのかもしれん」

アーシャはその返答にほっとしてその場にしゃがみこんだ。

倒れた二人は顔色は悪いものの外傷は見当たらなかった。

腕のリボンが切れている所を見るとそれが守ってくれたのかもしれない。

「……良かった」

学園長は小さく呟いた少女の様子を見て、難しい顔を向けた。

「アルシエレイア・グラウル」

「……はい」

「君のその魔具は、この場で使うには少々危険過ぎたと思うのだがどうかね？」

アーシャは思わず立ち上がったが、すぐに俯き、小さく頷いた。

「君が風を止めようと動こうとしていたのは見ておった。彼らの元に一番に駆けつけたのも、君があそこまでの風を起こすつもりではなかったという事なのは良くわかっておる」

「私もまさか、ここまでの威力だとは思ってなかった……甘かったです。」

「魔法も道具も、威力が強いものは諸刃の剣じゃ。それを扱いきれなければ、今のような事態を引き起こす」

アーシャは深く頷いた。それは良く解っているつもりだった。少女は自分の作った物には責任感を持っている。

けれど現実ではあの風はアーシャの手を離れ、彼女にはどうにもできなかった。

焦ったせいだ、とアーシャは苦い思いを噛み締めた。

勝ちを焦って、後先を考えなかった。

ちゃんと使う時に調節すれば、あるいは一定以上の強さにはならないように始めから設定しておけばこんな事にはならなかった。

精霊達をこの場から追い出すような真似をしていなければ、彼らの力を借りて止めることも出来たかもしれない。

アーシャは小さく震えた。

自分が欲を出したから、こうなったのだと。

勝ちたいという欲望の為に精霊達に嫌な思いをさせ、その上相手を死なせてしまっていたかもしれないのだ。

「怖いかね？」

「……はい」

アーシャは怖かった。自分が作ったものが、自分の手を離れた事が。

自分の中に見知らぬ思いがいつの間にか生まれていた事が。

それに惑わされ、危険な物を作ってしまった自分自身が。

だが震えるアーシャに掛けられた声は、ひどく優しいものだった。

「それを怖いと感じるなら、君は大丈夫じゃろう」

アーシャは弾かれたように顔を上げた。深く優しい瞳と視線がぶつかる。

その暖かな瞳にっこりと笑みを浮かべ、彼はいたずらっぽく言った。

「だが、今回はその扇をわしに預からせてはくれんかね？」

アーシャはその目を見ながら頷いた。

どのみちこれを、もう調整もせずに使う訳には行かない。彼が預かってくれるというなら安心だ。

アーシャは手に持ったままだった扇を学園長に差し出した。

彼は興味深そうな顔を浮かべてそれを大切に受け取ると、要に嵌った石をひよいと取り外した。

「これは君が持っているのがいいじゃろう」

「……ありがとう」

学園長は首を横に振ると、すまなそうに言った。

「これを手放す事で、君が不利にならなければ良いのじゃが」

「……大丈夫」

アーシャが笑うと、学園長も笑顔を浮かべた。

彼はそっと手を伸ばしてアーシャの頭を優しく撫でてくれた。年相応に骨ばった、けれど暖かい手だった。

「……うっ」

不意に地面に寝かされたままのリカーノが呻いた。

学園長もアーシャも思わず目を見開く。

「おお、これはいかん。救護班！」

呆然としていた審判も救護班も慌てて本来の仕事をするために動き出した。

静まり返っていた会場にもざわめきが戻る。

審判は倒れた少年達の無事と、その腕のリボンを確認すると高らかに宣言した。

『勝者、グラウル・イージェイ組！ 決勝進出！』

ワアアアア！！

まるで時が止まったかのように静まり返っていた会場が、一斉に沸き立った。

歓声は勝者を称えるものだったが、アーシャはそれに答える気にならず、唇を噛んで俯いたままジェイのところまで戻った。

ジェイは情けない顔でその場に立ち尽くしていた。

「アーシャア」

「ジェイ、どしたの？」

「これ！ なんとかかしてくれよ！ 動けないんだよ！」

ジェイは足元の魔法陣を指し示す。アーシャはあつと目を見開いた。

「ごめん、忘れてた！」

アーシャは慌ててジェイの足元に駆けつけ、その魔法陣に手を当てて解除の呪文を唱える。

すぐに魔法陣からは淡い光が消え、ジェイの足は開放された。

「やっと離れたあ！ もう取れないのかと思つて焦つたつて！」

「ごめん、これ固定用の魔法陣なんだ……呪文で解除しない限りその場から魔法陣も上に置いたものも絶対に動かないの忘れてた」

「……確かに動かないのを実感した」

アーシャとジェイは顔を見合わせて笑つと仲間達に手を振つてゆつくりと試合場を後にした。

出口で振り返つて見ると試合場はひどい有様だった。篝火は軒並み倒れ、地面はぼこぼこ荒れて、巻き上げられた砂が堀を泥水にしている。

「こりや次はここ使えねえかもな」

「うん……じゃあちよつと一休みできそうだね」

会場では運営の人間達が右往左往して後片付けを始めている。

次の試合が始まるまでまだ時間がかかりそうだ。

アーシャは自分が引き起こした結果を、真つ直ぐに顔を上げて見つめていた。まるで目に焼き付けようともいうように。

「アーシャ、行こう。シャル達が待つてる」

「……うん」

控え室へ向かいながら、アーシャは頭を切り替える。

試合には勝つたが結果的に切り札の一つを失ってしまった。

どのみちもうあれは使えないが、そうなると攻撃のための手段に限りが出てくる。

自分がした事の結果と、その穴を埋める方法を、アーシャは歩き

ながら真剣に考えていた。

28：求め得られるもの

弱い日差しに当たりながらアーシヤは競技場の外の広場の芝生の上に座っていた。

風は冷たいがそれもむしろ気持ちいい。

頭を冷やすには丁度良い、と思いながら少女は空を見上げた。

結局あの後、第二競技場で決勝戦を行うのは中止になった。

もっと広い第一競技場で行う事にしたらしい。今頃は運営が会場の準備に奔走しているはずだ。

お昼を食べたアーシヤは、ちょっと休憩するので一人にして欲しいと仲間達に言うてこうして外に来ていた。

やらなければいけないことがあったから。

アーシヤはその場にごろりと寝転がり、空に向かってごく小さな声で歌を歌い始めた。

それは全ての精霊達を称える歌。

育ての親に教わった、アーシヤが一番好きな歌だ。

優しい夜の闇 やがて来る朝の光

足は大地を踏み 傍らには炎が灯る

流れる水に指を浸し 頬を撫でる風に歌を託す

我が愛しき兄上姉上 どうか受け取りたまえ

我らの敬愛を 祈りを そして深い感謝を

「眩しい日の光……」

自分の周りにちらちらと様々な色の光が寄ってくるのを見て、アーシヤは歌をやめた。

少女の歌を聞いた精霊達が次々に集まってきたのだ。

それを待っていた少女は彼らに向かってごめん、と心の中で何度も謝った。謝ろうと思っただけで彼らを歌で呼んだのだ。

ひどい道具を作った彼らを追い立てるような事をしてしまった事を、アーシヤは深く恥じていた。

精霊はアーシヤにとって幼い頃からの何よりの友だ。

自分の今の居場所を守る為にその友を傷つけて良い理由はない。

いつだって精霊達の居場所が少女の居場所だったのだ。

ごめん、と何度も何度も告げる少女に、精霊達はもういい、と優しく応える。

そして彼らからの呼びかけがアーシヤの胸に響いた。

『どうして呼ばないの？』

精霊達が口々に囁く。

自分達を呼んで欲しい、と彼らは言っていた。

アーシヤの戦いを手伝わせて欲しい、と。

沢山の精霊達の優しい意思がアーシヤの決心を鈍らせる。

(いつも助けられるばかりだったから)

精霊達の願いに、少女は首を横に振った。

アーシヤは戦って、人を傷つける事はとても怖い事だと知った。それを知ってしまったえば尚更、自分が始めたこの戦いで精霊達にその行為を肩代わりさせる訳にはいかない。

アーシヤが授業などでもほとんど魔法を使わないのは別にそれを他人に見せたくない為ではない。

大した用もないのにたかだか授業の為に精霊達を呼ぶのが嫌なのだ。

彼らには彼らの、世界の理を維持するという立派な役目がある。それを軽々しく邪魔するのが嫌なのだ。

自分が彼らに好かれているから、自分も彼らの事が好きだから、尚更に。

「それじゃ駄目なのかな……」

「何が駄目なのかしら？」

アーシヤの呟きに対する答えは、意外な人物からもたらされた。アーシヤは寝転がったまま視線だけ上げて声の主の姿を捉えた。声の主は日の光の中につこりと笑顔を浮かべている。

けれどアーシヤにはその笑顔が綺麗だとは少しも思えなかった。

「決勝進出おめでとう」

「……どうも」

白々しい言葉にアーシヤは小さく返す。

「まさか本当にここまで勝ち進むなんて思わなかったわ。

しかも魔具ばかりで。さっきの試合の事も聞いたわ」

「……」

アーシャは沈黙でそれに答えた。

カトウラは自分に反応しない少女を苛立ったように見下ろした。

「貴女って本当に腹立たしい子ね。どうしてそうなの？」

「そうって？」

「どうしてあんな風を起こす力がある癖にそれを普段隠すの？」

「どうして精霊が使える癖に魔技科なの？ どうしてもっと上を指ささないの？」

カトウラが何を言いたいのかわからず、アーシャは首を傾げた。

「風は魔具の暴走みたいなものだし、精霊はむやみに利用したくないだけ。」

それを何故他人に責められなくちゃならないのかわからない」

「その答えが腹が立つのよ！」

アーシャは半身を起こしてカトウラを見つめた。

さつきよりも近くなった彼女の表情が目に入る。アーシャはその表情を見て、首を傾げて問いかけた。

「じゃああなたはなんで私の事でそんなに苦しそうなの？」

「っー！」

カトウラは驚いたように目を見開いた。そして何か激情を抑えるように彼女は顔を背けた。

背けられた横顔にひらりと脇の髪が一筋落ちる。

今日は彼女は豊かな髪を後ろで複雑に編みこみ、その一部を結び上げていた。あまり見ない珍しい形だ。

だがアーシャはその髪型をどこかで見たことがある気がした。

「……誰が苦しそうなものよ。もう苛々するわ、本当に。私の、妹を思い出して」

(……妹を思い出すわ)

その言葉を聞いたアーシャの記憶の中で、誰かが小さく囁いた。前に同じことをアーシャに言った人がいた。あれは誰だったか。アーシャは懸命に思い出そうと記憶を漁った。あれはもう、随分前のことだ。確か、この学園に来た頃の

「あの時の……」

「え？」

「あなた、あの時の人だ。私に、道を教えてくれた……ここに初めて来た時の」

その言葉に、カトウラの頬が突然赤く染まった。

彼女は赤くなった自分を持って余すように、パクパクと何か言いたげに口を閉じたり開いたりする。

怒鳴るかと思われたが、どうやら声にならなかったらしい。

しばらく不自然な沈黙が続けた後、やがてカトウラは喉の奥から搾り出すような声を出した。

「……何で……何で今頃思い出すのよ！　っていうか、今頃気がついたの!？」

そう言われてもアーシャとしては何とも言いようがない。

元々人の顔を憶えるのは苦手な上に、彼女はあの時と随分変わっている。

「だって……あの時と全然違う。髪型は今日と一緒だった気がする

けど、あの時はそんなにけばけばしくなかったし雰囲気ももつと澄んだ」

「なっ、何ですって!!」

事実だ、とアーシャは胸を張った。

少女が初めてこの学園に来た時に、道を聞いたその人は親切に目的地まで案内してくれた。アーシャは案内してくれた彼女の後ろを歩きながら、その後姿を見ていた。

今日と同じ形に美しく結われたその髪をもの珍しく思いながら見上げていた記憶が薄っすら蘇る。

澄んだ水のような気配の人だと思ったのだ。あの時は。なのに今、その水はすっかり濁ってしまっている。

「あの時も、私に向かって妹を思い出すって言った」

カトウラは少女を睨みつけ、そしてまた顔を背けた。

「そうよ、貴女を見てみると妹を思い出して苛々するのよ。貴女と同じ、自分の才能を無駄にしている偽善者の妹を。」

精霊に愛されて才能に恵まれているのに……魔法医になりたいだなんて!」

「そう……」

アーシャの気のない返事にカトウラの苛立ちは更に募る。

何を言っても何をしても応えないところが腹立たしい。

応えないという事はつまり彼女を相手にしていないという事に他ならない。

カトウラは他人に存在を無視されるのが何より嫌いだった。

アーシャとの最初の出会いは、カトウラにとってはどうということもない、あっさり忘れてしまうくらいの出来事だった。

彼女が上級学部の一の年の秋に、ここで年下の少女に出会った。

学生課への道を聞いてきた小柄で痩せた少女を基礎学部の生徒だと思ったから親切にしてやった。

故郷に居る妹と丁度同じくらいの年だったから少し懐かしく思った。ただそれだけの事だった。

その少女が、精霊魔法を見せて飛び級して編入した、と聞くまでは。

その頃のカトウラは壁にぶつかっていた。

得意だったはずの水の魔法が、授業が難しくなっただけからなかなか成功しなくなったのだ。

カトウラは自分の国で、基礎学部六年の一年をかけ必死で魔法の練習と勉強に励んだ。

そのかいあってアウレスーラの魔法学部に入學でき、念願の魔法科に入れたのに、このまま魔法がうまく使えなければカトウラはいずれ教師から転科を勧められかねない。

毎日焦っていた時に、質問をしにいった魔法科の教授の部屋でカトウラはその話を聞いた。

『どうでしたか、編入生は？』

『駄目でしたよ、散々説得したんですが逃げられました……』

『勿体無い、あんな見事な精霊魔法の使い手は最近いませんよ。しかもあの年で』

『本当に。しかし、これだけ使えばそれ以上必要はない、と言って聞かんですよ。』

だからといって研究室に勧誘するにはさすがにまだ早すぎる』

『何とも勿体無い……よりによって魔技科だなんて！』
『全くですな』

それがこの間自分が案内した少女の話だと、カトウラはその少し後に知った。

彼女の中で許せない、と誰かが小さく囁いた。

自分が欲しかったものを持っていながら、と思った。

それが全くの逆恨みだと頭のどこかではもちろんわかっている。けれど同時に自分の中で声がするのだ。

才能を活かさないのは罪だと。

水の精霊に愛され、水の神殿の巫女にと強く望まれていながら、神殿には行かない、魔法医になりたいのと無邪気に夢を語る妹のよう。

妹がいらなかった道は、カトウラが幼い頃憧れ続けたものだった。

無邪気に憧れを語った幼い頃、あの頃はまだ家族の中心はカトウラだった。

妹が、その才能を示すまでは。

「せめて貴女が……魔技科の眠り姫のままできてくれたなら良かったのに」

そうしたらまだ、少女の噂は嘘だったのだと笑っていられたのに。妹の面影を、この何の関係もない少女に見て苦しく思うことも無かったはずなのに。

得られなかったものへの憧憬もいずれば忘れられたかもしれない。

アーシャは悔しそうに呟くカトウラの少し後ろを見ていた。

そこに小さな水の精霊が漂っているのが見える。

カトウラは別に水の精霊に愛されていないわけではない。小さい彼女を気にかけている精霊はちゃんという。

彼女に限らず大抵の人間がそうだ。

特別愛されていないなくても、精霊魔法が使えなくても、本当は精霊達は常に人間の傍にいる。

人が彼らに向かつて目を塞ぎ、耳を塞ぎ、心を閉ざすから、精霊との絆が薄まり、距離が開くのだ。

カトウラだって精霊の力を欲しながらも、本当は精霊と仲良くしたいとは思っていない。仲良くするものだという意識がないから。

アーシャはずっと手に握っていた聖霊石をそっと離れた。

カトウラが何を考えているのかわからなくて、ほんの少しだけ彼女の投げる想いを聞いたのだ。

彼女が欲しいのは成功や、それによって取り戻せると思っているもの。

けれど彼女が失くしたとだけ、本当はすぐそこに変わらずあるのかもしれないもの。

あるいはどこにも存在しない、彼女の幻想。

彼女は、精霊に愛されたらそれらが手に入ると思っている。

「あなたが本当に欲しいものは、精霊の加護があっても手に入らない」

「……私が何を欲しがってるっていうのよ」

アーシャはその問いには答えなかった。

「私達は、確かに四人とも精霊の加護を持っている。

でも、あなたが欲しいものは誰も持ってない」

アーシャは悲しそうな顔をしてそっと首を振った。

だから、自分達は四人で手を取り合ったのだ。

「それが欲しいってというのは、わかる。

でも、求め方を間違っている。あなたはまだ手遅れじゃないのに」
「……何を言っているのか判らないわ」

アーシャは立ち上がると服についた枯れ草を払ってカトウラに背を向けた。

「あなたが……少し、羨ましいよ」

「アルシエレイア」

競技場に向かう少女は後ろから呼び止められて振り返った。
入り口近くの木の陰に立っていたのはディーンだった。

「ディーン、どしたの」

アーシャがパタパタと近づくとディーンは少しだけ眉根を寄せて
難しい顔をした。

「……あの二人の試合を見た」

「え……」

「あの二人は強い。本来ならそれぞれが個人部門に出ても上位に残れる実力の持ち主だ。気をつけた方が良い」

ディーンの真剣な目に、アーシャは頷いた。
コーネリアもカトウラも性格に難はあるが成績は良い。
恐らくペアに出てくる選手は彼女達にとっては格下の相手に当たる。

「どんなだった？」

「そうだな……息は合っていない。だが個人の技量がそれを補っていた。怖いのは二人が協力した時だろう」

気の合わない二人だがそれでも協力する気になったなら、それは利害が完全に一致した時だ。

なりふり構わなくなれば、確かに二人は恐ろしいだろう。

「使う魔法については前に調べた通りだった。

コーネリアはバランスが良く大体の魔法を扱えるが、光の精霊魔法や氷の魔法、水の魔法が好きなようだ。

カトウラは水にかなり偏っていたが能力は高い。水の大陸出身なだけはある」

「そっか……なら割と使う属性は偏ってるね……でも逆に怖いかな」

ディーンはアーシャの言葉に深く頷いた。

チームの二人が得意な属性が被るとするのは汎用性という点では確かに劣っている。

けれど、その分力を合わせて強力な攻撃や防御がしやすかったり、同じ種類の魔法を多く使う事でその場の気が偏って、その属性の魔法を使いやすくなったりその逆の現象が起こったりする。

そうなれば二人の独壇場となってしまう可能性もあるのだ。

「一応色々考えてはいるんだけど……」

「あの扇が没収されたのは痛かったな」

「うん。でも、あれはもうどのみち使う気にならないからいいんだ」

アーシャは首を振って笑った。

今までに使った道具のほとんどが彼女達には通用しないだろう事はアーシャも覚悟している。

彼女達もこちらの情報を集めているだろうから尚更だ。

それでもアーシャは引く気はなかった。

競技場の入り口への方へのんびりと移動しながらアーシャは隣を歩くデイーンの足元を見た。

彼の影に闇の精霊が出たり入ったりして遊んでいるのが見える。

冬の弱い日差しでも彼の影はいつも一色濃い。

「ね……デイーン。デイーンはさ、精霊の力を使って、何かしたい事とか欲しいものとかある？」

デイーンはその問いに首を捻った。

「いや……何も。何もないな。」

私は彼らの力を色々な面で借りているが、本当は借りなくても自分の努力で出来ることも多い。

実際、己を高める努力はしているつもりだ」

「うん」

「そもそも彼らの力だけで、したい事が叶い欲しい物が手に入るなどという事はありえない」

その通りだ、とアーシャも頷いた。

「じゃあ……精霊に、望むのは？」

「望む……そうだな。今と同じで良い。」

昔も今も変わらずずっと傍にいてくれたように、できるならこれからもそうして貰えたらいい。後は、時々力を貸して貰えたら言う事はない」

ディーンの返答に、彼の傍の精霊達が喜びに沸き立った。嬉しそうに彼に纏わりついてはしゃいでいる。

アーシャはディーンの返答に喜ぶ彼らを愛しく思う。

精霊に愛されたものほど、精霊に多くを望まない。だから精霊は彼らを更に愛し、その力になりたいと望む。

アーシャにとって、そして仲間達にとって、それは得られなかった血の繋がりや家族の愛の代わりに得た絆だ。

「アルシエレイア」

「ん？」

ディーンに声をかけられアーシャは物思いから覚めた。彼が指を指す方向を見ると、競技場の入り口脇にライラスの姿があった。

まだ松葉杖を突いているが顔色は先日より大分良い。

アーシャは手を振る彼に歩み寄った。

「よう。決勝進出おめでとう」

「ライラス、見てたの？ もういいの？」

ライラスは頷くと杖を持ち上げて自分の足で立って見せた。

「今朝退院許可が出たんだ。さっきの試合、後ろの方からだけ見てた。」

ほんとはこの脚ももう大丈夫なんだけど、一応杖持ってでろって

言われてさ。面倒くさいけど、そうじゃなきゃ出さないって言われたから……」

「そっか……でも良かった。頭も何ともなくて」

「親父や祖父さんに殴られ慣れてるからな。頭は固いんだ」

ライラスはおどけたように笑うと、不意に真面目な顔で黙り込んだ。

「……決勝、大丈夫なのか？」

アーシャが奥の手を失った事をライラスも聞いたのだろう。彼は固い顔をしていた。

二人で作った魔具で戦っているのだから、彼にはアーシャの手の内が良くわかつている。それだけで戦うには厳しいという事も。

「……何とかする。勝つよ。だから、最後まで見てて」

「……けど」

「ライラス、一つ約束して」

ライラスの言葉を遮ってアーシャは強く言った。

「約束？」

「うん。私と約束して。私が勝ったら、友達にあの杖を渡すって」

「……！」

アーシャはバッグから、自分の作った木の枝の杖を取り出した。

「私、杖を作る課題の時に、いずれ使うかどうかは別として、とりあえず自分に合うののと思ってこれを作った。他の生徒も大体皆そうだったよな。」

けど、ライラスの杖は違ってた」

ライラスの杖は増幅や制御の力が安定して付加された、バランスの良い杖だった。

何かに特化しているという事はないがその分学生には扱い易く、長く使えるような杖だった。

「ライラスの友達の話聞いたとき思い出したんだ。あの杖に、小さく入ってた文字。

上手に他の文字に隠してたけどそれだけ現代語だったから気になってた」

「あれに気付いてたのか……」

驚くライラスにアーシヤは頷いて、笑顔を浮かべた。

「RからFへ。そう書いてあったよね」

ライラスは思わず唇を噛んで俯いた。

渡す勇気もないのに、友人の事を思ってた杖を作った。そんな自分を馬鹿げていると思っていた。

「私……勝つよ。だから、ライラスも。

自分は自分の戦いをするって、お祖父さんと約束したんでしょ？」

ライラスは顔を上げて少女の目を見た。

真っ直ぐ、迷いのない瞳はあの日と同じだった。負けなと言ったあの時と。

ライラスは少女に向かって力強く頷いた。

「わかった。俺、表彰式にあの杖持ってくる。お前が勝つって、信

じてる」

ライラスはそう宣言し、そしてポケットから何かを取り出してアーシャに差し出した。

「……これ、大して調整しきれないけど、少しなら使えると思う」

ライラスの差し出したものを受け取ったアーシャはそれを見てハッと息を呑んだ。

それは少女の掌より少し大きいくらいの銀のメダルだった。細かい文字が表といわず裏といわず彫り込まれている。

中心には穴が一つ開き、そこには親指の先ほどの透明な石が嵌められ、向こう側の景色を映していた。

「もしかして、ずっと調整してくれてたの？」

「ああ。昨日はまだ試合見にいけなかったからな。病室にこっそり道具持ち込んでおいてよかったよ。」

完璧には程遠いけど、少しなら使えるくらいにしておいた」

その石はアーシャがライラスの祖父から借り受け、ライラスと二人で魔具へと加工した精霊石だ。

けれどその石の持つ力が強すぎ、二人の知識や技術を総動員しても完全に力を制御する事ができなかった。

結局ライラスが、ぎりぎりまで手を加えてみると持ち帰り、今日までそのままになっていたのだ。

アーシャはそのメダルを強く握り締め、顔を上げた。

照れくさそうな申し訳無さそうなライラスの顔がそこにある。

「こんな事しか俺は役に立てないからな」

「……そんな事無い。すごく、すごく助かるよ」

アーシャの言葉にライラスは嬉しそうに笑顔を見せた。けれどすぐにまた顔を引き締めて、真剣な声音でアーシャの掌の中のメダルを指差した。

「使い方、わかってると思うけど……絶対、間違っなよ」
「……ん。大丈夫。じゃあ、もう行くね」

アーシャはにこりと微笑むと競技場の入り口をくぐった。黙って傍に立ち、二人を見ていたディーンも後に続く。ライラスの隣を通り過ぎる時、ディーンは立ち止まった。

「行こう」

「え？」

「観客席に行くんだろう。連れが席を取っているはずだ。最前列だから、よく見える」

「あ……う、うん」

アーシャは並んでゆっくりと歩き出した少年二人を一度振り返り手を振った。二人が頷いたの見て控え室へと向かう。

最後の試合の時が近づいていた。

一方、控え室に戻ってきたカトウラは無言で椅子に座ったままぼんやりとしていた。

その顔からはいつもの余裕のあるような笑みが消えている。

コーネリアは急ごしらえのパートナーのそんな様子を見てため息を吐いた。

「カトウラ」

「……何」

「この試合が終わったら、結果はどうあれあの子に対する嫌がらせや噂を止めると約束なさい」

「あら、私がいつそんな事を？」

下を向いたままそれでもとぼけるカトウラにコーネリアのため息も深くなる。

「私は何も知らないと思っっているなら間違いでしてよ？」

「……なら何故付き合ったの？私に」

コーネリアはきそうね、と少し考えた。

「一番はあの子と戦ってみたいという理由ですけど。後は、貴女の様子がおかしかったからかしら」

「……何よそれ」

「私、はつきり言っただけ貴女が好きじゃありませんわ。」

実力はあるのに本気を出さないし、色恋のトラブルは耐えないし、性格が陰険ですし」

カトウラは眉をしかめたが反論しなかった。どれも影では言われなれている言葉だ。

だがこうして隠しもせずに堂々と言われたのは初めてで、思わず聞き入ってしまった。

「でも、あの時の……競技会に誘いに来た時の貴女は、いつもと違

っついて……笑っているのに、何か苦しい事があって仕方がないような顔をしていました。

「ご自分ではわからなかったでしょうけど。だから、気になったのですわ」

コーネリアの言葉にカトウラは顔をしかめ、そして突然クスクスと笑い出した。

「何が可笑しいんですの？」

「あはは、だつて……貴女つてもしかして、意外にお人好しなの？ 私と同じかと思つてたのに」

「な……どういう意味ですの!？」

「そのまんまよ。貴女も私と同じ、貴族のお嬢様で高慢ちきで嫌な女なのかと思つてたのよ。」

だから手伝つてもらおうと思つたのに……意外だったわ。失敗したかしら」

「んなつ……!」

カトウラの失礼な言葉に怒鳴り返そうとしたコーネリアは、彼女が楽しそうな声を出しているのにその顔が少しも笑っていない事に気がついた。

その顔を見ているとそれ以上強く言う事が出来ず、コーネリアはため息を吐く。

「貴女は……一体何がしたいんですの？」

コーネリアが静かに問うとカトウラは困つたような顔をして笑つた。

「私も今それを考えていたところ。私……何がしたかったのかしらね？」

アーシャが投げた言葉が、カトウラの中で繰り返し繰り返し響く。
カトウラはそれを振り払うように頭を振った。

「とりあえず、今は……勝つわ。全力を出して」

そうすれば、何か見えるかもしれない。

少女は未だ迷いの中にいた。

28：求め得られるもの（後書き）

久々の更新です。お待たせしました。

遅い夏休みが取れたので久しぶりに長々と実家に帰省していました。

更新を待つて下さった方々には申し訳ありませんでした。

またがんばります。

29：最後の試合1

第一魔法競技場は他の競技場よりも大分広い。

観客席の数も試合場の広さもかなり違う。

だが今、その広い観客席はほとんど満員になっていた。

客席を埋めた人々はこれから始まる試合を待ち望み、その試合場に出てきた四人に惜しめない声援を送っていた。

「……何これ」

「ひゃー、すげえ人。たかが三学年の優勝決定戦で、どうなってんだこりゃ」

「いつもはこんなにいないの？」

アーシャの疑問にジェイは何度も頷いた。

「全然。この競技場だってほんととはもつと上の学年の、五年か六年の優勝決定戦か学年混合の優勝決定戦とかに使うんだ。

普通三年で、しかもペアではここは使わないだろうな」

「……私が第二競技場使えなくしたからかな」

しょんぼりしたアーシャにジェイはぶんぶん手を振った。

「違うって！ だったらここじゃなくて第三競技場使ったっていい話なんだしさ。多分見たいって言う人間が多かったんだろ」

実際ジェイの目から見てもこの客の入りは尋常ではない。

作業着などの制服以外の服の人間が沢山混じっている所を見ると、どうやら他の学部からも沢山の人が見に来ているらしかった。

「魔法競技会はほとんどいつも魔法科の生徒しか出てこないから。毎年出場者も代わり映えしないし、武道大会より参加人数も少ないから観客もそんなに多くないんだ。」

「多分、純粹に俺達を見に来てるんだろ。珍しいから」
「へえ……」

アーシャはずらりと観客席に並んだ沢山の人間を気持ち悪そうに眺めると、試合場の向こう側から歩いてきた二人に目をやった。

二組のチームは試合場の中央で向かい合った。

コーネリアは満員の観客席を見渡し、満足そうに微笑んでから二人に視線を向ける。

「ご機嫌よう。やっとこの日が来ましたわね。ずっと貴女に挑む日を待っていましたわ！」

「そう」

「なっ……何ですのその気のない返事は！ 失礼ですわよ！」

コーネリアはブンと杖を振って怒りを顕わにした。その動きに合わせてゆらゆらと金の縦巻きが揺れる。

アーシャはそれを面白そうに見つめ、おもむろに口を開いた。

「ね、その髪寝る時どうしてるの？」

「は？ それは……寝る時は自然のままですわ。毎朝巻くのですから」

「へえ……じゃあ朝早いんだ」

「ええ、毎朝五時に起きて……って、止めて下さらない！ こんな緊張感のない会話……！」

コーネリアはうつかり真面目に受け答えしてしまった己に気付き顔を赤らめた。

「だって知りたかったんだもん。ありがと、教えてくれて」
「あら、どう致しまして……ってだから違いますわ!」

頬を染めたまま憤るコーネリアの隣に立つカトウラは、そんな緊張感のない二人を面白く無さそうに眺めた。

「試合前に余裕なのね。賭けに負ける覚悟は出来てるってことかしら」

「賭け?」

コーネリアとジェイが何の事かと不思議そうな顔をする。
だがアーシャはそれには答えず、カトウラをじっと見つめて言った。

「負けないよ。あなたこそ、約束忘れないでね」

フン、とカトウラは鼻で笑うと踵を返して開始位置へと歩いていった。

コーネリアも慌ててその後を追う。

「アーシャ、賭けって何のことだよ? 何か賭けたのか?」

「うん、私が負けたら皆の班から抜ける事になってるの」

何でもないことのように告げられた言葉にジェイが目を剥く。

「はあ!?!」

「でも、負けない。負けたくないから、大丈夫」

「大丈夫って……!?! しょうがねえなあ。後でちゃんと話聞かせろよ?」

ジェイは手を伸ばして、うん、と頷くアーシャの髪をくしゃくしゃと撫でた。

二人は並んで開始位置へと向かう。

さつきから誰にも気付いてもらえていない審判は、挨拶もしなかった二組のチームを困ったように見て、諦めてため息を吐いた。

ヤケになつた叫びが試合場に響く。

『始め!』

「清らなる水よ 我が前に集いて 敵を穿つ槍となれ!」

まず動いたのはコーネリアだった。

彼女の高らかな詠唱に従い、その眼前に水が集い、ピキピキと音を立てて凍っていく。

やがて形作られた鋭い氷の槍は彼女が杖を振って示した先に一斉に飛び出した。

アーシャは用意していた二枚の札をすかさず投げる。

ゴォツと音を立てて炎の壁が立ち上がり、氷を飲み込んだ。

もう一枚、炎の壁よりも手前に飛んだ札の周りから土の壁が立ち上がる。

「なっ!?!」

炎の壁で溶かされ、勢いを削がれ半ば水と化した氷の槍は固い土壁に当たって砕け散り周囲に跳ね返った。

「種類の違う二重の結界が即座に作れる……これが魔具の強みって訳ね」

カトウラも感心した声を上げた。

詠唱の時間が要らない魔具は一つ一つの威力はあまり強くはないがその分ことういう使い方も出来るのだと教えられた気がした。

コーネリアはさらに氷の礫を放つがそれもアーシャは事も無げに防いでしまった。

詠唱魔法は言葉を使うせいで道具で防ぐのは難しくない。

コーネリアは更に風や小さな炎の魔法を使ったがそれらも有効な手段とはならなかった。

カトウラは防御に徹するつもりらしくそれを傍観している。

「くっ……！ なら！」

コーネリアは杖をブン、と振り上げた。

『聖なる光の精霊よ！ 我が呼び声に応えよ！』

高らかに光の精霊を呼びつけると、その杖を二人の方へと向けた。

「光の精霊よ その光の槍もて敵を撃て！」

「ジェイ！」

「おう！」

コーネリアの杖の前に収束した光が棒のように真っ直ぐに二人を目指して進む。

だがジェイは逃げる様子もなくむしろ光に向かって大きく一歩踏み出し拳を繰り出した。

「せーのっ、二い！」

バチンッ！

ジェイの拳とコーネリアの放った光が真正面からぶつかった。

激しい音と閃光を放ち辺りが一瞬明るく照らされる。

光は弾けるように消え去り、後にはぶるぶると手を振るジェイが何事も無かったかのように立っていた。

「ジェイ、大丈夫？」

「あー、ちよっとビリッとしたかな」

だがそういう割には少しもダメージを受けた様子は無い。

それを見て客席ではデーンとシャルが頭を抱えてため息を吐いた。

「精霊魔法には精霊魔法が一番有効だって言っても……あれってありなの？」

「殴る他に方法はなかったのか……」

コーネリアの魔法を相殺できたという事はジェイがいつの間にか彼女より強い精霊を呼べるまでになっているという事だ。

だが二人ともなんとなく、それを素直に褒める気にはなれなかった。

そんな客席の二人の苦悩も知らず、アーシャはジェイに声なき声をかけた。攻撃に転じる合図だ。

ジェイはその声に従って手にしていた何枚もの符を前に向かって投げる。

符はたちまち燃え上がって火の玉となり前方に立つ二人めがけて飛んでいく。

魔力を少し込めると弱い魔法を発動させる良くある品を強化した物だ。その炎は市販品よりも大分強い。

更にアーシャはジェイの行動に合わせて聖霊石の腕輪を強く握り、その手をブンツと大きく振った。

ゴツと風が巻き起こる。

それは前の試合で使ったのとは比べ物にならないほど弱い風だった。

それでもその風は前を飛ぶ火の玉を押し、その炎を更に燃え立たせた。

だがそれを迎え撃つカトウラは余裕の表情だった。

十あまりのかなりの大きさの火の玉が間近に迫ってもなんの焦りも見せずに杖を持ち上げた。

「清らかなる水よ 我が眼前にて壁を成せ！ 降りかかる厄災を押し包め！」

ゴバア、と地面から湧き上がった水がカトウラとコーネリアを守る。

水はカトウラとコーネリアの眼前に高く立ち上ると、一瞬で全ての火の玉を絡め取り消し去ってしまった。

「こんな攻撃しかできないのかしら？ なら今度はこちらから行かせて貰うわ」

カトウラは目の前に水の壁を立てたままにこりと微笑んだ。

アーシャはそんなカトウラの様子を見て、ポケットからあの銀の

メダルを取り出した。

少女の手の平ほどの大きさのメダルには上部に小さな輪がついている。

アーシャはその輪に右手の中指を通し、手の平にメダルを握りこんだ。

「清らかなる水よ！ 我が元を集え 我が手の平で踊る荒々しき水流となれ！」

カトウラの前でゆらゆらと揺れていた水の壁は一斉に形を崩して更に量を増し、何本もの水流となった。

それらは一直線にアーシャとジェイに向かってくる。

アーシャは右手をかざしたまま、隣に立つジェイに目配せをした。それを受けたジェイもいつの間にか取り出したらしい何かを持った手を高く振り上げる。

「よっ！」

掛け声と共にカシャンとガラスが割れるような音がして、二人の目の前の地面で何かが弾けた。

ジェイが手に持っていた水の小瓶を足元に叩き付けたのだ。

割れた瓶から溢れた水は叩きつけられた反動か、音を立てて二人の前で一瞬高く吹き上がった。

アーシャはそれと同時に水に手をかざして声を上げた。

「凍れ！」

吹き上がった水はその言葉に従い、パキンと固い音を立てて見る見る氷の壁を成す。

だがそれは彼らの元へと向かう水の勢いの前にはあっけなく崩れ

てしまいそんな薄い壁だった。

アーシャは一步踏み込み、立ち上がった壁に手の平のメダルを押し付けた。

「凍れ！」

もう一度そう唱えると同時にアーシャはわずかな魔力を石に流した。

その言葉と魔力を呼び水に、精霊石の中と外のメダルに記された魔法陣が発動する。

魔法陣は精霊石から魔力を引き出し、溢れ出たその力を一つの現象へと導いた。

キーン、と高い音を立てて手の中の石が輝く。

その次の瞬間、水流は何匹もの蛇のように小さな壁に襲い掛かった。

ドオン、と壁に水が衝突する鈍い音が辺りに響く。

誰もがその氷の壁が瞬時に碎かれる事を予想していた。だが

「なっ!?!」

「何ですの!?!」

カトウラもコーネリアも驚いて声を上げた。

水流で碎かれると思った小さな壁が、パキンパキン、と固い音を立ててどんとどんと広がっていく。

水流が当たる度にその壁は厚みを増し、広さを増し、見る間にその向こうの二人を完全に覆い隠してしまった。

「氷の魔法でこちらの水を逆に利用しているというの……!?!」

「あの水流全てを飲み込むほどだなんて……!?!」

何本もの水の蛇は今や完全に氷の壁に飲み込まれ姿を消してしま
った。

カトウラは一旦攻撃の手を休めた。これではこれ以上水で攻撃し
ても更に壁を厚くするだけだ。

二人が身を守るための壁を立ち上げたのを見て、それを壊してや
ろうと攻撃を集中させたのが裏目に出ってしまった。

自分の行動が読まれていたのだと気付いたカトウラは悔しげに眉
を寄せた。

一方壁の向こうではアーシャが氷の壁から手を離してほう、と息
を吐いた。吐いた息が白く広がる。

右の手の平から腕がじん、と痺れた。

やはり精霊石の力が強すぎて、急拵えの魔具ではそれを完全に抑
え切れていない。

ライラスと作ったこのメダルには最近貴族の間で流行している魔
具の技術を応用してある。

本来なら夏場に小さな部屋などの一定の範囲の空気を冷やすのに
使われている技術を高め、氷結の力を持たせたのだ。

だが使った石の力が強すぎて、道具を使用した者にも若干の影響
が出るのを打ち消す事ができなかった。

精霊石は高価だから学生のうちは使い方は学んでも、実際の制作
に使うことはほとんどない。

あの扇といい、この氷結の魔具といい、強い力を扱うにはアーシ
ヤもライラスもまだまだ経験が不足しているという事なのだ。

(諸刃の剣って……ほんとに、そうだね)

何度も使っつなよ、あんまり強い力を出すなよ、と心配そうに言っ

たライラスの顔を思い浮かべてアーシャは困ったような笑顔を浮かべた。

「すつげえ……こんな分厚い壁になっちまった……」

競技場を真つ二つに区切るほどの広さになった氷の壁を見てジェイは感嘆の声を上げた。

「ジェイ、二人が攻撃してきたら合図するから、この壁を思い切り叩き壊して欲しいんだけどできるかな？」

「壊していいのか？」

「うん、二人が攻撃してくるのに合わせて壊した破片を飛ばせば幾らかは当たると思うから」

「なるほど。よし、任せろ！」

ジェイは壁の前で構えると油断無く向こう側の動きを伺った。

アーシャも腕を擦りながら壁の向こうに目を凝らす。

カトウラが水の魔法を使おうと魔力を高めているのがおぼろげに見えた。

水ならばまた凍らせてやる、とアーシャは冷えて痺れる右手を再び持ち上げた。

「こんな氷、炎で溶かしてやりますわ！」

コーネリアは杖を高く振り上げた。

「待って、コーネリア」

だがそれをカトウラが制する。

「貴女あまり強い炎は使えないでしょう？私もだけど。

ね、私にやらせてちょうだい」

「けれど……これ以上水を使っても無駄なんじゃなくて？」

更にあの壁を厚くしてしまう、というコーネリアにカトウラは微笑で答えた。

「水の力はこんなものじゃなくてよ？それをあの子達にも教えてあげるわ」

凄みのある笑顔にコーネリアも思わず黙る。

カトウラはそれを了承と受け止め、青い石の嵌った杖を振り上げた。

「清らなる水よ 我が元へ集え 激しき流れよ 細い細い糸となれ！
岩をも穿つ針となれ！」

カトウラの周りにザァツと水が集まる。

水は先ほどと同じ大きな水流となり、そしてそれは少しずつ細くなっていく。

激しい水流はやがて細い細い水の糸となり、その先は鋭い針となった。

「穿て！」

ヒュツと音を立てて水が動いた。
来る、と壁の向こうのアーシャは身構えた。だが構えた直後にその魔法の持つ力に気付いた。
凄まじい勢いの水が、細い針となって氷の壁を穿とうと向かってくる。

これは凍らせても止められない。そしてその切っ先は真っ直ぐに

「ジェイ！」

アーシャは地を蹴って体ごとジェイにぶつかった。

「うわっ!?!」

少女の体は軽かったが、それでも勢いに押されてジェイは地面に転がる。

その次の瞬間パン、と軽い音が辺りに響き、アーシャは突然足に走った痛みに息を呑んだ。

「ッ！」

小さな体はどさりと地面に倒れ付した。

響いた音が壁に穴が開いた音だったと気付いたジェイは慌てて起き上がりアーシャに駆け寄ろうとした。だがその前にアーシャの声
が響いた。

「ジェイ、壊して！」

ハッと我に返ったジェイは慌てて氷の壁へと向き直る。

「うつりゃあ！」

ジェイは右の拳に渾身の力を込めて壁に叩き付けた。
ドゴオン、と鈍い音が辺りに響き渡り、大小の氷の破片が激しく
向こう側に飛び散る。

「キヤアツ！」

二人分の悲鳴が重なって聞こえ、アーシャは氷の幾つかが彼女ら
に当たった事を確信した。

両手を使ってヨロヨロと立ち上がり向こうを見ると、コーネリア
もカトウラも地面に倒れ込んでいるのが見えた。

だが二人とも頭を軽く振ったりしながらゆっくりと起き上がる。
やはり今ので勝負が決まるほど二人は甘くはない、とアーシャは
表情を固くし、ポケットを漁って茶色い革袋を取り出した。

「アーシャ！？ その足！」

突然ジェイが慌てた声を上げた。

それもそのはず、振り向いたジェイが見たのは少女の左足の腿の
辺りを染めるくすんだ赤い色だった。

ジェイを突き飛ばした代わりに針のように細い水に足を穿たれた
のだ。

出血は激しくはないがじわじわとズボンを汚していく。

「大丈夫。それよりもジェイ、これを水に落としてきて」

「大丈夫って、アーシャ！」

「お願い、二人が起きないうちに早く！」

袋を押し付けられたジェイは諦めて一番近い堀を目指して走った。広い試合場を全速で横切って、袋の中身をぼちゃぼちゃと全て投げ入れて慌てて戻る。

ジェイが戻る頃には二人も立ち上がっていた。

「いた……頭を掠りましたわ、まったく」

「あら……残念。その髪の毛が短くなれば少しは素早く動けるようになったでしょうに」

「なんですって!?!」

カトウラは防御の魔法が間に合わなくて顔に幾つかの氷の破片が当たったことにいたく腹を立てていた。

もしかしたら後であざが出来てしまいかもしれない。

攻撃をしていたのはカトウラなのだから防御するのはコーネリアの役目だったはずなのだ。

苛々しながら前を向いたカトウラは少女が怪我をしているのを見て微笑んだ。

二人が言い争っている間にアーシャはバッグから取り出した布を傷に巻いていた。きつく縛ったが、あまり激しくは動けそうにない。

「あら、ちゃんと当たってたのね。良かったわ」

「……流石に、水の事を良く知ってるんだね」

細い糸のような、針のような水流はアーシャの結界さえも突き破った。

力が一点に集中した為守りきれなかった事にアーシャは悔しさよりもある種の感嘆を覚えていた。

「そうよ、水の事なら誰よりも良く知ってるわ。私にはこれしかないもの」

「……これしかない、か」

そんなことはない、とアーシャは思う。

カトウラがそう思いたいだけだ。

そうやって自分の可能性を狭めて、広い世界を見ることを恐れている。

その世界にはアーシャが選んだ道や、彼女の妹が選んだ道もあるという事を認めたくないから。

あれだけ水を扱えるなら、もつと努力すれば本当に水の神殿の巫女にだってなれるかもしれない。

精霊に愛されている方が有利な事は確かだろうが、世の中には精霊の加護持ちの数は多くないし、持っただけでもごく弱い場合が多い。彼女が本気で望めば、その道はまだ続いている。

二人がしばし黙って向かい合っていると、突然ゴバア、と音がして堀から水柱が立ち上がった。

昨日使ったのと同じ、水の球がぼよんぼよんと次から次へと飛び出してくる。

さつきジェイが堀に放り込んだ魔具だ。

「でましたわね！」

コーネリアは水の球を見ると杖を振り上げた。

もう一度光の精霊を呼びつけると、その杖を水の球へと向けた。

このおかしな魔具が核を持って動いている事はわかっていて、ならば対策は一つ、と勢いよく杖を向ける。

「光の精霊よ その光の槍もて敵を撃て！」

杖の前に光が収束する。

次の瞬間、放たれた幾筋もの光は細い槍となって水の球にぶつかった。

「あっ」

アーシャはそれを見て小さな声を上げるとジェイに飛びついて床に引き倒した。

「どわっ!？」

光の槍はコーネリアの意図通り、その核を狙って真っ直ぐに水の球にぶつかった。

だが水の中に入るや否やキュン、と屈折して核を逸れ、斜めに飛び出す。そしてそれは斜め後ろにいた水の球にぶつかった。

「コーネリア、馬鹿!」

カトウラは慌てて水を集めて壁を作り出し、コーネリアの髪を掴んで壁の後ろに引きずり倒した。

「キヤアツ!」

乱暴な扱いに悲鳴が上がる。

コーネリアが何本も撃った光の槍は密集した水の球から球へと屈折して辺りに乱反射し、次々に意図しない場所から四人を襲った。

アーシャも低く身を伏せて水の境界札を使って自分達を覆う。

その上を何本もの光が行き過ぎ、試合場の壁や床に当たって弾けて消えた。

シャルはこの戦いを観客席からハラハラと見下ろしていたが、コ
ーネリアの行動には呆れてため息を吐いた。

「コーネリアは魔法の腕はまあまあなんだけど、考えなしなのよね」
だからいつも魔法の使い方という点でシャルに劣り、勝てたため
しがないのだ。

「性格だな」
「そうね」

あっさりとそう評された当の本人は、自分の巻き毛が崩れた事についてパートナーに盛大に抗議をしている。
そんな騒々しい彼女達よりも、シャルはアーシヤの怪我が心配で
ならなかった。

30：最後の試合2

「光の魔法なんて使ったらあなるに決まってるじゃないの！」

「ちょ、ちょつと間違っただけですわ！」

壁の後ろで乱反射する光を防ぎながら、カトウラはコーネリアを激しく責めた。

流石にコーネリアも今のは失敗だったと感じたらしく反論にも勢いが無い。

「とにかく、光は使っちゃ駄目よ！」

「わ、わかりましたわ」

光の槍が全てあちこちにぶつかって完全に消えたのを確かめ、カトウラは壁を消した。

壁に隠れていた間に水の球は随分と彼女らに近づき、その周囲を囲もうとしている。

「核を氷の槍で狙うのよ！」

「ええ！」

二人は次々に氷の魔法を使い、水の球を打ち抜いた。核を砕かれた水の球はパシャン、パシャンと弾けてたちまち消える。

だがアーシャもジェイもそれを手をこまねいて見ているわけではなかった。

「それっ」

ジェイが小さく掛け声をかけて手に持った小さな瓶の中身を水の

球へと振りかけた。

瓶の中身は赤い雨のように水の球達に降りかかる。するとたちまち青みがかった透明だった球が赤く濁り、薄っすらと見え隠れしていた核は濁りの中に姿を隠した。

「なっ!？」

驚く二人の前で半分ほどの水の球が色を変えた。

ジェイが撒いたのはアーシャが常に持っている単なるインクだ。

だがそれは水を濁らせるには十分な役目を果たした。

ぽよぽよと弾んで動く水の球は、その核も当然動きに合わせて揺れている。

核の姿がはつきり見えなければそこに魔法を当てるのは難しい。

「コーネリア、壁を! どうせあれは時間がたてば崩壊するんだからそれなら守るだけよ!」

「わかりましたわ! 清らなる水の流れよ 寄り集いてここに壁を成せ! 壁は凍てつき堅固なる鎧となれ!」

アーシャはそれを見ながら頭の中で次の手を探っていた。

時間稼ぎは上手く行ったが、残った道具はあまり多くない。

今までと同じ道具はやはり対策を考えられているようだから、どれもあり役には立たないだろう。

「ジェイ、袋の中身、全部あけてくれた?」

「ん? ああ、一つ残らず放り込んできたぜ」

「ならそろそろかな……」

堀の水は速度は遅いが常に流れている。そうすると、アレは多分違う場所から出てくるだろう。

アーシャは運が味方についてくれることを祈った。

目の前では、コーネリアが作った背の高い氷の壁が水の球を防いでいる。

氷の壁が相手では水では押しが弱い。

火の球も作れば良かったのだが、この試合場は広いので篝火も随分と遠かった。

それにそろそろあれらは崩壊する時間だ。

あの皮袋の中に一つだけ混じっていた別の種類の魔具は、水の球が崩壊すると同時に発動するようになっていた。

そろそろか、とアーシャが考えた途端、水の球達がぶるぶると震え始めた。

「崩壊しますわ!」

「ええ」

カトウラとコーネリアもそれに気付いた。

ぶるぶると震えた球はパシャンパシャン、と次々音を立てて弾け始めた。

辺りに水が散乱する。

コーネリアが視界を良くしようと氷の結界を解いた　その刹那

ドバァン!

「えっ!?!」

「なっ!?!」

突如、カトウラの後ろの堀が天高く水を噴き上げた。

何が、と二人が振り向く間もなく、噴き上げた水はまるで意志を持つかのようにその首を伸ばし巨大な口を開いた。

「キヤアツ!？」

ゴボン、と水に何かが落ちたような鈍い音がして、カトウラの体が突然その場から消えた。

いや、正確には消えてはいなかった。その体は見えている。

堀から立ち上がった透明な水で出来た、巨大なトカゲのようなものの体内の中に。

カトウラは自分に何が起こったのかわからず、水の中で必死でもがいた。

「トツ、トカゲ!？」

「コーネリアも飲み込んで!」

コーネリアの驚く声に被せるようにアーシャが叫ぶ。

これは水の球と同じ、けれど核には石を使いもう少し複雑な魔法をこめた魔具だ。

基本は水の球と同じなので、できることもごく限られている。

せいぜい簡単な命令を聞き、アーシャが作った護符を目印として持たない近くの人間にじゃれつくだけだ。だがその体は人を軽々と飲み込めるほど大きい。

水のトカゲは重い体を左右に揺らし、カトウラを飲み込んだままコーネリアへと迫り口を開いた。

「くっ、この! 清らなる水の流れよ 寄り集いてここに壁を成せ!
! 壁は凍てつき堅固なる鎧となれ!」

パキンピキン、とコーネリアの前に氷の壁が出来る。

トカゲはその氷の壁をガボン、と飲み込んだ。

その体の腹の辺りで漂うカトウラが揺れ、苦しげに顔を歪めた。氷の壁はパキパキと小さな音を立て、それを溶かそうとする水と拮抗する。

だが冬の気温が幸いしたというべきか、氷はそう簡単には溶けはしなかった。

壁に口を突き刺すようにしてトカゲはもがき、しばし歩みを止めた。

その機を逃さずコーネリアは即座に魔力を高める。

(水の球と違って体が大きい……氷の槍ではだめでしょうね)

カトウラを助けなければ、と彼女はトカゲをきつく睨みつけた。

その腹の近く、カトウラから幾らも離れていない場所に核と思しき石が見える。

制御を間違えれば彼女にも当たってしまうような場所に。

だがコーネリアは迷わなかった。

「母なる大地よ！ここに目覚めその身を起こせ！小さき山はけれど鋭き槍と成る！」

ゴゴゴ、と地面が小さく揺れた。

「地の魔法!？」

アーシャが小さく驚きの声を上げる。

その目の前で、ゴゴン、と鈍い音を立ててトカゲの腹の下の地面が高く盛り上がった。

ザシユッ

下から盛り上がった土の小山は鋭い槍さながらにトカゲの核を打ち抜いた。

バシヤアン、と派手な音と大量の水を撒き散らしてトカゲの体が霧散する。

水の中に浮かんでいたカトウラも地面に投げ出され、激しく咳き込んだ。

「ゴホッ、ゴホゴホッ」

「カトウラ！ 無事ですよ！？」

「う、ゴホッ……なんとか、ね。助かったわ……」

カトウラはゆるゆる頭を振り、濡れそぼった髪をかき上げるとアーシヤをキツと睨んだ。

一方のアーシヤもその視線を受け止めながら苦い思いを噛締めていた。

アーシヤの思惑ではあのまま決めてしまつつもりだったのに上手く行かなかったのだ。

始めからコーネリアも水に飲み込んでしまえば良かったのだが、それにはトカゲの体が小さかった。

闘技場が広くなり、堀からの距離が開いたせいでもある。

第二か第三競技場のままだったら堀からの距離が近く、トカゲはアーシヤの意図した通りの働きをしてくれたはずだった。

コーネリアがどの魔法も平均的に扱えることはわかっていたが、この切り替えの早さも制御の正確さも予想外だった。

それだけ彼女は実力があり、戦いにも慣れてきたという事なのだろう。

第二競技場を使えなくしたことを再び後悔しているアーシヤの前

で、カトウラはゆっくりと立ち上がった。

べったりと顔に張り付く髪も、ずっしりと水を含んで重くなったローブも気持ち悪い。

カトウラにとつてこんな大勢の前で、こんなみっともない姿を晒したのは初めてだった。

なのに何故か不思議と怒りよりも先に闘志のようなものが湧いてくる。

「よくも……私に、水の魔法だなんて。お返しするわ！」

カトウラは濡れた髪をもう一度かきあげ杖を振ると、高く声を張上げた。

「清らかなる水よ！ 我が意志に従いその姿を変えよ！ 密やかに漂い広がるもの 全てを隠す白き闇！」

カトウラの詠唱の直後にシュウ、と幽かな音が聞こえた。けれどもその音はほんの一瞬で、その後は何も変化がない。

だが周囲を警戒して見回したアーシャはすぐに異変に気付いた。辺りが良く見えなくなってきた。景色が白く霞み、全てがぼんやりと遠くなる。

「これは……霧だ」

アーシャは呟くと聖霊石を手に取った。

ブン、と腕を強く振ると風が巻き起こる。

けれど風に煽られた霧は一瞬薄くなっただけですぐにまた濃さを取り戻した。

「アーシャ、これは……」

ジェイの戸惑ったような声が隣から聞こえる。既に彼のその顔も良く見えなくなってきたているくらいだ。

「アーシャ、どうする？ 相手が隠してくれるなら、俺が行くには都合がいいけど……」

ジェイは少しずつ良く見えなくなる少女に小さく囁いた。アーシヤはジェイに頷き返した。

相手の出方がわからないなら今のうちに手を打っておく必要がある。

そう判断したアーシヤは、自分で決着をつけたかったという思いはひとまず置いておく事にした。

霧は雷を通すかもしれないがジェイは自分の精霊魔法なら影響を受けない。

アーシヤは距離が十分開いているし、いざとなれば結界もある。条件は整っている。

(気をつけて)

アーシヤの声に出さない声を聞きながらジェイは慎重に周囲の気配を読み、霧の中に足を踏み出した。

気配を隠したままそつと移動しながら、同時にジェイは少し疑問を感じていた。

一回戦で煙幕に隠れて相手を倒した自分達の試合を彼女達も知っているはずなのだ。

それなのに霧を使って何をするつもりなのか。

早く決着をつけた方が良さそうだ、とジェイが急いだ時、辺りの霧が急に動いた。

アーシャは自分の周りだけ急速に霧が濃くなっていくのに気がついていた。

吸い込む空気が湿り気を帯びて鬱陶しい。霧に囲まれてアーシャの服もじつとりと重さを増した。

それ以上の変化が起こる前に、アーシャは胸のブローチに触れて結界を張った。本来は危険に反応して自動で発動する結界だが、意図して張ることも出来る。

結界の周りを覆う霧を見ながら、アーシャはカトウラの意図を読もうと思いを巡らせた。霧の中で周囲が見えず不利になるのはむしろあちらのチームのはずなのだ。

森の中で育ったアーシャには相手の気配を読むことは難しくはない。武術学部のジェイもまた、そういう訓練を積んでいるので同様だ。

(何かするつもりなのは間違いないけど……)

ジェイの行動を読まれないために陽動で何かするべきかとアーシャが考えた時、突然声が響き霧が動いた。

「水よ、集え！」

風が吹いたかのように、自分を取り巻いていた霧が急に薄くなりジェイは慌てた。

まだカトウラ達の横を回って近づこうと歩き出した所だ。こんなところで姿が見えては行動がばれてしまう。

アーシャの元に戻るべきか、とジェイが考えた次の瞬間、後ろから小さな悲鳴が聞こえた。

「アーシャ！」

振り向いたジェイが見たのは、ジェイの背丈よりも高さのある巨大な水の球の中に包み込まれて浮かび上がる少女の姿だった。

アーシャの周りを色濃く取り巻いていた水が急激に集まりその体を包み込んだのだ。

丁度さつきアーシャの作った水のトカゲがカトウラを飲み込んだのと同じように。

周囲を霧で覆ったのはその意図を隠すため、水分を十分に周囲から集める為の時間稼ぎだった。

ジェイは慌ててその近くに駆け寄ったがアーシャは苦しそうな顔は浮かべていない。どうやら結界を張ってあったためそれごと飲み込まれたらしい。

だが結界に覆われていても何も出来ない事には変わりが無い。本人も困惑した様子で水の中からジェイを見下ろした。

「くそっ！」

ジェイは中のアーシャを引きずり出そうと手を伸ばしかけた。

(駄目！離れて！)

だが頭の中にアーシャの声が響いて慌てて飛び退る。それを追うようにぼよん、と水の球が動いた。

ジェイが下がった場所に転がった水の球は、新たな犠牲者を取り込み損ねてぶるぶると震えた。

「あら、残念」

その声にはジェイはカトウラの方を振り返った。その顔には勝利を

確信した笑顔が浮かんでいる。

「ねえ、イージェイ君。降参しない？ あの子がこうなれば、もう打つ手はないでしょう？」

カトウラは体についた水を振り払いながら甘い声でくすくすと笑った。

確かに、こうなってしまえばジェイには手の出しようがない。

この水の球にはアーシャが使ったような核がある訳ではないから外側から壊すのは難しいはずだ。

これを壊すには当然魔法を使っている本人を倒すしかないのだがジェイには許される攻撃の幅が少ない。

カトウラの脇にいるコーネリアは杖を構えて防御に怠りがない。

二人を殴り倒せばこちらの失格だし、精霊魔法は防がれるだろう。打開策が見出せず焦ったジェイの背中を汗が伝う。

カトウラは焦りの浮かぶジェイの顔を見て更に楽しそうな顔をした。

「これが所詮魔具の限界ね。広い結界が張れないならそれごと飲み込んでしまえばどうという事もないわ。もう手も足も出せないじゃない」

「イージェイ様、降参して下さいな。彼女の結界だって、いつまで持つのかわかりませんかよ？」

コーネリアも言い募ったが、ジェイは頷く訳にはいかない。それを決めるのは彼ではないのだ。

キツと二人を睨みつけた時、アーシャが小さく身動ぎした。

(ジェイ)

「！」

ジェイの脳裏に小さな声が聞こえ、ジェイは表情を動かさずその声に意識を集中した。

（右手に力を込めて）

ジェイは言われるままに右手に意識を集中する。

（叩き壊してね）

「え？」

思わず声を出して振り返った瞬間、アーシャは水の中から笑って手を振った。

「アーシャ！？」

パキン、と高い音が響いたと思った瞬間、透明だった水の球は瞬時に白く染まった。

いや、白く染まったのではなかった。白くなった球は激しい冷気を発している。

なんとアーシャが中からその水を凍らせたのだ。

「アーシャ、馬鹿っ！！！」

ジェイは右手をその球に向かって振り上げた。

ドゴン、と鈍い音がして氷の球は一気に砕けた。

破片が激しく飛び散り地面へと落ちる。

「アーシャ！」

破片の中から現れた小柄な体は弾け飛んだ氷と共に投げ出され、どき、と音を立てて地面に転がった。

ジェイは慌てて少女の元へと駆け寄った。

助け起してその顔を見ると氷の破片がぶつかったのか、額にはうつすらと血が滲み、口の辺りもかすかに赤く腫れている。

「アーシャ、おい！しっかりしろ！」

少女の体を抱き起こしたジェイはその体の異様な冷たさに息を呑んだ。

「アーシャ！」

「う、らいじよぶ……」

小さな声が漏れてジェイはほっと胸を撫で下ろす。

アーシャはぶるぶると頭を振ると、口の中からぺっと氷を吐き出した。

その体のあちこちに無数の氷の欠片がつき、髪の毛も半分凍ってしまっている。

だがそんな事はどうでもいいとばかりにアーシャは左手を持ち上げ、そこにリボンがちゃんと結ばれている事を確認してほっと安堵の息を吐いた。

「良かった、まだ切れてなかった……」

これならまだ戦える。

そう呟くとアーシャは冷たく凍えた体を不自由そうに動かして立ち上がった。

ジェイはその冷えた体を支えたがアーシャの足元はまだふらついていた。

それでも少女は力を込めて立ち上がり、前に顔を向けた。

そして苦い顔をしたカトウラと真っ直ぐに視線をぶつけ合う。

カトウラは絶対の自信があつた魔法を打ち破られた悔しさを顔に滲ませていた。

「何をしたの。どうやって……」

「……水の中で結界を解いて、魔具を使っただけ。結界があると使えないからね。」

ジェイが壊してくるって判つてたから……リボンが切れるかどうかは賭けだったけど」

自分の体ごと水を凍りつかせるといふ危険行為を平然としてのけた少女にカトウラは眉を寄せた。

そこまでして勝ちたいのかと馬鹿馬鹿しくも思う。だがカトウラが感じた気持ちはそれだけではなかった。

少女の執念とも言えるような決断に己の魔法が破られた悔しさを覚え、けれど同時に何故か感嘆のような思いが胸の奥から湧き上がる。

それを己の内に確かに認めて、カトウラは思わず唇を嚙締め俯いた。

「貴女が……しぶといのは良くわかったわ」

そういうとカトウラは自分のローブのポケットを探った。そしてそこからペンダントを二つと、魔法陣の描かれた札を取り出した。

「コーネリア、これを使って。水の二級魔法を使っわ」

「えっ！？ でも私はまだ安定して使えるのは……どうにか三級ま

ですわよ!？」

「私もよ。だからそれを使うの。＜荒ぶる川の流れ＞の魔法、呪文や現象の規模くらい憶えてるでしょ？」

「それは憶えてますけど……けれど、これは」

「いいから!」

渋るコーネリアに護符を押し付けるとカトウラはアーシャに向き直った。

「このまま戦い続けても埒があかないから次で決めるわ。私達は、今使える最高の魔法を使う」

「……護符の力を使って？」

「何とでも言いなさい。ルール違反じゃないもの。護符に頼って力を底上げしたって笑ってもいいわよ」

それほどカトウラは本気だという事だ。なりふり構わず、ただ勝ちたいと思っているのだ。

「呪文を唱えて無防備になった時の為に結界札まで用意しておいたのよ、私。ほんと、滑稽だわね」

手に持った札をひらひらさせながらカトウラは自嘲するような笑みを浮かべた。

魔技師を馬鹿にしていた彼女なのに、決して使わないと思いつつも結局はそんな準備をしてきている。

そこまですて勝ちたいという思いが自分の中にあること自体が、カトウラには何よりの驚きでもあった。

「どんな手を使ってもいいわ。正面から勝負しましょう。防げるものなら、防いで見せて」

口元に自嘲の笑みを浮かべながらも、カトウラの瞳は真剣だった。その目は真っ直ぐにアーシャに向かい、彼女にも本気を出せと訴えかけている。

カトウラはもう目の前の少女を馬鹿にしていなかった。

「わかった」

アーシャもまたそれに応えた。

応えなければきつと解り合えないのだとわかったから。

カトウラは頷くと、もう一度自分のパートナーへと視線を戻した。

コーネリアに向けたその顔はもう笑っていなかった。

真っ直ぐな視線だけが静かに交差する。

「貴女の信条じゃないことは解ってるわ。でも、お願い。協力して欲しいの」

「……わかりましたわ。私もあの子が本気を出すなら望む所ですもの」

コーネリアは笑顔で応えると護符を首にかけた。そして少女二人は強力な魔法を使う為に少し位置を下がる。

アーシャとジェイも試合場の中央から大分距離をとった。

いつの間にか試合場はシンと静まり返っている。

誰もが息を吞んで彼らの最後の勝負を見つめていた。

31：最後の試合3

アーシャは固い表情で横にいたジェイに声を掛けた。

「ジェイ、私が合図するまで、私の後ろにいて。絶対前に出ないでね」

「ああ、わかった」

「それと……聖霊石を使って」

「本気ですか？」

「うん、全開で。また氷を割って欲しいんだ。今度はきつと、大変だと思うけど……よろしくね」

アーシャはそう言うと、深く息を吸い呼吸を整えた。けれどその体内の魔力は一向に循環せず、高まってこない。

ズキンズキンと足や頭、打った体のあちこちが痛みを訴えている。冷え切った体は感覚がまだ完全に戻っていない。

それらの要因が足を引っぱり、自分の体内の魔力を上手く回せない状態である事を少女は自覚していた。

魔力の消費が少ない精霊魔法といっても、強い精霊を呼ぶ為にはそれなりの量の魔力が必要になる。

だが今の状態ではとてもそれに足るだけの魔力を放出できそうにない。

(修行不足かな……)

アーシャはそう考えながら、胸のブローチを外して地面に置いて片膝をつき身を屈めた。

そして左手に氷結の魔具を持ち、右手で腰に刺したナイフを抜く。ジェイはしゃがんでいる少女の後ろに下がった。

アーシャは地面に置いたブローチをしばし眺めた。
試合場の向こう端ではカトウラとコーネリアが呪文の詠唱を始めている。

使いこなせない魔法を、力を底上げして無理に使うにはどうしても呪文が長くなる。

少女は彼女らの様子を時々見ながら慎重にタイミングを測った。
そして胸の奥で精霊達に呼びかける。

(ごめん、皆……力を貸して)

アーシャは精霊を呼ぶつもりだった。本気を見せると言ったカトウラに伝えて。

だが、二人掛けの魔法を防ぐほどの精霊魔法となるとかなりの力が要るだろう。

恐らく近くにいてすぐに伝えてくれる精霊では太刀打ちできない。
強い精霊を遠くから呼ぶ必要がある。

(ごめんね……)

アーシャは自分がこれからしようとしていることを、目の前のブローチに向かって謝った。

これはアーシャがこの学園に来て初めて作った魔具だった。

時間を掛けて少しずつ改良してきた物だからそれなりに思い入れもある。

『そこまでして得たいものがあるのかね?』

ライラスの祖父の声が胸に蘇る。

それでも、譲れないのだ。大切な物を失っても、なお譲れないものがある。

硬い表情を浮かべたその頬を風がふわりと撫でた。

周りに集まってきた風の精霊達が、気を利かせたのか向こうから風を吹かせてくれたのだ。

冷たいはずのその風に、アーシャは一瞬夏の香りを感じたような気がした。

多分それは少女の心の中を過ぎったものだったのだろう。体に感じる冬の風はもちろん冷たいままだ。

けれどアーシャはその風を受けながら、夏の森を思い出していた。初めて仲間達と過ごした眩しかった夏は、今も目の前にあるかのように思い出せる。

いくら記憶を辿っても楽しいことしか出てこない。

今のアーシャにはそれが全てだった。

自分の意思を曲げてても、他の物を捨てても、ただそれだけがあればいい。

「……来年も、きっと」

「え？」

小さく呟いた声にジェイが首を傾げたが、アーシャはそれ以上語らなかつた。

ただ、その決意だけを内に隠して。

冷たい風に乗ってカトウラとコーネリアの唱える呪文が幽かに耳に届く。

「ぶる川よ 大いなる流れよ 大地を削るその激しき流れを

」

詠唱がもうすぐ終わる、と判断したアーシャは大きく息を吸い込んだ。

「ジェイ、行くよ！」
「おう！」

その言葉の直後、アーシャはナイフを持った手をブローチに向かつて思い切り振り下ろした。

ナイフの石突が中心の青い石へと真つ直ぐに向かう。

パンツ！

石が碎ける音は、思いのほか軽かった。

青い欠片が飛び散り、碎けた石の中心からそこに蓄積されていた魔力が迸る。

それを追うように少女の声が高らかに響き渡った。

『その豊かな髪は青くたなびき その瞳は深遠の碧を映す

白き足を揺らし 水煙を纏いて笑え 来たれ我が友 瀑布に踊る

青き乙女！』

アーシャの手元で碎けた石が青い光を放つ。光はたちまち少女の体を包み込んだ。

その耳元で誰かがくすくすと楽しげに笑う。

『流れよ 満ちよ、ここに溢れよ！』

突然、足元に川が溢れた。

アーシャの前方から突如として溢れた大量の水は堰を切ったかのように激しい音を立てて試合場の中央へ向かって流れ出す。

その大波の向こうでは同じように呪文を唱え終えたカトウラ達が生み出した大量の水がこちらへと向かってきている。

ぶつかるとジェイは息を呑んだ。

『抑えて!』

アーシャが叫んだ言葉に従い激しい二つの波は真正面からぶつかりあった。

ドオオン!!

凄まじい音と飛沫が辺りに弾け、周囲の全てを水浸しにする。

『上へ!』

アーシャはしゃがんだまま右手で天を指差した。

激しくぶつかり合った二つの川の流れは一つに溶け合い、その言葉に従って方向を変えた。

轟音と共に水が少しずつ天へ向かって流れていく。

目の前に現れたありえないような光景に誰もが息を呑んだ。

試合場の中央にはなんと、地面から始まり上へと伸びる巨大な滝が現れていた。

「ジェイ、前に走って!」

「お、おう!」

アーシャの合図にジェイは足首を浸す水の中を走り始めた。だが水が絡み付いて思うように走れない。

ジェイは舌打ちをすると、低く言葉を紡いだ。

「求めるのは守る為の強さ!」

ぐん、と足が軽くなり激しく水を蹴る。呼び出した力を足に振り分けて走るジエイは、見る見るうちに試合場の中央にそびえ立つ滝に近づいた。

「ジエイ、跳んで！」

その声に従ってジエイは地面を強く蹴り、高く飛び上がった。

「凍てつけ！」

アーシャはしゃがんだまま膝まで水に浸かり、左手を流れに浸して高く叫んだ。

水に浸した手の中から強烈な白い光がこぼれる。

「駄目だ！ やめろ、グラウル！」

その光を見たライラスは思わず席を立って声を上げた。

けれどその声は試合場の少女には届かない。もし届いていたとしても、きつと何の意味もなさなかつただろう。

滝の向こう側ではカトウラとコーネリアが天へと昇る滝を見上げながら声を上げた。

「み、水が！」

「凍る！？」

天まで届くかに見えた滝が突如として下の方から白く染まっ
ていく。

パキパキと音を立てて水の壁は氷の壁へとほんの一瞬で姿を
変える。

アーシャはもう一度高く叫んだ。

「ジェイ！」

「うおりやああっ！！！」

ジェイは高く高く飛び上がり、その拳を振り上げた。

「いつけええっ！」

ドゴオン！！

激しい破壊音と共に氷の壁に無数のひびが走る。

ジェイの渾身の一撃は氷の壁の下の方を完全に砕き、辺りに氷の塊を散らした。

そしてその衝撃は支える土台を失った壁の上部へと走る。

ゴゴゴゴゴ、と恐ろしい音が周囲に響いた。

「カトウラ、下がって！」

ギシギシと音を立てて氷がひび割れ、その欠片が周囲に次々と落ちる。

カトウラとコーネリアは慌てて試合場から逃げ出そうとしたが、巨大な氷の塊は二人に容赦なく襲い掛かった。

「キヤア！」

「コーネリア！」

ドオン、と二人の上に巨大な氷が落ちかかる。

だがその氷は何かに弾かれたようにバンと碎け散った。そして同時に二人の手首のリボンがぷつんと千切れた。

「っ！」

だがそれに驚く間もなく、次の氷の塊が降って来る。もう逃げる場所も打つ手もない。二人はお互いの体を強く抱きかかえしやがみこんだ。

『！』

ズドン、ドオン、と恐ろしい音を立てて氷の壁は次々にその身を崩して地面に落とした。

辺りには土と砕けた氷の粒が舞い試合場を白く煙らせる。観客席ではシャルもディーンもライラスも立ち上がり、息を呑んでその様を見つめていた。

誰もが微動だにせず白い煙の向こうをひたと見つめる。やがて、ゴゴン、と最後の氷の塊が鈍い音を響かせて落ち、試合場は静まり返った。

「……？」

いつまで経っても覚悟した衝撃が訪れない事に、カトウラは固く瞑っていた目をそろそろと開けた。

濡れたままの体は辺りを漂う冷気に晒されて冷たく気持ちが悪いが、それ以外に痛いところなどはない。

辺りを見回したカトウラはその視線を上に向け、大きく目を見開いた。

「な……！？ 何、これ！」

その声にコーネリアもようやく目を開いた。隣のカトウラを見ると、彼女は何かに驚いたように目を見開いたまま上を見上げていた。

その視線を追ってコーネリアも顔を動かさず。そしてそのまま彼女も目を見開いて凍りついた。

コーネリアの目に一番最初に入ったもの、それは自分達を覆うようにそびえる巨大な氷の塊だった。

彼女達のすぐ傍まで迫るその氷の壁はどうしてかそれ以上倒れる気配もなく、むしろ二人を守るかのようにぽっかりと開けた空間を作り出している。

「な、何ですのこれは……偶然？」

「……そうだったら、すごいわね」

目の前の氷の壁は地面から突き出て斜めにそびえ、その端は闘技場の壁にぶつかって完全にくっついている。

ここからではわからないが、落ちてくる氷の塊を防いでくれたのだからその厚みもかなりのものだろう。

それは偶然にしては不自然すぎた。

そしてそれをやったのは自分達ではありえない。

それならば誰が、と考えれば選択肢はごく限られている。

氷が崩れてきた時に一瞬間こえた気がした高い声はあの少女のものではなかったか。

「……ふ」

「ふ？」

「ふふ……ふふふ、あはは、あっははは！」

「カ、カトウラ？」

「あはは……はは、もう、負けちゃったわ。ほんと、最悪！何なのよもう！」

片手で顔を覆い、最悪だと文句を言いながらカトウラはくすくすと笑い続けた。

だがその顔は今までの彼女とは違い、すっかり毒気が抜けたような、年相応の明るい笑顔だった。

戸惑っていたコーネリアもそれを見て、やがて呆れたような笑顔を浮かべた。

二人の少女が笑い合っていた頃、氷の壁の向こうではジェイが体を起こしていた。

壁を砕いた後、氷の崩落からジェイの身を守ってくれたのは、やはり地面から突然突き出た氷の壁だった。

その下でうずくまって崩落をやり過ぎたは良いが、周囲はひどい有様だ。

氷の下から無事に姿を見せたジェイに、観客席からはどよめきが漏れるがそんなことに構ってはいられなかった。

「アーシャ！」

ジェイは辺りに視線を走らせ、試合場の端に探し物を見つけた。

アーシャの辺りには氷の欠片は落ちてこなかったようだが、少女はさつきと同じくしゃがみこんだままだ。ジェイは慌てて動かない少女の下へと駆けつけた。

「アーシャ、無事か!？」

アーシャはその体の半分を氷の中に埋めたまま、小さく頷いた。だがその顔色はひどく悪い。周囲は未だ吐く息が白くなるほどの冷気に包まれていた。

「待ってる、今出してやるから」

「止める!」

「駄目よ、ジエイ!」

拳を振り上げかけたジエイを鋭い声が止めた。声の方を振り向くと、シャルとディーンが観客席をぐるりと回って二人の近くへ走ってくる場所だった。

「馬鹿!壊したら駄目なのよ!」

シャルはそう叫ぶと試合場の地面の氷の無い場所を選んで回り込み、客席の手すりに足をかけた。

「えい!」

最近聖霊石のお陰で身軽になったシャルは勢いよく堀を飛び越え試合場に降り立った。ディーンも次いで飛び降りる。

二人はバタバタとアーシャの下へと走り、その顔を覗き込んだ。少女は青ざめた顔で歯を食いしばりガチガチと震えていた。

「ジエイ、下がれ。今氷を砕けばアルシエレイアの手足がどうなるかわからない。これは溶かすしかない」

「ええっ!?!」

『猛々しき炎の精霊よ 我に応え我が下へ来たれ!』

シャルは高い声で精霊を呼ぶとその手をアーシャの手が埋まる氷の上にピタリと当てた。

「氷を溶かして、決してアーシャを傷つけないように」

シュウ、と辺りから湯気が立ち上る。願いを受けた精霊達はじわじわと少女の周りの氷を溶かし出した。

「ジェイ、救護班を呼んで来い。魔法医をここに来させる」

「わ、わかった」

ジェイは氷の上をヨロヨロと走り、救護班の待機所へと向かった。走りながら邪魔な氷の塊を次々に砕いて道を拓く。

シャルは氷を溶かして少しずつ顕わになるアーシャの手足を見て息を呑んだ。

その細い手足はひどく青白い色に変わり、所々に水泡が浮かんでいる。ディーンが肌が見えている部分にそつと指先で触れると固い感触がした。

「やはり……凍傷だ」

ディーンの判断にシャルは焦った。

「すぐ暖めなきゃ！」

「まだ駄目だ。まずはアーシャの体を出して、それから魔法医の治療と同時に進むべきだ」

「でも！」

「いいから黙って氷を溶かせ！」

冷静に見えたディーンの状態が腹立たしく、なおも言い募るうとしたシャルは驚いて言葉を止めた。

驚きに意識が逸れかけたのを慌てて引き戻し、言われた通りにアーシャの周りの氷を溶かす事に専念する。

しばらくそれを続け、アーシャの体はようやく氷から開放された。だが手足は固くこわばったままで、このままでは動かすのも恐ろしい。

右腕は水につけていなかったため無事だったが、左腕と両足は完全に感覚もないらしい。

アーシャは白い息を吐きながら、薄っすらと目を開けた。

「……だいじょぶ、だから」

「どこがよー！」

シャルが思わず怒鳴ったが、アーシャはそれ以上何も言わず薄く笑みすら浮かべて見せた。

だがその体は相変わらず小さく震え続けていて、二人は気が気ではない。

「服や靴は脱がさなくていいの？」

「駄目だ、脱がせば皮膚が剥かれる。そのままがいい」

「わかったわ……ちょっと、救護班はまだなの！？」

シャルは何もしてやれない状況に苛立って振り返った。

すると試合場の向こうから意外な人物が近づいてくるのが目に入った。

「何しに来たのよー！」

氷を乗り越えてこちら側にやって来たのはカトウラとコーネリア

だった。

二人はよたよたと氷の上を歩いて三人の傍にくると倒れたままの少女を覗き込んだ。

「ひどいの？」

カトウラはシャルの怒声には答えず、青ざめたアーシヤを見つめその手足に視線を走らせる。

「凍傷ね……コーネリア、貴女癒しの魔法使える？」

「光の精霊魔法でなら少し。魔力はもうあまり残っていませんが…

…まあ何とかありますわ」

「じゃあお願い。私は護符で何とかするわ」

「ちよつと、何なのあんた達！？」

声を荒げたシャルにカトウラは視線を向けた。

「凍傷は早く治療しないと手足を切り落とす事になるわ。

救護班は氷で扉がなかなか開かないし、狭い隙間からじゃ担架も運べなくて立ち往生してる。今ここでぐだぐだ言ってる場合じゃないんじゃない？」

ぐ、と言葉に詰まったシャルからつんと顔を逸らすとカトウラはディーンに視線を向けた。

「シャルフィーナが凍傷を溶かして、私とコーネリアが魔法を掛けるわ。けれどもかなりの疼痛があるはずだから、この子を眠らせられると助かるんだけど」

「……わかった」

ディーンは頷くと闇の精霊を呼んだ。コーネリアもその間に光の精霊を呼ぶ。

四人はアーシャの体を囲んでその場にしゃがみこんだ。

「シャルフィーナ、人が高熱を出した時くらいの温度で一気に入にこの子の手足を溶かして。そうね……お風呂くらいかしら。高すぎたら駄目よ」

「そんな温度で大丈夫なの？」

「大丈夫。間違いないわ。水の大陸の冬はこことは比較にならないくらい厳しいの。凍傷の対策は子供の頃から習うのよ」

ディーンの影響がゆらりと動く。ディーンはそれを確認しながら、片手でアーシャの目を覆った。

「しばしの安らかな眠りを。現から切り離され、何者にも脅かさぬ深い眠りにつけ。朝の光を浴びるまで」

ふつとアーシャの体から力が抜けた。ディーンはくたたりと落ちた少女の頭を支え、カトウラへと視線を向けた。

カトウラは頷くと真剣な目でシャルを見た。

「溶かして。ただし、くれぐれも加減を間違えないでね」
「わかったわ」

シャルは神経を集中してアーシャの体に手をかざした。高熱を出した程度、お風呂くらい、と何度も繰り返しながら精霊に願う。

ばたばたと音がしてディーンが振り向くと、客席から遠回りで降りてきたライラスが四人の下へ駆けつけるところだった。そしてアーシャの手足を見て息を呑む。

「なんて使い方を……！」
「しっ、静かに！」

カトウラに遮られライラスは黙った。

シャルの願いを聞き届けた火の精霊はアーシャの手足をどんと溶かしていく。その手足はじわじわと柔らかさを取り戻していった。

「コーネリア、やるわよ」

「わかりましたわ」

コーネリアは頷くと光の精霊に願う。

「光の精霊よ その聖なる光で傷つきし者を照らせ その大いなる福音を彼の者に」

「清らかなる水よ その水は命の流れ 傷つきしこの体を癒し 赤き水を再び巡らせよ」

それぞれがかざした手元に赤と青と白の光が瞬く。

アーシャの手足は少しずつ元の柔らかさと赤みを取り戻していく。

デインはそれを見て、緊張の為にずっと詰めていた息を深く吐き出した。

だが、カトウラは魔法に集中しながらひどい眩暈を感じていた。癒しの魔法は魔力の消費が激しい。

まだ完全に癒しきれていないのに魔力が切れてしまいそうになり、ぶるぶると小さく頭を振った。

シャルが溶かし、コーネリアが治した組織に自分が血液を送らなければいけないのだ。

ここで止める訳にはいかない、とカトウラは歯を食いしばった。

突然チャリ、と小さな音がカトウラの首元で響いた。

彼女が驚いて首元を見ると見慣れない形の護符が下がっている。

首の後ろで誰かが留め金を止める気配がし、ふいに眩暈が軽くなつた。

「これ使えよ。魔力が足りなくても補助してくれる。」

カトウラの後ろから聞こえたのはライラスの声だった。

その言葉通り、ライラスの護符はチラチラと小さな光を灯しながらカトウラの魔法を補助してくれる。

眩暈が消えたどころか、徐々に体の奥から力が湧いてくるような気さえする。

カトウラ自身も幾つも市販の補助用の魔具を身に着けているのに、そのどれよりも効果が高い。

軽い驚きを感じながらカトウラは魔法に最後の力を込めた。

どれだけの時間が経ったのか、カトウラは少女の体がすっかり元の肌の色を取り戻したのを確かめてから手を離れた。

小さな体からはいつの間にか震えも消えている。

もう大丈夫だ、とカトウラは安堵の息を吐き出した。

途端にぐらりと眩暈に襲われ後ろに倒れ掛かった。

だが、トン、と何かにぶつかってその体が止まる。

後ろにはライラスが黙って立ち、屈みこんでカトウラの肩を支えてくれていた。

気がつけば周囲には戻ってきたジェイと、やっと出てこれたのにやる事がなくなつた救護班と、試合の終了を告げるべきか悩む審判が立っている。

輪の向こうには駆けつけた学園長やタウロー教授らの姿も見えた。学園長は深く優しい笑みを浮かべ、そっと審判を促した。

審判はジェイとアーシャの腕にまだ結ばれたままのリボンと、カトウラとコーネリアの何もない腕を確かめて旗を高く掲げた。

『勝者、グラウル・イージェイ組!』

途端会場は割れんばかりの拍手と歓声に包まれた。

息を潜めて成り行きを見守っていた観客達は誰一人として席を立つていなかったのだ。

負けたカトウラとコーネリアにも惜しめない称賛が浴びせられる。

「よくがんばった。素晴らしい試合じゃったよ」

学園長は戸惑う二人の少女に優しく声をかけた。

「そして、良くこの子を助けてくれた。立派な行いじゃった」

「と、当然の事をしただけですわ……」

「……元はといえば、先にあの子に助けられたのは私達です」

学園長は二人の言葉に更に笑顔を見せた。気付けば周りの誰もが彼女達に笑顔を向けている。

シャルもティーンもジェイも、ほっとした笑顔で二人に頭を下げた。

「ありがとう……アーシャを助けてくれて」

「感謝する」

「ありがとな!」

カトウラの後ろにいたライラスも何度も頷き、深く頭を下げた。

「ほんとに良かったよ……ありがとう」

コーネリアは称賛を浴び、感謝されて感動したのか、顔と目を赤く染めて口の中でもごもごも何か呟いた。

カトウラも彼らの笑顔を真っ直ぐ見ることが出来ず、思わず俯いてしまう。

そんな様子に笑顔を浮かべながら学園長はパンパンと手を叩いた。

「さ、救護班の諸君。グラウル君を医務室へ。彼女達が治療してくれたが凍傷は後も怖い。ちゃんと検査してあげておくれ」

「はい！」

それを皮切りに試合場にはわらわらと会場設営係が後始末の為に入ってくる。

運ばれるアーシャに付き添って皆も会場を後にした。その背中を途切れることのない拍手や歓声が追う。

誰もが今日この場で行われた試合を心から称えていた。

こうして、前代未聞だらけの三学年ペア部門はアーシャ達の勝利で幕を閉じた。

31：最後の試合3（後書き）

多分次の更新で二部は終わりです。

今週半ばくらいにまとめて更新する予定でいます。

すみません、半ばに更新予定でしたが、諸事情でやはり週末になりそうです。

いつも通りくらいの予定かと。

暫くお待ち下さい。

32：大切なもの

『アーシャ、お前は今幸せかのう？』

『……しあわせ？ なに？』

『何ときたか……。ここに自分が生きているという事を、どう思うね？』

『……よくわかんない』

『ううむ……。では、何か好きなものはあるかね？ 大切なものは？』

『んと……。じいちゃん。じいちゃんがすき。あと、もりもすき。ど

つちも、たいせ、っ？』

『そうか』

『おっきくなったら、じいちゃんみたいにこのもりをまもるんだ。』

『じいちゃんといっしょに』

『そうかそうか。うん、そりゃ楽しみじゃ。では、もうそろそろお休み。寝る子は育つと言うからのう……。』

朝の光の中で鳴きかわす鳥の音がする。どの声も冬らしくごく控えめだ。

顔を照らす朝日が眩しくてアーシャはごろりと寝返りを打ち、毛布の中にもそもそと隠れた。

体温で温まった毛布がとても心地いい。

冬の空気の中で毛布にくるまって眠るのは至福の時間だと感じられて深く息を吐いた。

夢うつつの中で、こんな風に寝坊するのは随分久しぶりだとぼんやり思った。

最近ずっと忙しかったから睡眠時間が随分少ない日が続いていた。

こうして寝坊していると毛布のぬくもりがその疲れをゆっくりと癒してくれる気がする。

そう、最近ずっと忙しかったから……そこまで考えてアーシャはパチリと目を開いた。

「……あれ？ 忙し……かった？」

自分の思考が行き着いた言葉に疑問を覚えて、アーシャは天井に向かつて呟いた。

ゆっくりと半身を起こして辺りを見回して首を傾げる。

壁や天井が白く塗られた簡素で清潔そうな部屋は、どう見てもアーシャの家の寝室ではなかった。

白が基調のこの部屋を、つい最近見た記憶が少女にはあった。

「医務棟の……個室、かな？」

医務棟に入っていたライラスの様子を見に来た時に、ここと同じような部屋を見た気がした。

「でも何でだろ……昨日はあれからどうしたんだっけ……？」

自分の体を見下ろせば患者用の寝巻きを着ているのが目に入る。

少し不安になって体を捻ってあちこち見回したがどこにも異変はなかった。

アーシャは自分が何故こんな格好でここにいるのかわからず、昨日あった出来事を指折り数えながら思い返した。

「午前中は準決勝で、色々あって……午後に決勝したよね。で、足を怪我したけど後は……あっ」

昨日自分が何をどうしたのかを思い出してアーシャは思わず眉をしかめた。それから慌てて辺りを見回した。

ベッドの脇の机の上に衣服が入った籠が置いてある。これを着てそっと逃げるべきかと一瞬本気で考える。

「…………絶対怒られる、よね」

ベッドから降りて裸足のままぺたぺたと窓際に寄ってカーテンを開いた。

「う…………」

下を見下ろすと、残念ながらそこは三階だった。

カタン、と窓を開いて下を見下ろすと冷たい風が入り込んで思わず首をすくめた。

窓枠や樋を伝って降りられない事はなさそうだが、窓の外の木々はすっかり葉を落としている季節だ。きつと降りている途中で誰かに見つかるだろう。

ぐつと身を乗り出して下を見ると、窓の下は小さな道が一本あるだけで芝生の広場になっている。障害物は無さそうだった。

「これなら魔法使って飛び降りれば…………」

「どこから飛び降りるんだ？」

後ろから響いた声に、窓から下を覗き込んだままのアーシャは力チリと凍りついた。

「ノックしても返事がないからまだ寝ているのかと思えば…………飛び降りてどうするんだ全く」

逃亡する事ばかり考えてノックにも後ろに来たディーンの存在にも全く気付かなかった。最近自分は少し油断しすぎなのだろうか。アーシャは胸の奥で反省した。

それだけ彼らの近くにいたことが当たり前になりつつあるということかもしれない。

アーシャが固まったままそんな思考に沈んでいると後ろからぐいと引っ張られた。

「ひゃ」

「冷えるだろう」

ディーンはアーシャの首根っこを引っ張って部屋の中に引き戻すと窓をパタンと閉めた。

「具合は？」

「だ、大丈夫……元気」

そうか、とディーンは頷いてアーシャを半ば引きずるようにしてベッドに戻した。

「裸足で歩くな。冷える」

「うん……あ、あの、ディーン……試合、は？」

ベッドに腰掛け、試合はどうなったのかとおずおずと尋ねるアーシャにディーンはため息を一つ吐いてから頷いた。

「君とジェイが勝った。カトウラとコーネリアのリボンが切れていたので」

「そっか……良かったあ」

だが、ほつと安堵の息を吐いた少女をディーンはきつく睨みつけた。

「良くない」

「うっ」

言われると思っていた事を言われてアーシャは思わず首をすくめる。

「勝った方がひどい傷を負って医務棟に運び込まれるなど前代未聞だ。しかも、ライラスに聞いたところでは君はああなると判っていたはずだと聞いた」

「ちょ、ちょっと冷たい思いするっというだけの予定だったんだよ」
「ほっ」

ひどく冷たい声音で静かに言われてアーシャは思わず白旗を揚げたい気持ちに駆られた。

「う……嘘……ごめん。どうなるかわかってたけど、でも、救護班もいるし、あれしか手がないと思ったから……」

しょんぼりとうなだれた少女に、ディーンはもう一度ため息を吐くと首を横に振った。

「君を助けたのは救護班じゃない。シャルと、カトウラとコーネリアだ。後で礼を言っておくといい。そろそろ彼女らの試合も終わる頃だろうし」

「え、カトウラとコーネリア？ え、え？ シャルの試合ってもう終わるの？」

アーシャは慌てて窓の外をもう一度振り返った。
弱い日差しを朝日だと思ったのだが、ではあれは夕日だったのか。
アーシャの疑問にディーンは頷いた。

「君は二日も寝ていたんだ。医者によれば積み重なった寝不足と疲労によるものだろうと言う事だったが……私の魔法が失敗したのかと心配した」

「二日……じゃあシャルの試合は……」
「今日一つ目の個人部門がもうそろそろ終わる頃だな」

そんなあ、とアーシャは悲壮な声を上げた。

楽しみにしていたシャルの試合を見損ねてしまった事にがっくりと肩を落とす。

それを見てディーンは苦笑を浮かべた。

「まだ他の試合がある。そうがっかりしなくてもいい」

「うん……」

「それよりも、そろそろ来るから言い訳を考えた方が良い」
「え？」

その言葉が終わるか終わらないかの間に、バタバタと激しく廊下を走る音と、それを咎める女性の声、慌てて謝っているらしい少年の声が廊下から響いた。

「アーシャ!!」

ゴン、バン！ と不可思議な音を立てて扉が突然開いた。

アーシャは驚いて顔を上げる間もなく、飛び込んできた何かにぎゅう、と絡みつかれて締め上げられた。

「ふぎや!？」

「もう! アーシャの馬鹿! 馬鹿馬鹿馬鹿!」

音高く扉を叩き開け(ノックもしたつもりだったらしい)、部屋の中に飛び込んでアーシャを捕まえ抱きしめたのはもちろんシャルだった。

シャルは小柄な少女の体をぎゅうぎゅうと締め上げる勢いで抱きつき、しきりに馬鹿! と言い放つ。

アーシャは手荒い抱擁に目を白黒させてじたばたと手を振った。

「シャル、その辺にしてやれよ。アーシャが窒息するぞ」

後ろから聞こえた声にシャルはハツとし、力を緩めて身を起こした。

アーシャは既にぐったりとしている。

シャルは慌ててアーシャをかくかくと揺すった。

「アーシャ! しっかりして!」

「逆効果だろそれ……」

「トドメを刺してどうする」

数分後、息を吹き返したアーシャは三人の視線を浴びながら、ベッドの上にちょこんと座って小さくなっていった。

ベッドの脇に立った三人が浮かべた厳しい表情に、アーシャはとりあえず言つべきである言葉を呟いた。

「い……いめん?」

「いめんじゃないの! もう!」

シャルは腕を組んだまま深いため息を吐いた。そのため息の深さにアーシャが思わず身を竦める。

「アーシャは、何で私が怒ってるかわかってるの!？」

「え、えと……危険な事したから、かな」

「それだけじゃないわ」

「え、じゃあ……えーと、シャルと組まなかったから？ 勝手に申し込んだから、とか？」

「それもあるわね」

「まだあるの……？ んと、じゃあ賭けの事かな」

「賭け？」

しまった、とアーシャは思わず口を押さえた。シャルはその話をまだ知らなかったらしい。

シャルがじろりとジェイを睨むと、ジェイは両手を挙げて降参の意思を示した。

「俺も良く知らないんだって。カトウラが言ってただけだから……なんか、アーシャが負けたら俺達の班から抜けるって賭けをしたっていう話でさ」

「ついでに言つと負けたらもう我々に近づかないというのもあったらしいぞ」

アーシャは慌てて二人を遮ろうとしたが座ったままでは背の高い二人の口には手が届かない。仕方なく小さく身を縮めて次に落ちるであろう雷に備えた。

「アーシャ!」

「うっ」

「そういう大事な事をどうして言わないの！ 苛められてた事も魔技科で揉めた事も言わないし、勝手に出場決めてそんな賭けをしちやうし、自分の身を顧みず危険な魔具を使って、おまけに人を庇って自分は放っておいて怪我するなんて！ そういうの全部、私は怒ってるの！」

シャルは一息で怒鳴るとせえせえと荒い息を吐いた。
ディーンもジェイも彼女の激情を止めようとはしなかった。

二人とも黙っているが同じ気持ちだったからだ。

アーシャはしょんぼりとうなだれて沈黙する。何から謝ればいいのかわからなかった。

黙ったままの少女に、シャルは寂しそうな声で言い募る。

「私は……私達は、アーシャのこと大事な仲間で、友達だって思ってる。

アーシャは、そうじゃないの？ まだ私達のこと……信用できない？」

その言葉にアーシャは弾かれたように顔を上げた。

「違う！ そんな事ない！」

ぶるぶると激しく首を横に振ってそうじゃない、と訴えた。

自分を真っ直ぐに見る三人の目がアーシャには痛い。

その視線を己もまた真っ直ぐに見返し、アーシャは懸命に伝えるべき言葉を探した。

「違う……私、いじめられてたとか、そういうのは気付かなかっただけだし、揉め事だっただけだっただけ良かった。

言うほどの事じゃなかっただけ。勝手に一人で色々決めたのは……

…試したかったの」

「何を？」

アーシャは静かに問いかけたディーンを仰ぎ見た。

答えるかどうか迷うその目を静かな瞳が見つめ返した。

「……私に、大事なものができたのかどうか……戦ってでも守りたいって思えるものがあつたとしたら、その為に一人でどこまでできるのか、試したかったの……」

でも、とアーシャは視線を外し俯いて呟いた。

「一人じゃなかつたけどね……ライラスを誘つたのは、ほんととはただの成り行きだったけど……結局、わかつたのは、一人じゃだめだつて事だった」

そう言つてアーシャは俯いたまま少し笑つた。

「ライラスにいっぱい手伝つてもらつて、シャルとディーンは色々な情報集めてくれて、ジェイと一緒に出てもらつて。」

試合の時も……皆が見てくれたから、戦えた。

怪我をしても、誰かが助けしてくれるつて思つたからきつと無茶もできた。結局わかつたのは、一人じゃだめだつてことだけ」

精霊にも結局、助けてもらつちやつたしね、とアーシャは肩を落として呟いた。

「……助けられたのは、迷惑だつたか？」

アーシャはその言葉にパツと顔を上げて慌てて首を横に振つた。

「違うよ、そうじゃない。そうじゃなくて……やっぱり、私は弱いって思っ、ちょっと悔しいだけ。でも、嬉しいの」

「ああ、なんかわかる気がするなあ。一人で出来ないことは悔しいけど、一人じゃない事は嬉しいんだろ？ 助けてくれる奴がいるってのは、やっぱり嬉しいもんな」

ジェイの言葉にアーシャは深く頷いた。

「うん、そう……嬉しかった」

アーシャはそう言っ、自分を覗き込む三人の顔を順番に大切そうに見つめた。

「私……大切なものが出来た。その為に戦った。それを確かめたから、だから、それは謝らない。

でも……黙ってた事は、色々ごめんね。それと……助けてくれて、ありがとう」

少女の言葉を黙って聞いていたシャルは、すつと無言で手を伸ばした。

アーシャは目の前に差し出された手に一瞬戸惑い、それからそつとその手を握った。

ぎゅ、と固く交わした握手の上にジェイの手が伸び、そして更にディーンの手が重なった。

「アーシャ、お疲れ様。でも、次はちゃんと何でも言ってね？」

「お疲れ様。面白かったから、またやろうな！」

「お疲れ様。次は面白そうだから私も参加させてもらいたい」

「……うん……ありがとう」

アーシャはもう片方の手を伸ばしてディーンの手の上に重ねた。嬉しいような泣きたいようなおかしな気持ちをその手に込め、ぎゅっと握った。

アーシャは胸を張って顔を上げた。他の誰でもなく、自分自身に胸を張り、少女は小さく微笑んだ。

「ごめん」

訪ねてきたライラスに会って、最初にアーシャが言った言葉はそれだった。

検査を済ませないと退院させないと言い張る医者に引き止められ、アーシャはもう一晩をここで過ごす事になり退屈していた。そこにライラスが訪ねてきたのだ。

アーシャの言葉を恐らく予想してたのだろうライラスも苦笑しながらため息を吐いた。

「こつちこそ、ごめんな。やっぱり調整しきれてなかったな」

「ううん、かなり抑えられてたよ。結局無茶な使い方したのは私だし。だから私のせい」

氷結の魔具を使う際の注意をライラスは何度も繰り返していたのだ。それを承知で使ったのはアーシャだ。

「リスクを承知で使ったんだから、自業自得。ライラスこそ、心配

させてごめん」

「いや……もういいよ。次はどんな石の力もちゃんと制御できるもんが作れるように、俺も頑張るさ」

「次？」

アーシャが首を傾げるとライラスは笑って頷いた。

「まだ知らないんだな。なんかな、今回のお前らの試合がかなりの反響でさ。魔技科の生徒がかなり参加したいって言ってるらしいんだ。」

次の魔法競技会から、そういう部門が新設されたり、授業の内容も少し変化するかもっていう話が出てるんだ」

「へえ……じゃあ、ちよつとは役に立ったのかな」

「ちよつとなんてもんじゃないさ。魔技科はどの学年でも、もうずっと試合の話で持ちきりなんだぜ？　なんか、皆嘘みたいに活き活きしてるよ」

そう、とだけ言うとアーシャは口を噤んだ。

あまり嬉しそうではないその様子にライラスは首を傾げた。

「どうした？　嫌なのか？」

ライラスの問いにアーシャは小さく唸った。

「嫌っていうか……心配。自分で魔具で戦ってみて、力のある道具は諸刃の剣だって、本当にそう思ったから。」

魔具に限らず、魔法でも剣でも、力って言うのはきつとそうなんだって。

使っておいてこんな事言えた義理じゃないけど、自分が考えた魔具が……身を守るのを越えた争いに使われるの、本当は嫌だな」

「そっか……それは確かになあ」
「まだそうなるかと決まった訳ではあるまい？」

不意に聞こえた第三者の声に二人は驚いて振り返った。
なんと、半分空いたままだった病室のドアから学園長がひょっこりと顔を出して手を振っていた。

「学園長！」

「なっ、なんでここに……！」

「驚かせてすまんのだ。ドアが開いていたものじゃから、聞こえてしまったんじゃないよ。入っても？」

「どうぞ……」

学園長は紫がかかった黒のローブと、真っ白な長い髭を重たげに揺らしながら部屋の中に入ってきた。

アーシャの座るベッドの脇に立ち、懐から何かを取り出した。

「学年優勝おめでとう。これを返しておこうと思つての」

それは彼が預かっていたアーシャの扇だった。アーシャは少し困った顔でそれを受け取った。

「いらないのかね？」

「そうじゃないけど……いえ、ありがとう」

「後悔しておるのかね？」

学園長の言葉にアーシャは一瞬迷って、それから頷いた。

「私……全然何にも解つてなかった。戦つて言う事がどういふ」とかとか、自分が作る道具の意味とか。

解ってるつもりになってただけだった。こんなひどい物を作って…… おまけに最後は結局、精霊に頼っちゃったし」

「それも、君の持つ力じゃろう？ そうじゃないなどと言ったら精霊達が悲しむ」

アーシャはその言葉にこくりと頷いた。けれどその顔は一向に晴れない。

少女は首を横に振り、手にした扇をじっと見つめた。

「……魔具で戦うって偉そうに言ったけど、本当は皆に沢山助けてもらって、全然目標を達成したって言えない気がして……魔技科の人達になんか、悪いみたいだし」

「そんな事ないって！ 俺は、少なくともお前に沢山教えられたよ。もちろん、自分達の作る物が危険をもたらすかもしれないって事も含めてさ。」

そついうの全部ひっくるめても、俺は、魔技師を目指してる事が誇らしかった」

「ライラス……」

「彼の言う通りじゃと、わしも思うよ。君達があの日間でしたのはただの試合ではない。縮こまった心に灯りをもたらしたのじゃよ。それは、誇って良い事じゃ」

学園長は扇を握ったままのアーシャの手に、自分の皺だらけの手を優しく重ねた。

「かつてのう、戦争に魔法技巧術を使おうとした時代が歴史の中には確かにあったのじゃよ。けれど、結局は武具の強化や補助用の護符以上の発展を遂げなかった」

「……何故？」

「何故じゃろうのう？ 正確なところはもう今は解らぬ。」

ただ、恐らくは、人の劣等感が足を引っ張ったのではないかとわしは思っております」

「劣等感？ それって、一体どういう事なんですか？」

首を傾げたライラスに学園長は頷いた。

「人はいつの時代も、長命種からもたらされた魔法という力を尊んできた。

それらをより発展させ、洗練させ、いずれは長命種をも超えるのだと人々は躍起になってきた。

それはもはや目標というよりも、劣等感に裏打ちされた卑屈な執念のように。

だからこそその代わりに、人の作った道具と魔法を組み合わせた魔法技巧術を蔑んだのかもしれぬ」

「……変なの」

アーシャの感想に学園長は小さく吹き出し、面白そうにくすくすと笑った。

「確かに、全くおかしな話じゃよ。じゃが、その心は今もって人々を縛り付けておるのも事実じゃ」

ライラスは思わず目を伏せた。

卑屈になっていたのは彼自身に他ならない。学園長は俯いたライラスの頭に手を伸ばし、優しく撫でた。

ライラスは少し恥ずかしそうな顔をしたが、黙ってそれを受け入れていた。

「人は、そろそろ長命種への劣等感を捨て去っても良い時代を迎えておる。人にしかできない事を、もっと尊んで良い時代に。」

君らが、己が投げた石の立てる波を恐れる気持ちは良くわかる。けれど、ここから先の舵取りは、しばらくは我ら大人達の仕事じゃ。君達がいつか大人になり、その役目を交代する時まで、な」

アーシャとライラスは真っ直ぐな目を学園長に向けた。

彼らの真っ直ぐな目とは違う、底知れぬ深さを感じさせる優しい青灰色の瞳がそれを迎える。

「だから、君らは思うように生きなさい。恐れずに、真っ直ぐに。自分の作った物を愛する気持ちを持って。

先頭を歩くというのは、いつだって恐ろしい。けれど、その君らの後を、多くの人が歩くじゃろう」

厳かにそう告げると、学園長は途端にパチリと悪戯っぽく片目を閉じた。

「わしが現役のうちには、魔具で争いなど起こさせぬよ」

すっかり日の落ちた病室に明るい笑い声が響く。

アーシャもライラスも、その胸に明るい灯火が宿ったような気がしていた。

33：その手の先に

次の日の朝、朝食を病室で食べたアーシヤは身支度を整えて医務棟を出た。

今日はシャルの試合がある日だから早く出ようと思っていたのに朝食を摂ってから行けと看護師に強要されてしまった。

何故か朝から随分品数が豊富だったのでお腹が重たい。

きつと仲間達が去り際に何か言っておいたに違いないとアーシヤは読んでいた。

心配性の仲間達に苦笑しながら医務棟の出口をくぐると、その向こうに意外な人物の姿が目に入った。

アーシヤがこれから会いに行こうと思っていたカトウラは、日向ぼっこでもするかのように出口の脇の芝生の上でぼんやりと空を見ていた。

アーシヤの足音が聞こえたのだろう。

芝生に座り込んでいたカトウラはゆっくりと振り返り、目当ての少女が出てきたことに気付いて立ち上がった。

「……」

二人の間にしばしの沈黙が流れる。カトウラは何から話したものが迷ったように目を伏せた。

「……おめでとう」

「ありがと……あの、凍傷を治してくれたって聞いた」

アーシヤの言葉にカトウラは首を横に振った。

「私だけじゃないわ。シャルフィーナやコーネリアもいたもの」

「でも、あなたにもお礼を言わないと」

カトウラは少し困ったような顔をしたが、やがて小さく頷いた。

「……大した事はしてないわ。それよりも、約束を果たしにきたのよ」

賭けに負けたから、と彼女は呟いた。

その顔には負けた悔しさはなく、どこか放心したような、不思議な透明感が漂っている。

「私は、何をすればいいのかしら？ 貴女に謝ればいい？ それとも魔技科の人達にでも？」

アーシヤはカトウラの問いに首を横に振った。

「別に謝らなくていいよ。何されても私、気付いてなかったし。魔技科の人達も多分あなたとは直接関係ないし」

「じゃあ私は何をすればいいの？ 条件を挙げただけって言うわけじゃないんでしょう？」

アーシヤは頷くとカトウラを誘って歩き出した。

医務棟には少なからず人の出入りがある。もう少し静かな所で話をするつもりだった。

やがて二人は医務棟の近くにある噴水の近くで立ち止まった。

冬の間は水が枯れている噴水はなんとも寂しげで、寒さも手伝って辺りに人影は見えなかった。

アーシヤは辺りを見回すとカトウラの方に向き直り口を開いた。

「新年の休暇……家に帰る？」

「休暇？ それはもちろん帰るけど……それがどうかして？」

アーシャは頷くと真剣な目をカトウラに向けた。

「じゃあ、私の要求は、一つだけ。家に帰って、家族と話をして」
「……………」

カトウラは思わず目を見開いた。驚きに開かれた唇が怒りに震える。

「な……………何よそれ！　それが貴女に何の関係があるっていうの!？」
だが思わず怒鳴ったカトウラにアーシャは静かに首を横に振った。

「何も。私には関係ないよ。でも、私の言う事何でも聞くっていう条件だったよね？」
だから、あなたが家に帰って、家族にあなたの想いを伝えること。それが私の要求」

カトウラはぐつと唇を噛み、両手を強く握り合わせた。そして、呻くように応えた。

「……………できないわ。第一、今更何を話せっていうの？」
「何でもいいよ。あなたが、ずっと寂しい想いをしてきた事や、夢があること。家族に対する想いとかが、そんなこと」
「そんな事って……………なんで知ってるの」
「当たってた？　ただの予想だよ。もちろん簡単じゃないと思うけど、でもそれ以外にして欲しい事はないし」

それでもカトウラには到底納得できそうにはなかった。
彼女は首を横に振ると懇願するように少女を見た。

「無理よ……話なんて、できるわけない」

「……どうしてそんな簡単に出来ないって言うの？」

帰る家があつて、家族と呼べる人がそこにいて、話だってできるのに」

少女の聲が一瞬揺らぎ、カトウラはハッと顔を上げた。

だが目の前に立つアーシャの表情は変化していなかった。

ただ、真剣な目がじつとカトウラを見つめていた。

「……私は、精霊に愛されているけど、彼らを愛してるけど……もしその加護と引き換えに失ったものが取り戻せるなら、多分、すぐにでもそうする」

森の色の瞳がゆらりと揺れる。少女の目はここではないどこかを見ていた。

「きつと、シャルだって、ジエイだって、ディーンだって。

加護と引き換えにしてもいいから欲しいものを持っている。でも、それが手に入らない事も知ってる」

「……だから貴方達は一緒にいるの？」

アーシャは小さく頷いた。

「一つでいいのに。たった一つでいいのに……それはもう取り戻せない。手に入らない。精霊の加護があつても」

何を、とはアーシャは言わなかった。カトウラもそれは問わなかった。ただ静かに考え、やがて小さく呟いた。

「……私は、まだ間に合うかしら」

独り言のようなその呟きにアーシャは頷いた。

「……きつとね」

カトウラは黙って目の前の少女を見つめた。

自分よりもまだ大分小さなその姿を見ていると、やはり故郷の妹を思い出す。

妹も魔法医になる為にアウレスーラに行きたいと言っていたけれど、娘が二人も遠くへ行く事を嫌がる両親の反対にあって未だそれは叶っていない。

カトウラは妹が何故魔法医になりたいのか知らなかった。

両親が自分に何を望むのかも知らなかった。

いつから話す事を諦めたのかそれも思い出せない。
だが思い返してみると、先に諦めたのは自分のような気がした。

「もっと……話していたら、何か変わったかしら？」

「まだ遅くないと思うよ。多分ね」

「そう……そうね」

カトウラは吹っ切れたように一瞬空を仰ぎ、それからアーシャに笑顔を向けた。

「じゃあ、約束、守れるか頑張ってみるわ。けど、もしひどい事になったら、貴女慰めてくれる？」

「慰める……それはまだやった事ないけど……いいよ。じゃあ学部の門の前の喫茶店、予約しとくね」

「喫茶店？」

カトウラが訝しげに問うとアーシャは大真面目に頷いた。

「シャルがね、女の子同士で、んーと……しつれん？ とかの慰めをするには、甘くて美味しい物をヤケ食いするのが基本なんだって言ってた。良くわかんなかったけど、つまり傷ついた時には甘い物が効くのかな？」

その言葉にカトウラは思わず吹き出し、くすくすと楽しそうに笑った。

「まあ間違ってるわけじゃないとは思うけど……それ、本当にやってくれるの？」

「ん、いいよ。じゃあ賑やかな方が良いつて言う話だから、その時はシャルとあの人……えっと、コーネリアも誘っておくね」

「……シャルフィーナはともかく、コーネリアも？」

「だって、友達じゃないの？ 貴女の。それに、あの人が居るときっと面白いと思うな。あの髪型の事、もっと聞きたいし」

「それは……確かに、私も興味あるわね」

カトウラはさぞ奇妙だろうそのお茶会を想像してみた。それだけで更に笑いがこみ上げる。

目の前の少女は本当に何をしても応えないし、いつもこちらの予想外の返事をしてくる。

けれど今はもう、それが嫌ではなかった。

「じゃあコーネリアに八つ当たりでもしてからかう事にするわ。

きつと賑やかで、落ち込んでる暇なんて無さそうだし。その時はよろしくね」

「うん、待ってるね」

カトウラは頷き、笑顔で手を差し出した。

アーシャはそれを一瞬不思議そうに見つめ、それから笑顔と共に手を伸ばして握り返した。

慰めるとは言ったけれど、きっとその必要はないだろうとアーシャは感じていた。

握った手からは初めて会った時と良く似た透明な水のような気配がした。

カトウラの笑顔は、綺麗だった。

上級学部構内の北にある講堂は大勢の生徒で賑わっていた。

何日も続いた魔法競技会もついに昨日終わり、今日はその表彰式と閉会式が講堂を使って行われていた。

全ての結果は既に構内に貼り出されているからほとんどの生徒が知っているが、それでもお祭り気分の最後の日を味わおうと出席者は多かった。

大半は魔法学部の生徒だが、他の学部の生徒の姿もちらほらと見える。

賑わう講堂の片隅に、アーシャ達四人も集まっていた。

壇上には学園長が立ち、部門ごとに読み上げられる成績優秀者を称え、三位までの生徒に賞状や盾を渡している。

「あーあ、惜しかったわね。アーシャ達は学年対抗戦、棄権だなん

て」

既に三学年の表彰は終わり、二つの部門の優勝の盾と賞状を受け取ったシャルが呟いた。

アーシャとジェイは顔を見合わせて首を横に振った。

「これでよかったよ。だってもう魔具もあらかたネタ切れだったし。それに、目的は果たしたもん」

「そうそう。アーシャもゆっくり休めたしな。無理するより良かったと思うぜ」

競技会の最後にまとめて行われる各部門の学年優勝者が出られる学年対抗戦を、結局アーシャとジェイは棄権したのだ。

勝ち負けに拘りの少ないアーシャは目的が果たせたから、とあっさりとそれ以上の戦いを諦め、ジェイにも異論はなかった。

むしろ二人は残りの試合をのんびりと観戦できて喜んでいたくらいだ。

「まあそれはそうだけど……」

「無理をしてまた危ない目にあうよりはいいだろう」

それもそうね、とシャルは頷いてため息を吐いた。

「それにしてもこれ、重くて邪魔だわ。ジェイ、一つ持って」

「お前……そんなくらい大した重さじゃないだろ。ったく」

口ではそう言いつつも、ジェイは二つの盾のうち一つをシャルから受け取った。

入賞の証としてもらえる盾はその順位で大きさが違い、優勝の盾はそれなりに大きい。

ジェイ自身も自分が受け取った盾と賞状を持っているから邪魔そうにそれらを重ねて小脇に抱えた。

「これって来年返すの？」

アーシャが手に持った優勝の盾を持ち上げて問いかけた。

少女の顔がすっぱりと隠れて尚余るほどの盾は、部屋に飾るとなると邪魔そうだ。

「これは返還するような物ではないので、君の物だ。別に飾らなくてもどうという事もないが……」

「厚くて立派な木を使ってあるんだよね……装飾を削り取ってまな板にしたら怒られるかな？」

少女の呟きに対する突っ込みは意外な方向から届けられた。

「ちょっと！今何て仰いましたの!？」

四人が振り返るとコーネリアが眉を吊り上げて仁王立ちしていた。きょとんとする少女にコーネリアはビシ、と指を突きつけた。

「由緒正しい優勝の証をまな板ですって!？ 言語道断ですわ!」

「だめ？ じゃあ鍋敷きは？」

「なっ、鍋敷き!？ 大差ないじゃありませんの! 使い道が違えば良いとか、そういう問題じゃありませんわ!」

コーネリアは手に持った、アーシャ達の物よりも一回り小さい盾を怒りに任せて振り回した。その後ろを歩いてきたカトウラが迷惑そうにそれを避ける。

「コーネリア、声が大きいわよ」
「うっ……と、とにかく！ 優勝の証をまな板や鍋敷きにするなんて許しませんわよ！」

壇上では高学年の生徒の表彰式がまだ続いている。
コーネリアは声を落としてアーシヤに詰め寄った。

「だって邪魔な物は邪魔……じゃあ、あげ」

もが、とアーシヤの言葉が途切れた。

少女の口を後ろから片手で塞いだディーンは、もう片方の手でひよいとアーシヤの盾を取り上げた。

「これは裏側に紐が取り付けられるから、後で邪魔にならないような高い所に飾ってやる。だからまな板は諦める」

「まあ！ ディーン様ったらお優しいわ！」

コーネリアはディーンの発言に感激で目をキラキラと輝かせた。
彼女はペア部門でアーシヤに負け、その後の個人部門でシャルにも負けて今回も全て二位で終わっている。

優勝の盾をあげる、などと言われたら絶対にこの場でぶち切れていただろう。

彼女の逆鱗に触れただろう言葉を遮ったディーンはその手際の良さに、誰もが胸の内で拍手を送った。

ワア、と周囲に突然歓声が沸いた。

壇上を見るとどうやら最後の表彰が終わった所らしかった。

観客に向かって手を振る各部門の学年対抗戦の優勝者は六年生がほとんどだ。

シャルはそれを見ながら少し面白くなさそうな顔をした。

今回出場した二部門で、シャルはどちらも四年生を降し三位だった。その後の五年、六年との試合は惜しくも負けてしまったのだ。入賞はしたが、学年対抗戦で表彰台上がれるのは優勝者だけだ。

「……次は、あそこに立つわ」

「次にあそこに立つのは私です！」

シャルとコーネリアの闘志は少しも衰えることがないらしい。もう二年後の話をしている二人を仲間達は呆れた顔で見つめた。

やがて優勝した生徒達が降り、壇上には学園長だけが残された。

学園長は白い髭を揺らしながら一歩前へと進み出て、片手を上げた。

騒がしかった会場が徐々に静まり、生徒達の視線が壇上へと向かう。

学園長はこほん、と咳払いを一つするとずらりと並ぶ生徒達を見渡し、にこりと微笑んだ。

「まずは、君達に良く頑張ったと言わせて貰おうかの。皆が力を尽くし技を競い合う所をまた今年も見せて貰った。

うちの生徒は皆優秀だと感心するばかりじゃよ」

生徒達はその言葉に顔を輝かせた。学園長は更に言葉を続けた。

「さて、わしは先日、この大会の中で非常に興味深い試合を見せて貰った。魔法競技会では余り見かけない科の生徒が出ていた試合じゃ」

ざわ、と辺りにかすかなざわめきが広がった。学園長が語った試合が何の事か誰もが判ったのだ。

「魔法技巧科の生徒の作った魔具と、武術学部の子の生徒の不慣れな魔法の組み合わせなのに驚くほどのチームワークで学年優勝まで勝ち登ったのは称賛に値する。わしも久しぶりにわくわくしたわい」

学園長はそう言つて自分のベルトのホルダーに指していた杖を手に取つた。

細くて軽そうな白木に金の装飾が施してあり、頂点に嵌つた透明な石が美しい杖だ。

「これはわしがもう随分長い間愛用している杖での。この老いぼれを長い間支えてくれておる。

この年になると大きな魔法を扱うのはなかなか億劫でな。もう何度助けられたか判らんほどじゃ」

そう言つて彼は愛しそうにその天辺に付いた石をそつと撫でた。

「これを作つたのはわしの長年の親友である男での。彼は腕のいい魔技師であり、わしの尊敬する職人の一人じゃ」

生徒達は学園長が何を意図して話をしているのかわからずに黙つて視線だけを向けていた。

学園長はその視線を受け、ゆっくりと生徒達を見回した。

「君達も皆杖を持っているじゃろう。未熟な学生には杖はあつた方が良いからの。そしてそれらは全て、魔法技巧を修めた魔技師達が作っている。

杖だけではないな。そのローブも、身に着けているであろう護符も、魔技師の手によるものじゃ。我が学園の制服も少しばかりの魔法が掛かつておる」

生徒達はハツとして自分達の体を見た。

彼らのほとんどが制服やローブに身を包み、護符や杖を身につけている。

「それだけではない。この試合場も、学園の様々な施設もそうじゃない。

最近普及している光球も、街を潤す水道施設も、そういった物の多くに彼らの手が入っており」

学園長は静かに壇上を見つめる生徒達をゆっくりと見回した。

生徒達の中に自分の言葉が染み込むのを待つかのように。

「君らは知っておるじやろうか？ この世界では強い魔道士が段々と減っている事を。」

どういう理由かは、研究者達の間でもまだわかっておらぬが、そもそも世界が二つに別れたのが発端なのだろうと言われている。

千年の永き間に、何かが起こっているのだろうとな。

だが何が理由としても、年々優秀な魔道士が数を減らしていることは事実じゃ。

特に、精霊魔法の使い手が余り現れなくなっておるな。

この学園は大陸の内外から多くの優秀な生徒が集まるから、実感は薄いかもしれぬが、この学園でさえその傾向は近年ますます強くなっておる」

それはほとんどの生徒が初めて聞く話だった。

不安そうなきわめきが講堂に走る。

学園長は静かに片手を上げてそれを制した。

「だから、長い年月の間に少しずつ弱くなって来た魔法の代わりに、

人は戦乱で消えかけた過去の技術を復興させ、そしてそれを更に発展させる道を選んだのじゃ。

そのおかげで、魔法技術を含めた近年の様々な技術の発展は目覚ましいものがある。だがそれでも魔法が強い事がステータスだ、という風潮はまだなくならん」

学園長はため息を一つ吐き、ゆるゆると首を横に振った。

「魔法も魔技も、君達が生まれる遙か昔から存在する。長命種が我らに魔法を伝え、やがてそれは技術と組み合わされた。

その歴史の中で、誰が魔法と魔技の優劣を唱えたのか、今となつては知る者もあるまい。

だが、それは愚かで悲しい事だとは思わぬかね？ 見下した方にも、見下された方にも、良い事など一つも生まれない」

生徒達の幾人かがそつと顔を伏せる。

それが何科の生徒なのか、壇上の上からは判らなかったが、学園長はそちらを静かに見つめた。

「わしは彼らの試合をずっと見ておつた。

もしあれが魔法のみが許された試合ではなかったなら。

彼女が己の持てる力の全てを使い、彼が本来の自分の戦いをしたのなら、彼らはもつと簡単に優勝していたかもしれん。

けれど、彼女は自分の作った物に誇りを持ち、それを使って戦う事を選んだ。そして彼は、そんな友を不得手な技で精一杯助ける事を。そしてその結果は試合場で皆が見た通りじゃ」

アーシャとジェイはお互いの顔を見合わせた。

どちらの顔にも微笑が浮かぶ。

「だからかのう。自作の魔具を駆使して戦う彼らを見てわしは胸が躍った。

人の手が作り出したものが、魔法という力と融合し、それを超えようとしていると。人にはもっともっと可能性があるのだと誇らしく思った。

大げさに聞こえるかもしれぬが、わしは昨日ここで、人の未来を垣間見たような気がした」

学園長は嬉しそうな笑顔を浮かべると、もう一度ゆっくりと生徒達を見回した。

「もし千年前に、人間が己の力を誇っていたのなら。与えられた知識や力から新たなものを生み出す事の出来るこの両の手を誇りに思っていたのなら。

あるいは世界は二つに別れなかったのではないか。わしは、そう思っておる」

もう誰も身じろぎもしなかった。

ただ静かな視線だけが、壇上へと真っ直ぐに向かう。

「他を見下すなかれ。他を見下して自分を高みに置こうとするものは、いずれ誰かの足元に這い蹲る事になるじやろう。

そして、己を卑下することなかれ。

己の力を誇り、その両の手をもって、己にしか出来ない事を成しなさい。

それが、いずれは人の新しい未来へと繋がるじやろう」

その言葉の前に、魔法科の生徒達は少しだけ項垂れ、魔技科の生徒達はまるで光でも指したかのようにしっかりと顔を上げて明るい目をしていた。

34：それぞれの笑顔

閉会式が終わり解散が告げられた後の講堂の中を、ライラスは人波を縫うようにして歩いていった。

手には一本の杖をしっかりと握っている。

講堂の入り口付近から人の流れを遡るようにして歩きながら、ライラスは目当ての人物を探していた。

少しでも見知った顔が見つかれば彼も見つかるだろうと歩きながら辺りを見回す。

そしてようやく、人の群れの中にちらほらと見覚えのある顔を見つけた。ローブの下からちらりと見える彼らの制服のリボンを見れば、それは間違いなくライラスと同じ色だ。

ライラスは緊張を押し殺しながら三年生の群れへと足を向けた。群れを掻き分けるようにして奥へ進むと、何となく神妙な顔つきをした一団が目に入る。

ライラスはそちらの方へとゆっくり足を運んだ。

その群れの中に優しげな顔つきの少年の姿が見えた。

灰色がかった茶色の髪も、穏やかでどこか気弱そうな顔立ちも良く知っている彼のままだ。

けれど少しだけ、自分の記憶にある彼よりも背が伸びている気がした。

自分も、友も、成長しているのだとライラスは強く感じた。

「……フラント」

ライラスは小さく声をかけた。その声に目の前の少年が振り向く。振り向いた彼は大きく目を見開いた。

「ライラス……」

「……久しぶり」

「う、うん」

顔を合わせてぎこちなく挨拶を交わした二人に、周りにいる生徒の訝しげな視線が向けられる。

フランツと一緒にいた彼のクラスメイト達の多くはライラスの顔を知っていた。彼が魔技科であることも。

何の用か問うような彼らの視線にライラスは思わず手にした杖を強く握り締めた。手の中にじつとりと汗が浮かぶ。

「あの、俺……その、お前に」

「ライラス」

おどおどと言葉を紡ぎかけたライラスの背に涼やかな声がかぶつかる。

呼び止められて慌てて振り向くと、そこにはアーシャとジェイ、それにその仲間達が立っていた。

「グラウル！」

少女とその仲間達の突然の登場に驚いたのはライラスだけではなかった。周りにいた三年生の生徒達の間にはざわめきが走る。

この大会の話題の中心だった彼らは表彰を受ける時は壇上に現れたが、それ以外は三年生の群れには加わっていないかった。

特にライラスに声をかけたアーシャは、大会が始まる前から様々な噂の中心人物だ。誰もがその少女の言葉を聞き取るうと口を噤み、辺りは不自然に静まり返った。

「グラウル、いたのか」

「うん。ライラスこそ、姿が見えないからどうしたかと思つてた」
「ああ……これ、くすんでたから磨いてたら遅くなつちまつてさ、
奥までこれなかったから入り口の辺りにいたんだ」

ライラスが見せた細長い杖を見て、アーシャは頷いた。

「これから？」

「……ああ」

何を、と問わずとも言いたい事がわかつてライラスは頷いた。
アーシャはそれを見て頷き返すと、傍らに立つジェイを見上げた。
ジェイは少女の視線に笑顔を返すと脇に抱えていたものを持ち上げ、
ライラスへと差し出した。

「ほら、お前の分」

「え？」

ぐい、と胸元に突きつけられたそれをライラスは反射的に手を出して受け取った。

持ったその手にずしりとした重みがかかる。

ライラスは重みに驚き、渡された板をまじまじと見つめた。

それは学年優勝者に与えられる立派な盾だった。アーシャとジェイがさつき壇上で受け取った物の一つだ。

「なっ、ちょ、これ……！」

「お前のだよ。俺はあくまでお前の代理で出ただけだからな。

大会で使った魔具をアーシャと協力して作ったのはお前だろ？」

「けど、実際戦ったのはあんただろ！」

ジェイは笑つて首を振り、アーシャが慌てるライラスを宥めた。

「受け取って、ライラス。ライラスが力を貸してくれたから、今こ
れがここにあるんだもん。本当は私のを渡そうと思ってたんだけど、
ジエイがどうしてもって」

「俺は大した事してないからな。二人の作った魔具に助けられただ
けだ。貰う理由がないだろ？」

胸の前に盾を掲げたまま、ライラスはどうしたらいいのか途方に
暮れた顔をした

アーシヤは盾に手を伸ばし、ライラスの胸にぐいと押し付けた。

「これがあるのはライラスのおかげなんだから、胸張って、ほら」

アーシヤはそう言ってライラスの片腕を掴んでぐいと引っ張った。
呆然としてその動きに逆らわなかったライラスの体はくるりとそ
の場で回転し、後ろを振り向く。

振り向いた先にはフランツが立ち、黙ってライラスを見つめてい
た。

ライラスは盾を持ったまま友人と向き合い、ハッと自分の目的を
思い出した。

その時、ポンと背中に小さな手が触れた。

まるで頑張れとでも言うように。

ライラスは盾を持ち直し、左手でぎゅっと抱えた。そして顔を上
げる。

基礎学部からの親友は、昔と同じ穏やかな顔でライラスを見てい
た。

「フランツ、これ」

ライラスは右手に持ったままだった細長い杖を差し出した。

「……これは？」

「いつか……約束したよな。お前の杖は、俺が作るって。腕によりをかけて、お前の助けになるような杖を作るって」

「うん……憶えてるよ」

フランツは深く頷いた。

「これ、俺が初めて作った杖なんだ。お前が使いやすいように、一生懸命考えて作った。まだ、全然未熟だとは思っけど……」

すうと深呼吸を一つすると、ライラスはその杖をフランツに向かって更に突き出した。

「お前に、受け取って欲しいんだ。俺はこれからも、きつともっと良い物を作る。ずっとお前の杖を作る。その、約束として」

ライラスの言葉を黙って受け止めていたフランツは小さく目を見開いた。

そして、それから恐る恐る手を伸ばす。

ライラスの手から渡された細い杖は、フランツの手の平にしっかりと馴染むようだった。

「ほんとに……いいの？ 貰っても」

「ああ。お前が受け取ってくれないなら、壊して作り直すさ」

「勿体無い……ラスはすぐそういう事を言っただよな。もうちょっと自分の腕を誇っていいのに」

「フランこそ、いつも謙遜しすぎだ。今度お前の魔法の腕が上がったとこ見せるよな。その杖も合わせて調整するからさ」

ライラスとフランツは顔を見合わせて声を上げて笑った。お互いの距離がほんの一瞬で、また元に戻ったのが解ったのだ。本当は始めから距離など開いていなかったのかもしれない。ただ、開いたと思っただけで。

「ありがとう、ラス。大事にするよ」

「こっちこそ。受け取ってくれて、ありがとうな」

成り行きを見守っていた周りのざわめきは、いつの間にか静かになっっていた。

ライラスが少しだけ恐れていたような、揶揄や罵倒はどこからも起こらない。

ライラスとフランツに向けられたのは、後ろめたさを隠したような静かな魔法科の生徒達らしき視線と、どこか憧憬のような熱を込めた、他の科の生徒達の視線だった。

「そうだ、お前にも紹介しようかと思ったんだ、同じクラスの……」

だが言いかけて振り向いたライラスは、目当ての姿をそこに見つけることは出来なかった。

慌てて辺りを見回すと、講堂の出口で仲間達と並び、彼に向かつてひらひらと手を振る少女の姿が目に入る。

ライラスは言いたい事を言っただけを焚きつけたくせに、さっさと居なくなってしまった彼女らに呆れてため息を吐いた。

「んだよ、もう。薄情っつーか、らしいっつーか……」

「あはは、いいよ。また今度、紹介してよ」

今は周りも落ち着かないしね、とフランツが笑い、ライラスも周囲を見回してまた笑った。

変わっていなかったものと、変わったもの達を見ながらこぼれた笑いはどこまでも明るかった。

「……なんか良いね」

アーシャは講堂の中をもう一度振り返りながらポツリと呟いた。

「何が？」

シャルが問うとアーシャは首を捻って少し考えた。

「あの二人が、何となく。すごく良い友達って感じ」

「あら、私とアーシャだって負けてないと思うわよ？」

「え、ホントに？」

「ええ！」

くすくすと笑いあう二人の少女の後ろを歩きながら、ジエイはその様を微笑ましい気持ちで眺めていた。

シャルとは長い付き合いだが、シャルがあんなに一人の友人を大切にするのは珍しい。

シャルを恐れず遠慮のない少女の事をそれだけ気に入っているのだろう。

そんな事を考えて歩いていると、目の前の二人がぼそぼそと何か囁きあってくるりと振り返った。

「ほら、ね、アーシャ」

「うーん？」

「雰囲気が違うわよっぱり」

「そうかなあ」

どうやらジェイと、その隣を歩くディーンの事に付いて何か話し合っているらしい。

目の前でこそそとやられてはジェイも気になってしまっ。

「何だよ、俺達の話か？」

「そう。あんた達の友情の度合いは、絶対私達にもさっきの二人にも負けてるって話！」

「はあっ!？」

「否定はしない」

「ちよっ、ディーンお前！ 少しは否定しろ！」

シャルの意見をさらりと肯定したディーンに向かってジェイは腕を振って強く抗議した。

だがディーンはついと顔を逸らしてそれを黙殺する。

「だって、あんた達って友情って感じじゃないもの。どう見たってただの腐れ縁だわ」

「くっ、腐れ縁だって一応友情はあるだろうが！」

「そうだろうか」

「お前が否定するな！」

「やっぱり！ ほーら、見なさい！」

勝ち誇ったシャルと必死で否定しようとするジェイは寒空の下で立ち止まって激しく言い争いを始めた。

この言い争いを見るのも久しぶりな気がしてアーシャはくすくす

と笑いながらディーンを見上げた。

ディーンはやかましい二人に背を向け、そ知らぬ顔をしている。その顔を見上げ、アーシヤは口元に左手を当てて、内緒話するよ
うな姿勢でディーンを手招いた。

ディーンも少し身を屈めてそれに応える。

「本当はどうなの？」

小声で囁かれたアーシヤの言葉にディーンは答えなかった。

その代わりにすつと立てられた人差し指が、ディーンの口元にそ
つと添えられる。

実に珍しい、悪戯っぽい表情を浮かべながらディーンは静かに微
笑んだ。

その顔のたつた一人の目撃者の少女はそれを見て同じように笑顔
を浮かべると、同じようにそつと人差し指を立てた。

後ろの二人はそんな彼らに気付く事も無く、相変わらずじゃれあ
いのような言い争いを繰り返している。

冬の晴れ間の空はどこまでも高く、澄んだ空気に喧騒がこだまし
ていた。

第二部 epilogue：見えぬ未来

祭りの後の学園は静かだ。

もうほんの少し後には新年の休暇を迎えるべく、生徒も学園の職員も帰省の準備や祝いの準備に追われることになる。

今はその前の小休止のような期間だ。

やっと静かになって喜んでいるのは、騒がしくて研究に没頭できなかった研究室の人間や、後片付けや雑事の残る忙しい教授達くらいだろう。

中央棟の執務室の一つで、そんな雑事に追われる人間が一人、夕暮れの灯りの中で仕事をしていた。

普段はその窓からうるさいくらいの子供達の声が聞こえるのだが今は風の音しか聞こえない。

競技会の熱気が冷めた途端、いつの間にかすぐ傍に忍び寄っていた冬の寒さに気付いた生徒達は、授業が終わればそそくさと校庭を横切って家路を辿る。

静けさが嬉しいような寂しいような、そんな気持ちを覚えながら学園長は目の前の書類に視線を走らせていた。

不意に戸も窓もぴしりと閉まっていたはずの部屋に、冷たい風が吹き込んだ。

学園長が顔を上げるといつの間にか窓辺に一人の青年が立っていた。

肩に白い鳥を乗せた金の髪の青年は、穏やかな笑顔で学園長に微笑みかけた。

「こんにちは」

「これはこれは。こんにちは、お久しぶりです」

旧知の間柄らしい彼らはにこやかに挨拶を交わす。

青年はポケットに手を入れて執務机に歩み寄り、その上で手の平を開いた。

ころころと色とりどりの紙に包まれた飴玉が転がり落ちる。

「お土産。美味しいからどうぞ」

「これはどうも。……レイアルのものですかな？」

「そう。ちゃんとしまっておいたから、まだ新しいよ」

学園長は頷くと、一つとって紙を剥がして口に運んだ。青年もお土産と言いつつ一つ手に取る。

中に甘く煮たフルーツを閉じ込めたこの飴は、レイアルの有名な菓子工房で夏の市の時期だけに作られる名物の一つだ。

今の季節に味わうには少々奇妙な品物だった。

だが二人はそれに関しては何も言わず、しばしの間黙ってその味を楽しんだ。

「……お会いになれましたかな？」

「うん……夏にね。大きくなってたね。びっくりしたよ。やっぱり君か」

「そろそろあの塔も点検時期だろうと思いましたが……貴方は祭りがお好きです。まあ、ほんの賭けのようなものですが」

「賭けは君の勝ち、か……ありがとう」

いえ、と学園長は首を横に振った。

「これも運命というものでしょう」

その言葉に青年は少しだけ笑いを浮かべた。

運命に感謝するのではなく、その言葉を笑うかのような曖昧な彼の笑顔に学園長は少しだけ寂しい顔を見せた。

「どうですか、あの子は？」
「……まだまだかなあ、随分良くなったみたいけど」
「そうですね……」
「そういえばあの子、かくれんぼも知らなかったよ。
本当に、どんな子供時代だったんだか……ってまだ子供だけど、
やっぱり失敗したなあ」

彼の困ったような顔を見て、学園長は苦笑を浮かべて首を横に振った。

「仕方ないではありませんかな」
「まあね。元はと言えば僕が失敗した結果であって、グラウル老に文句言えた筋合いじゃないからね。あの子が生きてここにいるだけでも奇跡に近いんだから」
「そうですね。あの子にも友人が出来ましたし……これからまだまだ育ちますよ。現に、今回の競技会では目に見えて成長しておりますしこのう」

うん、と青年は頷くと窓の向こうに目をやった。
窓から見える空は灰色で、葉を落とした木々がいかにも寒々しい。

「見てたよ、遠くからこっそり。面白かったね」
「ええ」

「君の魔法もなかなかすごかった。風を扱うのはあんなに下手だったサミー坊やとは思えなかったよ」

「それはそれは。師匠が良い証拠、とでも申しておきましょうかな？」

「あはは 相変わらず口だけは君に敵いそうにないな！」

口だけとはひどい、と言いなながら学園長もまた笑った。明るく笑い声が執務室の重厚な雰囲気をも明るく変える。ひとしきり笑いあつた後、青年は学園長に向かって一つ頷き、窓辺へ歩み寄つてその扉を開けた。

途端に身を切るように冷たい風が部屋の中に吹き込んでくる。ひゅう、と音を立てて部屋に舞い込んだ風は、青年の周りをくると回り、暖かい空気を大分連れ去つて窓からまた出て行つた。

「もう行くよ。また来るけど……東をここに呼び戻そうかと思う。来年にでもポストを一つ二つ頼めるかな」

「それは構いませんが、あちらはよろしいのですか？」

「大丈夫。なんとかするよ」

バサ、と羽音が響く。青年の肩の鳥が窓から飛び立ち、それを追うように彼も来た時と同じ窓からひよいと姿を消した。

三階にある執務室はまた元のように静けさに包まれた。

学園長は手元に残つた飴の包みをもう一つ開いて可愛らしい中身を口に放り込んだ。

冬の空を彩る雲は少しずつその厚さと暗い色を増している。

天気が崩れる前に仕事を片付けて宿舎に戻るべきだな、と学園長は一つため息を吐いてまた机に向つた。

第二部 了

第二部 epilogue：見えぬ未来（後書き）

第二部を読んで下さってどうもありがとうございます。ひとまず二部はここまでで終わりです。

かなり省いた話などもあったのですが、とりあえず終わらせられてほっとしています。

省いた話などもいわずれきちんと整理して閑話とするなり、二部を修正するなり出来ればと考えています。

この話はまだ続きますが、とりあえずここで小休止となります。三部が始まるまでまた少しお時間を頂きます。

ここはこのままで、今までの話を載せたサイトを近日中に開く予定です。

そちらの方では近況などを書いておりますので、お暇でしたらたずねてやって下さい。

今回も長い話になりましたが、読んで下さって本当にありがとうございます！

1：小さな約束

ビリ、と小さな音が狭い部屋に響いた。

音は一度では終わらず、紙を裂くようなその音は何度も何度も続く。

窓の外には夕闇が迫ってきていたが、部屋の主は明かりもつけず薄暗い中に立ち尽くし、ただじつと手元を見ていた。

その視線の先で指が動いたたびに、握られた紙片が小さな音とともに細かく細かくなっていく。

彼は飽きずに紙を細かく裂き続けた。

けれどいくら千切っても、紙は数を増やすばかりでその姿を消す訳ではない。目の前から紙が消えてなくならないことに苛立つかのように、彼は指を動かし続ける。

いつの間にか手のひらや机の上は細かい紙片でいっぱいになっていた。

もう全ての紙が千切るのも難しいほど細かくなってしまったことに気がついた彼は小さくため息を吐き、それから静かに窓を開けた。赤く色づいた弱々しい光が窓から身を乗り出した少年を照らし、その姿をも赤く染める。彼は机の上の紙片を手の中に集めてから窓の下の人通りを確かめ、それから赤く染まった空に向けてゆっくりと手のひらを広げた。

途端に吹き付けた春の風に乗って、紙はその手のひらから次々飛び立った。

風に煽られた細かな白い欠片がちらちらと雪のように空に舞う。けれどそれを見ても、彼の心は少しも晴れなかった。散った紙の幾つかは部屋の中へと逆戻りし、それが彼をますます苛立たせた。

手紙をいくら千切っても、そこに書かれた内容が消えてなくなる訳ではない。千切った手紙を散らしても、彼に降りかかるうとして

いる問題はそのままだ。雪に似ていても、溶けて消える訳ではない。

春とは言え、夕方の風はまだ冷たかった。

少年は窓の外を見ながら、その風の冷たさに微かに体を振るわせた。

寒さを感じているのは体なのか、それとも別のどこかなのか判別がつかない。

自分を取り巻く世界の全てが黄昏に包まれたかのような気がした。夕暮れの町で一緒に遊んでいたはずの仲間をふいに見失ったような、そんな心地だった。

いつの間にか紫に染まった空に吐き出した重いため息は、誰に聞かれることもなく掻き消える。

風に乗って夕闇の中を舞っていた紙片はいつの間にか見えなくなっていた。

- - - - -

一人の子供が広い館の敷地の中を懸命に走っていた。彼はお昼寝をこっそり抜け出して走ってきたのだが、目当ての時間に少し遅れてしまっている。早く早く、と気持ちばかりが急いで、小さな足は今にももつれそうだ。

まだ少年と言つにも届かない、幼い子供の足にはこの敷地は少々広すぎて、走っても走っても目的の場所はまだ遠い。更に彼は館の中を歩く人影を見つける度に足を止めて隠れてしまうので、道行はなおさら捗らなかつた。

それでもどうにか時間をかけて目的地まで走りぬけ小さな扉が見えた時、その顔に安堵の笑みが浮かんだ。

キン、と遠くから響いた高い音がまだ目的の時間に間に合った事を教えてくれる。彼は荒くなつた呼吸を懸命に宥めながら中庭に繋がる扉を開き、近くに誰もいない事を慎重に確認してから外に出た。中庭には幼い子供が隠れるのにちょうどいい植え込みが沢山ある。その一つの影にそっと潜り込み、植え込みから植え込みへと移動しながら、息を凝らして先へと進む。

やがて見えたのは、中庭の一角の端を切り取るようにして作られたちよつとした広場だった。そこだけ芝生も植えられず、土がむき出しになっている。彼はそこに立つ数人の人物をじつと見つめた。

そこにいたのは大人が一人と少年が二人。少年のうちの一人はもう青年と言つていいほどの年齢だ。彼は大人の男の人と向かい合い、剣を構えていた。剣を持ち慣れた姿はしなやかで、なかなか様になっている。大人と向かい合つても少しも臆したところがなく落ち着いていたものだった。

もつとも相手の大人は剣術の指南役で、向け合つた剣も訓練用の刃を潰したものだから、向かい合つたところで取り乱す訳もないのだが。

そんな事は知らない子供は剣を打ち交わす二人を食い入るように見つめた。剣の切っ先は鋭く見えて恐ろしげだったけれど、キラキラと光を反射して閃くその姿に憧れが募る。

広場にいたもう一人の少年は近くに生えた木の作る影の下に座り、打ち合う二人をつまらなそうに眺めながら本を開いていた。傍らには少年の為の剣が置いてあるが、彼はそちらよりも読書の方が大事らしい。

子供は、以前彼に何の本を読んでいるのか聞いた事があつたことを思い出す。返ってきた答えは何を意味するのもわからない題名

だったけれど、難しそうな事だけは何となくわかった。

剣が得意な少年も、勉強が得意な少年も、子供にとって憧れの存在だ。

両親はいつも彼らのことを自慢にしている。

それがとても、羨ましかった。

「ジャステイン」

不意に呼びかけられて、子供はびっくりと体を震わせた。

慌てて後ろを見ると、彼が隠れこんだ植え込みの切れ間から少年が一人顔を出し、子供の方を覗き込んでいるのが見えた。

中庭にいる二人とどこか似た雰囲気、けれど彼らよりも幾分幼さの残る少年の穏やかな顔に笑みがこぼれる。

「ジャステイン、おいで。そんなところからじゃ良く見えないだろう」

優しく呼びかけられてほっと息を吐き、子供は ジャステインは植え込みからそっと這い出した。植え込みから出てみれば、地面の上に寝転がっていた彼の服は泥だらけだった。

けれど少年はそんな事には構わず小さな弟を捕まえると、よいしよ、と声をかけて両腕で抱き上げた。

「あはは、いつも泥だらけだね。また少し重くなったかな？」

「にいさま」

舌足らずな声で呼びかけられて少年は笑みを深くした。それは彼が小さな弟のことを本当に可愛く思っている事が良くわかるような暖かな笑顔だった。

「兄さん達の剣の稽古が見たかったんだろう？ 隠れなくてもいいのに」

隠れなくても良い、と言われてジャステインは俯いて悲しそうな顔をした。幼子には似つかわしくない、諦めたような顔で。

「どうしたんだい？」

「……けんを、ならっちゃだめだって、みにいくなつて」

「誰かにそう言われたの？」

「とうさま」

「お祖父様達は良いつて言ったのにかい？」

ジャステインはこくりと頷いた。

「むずかしいほんも、はやいつて。エディにいさまがくれたほん、だめつて」

悲しそうに呟かれた言葉に、少年は眉を寄せた。

一番上の兄のように剣を習いたい、二番目の兄のように勉強もしてみたい。そう言いだしたジャステインの言葉を祖父や兄達に伝えたのは彼だったからだ。

このくらいの年の子供が、親や兄弟の真似をして色々な事をしたがるのは当然のことだ、と祖父達は快く頷いてくれた。確かに四歳と言つ年齢で剣を習うのは一般的にはまだ早いかもしれないが、彼らの家は代々続く武門の家柄だ。最近はその傾向は薄れつつあるとはいえ、少年も彼の兄達も、もうそのくらいの年齢前から木でできた剣をおもちゃ代わりに与えられ、振り回して遊んでいたものだった。

彼ら兄弟の仲は悪くないが、上の兄達とこの一番下の弟はあまりにも年が離れすぎていて日常の接点がほとんどないに等しい。だから弟が彼らに憧れている、と告げた時、上の二人は随分驚いていた。それでも一番上の兄は何も言わずに小さな頃に使っていた木でできた剣をくれ、二番目の兄はもう読まなくなった、絵本よりも少し難しい、けれど美しい絵の沢山入った世界の事について書かれた本を譲ってくれた。それを少年がジャステインに渡した時の喜びようは見ていた方が嬉しくなるほどだった。

「じゃあヴィクター兄さんのお古の剣はどうしたの？」

「……ほんといっしょに、とうさまがもっていつちやつた」

「そうか……」

「けんは、あぶないからまだだめって。ほんは、ぼくがするのははやいんだって」

おかしな話だ、と少年は首を傾げる。父も母も少年を含めた他の兄弟達に今までそんな事を言ったことはなかったからだ。

早くから体を鍛えておけ、勉学に励め、とよく口にしたが、その逆を言ったことは彼の記憶にある限り一度もなかった。それを言われなかったのはたった一人の娘である妹くらいなものだろう。おかげで彼女は誰から見ても大層わがままな娘に育ちつつある。

少年はその妹が普段からこの幼い弟を苛めて萎縮させているのを良く知っていた。傍にいれば彼が庇ってやれるのだが、今年から寮のある学校に入ってしまった為なかなか家に帰ってくる事ができないのが現状だ。

せめて体や頭を鍛えれば、いずれ逃げおおせる事もできるようになるだろうと思い、弟の向上心を応援してやったのだがどうやらそれも上手くいかなかったらしい。

「……もう少し大きくなれば、きっと父様達も何も言わなくなるよ。もうちょっとだけ、我慢しようね」

「……うん」

ジャスティンは大人しくこくりと頷いた。

しょんぼりとうなだれたその姿が可哀想で、少年は弟を抱き上げたまま庭を静かに歩き始めた。四歳の弟はずっと抱いていられるほど少年には軽くはなかったので、少し離れた場所で彼を下ろして手を繋いで歩く。

「父様達はきつと心配なんだよ。ジャスティンが剣を習って怪我をしたりするんじゃないかって」

「……とうさまもかあさまも、ぼくのこと、みないよ」

その言葉に少年は思わず言葉を失った。

彼の目から見ても、両親がこの末の子供に少しも構おうとせず、

むしろ冷淡とも言える態度をとる事があるのを知っていたからだ。ジャステインもそれを普段から感じ取っていたのだろう。それなのに剣を習う事や学問を学ぶ事に関してだけ干渉してくるなんて、理不尽な話だとしか思えない。

「とうさまとじじさまがけんかするの、ぼくのせいなの」

祖父が子供の養育について、父とぶつかる事があるのをジャステインは見ていたのだろう。ジャステインは本当は幼いその見かけよりもずっと頭が良く、人の心にも敏い。小さな弟がその優しさから様々な想いを呑み込み、じっと黙っていることを少年は気づいていた。

けれど残念ながら彼もまた、まだそれを周囲に上手に訴えてやれるほど大人ではなかった。

「ジャステイン」

「ぼく……わるいのかなあ」

「そんなことないよ。ジャステインは良い子だ」

うなだれたままの弟の手を引いて、少年は庭の奥にある東屋の椅子へと腰を下ろした。

「ジャステインは、いい子だよ。ほら、その証拠にこんな綺麗な金の髪だ」

「かみ？」

「そう。僕と同じ、キラキラの金色だろう？ これは光の精霊に愛されている証なんだよ。精霊に愛されてる子供が、悪い子のわけないよ」

二人の顔立ちは年齢が開いているせいか、あまり似ているという印象はない。けれど、少し長めに整えられ後ろで一つに結ばれた少年の金の髪と、ジャステインの短くてふわふわの金の髪は確かに良く似た色をしていた。ジャステインは自分では良く見えない長さの己の髪に手を伸ばし、軽く引っ張ってみた。

「にいさまとおなじ？」

「そう、僕と同じだよ。だからもう少し大きくなったら精霊と仲良くなる魔法を教えてあげるよ。僕も今習ってるんだ。ジャステインはきつと僕より魔法が上手くなるよ。だからもうそんな顔しないで笑って。そうじゃないとまたシャルフィーナに怒られるよ？」

少年はそういってジャステインの髪を優しく撫でた。

三番目の兄はジャステインにいつも優しくかった。

彼もまた、上の兄達と同じく両親の自慢の息子だ。

《シンデンのフゾクのガッコウ》 というところに入っているのだとジャステインも聞いた事があった。それが何のことなのかジャステインにはまだわからなかったけれど、そのせいで彼が最近なかなか家に帰ってこないのだという事だけは知っていた。

「約束だよ」

「やくそく……」

「うん、約束だ」

ジャステインは真っ直ぐに少年を見つめて大きく頷いた。

兄と約束を交わしたことがジャステインにはとても嬉しかった。

なんだか急に兄との距離が近くなったような気がしたのだ。

精霊と仲良くなると言う事がどういふことなのかまだ彼にはよくわからなかったけれど、ただ嬉しかった。

「せーれーとなかよくなったら……」

「うん？」

「……ううん、なんでもない」

ジャステインは首を横に振って微笑んだ。

庭に咲いたバラの香りを乗せた風が、幼い丸い頬を優しく撫でていく。風に揺られた兄の前髪がキラキラと光を反射し、ジャステインは眩しそうに目を細めてそれを見つめた。

精霊と仲良くなれたなら　その先に抱いたささやかな願いは、

口にしたら叶わなくなりそうだと告げる事ができなかった。

「にいさま、やくそく、ね」

「ああ。約束だよ」

だからジャスティンは、ただ笑顔を浮かべた。

泣いたら兄が心配するから。大事な友達に怒られてしまうから。

だから彼は、いつも笑っていた。

その小さな約束が、いつか忘れ去られても、ずっと。

1：小さな約束（後書き）

第三部を開始しました。

大変お待たせして申し訳ありません。

まだ書くペースが安定していない為、しばらくは週に1、2回くらいの更新を予定しています。

ペースが出来てきましたら少し早められれば、と思っています。

少しでも楽しんで頂けるよう頑張りますので気長にお付き合いいただければ幸いです。

感想や誤字報告等を頂き、大変ありがとうございます。

返信が大変遅くて申し訳ないのですが、全てありがたく拝読し、励みにさせて頂いています。暇を見て一つずつ返信させていただいておりますが、時間がかかりますのでここでまとめてお礼をさせていただきますい。

いつも本当にありがとうございます！

2：春の嵐

カラン、とドアベルが軽やかな音を立てた。

わずかに開いた扉から強い風が吹き込み店内の空気を揺らす。

ディーンはテーブルの上に広げていた紙に風が吹き付けるのを感じてさっと手で押さえ、店内を出て行く客の姿を一瞬目に止めた。

彼の手元の紙達は間一髪で辺りに舞い散る運命から救われ、その手の下でわずかにはためく。ディーンは先ほどまで熱心に眺めていたそれらの書類から顔を上げ、窓の外へ視線を向けた。

今日の学園内はひどく風が強く、まさに春の嵐とでも言うような天気だった。晴れてはいるのだが、とにかく風が強いのだ。

外にちらほらと見える技巧学部の実生達は、動きやすい作業着にジャケットを引っ掛けた格好をしている者が多い為さほど強風に苦労している様子は見えない。だがローブばかりの魔法学部辺りは恐らく大変だろう。風にローブを取られて前に進めない生徒達の姿を想像したディーンは何となく可笑しく思えて薄く笑みを浮かべた。

ディーンが今いるのは技巧学部の校舎の一階にある喫茶店だった。さして広くは無い店内には、少しばかり統一感に欠けるが趣味のいい調度品が整然と並んでいる。店内の窓際の半分ほどをテーブル席が占め、残りはカウンター席となっていたが今はどの席もがらんとしていた。

いつもは賑やかなこの店も今日は風のおかげか随分と空いている。気がつけばいつの間にか、店内に残る客はディーンともう一人だけだ。

ディーンは店内に静けさをもたらしたこの風を少しばかりの感謝と共に眺め、それから視線を自分の目の前に座る、残ったもう一人の客へと向けた。

目の前の少年もまた、ディーンと同じように外を眺めている。だがディーンと違うところは、彼がもう小一時間近くそうやって外をぼんやりと眺めている、と言うところだろう。小さくため息を吐き、ディーンは目の前の少年に何回目かの声を掛けた。

「ジェイ」

「……ん？」

「いつまでそうやって外を眺めている気だ」

「あ、うん……悪い」

ディーンに何度目かの指摘を受け、ジェイはぶるりと頭を振ると慌てて自分の目の前の紙の束へと視線を戻した。このやり取りもこの店に入ってからもう数回繰り返されている。

ジェイはその度に手にした紙に視線を落としてはいるが、その内容がさつぱり頭に入っていないであろう事は明らかだった。今日のジェイは朝からずっと心ここにあらずという風で、何度声を掛けてもぼんやりとしている。

ここ数日、ジェイの様子がおかしいことにディーンは気づいていた。た。

何か思い悩む事や気になる事があるらしいのは一目瞭然なのだが、彼は今のところ他者に何か相談するつもりはないらしくまだ仲間達の誰にも何も言っていない。

本人が言わないのなら詮索する必要はないと考え、ディーンも放置していたが、そろそろ追及するべきかもしれない。そんなことを考えながらも、とりあえずディーンも書面に視線を落とした。

カチャン、と間近で聞こえた小さな音と人の気配がディーンの視線を再び上げさせた。

ディーンとジェイが座った席の脇にはいつの間にか大柄な青年が立っており、二人が見上げると青年は彫りの深い顔に愛想のいい笑みを浮かべて白い茶器をそっと差し出した。

飲み物のお代わりを頼んだ覚えのないディーンは、差し出された茶器を見て青年に視線で問いかける。

「いつもの実験台、よろしく」

「ああ。どうも」

実験台と言ふ言葉で相手の意図を察し、ディーンは頷いてそれを受け取った。

受け取ったシンプルな白い陶器のカップの中は黒い液体で満たされ、どこか甘さを感じさせるような香ばしい香りが立ち上っている。同じものをジェイも受け取ったが、彼はすぐに一口飲んで一瞬不思議そうな顔をしただけで特に感想はないらしく、またぼんやりと始めてしまった。

ディーンはカップに顔を近づけ、その香りを深く吸い込んだ。

見た目はただのコーヒーなのだが、何か香辛料でも混ざっているのか、いつもよりも少し香りに癖がある。

「新作ですか」

「おう。わかるか」

ディーンは頷き少し考えた後、慎重に茶器に口をつけた。

「……面白い香りと風味ですね。何の香辛料の類か、一瞬だけピリツとするような。けれど悪くない」

「よしよし、お前から合格貰えたなら何とか出せるかな」

「相変わらず熱心ですね、先輩。次年度もここの責任者をやるかもしれないと聞きましたが、もう決まったんですか？」

先輩、と呼びかけられた青年は困ったような顔を見せた。

「ああ。上期だけはこのまま継続することになりそうだ。俺も卒業試験があるから、あんまり優雅にしてられねえんだけどなあ」

青年は苦笑しながら静まり返った店内を見回した。

学園が春の短い休暇に入っている為なのか、今日の店員は彼一人だ。

この喫茶店は十年ほど前に技巧学部に試験的に導入された、生徒の実習の為の店舗だ。

技巧学部の中の料理や飲食に関わる学科と、経営などを学ぶ科の生徒達が共同で企画を立て、建築を学ぶ生徒達が彼らの意見を入れて店舗を設計し、実際に建造した。

もちろん教授達のしつかりとした監督の下に行われた共同実習だが、結果的にこの試みは好評を博し、現在もこの店舗は様々な学科の生徒達の手によって、代替わりしつつも変わらず共同で運営されている。

店で出す食べ物の材料は農業や牧畜科の生徒達が作り、料理関係の学科の生徒がそれを調理する。そして、接客の技術を学んだ生徒が、交代でこの店で仕事をする。

使われる食器や道具類は陶芸科や工芸科の生徒達の作だ。

テーブルや椅子はもちろん、そこにかけられた可愛らしい刺繍の入った布や、店内に落ち着いた光を届ける窓ガラスの一枚までもが全て生徒の手によるものなのだ。

ただし、どれもここに来るまでに教授達の厳しい目によって試され、使用に耐えうると判断されたものだけが採用されている。

定期的に経営も見直し、改装の計画も練られて実施されており、それらの実績は全て関わった生徒達への単位や評価となる。

技巧学部の生徒にとって、この店に自分の作った作品 時には自分自身も含め が並び、使われる事は一つの目標にもなっているのだ。

「後輩に適任者はいないんですか？」

「何人かいないことはないんだが、どうもまだ頼りない上に、いまいちまとまりが悪くてなあ。いつそアルロードに頼みたいくらいだ

よ。お前の方がしつかりしてそうだ」

そう言っただけの前で大げさなため息を吐く青年の言葉に、ディーンは苦笑で答えた。

彼は名をダリオ・アダーニと言い、ディーンと日常生活の中で付き合いがある、決して多くない人間のうちの一人だ。

大柄な体に茶色いエプロンを着け、癖の強い焦げ茶色の髪の毛をエプロンと同じ色の三角巾に隠しているが、あまり似合っているとは言いがたい。加えて肌の色が濃いので、何となく全身が茶色っぽい印象の青年だった。

体格のせいとその落ち着きのせいも幾分老けて見えるのだが、実は技巧学部の五年の生徒で、この休みが終われば最終学年へと進学する。彼の専攻は料理関係の学科なのだが、接客も長く選択していることがありなかなか堂に入っている。

ダリオはもう丸一年ほどこの共同実習店舗の責任者を続けており、この店が気に入りでよく通っているディーンとはそれなりに長い付き合いだった。

ディーンは静かな物腰と丁寧な言葉で、年上には比較的受けがいい。年長者の余裕を持った人間になら、彼の愛想のない態度も一つの個性として受け入れてもらえることが多いのだ。

ダリオは特にディーンの味のわかるところが気に入っているらしく、時折今日のようにこの店舗用に考えた新しい飲み物や課題になっている料理を彼に振舞ってくれた。

実験台だと言いつつも彼の出す品はどれも十分美味いといえる範囲に入っているので、ディーンもいつもそれに素直に付き合っていた。

ディーンはダリオに向かって小さく首を横に振ると、手元に重ねていた紙の束を彼に示した。

「あいにくこちら専攻決めに追われているので余裕はありま

せんよ」

「締め切りもうすぐだっけか。お疲れさん」

「先輩は今年に変更なしですか？」

「ああ。大体やりたいことはやったしな。後はもう卒業に向けて本腰いれねえと」

アウレスーラの春の休暇は、休暇とは名ばかりの休みだ。

生徒達はこの期間の間に、次の学年への準備をしなければならぬいからだ。その準備の中で最も重要とされるのが、次の学年で専攻する授業を選ぶことだった。

上級学部の生徒はそれぞれ主として所属する学科を一人一つずつ持っているが、その学科の必修科目だけでは、一学年で必要な単位の大体半分から三分の二ほどしか得られないことになっている。必然的に後の残りの時間は、生徒達自身が選んだ他の科目で埋めていることとなる。学部を越えて好きな授業を取ることが認められているので、選択の幅は驚くほど広い。

それ故に生徒達は、この時期は様々な学部を見学し、教授達と面談し、先輩にアドバイスを求め、自分の新しい一年のために奔走することになる。

走り回っていないのはダリオのように専攻を変える予定の少ない、新最終学年生くらいだった。

もっともそんな彼らにはその代わりに卒業試験とその先の進路の選択という、もっと大事な悩みが立ちふさがっているのだが。

「貴方の入れたお茶がもうすぐ飲めなくなるかと思うと残念です」

「ははは、なら先輩共にきっちり仕込んでいってやるよ。それでもだめなら、卒業したら遊びに来いよ」

「卒業後は実家を継がれる予定でしたね」

ダリオの実家は風の大陸の港町で料理屋を営んでいるのだと、デ

イーンは以前聞いたことがあった。

「ああ。だが継ぐのはまだまだ後だ。親父は現役だからな。けど、ここで色々やった事をそのうち活かせれば面白いだろうな」

彼はその為にこのアウレスーラで、他の大陸の料理や素材について幅広く学んできたらしい。

いずれは自分の力で地元には無いような料理を食べさせる新しい店を出したいと言うのが彼の夢なのだ。

「まあ俺も真面目な生徒じゃなかったが、学んだことに損はなかった気がするな。お前らもせいぜい真剣に選べよ」

ダリオはそう言って笑うと、カウンターの向こうへと戻っていった

ジェイはその先達の言葉に本日何回目かのため息を吐きながら、さきほどからぼんやりと眺めていた紙をめくった。

何枚もの紙に書かれているのは彼らが新年度に選択できる授業の科目とその説明だ。その中から自分に合いそうなもの、役に立ちそうなもの、単位取得に無理がないものなどを選ばなければいけない。講義の時間が被るようなものは避ける必要があるので細かい調整が必要になる。

もう四度目になるはずのこの作業が、ジェイは今でも苦手だ。

彼の手元にある、希望する科目を書き込み提出するための用紙は先ほどからちつとも埋まっていけない。どうしたものかとジェイが頭を悩ませていると、不意に手元に数枚の紙が差し出された。

「ジェイ、これは取っておいたらどうだ」

「ん、どれ？」

「野外生活術と、大陸別動物学、植物学だ。それなりに役に立ちそうだ」

「うーん、野外生活術はいいとしても、残りのはなあ。暗記メインだろ？ ついていけるかな」

大陸別動物学や植物学は、その名の通り大陸ごとに発見されている生物の種類や生態、植物分布や有用植物についてを学ぶ授業だ。つまり六大陸分を学ぶことになるので、暗記の量は相当に多いと言える。

「だがいずれ旅に出るなら役に立つと思うがな。特に未開拓地へ行くなら覚えておいて損は無い分野だ」

「うー……考えとく」

とりあえずそれらに対する答えを保留として、ジェイは手元の紙に野外生活術、とだけは書き込んだ。

去年もこうして選択に頭を悩ませた挙句、何度もディーンに助け舟を出されたことをジェイはちゃんと覚えている。彼はさほど優柔不断な性質ではないのだが、この毎年の選択だけは毎回問題なく済んだためしがないのだ。

ジェイは、なぜ自分がこの作業を苦手とするのか、その理由もまたおぼろげに理解している。けれどそれがわかっていても、やはりすんなりとは選べないのだ。

ジェイは微かなため息と共に新しい紙を一枚手に取り、そこに書かれている文面に目を落とした。せめてそれに集中しようと真剣に文字を目で追う。

しかし突然、ガラン、と大きな音を立てて外に面した扉が引き開けられ、ジェイは物思いに沈もうとしていた意識を引き戻された。

外からの風が吹き込み、ディーンがまた慌てて紙を押さえる。

店の中の三人が扉の方を見るより先に、音と共に滑り込んできた影が彼らの元へと走りよった。

「ディーン、ジェイ！　お願い、かくまって！」

「は？」

静かな店内に吹き込んできた突然の風は、見慣れた少女の姿をして

いた。

3：鬼じっこの始まり

ガラン、カラン、と再び乱暴にドアが開かれ、ドアベルが悲鳴を上げた。

バタバタと慌しく店内に入ってきたのは数名のローブ姿の男達だった。

ローブ姿と言う事は魔法学部の教授だとすぐにわかる。彼らの顔を良く見ればディーンやジェイでも一人二人は見覚えがあった。

(確か、精霊魔法関係の学科の教授達だな)

彼らはきよろきよろと店内を見回すと、窓際に座るディーン達の姿を見つけ近寄ってきた。大分長い事走ってきたのか、誰の額にも汗がびっしりと浮かび、息も荒い。

近寄ってきた教授達に一応の礼儀としてディーンが軽く会釈をすると、一番若そうな男が荒い息の合間から問いかけてきた。

「ア、アルロード君、今ここに、グラウル君が、来なかったかね？
探して、いるのだが」

「ええ、来ましたよ。そちらの技巧学部内に通じるドアから出て行きましたか」

「そうか、ありがとう！」

外に面する扉とはちょうど真反対にあるもう一枚の扉をディーンは指し示した。教授達は慌ててゾロゾロとそちらへと向う。

ふと、その内の一人が出て行く前に店内をぐるりと見回した。

だがさして広くない店内に隠れられそうな場所はさほど多くはない。

テーブルにかかっている布の丈もあまり長くなく、屈まずともその下を見て取れる。

規則正しく並んだテーブルの下には薄暗い影がわだかまるのみだ。教授はひよいと首を伸ばしてダリオの立つカウンターの中心を覗き込んだ。だが中にはダリオ一人が静かにカップを磨いているだけだった。

そこに余り期待はしていなかったのだろう。さほどがっかりした様子もなく、その教授も店を出て行く他の仲間達の後を追っていた。

はた迷惑な一団が去ると、店内にはまた静けさが戻ってきた。

「……行つたぞ」

その声に反応してごそごそと動く音が聞こえた。ゴツン、と鈍い音と共に、ディーンとジェイの目の前のテーブルが大きく揺れる。幸いにして飲みかけだったコーヒ―は、もうこぼれるほどの量はなかった。

うう、と小さく呻きながらテーブルの下から顔を出したのはアーシャだった。

「ありがと、二人とも」

アーシャは二人に礼を言い、ぶつけた頭を手で擦りながらジェイの隣の席に腰を下ろした。ディーンは少女に頷くと、テーブルの下に潜り込んだ少女を隠すのに手を貸してもらっていた闇の精霊に小さく礼をいい、彼らを開放する。

今日は天気もいいし、窓から差し込む明るい日差しは室内の影をいつもより濃く見せる。テーブルの下の影に見せかけた闇で小さなアーシャ一人を覆い隠す事はそう難しくはない。

おかげで少女の姿は下をちらりと覗いただけの教授には見えていなかったのだ。

アーシャは技巧学部へと続く扉に視線をやり、額に浮かんだ汗を手の甲で拭うとため息を一つこぼした。

「たくさん走ったら喉渴いちゃった」

少女はそういうとダリオに香草茶を注文した。

ディーンとジェイもついでに冷めかけたコーヒーを飲み干してお代わりを頼む。ダリオは三人の注文に頷くとカチャカチャと小さな音を立てながら作業を始めた。

「……それで。何故魔法学部の教授達に追われていたんだ？」

やがて注文の品が三人の目の前に並び、アーシャが香りの良いお茶を一口飲んだところで、ディーンは当然の疑問を少女に投げかけた。

アーシャはその問いに一瞬眉を寄せ、カップを置くとテーブルの端に寄せられた紙の束を指差す。

「そのせいだよ」

「……授業の選択？」

うん、とアーシャは頷いて口を開いた。

事の起こりは先日アーシャが提出した、次年度の選択科目の登録申請書だった。少女は春の休暇に入るとすぐに幾つかの学科を見学し、早々に選択科目を決定して提出を済ませていた。

最近アーシャは比較的真面目に授業を受けている。とはいっても寝ていない、というだけで他の本を読んだりしているのだがそれに関してはもはやほとんどの教授達は諦めている。

退屈な授業はそうやって時間を潰すとしても他に自由に選べる時間は色々な事を学びたいというのが今年のアーシャの希望だ。

彫金や木工、装飾技術などの魔具作りに役に立つ技術を更に学びたいと言つ気持ちも強い。

だから選べる科目のリストを休暇に入る前から真剣に見つめ、技巧学部の授業を中心に幾つもの希望科目を真面目に選んで登録申請した。

なのに、それに関して呼び出しが来るとは思っても見なかったのだ。

「グラウル君」

「はい」

今日の午前、アーシャは呼び出しの通知を受けて魔法学部のタワー教授の所へ出向いていた。訪ねた教授はアーシャの名前を呼んだがり、困ったように手元の紙を見つめている。それは先日アーシャが提出した登録申請書に違いない。

何か問題でもあったか、と少女が紙の内容を思い返しながら見つめていると、教授は顔を上げて口を開いた。

「君のこの……今年度の選択科目だがね」

「はあ」

「何人かの教授達から異論が出ている」

「は？」

教授の言葉にアーシャは首を傾げた。

「異論って、何に……ですか」

「うむ、その……つまり、君を魔法学科に転科させたらどうか、あるいはせめてそれに準じた学科の選択を薦めてはどうか、という意見が出ているのだよ」

アーシャはその言葉に思わず眉間に皺を寄せた。またか、と頭を抱えたい気分だ。

実は去年のあの初めての野外実習以来、何度もこういった教授達からの薦めにアーシャは密かに悩まされてきた。それでも今まではずっと学年半ばで選択を変えるのは難しいことを言い訳に逃げ回ってきたのだが、どうやらここへきて更に攻勢が強まったらしい。

恐らく、先の魔法競技会にも原因の一端があるだろう。

あの大会の決勝戦でアーシャは最後に精霊魔法を使ってしまった。普段の授業態度からその実力が疑問視されていたアーシャだが、

あれがきつかけでやはり精霊魔法を得意とする事が再確認されてしまったのだ。

アーシャは苦虫を噛み潰したような顔を隠しもせず、不機嫌な声で教授に応えた。

「変更はしない……しません」

「……君はきつとそう言うと思ったが。しかしだね、教授達の言う事も一理あるのだよ。以前学園長も仰っていたが、精霊魔法の使い手は確かに年々数を減らしている。この学園には優秀な生徒が多いから忘れられがちだが、それでも昔に比べればその傾向は顕著だ。君のように精霊に愛される素質のある生徒を一人でも多く育てたいと言うのが教授達の本音なのだよ」

アーシャはその言葉に首を横に振った。それは確かに理にかなっているように聞こえるが、少女には納得できない理由だ。その本音の中には表には出てこない思惑がある事を知っているからだ。

この学園は代々の学園長の方針で派閥争いなどが起こらないように厳しく戒めている。けれど水面下ではやはりそれに似た事は大なり小なり、起こりやすい。

教授達の中には授業を行うだけの者もいれば、研究もそれなりにこなす者、あるいは授業は行わずに己の研究と、卒業して研究員として残った者達の指導にあたるのみの者と、色々な人間がいる。

彼らのやり方はそれぞれなのだが、同じ学部と同系統の学科に所属する者同士は自然に寄り集まり、一つの共同研究会のようなものを構成することが多い。

するとそこには、一人の指導者の下に繋がるような縦の派閥ではなく、同じ系統の学科全体で研究を進め予算を勝ち取るうという横の派閥が出来上がる。

学園側としてもそういつた派閥が出来る事はなるべく避けたい所なのだが、研究と言うものは横の繋がりから様々な発見や発展が進

む場合が多い事も否定できないため、目に余るような活動をしなければ放置しているのが現状だ。

それでも、研究者肌の人間が多く集められている傾向からか、出世のためにガツガツとして、派閥を利用するような者は多くない。

だが代わりに起こりやすいのが、研究費を巡る静かな争いだ。

優秀な生徒を得て優秀な成績で送り出せばその実績から入ってくる生徒も増える。そうすればその学科へ支給される運営費、研究費も当然増え、自由な授業や研究がやりやすくなる。研究者肌の人間でも必死になる理由としては十分だ。

研究者達は授業を受け持つ教授達と連携をして様々な生徒の情報を集め、自分達の学科に貢献してくれそうな優秀な生徒を常に探している。

新入生の勧誘合戦や、下級生との交流と称した基礎学部生の興味を引く為の宣伝授業は季節になるとどこでも盛んに行われていた。

つまりそういった諸々の大人の事情から、タウロー教授の言う通り最近優秀な生徒の数を減らしている精霊魔法関連の学科は、一人でも多い使い手を求めているのだ。

しつこい勧誘に疑問を持って理由を調べた事のあるアーシャはその辺の事情を理解している。

だがそんなのはアーシャに言わせれば身勝手な大人の都合であって、使い手が減っている理由を探らずにとりあえず使える人間を集めようというのも怠慢に他ならない。やりたい事があるのにそんな都合に振り回されるのもごめんだった。

「そんなの六大属性ばかり教えるから……です。しかも机の上で教えたって大半が無意味だし。そもそも、弱い精霊しか使えない人が増えてるのは、素質のせいじゃない。精霊と仲良くなって、その力を貸してもらってという気持ちがないのが悪い。傲慢な気持ちで

精霊を使うから駄目なん、です」

アーシャの愛想のない答えに教授は苦笑を浮かべた。相変わらず彼女は誰に対してもほとんど敬語を使わない。それでも最近はタウロー教授や学園長にはかろうじて使おうと努力をしているようだが、ぎこちない事この上ない。

それをけしからんと言う教授も多いがタウロー教授はその理由を知っているため、気にしてはいなかった。

「六大属性については確かに偏りすぎだと私達も思っているのだよ。だが生憎それ以外をわかりやすく教える事が難しい。だからこそ、君のようにそれ以外も得意とする生徒に来て欲しいのだろう」

「私は……無意味に精霊を呼び出すのは嫌い。だから変えま、せん」
「ません、といった時にアーシャは軽く舌を噛んだ。
う、と呻いて口を手で覆う。

「また舌を噛んだのかね？ 君は相変わらず丁寧語や敬語が苦手だね。無理をしなくても良いよ」

「……どうも」

不満を滲ませた少女の声に教授はくすくすと笑い、アーシャは思わず頬を小さく膨らませた。

丁寧語や敬語を使うとアーシャは五回に一回くらいは舌を噛む。

これが、アーシャがそれらを使わない何よりの理由だった。

使わないのではなく、使えないのだ。

滅多にしない努力が今回も報われなかった事に内心で少々落胆しながら、アーシャは教授に迷いのない視線を向けた。

「とにかく、選択は変えない。それは私に許された自由なんだから
そう告げるとアーシャは話はこれで終わりとはばかりにくるりと踵を返す。

だがその背中に声がかかった。

「君の主張はわかったが……すまんがこれを持っていってくれ。君

の登録申請書だが、私としてはどちらの側にも立てないのですんなりと受理する事も拒否する事も難しい。提出までまだ時間が大分あるし、再考を薦めると教授達にうるさく言われているのだよ。せめて一科目くらい妥協してもらいたいと言うのが私の本音なのだが」

アーシャは仕方なく向きなおって執務机に歩み寄ると書類を受け取った。だが不機嫌な顔は隠しようもない。

少女の表情に気を悪くする事もなく、教授は書類を渡しながら独り言のように言葉を続けた。

「期限までまだ間はあるが……期限が間近になると、登録の駆け込みが相次ぐので学生課も教授達も大層忙しくなる。そうになると、一生徒の選択の中身まで、一つ一つ吟味するのはなかなか難しくくてね。毎年の悩みだよ」

ハツと顔を上げたアーシャに教授はいたずらっぽく片目を瞑って笑みを浮かべた。

「魔法学部の教授達は良く運動不足だと嘆いているよ。良かったら彼らをちよつとしたジョギングにでも誘ってやってくれ」

「……じゃあ、いつも走りやすい靴を履いておく事にする」

「それが良いだろうね。それと、図書館は最近どうも教授達で混雑しているようだよ。読書はほどほどに、な」

期限ギリギリまで逃げ回れ、図書館は張られているから近づくな、という教授の助言にこくりと頷くと、アーシャは踵を返し部屋の出口へと向かった。

しかし扉の傍まで来たところでその足が止まる。

部屋の外に複数の人の気配を感じたのだ。

「……教授？」

「はて……君への連絡に学生課を通したのが悪かったか。すまん。今度から気をつけよう」

教授の素直な謝罪に裏がないと見たアーシャはその言葉に頷いた。

「いいよ。ちょっと運動したかったところだし」

「うむ。健闘を祈る」

教授に笑顔を見せ、バン、と派手な音を立てて扉を開け放つと、アーシャはぱつと駆け出した。

前触れもなく開かれた扉に、中の様子を伺っていて逃げ遅れた教授が頭をぶつけて悲鳴を上げる。

「あつ、グラウル君！ 待ちたまえ！」

「話があるんだ、こらっ！」

目の前を走り抜けたのが目当ての少女であると気づいた教授達はバタバタとその後を追いかけ始めた。

春休みのはずの校舎内で行われた奇妙な鬼ごっこは、こうして始まりを告げたのであった。

4：ささやかなる助言

「……という訳で、逃げてきたの」

アーシャの説明に聞き入っていた面々は先ほど目にした教授達を思い返した。走り回されて髪はほつれ、息もすっかり上がって汗だくになっていた姿を思い出すと誰の顔にも苦笑が浮かぶ。

だがそれでもここまで振り切られず少女に着いて来たことは驚嘆に値する結果と言える気がして、少女の身軽さをよく知っているデーンは首を傾げた。

「経緯はわかったが……君が運動不足の教授達を振り切れなかったとは驚きだな」

「そついやそつだな。アーシャって走るの苦手だったか？」

ジェイの言葉にアーシャはぶるぶると首を横に振った。

「走るの苦手じゃない。けど、ずるいんだよ」

走り出した当初、教授達はあっさりと本気を出してもいないアーシャに引き離され、見失うのも時間の問題と思われた。

ところが、振り切られる寸前に頭の回る教授の一人が前を走る比較的若い教師に魔法を掛けたのだ。

それを見た他の教授達もまだ余力のある人間に次々と補助魔法を掛けた。様々な種類の魔法で速度を増し、疲れを癒し、力を漲らせ、呼吸器を補助する。

体力は衰えていてもそこはさすがに熟練の技だった。

教授達の連携技によって力を得た若手達は見る見るアーシャに追いつき、結局アーシャは魔法学部内を逃げ回り、上級学部の敷地内を大きく横切って技巧学部まで走らされるはめになってしまった。それでも、途中で技巧学部の造園科の生徒達が作った庭に飛び込み、複雑な幾何学模様に刈り込まれた植え込みを利用して、それら

に登ったり隠れたりしたことでもどうにか彼らをかなり引き離して少女はここまで辿り付けた。

しかしさすがにアーシャと云えど、上級学部内では対角線上に存在している魔法学部と技巧学部の間を全力疾走すれば疲労も溜まる。どこかに隠れて休もうと思った時に、この喫茶店の窓辺に見知った姿を見つけて駆け込んだ、と言う訳だった。

それらの顛末を聞いたディーンとジェイは思わずこぼれそうになった笑いをこらえ、何とも言えない表情を浮かべた。

「……それは、災難だったな」

「アーシャと爺さん連中の追いかけてここかあ……ちょっと面白そうだな」

「面白くないよ！」

アーシャは憤慨しているが、学園を疾走する少女とそれを追う口癖の教授達の姿は想像しただけである意味異様であり、さぞ面白い光景だったろうと二人は思う。

「笑い事じゃないよ、もう」

アーシャは二人に向かって口を尖らせた。

「悪い、つい想像しちまってさ」

「まあ、教授達も自分の学科のために必死なんだろう。生徒を巻き込むのは褒められたことではないが、そういうやる気がこの学園を支えているというのも間違いのない事実だろうしな。タウロー教授の言う通り、一つくらい妥協して選んでやれば静かになると思うが」

ディーンの言葉にアーシャは眉を寄せた。

「そんなの、絶対やだ」

「何故だ？ 君にとってどれも難しい授業ではないだろうか？ 何時ものように他のことをして過ごすという事もできるだろう」

「必修の科目ならそれでもいいよ。でも自分で自由に選択できる単位なら、できる限り自分の好きなものを選びたい」

アーシャはディーンの言葉にも首を横に振って答えた。少女の中

には自分なりの明確な基準があるらしい。

「もし教授達の言う通りの選択をしたとして、その先で私ができる結果が不本意なものだったとしたら、それをあの人たちは肩代わりしてくれる？ そうじゃないよね」

「まあ……そりゃ、そうだよなあ」

ジェイは予想外にしっかりとしたアーシャの意見に思わず低く唸った。

「他人の思惑に乗るなんて馬鹿馬鹿しいしね。自分で決めた事なら後悔したって構わないもの。だから、譲れないよ」

アーシャの強い言葉に、ジェイは思わず視線を下げた。

デインは俯いたジェイにチラリと視線をよこしたが、それには触れずにただ少女に頷いた。

「そうだった理由なら最もだ。確かに他人に強要されるべきではない事柄だからな。だが、しばらくは煩いんだろう？」

「うん。仕方ないから当分は家に籠ってるよ。期限ギリギリになったらこっそり申請書を出しに行くことにする」

アーシャの返答にデインは少し考え、頷き返した。

「それなら我々の誰かがその頃に預かりに行こう。学生課の前で捕まっても面倒だろうからな」

「本当に？ それすつごく助かる。ありがとう！」

デインの提案にアーシャは嬉しそうに微笑み、ほっとした様子を見せた。

その様子から見ても少女が書類の提出時の心配をしていた事は明らかで、デインは少々複雑な気分を胸の内に抱いた。

デインは昨年の夏以来、教授達に転科を薦められては断るのに苦心しているアーシャの姿を何度か見ている。

一つ二つ教科の選択を妥協するだけで少女がそれらの悩みから開放されるなら、そうする道もあるのではないかと彼は密かに思っ

いた。

次年度の授業の選択は確かに大切なことではあるが、それで己の人生の全てが決まってしまうわけではない。本当はもう少し気楽に考えてもいいはずなのだ。

頑なに己の意志を貫こうとするアーシャも、散々考えてなお自分の選択に迷いを残して決められないジエイも、方向は違えど結局はこうして同じように頭を悩ませている。

二人の仲間に、己が納得するまで悩み戦う道を勧めていいものか、適当なところでの妥協を提案すべきか。

だがディーンにはアーシャが納得する妥協点は今のところ思いつきそうにない。

それに、ジエイを悩ませているのはどうやら授業の選択とは別の事柄のような気がした。しかしジエイが話さない限りその内に踏み込むのもためられる。

最近ディーンは以前よりも遥かに積極的にこの友人達と関わりを持つようになってきている。

だが交友関係の狭さから来る彼の対人スキルの低さはそう簡単には解消されるものでもない。

論理的な会話で話を先に進める事はできても、相手の感情や雰囲気といったものの流れを掴み動かすような事は苦手なままだ。

(こういう時、もっと芸風に幅があればいいのだろうが……)

多少大げさな演技でも交えればまた違った流れが作れるだろうに、とディーンは考えたが、それはどうあっても彼には出来そうにもない芸当だった。

そういうことはジエイやシャルの担当だ。

だがその当人がこうして何か悩み事を抱えているとなると、それを上手く喋りやすい雰囲気を持っていくような事はディーンには難

しい。

友人として出来る助けはあるのかどうか、ディーンは目の前でこくくと美味しそうにお茶を飲んでいる少女と、その隣でぼんやりしている友人を見ながら考えていた。

「話し中に悪いんだが、また爺さん達が戻ってきたみたいだぜ」

しばしの沈黙を不意に破ったのはダリオの声だった。

彼は驚いて顔を上げた三人に、布巾を持ったままの親指で窓の外を指し示した。

技巧学部の校舎から飛び出すように作られている喫茶店は三方の壁が窓になっていてそのため外の様子が良く見える。

ダリオが指差した窓の向こうに三人が顔を向けると、教授達がきよるきよると辺りを見回しながら歩いてくるのが大分遠くに見えた。

どうやら技巧学部内の探索が失敗に終わり、別の方向にある学部入り口から出てきたところらしい。まだ距離はあるが彼らは真っ直ぐにこの店に向かってきている。諦めて戻る前にもう一度ディーン達から情報を得るつもりなのだろう。

アーシャはカップに僅かに残っていた香草茶をぐいと飲み干すと、ポケットから硬貨を取り出してテーブルに置いた。

「もう行くね。見つからないルートを探して真っ直ぐ家に帰るよ。」

二人とも、またね」

「ああ、気をつけて」

「捕まんなよ、アーシャ」

二人の励ましに頷くと、アーシャは身を低くしながら席を立った。「出て行くなら技巧学部内を通って裏庭に面した窓から抜け出した方がいいかもな。そこから医療学部の方に回れば、かなり歩く事にはなるが多分見つからないだろ」

助言をくれたダリオに頷くと、アーシャは素早く店内を横切り言われた通りに技巧学部へと通じる扉をそっと開いた。

「どうもありがと。お茶、美味しかった」

「おう、毎度」

アーシヤは閉じかけた扉からひらりと手を振ると、カラン、という小さな音を残して姿を消した。

また静かになった店内にディーンとジェイの小さなため息が同時に落ちる。

ジェイは黙ったままテーブルの上の紙を手元に引き寄せ、またそこに目を落とした。

アーシヤの妥協のない答えが多少の刺激になったらしく、その視線は先ほどよりも真剣だった。

ディーンはそれを見て少しばかりの安堵を覚えた。

「……おい」

ジェイの様子を観察していたディーンに、横合いから静かに声がかかった。

ディーンは観察を中断して声の主のダリオへと向き直り、彼に手招きされ、席を立ててカウンターへと近づいた。

「余計なお世話だけだよ」

ダリオは磨き終わったカップを丁寧に棚に並べながら、ディーンの方を見ずに独り言のように小さく呟いた。

「さつきはお前らに真剣に選べつつっておいてなんだが……あの嬢ちゃんによ、できればもう一度妥協を勧めたほうがいいと思うぜ。今年の爺さんたちは多分しつこいぜ」

「……理由は？」

窓の外の教授達の姿はまだ少し遠い。彼らもさすがに疲れが出てきたらしく、歩みは遅いようだった。

ダリオは窓の外にちらりと視線を投げて苦笑をこぼすと、言葉を続けた。

「ここは結構色んな学部の中に、年代問わず人気があるのは知ってるだろ。まあその関係で色んな話も入ってくる」

「ええ」

「噂……つつつても信憑性はかなり高いらしいが、次年度から魔技科の運営費がかなり増えるって話なんだ。新しい研究やらなんやらも始まるらしいしな。その理由は、お前の方が詳しいだろうが」

「……なるほど」

「魔技科の生徒が熱心に技巧学部にも出入りするようになったからな、こつちでも恩恵を受ける学科が幾つかあるらしいって話もある。その発端がああ嬢ちゃんだってんなら、落ち目の精霊魔法関係の学科としては必死にならない訳がねえだろ」

確かにそれでは教授達はアーシャの事を簡単に諦めはしないだろう。多少大げさではあるが、少女の存在は科や学部の盛衰に関わってくる話になりかねないからだ。

けれどそう言う事ならますますアーシャが妥協する可能性は低いとディーンには予想できた。

「しかし……彼女は頭がいい。恐らく己の好き嫌いだけではなく、そういう教授陣の思惑を理解したうえで拒絶しているのだと。そうになると、妥協点は見つかりそうにありません」

先ほどの会話での少女の言葉の中にも、他人の思惑に乗りたくないという言葉が確かにあった。

困ったように眉を寄せたディーンを見て、ダリオはくすくすと笑いをこぼした。

「お前が他人のことでそんな顔をする日が来るとはな。全く、ここらの責任者をやっていると退屈しないのが困りもんだよ」

ディーンは普段は常にほぼ無表情で、あからさまな快も不快も顔に表さない。その彼の 不快とはいえ 貴重な表情の変化を間近で見れたダリオは実に楽しそうだった。

ダリオに笑われ、ディーンは更に面白くなさそうに口を引き結んだ。

「ははは、そう面白くなさそうにすんな。もう一つ面白い話があるんだって。」

なんでも急な話なんでまだ公になってないらしいが、次年度から教師が二人増えて、精霊魔法関係の学科が一つ増えるらしいって話だ。知ってるか？」

「いえ……初耳ですが、教師の入れ替えなど別に珍しくもない話では？」

訝しげなディーンの言葉にダリオはにやりと面白そうな笑みを浮かべた。

「それがな、何でもこの春休暇に急に湧いた話で、しかも学園長のお達しで決まった事らしい」

「学園長の？」

「ああ。だからまだ誰もその新しい教師も、どんな学科が増えるのかも知らないんだよ。それもあって余計にあの教授達は恐々としてるのさ。自分達の立場が危ういんじゃないかってな」

なるほど、と頷くとディーンはそれらの話について考えを巡らせた。

学園長の推薦した新しい学科ならば、既存の精霊魔法関係の学科の教授達の思惑とは縁が薄いと見ていいだろう。

それならばアーシャの妥協も引き出せない事もないかもしれないなかつた。

新設でも一応精霊魔法関係の一学科だということなら、他の教授達をどうにか黙らせる事も出来るかもしれない。

「どうせ寝ていたり内職している学科が多いんだから、成績次第では必修を幾つか免除する方向に持っていけるかもしれない……その辺は交渉するか」

ぶつぶつと呟くディーンの様子に、ダリオはまた面白そうにけらけらと声を上げて笑った。

「そうそう。そうやって悪巧みしてる方がお前らしい。青春の憂い

みみたいな顔は似合わないから他の奴に任せてる」

ダリオの失敬な言葉に苦笑を浮かべながら、ディーンは窓の方を振り向いた。

ジエイは相変わらず手に持った紙とにらめっこをしていたが、それでも手元の用紙は少しずつ埋まってきたようだった。

仲間達の悩みの一つには解決の目処が立ちそうだが、もう一つの方はその原因もまだわからない。

彼が黙っている事を無理に聞き出すのはディーンの信条に反するが、このまま放置するのも気が引ける。

（悩むのは本人に任せて、何かあったときに動けるようにしておくか）

何事もなければいい、と胸の奥で呟きながら視線を店の入り口へと向ける。

カラン、とゆっくりと扉が音を立てた。

（まずは爺どもを追い払うか）

疲れた顔をした教授達を上手に言いくるめる言葉を考えながら、ディーンは薄く笑みを浮かべた。

5：朝もやの道

晴れた日の朝、アウレスーラ中央広場の端をアーシャはのんびりと歩いていった。

アウレスーラの街は、百年を越す歴史を持つこの規模の都市にしては随分とわかりやすい作りだ。

市街地を縦に真っ直ぐ割るように走る大通りを中心して、主要な通りは全てそれに垂直に交わり、あるいは平行に走り、縦横に編んだ網の目のようになっていた。これらは全て、街を利用する子供達が迷わぬようにと配慮しながら長年街づくりが成されてきた結果だった。

大通りには当然様々な商店が軒を連ねているが、そこにもある程度の住み分けがある。大通りの上下の端の方には、上は上級学部近く、下は基礎学部に近いことからそれぞれの生徒達に必要な店が立ち並び、そこから遠ざかって街の中心部へと近づけば、住宅街に住む大人達にも必要な店へと少しずつ店構えも品揃えも変わっていく。大通り以外の路地にも沢山の店があるが、そちらには表通りにはない個性的な品が集まる傾向がある。

それはそれで需要があるが、普通に生活する分には、大通りに出れば全てが揃うとあって良い。

その大通りには、ほぼ真ん中には大きな広場があり馬車の発着場や広い公園と隣接している。この作りからも、大通りと広場はこの街に住む全ての住民の生活の中心と言える場所だった。

その広場を歩く少女が目指しているのは、広場の西側に隣接する中央公園だ。周囲には人影は多かったが、この時間に少女と同じ方向へ向かう人はほとんどいない。逆方向を目指す人たちの間をすり抜けるようにして少女は足を進めていた。

アーシャは徹夜明けの重い頭をゆるゆると振って大きなあくびを一つこぼし、それから片腕を上げて伸びをした。もう片方の手には買ったばかりのパンが握られているので上げる訳にはいかない。背中には朝市で買ったばかりの果物や野菜、魚やパンなどが入った鞆が掛かっていた。

眠気に重くなってきた体を宥めつつ、少女は広場の喧騒から離れて静まり返った公園の入り口へ足を進めた。

中央公園は隣接する広場から西へ細長く広く続いている。

いつもは周辺の住民達の憩いの場所でそれなりに賑わっているのだが、朝の早い時間ではまだ人気も少ない。この時間は公園に隣接する広場から大通りにかけて朝市が開かれており、早起きな人々の目当てはそちらの方だからでもある。

公園の中には当然だが、遊歩道の脇や東屋に沢山のベンチが設置してある。

アーシャは静かな公園の中に踏み入ると、その道端の一つに歩み寄って腰掛け、荷物を置くと手に持っていたパンを一口齧った。

揚げた魚と少し甘みのある瑞々しい野菜をはさみ、それに酸味のあるソースをかけた調理パンはまだ暖かくて嬉しい。特に、うっかり食事も睡眠も忘れて読書に没頭してしまった日の朝などにはこと他美味しく感じられた。魚の揚げ物にかけられた辛味のある香料がぼんやりした頭を少しだけ起こしてくれるような気がした。

今が春の休暇で良かった、とアーシャは思いながらもぐもぐと口を動かした。

本を読んでいて夕食を食べ忘れた挙句、そのまま徹夜したと仲間達に知ればきつと盛大に嘆かれるに違いないからだ。

教授達に煩わされるのが嫌でここ数日家に籠っていたアーシャは、これ幸いとばかりに読みかけの本を読んだり、新しい魔具のことに ついて考えたりと、なかなか時間を有意義に使っている。今日もこ

のまま家に籠る予定だったが、その前にしばらく出かけなくて済むよう食料を仕入れようと市場に買い物に来たのだ。

用も済んだし、これを食べたら帰って寝ようとぼんやり考えながら、アーシャはぱくぱくとパンを口に放り込んだ。

やがて最後の一欠片を飲み込み、服に落ちたパンくずを払い落としてみるとあくびがまた一つこぼれた。街を緩やかに覆っていた朝霧も少しずつ薄くなり、辺りも段々と賑やかになってきている。

街が完全に目覚めてしまう前に帰ろうかと公園の入り口に目をやったアーシャは、そこに見知った姿を見つけて動きを止めた。

その人物は見慣れた明るい金の髪を揺らしながら、地面に視線を向けたまま憂鬱そうな足取りで近づいてくる。視線を下げている為かベンチに座る少女にも気づいていないらしい。アーシャは彼らしくないその様子に軽く首を傾げ、目の前をゆっくりと通り過ぎようとしている彼に声を掛けた。

「ジェイ？」

少女に気づかぬまま歩いていた少年は名を呼ばれてハッと顔を上げた。声のした方に顔を向けると彼をじっと見ていた少女と視線が交わり、ジェイはほっと息を吐いた。

「アーシャか……びっくりした」

「うん。おはよう」

「ああ、おはよ。悪い、気づかなかつたな。考え事してた」

ジェイはそう言うてくしゃくしゃと髪をかき上げ、ばつが悪そうな表情を浮かべた。

「どこか出かけるところ？」

「ん、ああ……その、ちょっと用事があったってこの公園の向こうの教区までな」

「教区？」

ああ、と頷いてジェイは首を傾げた。

「アーシヤは教区には行った事ないのか？ 名前のまんま、教会が集まってる地区なんだけど」

「行った事ない。ここにも教会があるのは聞いて知ってるけど……全部一箇所に集まってるの？」

「ああ。この公園を西に抜けたところに全く同じ建物が六つあるんだぜ。礼拝の日なんかは結構賑わってるよ」

全く同じ建物という言葉にアーシヤは不思議そうに首を傾げた。

六柱の神と精霊を湛えたそれぞれの教会は国や街によって大きさや作りに差があるのが普通で、例えば光の大陸の中央に近い場所にあるこの街ならば光の教会が一際大きく作られていても不思議ではないからだ。

建てる時の資金力や、寄付金の差という大人の事情も絡んでくる為、むしろ全てが同じ大きさという事の方が例外的だと言える。

知識としてただだがそれらの事情を理解している少女は興味を持ったような顔をして頷いた。

「皆同じ大きさって珍しいね」

「そうだなあ、そっぴや他のところじゃ違うもんな。アウレスーラは色んなところから学生が来るから、他大陸の人間も多いだろ？ だから昔から全ての神様を平等に讃えてるんだってよ。んな事で喧嘩になっちゃう困るもんな」

「ふうん、なるほど。じゃあジエイはこんな朝に教会に行くって事は、礼拝？」

アーシヤの問いにジエイは一瞬口ごもり、それでも笑顔を浮かべて首を横に振った。

「いや、ちよつと……人と会う約束があるんだ」

「そっか。なら途中まで一緒に行ってもいい？ 同じ教会っていうの見てみたい」

「あ、うん……まあいいか。別に構わないぜ。んじゃ一緒に行くか」「うん」

アーシャはベンチから勢いよく立ち上がると脇に置いてあった鞆を背負ってジエイの隣に立った。ジエイはまたゆっくりと歩き出し、アーシャもそれに続く。

二人はしばらくの間黙って歩き続けた。

もともとアーシャは沈黙が気になる性質ではないし、何か疑問や話題がない限り自分から口を開く事は少ない。けれど普段は明るいジエイが黙ったままでいるということが気になり、少女は時折ちらりと隣を歩く少年の顔を伺った。

だがジエイはそんな少女の視線にも気付かず、ただ足を前に運ぶだけだ。その足取りもいつもの快活な動きとは全く違い、実に重くゆっくりだった。

彼には何かこの先に行きたくない理由でもあるのかとアーシャは考えを巡らせた。けれどジエイは人と会うと言っていたのだから、単純に考えればその人に会いたくないという理由くらいしか思いつかない。だがそれを尋ねていいものかどうかは悩むところだ。

アーシャがそんな事を考えていると、不意にジエイの方が口を開いた。

「なあ、アーシャ」

「ん？ うん、何？」

ジエイは己を見上げて言葉の先を待つ少女の顔を見下ろし、迷うように口を開き、また閉じ、そしてまた口を開いた。

「……アーシャはさ、もう次の選択全部決めたって言ってたよな？」

「うん。もう決めたよ。今年は技巧学部の授業を沢山取るつもり。もつと色々な魔具を作れるようになりたいし」

「そっか。なあ、そういうの決める時って悩まないのか？」

ジエイの問いにアーシャはしばし考え、それから首を横に振った。「悩むよ。受けられる授業には時間的な限界があるから、無駄は出さないし。色々受けたいのに諦めなきゃいけないのも結構あるし、

体が二つあったらなっと思って思うよ」

「アーシヤは勉強好きだなあ」

「別にそんなに好きじゃないと思うけど……どうなのかな。ジエイはもう決まった？」

返された問いにジエイは言葉より先にため息で答えた。

「まだ半分くらいかな。俺、あれ決めるの苦手なんだよ。どれがいいのかさっぱりでさ。毎年ディーンやシャルに色々助けてもらうんだけど、駄目なんだよなあ」

武術学部は当然体を動かしての実技が多くなる傾向があるため、必修以外ではそれ以外の授業の選択を求められる傾向にある。

目指す道によっても選ぶ授業は様々だが、礼儀作法や話術、交渉術や品物の鑑定技術、地理や薬学などが比較的人気がある。武術だけではなく魔法を扱う才もあるなら魔法と武術を複合的に扱う術を学ぶ事も推奨されていた。

「ジエイだったら、もう少し魔法系の授業増やしてもいいかもね。

あと買ひ物の交渉とかも結構上手かったから、そういうのを更に勉強しても良いんじゃないかな」

「そうか？ まあ魔法に関しては今ほとんど取ってないからなあ。

けどアーシヤに教わってるからそれでもいいかと思うんだけど、ダメかな？」

「その辺はジエイの意思だから別にダメじゃないけど。でもまだ半分も残ってるなら、実践系のとか取っておいても悪くないんじゃないかな」

ジエイに精霊の加護があることは、その見かけからも入学時の検査からも、学校側には当然知られている。

そのせいで上級学部に上がる時に魔法学部からの彼への勧誘は一応あったのだが、本人に全くやる気がないことと、基礎学部での魔

法関連の授業の成績があまりにも悪かった事から、結局それはほんの一時のもので終わったのだ。

魔法競技会で精霊を使ったのだからまた勧誘が再燃しても良さそうなものだが、彼の使った魔法が見かけに極めて地味だったことと、魔具の補助があったという事、またアーシャが最後に使った精霊魔法によつてその印象がかき消された、ということもありジェイの周辺は未だに静かなままだ。

アーシャにとって選択への不干涉や自由さはかなり羨ましい事なのだが、ジェイにはその与えられた自由が悩みの種になっているらしい。

「うん、そうだなあ。ああ、悩むよなあ。もうそろそろ全部決めないとなんだけど……はあ」

そういつて吐き出されたため息は随分と長く重かった。

笑つてはいけないと思いつつも、アーシャは思わずくすりと笑つてしまった。

「いっぱいありすぎるから決められないの？」

「いや、まあ、それもあるけど……なんていうかさ、俺、自分にコレが向いてるって言える物が何にもなくてさ。だから、何を選んだらホントに自分のためになるのかわかんないんだよな。皆はとりあえず選んでみて、合わなければ来年変えればいいだろうって言うんだけどさ」

ジェイはそう言いながら俯き、足元に転がっていた小石をコンと蹴った。石は跳ねて道を逸れ、脇の草地へと転がっていった。

「それじゃだめなの？」

「ダメじゃないな……。けど、そうしてまた次の年も自分に合うものが見つからなかったら、とか余計な事色々考えちゃってさ。つまりダメなのは、俺だな」

ジェイは自嘲するような笑みを一瞬浮かべ、それを振り切るよう

に顔を上げた。けれど目に入るのはようやく木々が芽吹き始めた、色の少ない寂しいばかりの光景だ。見通しの良い木々の向こうには白い建物が見え、目的地が近いことを知らせている。

その景色に少しの慰めも得られず、ジエイはまた視線を落とした。「要するに、俺は自信がないんだろ？ 才能があるなんて胸を張って言えるようなものは何一つ持ってない。おまけに臆病だから、闇雲に先を選ぶのも怖い。それじゃダメなのもわかってんだけど……ほんと、どうしようもないよな」

「そうかなあ……」

ジエイらしくない弱気な様にアーシャは歩きながらその横顔を見上げた。

俯いたままの彼と背の低い少女の視線は丁度交わり、ジエイは心配させまいとするかのように淡い笑みを見せる。

「俺がこんなこと言ってたって、内緒な？ シャルやディーンに知られたら絶対怒鳴られたり、それはもう冷ややかな態度で馬鹿にされるに決まってるからさ」

「ん……わかった。言わない」

「ありがとな。あ、ほら、着いたぜ」

ジエイの言葉にアーシャが顔を前に向けると、もう公園の終わりを示す柵が目の前に見え、その向こうに赤茶色の敷石で作られた広い通りが姿を見せた。

「へえ……」

二人の前の幅広い通りの両側には、そっくり同じ見かけの白く大きな建物が左右に三棟ずつ、ある程度の間隔を置いてきちんと並んでいた。

白い石造りの建物はどれも背の高い優美な佇まいで、三角の屋根も同色の薄い石の板で張られているらしく、春の日差しを浴びて眩しい。

聖堂と思われる正面の建物の手前には何本もの立派な柱が立てら

れ、屋根を支えている。その柱の向こうに入り口であろう大きな扉が見えた。建物の裏手には一際背の高い鐘楼がそびえ、その向こうには鐘楼を囲むように背の低い建物が連なっている。恐らくは職員や訪問者用の宿舎だろう。

通りに面した教会の入り口は一つ一つがそれなりに広く取られているため、一番向こうの建物までの距離は結構長い。さらに通りから建物の裏手へとかけてその敷地は細長く続いているので、かなり贅沢な土地の使い方をしているようだった。

アーシャはその広い通りをゆっくりと歩きながら建物を仔細に観察し、あちこちに飾られた彫刻の見事さに感心したように何度も頷いた。

それぞれの建物は一見全く同じように見えるが、良く見ると壁に刻まれた聖句や紋章、飾られた像などが少しずつ異なっていて、その違いが少女には面白かった。

アーシャがそれらに目を奪われている間に、その少し先を黙って歩いていたジェイは一つの建物の前で足を止めた。

彼にとってはこれらも見慣れた景色で、特に何の感慨もわかない。ジェイが見上げた建物に描かれた紋章は太陽を模したものだ。飾られた像や壁の浮き彫り細工は奔放に跳ねた長い髪をなびかせた雄々しい男性の姿をしている。

ジェイは何となく周囲を見回したが辺りには特に人影もなく、見上げた建物にも人の出入りする気配はなかった。

学園が休みだと言っても、生徒以外の人間の日々の生活にはそれはあまり関係がない。当然、休養日でない限り大人達は毎日忙しく立ち働いている。

そんな平日の教会の朝の礼拝は熱心な人間しか来ない事もあり、かなり早い時間に行われている。今のこの時間には礼拝ももうとっ

くに終わり、教会の職員も周辺の住民も朝の仕事が始めているのか、教区は静まり返っていた。

「久しぶりだな、ここに来たの……」

ジェイは建物を見上げたまま小さく呟いた。呟きと共に思わずこぼれたため息は誰に聞かれる事もなく静かな通りへ落ちた。

「……アーシャ」

「ん、うん？ 呼んだ？」

彫刻に見とれていたアーシャは小さく名を呼ばれて振り向いた。少女の方を見ているジェイと目が合い、呼ばれたことが確からしいと判ると少女は彼の方へと小走りで近寄った。

駆け寄った少女が見上げた先にはいつもと変わらない笑顔がある。けれどアーシャはジェイの顔を見上げて首を傾げた。それは、いつもとはどこか違うように見える気がしたからだ。

ジェイは微笑みを浮かべたまま、何かをためらうかのようにゆっくりと口を開いた。

「……頼みがあるんだ」

6：望まぬ訪問者

木で出来た大きな扉がキィ、ときしんだ音を立てた。

教会の中は外と同じく人影もなく静まり返っていた。建物の中は外見よりも幾分簡素な作りで、広くガランとしている。

両開きの扉からは真っ直ぐに通路が続き、それを挟んで左右には細長い木の長椅子が整然と並んでいる。通路の突き当たり、正面奥に設えられた祭壇には外にあった物よりも大分大きな男性の像が飾られていた。

男性像は外にあった物と同じく長い髪をなびかせ、頭の上に光輪を模した冠を被り、右手には槍を携え左手で一輪の花を差し出している。

それがこの国で最も愛されている光の神、レイナルドの御姿だ。太陽を頭上に頂くこの神はその槍で昼の世界を守り、左手の花は妻である闇の女神シェイリアに捧げている、と謳われている。

それはジェイにとっては最も馴染み深い神だった。

神の姿を遠目に眺めながら、ジェイは静かな建物の中に踏み込んだ。見慣れた光景と常でない静けさに迎えられ、ジェイは祭壇に向かって進む。

だが数歩歩いた所でその祭壇の前に跪いて祈りを捧げる人影が視界に入り、彼の足はぴたりと止まった。

静かに祈りを捧げていたのは白い神官服に身を包んだ人物だった。祭壇の上にある飾り窓から淡く光が入り、恐らく男性であろうその人の神官服をより白く浮き上がらせていた。その白い背に流れる髪は男性にしては長いが、その体の線が女性ではない事を物語っている。物言わぬ神像の前に跪く姿はまるで一服の絵のように様になっ

ていた。

ジェイは一瞬ぐつと唇を引き結び、それからそれを無理やり笑みの形に動かした。微笑みを作れた事を確かめてから一歩足を踏み出す。踏み出した靴が大理石の床に当たり、カツン、と音を立てた。

その音を合図にしたかのように、祭壇の前の青年は祈りを終えて立ち上がり、そしてゆっくりと振り向いた。

背中で結んだ彼の長い金の髪が振り向く体に一瞬遅れて流れ、天窓から差し込む光を受けて煌く。その色はジェイの髪とよく似た鮮やかな金色をしていた。

真つ直ぐにジェイに向かう瞳は透き通った水色。穏やかなその顔には明るい笑みが浮かんでいた。

「ジャステイン？」

「サディアス……兄貴」

名前を呼ばれたことに青年は更に笑みを深め、足早にジェイのところへ歩を進めた。簡素なふち飾りを施された白いローブが彼の動きに合わせてひらひらと揺れる。

「久しぶりだね、ジャステイン！ また随分背が伸びたんじゃないか？」

青年　サディアス・ジェム・イージェイ　は久しぶりに会う弟を抱きしめようと両腕を大きく広げた。

けれどその腕は一歩足を引いたジェイにするりとかわされ空を切る。

「まったく、勘弁してくれよ、兄貴。もう抱きしめられて頭を撫でられる年でもないんだって」

ジェイはそう言って彼に困ったような笑顔を向けた。

サディアスは一瞬残念そうな顔を見せたが、諦めたように一つ頷くとまた笑顔を見せた。

「それもそうか。つつい、まだ小さな弟のような気がしちゃうん

「ただど……いつの間にかもう背丈もあんまり変わらなくなってるもんなあ」

少しばかり残念そうな兄の声にジェイは曖昧な笑みで応え、久しぶりに見たその姿を少し距離を取って観察した。

サディアスはジェイにとって三番目の兄だ。

ジェイとよく似た色合いの髪や目を持っているが、年が離れているせいか顔立ちはやさほど似ていない。少しばかり幼さの残る明るく華やかな顔立ちの弟とはまた違い、彼は穏やかで優しげな風貌をしていた。

その容姿に違わぬ穏やかな人柄で昔から彼は周囲の人間に愛されていたが、今は神官という職にあることもあつてか少しばかり親しみやすさが抜け、どこか神聖な雰囲気を感じさせている。

外出用らしい控えめな神官服を身につけていても、その神聖さは損なわれる事はないらしい。

彼の短めのローブの胸には太陽を模した紋章が刻まれ、その脇には神官位の三を表す印が小さく描かれている。三位とは、上から数えての三番目という地位だとジェイは記憶していた。

時折思い出したように便りを寄こすこの忙しい兄が、五位から四位に上がったと書いていたのはいつの手紙だったか。

彼の若さにして神殿の三位というのはかなりの地位だ。だがその地位もジェイにとっては特に自分と関係があるわけでもなく、彼は無感動にその印を眺めるのみだった。

実際、それがいつ変わったのかさえ兄が知らせてこない限りジェイは知らないのだ。家族の中でそれを知らないのは恐らく自分ひとりだろうと考えるとなんだか可笑しく思え、ジェイは浮かべていた笑みを少し深め、大げさに肩をすくめて明るい声を上げた。

「何だよ兄貴、神官ってのはひょっとして意外に暇なのか？ 三位の神官様が、わざわざこんなとこまで弟に会いに来れるなんてさ」「ひどいなあ、兄が忙しい合間を縫って可愛い弟に会いに来たって別におかしなことはないだろう？」

サディアスもジェイの言葉に応え、同じように少々大げさに嘆くような仕草をしてから、明るく笑って見せる。そのやり取りはどう見ても仲の良い兄弟のものにしか見えなかった。

けれど、ジェイは笑顔を崩さぬまま、よく言う、と胸の内で小さく呟き暗く嗤った。

この学園にジェイが入学してからの九年間に、祖父母以外の家族が彼に会いに来た事は一度もない。

家族を学園に招待する事が許可されている行事にも、来てくれたのは祖父母だけだ。それを今更恨む気持ちはジェイの中にはないが、それでもそんな事を良く言える、と呆れる気持ちは湧いてくる。

けれどジェイはそれを口にする事はしなかった。サディアスは祖父母以外で唯一ジェイを気に掛けてくれた家族だったからだ。

加えて、彼が神殿で忙しく働いている事も良く知っている。人当たりが良く職務にも熱心で、治癒の魔法に長けた彼は神殿で多くの人間から頼りにされる、非常に多忙な存在なのだという話だった。

考えてみれば、実家に帰ることも少ないらしい彼がジェイの学校生活のことなど知らなくても不思議ではないのだ。

それに何より、彼が正式に神官になってからは忙しくなり会うことも殆どなくなったからといって、幼い頃に手を差し伸べてくれた事実がなくなるわけではない。

ジェイは胸の内で己にそう言い聞かせた。

「神官がそんな小さな理由で神殿を離れていいのかよ、兄貴」

「ここは王都からなら馬車で四時間ほどだからね、ここの教会を訪

ねて講話をするっていう条件で、許可が下りたんだよ」

そういつて微笑む顔は、なるほど非の打ち所のない、神殿の出世頭らしい雰囲気だった。

『神殿』 と呼称される場所はこの世界には六つしかない。

神殿とは六柱の神を祀る六教会の組織の頂点に立ついわば総本山で、六大陸にそれぞれ一つずつ存在している。

このレアラード大陸の神殿といえば当然光の神レイナルドが祀られており、所在地はハルバロードの王都にある。

どの神殿も多少の誤差はあれどそれぞれの大陸のほぼ中央に存在し、かつての戦乱の時代にはその土地をどの国が擁するかという事も、度々戦いのきっかけになったらしい。

だが今はそんな時代もはや遠く、大陸同士の交流が盛んになっていることもあり、六教会は勢力をほぼ同じくして全ての大陸に広がっている。

世界中に広がる教会を束ねる神殿とは、それぞれの神を愛する人々が人生で一度は訪ねてみたいと思ういわば心の拠り所であり、同時に身近な教会とは一線を画す遠い存在でもあった。

神殿と教会ではそこに勤める人々の位にも大きな隔りがあり、教会で司教や司祭を勤めていたとしても、その地位は神殿所属の神官や巫女には遠く及ばない。

ジェイが聞いた所によれば、神殿は神を讃える為にのみあるという観点から権力との癒着を嫌う面があり、その内部は完全な実力主義の世界なのだという。世事に疎い面のあるジェイでも知っているくらいなのだから、恐らくそれは真実なのだろう。

そもそも神殿というのはそこに入る為の道自体がごく限られているものらしい。

神殿で必要とされるのは、精霊の強い加護を持つ者や、魔法に強い適正のある者だ。そういう才能を持つ者だけが神殿の付属の学校に迎えられ、そしてそこを優秀な成績で卒業した者だけが神殿に入る事を許される。入学の条件がとても厳しい為、学校に通う生徒の数もかなり少ない。

だがその少ない生徒達も何年もの間にゆっくりと淘汰される為、神殿に上げれるものはごく僅かだった。

まれに神殿の有力者の推薦で外部から人が入ることもあるが、それは数少ない例外だという。

ちなみに学校を出て神殿に入れなかった者達の大半は、各地の教会の司祭などに就任することとなる。

神殿の中に入ってからも位が上がるかどうかは派閥争いなどとは無関係で、全てが個人の能力の優劣によってのみ決まるらしい。

それを考えると、神殿学校を卒業してすんなりと神殿の神官に就任し、僅か五、六年で上から三番目の位まで登りつめたこの兄の実力も判ろうというものだ。

ジェイは冷めた気分でそんなことを思い返し、ため息を押し殺して笑顔に変えた。

「講話か……さすがに理由なしでこれなくらい人気なんだな。それで、忙しいのに一体何の用なんだよ、兄貴。まさか久しぶりに弟の頭を撫でに来たなんて訳じゃないんだろ？ 俺、今は次年度の授業の選択で忙しいんだけどな」

わかりきった事をわざわざ聞いたのはジェイのささやかな意趣返しだ。

案の定サディアスはその問いに微笑を隠し、口ごもった。

ジェイが無言で答えを待つ中、サディアスはしばらくためらったあと静かに口を開いた。

「家から……手紙は届いたかい？」

予想していたその言葉に、ジエイは笑顔で頷いた。

「ああ、そのことか。うん、来たぜ」

明るく答えたジエイに、サディアスはほっと小さく息を吐く。

「返事はした？」

「ああ、もうとつくに。何の話かと思っただらそれだったのかよ。その話なら、俺はちゃんと断ったぜ？ 親父たちに聞かなかったのかよ」

「いや、聞いたよ」

困ったような顔で頷くサディアスに、ジエイは不思議そうに首を傾げて見せた。

「ならなんでわざわざ？ ああ、また親父たちに頼まれたのか。兄貴からも俺を説得してくれって」

「僕は、一度きちんとジャスティンの意思を聞こうと思って来たんだ」

安い芝居だ、と思いながらも、ジエイは浮かべていた笑みを曇らせ、眉を寄せて大きく首を横に振った。

「俺の意思なんて散々手紙に書いたろう？ どんな条件を出されても親父たちの薦めた結婚を受ける気は無いつて」

ジエイはそう言いながら頭を掻きながら大げさにため息を吐いて見せた。

何度も何度も手紙を書いた事も知っているくせに、これ以上何を聞きたいんだと声を荒げたい気分だったが、それをぐつと堪える。

その気分が顔に出そうになるのをごまかすように、ジエイはもう一度首を横に振った。

「どうしても？」

「どうしても、だ。そもそも親父達も今さらどうして俺に構うんだか。もう放っておいてくれって兄貴からも言ってくれよ。俺は家の為に結婚する気はこれっぽっちもないんだって」

「家の為じゃないよ。父上達はジャスティンのためを思つて……」
ジェイは脇にあつた長椅子の背もたれに乗せていた手をぐつと握り締めた。

だが手の下からみしりと小さな音が伝わつて、慌てて力を抜く。教会の備品を壊す訳にはいかないと考えたが、そんな事を考える余裕があるほど、こんなやり取りに慣れた自分が滑稽でならなかつた。「俺のためか。なら兄貴は、この話の一体どこが俺の為だつて思うんだ？」

「父上達は懸命にこの学園に縁を探したと聞いたよ」

「懸命に、ね。俺が貰つた手紙にはそう書いてなかつたぜ。こつ書いてあつたんだ。」

『アウレスーラに通う良家のご息女とのご縁を頂いたので、婚約の話を進めている。同じ学園に通う二人なら仲を深める機会が多くあるだろう。先方はお前が士官学校出でなくても良いと言つてくださった。この良縁に感謝し、我が家の恥とならぬ為にも更なる勉学や武術の研鑽に励め。正式な結婚は卒業後になるが、まずは夏にでも改めて席を設け……』

とかなんとかさ」

忘れてたくても忘れられない文面を諳んじて、ジェイは肩をすくめた。

目の前の兄はジェイの語つた内容を聞き眉根を寄せ、穏やかな顔立ちに似合わぬ表情を浮かべてため息を吐いた。父親が彼に語つた話と手紙の内容が幾らか異なつていたのである。

「教えてくれるか、兄貴。今の話のどの辺が俺の為なんだ？ この学園に相手がいるつてどこかな？ それとも良家のつてどこ？」

「ジャスティン……」

「大体さ、俺の為になることを、親父達が知ってるわけないだろ。」

あの家の一体誰が、俺の望みを知ってるつていうんだよ。祖父さん達でさえ、この話に反対しなかつたつて言うのに」

「それは……お祖父様達なりに君の事を思つてのことだよ。お祖父様達はジャスティンが先方のお嬢さんとゆつくり知り合う期間があつて、その上で同意したならと条件を出されていた。ちゃんと君の事を考えて下さつているよ」

兄の訴えにジェイはフン、と鼻を鳴らして応えた。

いかにも神官らしい美しい言葉に胸が悪くなりそうだった。

祖父母はいつもジェイの話を聞き、彼が行きたいと言う道を開くべく手を貸してくれた。ジェイの為に父と祖父が度々衝突していた事もよく知っているし、それに感謝もしている。

けれど今回だけは、父からの手紙に祖父母は反対しなかつたと書いてあつたのだ。すぐにそれを問いただす手紙をジェイは祖父母に当てて出したが、返つてきた返事は反対しなかつたのは事実だと言う事と、父ともう一度よく話し合えという言葉のみだった。

父の手紙よりも、持ち込まれた話よりも、祖父母の裏切りが何よりジェイには痛かった。

けれどその痛みを隠してジェイは笑う。

ただ、ちゃんと笑顔を作れているかどうかの自信はもうなかつた。

「前はじいさん達は俺の好きにしていって言つてくれてたんだ。

それをここに来てこれじゃあ、俺を裏切つたのと変わらないだろ？」

「……父上達も、お祖父様達も、君に平穏な道を歩いて欲しいんだよ。君が平和な人生を歩めるように、一人で遠くへ行ってしまわないように。」

ジャスティン、父上達は昔から、それを何より恐れているんだよ」

「はは、兄貴は夢見すぎだつて。俺にはそうは思えない。そんな言葉、どうやって信じていうんだよ」

笑顔で告げられたはつきりとした拒絶に、サディアスは悲しそうに顔を歪めた。

その優しく穏やかな顔でこんな風に悲しげにされたら、きっと誰もが泡を食つて飛んできて彼を慰めるのだろうな、とジェイは胸の

内で皮肉に笑う。

清らかな神官の言葉一つ信じられない自分は、きつとさぞ汚れているのだろうと思うと可笑しかった。

「信じて欲しい、ジャステイン。父上は怖いんだ。だから、君が怪我をしたりしないように剣に触れさせず、本を取り上げて君から世界を遠ざけようとしたんだよ。それが子供のためには少しばかり行き過ぎてるって言うことはあるけれど、幸せを望んでいるのは本当なんだ」

清らかな彼はそんな弟の胸の内も知らず、ただ真摯に訴えかけてくる。

彼をうっかり殴ったりしてしまわないように懸命に己を抑えながら、ジェイは深く息を吐き出し、首を横に振った。

「ならもしそれが本場で、勝手に俺の人生に平らな道を用意したのが家のためじゃなかったとしても、結局は突き詰めれば自分の安心のためなんだろ。一体どこに俺の意思がある？ それでも俺にそれを喜べって？」

弟の言葉を悲しげに聞いていたサディアスはしばらく考えるように沈黙した。お互いの言葉は相手を不快にさせるだけで、どこまでも平行線を辿っている。その経験から他人との対話になれた彼はそれらを振り返り、やがて顔を上げて真っ直ぐに弟の目を見つめた。

「それなら……ジャステイン、君は何になりたいんだい？」

己の言葉に返された問いを聞いた途端、ジェイは思わず体を硬くした。不意に投げられたその問いは痛みを伴ってジェイの胸の奥深い所に刺さる。

それは今まで家族の誰もが触れなかった言葉であり、そして同時にジェイが自分自身に投げ続けている言葉に他ならない。

「君の望む道を教えてくれないか？ 平穏な道を蹴って、君はどこへ行く？ このまま学園を出て、開拓者にでもなるのかい？」

黙ったままのジェイの顔を真剣に見つめ、サディアスはゆつくりと首を横に振った。

「僕にはそれには賛成できないよ。近年、開拓地はどこもなかなか開拓が進まず苦勞していると聞いている。魔物の数が増え、奥地に踏み込むのが難しくなっているらしい。そんな危険な所に誰が息子や孫を送りたいと思う？ 僕だって同じだ。そんな所に弟を送りたくない」

「……それでも、それは俺が決める事だ」
搾り出すように発した声は弱々しかった。

そんな答えしか返せない己に嫌気が差し、ジェイは拳を握り締める。

サディアスは弟の心中をどう読んだのか、不意に穏やかな微笑みを浮かべた。

「ジャステイン、僕と一緒に、神殿に来ないか」

「……え？」

「君は潜在的には僕と同じくらいの精霊の加護を持っているはずだよ。そのくらいの加護があれば神殿は喜んで迎えてくれる。僕が推薦すれば神殿学校へ編入もできるはずだ」

その言葉にジェイは首を横に振る。

神殿で求められる素質を己が持っているとは思えなかった。

「俺は魔法には向いてない」

「神殿で必要とされるのは魔法だけじゃないよ。むしろ加護の他に体術や剣術の素養がある人はかえって歓迎されるよ。魔法に関しては宣誓をすれば今よりもずっと強くなるし、僕が教えることだってできる」

「……」

サディアスは腕を伸ばすと、黙り込んだジェイの手をとって強く握った。

昔握った小さな手とは随分と違う、固く鍛えられた感触に彼は目

を細めた。

ジェイもまた、兄の手が昔のような少年の柔らかさをなくし固く大きくなつた事、けれどももう自分とさほど変らぬ大きさである事に気付く。

ただその温度だけは、昔と変わらず暖かった。

「昔、小さい頃に君に精霊の話をした事があつたね。憶えているかい？」

「……… 忘れた」

「あ那时的約束を、随分遅くなつたけれど、今なら果たせるんだ。今なら、僕は君の力になる事ができる。それにね、神殿は権力との癒着を嫌うから政略結婚を基本的に禁じている。神殿に入れば意に沿わぬ結婚をしなくても済むんだ」

「……… その話、親父達には」

「もちろんしたよ。父上達は、ジャスティンがそれを望むならそれでいいって。その時は縁談も白紙に戻してくれるって言っていたよ」

「………」

兄の言葉に嘘はないように思われて、ジェイはただ黙り込んだ。不意に目の前に示された二つ目の道は、それもまた自分の望まぬ方角へと伸びている。

けれどどうしてか、それを笑い、蹴飛ばす言葉が出てこない。

「ジャスティン、父上達は君の事を正しく知ろうとしてこなかったけれど、君は父上たちの事をどのくらい知ってる？ 彼らだって一人の人間なんだよ。君の知らない彼らの心の中に、君を思う気持ちがあるかないとどうして言い切れるんだい？」

「それは………」

「父上達が身勝手な事は僕も認めるよ。けれど、彼らは君に平穏な道を与えたいんだ。僕も同じ。身勝手だと分かっているけど、弟が険しい道を進む事を望まない。彼らは彼らなりに君の事を思っている

んだよ。それが君の望む形でないのは残念だけれど……」

サディアスはそつと弟の手を開放し、代わりにその柔らかな髪に手を伸ばした。

ジェイも今度は逃げようとはせず、昔と変わらない柔らかな金の髪を、昔と同じようにサディアスは優しく撫でた。

「よく考えてみて欲しい。まだ返事は急がないから」

7：二つの道

大きな扉は来た時と同じようにキィ、ときしんだ音を立てて開いた。

ジェイは背中に感じる兄の視線にも振り向くことなく、ゆっくりと両開きの扉の片側だけを押し開き、少し広めに開けて外に出た。

しかし外に出た途端に目に飛び込んだ日差しの眩しさに思わず足が止まる。その背後を一瞬だけ何かスルリと通り過ぎたような気配がした。それを確かに感じてから、ジェイはまたゆっくりと扉を閉めた。

ジェイはそのまま黙って教会の前を離れ、さきほど通ってきた公園の方へと歩き出した。少し歩いたところで公園の方からやってきた老人とすれ違ったが、それ以外は辺りは相変わらず人影も少なく静かだった。

やがて公園の入り口から少し中に入ったところでジェイは足を止めた。

周りを見回したが近くに人の姿はない。それでも念のためと遊歩道から外れて公園の奥へと続く細い道に入り、近くにあった東屋まで行くと中であつた木の椅子に腰掛けた。

そこに座り、もう一度周りに人がいないことを確かめてから、ジェイは目の前の何もない場所に向かって一つ頷いた。

途端、何もないはずの空中がゆらりと歪む。まるで陽炎が立ったように歪んだ空気の向こうから姿を現したのはアーシャだった。

姿を見せた少女は、指から外した白い石のついた小さな指輪を腰のバッグの中にしまいこんだ。以前、魔法競技会の時に作った姿を消すための指輪を、アーシャは今までずっと身につけていたのだ。

ジェイはアーシャのその様子をじつと眺めていたが、少女が彼に向き直ると途端に視線を下げ、その腰にぶら下がった緑の石の嵌った飾りに目を留めた。

「……聞いてたか？」

「うん」

「どう、だった？」

ゆっくりと顔を上げたジェイの視線を真っ直ぐに受け止め、アーシャは口を開いた。

「あの人の言葉に、嘘はなかった」

「……そうか」

「あの人は、少なくとも自分の言った事を真実だと信じていたよ。それが本当にジェイの為になるんだって思ってた。ただ……何か、小さな不安みたいなものも抱えてたけど、それ以上は良く分からなかった」

教会に入る前、ジェイがアーシャにした頼みごととは、姿を隠して教会の中に入り傍で話を聞いて欲しいと言う事だった。

更に聖霊石の力を借り、サディアスの言葉に嘘がないか、彼の内心を探つて欲しいとジェイは頼んだのだ。

「開拓地がどうかかっていう話も本当か？」

「うん、あれも本当だよ。その話は私も聞いたことあるし」

サディアスが語った未開地域の開拓の不振の事を、アーシャは街の本屋や図書館で手に入る本で読んで既に知っていた。

魔物の増加と行動範囲の拡大、植物の異常繁殖による開拓地への侵食、突然の豪雨や長い干ばつなどの、未開地域での気候の異常

近年、これら様々な現象がどこの大陸の未開地域でも規模の大小はあれど頻発し、一時広がりを見せた人間世界の地図は、停滞どころか後退を余儀なくされているのだという。

しかもそのどれもが原因不明で、多くの研究者が開拓地に請われ

て理由を探っているらしいが、成果が上がったと言う話はまだ聞かえてこない。

アーシャの語る開拓地の事情を詳しく聞き、そうか、とジェイは静かに頷いた。

「……ごめんな、アーシャ。嫌な事させちゃって」

「ううん」

アーシャは首を横に振り、荷物を下ろすとジェイの隣に腰を下ろした。

横からジェイを見上げると、彼はアーシャの方に笑顔を向けた。

「参るよな、ホント。選択肢を二つ用意したからそこから選べなくて、どっちも望んでないっつーのに。ひでえよなあ。兄貴が、そんな事が俺の為になるって本気で信じてるなんてさ。笑えないってのなあ？」

ジェイはそう言いつつもくすくすと笑いながら東屋の壁に寄りかかり、微笑を浮かべたまま遠くを見つめた。その瞳に何を映しているのか、見上げたアーシャには分からない。

黙って視線を向けるアーシャの方を向きもせず、ジェイはどこか遠くを見ながら口を開いた。

「……なあ、例えばさ、目の前に道が二つあったとして、アーシャだったらどっちを選ぶ？」

「どんな道？」

「そうだなあ、多分どっちも真っ直ぐ続いててなだからで、整備されてて綺麗で。両脇には花とか植えてあつてさ……危険もない。草原を突っ切る街道みたいな感じかな。んで、どっちの道も大きくてキレイで平和な街に続いてるんだらうな」

アーシャはジェイの語るそんな道を想像してみた。

その道はどちらも平坦で、何処までもただ真っ直ぐに前に続いている。

勾配の少ない道は遙か先まで見通せそうで、道の脇には多少の色の違いはあれど、美しく整えられた花が並んでいる。

今までも沢山の人が歩いたのだから石ころ一つないその道を、自分が歩く姿を想像する事はさほど難しくはない。その先に待っている、穏やかで平和な街も、美しい景色も。

しかし少女は想像の中のそれらをくすりと笑い、首を横に振った。「どんなに楽な道で、キレイで平和な景色が待っていていようと、行きたくないなら選ばないよ。それくらいなら、草原の中を歩いた方がずっといい」

「なら、その草原の中には危険がいっぱい待ってたりしたら？」

「危険があってもそれが自分の選んだ道ならそれでいいんじゃないかな。行きたくない場所に行って生きながら死んでるような生活を送るのと、行きたいところへ行ってあっさり死ぬのと、そんなに違いはないよ。」

それに……そういう危険に対抗するために、こうしてこの学園に通ってるんじゃない？」

少女の力強い言葉にジエイは目を見開き、それからまるで自嘲するような笑顔を浮かべて頷いた。

「そっか……そうだよなあ。確かに、そのためにここに来たんだよな、俺」

「それでも、ジエイは迷うの？」

向けられた問いに、ジエイは笑った顔のまま頷いた。

遠くを見ていた視線を戻し、足元に落とす。

「昔はさ……選べたんだよな。ほんととはな、俺がここに入る時も、親父と祖父さんはそりゃあ揉めたんだよ。」

あの頃、親父は俺を士官学校へ続く、王都の基礎学部に入れるって言っていたんだ。お袋は俺を全寮制の学校に早々に放り込みたかったみたいで、早いうちに神殿学校を受けさせたらどうかって言うてたらしい。だから、前からどっちもあつた話なんだ。

けど、俺はどうしてもここが良くて、祖父さんと祖母さんにそりやもう頼み込んで味方になってもらって、どうにか説き伏せたんだよ」

幸い、アウレスーラの基礎学部にも寮があつたため母の反対が弱かつた事もあり、祖父母の強い後押しでジェイはここには入れる事になった。

ジェイがこの学園を選んだ理由は単純だつた。唯一の友人だつたシャルと同じ学校に行きたかつた事と、兄達と同じ学校に行きたくなかつた、その二つだけだ。

その頃には、やっと触らせてもらえるようになった剣も、つけて貰えた家庭教師も、ジェイはもう欲しくなくなつていた。誰も彼もが兄達とジェイを比べたからだ。その比較に必死になつて応えようとしてみたが、それらはジェイの望むものへは繋がらなかつた。ジェイはやがて、結局何をしても己の望みはあの家では叶わないのだと幼心に悟つて諦めてしまった。

「ここでなら、俺だけのものが何か見つかるかもつて思つたんだ。なんでも勉強できるつて聞いたからさ。単純だよなあ」

「ふうん。じゃあ、私と一緒にだね」

アーシャはジェイの言葉を笑いもせず、ただ頷いて同じように遠くの景色を見上げた。

「私も、ここなら色々あるつて聞いたから来たんだよ。何か一つくらい良いものが見つかると思つて。あとは、暇つぶしかな」

「そつか……見つかつたか？」

「うん。見つかつた」

何をとはアーシャは言わなかつたけれど、ジェイはその言葉に何度も頷き、良かったな、と小さく呟いた。

それを見つけた少女が羨ましくもあり、また彼女がそれを見つげられたことが我が事のように嬉しくも感じられてジェイは微笑んだ。

自分にはまだ見つけれなくても、ここには希望があるとジエイにも少しばかり信じられる気がした。

「ねえ、ジエイ」

「うん？」

「あのね、さつきみたいな時……笑いたくない時には、笑わなくていいと思うよ」

ジエイはその言葉に小さく息を呑んだ。

それに応えようと口を開きかけたが言葉は出ず、また口を閉じて、足元に落としていた視線を前へと向ける。

少し離れた場所に見える遊歩道を、一組の親子連れが歩いていくのが見えた。ゆっくりと歩く母親らしき女性の前を、兄弟だろっ子供二人が手を繋ぎながら走っていく。

大きい方の子供が小さい方の子供の手を引いて走っていくのを眺めながら、ジエイは無意識のうちに自分の手をきゅっと握りこむ。けれど自分の手のひらの暖かさが嫌で、そっとそれを解いた。

「俺の……聞こえたか？」

「うん、少し。ごめんね。けど、聞かなくても顔見てたらわかるよ」

「いや、良いよ。分かってて頼んだんだ。けど、顔にも出てたなんてみっともねえなあ……それ、兄貴は？」

「あの人は、気付いてなかったよ」

「そうか……」

ほっとするべきか、嘆くべきか。

その答えは出ず、仕方なくジエイはまた曖昧に笑う。

アーシャはその笑顔にもう何も言わなかった。ただ心配そうな瞳を静かに向けるのみだ。少女にそんな目をさせたことを、ジエイは胸の内で悔やんだ。

「アーシャ、あのさ、今日の事全部……あの二人には、言わないでくれ」

「けど……それでいいの？」

「ああ、まだ時間はあるし、俺が、一人で決めるべき事だと思うから。頼むよ」

ジェイの言葉にアーシャは迷ったのか、しばらく視線を彷徨わせ、しかし結局はこくりと頷いた。

「わかった。これも言わない。でも……決めた時は、言わないと駄目だと思っよ」

「ああ、分かってる。その時はちゃんと二人にも話すよ」

アーシャが気付くくらいなのだから、シャルやディーンがジェイの様子がおかしい事に気付いていないはずはないのだ。けれど二人は恐らく、ジェイがそれを気付かれないように平気なフリをしている事もわかっていいるのだろう。

平気なフリをしているうちは気付かないフリをするのが、彼らのお互いへの気遣いなのだ、今ではアーシャにも判る。

少女がそんなことを考えていると、不意にジェイはいつもの悪戯っぽい笑顔を浮かべて彼女の顔を覗き込んだ。

「あ、あと俺も、今日のことには内緒にしとくよ。アーシャがひどい寝不足らしいってことは」

「うえっ!？」

何も言わなかったはずの事をいきなり指摘され、アーシャは思わずおかしな声を上げてしまった。

「なんで……私、言った？」

「それこそ言わなくても分かるって。目の下にそんな隈作って、疲れた顔して。また徹夜でもしたんだろ？ ごめんな、疲れてるのに付き合わせちまって」

ジェイの指摘にアーシャは思わず自分の顔をぺたぺたと触ってみた。鏡もないので己の顔のどこが疲れているのかアーシャには良く分からなかったが、やはりしょっちゅう顔を合わせている仲間達は

侮れないらしい。

今度から徹夜明けで出かける時は気をつけよう、とアーシャが心に決めていると、ジェイが立ち上がって少女を外へと誘う。

「もう帰ろうぜ。帰って寝ないとだろ？ 今日はあるがとな」

「ううん。その……二人には内緒ね？」

わかっているって、とけらけら笑いながらジェイは先に立って歩き出した。

その笑い声は今日聞いたものの中で一番明るく、アーシャはほっと息を吐く。

パタパタと彼を追って東屋から飛び出すと、ジェイは立ち止まって待っていてくれた。二人はまた並んでゆっくりと、今度は広場へと向かって歩き出す。

アーシャは歩きながらあくびを一つ、隠さずにこぼした。

「帰ったら寝て、夕方は寮にご飯食べに行く事にする」

「ああ、そりゃいいな。じゃあちゃんと良く寝るんだぞ？」

「ん、がんばる」

「あはは、んじゃ、俺もがんばるよ」

二人は明るく笑い合いながら日が高くなり始めた道を歩いた。

道に落ちる春の日差しはまだ弱さを残しているけれど、この先の暖かな季節を期待させる色をしている。

二人はその光を浴びて歩きながら、新しい季節には何をしようかと、楽しいことだけ話し合った。

ジェイの笑う顔にまだ少しだけ影があることに、アーシャは気付かない振りをして。

8：新しい学科

「へーえーひんわはふ？」

「……食べてからでいい」

夕食の魚のフライに齧りついていたアーシャはその言葉に頷くともぐもぐと食事を再開した。骨まで柔らかくなるくらいに良く揚がったフライは、尾びれの先まで食べられ、カリカリと香ばしくて美味しい。

小さな口の端からはみ出していた尾びれを味わいつつ急いで飲み込んで、アーシャは目の前に座るディーンにもう一度声を掛けた。

「で、えーと、何だっけ？」

「精霊親和学、だ」

ディーンの告げた学科の名前にアーシャは首を傾げた。

精霊、と名が付くからには精霊魔法系の学科だと想像がつくが、

そんな学科の存在は今まで聞いたことがない。

精霊魔法系の学科の名前は確か、精霊魔法基礎とか、応用一種とか二種とか、そんな単純な名前だったとアーシャは記憶していた。

「それ今年から出来る新しい学科らしいわね。今生徒の勧誘中だっという噂を私も聞いたわ」

「へえ……」

隣からのシャルの言葉になるほど、と頷いたものの、唐突にディーンがそんな話を持ち出した理由が分からずアーシャは首を傾げつつ彼の方を見やった。

「どんな学科なの？」

「私もまだ詳しいことは知らないのだが、聞いたところによると、精霊への理解を深め、絆を強める事を主目的にしている学科だとか。後は、日常生活における精霊の加護の影響やその制御などを学ぶと

言う話だった」

「ふうん……何か、役に立ちそうなのか立たなそうなのかよくわからないね」

アーシャの率直な感想にディーンも確かに、と頷いた。

精霊の加護を受けている生徒の多くは、それを有り難い贈り物として己の人生に役立てようと積極的に精霊魔法の授業を受けているものだ。

それを今更精霊と仲良くなるだの日常生活に使うだのと曖昧な事を言われても、既に授業を受けてきた殆どの人間には興味がないのではないかと思われた。

そんな良くわからない新しい授業を取るよりも、自分の属性に合った精霊魔法系の学科へ今までどおり通って具体的な魔法の一つでも覚えた方が良く考える人間は多いだろう。

「まあ、新しく設立される学科と言うのは得てしてそういうものだろう。実際に始まってみなければ分からない事は多い」

「確かに一理あるわね。まあ、作られたものの数年で廃止になる学科もあつたりするから、その授業を取るかどうかはちょっと博打っぽいけど」

シャルはジェイの食事のトレイに残ったままの甘さの強い果物をひよいと摘みながらそう言って笑った。甘い物が得意でないジェイは彼女のその行為に文句をつけたりせず、余分に取ってきたパンをぱくついている。いつもの当たり前前の光景だ。

「で、その怪しい学科がどうしたってのよ。ただの話題って言うわけじゃないんでしょ？」

「ああ。三人に、その学科を受けないかと言う勧誘が来ている」

「三人？　って、一体どの三人？」

シャルの疑問を受けてディーンは目の前のアーシャと、己の隣に

座るジェイ、そして自分を順番に指差して見せた。

それを理解したシャルの眉間にたちまち皺が寄る。

「ちよつと待つてよ、なんで私が入ってないわけ？　って言うか何であんたのところにそんな話が行くのよ？」

「タウロー教授から、ついでに仲間達にも話をしてくれと連絡が来た。どうもアルシェレイアに直接連絡をすると色々と面倒があるからのようなのだが」

「そっか、アーシャは今教授達に追っかけられてるもんなあ」

その話は既に聞いていたシャルも、ジェイの指摘になるほどと頷く。

けれど自分の名がそこに入っていない事はやはり面白くないらしく、眉間の皺はまだ残ったままだ。

「連絡の事はわかったけど、じゃあそこに私の名前がないのはどういうわけ？」

「それに関しては聞いてみたところ、どうも勧誘の声を掛けているのが主に今現在精霊魔法関係の授業を取得していない生徒ばかりだかららしい。

入学時の検査で精霊の加護があることは分かっているが、それがごく弱かったり、本人に役に立ってる気がなかったりと言う理由で他の学部、学科に所属している人間を今のところ対象としていると言う事だった」

ディーンの返答にシャルは不満そうな顔をしながらも納得して頷いた。

シャルは受ける加護の強さもあり、精霊魔法関連の授業を毎年かかさず取っている。それを考えればディーンの話した対象からは確かに外れている。

ディーンはシャルが納得した事を確かめると彼女から視線を外し、残る二人に交互に目をやった。

「それで、だ。今タウロー教授は対象の生徒を個別に集めて新しい教授との対面や、授業の説明をしているので一度顔を出して欲しいとの事だ。どうだ、二人とも？」

「まあ、そう言う事ならおれは別にかまわないぜ。どうせ選択はまだ全部決め切れてないし」

「私は……もう選択の枠は他のに決めちゃってるから、ちょっと面倒かな」

二人が返したそれぞれに違う答えにディーンは頷き、アーシャへと視線を向けた。

「タウロー教授から、君がこの授業を選択するなら代わりに必修科目の中から必要のない科目を特別に免除してもいいという提案があった」

「免除？」

「ああ。君が寝ていたり内職をしている授業を振り替えて良いそう。悪い話ではないと思うのだが、どうだろう」

アーシャはううん、と唸って考え込んだ。

魔技科の必修科目で少女が真面目に受けていない授業は色々ある。例えば古代語の授業などは魔具作りに必須であるため時間が多く取られているのだが、アーシャにとっては得意分野で今更学ぶ必要はないくらいだ。なのでそういった時間を他に有効活用できるなら確かに嬉しい。

しかし、どうせならそんな博打のような学科ではなく、好きな選択を増やしたいというのが本音でもある。

もちろんディーンはそんな少女の心中を正確に察して頷いた。

「君の考えている事は分かるが、話を聞いてみるだけでも損はないだろう。この学科は新しく来た教授の受け持つ学科だし、学園長の強い勧めで設立されたものだそう。他の精霊魔法学科の教授達とは関わりが薄いから研究費獲得の為の思惑に巻き込まれる可能性は

今のところ少ない。

加えて、形だけでも精霊魔法学科の一つを受けるとなれば、彼らの勧誘をかわす理由もできる」

「うーん……確かに、それは結構悪くないかも」

「いいんじゃない、アーシャ。今みたいに爺どもから逃げ回るのも面倒じゃない。とりあえず行くだけ行ってみたら？ 私も一緒に行くから」

シャルはアーシャの肩をポンと叩いてにっこりと笑った。

「え、お前、呼ばれてないのに行くのかよ？」

「あら、勧誘してる対象から外れてるからって、別に志願しちゃうけない訳じゃないでしょ。私の今年の実験の枠はまだ少し残ってるから丁度良いわ」

「まあ、志願しても構わないと思うが……それなら、とりあえず全員で明日の午後にもタウロー教授を訪ねると言う事でどうだろう」
ディーンの実験にシャルとジェイは同意し、アーシャも多少渋りつつも頷いた。シャルは嬉しそうにそんなアーシャの手を取った。

「じゃあ決まりね。もし面白そうだったら一緒に授業受けようね、アーシャ！」

「まったく、目当てはそっちかよ」

「あら、悪い？ だって同じ学部なのにアーシャとは全然授業が被らないんだもの。一つくらいそういう楽しみがあっても良いと思うのよね」

四人は主として所属する学科が全く違う為、授業で顔を合わせる事は殆どないと言っている。

その上彼らはある意味個人主義者の集まりでもあるので、今までわざわざ己を曲げてまで友人と同じ授業を受けようという気も端から持ち合わせていなかった。

シャルもジェイもディーンも ディーンの場合ごくまれである

が 己の役に立つのなら別だが、そうでない限りは友人達から同じ授業を取ろうと誘われても、それを受けた事はない。アーシャに至っては周囲の誰ともほとんど関わりを持ってこなかったので論外だ。

けれど、今のこの四人なら、同じ授業を取ってみるのも面白いかもしれないとシャルは考えたのだ。

「ジェイは個人的にアーシャに精霊の扱いを習って結構上達してるじゃない。せつかく全員精霊の加護があるんだから、たまには顔を合わせてお互いの力を合わせる方法とか探っても良いんじゃない？ 今後の野外実習とかにも使えるかもしれないし。まあ全然役に立ちそうにない授業なら、さすがに悩んじゃうけどね」

「なるほどな。そりゃ確かに面白いかもなあ」

「ああ。私もずっと独学だからな。これを機会に新しい事を学ぶのも悪くない」

「ん……そういう事なら私も別にいいかな」

三人の意見にアーシャも頷き、笑顔を見せた。

「では決まりだな。明日の昼にでもまたここに集まるう。昼食を食べてから行けば丁度いいだろう」

相談がまとまった四人はそれぞれ食後の飲み物などを取りつつ、しばし新しい学科についての予想を話しあった。

新しい学科と教授への少しばかりの期待を抱き、春の日の夜はこうして更けていった。

次の日、約束通り昼食を共にした仲間達は魔法学部の校舎の中を歩いていた。

ディーンがタウロー教授に伝えた約束の時間にはまだ少し余裕が

ある。

しかし四人はアーシャを追いかける教授達に見つからないように辺りを警戒しつつ進む必要がある為、早めに出てきたのだ。

幸い春の休暇も終盤に差し掛かった校内の人気は少なく、見通しが良いために警戒もしやすい。結局彼らは誰にも見咎められる事無くタウロー教授の執務室に無事に辿り着いた。

教授の執務室の前に着くなり、一番前に立っていたディーンは邪魔が入らぬうちにと、急いで扉をノックした。

中からはすぐにどうぞ、と穏やかな声が返って来る。

「失礼します」

ディーンは一言告げてから扉を開けると中に一步踏み込んだ。その彼のすぐ後にシャル、アーシャ、ジエイが続く。

しかし部屋に数歩踏み込んだところでディーンは足を止め、それにつられて後ろのシャルも歩みを止めた。

少しばかり広めの主任教授用の執務室には数人の先客がいたからだ。

ディーンの背中に鼻をぶつけそうになったシャルは眉をしかめながら一步下がり、彼の肩越しに室内を覗き込んだ。

タウロー教授の執務室の中には、執務機の脇に立つ教授を含めて四人の人間が立っており、それぞれが新たな客を振り向いて見つめていた。

入り口から見てほぼ正面に位置する執務機の右手前に立っているのは学園長だ。しかしその隣に立つ二人の人物には見覚えがない。

シャルは彼らが新しい教授か、と不躰にならない程度に二人を観察した。

一人は魔法学部には似つかわしくない立派な体格の、三十前後に見える男だった。髪は癖の強い短めの茶色で乱雑に後ろに流され、旅装にも見える簡素な衣服を身に着けている。

作りのはつきりとした顔は精悍と言える部類に入るだろうが、若干垂れ気味の目がそこに愛嬌を足していた。

顎を飾る無精ひげは見る人によつては野性的で悪くないと言うかもしれないがシャルの好みではない。そんな事を一瞬の間に考えていると、男は不意に何かに驚いたような真剣な顔を見せた。

(あら、そういう顔は案外……)

悪くない、とシャルが思った次の瞬間、男はパツと破顔して、タツと彼らの方に駆け出した。

部屋の中に向けて再び歩き出しかけていたディーンの体が相手の突然の動きに一瞬強張り、シャルも思わず身を固くする。

けれど、男は立ち止まったシャルの脇を素早く通り過ぎ、彼女の後ろにあつた何かをさつとその手に掬い上げた。途端、部屋の中に悲鳴が響き渡った。

「ひきやあああつ!?!」

「アーシャツ! アーシャじゃないか! 会いたかつたぞ、アーシャ! パパだぞう!」

「ええつ!?!」

「は!?!」

「パパア!?!」

口々に叫んで硬直したシャル達三人の前で、男は小柄なアーシャの体を高く持ち上げると室内で回った。

その表情はいかにも嬉しそうで、確かに一見すると親子の邂逅に見えなくもない。持ち上げられたアーシャが青ざめて悲壮な表情を浮かべ、ばたばたと手足を振り回して逃げようとしていなければ、だが。

「久しぶりだなあつ、アーシャ、大分大きくなつたんじゃないのか? 少し重くなつたぞ。つと、ごめんな、女の子にこんな事言っちゃパパ嫌われちゃうかなあ」

暴れているアーシャの様子はお構いなしに、男はそう言って実に楽しそうに少女の顔を下から覗き込んだ。

「いつ、いつやああああ！」

それが少女の限界だったらしい。

アーシャは高い声で叫ぶと、逃げるように体を大きくのけぞらせた。

背をのけぞらせたことで少女の体の重心が後ろに傾く。

「おわっ」

男は慌てて腕を下ろそうとしたが、すでに遅い。

アーシャは後ろに傾いた体をそのままにさっと足を縮め、男の腕を両手で掴むとさらに体を後ろへと倒した。

そのまま少女は己の腰を支える男の腕を支点にして逆上がりのようにくるりと半身を回し、そのついでに男の顎に固い革靴のつま先を叩き込む。

「ふがっ!?!」

今度は男が大きくのけぞる番だった。

小柄な少女の体重は軽くても、回った勢いのついたつま先は結構な威力だったらしい。アーシャは自分を捕らえた腕が緩んだ隙に、もう片方の足で男の胸を強く蹴りつけた。

そしてそのまま体を丸めて空中で軽々と一回転し、ふわ、とまるで猫のように綺麗に床に着地した。と、思った次の瞬間、少女の姿はフツと掻き消えた。

「アーシャッ!?!」

「わっ、消えた!?!」

「どこに……」

しゃがみこんで顎を押さえて呻いている男は無視して三人は執務室内を見回した。

部屋の入り口の扉の前にはジェイが立ったままだ。その脇をアー

シヤが通り過ぎればいかに素早くてもすぐにわかる。

突如として消えた少女に三人が慌て始めた時、至極のんきな声がその雰囲気を打ち破った。

「これこれ、そんなに引つ張ってはローブが伸びてしまつよ」

ハツと声のした方を見るとそこには己の足元に困つたような笑顔を向ける学園長の姿があつた。

つられるように学園長の足元を見ると、床に近い長さまであるその白いローブの下の方が不自然に膨らんでいる。

「いつの間に……」

どうやらアーシヤはさっきの一瞬の間に学園長のローブの下に逃げ込んだらしかった。

ローブの端とその下のズボンを小さな手で掴まれ、学園長はもそもそとバランスを取るように体を動かした。

「うう、いてて……」

やがて男は顎を押さえながら立ち上がり、ぶるぶると頭を振った。「ひどいな、アーシヤ。せっかく久しぶりのパパとの再会だったのに。相変わらず照れ屋さんだなあ」

その男の眩きに、シャル達はお互いの顔を見合わせた。アーシヤには育ての親がいるという話は聞いていたが、それは彼女の話からするともっと老人だったはずだ。

二人の関係を測りあぐね、シャルは意を決して男に声を掛けた。

「あの……失礼ですが、アーシヤとどういうご関係ですか？」

男はその問いにぐるりと振り向き、待ってましたといわんばかりの満面の笑みをシャルに向ける。芝居がかった大げさな動きで両手を広げると大きく頷いた。

「おお、良くぞ聞いてくれた。俺とアーシヤは親子だよ親子！ ソレ以外ないだろ！」

「違つう！」

どう見てもそうは思えないから聞いたのだが、男はきっぱりとそ

う言つてのけた。しかし、学園長の方向から聞こえた悲鳴のような声がすぐさまソレを否定する。男はその声にシヨックを受けたような顔を見ると、学園長の方に駆け寄った。成り行きを静かに見守っている学園長のローブの裾がその動きにびくりと揺れる。

「そんなに違わないだろう！　アーシャ、ここで出会えたのは運命だ！　やっぱり俺のところに養女に來い！」

「い、や！」

「何故！　俺は絶対良いパパだつて！」

「嫌つたら嫌！」

なおも強く拒否され、男は更に説得しようと学園長のローブに手を伸ばした。

だがその手は慌てて駆け寄ったディーンに無言で捕まれ止められる。

それを見ていたシャルも男に駆け寄り声を荒げた。

「ちよつと、止めてください！　アーシャが嫌がつてるじゃない！」

それにほんとは親子じゃないんじゃない、貴方一体何なの！？」

「だから俺は……つぐ！？」

シャルの勢いにもめげず開きかけた男の口からは、それ以上声が出てこなかった。男が口を開いた瞬間どこからシュツと鋭い音が立ち、何か紐のような物が後ろから飛んできて男の喉に絡みついたのだ。

「ぐ、あ……」

細い革帯のようなそれは男の喉をギリギリと締め上げ、男がそれを引き剥がそうと伸ばした手に力を込めた瞬間、彼の体は後ろへと強く引かれてそのまま床に倒れこんだ。

「げふっ！」

背中を強かに打ちつけ咳き込んだ男の胸に、実にたおやかかつ素早い仕草で足が下ろされ、その動きを完全に封じ込める。

次いで細いため息の音と共に、呆れたような声が室内に響いた。「もう、うるさいわねえ。いい加減静かになさい、エリー。皆さんのご迷惑でしょう」

声の主は、室内にいたもう一人の人物だった。男の行動で全員の意識がすっかりそちらから逸れていたが、一連の騒ぎをその人もずっと見ていたらしい。男を引き倒した革帯　と思われた物は細長い皮の鞭だった　の端を右手に持ってその喉を締め上げたまま、その人は美しい顔に優雅な笑みを浮かべた。

シャルはすっかり観察しそびれていたもう一人の人物を驚きと共に見つめた。その人の容姿の美しさに強く目を引かれたのだ。

真ん中で丁寧に分けられ、肩の少し上で綺麗に切りそろえられた髪は真つ直ぐな銀の糸。長い睫に縁取られた瞳は青玉をはめ込んだようだ。形のいい額に飾られた、瞳と同じ色の石が嵌った華奢な銀冠が実によく似合っている。

切れ長の目やすつきりと通った鼻筋はどこか中性的な美しさを持っており、にっこりと微笑むその様はその色彩も相まって、街の教会の一つに飾られている水の女神の姿を彷彿とさせた。

ひだの多いローブを纏った姿もいかにも優美で、男を足で押さえつける姿さえどこか様になっている。

その人は呆気に取られて固まる生徒三人を順番に見つめると、笑顔のまま艶やかな唇を開いた。

「ごめんなさいね。エリーったらうるさくしちゃって。びっくりしたでしょう?」

左手を頬にそえ小首を傾げて困ったように微笑むその姿は、指の先までたおやかで美しく、少しハスキーな声すらその魅力を引き立てている。

だがその分、その足の下で鞭の端を握って苦しげにもがいている男との対比が何とも恐ろしかった。

二人は外見だけならまさに美女と野獣という風情なのだが、その野獣が美女に足蹴にされているというのは何か大きく間違った光景のように見える。

シャルは一体どう返事をしたものかと悩んだ拳句、曖昧に頷き返して床の男を指差した。

「あの……泡吹いてますよ」

「えっ？ きゃっ、やだ！」

足元に転がる男の顔色はいつの間にか青を通り越しそうになっており、口の端からは泡がこぼれている。

その人は慌てて鞭を緩め乗せていた足をどけると、今度はその足で床の男をごろりと転がし背中を乱暴に蹴り上げた。

「エリー、しつかり！」

その乱暴な行動に身につまされるところでもあったのが、後ろの方でジェイがヒツと小さな声を上げる。

「うげっ！？ ごぶっ！」

男は盛大に咽て、大きく床でのたうたがどうにか息を吹き返した。

「ごほっ……カフー、てめ……！」

床に這った男はごほごほと盛大に咳き込み、咳き込む合間から抗議の声が漏れる。だがそれを受けた当の本人は涼しい顔で、男の声が大きくなる前にその背中をむぎゅうと踏みつけた。

ぐえ、とカエルが潰れるような音が足の下で起きる。

「ね、エリー。静かにする気になったら教えてくれるかしら？」

しばしの間の後、男はうめき声と共に床をバンバンと叩いて降参を示した。しかしその合図はいかにも弱々しく、それを見つめる人々の哀れを誘う光景と言う他なかった。

9：奇妙な二人

「それでは改めて紹介を」

「エリウス・シエローアだ」

「カフィール・レフィーネよ。よろしくね」

部屋の主であるタウロー教授に促され、二人の新教授は不機嫌な顔と美しい笑顔を並べつつ名乗りを上げた。

教授室の応接セットの向かい側に腰掛けた三人も、それを受けて順番に名を名乗る。

テーブルを挟んで向かい合う教授と生徒達の間の席に座ったタウロー教授はニコニコと笑顔を浮かべてそれを見守っていた。

ちなみに長椅子に並んで座っているのはディーン、シャル、ジェイの三人だけだ。

アーシャはといえば、タウロー教授の執務用の椅子を借りて窓際から部屋の中を見守っている学園長の傍に隠れたままだ。学園長のローブの中からはどうにか出てきたのだが執務機の影に隠れたまま、少女は姿を現そうとしない。

それが何となく学園長に負けた気がして、三人の仲間達は先ほどから少々面白くない気分を抱えている。

その気分も手伝って、口火を切ったディーンの声はいつもより更に冷ややかだった。

「それで、お二人が新しい学科を担当なさると聞きましたが……失礼ですが幼女趣味の教授というのは倫理的にいかがなものかと」

「誰が幼女趣味だ、おい！」

幼女趣味呼ばわりされた男　エリウス教授は思わず腰を浮かせて声を荒げた。しかし向かい側の席から向けられる三人分の視線の温度はこの上なく冷たいままだ。ディーンはエリウスの怒り声にも

眉毛一つ動かさず、淡々と言葉を返した。

「先ほどの様子を見ている限りそうとしか考えられませんが。嫌がる少女に詰め寄って養女になれと強要するなど、そこに下心があると疑われてもおかしくないでしょう。アルシエレイアのあの嫌がり方も尋常ではないですし」

「そうよ、大体貴方くらいの子でアーシャくらいの子を養女についておかしいじゃないですか。幼女趣味でもなければ普通はもっと小さな子を養子に欲しがらるもんだわ」

デーンとシャルの容赦ない弾劾にエリウスは顔を赤くしてぶるぶると身を震わせた。しかしそこで怒鳴るのも大人気ないと思いなおしたのか、彼は何度か深呼吸をして懸命に己を落ち着かせると、少々引きつってはいるが笑顔を見せた。

「いや、あのな、本当に誤解なんだ。あれはアーシャに久しぶりに会えたのが嬉しくてつい、な。俺はあくまでただの健全な子供好きだ。なあ、カフィー、そうだよな？」

カフィーと呼びかけられたカフィール教授は美しい顔に微笑を浮かべたまま頷いた。

「そうねえ、まあエリーがエロい男だつて事は認めるけど、幼女趣味ではないかもしれないわね。女好きではあるけど、好みとしては巨乳に弱いものね」

「エリーって呼ぶな！　せめてエルにしろつってんだろ！　つつーか、エロいってなんだためえ、また誤解されるだろうが！」

エリウスはカフィールを怒鳴りつけ慌てて生徒達に視線を向けたが、生徒達から返ってきた視線は前よりいっそう冷ややかだった。

特に多感なお年頃の少女であるシャルの視線はまるで汚い物を見るかのようで、エリウスの男心に少なからぬ傷をつけた。

「ますます生徒の傍に置くのに相応しからぬ人物だと思いますが、よろしいのですかタワー教授」

ディーンは目の前の二人から視線を外し、脇の椅子に座っている
タウロー教授に問いかける。しかし教授はにこにこ笑顔を見せて
頷いた。

「ははは、シエローア教授は昔から子供が大好きなのだよ。彼は以
前もしばらくここにいたことがあるが問題など起こしたことはない
よ？ それに、彼はグラウル君の身元引受人の一人だからね。信用
してあげなさい」

「タウロー教授う！」

思わぬ味方を得てエリウスは瞳を輝かせ何度も頭を縦に振った。

だがこの男がアーシャの身元引受人の一人だと言う事実には、今度
はディーンの方が驚きに固まる。アーシャのあの嫌がりようから
いっても、両者の間に良好な関係があるとは思えなかったからだ。

シャルは確認する為に立ち上がり、机の向こうにいるアーシャに
呼びかけた。

「アーシャ、今の話本当なの！？」

すると、シャルの声に誘われるように机の向こうからアーシャの
顔がちらりと出てきた。少女は向こう側で膝立ちしているらしく机
の端に手をかけ、頭を半分だけ覗かせてかろうじて頷いた。

「……何人が名前があると信頼度が高いって言って無理やり連名に
した。ノーイのだけで良いって言ったのに。だから、カフィーの名
前もある」

「……もうちょっと、分かりやすく言ってくれと助かるんだけど」
今ひとつ意味の通じない少女の言葉にシャルは頭を抱えた。少女
はまだ怯えているためか、その口調もいつもよりぎこちない。

シャルが困っていると、向かい側からくすくすと涼やかな笑い声
がこぼれた。

顔を上げるといかにも楽しそうなカフィールと目が合い、シャル
は思わずむっと唇を尖らせる。カフィールはそれに気を悪くした様
子もなく、笑いを隠さぬまま皆に向かって何度か頷いた。

「ふふ、ごめんなさいね、相変わらずだから可笑しくて。そもそも最初から説明しないのが悪いのよねえ」

「……なら説明していただけますか」

デイーンの不機嫌な声にカフィールは頷き、隣に座るエリウスと自分を順番に指差した。

「あのね、私達はここに来る前は地大陸のオルストっていう地方都市で、地教会の司祭をしていたのよ。アーシャちゃんとはそこで三年前に会ったの」

オルストとは地大陸ロアレスの西よりにある小国家の中の地方都市の名だ。

地大陸では地の教会は正教会となるため、地方都市であろうともその規模は大抵どこも大きい。その地教会の司祭ならば、一般的に見れば確かに信用に値する地位だと言って良いだろう。

けれど目の前の二人からは今ひとつ地教会の司祭と言う雰囲気を感じられず、三人はそれぞれ疑問を顔に出した。

カフィールはそれに応えるようにまた一つ頷くと更に言葉を続けた。

「大丈夫よ、二人とも本当に資格は持つてるから。でも私は水教会で取った司祭資格で地教会では施療院のほうを主に見ていたし、エリーは孤児院の世話をしていたのよ。オルスト地教会は規模がそれなりに大きいから沢山の人間がいるし、私達みたいな変り種ばかりじゃないから安心してね。それに、責任者はもつとちゃんとした司祭って感じの人よ」

エリウスはその説明に不満そうな表情を見せたが、特に口を挟むような事はしなかった。地教会の司祭、と言うには確かに自分達が少々変わっているという自覚はあるのだろう。

地の大陸の人間というのは個人差はあれどもその多くが地味で実直で勤勉、頑固なところもあるが、大地のように大らかで穏やか、

というのが世間一般の認識だ。

大らかそうだが騒がし過ぎるエリウスも、穏やかではあるが雰囲気
気が華やか過ぎるカフィールも、その認識からはどう見てもずれて
いると言えた。

「ノイはいい人だった。時々、手紙くれるよ」

不意に机の向こうから、カフィールの言葉を裏付けるような言葉
が届く。

エリウスがそれをちらりと振り返ると、見えていた頭はたちまち
引っ込んだ。それに傷ついた表情を浮かべる男を無視して、カフィ
ールは三人に頷いた。

「ノイって言うのは真面目な好青年って言う感じの司祭でね。今
は若いながらも司教になって教会の責任者をしているんだけど、も
ともとは彼がアーシャちゃんを拾って教会に連れてきたのよ」

カフィールの話によると、三年前、旅をしていたアーシャはオル
ストの街に立ち寄ったという事だった。宿屋に泊まるうとしたらし
いが子供の一人旅という事を怪しまれてそれが叶わず、宿屋の人間
と揉めているところをノイ司祭に拾われたらしい。

教会というのは貧しい旅をする人間などに宿を貸す事も珍しくは
ないので部屋数は多く作られているものだ。

地教会に招かれたアーシャはしばしそこに留まり、併設された施
療院や孤児院にいたカフィールやエリウスとも出会う事となった。

「それでね、アーシャちゃんの話聞けば、あんな歳で苦勞して一
人旅してるって言うじゃない。心配しちゃったエリーがね、うちの
孤児院には十八歳までは留まることが出来るからここにいたらどう
だって、そりゃもうしつこくしつこく勧誘したのよ。」

でもねえ、アーシャちゃんて、どう見ても人嫌いじゃない？ そ
れなのに毎日しつこく追い掛け回されて、拳句の果てに『孤児院が

嫌ならなら俺のところに養女に來い！ 幸せにしてやるから！』 な
ーんて詰め寄られて、すっかり怯えて、エリーのことを毛嫌いしち
やっつてねえ」

「自業自得ですね」

「最っ低ね」

「そりゃあ、俺だつて嫌がるだろうなあ」

呆れ果てた口調で三人にはっきりと切り捨てられ、エリウスは悲
壮な声で呻くのがつくりと頭を落とし、悲しそうに膝を抱えこんだ。

「それで結局ね、ある日とうとう夜中にこっそり出て行こうとした
彼女をノイが見つけて慌てて引き止めて、それならつて言う事で
アウレスーラへの入学を薦めたのよ。ここなら色々な制度も整って
いるし、寮もあるでしょ」

「なるほど。しかし身元引受人の件は？」

「あれはね、本当は地教会の責任者が引受人になるところなんだけ
ど、丁度あの頃うちの教会の司教様がお亡くなりになって、後任が
決まらなくてちよつとごたごたしてたのよ。それで、臨時の責任者
だったノイが引受人になって、でも司祭だと立場が一段低いから
つて、連名にしたの。」

まあ、アーシャちゃんと繋がりを持ちたかったエリーがそう主張
してね。私の名前も書いてあるのはエリーのだけが追加されてると
アーシャちゃんが嫌がつて納得しないと思ったからよ」

三人はカフィールの話によやく納得して少し警戒を解いた。

今の話に嘘はないと思えたし、アーシャ自身も話を聞いていたは
ずだがそれを否定はしなかった。

雰囲気を変えた三人の様子に顔を上げたエリウスはカフィールに
恨めしそうな視線を向ける。

「なんで俺の時はだめで、お前ならいいんだ……差別だ」

「あら、人徳つて奴じゃないのかしら。そもそも、エリーがちゃん

と順序だてて話をしようとしなのが悪いんでしょう？　アーシャちゃんの時だつて、本人が嫌だつて言ってるのを聞きもしないで追い掛け回すから嫌われるのよ」

「心配なんだから仕方ないだろう！　あんな年で一人旅だぞ！？　放つて置けるか！」

そういつて怒鳴つたエリウスの表情は真剣で、その声にも嘘は感じられなかった。それを見ていた三人はその様子に少し驚き、内心で彼のことを少し見直す。

「確かにねえ。エリーは昔から孤児を見ると放つて置けないものね」「そうだとも！　世界中の孤児は俺の子供になるべきなんだ！」

どうやら子供好きだというのは嘘ではなかったらしく、エリウスは拳を握つて主張を述べた。

それは本当に真摯な言葉と態度で、それを聞いた三人は自分達の態度が失礼だつたかと反省しかけた。しかし、その後に続いたカフィールの言葉が、持ち直しかけていた場の雰囲気を変えてぶち壊した。

「はいはい。でもできれば養子より養女がいいのよね」

「ああ、そうとも！　可愛い娘に本を読んでやつたり、一緒にお風呂に入つたり、『大きくなったらパパのお嫁さんになるの』と言われたりするの男のロマンだ！　俺は決して幼女趣味じゃなく、むしろ養女趣味なんだ！」

しん、と部屋の中に奇妙な静けさが流れる。

周囲の温度が急に低くなつた気がしてエリウスはハッと我に返り、目の前を見た。

氷のように冷たい三人分の視線が真つ直ぐに彼へと向かう。

「変態だな」

「変態ね」

「俺、変態つて初めて見たなあ」

ほほほ、と上品に笑うカフィールの声だけが、部屋の中で妙に優しく響く。

「ちっ、違う！ 今のはその、あれだっ、親バカだ！ 罪のない親バカなんだあっ！」

「親バカが許されるのは血が繋がっている場合のみよ！」
きっぱりと有罪を告げる少女の叫び声と共に、テーブルの上にあった大理石の灰皿が風を切るような音を立てて宙を舞う。

本日二回目の顎への攻撃を食らったエリウス教授は今度こそ意識を飛ばし、哀れにも再び床に沈む事となったのだった。

10：期待と困惑

しばし後。

哀れにも床に沈んだエリウスは部屋の端へとどかされ、彼のいた場所には学園長が、そして三人の座る長椅子の端にはアーシャが戻ってきていた。

タウロー教授が出してくれたお茶を飲みながら、七人の話はようやく本題へと辿りつこうとしていた。

「それで……まあ、あの人が新教授というのは置いておいて、新しい学科はどんな内容なんですか？」

「うむ、そうだったね。それなんだが……」

タウロー教授は学園長と顔を見合わせた。学園長は白い髭を撫でつけながら頷き、子供達のほうに向き直ると笑顔を見せて髭に半ば埋もれた口をゆっくりと開いた。

「簡単に言つとこのう、失われつつある精霊との絆を取り戻す方法を模索、研究する為に設立する学科なのじゃよ。今までのような、詠唱によつて精霊を呼び出して使うような判りやすい精霊魔法という形ではなく、もっと身近な、日常に埋もれている精霊と人との繋がりやを学び、その加護の正しい受け取り方を学ぶ、とでも言えば良いかの」

学園長の言葉にタウロー教授も頷いて同意を示し、さらにそれを補足するように言葉を繋げた。

「ここに限つた事ではないが、学校で教える精霊の扱い方や精霊魔法というのは、どうしてもその学校のある地域によつて教えやすい属性などが偏る傾向にあるだろう？ 我が校で言えば、光の属性が一番研究も教えも進んでいるし、大陸が隣り合わせていて交流のあ

る、火や地と言った属性も学ぶのはまあ難しくない。

しかしその分、大陸同士の行き来が比較的不便な水や風の属性などは少々遅れを取っているし、闇にいたっては十分に教えているとは言いがたい。六大属性でさえもこうして差があるのだから、それ以外の派生属性となれば、知識としてほんの少し触れる程度なのが現状だ。

この学科ではそういう今現在不足のある部分を補う授業を重点的に行い、個人の個性をより引き出すような実習を組んでいく予定でいる。それを通して精霊魔法学科全般の底上げを狙っているのだよ」「うむ。一つの学科に対して二人の教授を招いたのもそのためじゃないな。

できれば今後も外部から様々な人材を招いて、今まで十分に教えられなかった六大属性以外も細かく教えたり、埋もれている才能の発掘ができればと思うておる。魔法学部以外の生徒を多く勧誘しておるから、一風変わった授業になるかもしれないのう」

「へえ……」

感心するような声を漏らしたのはアーシャだった。

魔法、と言う名を付けるとどうしても人は火の玉が出たり風を吹かせたりというわかりやすい現象を想像しやすい。授業で教えるのもそういうやり方が主になる為、精霊魔法学科に属する生徒達というのは、そういった言葉や意思に頼った判りやすい使い方を得意とする者達だと言える。

けれど精霊と親しく付き合うアーシャは、精霊の加護にはそういう使い方以外にも沢山の恩恵があることを良く知っていた。

例えば、出かける日は何故かいつも晴れているという人。あるいはその逆でいつも雨が降るといふ人。動物に好かれやすい人、植物を上手に育てられる人、妙に勘がいい人。そんな他愛もないどこにでもありそうな話に、実は精霊の加護は隠れている。

そういった小さな加護を持つ人々がそれらを自覚し、意識して精霊に呼びかけることができるなら、それは強い力となるだろう。

六大属性ばかりに偏っていたり、それすらも個人に合わせた指導ができていなかったり、精霊との絆を軽視する傾向のある今までの精霊魔法のあり方に不満を持っていたアーシャには、新しい学科は確かに興味をそえられるものがある。

四人は顔を見合せた。学科としての趣旨は理解できたし、賛同もできそうだ。しかし、具体性という点で気になる部分があったシャルは、軽く手を上げてカフィールへと視線を向けた。

「目指す所はわかりましたけど……具体的にレフィーネ教授はどういう事を教えてくださるんですか？」

「カフィールでいいわよ。名前を呼ばれる方が好きなの。」

私はそうねえ、主に水の精霊の扱いかしらね。水に関すること全般や、流れる物を捉え、扱うのが得意なのよ。

水脈の読み方や、水の精霊を使つての医術、人の命脈や天候の読み方、流れる未来の一筋を占うやり方とか、そういう事を教えたいわねえ。最近、水脈や地脈が読める人間が減っているから、開拓地では随分と苦労しているらしいし。後は……魚を捕ったりするのも得意かしら。水に属する生き物なら精霊を介して操ったりできるのよ。

あ、でもそれ以外の分野の知識もちゃんとあるから、安心して頂戴ね」

「……魚」

魚が好物の少女の心がぐらりと揺れる。

しかしアーシャは慌ててぶるぶると首を振った。授業は興味をそられるし、魚にも魅力を感じるのだが、部屋の端に寝転がったままの天敵の存在が気になる。

悩む少女の様子を察してか、今度はディーンがすつと手を上げた。

「では彼は……シエローア教授は何を？」

ディーンの問いに皆の目が一瞬部屋の端へ向かう。しかしエリウスはまだ倒れたまま動く気配はない。先ほどのシャルの攻撃がよほどキレイに入っただけらしい。学園長は視線を戻すと長い髭を撫で、首を傾げた。

「彼が得意なのは地の精霊と闇の精霊の扱いじゃな。あとは地の加護のお陰で体が頑丈なせいか、体術なども得意じゃなかったかのう」「ええ、良くご存知ですわね、学園長。もっとも、エリーの本業は地質学者なんですけどね」

「学者！？」

「に、似合わねえ……！」

シャルとジエイは驚きのあまり高い声を上げ、ディーンも軽く目を見開いた。

アーシャはそれを知っていたのか驚きはしなかったが、よほど彼が嫌いらしくそちらを見ようとしもない。

生徒達の反応に、カフィールは楽しそうにくすくすと笑った。

「皆そう言うのよねえ。やっぱり見えないわよね。でもああ見えて地脈を読むのがとっても上手くて、彼が提唱する地脈を利用した都市構築理論や結界強化理論は高く評価されているのよ。」

闇の精霊の扱いにも長けているから、アルロード君にはいい教師になると思っただけよ？」

「……」

この学科に入ると必然的にエリウスに教わる羽目になることを知り、ディーンは沈黙した。

己の可能性を積極的に追求して、望む未来に繋げる事を信条とするディーンにとって役に立つことは何でも学んでおきたいところだ。しかし一見闇とは無縁に見えるこの騒々しい男に手ほどきを受けなければならぬとは、と考えると、少々暗澹たる気分になった。

ディーンが考え込んでいると、すぐ隣にいたシャルが口を開いた。

「あの、じゃあ私はこの学科には向いてないでしょうか？ 興味があつたので付いてきたんですけど」

「そうねえ、火の精霊魔法の習得、と言う事では今まで通り他の学科を受けた方が良くと思うけど、でもこの授業を受けてくれても全然構わないわよ？ 火の魔法はどうしても攻撃に偏りがちだから、平和的有効利用の実例なんかを教えてあげられるしね」

カフィールの言葉にシャルはホッと息を吐いた。そう言う事なら積極的に学びたいし、他の属性についても知識を入れておいて損はなさそうだ。シャルはそう確信すると、大きく一つ頷いた。

「私はこの学科、受けてみたいと思うわ。皆はどうする？」

シャルの問いにディーンは少し躊躇った後、頷いた。

「気になる点はあるが……まあ、損はなさそうだ」

「うーん……まあ、俺も良いかな。魔法系の授業を少し増やしても悪くなさそうだし」

ディーンとジェイはそれぞれ頷き合い、残る一人へと視線を向ける。

皆に見つめられてアーシャは顔を俯かせて考え込んだ。

授業には興味をそそられるし、仲間達と一緒にの授業というのも楽しそうなのだが、エリウスが嫌で仕方がないのだ。もう既に精霊との絆の深いアーシャには、それを我慢して選ぶほどこの授業が必要かといえれば否と言える。

だがこの授業を選べば、しつこい他の教授達の追跡を逃れられるかもしれない。

それらを天秤に掛け、少女が頭を悩ませていると不意に学園長が声を上げた。

「そうそう、言い忘れておつたが、この授業にはわしも時々参加する予定になっておるのじゃよ。なるべく色々な属性を教えたいからの。教鞭を振るうのは久々じゃから楽しみじゃのう」

「そつえば野外での授業なんかも予定しておりましたな。屋外の方が精霊を呼び出したりしやすいですからな」

「う……」

学園長とタウロー教授を交互に見ながらアーシャは小さく呻いた。新しい要素が天秤の上に加わり、更に少女の頭を悩ませる。よほど悩んでいるらしく、額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

カフィールはそんな少女に向かって、この上なく優しい微笑みを向けた。

「ねえアーシャちゃん。もしエリーがまた養子縁組を迫るようなら、私がきつちりしばき倒してあげるから安心していいわよ?」

「……ぜ、絶対?」

「絶対よ。約束。ね?」

カフィールの言葉を信じたのか、アーシャはようやくゆっくりと首を縦に振った。

「じゃあ、決まりね。良かったわあ、授業も楽しくなりそうねえ」

「うむ。これで少しは精霊魔法学科も活気付くじやろう。四人とも、よろしくのう」

学園長も教授達も嬉しそうに顔を見合わせ笑顔を見せた。その様子を見ていると、彼らがこの学科に力を入れていることがわかって生徒達にもなんとなくやる気が湧いてくるような気がする。

学園長の言葉に四人がそれぞれ頷き返すと、カフィールがゆっくりと立ち上がった。

「さて、今日の面談の予定はこれで終わりですし、エリーが目覚まさないうちに私は失礼しますわ。また騒ぎ出すときつとつるさいでしょうし」

カフィールは部屋の端に転がされたままのエリウスのところまで歩み寄ると、彼の体をつま先でごろりと仰向けに転がした。

乱暴な扱いだったにもかかわらず彼は全く目を覚ます気配がない。その様子にシャルは心配そうに立ち上がった。

「あの、まだ目を覚まさないなんて……私、やりすぎました？」

エリウスは頑丈そうな男だったし、投げた灰皿の当たり所はさほど悪いとは思えなかった。それなのに未だに目を覚まさないことが気にかかる。

しかし心配して近寄って来たシャルに対し、カフィールは朗らかに微笑んだ。

「あら、大丈夫よ。さっき気絶したエリーをどかした時に、アルロード君が眠りの魔法を掛けてたのよ。ね？」

「……気付いておられたんですか」

僅かに目を見開いて驚きを示したディーンに、学園長もタウロー教授もにこやかに頷いた。

「うん、あれはなかなか素早く、判りにくい良い魔法だった。アルロード君は独学とは思えないくらい熟達してきているな」

「うむ、シエローア教授のことだからまあ普通よりは短い時間で目を覚ますじやろうがの。それでもなかなかの腕前じゃったよ」

影に紛れさせた精霊を介した魔法がばれていたことに、ディーンは軽い衝撃と感嘆を覚えた。まだまだ学ぶことは多いと痛感させられると同時に、学園長ら熟練者には遠く及ばない己を悟り、身が引き締まるような思いがした。

「じゃあ、エリーは連れて帰りますね。ふふふ、だらしくって可愛い寝顔」

エリウスに関する謎が解けたところで、カフィールは文字で表すなら桃色で表現できそうな声音を出し、彼の頬をそつと撫でた。

何か見てはいけないものを見てしまった感に、近くにいたシャルはそつと視線を逸らす。二人は同じ教会にいたという話だが、学園からの引き抜きの話も一緒に受けるくらいなのだから、もしかしたら深い関係なのかもしれないとシャルには思えた。

シャルだって他人の色恋が多少は気になるお年頃だ。それにもし

二人が付き合っていたりするならば、カフィールはエリウスの養女趣味のことをどう思っているのかとても気になる。

まだエリウスの寝顔を眺めているカフィールに、シャルはそっと囁いた。

「あの……お二人は何か特別な関係なんですか？」

「あら、そう見えるの？ やあだ、嬉しいじゃない！」

カフィールはシャルの言葉に嬉しそうに笑い、可愛らしく身をくねらせる。

「あ、じゃあやっぱりそうなんですか？」

「うふふ、そうねえ、どうかしら？」

少女の問いに曖昧な返事と笑顔を返し、カフィールは寝転がるエリウスの腕と服を掴んだ。

しかしその返事だけではシャルにとっては不満だった。もしこの二人が特別な関係なのだとしたら、カフィールがもつとしっかりとエリウスの手綱を取ってくれたならアーシャが迷惑を被ることも無くなるのではないかと考えたのだ。

「同じ女としては気になるんですけど……その人がアーシャを養女にって言い張ってるの、平気なんですか？」

「あら、この人のそういうところが可愛いのよ？」

「か、可愛い……？」

「そう。あ、ちょっと避けててね。よい、しよつと」

カフィールは一言断ってシャルを脇にどかすと、ひよい、としか表現できない軽快さでエリウスの体を細腕で持ち上げ、その細い肩に乗せた。

その行動にシャルもディーンもジェイも目を見開いて動きを止める。

エリウスは鍛えられた立派な体格をしており、どう見てもその体は一般的な成人男性の体重よりも軽いとは思えない。

それに対してカフィールはいかにも細身でたおやかな見かけで、どう見てもエリウスを軽々と肩に担げるようには見えなかった。

シャルはぼかんと開けてしまった口をゆっくりと一旦閉じ、重くないのかと問おうと再び口を開いた時、その袖がくいと後ろから引っ張られた。

「シャル」

「え？ あら、何？ アーシャ」

「同じじゃないよ」

シャルの袖を掴んでいたのはいつの間にか近くに来ていたアーシャだった。

首を横に振りながら告げられた少女の言葉に、シャルは大きく首を傾げた。

「アーシャ、それじゃわからないわ。同じじゃないって、何の話？」

「シャルとカファー。さっき言っただでしょ。同じじゃないよ」

ああ、とシャルは頷いた。どうやらさっきカフィールに問いかけていた言葉のことを言っているらしいと思に至る。

だが同じじゃないという言葉の意味は判らず、シャルは顔に疑問を浮かべて少女を見つめた。

少女はもう一度小さく首を横に振り、カフィールを指差して口を開いた。

「あのね、カファー、男なの」

瞬間、部屋はしんと静まり返った。

「……え？」

「……は？」

「お、男っ！？」

口々に驚きを表し、そのまま再び固まったシャルら三人に、カフィールはにこにここと笑いかけた。その笑顔は相変わらず女神のように美しい。

エリウスを肩に抱いたままカフィールはアーシャに近づくとその頭を優しく撫でる。アーシャもその手からは逃げなかった。

少女は首を反らして彼の顔を見上げ、少しだけ笑顔を見せた。

「カフィー、相変わらずキレイ。力持ちなのも変わらないね」

「ふふ、ありがと。アーシャちゃんも、ちょっと育って可愛くなっただわね。将来が楽しみだわ。これから一年、よろしくね？」

「ん……うん」

一瞬ためらいつつも素直に頷いたアーシャに微笑むと、カフィールは抱いだ男の体にちらりと目を落とした。

「エリーが、アーシャちゃんがちゃんとご飯食べているかどうかとつても心配してたんだけど、その分なら大丈夫みたいね」

エリウスに心配されたことが不本意なのか、アーシャはその言葉には答えず黙り込んだ。

「あんまり嫌わないであげてくれると嬉しいわ。この人だっていいところいっぱいあるのよ？」

「……そうかなあ」

「あら、本当よ？ 例えばお尻の形がとっても素敵だ、とかね。触ってみる？」

カフィールはそう言ってエリウスの足を支えているのとは逆の手で彼の尻をさわさわと撫でた。もしエリウスが起きていたのなら恐らく彼はすぐさまその肩から飛び降り、なりふり構わず逃げ出していた事だろう。アーシャはその様子を見ても特に驚きもせず、ただぶるぶると首を横に振った。

「いい。いい」

「あらそう？ じゃあ、また今度ゆっくりね」

そう言ってヒラヒラと手を振ると、カフィールは学園長とタウロ教授に目礼し、部屋を後にした。

扉が閉まる直前に彼と手を振りかわし、アーシャは静かになった

部屋の中を振り返る。

「……あれ？」

振り返ったアーシャはそこにあつた奇妙な光景に首を傾げた。

そこには、床にがつくりとくずおれ、

「負けた……何あの肌、どうなってるの……」

とぶつぶつと呟くシャルと、

「男……あれが男……どうしよう、ちょっと美人だとか思っちゃまったよう」

などと、椅子に座つたまま頭を抱えて繰り返しているジエイ。

にこやかなままの学園長とタウロー教授に詰め寄り、「学園の倫理や風紀をどう考えているのか」を真剣に問いただしているディーンの姿があつた。

アーシャはそんな彼らに首を傾げつつ長椅子の端に戻ると、すっかり冷めてしまったお茶を飲み干し、置いてあつた菓子を一つ齧つた。

部屋の中から天敵の姿が消えたことで少女はやつと落ち着いた気持ちで寛げる。

ナッツの入つた焼き菓子は香ばしくてとても美味しかった。

こうしてこの日、学園には奇妙な教授二人が仲間入りを果たしたのだった。

10：期待と困惑（後書き）

いつも読んで頂きありがとうございます。

現在、私生活の多忙により更新が少々遅れ気味です。

不定期で申し訳ありませんが、ご了承下さい。

11: 変わらないはずの日々

春も深まり、波乱に満ちた春休暇とは裏腹に、新しい一年は至極穏やかに始まりを迎えた。

アーシャ達四人は四学年へと上がり、去年よりも少しばかり難しくなった授業に追われる日々を送っていた。

「 ということで、えー、以上の理由から、大地の力の流れである『地脈』に合わせて都市を設計するというのは、その都市の発展の速度や人口の増加にある程度の影響をもたらすことは、歴史的に見ても実証されてるっつー訳だ。世界的に見ても、かつて栄えていた大都市の遺跡の殆どが、地脈に沿って存在する事は確かだ」

教壇に立つ男 エリウス教授は、言葉は適当だが至極真面目な顔を浮かべ、黒板に並べて貼った二枚の地図を棒でトントンと叩いた。一枚の地図は随分と古いようで幾分茶色く、この大陸の中央から東半分の大まかな地形と、その所々をなぞるように橙色の線で地脈の流れが描かれている。

もう一枚は同じくこの大陸の地図だが、国境線や都市の名前が細かく描かれた最新のものようだった。

「 ついでに言うとそういう遺跡の中で、人の領域にどうにか残った場所は大抵今の大都市の礎となっている。例えばこの辺りなら、ハルバードの王都も、このアウレスーラもそうだな」

そう言ってさらに幾つか名を上げられた都市は確かにどれも大きめの都市ばかりだった。黒板の上の地図と照らし合わせても橙色の線の上に存在する都市が多い。

生徒達はそれらを見ながらエリウス話を聞き、書き取ってゆく。

新しく始まったこの精霊親和学の授業を受けているのは総勢二十人ほどの生徒達だ。まだ試験的な授業だというせいもあるのか、生徒の数は多くはない。

所属する学部もバラバラで学年も二年から五年までと様々だった。彼らに共通するのは全ての生徒が精霊の加護者であるということくらいだろう。

だがその加護すらもそれぞれに個性があり、強さも種類も皆違っている。

もう既に何回目かになるこの授業はエリウスとカフィールという二人の教授によって交代で、あるいは共同で行われている。割り当てられた時間の三割ほどを座学が、残りを実習が占めており、今はエリウスが地脈についての講義を行っていた。

地脈というのは、要するに大地の下を通る地の力の流れのことだとエリウスは生徒達に語った。同じようなものとして、地下を流れる水脈や、溶岩の流れる火脈なども存在が知られている。それらに比べるとあまり聞かないが、地形の関係で風の通り道が出来る場所も風脈と呼ばれる事がある。

それらは精霊たちのたまり場だとか、移動のための手段なのだから様々に言われているが、とりあえず昔からその存在だけは認められ利用されてきた。

都市の構築や結界の強化、農業や林業といった産業、果ては戦争への利用まで、その力の使い道は様々な可能性を秘めていたらしい。しかし地下深くの力の流れを知覚し力を引き出すことができるのはそれぞれの精霊の加護者のみと言われている。それがそれらの利用を妨げる大きな障害となっており、近年ではその存在は必要とされつつも忘れ去られようとしているという。

「こつちの地脈図は見ての通り古くて、大体今から三百年くらい前のもんだ。これを作った地脈師達は地大陸から招かれた連中なんだが、結局は招いた国に殺されたって話でな。そう言う事も戦乱の時代には結構あつて、今じゃ地脈師の技を継ぐ者は激減したってわけだな。」

全く、国つてのはろくな事をしやがらねえ。お陰で今はどこの開拓地でもなかなか十分な地質調査ができない状態だ。産業への利用もそのせいでいつの間にか廃れちまつた」

殺された、という物騒な話に生徒達の間にはざわめきが走る。

戦争を知らない彼らには随分と衝撃的な内容のように感じられるのだろう。生徒達の不安そうな顔を見て、エリウスは明るい笑顔を浮かべた。

「おいおい、今はそんな事はねえからそう騒ぐな。むしろ今地脈が読める人間なんかいたら、どこでも引つ張りだこだろうよ。就職先には困らねえな、多分」

教授、と前の方の席から声上がり、男子生徒の一人が手を上げた。

エリウスに視線で促され、彼はおずおずと口を開いた。

「あの、じゃあそれともう習えないんですか？ それに、地の加護持つてない人には意味ないんじゃない？」

そう言つて首を傾げた彼は風の大陸の出身で風の加護を持つている、技巧学部 of 工学科に所属している生徒だ。

「まあ、確かに廃れちまつた技術なんだがな、全部が全部つてわけじゃねえ。そういう技術に繋がる、精霊との対話の基本になる方法なんかは意外に細々と伝わってたりするもんだ。」

俺は若い頃から結構あちこち旅してて、運良く少しばかり教わる機会があつてな。まあ、田舎の子供の手遊びみたいなもんだがな」

そういつとエリウスは身に纏った皮のベストのポケットを探り、そこから何か紐を引っ張り出した。

細い紐の先には親指と人差し指で輪を作ったくらいの大きさの丸い物がぶら下がっている。その茶色い球体の下部には一部に切れ込みが入り、どうやら土か木で出来た鈴か何かのようだった。

「いいかあ、今一般的に使ってる精霊魔法ってのは、言葉で精霊を呼び出してそいつらに言葉でやって欲しいことを指定して現象を起こすってもんだろ。精霊が来たかどうかは普通は、自分の体が一瞬光ったりする事でまあどうにか判断できる。」

だが、その精霊が一体どのくらいの力を持っているのか、それを貸してくれる気があるのかはわからない。

つまり、呼び出した後で指示となる言葉を唱え、実際に現象が起こって初めて、精霊魔法としての程度成功したかわかるわけだ。そのやり取りはあくまで一方通行で、そこには対話も何もねえ。精霊との会話はできないから仕方ない、と思いがちだが」

エリウスは言葉を止め、指にぶら下げたままだった鈴を机の上に置いた。

少しばかりでこぼこのある鈴は平らな机の上では転がりもせず、何の音も立てない。

『地の精霊よ』

古代語が唱えられた瞬間、一瞬だけエリウスの体がオレンジ色の光を帯びた。すぐに消えたそれを気にもせず、彼はなお鈴を見つめる。

「我が友たる地の精霊よ、その声をここに」

エリウスが静かに呟いた言葉を聞きながら、生徒達もその手元にじっと視線を注いだ。

しばしの間の後、静まり返った教室内に不意に何かおかしな音が

した。

コロ、コロ、と何かを転がすような、温かみのある音が室内に響く。

音の発生源はもちろん、エリウスの手にある鈴からのようだった。

「聞こえるか？　これは俺が地の精霊に頼んで鈴を鳴らしてもらってるんだ」

エリウスはそう言いながら鈴に付いた紐をそっと持ち上げぶら下げた。

土でできた鈴は揺れてもいないのに、相変わらずコロコロと鈍い音がしてくる。どうやら中の玉がまだ勝手に転がっているようだった。

「我が友たる地の精霊よ、聞かせてくれ。この学園の大地の下に今も尚地脈は通っているか？　是であるなら返事を。否ならば沈黙を」生徒達が息を呑んで見つめる中、静かに下げられたままの鈴はエリウスの問いに一瞬沈黙した後、まるで答えるように再びコロコロと音を鳴らした。

「そうか。ありがとう、もういいよ」

エリウスがそういうと鈴は途端に沈黙し、それきり音を立てようとはしなかった。

「さて……地味な一幕だったとは思うが、感想は？」

今の一連の出来事をじっと見ていた生徒達はエリウスの問いに途端にざわつきだし、近くの生徒達とひそひそと声を交わす。

好奇心に駆られたらしい何人かの上の学年の生徒達が、順に手을 上げ声を発した。

「教授、今のは本当に地の精霊の返答だったって言えるんですか？」

「ほんとになんか地味だったんですけど……それは他の精霊でも使えるんですか？」

「何か対話っていうより占いっぽかったんですけど……？」

口々に向けられた疑問に苦笑を浮かべながら、エリウスは軽く手を振ってそれらを制した。

「まあ、地味なのはしゃーねえ。とりあえずほら、一番前の席のお前これ持ってみろ」

一番前の席に座る男子生徒はエリウスに促されるままに手を伸ばし、先ほどの鈴をそつとその手の平に受け取った。

「……重い!？」

生徒は手の平に感じたその意外なほどの重さに思わず声を上げた。取り落とすほどではないが、その小さな見かけからは思いもかけぬほど重量があったのだ。

彼の反応を予想していたのだろうエリウスはいたずらが成功した子供のような表情で笑うと、一つ頷いた。

「それは土で出来てるんだがな。地大陸産の非常に密度の高い土で作ってある。中の玉も同じ素材で出来ていて、結構大きい。だからちよつと揺らしたくらいじゃ音を立てないようになってるのさ。吊るしてるだけではまあまず鳴らないだろうな。精霊が干渉しやすいように魔具としての加工も多少してあるらしいしな」

そこまで語って顔を上げると、エリウスは生徒達をそれぞれ見回した。

「見た目から言えば非常に地味なやり取りだったと思うがな……答えもあるかないかの二択で役に立ったとは言いがたい。実際の地脈の範囲とか力の強さとか、そういうのを専門に知ろうと思ったら多分もつとちゃんとした技術がないと駄目だろう。」

だが、お前らの中に精霊とこういふ対話をしたことがある奴はいるか？ 殆どいないだろ？

多分、精霊魔法科に通っている奴の中にもほばいないと思うぜ。人間は精霊を呼び出し『使役』する事に慣れてから、彼らと対話す

る事を忘れちゃったから、そういう事を教えてねえしな。だから對話が出来るなんて端から思っただけじゃない奴も多い。

だがなあ、精霊ってのはその種類や強さにもよるが、案外おしゃべり好きだったりするんだよ。例え『はい』か『いいえ』かの返答しか出来なくても、する質問を良く考えれば案外様々なことを知る事が出来る。占いで名を上げてる人間なんかには、結構精霊の加護者がいたりするしな」

何が出来るかは本人次第だろうが、とくくってエリウスは鈴を生徒から受け取り、もう一度目の前でふらふらと揺らした。

しかしやはり鈴から音はならなかった。

「この鈴は残念ながら地の精霊以外では鳴らすことは出来ない。だから、他の精霊の場合これとは別の、もっとそれぞれの精霊と相性の良い媒体を探す必要がある。そして今は地の精霊に呼びかけた上で、この学園の下に地脈が今も残っているのかどうかを聞いたが、他の精霊を呼び出す場合、地脈について聞いても恐らく答えは得られないだろうな」

「……つまり、呼び出した精霊の司る範囲についてしか、答えは得られないって事ですか？」

誰かが独り言のように呟いたその言葉に、エリウスはまた大きく頷いた。

「その通りだな。精霊達にはそれぞれ、各々が司る理以外には理由なく触れてはいけないという制約があると言われてる。だから問いかける前にまず、その問いがその精霊にとって適切かどうかを考える必要がある。返事もわかりやすいとはいいいい難しいことも多い。

だが、これは目に見えず、言葉も交わせない精霊との対話の糸口には確実に必要だと言っただけは知っておいて欲しい。お前達が真摯に問えば、精霊は自分の司る範囲においてのみだが確実に答えようとする。それが加護ってことだからな」

席に並んだ生徒達の一番後ろの列に座りながら、シャルは今の話を熱心に書き写していた。

今のエリウスの話は、彼女にとってなかなか興味深い話だった。地の加護があれば地脈を探す事ができるというのなら、シャル自身には火脈を探知できる可能性があるという事になる。

シャルは少し考え、隣に座って眠そうな顔をしている少女に小声で話しかけた。

「ね、アーシャ。今の話だと、私には火脈がわかるかもしれないってことよね？」

「……ん？ うん、そうだね、練習すればわかるんじゃないかな」

「練習すれば、かあ。でも火脈ってわかって何か得があるの？」

シャルの疑問にアーシャはこくりと一つ頷いた。

「火脈は時々火山の噴火とかそういう形で地表に出てくるから、あんまり勢いが強い所に住むと結構危ない。だから、場所や範囲や勢いを知っておく事は安全に繋がるんじゃないかな」

「そうなの？ 怖いよね」

「あと火脈が近くにあると地下からお湯が沸くことが多いはずだよ」

「あ、温泉って奴ね！ 行ったことないけど、火大陸の出身の子に聞いた事あるわ」

シャルの言葉に、彼女の隣にいたジェイが首を傾げ、不思議そうな顔で口を挟んだ。

「なあ、火大陸って暑いんだろ？ なんてここでお湯が沸いてどうすんだ？」

「火大陸は暑い所が多いけどそればかりでもないよ。高地もあるし、低い場所でも昼夜や季節によって寒暖の差が激しい所もいっぱいあるっていうし。だから場所によっては有難いだろうし、温泉の

お湯は薬効があつて、怪我や病気に効くつて昔から言われてるんだよ。生命に活力を与える火の精霊の加護があるんだろつて」

「へえ、何か行つてみたくなる話だな」

「おいおい、行くなら夏期休暇にでもしてくれよ。今は授業中なんだからな」

「きゃっ！」

不意に聞こえた声に、小さな悲鳴が上がる。

ジエイが顔を上げると教壇から離れたエリウスがこちらに向かつて歩いてくる所だった。

ちなみに悲鳴の主はシャルだが、別に彼女はエリウスの声に驚いたわけではない。近づいてきた彼の存在に気付いたアーシャが隣に座っていたシャルのローブの内側にさつと隠れこんだのだ。

少女に抱きつかれたシャルは頼られた事に嬉しそうな顔を浮かべ、不自然に膨らんだローブを宥めるように撫でる。

その様子にエリウスは寂しそうな顔をしたが、相方に厳しく戒められている為か、諦めたように少し距離をとつて立ち止まった。

「授業中に聞きたい事があるなら、俺に聞いてくれると嬉しいんだがな？」

「あ、すみません」

素直なジエイが代表して謝り、エリウスは苦笑を浮かべた。

「ちらつと聞こえたが、火脈の話をしてたな？　しかも結構解りやすい説明で、俺としては複雑なんだが……」。

ついでだから教えておくと、火脈は地脈に比べると解りやすい部類だろうな。火山が近くにあつたり、温泉がわいてたりするからな。水脈も谷や川として地上に出てくる場所とどこかで繋がっている場合が多いから、そんなに探しくくはない。風脈は、地形や季節で結構変わるからこれと言う場所を探すのは難しい場合もある。まあでも、風が良く吹く場所つてのに間違いはないんだから、こればっ

かりはわざわざ精霊に聞くよりも地元の人間に聞いた方が早いことも多いな」

それぞれの特徴を語るエリウスの言葉にジエイは不思議そうな顔を浮かべた。

「他のはわかりますけど、風脈ってなんか役に立つんすか？」

「ああ、風車を立てるとか、そういう時には役に立つな。風の吹かない場所に立てても無意味なもんだからな。風大陸に行くと、沢山立ってる地域がけっこうあるぜ。あとは風媒花の作物を植える時にも重要だな」

「あ、なるほど」

疑問に思っていた者も多かったのか、エリウスの挙げた例に納得したように幾人もの生徒達が頷きを返す。

この授業を受けている生徒達は、その殆どが魔法学部で精霊魔法を積極的に学ぶ、という事をあまりしてこなかった傾向がある。

加護を受けている事はわかっていてもそれが弱い部類であったため、具体的な利点や使い道がわからなかったのだ。

そういう意味では、エリウスの語る様々な精霊の力を借りた実例の話は生徒達を引き付けるものがあるようだった。

子供らの素直な反応に気を良くした教師は、授業の残り時間が少ない事を思い出して、よし、と一つ頷いた。

「そういう訳で全員に宿題な。次の授業までに、自分が使えるような精霊との対話の媒体の候補を考えてくること。簡単に良いから、幾つか候補を考えて紙に書いて提出。んじゃ、今日はここまで」

途端に上がった生徒達の不満そうな声を背景に、カランカランと鐘の音が鳴り響く。エリウスは生徒達の文句をにやにやと聞き流しながら、頑張れとばかりに軽く手を振ってその場を後にした。

簡単に良いとは言われても、宿題と言う言葉を聞いただけで拒否反応が出るのだろう。

生徒達はそれぞれにぶつぶつと文句を言ったり、友人と宿題に關しての意見を交わしながら教室を出て行った。

一番最後まで残っていたアーシャ達四人は、大半の生徒が出て行ったのを見送つてからのんびりと帰り支度を始めた。

今日はこれが最後の授業だったため、急ぐ必要はない。

四人が教室を出たところで、授業中は全くの無言で存在感が皆無だったディーンが徐にアーシャに声をかけた。

「アルシエレイア、さっきの宿題だが、例えば君なら媒体に何を選ぶ？」

「うん……それ、悩んだ。そういうのなくても話せるから、逆にすぐは思いつかなくて」

アーシャの言葉にディーンも頷いて同意を示した。頷いた彼の視線は自然と自分の足元に落ちる影に向かう。彼の影はいつも他の影よりも一色濃い。隣を歩くジェイの足元のものと己のものとを見比べながら、ディーンはため息を一つ吐いた。

「私も、物、というのに困っている。そういうた物を必要とした事がないからな」

「ああそつか、お前いつつも影使ってるもんな。けど、それならそれでいいんじゃない？」

ジェイの声にアーシャも少し考え、それからディーンの顔を見上げて頷いた。

「そうだね。光さえあれば何時でも影は出来るんだから夜でも光球が一個あればいいし……。いつそ紙にはいいえとか書いたの用意して、そこに棒でも立ててて日時計みたいに動いてもらったらどうかな」

「……なるほど、それで行くか」

デーンが納得したところで、今度はシャルが光球、と小さく呟いた。どうやら皆あの宿題には結構悩みがあったらしい。

シャルは火の精霊が反応を返しやすそうな道具について考えていたのか、隣を歩く少女を見やって首を傾げた。

「私も赤熱石とか使ったほうが良いかしら？」

「うーん……あれは魔力を込めると熱が出るだけだから、解りにくそう。むしろ普通のローソクとか小さいランプとか燃やして、炎の加減で答えを得た方がやりやすいんじゃないかな」

「じゃあ俺は？ 光球じゃだめかな？」

便乗したジェイの言葉にアーシャはふるふると首を横に振った。

「光球や赤熱石とかはそもそもあの中に魔法を起動するための魔方陣が入ってて、魔力を通すと決まった反応を返すだけの物なんだよ。デーンが影を作るために使う、とかなら役に立つけど精霊との意思の疎通っていう意味では返って反応が読み取りにくいと思うな。ジェイだったらいつそ何も無しで、いつも練習してるアレでいいんじゃないかな。シャルの炎と同じく、光で強弱を示してもらえばいいと思う」

「アレって、コレか？」

そういうとジェイは右手を持ち上げ、人差し指を一本立てて見せた。

「そう、それ。慣れたやり取りの方が精霊も応えやすいんだよ。ジェイは前よりずっと精霊と仲良くなってきているから、精霊も答えられることなら喜んで教えてくれると思うよ」

「なるほどなあ。んじゃそれで行くこう。ありがとな！」

ジェイのお礼の言葉にアーシャは首を横に振り笑顔を見せた。そんな二人のやり取りに不思議そうな顔をしたのはシャルだった。

「あんたアレまだ毎日やってるの？」

「おう、もちろん。訓練つてからには、続けるもんだろ」

「そりゃそうだけど……そういえばあんたって、単純な事にも結構飽きない性質だったわね」

アレというのは去年アーシャに教わってからジエイが毎日やってきた精霊魔法の鍛錬のことだ。

精霊を呼び出し、指先に小さな光を灯し続けるというだけの非常に地味な特訓である。だがそれにより確かにジエイは以前より精霊魔法が上手くなっている。

それを確かに日々の手合わせの中でも感じているディーンは、ジエイの隣を歩きながら感心した風に頷いた。

「愚直なまでに気長に努力を続けられるというのは、確かにお前の美点だな」

「何とかの一つ覚えって奴かしらね。まあ、今までよりは格段に進歩しているわよね」

「お前らなあ……褒めるならもつと素直に褒めろよ！」

いつも通りに始まった三人の賑やかなやり取りにアーシャがくすくすと楽しそうに笑う。

新学年が始まって、四人での日々は相変わらず賑やかで明るい。週に何回かの授業が重なるようになった事もあって顔を合わせる時間は以前よりも増えた。それぞれに課題も増えているため自由な時間は減っているのだが、その分お互いに協力したり教えあったりする事も多い。

共に過ごす日々の中で少しずつ絆を深める四人の間には、何の話題もないように思えた。

たった一つの小さな変化を除いて。

「あ、そうだジェイ。明後日の休み、ちょっと買い物に付き合つてよ。家の掃除道具とか新しいカーテンとか、ちょっと買い物したいのよね」

デーンと二人でジェイをからかっていたシャルが、不意に思い出したように声を上げる。

するとジェイは一瞬躊躇した後、悪い、と小さく答えた。

「明後日はちよつと先約があるんだよな。仕事入れちまつてるから

……悪いんだけど、別の日で頼むわ」

「また？ 今度は何よ？」

「んーと、どつかの教授の部屋の引越しの手伝い。多分一日掛かりじゃねえかな」

すまなそうに頭を掻きながらジェイがそう言うのと、それを不満そうに睨みつけながらもシャルはそれ以上何も言わずにため息を一つ吐いた。

「しょうがないわね……じゃあデーン付き合つてよ、荷物持ち」

「断る。店に配達して貰え」

「配達料が勿体無いじゃないの。持って帰ってカーテンの取替えもして貰おうと思ってるのに」

「……少しは他人を使う事に遠慮と言う言葉を覚えて欲しいものなのだな」

頭の上で交わされるシャルとデーンの冷ややかな応酬を気にかげながら、アーシャはデーンの前を歩くと、彼はにこりと少女に笑いかけた。デーンは肩越しに目が合うと、彼はにこりと少女に笑いかけた。小さく首を横に振る。その意味を理解したアーシャはまた黙って前を向いた。

ジェイはこのところずっと、学園内で受けられる学生向けの小さな仕事を沢山請けているのだ。

上級学部には奨学生なども多数いるため、学校内部の細々とした

仕事を職員や業者ではなく小遣いを稼ぎたい生徒達に依頼する事が多い。

内容としては、例えば教材運びや部屋の整理の手伝い、実験の助手、街での買出しや注文の受け取り、図書館での資料の収集、返却といった、業者に頼むほどでもないが自分でやるのは面倒くさい、という風なお手伝いなものが殆どだった。

教鞭を握る傍らで自分の研究や学園運営のための仕事などを抱えている教授も多いので、そういう小さな仕事というのは学園内にいっでもいくらでもある。

一つ一つの報酬は大した金額ではないが、幾つもやればそれなりに楽しい学園生活が送れるくらいの金額にはなる。

デインは昔から面倒の少ない依頼や自分に合った依頼を選んで定期的にこなしていたが、ジェイは今までは殆どそういう依頼に手を出した事はなかった。

ところが春の休暇が終り新学年が始まってからと言うもの、彼は依頼を受けるために学生課に頻繁に出入りし、放課後や休みを使って幾つもの仕事をこなしている。

不審がる仲間達には、去年仕送りからしている貯金をちよつとさぼったし、結構使ったからその穴埋めに、と笑って答えるのみだ。

それが何のためのものなのか、彼が何を抱えているのか、それをシャルもデインも未だに問いただしてはいない。

偶然からとはいえ、その理由の一端を知るアーシャは三人を順番に見やりながら小さくため息を吐いた。

アーシャは彼女の信条として、内緒と言われた事を語るような事はしない。聞かれても嘘を答えることも。

だから、ただ口を噤むしかない。

シャルにもデインにも未だ言っていないあの春休暇での出来事は、アーシャの心とジェイの行動に一筋の影を落としている。

それがこの先四人にどんな変化をもたらすのか。アーシャは穏や

かな日差しを浴びながら見えぬ先行きを思う。

せめてその変化がこの日々の日差しの移り変わりのように、穏やかなものであってくれたなら。

少女は恐らくは叶わないだろう願いを胸に抱え、共に歩く仲間達を見上げてただ笑顔を返すのだった。

11: 変わらないはずの日々（後書き）

本当にお久しぶりです。

未だに更新を待っていて下さった方々には、長らくお待たせして本当に申し訳ありません。

日々の変化に負けて小説を書く事からしばらく遠ざかっていました。今現在、まだ文章を書くりハビリ中にして、今回の投稿も何だかただ長くなってぐだぐだでお恥ずかしい限りなのですが、これ以上先延ばしにするのは止めようととりあえず再開する事にしました。

しばらくは更新のペースも内容も不安定だと思いますが、生暖かく見守ってくださいると有難いです。

更新の再開と同時に、過去の手直しもちよくちよくしていこうかなと思っっています。

頂いた感想等に全くお返事が出来ていないのですが、全て有難く読ませていただいています。大変申し訳ありませんが感想にお返事をする余力がない状態なので、お返しの方はご容赦ください。

その分少しでも執筆できるよう頑張ります。

12：少女たちのお茶会

パタン、パタン、と窓を次々に開く音が家の中に響く。

開かれた窓から吹き込んだ風は季節の花のほのかな香りを連れ、シャルの赤い髪をふわりと揺らした。

その風に思わず目を細めながら彼女は目の前にある上げ下げ式の小さな窓の鍵を開け、下の窓を上には押し上げる。

しかし古い家の古い窓はすんなりとは開かず、ガタガタと引っかかって軋んだ音を立てた。それでもどうにか窓を開けきったシャルはふう、と息を吐く。

「やっぱり大分傷んできてるわね。そろそろ修理しないとかしら」

「そのくらいなら窓枠から外して、少し削って表面を塗りなおせばなんとかなるんじゃないかな。直すなら手伝うよ？」

後ろからかけられたアーシャの言葉にシャルは振り向くと笑って首を横に振る。

大きな窓を全て開けて回っていたアーシャは首を横に振ったシャルの返答に不思議そうな顔を浮かべた。

「だめよ。私が不器用なの、アーシャも知ってるでしょ？ だから自分で直すくらいなら専門の人か、技術学部の学生にでも依頼する方が良いわ」

「でも、勿体無いよ。窓全部って言うと、結構高いんじゃないかな。削ったりするのは私がやるから、シャルが塗料を塗るのは？ ジェイやデインに手伝ってもらっても良いと思うし」

「うーん……あの二人ならそこそこ器用だとは思っけど、でも素人にできるのかしら」

「多分大丈夫。その窓ならそんなに難しくもないもん。私も自分の家の窓、何度か直してるよ」

「それなら頼んでもいい？ 今すぐじゃないけど」

「いいよ。じゃあ今度、天気的好さそうな時にね」

そう言ってアーシヤは目の前にあつた最後の大きな窓を開け放つた。吹き込む風が柔らかな髪を舞あげ、部屋に入り込む。風に乗った精霊達がきやらきやらと少女にしか聞こえない笑い声をあげるのを耳にし、アーシヤの顔に笑顔が浮かぶ。

「とりあえず窓のことはまた後で考える事にするわ。まずは掃除をしちゃわないと」

シャルが祖母と暮らしたこの家に今日帰ってきたのは、掃除と風を通す事が目的だった。人の住まない家は傷みやすいので、こうして定期的に少しずつでも手入れをする必要がある。去年までは二月に一度くらい街の業者に頼んでいたが、春になってからはシャルが自分で手入れをしに来ているのだ。そろそろまた寮からこの家に戻って来ても良いとシャルは思っているのだが、寮では食事を作る手間がないためつつい先延ばしになってしまっている。

今日は埃を払ってカーテンを入れ替える準備をするというシャルに、掃除を手伝うと言ってアーシヤがくつついてきていた。窓を開けたのはその準備のためだった。

「ん、そうだね。じゃあ、いい？」

「ええ、お願い」

アーシヤの簡潔な問いにシャルが頷く。それを受けたアーシヤは右手をついと上に上げ、開いた窓から吹き込む風を受けるように手のひらを開いた。

「皆、お願い」

アーシヤが短い言葉を紡いだ途端、開いた窓から窓へと吹きすぎている風がその流れを変える。

「きやつ」

部屋の中で渦巻くように吹き出した風に髪を煽られ、シャルが小さく声を上げた。慌てて手でスカートと髪を押さえたものの、長い髪はあまり大人しくならなかった。

開けた窓から入り込んだ風はまるで遊ぶかのように好き勝手に部屋の中をかき回し、開かれた扉から他の部屋へも吹きすぎてゆく。それでも物を倒したりはしないその光景は何だかとても不思議なようにシャルには感じられた。

しばしの時が過ぎ、各部屋を順繰りに回った風はやがてまた少女達のいる一階の部屋へともどって来る。

最初とは異なり、彼女たちの足下だけで渦を巻くような動きに変わった風を眺めながらアーシャはシャルの方を見上げた。

「シャル、集めた埃はどうする？」

「あ、この袋に入れてちょうだい」

シャルは傍に置いてあった布の袋を手に取り、口を広げるようにして床に向けた。アーシガどんなふうにも掃除を手伝うつもりなのかあらかじめ聞いてあったので用意しておいたゴミ袋だ。

ちなみにアーシャは自分の住む家をいつもこの方式で掃除し、出たゴミや埃はそのまま庭の隅に埋めている。勿論そこまですべて精霊頼みだ。

アーシャは普段授業などでは精霊魔法をあまり使わないのだが、こういう日常的な小さなお願いは割と頻繁にしている。精霊達の方が積極的に少女と遊びたがるので、それを無視してあまり構わないでおくと頼んでもいないのに色々な事を引き起こし、かえって面倒なことになるらしい。だからこういう掃除などは、アーシャにとっても精霊にとっても遊びと実益を兼ねた交流のようなものだ。

「じゃあ、ここをお願いします」

アーシャがシャルの持った袋を指さすと、風達が一斉にその袋の口へと流れ込む。埃だけを袋の中に残し、布目を通って外にでた風

は幾分勢いを弱めてまたくるりと部屋の中を回った。

「ありがと、皆」

「本当にありがとう。すつごく助かったわ」

ゴミや埃がすつかり集められた袋の口を縛りながら、アーシャにならってシャルも笑顔で風に向かって礼を言う。

風の中でくすくすと笑う風の精霊の姿はシャルにはもちろん見えてはいない。それでも笑顔で礼を述べた彼女に向かって精霊もまた嬉しそうに寄り添い、その髪をふわりと揺らした。

「シャルのお礼に喜んでるよ」

「本当？ それなら私も嬉しいわ。出来れば髪をあんまりかき回さないでいてくれるともっと嬉しいんだけど」

「シャルの髪は長くてきれいだから、それで遊ぶの楽しいんだって」
「……次からは括つてくるべきかどうか悩むわ」

すつかり乱れた長い髪を手ぐしで直しながらため息を吐くシャルに、アーシャがくすくすと笑う。

それからまだ部屋の中で遊んでいる風の精霊達を外へと向かわせ、二人は彼らに別れを告げた。

「さて、じゃあ掃除は終わったし、お茶にでもしましょうか。美味しいお菓子があるのよ」

掃除があつと言う間に何の苦労もなく終わったことにシャルはご機嫌だった。

アーシャを居間のソファへと誘い、家具にかかっていた布をはぎ取ると二人で腰を下ろす。それからシャルは持ってきていたバスケットからあらかじめ用意してあったお茶の入った保温瓶やカップ、お菓子を取り出してテーブルに並べた。

シャルがお茶を用意する間、アーシャは興味深そうな顔を浮かべてきよろきよろと辺りを見回していた。

「何か珍しかった？」

「ううん。ただ、居心地の良い家だなんて思ってた。すごく心地いい空気が残ってる感じがする。シャルのおばあさんは、暖かい人だったんだね」

「ふふ、ありがとう。それおばあちゃんの自慢だったのよ。居心地の良い場所を作るのは得意だって言ってたわ」

二人が見回す部屋の中は実際はそんなに生活感のある様子が残っている訳ではない。大きな家具には埃よけの布がかけられたままだし、昔はあちこちに飾ってあった小物や飾りの類も今はしまわれている。

それでも部屋の家具の配置や、カーテンや壁紙の色合い、そして何よりそこに残る空気がどこか穏やかな気配を漂わせているようにアーシャには感じられた。

「精霊達も、この家とおばあさんが大好きだったみたい。ここをきれいに掃除したいっていったら、風の精霊はみんな嬉しそうだったよ。ここの庭は地の精霊が荒れ過ぎないようにそれなりに維持してるみたいだし、水の精霊は出番がなくて残念そうにしてた」

アーシャの言葉にシャルは小さく目を見開き、それからくすりと笑みをこぼした。

「おばあちゃんの水の魔法が得意だったけど、やっぱりそうすると水の精霊にも好かれてたのかしらね。じゃあこの次は床に水を撒いて洗ったりした方がいい？ とは言ってもそうするとまたアーシャにお願いしないことになっちゃうけど……」

目の前におかれた焼き菓子を一口かじってから、アーシャはシャルの言葉に頷いた。

「次は洗濯でも手伝ってもらったらどうかな。水の精霊は洗濯するの好きだよ。私は別に構わないし」

そう言っってはくはくとお菓子を食べる少女の姿にシャルは目を細め、楽しそうに頷く。

「じゃあカーテンを取り替えたら古いのは洗ってしまおうと思ってるから、その時はお願いするわね。またお茶とお菓子を用意しておくわ。」

水の精霊が洗濯好きだ、などと聞いたら精霊魔法学の教授達がまた痛む頭を抱えるだろうと思いつながらシャルもお茶を口に運んだ。爽やかな風が吹き抜ける居心地の良い居間で飲むお茶は一際美味しかった。

「そういえば……アーシャに聞きたいことがあったんだけど」

「ん？ はに？」

お菓子の詰まった口をもごもごと動かしながら、アーシャが顔を上げる。

シャルはそれに微笑み、それから少し顔を曇らせた。

「アイツが……ジェイが、こここのところ様子がおかしいの、気が付いてる？」

「ジェイ？」

「アーシャはジェイにまだ時々魔法教えたりしてるでしょ？ 何か聞いてないかしらと思って」

「ん、と……」

「何か聞いているのね？」

口ごもった少女の様子にシャルはそれを確信して問いかけた。アーシャは大抵のことははつきりと口にする性質だから、口ごもること自体が怪しいのだ。だがシャルはそれをすぐに問いただす事はせず、言葉を続けた。

「春休み中くらいから様子がおかしいのは気づいてたのよ。最初は毎年の通り、授業の選択で悩んでるんだと思ってただけど、どうも違うみたいだし。休みが終わってそれがなくなったと思った途端、今度は仕事の依頼を頻繁に受けるようになって。あれでおかしいと

気づかれてないと思う方がおかしいと常々思うわ」

「……ジェイもさすがに、全然気づかれてないとは思ってないんじゃないかなあ」

シャルの言い様に何となくジェイが哀れになったアーシャは一応彼を擁護してみた。

しかしそれはシャルには逆効果だったようで、途端にずっと顔をのぞき込まれてアーシャは思わず軽く身を引いた。

「それなら余計腹立たしいわよ！ そんな思わせぶりな態度をとられるくらいなら、さっさと相談しろって言いたいのだよ！ で、アーシャは何を知ってるの？ 具体的に相談とかされたの？」

「あ、う……えと、わ、私も別に聞いたわけじゃなくて……その、たまたま行き合わせたっていうか」

「行き合わせた？ どういうこと？」

「んと、その……ジェイが、困ってることに、偶然出くわしたっていうか」

もごもごと言いつらそうに紡がれた言葉にシャルは首を傾げた。

少女にしてはとても歯切れの悪い言葉だったからだ。しかしアーシャは基本的に嘘を吐いたりしない少女だとシャルを含めた仲間達は皆知っている。彼女は何か聞かれて言わない事があったとしても、それを隠すために嘘を吐くようなことはしないのだ。

だから言い辛そうにはしているが、口に出したなら恐らく嘘ではないのだろうとシャルは判断した。

「じゃあ、その成り行きで何か知ったけど、それを内緒にしてくれとか言われたのね？」

「……うん」

ジェイ本人から内緒にしてくれと言われたのなら、アーシャはその内容を語ったりはしないだろう。

シャルはため息を一つ吐くと、気まずそうにしている少女に笑顔

を見せた。

「それならしょうがないわね。無理に聞かないわ」

「ごめん……約束、したし」

「アーシャが悪いんじゃないわよ。偶然行き合っただけで、ジェイがアーシャを訪ねて来て自分から悩みを相談したとかじゃないんでしょ？ それなら、まだ放っておくしかないわ」

「そうだけど……放っておいていいの？」

どこか突き放したようなシャルの言葉に、今度はアーシャの方が不思議そうに首を傾げる。シャルの事だから、下手をすればもつと苛烈に問いただされるかもしれないと半ば覚悟していたのだ。それなのにそのあつきりとした諦め方はアーシャには何だか不思議に思えた。

「いいのよ。アイツが私達にまだ言わないなら、自分一人でまだ頑張れるって思ってるってことだから」

「ジェイが頑張ってるから、それを尊重するってこと？」

「そんな感じかしらね。ジェイはね、どうでもいいことではすぐに助けてくれると言う癖に、大事な事になると本当に自分一人ではどうしようもなくなるまで絶対言わないのよ。昔からそうなの」

そう言ってシャルは面白くなさそうな溜息を一つ吐いてお茶を口に運ぶ。

「それでも、聞いたりしないの？」

「そうよ。私やディーンが聞いてもどうせ言わないだろうしね。だから言い出すまでは黙って見守る事にしてるの。ディーンがどう思ってるのか私ははっきりとは知らないけど、多分アイツも似たような気持ちで黙って見てるんだと思うわ。いつ頃からかもう忘れちゃったけど、何となくそういう風に暗黙の了解って感じで、定着しちゃってるのよね。何せジェイはああ見えて意地っ張りだから」

小さい頃からそうなのよ、とシャルは懐かしむような優しい目で

小さく呟いた。

「ジエイは小さい頃は本当に泣き虫でね。アイツんちのバカ姉にしようちゅう苛められて泣いてたのよ。でもね、すぐ泣く癖に、絶対泣きつかないのよ。アイツのお祖父様やお祖母様にも、乳母にも。いつも一人で庭の隅の植え込みとかに隠れて泣いてるの。私が遊びに行った時に姿が見えないとほぼ間違いないで泣いてるから、まずそれを探しに行くのがいつもの事だったわ」

子供の浅知恵故か、彼の生来の素直さによるのか、それとも本当は見つけて欲しかったのか。それはわからないが、ジエイの隠れ場所の数はそう多くなかったから、シャルはいつもすぐに彼を見つけてる事が出来た。誰にも縋らず一人で泣く小さな背を見る度、彼を泣かせた相手への燃えるような怒りを覚えたものだ。勿論シャルがその怒りを彼に代る報復という形で解消したのは一度や二度ではない。

「私が何度か、お祖父様達に言いつければいいじゃないかって言ったんだけどね、絶対嫌だって言うのよ。頭に來て喧嘩したことも結構あったわ」

「それで、意地っ張り？」

「そう。私がおばあちゃんにジエイの事を話したらね、男の子ってのはそういうものなんだって教えてくれたの。男ってのは？せ我慢する生き物なんだって。だから見守ってやれって」

祖母の言葉が少なからず不満だったシャルは、なら会ったことのない祖父もそうだったのかと彼女に問うた。すると祖母は笑って首を横に振って教えてくれた。

『あの人はどつちかって言うと、我慢なんかしないで嬉々として戦う性質だったわねえ。まあ、男の人も色々だから。シャルはあの人に似たのかもしれないわね』

祖母によれば祖父はどうやら激しい気性の人だったらしい。穏や

かな祖母とは対照的な祖父の話はシャルにはとても面白く、幼かったシャルが私もそういう友達がいい、と訴えると、祖母はまた首を横に振った。

『あえて我慢しない人は扱いが大変だからあんまり勧められないわねえ。でも、？せ我慢もできない男はもつと駄目ね。？せ我慢している男の子は見所があるのよ。だからその子がじつと一人で頑張っている間は、黙って見守ってあげるのが良い女ってものなのよ』

？せ我慢もできない男とは付き合っちゃダメよ、と祖母は笑って言いながら、不満げなシャルの頭を撫でて宥めてくれた。

敬愛する祖母の言う事は素直に聞くようにしていたシャルは、彼女にしては大変不本意ながらその言葉に関しては我慢強く守り、ジエイが痩せ我慢をしている間は大抵は黙って見守ってきた。(勿論耐えきれなくて爆発したこともあるのだが)

シャル自身は『あえて我慢しない』の部類に入り、その彼女にいつも振り回され続けてきたジエイはある意味その扱いの熟練者と言えるのだが、それはシャルには関係のないところだ。

そんな昔のジエイやシャルの祖母の話アーシャはとても面白そうに聞いていた。

話している間に手元のお茶はすっかり無くなり、それに気づいたシャルが保温瓶からまたお茶を注ぐ。

注がれたお茶を一口飲んで、アーシャはまた顔をあげた。

「シャルはお祖母さんの言葉があるからジエイを見守ってるんだね。じゃあディーンはどうなのかな？」

「そうねえ……多分、自分から切り出すのが面倒とか、そういうんじゃないのかしら。心配してない訳じゃないとは思っけど。アイツはそういうところ、結構不器用なのよ。聞き上手だから誤魔化されがちだけど、人間関係には割と受け身だしね」

「そうなの？　なんか意外……でもないのかなあ」

シャル達三人が友達と言つ言葉で括るにはもつと深い繋がりを持つていることはアーシャにもわかつている。けれどまだまだ知らない事は沢山あった。だからそんな三人の関係を、それぞれの視点で聞くのは面白く、そしてどこか羨ましいように思いながらアーシャはシャルに話の先を求めた。

「ジェイは、二人には内緒にしてくれつて言つてた。ディーンにも、意地張つて我慢してるのかな」

「そうね。ジェイは近い人ほど悩みとか言わないから。ディーンも、ジェイの自立を妨げる様な事は自分からしないでしょうし」「自立？」

悩みの相談の話が即そこに繋がる事が不思議で、アーシャは首を傾げた。

シャルは沢山話して渴いた喉をお茶で潤し、それから窓の外にゆるりと視線を向けた。

「何て言うかね、私達はお互いを仲間だと思つていてるけど、寄りかかりたいわけじゃないのよ。いつかは絶対一人で立てるようになりたいと思つてるの」

「今も皆ちゃんと立つてるんじゃないの？」

「まだまだ、全然だめよ。私は結局は今もおばあちゃんに助けられてここにいるんだもの。それでも、本気で親が手を出してくれば、法律上では親に従うしかなくなる立場だわ。ジェイだつて学費から何から親の庇護下にあるんだし。ディーンだつて親はいないっていくら嘯いても、誰かの助けを借りてここに通つてる事は確かなのよ。アーシャとは違つわ」

「でも私だつて、一応自分でお金を稼いではいるけど、じいちゃんから貰つた物でここの学費とか払つたよ？」

「それでも、例えば今ここで学園から追い出されても、アーシャは

一人でも生きていくでしょう?」

「それは……うん、そうだね。今は仕方なくここにいただけで、ここにいられないなら別の場所でも生きていけるし」

シャルの言葉には納得してアーシャは頷いた。

確かにアーシャならそれこそ森の中でだって暮らせるのだから、ここから追い出されたところでさほど困る事はない。旅をしても不自然でない年齢になるまでの間、森の奥で隠遁生活を送る選択だつてなかった訳ではないのだ。

「私達もね、いつかそういう風になりたいの。ここじゃなくても生きていけるって、一人だつて平気だつて胸を張れるようになりたい。自分の足で立って、仲間と肩を並べてるっていうのが理想ね。だからこうして勉強してる訳なんだけど、まだまだだつていうのも分かってる。だからお互い少しでも一人で立てるようになる為に、寄り掛かりたくないし、それを仲間に許してもいけないって思ってるのよ。寄り掛かる事に慣れたら、もう立ち上がれないかもしれないから」

「仲間は大事に思ってるけど、お互い甘えられないってこと?」

「そうね。気持の上ではそれなりに甘えてると思うけど。何て言うか、多分、怖いのかしらね? 仲間は大事だけど、お互いの存在に依存することが、少し怖い。甘えたり、甘えさせたりすることに慣れちゃいけないって思ってるのね、きつと」

「そっか……」

育ての親以外に甘えることなく一人で生きてきて、未だ人間関係に疎い少女にとっては三人の関係は少し難しかった。それでもお互いがお互いの自立のため、悩むこともまた大事な事だと尊重しているらしいという事はわかった。恐らくはディーンもその信念に従つて、黙ってジエイを見ているのだという事も。

「ディーンなんて、最近は大分柔らかくなったけど、基本的には他

人にも自分にも厳しい堅物だもの。それに加えてあんまり親密な人間関係に慣れてないから、どこまで踏み込んでいいのかの線引きが上手く出来なくてあの無表情の下で人知れず悩んでるってのが正解だと思っわ。きつとね」

そう語るシャルの口調はどこかからかうような調子だったが、表情は優しかった。

不器用なお互いをちゃんと知った上で認め合っている様で、三人のその絆がアーシャには少し羨ましい。そこにまだ入っていけないような気がして、少し寂しいような気持を抱いている自分自身を、少女は不思議な気持ちで眺めていた。

そんな己の心を宥める様に口に運んだ焼き菓子は、どうしてかさつき食べた物よりほんの少しだけほろ苦いようだった。

12：少女たちのお茶会（後書き）

更新再開とってからまたも間が空きましてすみません。

あまり話の内容としては進んでいないので投稿は迷ったのですが、シャルの側からを描いておきたいと思ったので今回はこれで。

おかえりなさいという言葉を沢山頂き本当にありがとうございます。
た。

一つ一つ返信できなくて申し訳ありませんが、全て励みにさせて頂いております。

こちらでまとめたのお礼となる事をご容赦下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5702b/>

迷い子は夜明けの歌を歌う

2011年7月23日21時22分発行